
七つ夜に朔は来る

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つ夜に朔は来る

【Nコード】

N7307M

【作者名】

六

【あらすじ】

深き森の奥で、今一人の嬰兒が産声を上げた。

嬰兒の名を、七夜朔。名づけた男の名を、七夜黄理といった。

月姫にオリジナルな主人公がいて、それが志貴の兄的存在だった
らという妄想。

第零話 原初（前書き）

作者は原作未プレイです。なので滅茶苦茶になる可能性が高いです。

作者は執筆初めてです。なので稚拙な文章がアンリマユのようにあふれます。

また、オリジナル主人公と原作キャラのカップリングがあります。なのでファンの方々が不愉快になる可能性が天元突破です。

それらに不快感また不愉快を感じる方は、速やかにお戻りになるのが良いと思われます。

第零話 原初

それは、とある部屋の中で起こっていた。

どう表現するべきだろう。

男の首が根こそぎ食い千切られた。形状をただ簡潔に表すならば、きつとこれが正しい。男の首元、筋肉繊維から喉笛、そして頸椎に到るまで、その中心部が猛獣の牙によって暴力的な破壊を成されたような形状を見せ、不気味な空洞が男の首にあった。もはや頭部と肉体の繋がりは皮膚によってのみ。

そして首が、ずれた。

鮮血が天井を濡らした。

吹き出る血は畳を、男の肉体を赤く彩る。

撒き散らされた血飛沫はまるで赤い花のようであった。

人間の体は血液が絶え間なく循環し、それによって生かされている。肉体を運用させるために血液は栄養及び酸素を運ぶ。その巡りは止め処なく、人間という生命を生かすためには必要不可欠なもの。そのために血管は体中をかける。人間の血管は完全を成している。どこにも不備なく、穴もなく、欠ける事もなく、人間を生かす。しかし、血管を破り、出血は起こる。血液の無い人間はただの死体だ。人間ですらない。肉体は壊死し、その活動を停止させる。

故に、男は死体に成り果てる。

暫し、男は今自分がどのような状態に陥っているのか、理解が出来ていなかった。しかし、男の理解が追いつくよりも早く、その意識は霞み、そして途絶える。

それを見ている、男がいた。

研ぎ澄まされた抜き身の刃のような男だった。死に逝く人間を見る視線は鋭く、獲物を見つめる鷹のよう。その手には鋼の輝きを放つ、撥のような、あるいは播り粉末のようなものが握られている。

男は微動だにせず、死んでいく人間を見続けた。

その目に感情はない。死に逝く者への憐憫、あるいは同情、あるいは嫌悪、あるいは畏怖。何もその瞳には映らない。感情も宿らぬ瞳は、男が死んでいく様を最後まで見続ける。痙攣する五体、根幹を失って後方にずれた頭部、座り込むように崩れる肉体。噴出する血飛沫は男の肉体をも染め、そしてそれも納まり、やがて動かなくなつた。それを確認した男は踵を反す。そしてそこには一つの死体。

室内から抜けた男を、跪いた数人の男たちが出迎えた。

和装の黒衣に身を包んだ、屈強そうな男たちは男の出た部屋に入りゆく。その内の一人が男に無言で手ぬぐいを手渡すが、男は何も言わず其れを引つ手繰るように受け取った。顔を拭い、撥を拭い懐に仕舞う。

武家屋敷の中、男は無言で歩く。滑らかな重心移動、尖る気配が男の存在が尋常ではない事を告げている。血染めの衣服もまた其れを増長させているのもあるが、しかし、それ以上に男の目が際立っていた。

先ほど、男は自身の兄を殺した。

だと言つのに、男の瞳は何も変わらない。兄を殺した瞳から、その様はまるで変わっていない。まるで通常の瞳がそれであるかのよう、瞳はただ冷たく、凍えている。

男の兄は、禁忌を犯した。

身内殺し。近親相姦を重ねる一族で、間引き以外の殺しにおいては最も重い罪だった。殺されたのは男の伴侶たる女。今しがた子を産んだばかりの女をその場で殺し、今廊下を歩く男の手によって首を破壊し尽くされ、命潰えた。

男の兄は狂っていた。殺害に悦を見出した人間だった。元からそのような徴候はあったが、近年其れは悪化し身内の静止にも耳を貸す事もなくなり、そして遂には伴侶を殺し、女が死にゆく姿に、笑みを浮かべた。

兄は殺人に快感を感じてしまうような人間だった。一族はある事情からそのような人間が存在する一族だったが、兄の場合はそれが過剰であった。最も殺しに魅入られ、そして殺された。肅清と言つ名の下。

それを男は成した。当主と言つ立場故に。

だが、男は兄を殺してもまるで変わらなかった。揺らめかず、翳りなく、瞳はひたすらに鋭いま。

兄の姿は歪であった。理性をなくし、獣のような笑みを浮かべた

あの顔。自身の弟が殺しに走ると言うのに、人間を壊すことに喜びを感じた悪鬼めいた表情。狂気に走る以前は情の分かる人間だった。少なくとも男以上には。だが、それもかつての話だった。男を身内と見ていない事なぞ、すぐさま知れた。獲物を見つめる愉悦の瞳。それが、かつて男にとって兄だった男の末路だった。

無言で歩く男に罪悪や戸惑いはない。そのようなモノ、男には無縁であった。感情を削いで落としたような、無機質な鋭さだけが男の存在を表していた。

「御館様。ご無事で何より」

廊下に突如として一人の老人が現われた。どのような術理を成したのか、音もなくその場に出現したのである。顔に刻まれた掘りの深い皺が枯渴した大地を思わす老人である。頑健とした体付きが老人の顔と実に合っていない。

男は老人の声に立ち止まり、何も言わずその鋭い瞳で言葉を促す。

「奥方様は回収しました。現在お体をお清めしております」

心臓を潰され、血に体を汚された女。兄の妻は即死であった。

せめてもの慰めに、亡骸は綺麗にして手厚く葬る。幸であったのが、既に子供が生まれた後であった事だけであろうか。

ただ殺されたならば、あまりに報われない。

連れ添いの男に殺されるとは、女も思うはずがなかっただろう。

「御子でありますが、元気な男児であります。御子をここに」

老人の呼び掛けに、一人の女が現われた。男と良く似た雰囲気を持つ女である。女はその腕に今しがた生まれたばかりの嬰兒を清潔な布で柔らかかに包みこみ慎重に抱えている。その慣れない手つきは少々危うい。

重心の安定しない手つきで女は男に嬰兒を手渡した。

男は何故自分が受け取らなければならないのかと暫し時を置いたが、老人の視線と目前に突き付けられた嬰兒、そしてそれを支える女に他意がないことを視ると、仕方なく子供を受け取った。

男は己の腕の中にいる嬰兒を見る。

ふやけた肌、産毛のような髪、閉じられた目蓋。

弱々しく、そして儚い、新たな命。

二人の関係は、はつきりとしていた。兄を殺し、父を殺された二人。誕生の瞬間に母を父によって殺され、父は男によって殺された。生まれた時には、両親は亡骸だったのである。それをこの子供はどう思うのだろうか。果たして父を恨むのか、それとも男を恨むのか。だが、男は何も思わなかった。何も感じなかった。

自身の手で殺めた兄の子を自身が抱くという、男への皮肉のよう。なこの状況に対しても。

「御館様」

老人の呼び掛けに声を返す事もなく、男は腕の中にいる嬰兒を女に手渡そうとする。自分が抱いている事に意味は無いだろう、と何とはなしに考えた。

だが。

「
っ!!!」

叫び声。嬰兒の割れ響く産声だった。顔面をしわくちやにしながら、自らの存在を証明するかのように大きく、それでいて脆く儂い声だった。それはこの世に誕生した命の最初の訴えだった。

それを感慨もなく一瞥し、男は女に嬰兒を手渡そうとする。しかし、嬰兒はそれを嫌がるように、よりけたたましく産声を上げた。まるでここがいい、離れたくないと語るかのように。

「……」

男は再び嬰兒を見た。

今しがた自分の親を殺した男に一体なにを求めているのだろうか。だが嬰兒は泣き止まない。母の温もりを求めているのか、それとも父の温もりを求めているのか。だが、二人とも既にいないのだ。死んで、亡骸と化した。しかし、嬰兒はそのような事知るはずもなく、ひたすらに叫ぶ。

不可思議な視線を嬰兒に投げかける男を見て、女は躊躇うかのように腕を引き、老人は笑みを浮かべた。その顔に相応しい好々爺のような笑みであった。

「御館様。私はどうにも他の者から呼ばれているようなので失礼します」

白々しく、そしてわざとらしい言葉を重ね老人はほくそ笑んだ表情のまま、男の目前から姿を消し、女もまた名残惜しそうな瞳を嬰兒と男に向けた後、老人の姿を追うようにその姿を暗ませた。

そして、残されたのは男とその腕に抱かれた嬰兒のみ。女と老人の気配が遠ざかっていき、それに合わせ嬰兒の産声も次第に小さくなっていった。

腕の中にいる嬰兒を揺する事もなく、男は再度歩み始める。軋む廊下の音。老人が何を考えているのか理解できなかった。それに比べ、男と嬰兒を心配する女の感情は容易く読めた。だが、それが一体何に対する心配なのかは見えなかった。

男は嬰兒を見た。小さな命。弱く脆い存在。自分が殺した、兄の子。この子供が何をやりたいのかは知らない。理解も出来ない。ただ子供の好きなようにやらせるべきだろう、と男は考えた。腕の中の嬰兒の体は大人の体温、それこそ先ほど浴びた血飛沫よりも温かい。

何となく、ではあるが男は嬰兒の小さな手に人差し指を触れさせてみた。嬰兒が我儘によって男の腕の中にいるのだ。理由のない行動ではあるが、しかし、それでも興味があった。

すると、嬰兒は男の指先をたどたくも、だが確かに握りしめた。嬰兒が指を握る力は存外に強い。生まれた子供が何かを握るのは霊長類としての特徴でもある。しかし、それを考察しても力強い。

いつの間にか、男は屋敷を出ようとしていた。

律儀にも玄関から出ようとする男の姿を光が照らした。

それは朝焼けであった。深い深い森の遠くから夜を打ち消す太陽が姿を現していた。その光は暗いこの森を柔らかく照らした。温かくて、優しい。男は立ち止まり目を細めた。男の目前には時の流れに置いていかれたかのような、暗く荘厳な森が広がっていた。視界を覆う雄々しい木々、鬱蒼と生い茂る緑が影を指す。

昇りゆく太陽を見て、男はこの嬰兒に名が未だ無い事を思い立った。朝焼けの中、男は暫し太陽の光に身を温めた。

そして、男はポツリと、小さく呟いた。それは呟きと呼ぶにはあまりに無機質な声音であった。

「七夜、朔。それが、お前の名だ」

全ての始まりの名を、嬰兒に与える。

男の無表情が、ふと変化を遂げた。

僅かに、本当に見逃しそうなほど少しだけ、小さく口角が上がり、瞳の形が変わる。

それは笑みと呼べる表情であった。あまりに不器用な、だからこそ男に相応しい小さな笑みだった。

あの朝焼けのように、世界を照らすように。嬰兒、朔に笑みを向けた。

退魔一族七夜現当主、七夜黄理。

それが、男の名であった。

第零話 原初（後書き）

始めまして。作者の六です。

以前から素晴らしいサイトだと思っていましたが、あふれるネタを抑えきれず、今回一念発起して投稿することにしました。

もし読んでくれる人がいたら幸いです。

ど素人のど素人なので、ゆるい目で見守ってください

第一話 黄理（前書き）

現在急いで資料を集めています。ご指摘を励みに頑張っていきたいと思います。

では、ごきげん。

第一話 黄理

求められている事は、わかっていた。

望まれている事は、わかっていた。

成るべきモノは、知っていた。

為すべきコトは、知っていた。

己が何なのか。

そんなの、生まれた時から知っていた。

それだと言うのに。

今、己は何をしているのだろう。

咽喉へ迫る銀の斬撃は、冬に照らす月光のように冷たく輝いていた。

空気を薄く切り裂いて袈裟に振り被られた小太刀の刃は、あまりに速過ぎて刃の形が目視できず、線の軌道は鋼色を伸ばし断頭を狙いに来る。それを寸での所、頭部を傾けることでかわすが、首の薄皮一枚をもつていかれた。僅かな痛みを無視している間に遅れた黒髪が数本散り、相手の鋭い眼差しに鬩りをもたらした。

しかし、相手はそのような僅かな支障を障害とせず、せせら笑うかのように返しの一撃を揮う。握る腕に捻りも加わり、切っ先は肉を抉ろうと呻りを上げた。

どの角度から小太刀が襲い掛かるのか判断できない。

しかしそんな思考は無視されて、無慈悲に煌く刃が殺しに迫る

。 全身が警鐘を打ち鳴らす。

ぞわり、と。

背筋を戦慄が舐めた。

横から脳を穿つ閃光。それを万全の体勢で迎え撃つ事は出来ず、回避する事も出来ない。自身を震わす戦慄と風を突破する刃の音に、真横へと刃を回した。正確な位置も把握できない勘による判断だった。

右手に握る小太刀の腹で受け流そうと、腕では事足りない衝撃を耐えるべく左手の掌を添えた。滑る刃に撃たれた瞬間、骨が響いた。

ぐらつく。脳まで震えるその衝撃に抑え切れず足元が浮ついたが、それを好機と、重心を後方へとずらし、地面を叩く。結果、追撃の小太刀を回避。

開いた彼我の距離は十五メートルもない。その時になって、ようやく呼吸を行う。

刹那の交差は瞬きも許さず、呼吸を忘れさせた。酸素が足りない。意識が揺れている。

荒れる息遣いに、肩で呼吸をする。

思考が雑だ。何を考えているのか定かではない。酸素が足りず、痛む肺を堪えて呼吸を果たそうと口を開く。

だがそのような事、相手が、七夜黄理が許すはずが無かった。

息を吸い込んだ瞬間を狙い澄まし、黄理は彼我の距離を一息もつかせずに詰めてくる。

揺れる視界。突風のように走駆してくる。

瞬きの内に、黄理は眼前に迫っていた。

研ぎ澄まされた抜き身の刃の気配。切っ先を思わず鋭い視線を象るそれは、獲物を狙う猛禽のそれである。男は冷たい殺意を滲ませ、小太刀を真っ直ぐ心臓の位置へと向けてきていた。

嗚呼、あまりに疾い。

思考は最早役に立っていない。感慨だけが浮かんでは消える。

幾度と無く繰り返された切り結びは優勢とはあまりに遠い状況にあった。

劣勢以外の言葉さえも見つからぬ、厳しい現状だった。

高められた錬度が違う。鍛えられた密度が違う。

七夜黄理が修める技量の底は見据える事も出来ず、こちらが拵えた稚拙な攻勢は幼子をあやす子守のようにあしらわれ、転ばされ、飛ばされた。

それは自身が子供という事もある。成長過渡期にある未成熟な肉体では、完成された大人の圧力と拮抗できない。あまりに体重が軽いのだ。攻撃は通らず、防御は果たせず。

自身の現状は把握している。既に追い縋るだけで精一杯だ。着流しには泥がついて、転んだ拍子に出来た擦り傷や、打ち込まれて回避できず打ち身も到る所にある。小太刀を握る手には力も入らなくなってきた。酸素も足りず肺が痛い。

しかし、相手はどうだ。無傷で、疲労もない。まるで変化がない。両者の力量は歴然と横たわっている。

それはそうだ。

その様な事、全て承知していた。

迫る、刃。

腕を伸ばせば届く距離に黄理はいた。

黄理の構える刃はぶれることなく、明確な死を突きつけていた。死神の刺突である。死神から逃れる術などない。では、死神に対してどうする。

このままあっけなく倒れるか。それとも。

「っ」

肉体は容赦なく反応を示す。躍動を始める筋肉が血管を圧縮する。

それは、敗北を喫しようとする者の最後ではない。

瞬時、風が轟く。足が思考を超えて、関節の稼動を果たした。

心臓へと突き刺さるはずだった小太刀の揮いを屈み込んでかわしていく。

頭上に残酷な刃の輝きと、無機質な男の瞳が過ぎる。

体勢は低い。四肢は土をなぞり、地面を這うような姿勢と化した。

蟲の如きその姿に黄理は右手に握る小太刀を指の動きのみで逆手へと組み換えて、背面へと突き立てんと振り下ろし。

その眼球を、小太刀が捉えた。

肉体が限界まで高められた速度で腰元から捻られ、地を這う姿勢から回転を果たす。その胴は天へと向けられ、連動する腕は躊躇い無く小太刀を射出した。

彼我の距離は言うまでも無く超近接。心臓の鼓動まで伝わりそうな間隙。こんな距離で、こんな合間で己の武器を投擲する。それを無謀と嘲う者はここにはいない。ただ結果だけが巻き起こる。

飛来する刃を黄理は回避ではなく、小太刀によって打ち払う。

甲高い鋼の悲鳴。

襲撃した刃は弾かれた。

企みが失敗したのではない。

むしろこれこそ。

左腕が地面を叩きつける。指先まで込められた力が強引に身体を起き上がらせ、無理矢理右足を動かして地面に突き立てた。嫌な音を立てて筋肉繊維が膨れ上がる。その痛みを無視して、奥歯を噛み締めた。

すると、どうだ。

黄理の顔が、最早目の前にある。

推進力は上へと立ち上る。全身は押し込められたバネ仕掛けだった。緊張を保つスプリングは螺旋を描いて解放を喜び、右腕は振り上げられた。勢いのままに振りぬかれる腕は真っ直ぐに黄理へと突き刺さるために、駆動を果たす。

黄理の小太刀は遠い。迫る身体に突き刺すには、遡る右腕と比べればあまりに遅い。

頭蓋を破壊し、脳をぶちまける膂力が込められた一撃。拳の形は掌底。顎を打ち砕く威力を余すことなく一点へ。

それが真っ直ぐに肉体へと突き刺さり。

不可視の衝撃が米神を撃ち抜いた。

不意に、目が覚めた。乾いた土の固い感触が背中にあり、どうやら自分は倒れているのだと気付く。そのまま倒れているわけにはいかぬと臍に起き上がろうとするが、なぜか身体に力が入らない。

これは、一体なんだ。

何故自分は立ち上がることが出来ないのだ。肉体は立ち上がろうとしているのに、どうにもまともに動いてくれない。

「起きたか、朔」

不可思議な現象に暫し時を置いてみると、その頭上から無遠慮な
声音が降り注いだ。

聞き間違える事のない、朔と名を呼ばれた子供には特別な声だっ
た。

「御館様」

力も無く横たわり、起き上がる気力も揮わないまま、頭部を覗き
込むような位置に佇む男、七夜黄理を朔は見上げた。

そして、自分が負けたことを朔は悟った。

「負けました」

「そうだな」

声が少し変だった。そして今しがたになり咽喉が渴いているのだ
と朔は気付いた。

「どうして」

「小太刀を弾いたが、そのまま捻って左手に持ち替えた」

そして柄で打ったのだと、黄理は静謐に言った。

確かに、あのまま右手に小太刀を構えていたら迎撃は叶わなかつ
た。それゆえ振りぬかれた右腕を背面へと勢いのままに運び、そこ
で右手に持ち替えたのだと言う。

それを安易に言葉にするが、それがどれほどの技量であるか。瞬
時の判断、実際に行える技巧。どれもが並みの事ではない。

だが、ああ、そうかと納得してしまうのはこの男の実力ゆえだった。

七夜黄理。殺人機械、鬼神、殺人鬼。幾つもの仇名を冠された退魔一族七夜の現当主。

目の前にいる男はひたすらに強く、その差は目に届かないほどにある。朔など歯牙にもかけぬ遙か高みに存し、手加減されて尚勝てない。

本来、七夜黄理の得物は小太刀ではない。黄理自身の得物はもつと別のものにある。それでいて今回の組み手では黄理は小太刀以外を使用しないという枷まで課していたにも関わらず、無様にもこうして倒れ伏している。いや、そのような枷があっても朔では黄理には未だ届かないだろう。どれだけ幸運が巡り、例え目前の男が組み手最中にすっころんだと言うありえないような事態が起ころうとも、朔は黄理に勝てる映像が浮かんでこない。

つまり、七夜黄理はそういう存在だった。挑むのも無謀な果て無き極地を闊歩する鬼神である。核が違う、そもそも立っている場所が違う、次元が違う。勝つ事も、越える事も叶わぬ七夜最強の男である。

だが、それがわかっていても 朔は。

「次を」
「あ？」

七夜黄理の背中を朔は追い続けるのみである。

「次をお願いします」

「……お前一人に構える時間はもう無い」

にべも無く、切って捨てられた。

しかしそれもそうか、と朔は思う。

早朝から行われる訓練において組み手は冷めた熱を帯びて次第に殺し合いへと昇華し、今では正午になっていた。

黄理との訓練に於いて気を抜けばあっさり死体と化す。それは訓練とは呼べぬ濃密な本番であった。事実これまで行われた組み手で朔は死にそうな目に幾度と無くあっている。瞬時の判断を誤り咽喉を潰され、骨を折られ、肉を裂かれた。意識を奪われる事などざらで、黄理の訓練はいつも苦痛を伴っている。

しかし、これほどまでに充足される瞬間を朔は知らない。

故に時がどれほど流れても全く気付かないのだ。

時間は訓練終了の時間である正午へと辿り着いたのだろう。

気付けば黄理はその場から立ち去ろうとしていた。倒れ伏し、脳を揺らされた朔を介抱する気なぞないのだろう。朔もそれを望んでいないのだから構わないが。

「…… さーん！」

すると、遠くから声が聞こえてきた。それと同時に地面へと接触する朔の背に規則的な振動が伝わり、近づいてくる人間の気配があった。

「父さーん！ーん！ーん！」

幼い子犬を思わず、子供の声。

声が聞こえる方角へ首を傾けると訓練場に一人の子供、それも朔とそう歳の変わらなさそうな男の子の姿があった。子供は元気良く腕を振り回して黄理へと駆け寄っていく。

あの子供こそ黄理の息子である七夜志貴だった。

そして、朔は見た。

「志貴」

それまで無機質めいた男の姿に、確かな温度が生まれた瞬間を。視線を僅かに緩ませて、黄理は志貴を迎える。そのぬくもりは、朔には向けられる事のない温度だった。

七夜朔は七夜黄理の子ではない。身内殺しを行った黄理の兄の子供である。身内殺しは一族に於いて禁忌でしかなく、兄は朔が生まれた瞬間にはこの世には命を散らしたのである。目前にいる黄理の手によつて。母と呼ばれる人物も出産に伴つて亡くなっている事から、朔に対し黄理は温度を生み出さない。それもそうだろう、と朔は思う。禁忌を犯した者の子に対し、何を傾ければいいのか。

それゆえ、この自身の待遇は恵まれたものであった。少なくとも朔は冷遇されても可笑しくは無い状況にある。それでも朔がこうやって生きているのは、朔を黄理が引き取ったからに他ならない。

ただ、それをどうこう思う感慨を朔はまるで抱いていない事が問題であった。

視線の向こうで黄理と志貴はなにやら楽しげに会話をしている。何を話しているのかまでは把握も出来ず興味もなかったが、それでも視線を外す事はなかった。出来なかった。

そうしているうちに、黄理の子供である志貴がちらちらと視線を寄越してくるのがわかった。好奇心だろう。隔絶された扱いを受ける朔に興味を抱いたのかもしれない。しかし、そんな納得をする朔だからだろう。

志貴の表情が心配そうな影を差し込んでいるのが理解できなかった。

確かに、起き上がらぬ人間がじっと見てくるのは気分を害するだろうと、朔は視線を外した。そして空を見た。

鬱蒼と茂る森の合間から差し込む太陽が眩しい。
それを、無機質な瞳で見続けた。

求められている事は、わかっていた。
望まれている事は、わかっていた。

成るべきモノは、知っていた。
為すべきコトは、知っていた。

己が何なのか。
そんなの、生まれた時から知っていた。
それだと言うのに。

今、己は何をしているのだろう。

退魔組織から抜け出した七夜。最早修めた術理を行使することもない。

しかし、自分は退魔の術理をひたすらに極めようとしている。

一体、何を得ればいいのか。

己は、得てもいいのだろうか。

一体、何を求めればいいのか。

己は、求めてもいいのだろうか。

己は、一体何を為せばいいのか。

七夜朔。七歳。

訓練にて黄理に敗北する。

第一話 黄理（後書き）

時間が飛びまくっています。

いつの間にか志貴いるし。

お読みくださった方々。あなた方に感謝を。

できればアドバイスなどよろしくお願いします。

第二話 父親（前書き）

課題も終わらせていないのに投稿。

ほのぼのだったらいいな。

あとキャラ崩壊ご注意。

第二話 父親

人里を遠く離れた太古の森。退魔一族七夜が根城、通称七夜の里。侵入者を防ぐ結界によつて保たれた、七夜たちの住処である。森の周囲に施術された結界には、一般に生きる人間にはそこにあるのに認識できない暗示がかけられる仕組みとなっており、この森に入るのは必然的に裏の人間ということになる。

七夜のほとんどはここで生まれ、ここで育ち、そしてここではないどこかで死ぬ。

生業が生業なだけに、七夜の者は布団で死ぬ者が多くない。混血への暗殺を主とする仕事上、どうしても生還できない者はいる。血なまぐさい世界の住人たる運命だろう。人としての形のまま死にゆく者は稀で、任務に失敗する「死」という図式が当たり前のように出来上がったこの世界では、そのようなものも珍しくなかった。

まだ古い時代の話だ。

使い捨ての超能力者の血を長らえさすことに成功させた七夜は、近親相姦を重ねることでその血を保ち、それと同時に暗殺の術をひたすらに研鑽することで、退魔組織七夜と名乗るに到った。

しかし、七夜はあくまで人間である。

どれだけ人間としての限界を極め、また突破し人外の力を得てもなお、七夜は人間だった。それゆえ魔のモノたちとはもともと相性が悪く、専ら混血専門の暗殺を担ってきた。

七夜の里。危険な仕事を生業とする一族の最後の安息地でもある。

そんな七夜の里の奥、木製の小さな屋敷が点在する空間で一際大きい造りをした屋敷のなか、一人の男が唸り声を上げていた。

場所は囲炉裏の間。機能していない囲炉裏のそば。そこには鋭いのだか鈍いのだかよく分からない雰囲気を放ちながら苦悶の表情を

浮かべる男が胡坐をかいて座っている。

男の名は七夜黄理。七夜一族の現当主である。

黄理は七夜でも最強と謳われた男であり、混血の者たちからは鬼神と呼び恐れられた存在である。ただひたすらに人体の活動停止の術のみを磨き上げた黄理は、かつて殺人機械として何の感慨も何の感情もなく殺戮を重ね続け、今では名を呼ぶことも憚れる存在と成り果てている。

それは前線から退いた今でも変わらず、練り上げた暗殺術はなお健在、鬼神の名を欲しいままにした最強はいまだ最強だった。

そんな男が今表情を歪ませ、腕を組んで思考を巡らし、ある問題を解決しようとしていた。

ことの発端は五年前。男に息子が生まれたことにある。
跡継ぎの問題のためだけにもうけた息子の名は七夜志貴という。

七夜の一族は生業上早くに子供をもうけ鍛えられるのが望まれている。

それはいつ死ぬかも判らぬ退魔業。次の世代を残すのはとても重要なことである。

ゆえに黄理もそれに習い、子をもうけた。

確かに七夜の里には他にも子はいた。極めて幼少の頃から七夜として鍛えられたそのなかには、すでに頭角を現し、他の子とは比べ物にならない才をもった子も現われている。

七夜の当主に求められるのは最強の人間である。それは現当主である黄理の血を引いていようがいまいが一切関係ない。七夜には世襲制など存在しないのだ。純粹に七夜を引っ張るに相応しい存在が求められているのである。ならば競争相手は多いほうが良い。互い

肉と中身の混ざり合った血だまりのなかを、無機質に泰然と立ち
尽くす殺人鬼。

迷いなく、惑いなく、躊躇なく、容赦なく 慈悲なく、恐怖もな
く殺す鬼神。

七夜黄理という人間は積み上げられた屍の上に出上がっている。

だと言うのに、だと言うのにである。

生まれた志貴はやたらに可愛く、そして愛おしかったのだった。

それからの黄理は変わった。

それまでの憑き物が落ちた黄理の姿は豹変と言ってもいいだろう。

「志貴がいるのに危ないこと出来るか！！！！！」

と一族ごと退魔組織を抜け出し、

「志貴を危ない目に合わせる気がこの (聞くに堪えない罵
詈雑言)！！！！！」

と叫んで里の結界の強化を開始。本来ではありえないが外の魔術
師を招いて結界の強化を重ねては重ね。今となつては魔の存在が近
づくだけで森の植物が襲い出すというとんでもない自然要塞と化して
いる。

これ腑海林じゃね？と思った七夜がちらほら。当主の変貌っぷり
に頭を痛めた七夜が続出。そんな彼らの目の前で当主は結界を合作
した魔術師と共に、にやりと笑みを浮かべた。

その姿を見て全員が思った。

「……だめだ、この当主はやく何とかしないと……っ！！」「……」

とにかく黄理は何でもやった。その姿はまさしく子煩悩な父親で
ある。

息子のために何でも行う姿は世の父親の鏡とも言えるだろう。

ただもう少し周りのことも考えて欲しいとは一族の言。
そりゃ結界の影響で森の動植物たちが突然変異を起こしたとあつては笑えない。

実際ある者は二足歩行のキノコを目撃している。生憎と最近は目撃情報はないが、証言によれば空中を漂いながら横回転するそうだ。

それはともかく志貴が可愛くて仕方ない黄理だが、それと同時にあるひとつの悩みも抱えることとなった。

「翁」

「なんでございましょうか御館様」

すつと、音もなくいつの間にか囲炉裏の対面に男が現われた。

初老の男である。頑健とした身体を黒装束で包み、掘り深く顔に刻まれた皺がひび割れた大地を思い起こさせる男である。

翁と呼ばれたこの男。その役割は一族のご意見番であり、黄理が誕生する以前から七夜の当主に尽くした古参の男である。年老い、七夜としての力も衰えているが、長年培われた経験と、幾つもの修羅場を乗り越えてきたその度量は貴重であり、今では黄理の相談役としての顔を持っていた。しかし見かけはただの好々爺にしか見えない。

「……朔は、どうしている」

「朔さまは現在里のものによって離れに移されております。私が見たところなかなか疲労が溜まっているではないかと」

「……そうか」

そうか、と黄理はため息を漏らした。

黄理が抱えている問題。それは現在黄理が育てている七夜朔にある。いや育てているとは語弊が生じる。黄理は朔を預かっているだけだ。世話もしていない。

七夜朔。身内殺しを行った黄理の兄の息子。七年前に自分が預かった子。

その存在は別に問題ではなかった。狂ってしまった男の息子ではあったが、当主が名目上預かる事となったため混乱は起きず、表面上は一応問題なかった。

朔と名づけたあの時。夜を終わらす朝焼けのなか、黄理は笑みを浮かべた。

殺人機械だった男が笑みを浮かべたのである。

自分はなぜあの時笑ったのか。

志貴が生まれるまで、結局それがなぜなのかわからなかった。しかし今ではなんとなく分かっている。それは志貴が生まれて始めて気付いた。

志貴と名づけたのも、朔に似せようと思ったり思わなかったり。

ただ、それに気付くのが、あまりに遅すぎた。

「御館様も気になるならば自分で行けばよろしいでしょうに」
呆れながらも微笑み翁は言う。

しかし、それが出来ないから黄理は困っているのである。

預かっているとはいったが、黄理と朔は同じ住居で生活していない。
この屋敷の離れ、小さく、隔絶されたようなその建物の中で朔はひとり生活している。

あの頃、情もなかった黄理は屋敷の離れに朔を放り込み、世話の一切を使用人に任せていた。志貴が生まれるまで黄理と朔は指で数えるほどにしか顔を合わせたこともなく、会話などありもしなかった。

当時の黄理には朔と共にいる理由もなかったし、それを必要としていなかった。それが当然と感じ、そしてそれを受け入れていた。

しかし志貴が産まれたことで黄理の憑き物が取れ、黄理はだいぶ人間らしくなった。今までの殺人機械はなりを潜め、朔への対応に疑問を感じるようになった黄理は朔と顔を合わすこととなったのだが……。

「翁。今の朔をどう見る」

「……すさまじいですな。このままゆけば当主の座もありえないものではないかと」

「……」

「恐ろしいお方です。七夜の鬼才とは朔さまをいうのでしょうか」

現在朔は七歳。通例に習い、早いうちから訓練を施すこととなった。退魔組織から抜けた現在においてもそれは変わらず、七夜の技は脈々と受け継がれる形となっているが、そこでわかったのは、朔はとても才のある人間だったことである。

さすがは黄理の兄の子ということだろうか。

鬼神の兄は狂気に飲まれはしたが、それでも黄理を凌ぐ強かさを練り上げた男だった。

黄理が感慨なく解体する殺人機械なら、兄は圧倒的な力をもって相手を蹂躪する爆撃機だった。

事実兄が殺した相手は肉片ひとつ残さず爆散し、彼が通った道には死体すら残されない。残念ながら殺人を楽しむ人間になってしまったが、ちゃんとした理性をもっていたならば、間違いなく七夜の当主となるはずの男だった。

そんな人間の子である。

驚異的な速さで成長する朔は今となっては同年代の子供らを遙か後方に置き去りにし、それでいて更なる飛躍を見せている。下手をすれば大人の者すら凌ぐ強さである。

朔が掴まり立ちを成功させてから始めた戦闘訓練。七夜の子は幼いうちからその戦闘訓練を始めるが、それでもなお速い。最初それに難色を示す者もいたが、当主命令をちらつかせたことでそれは抑えられた。

そうして始まった訓練。

幼すぎる朔には身が重いだろうと思いついていた里のものは面食らうことになった。もの覚えよく、文句ひとつ言わず、訓練を受けた朔。

朔は周囲の予想を裏切りメキメキと力をつけていった。

今となっては鬼才と称すものも現われ、鬼神の子と呼ばれることも少なくない。

その証拠に先ほどの訓練。

無論手加減はしていたが、それに喰らいつこうと追隨するのである。

現当主に、七歳ばかりの子が。

最後の交差。あの瞬間朔はこちらを殺そうとしていた。

刃を重ねることに増す殺気。ひたすらに研ぎ澄まされた朔の殺気はただひとつ、黄理の命を狙っていた。通常ならありえないようなことである。しかし、事実朔は最後の最後まで諦めはしなかった。

結局訓練は黄理が朔を気絶させることで幕を下ろしたが、顎を狙ったあの掌底。それを避けるため、力んだ一撃を撃ってしまった。当主の名は伊達ではない。本気の黄理の一撃は今だ訓練段階の子供に目視など出来ぬ速度で朔の米神を打ち抜いた。

恐ろしいのはそれを打たせた朔にある。

顎を狙った掌底。あれは確実に頭部を砕く力を秘めていた。再度言うが朔は七歳。

未恐ろしいとは朔をいうのだろう。

「しかし翁……」

「はっ」

「朔は一体誰に似たんだろうな」

「それはもう、御館様以外の誰と言うのでしょうかのう」
「……」

それを聞き、黄理はため息を吐く。

七夜朔。七歳の子だというのに、妙に黄理に似ている。

無論顔が似ているとかそんなではない。黄理と朔は叔父という関係で、どこかに通っているような顔立ちはしているが、問題はそんなことではない。

伶俐に鋭く、無機質な瞳。

研ぎ澄まされた刃を思わずその雰囲気は間違いなく以前の、志貴

が生まれる以前の黄理のものだった。

今だ小さな子供が、殺人機械と称された男と似ているのはどうい
うことだろうか。

殺人機械の黄理なら問題ないのだが、今の黄理は父性あふれた父
の鏡。

ほとんど放棄していても、やはり何とかしたい。

しかし本当に今更の話である。

とりあえず一緒にいる時間を増やそうと朔の訓練は黄理が全て受
け持つことにした。当主が訓練を受け持ち、しかもたったひとりを
受け持つなどまさしく前例にないことである。

だが、訓練中は必要最低限の会話しか交わさず、朔は訓練に没頭
して黄理を会話を楽しむ対象として捉えていないし、黄理は黄理で
今までのことがありどうにも話しかけづらい。

そうして朔はどう思っているのかわからないが、気まずい時間だ
けが過ぎていくのである。

これではあまりに意味がない、と黄理は頭を抱えることになった
が、そこから先どうすればいいかまったくわからない。

なのでこうして翁と相談するのである。

「一緒にご入浴などはいかかでしょう」

「しかし……それはあまりに難易度が高くないか」

「いえいえ何を言いますか御館様。家族として近づきたいなら、四
六時中一緒にいるのは当然のこと。事実志貴さまとご入浴などしよ
つちゅうではありませんか」

「それは確かに、そうだが……」

「ならば何を迷いますか。朔さまとご入浴をすることで親密度を上
げ、フラグを立てればよろしいのです。そうすればいずれ朔さまは
心をお開きになり、確実に父様発言フラグが発生するかと」

「おお……！！なるほど、さすがだ翁！！」
「感謝の極み」

しかし、この男。本当に鬼神と呼び恐れられた殺人鬼なのだろうか。

第二話 父親（後書き）

憑き物が落ちた黄理が親馬鹿になったら、という妄想。

七夜黄理ファンの方々ごめんなさい。

あとオリキャラが登場。

なにかと登場してくるかも。

アドバイスなどがあつたら嬉しいです。

第三話 月下（前書き）

すこし時間が空いてしまいました。

どっにも急ぎ足な感じが否めませんが、ではどっぞ。

第三話 月下

月が里を見下ろしている。

翳ることもない月を美しいと思わない自分はどこか壊れているのだろうか、と朔は庭先が広がる離れの縁側に腰掛けながら考えた。夜である。戌の刻ばかりだろうか。里は静まり、外に出ているものの姿はない。

頭上には満月。歪みない月が夜空に吊り下げられ、目下に広がる地上を睥睨していた。

静かだった。ただ静かだった。

生き物が発する物音は聞こえず、風に揺れる草のざわめきも聞こえない。無音にも似た沈黙が里を支配している。

この耳鳴りがするような沈黙を朔は気に入っていた。ともすれば死者の眠る墓場を連想させる静寂の世界。

生きている者のいない世界はなによりも自分がいるべき世界に思えて仕方がない。

少なくともこの生者溢れる世界で、自分の居場所を見つけることの出来ない朔にとって、それはひどく相応しく感じられた。

自分は一体何なのだ、一体何をすればいいのか、何になればいいのか。

それを考えるたびに朔は諦観めいた感情を抱く。特に独りのとき、その絶え間ない自問自答は加速し、朔を更なる深みに手繰り寄せる。七夜として自分が何を求められているのかは分かる。七夜の業を教え込まれているのも、やがて一族の担い手として、侵入者を排除する尖兵となるよう望まれているからだ。

誰かに言われたわけではない。命令されたわけでもない。ただそのような蠢く意志を里の者から感じる。

その証拠はいくつもある。今日の訓練もそうだろう。

通常、当主は子を鍛え、指導しない。それは七夜の暗黙の了解のよくなものだった。

しかし、それが朔の登場で破られている。朔は訓練を始めてすぐ、当主が朔を預かって訓練の全てを面倒となっている。

それは黄理からすれば朔との時間を増やそうという魂胆から始まったことなのだが、何分どうやって朔と触れ合っているのかわからない。黄理は事務的に相手してしまっている。彼の狙いは今だ効果をあげているとは言えないだろう。

その本人は当主が子供の手解きを行う理由をあまり考えていなかった。

ただ、それまで会話もほとんどなかった黄理がそばにいないことを不思議に感じていた。

黄理が指導する訓練。それは子が行うにはあまりに苛烈で厳しく、とてもではないが訓練を始めたばかりの子供には耐え切れることのないハードなものだった。

基礎的な体力作りのために突然変異を起こした地帯を走り回り、それが終われば朔が動けなくなるまで組み手を行う。例えば朔が気絶したとしても肉体的に問題がなければ目覚め次第すぐに組み手を再開する。しかも使用するのは真剣である。本物の刃は扱いを誤れば自身を傷つけ、さらには相手を殺してしまうという禁忌を抱かされる。そしてその全てを黄理自身が受け持つのである。

そしてその黄理が持つのも真剣。それが持つ怪しげな危険性と、黄理が放つ殺し合いさながらの殺意は実戦さながらで、朔は幾度となく無残に殺された自分を妄想した。

だがしかし。

朔は泣き言を漏らさなかった。あまつさえ耐え切ってさえみせた。これが朔を異常足らしめんとするものだった。

朔はひるまない。

訓練を開始する子供はある程度の事柄をこなしてから本格的に訓練を始める。でなければ本人が危ないし、七夜の戦闘技術に耐え切れない。さらには将来、殺し合いというステージに精神が耐え切れない。そのための準備に何ヶ月かの時をかける。じっくりと時間をかけて肉体を準備し、精神を鍛え上げていくのである。

だが、朔はその準備期間がなかった。

だというのに、朔は耐え、こなしている。

今となつては黄理に牙をつきたてようとしてさえいた。

それを人は才能といった。

朔を鬼才と評し、鬼神の子だと称した。

事実朔は里の子では並ぶことのない高みへと上がり、大の大人との組み手であっても対等以上に渡り合っている。今では朔の組み手が務まるのは黄理ただひとりになっていた。

しかし、

「まだ、遠い」

脳裏に焼きつくのは黄理の姿。

戦闘技術、重心移動、移動速度、気配遮断、神速の斬撃、死角からの奇襲、さらに全方位に目がついているのかと思うような勘のよさ。

何よりも、油断なく、慢心なく、鋭く射抜くあの瞳。

泰然とし、遙か高みに存する男。

今日の訓練でも黄理には届かなかった。朔が黄理の訓練を受け五年以上経つが、朔は未だに黄理へ一撃を食らわせていない。当主相手に組み手をこなす朔だったが、それは黄理が手加減をしたこと。

朔は知っている。黄理の本気、黄理の戦闘を。

感慨なく、感情なく相手を殺す殺人鬼。殺人機械。鬼神。

暗殺者として遙か高みに座する黄理との距離は果てしなく遠く、見えないほど。

だが、それでも、朔は黄理に追いつこうとしている。

ずっと見てきた。

その姿を目に入れてきた。

それがなぜだか分からぬが、朔は黄理のようになりたいと、漠然に思ってきた。

離れに放りこまれ、使用人の世話を受けてきたが、朔の周りに大人数らしいものの姿はなかった。

ただ遠目に、黄理の姿だけがあった。

だからだろうか、朔には黄理を追いたいと考えるようになった。

あのような殺人鬼に。あのような殺人機械に。あのような鬼神に。

朔が影響を受けたのは、状況も考えれば、黄理しかいなかったと言える。

隔絶された場所に放り込まれた朔にとっては、人間とはとても遠い存在だった。

だが、そこに黄理がいた。黄理だけが見える位置にいた。だからだろう。朔は黄理を見るしかなかったのだ。

無論そのようなことは朔には分からない。分からないが疑問には思っ。

だが、自分はなぜ黄理になりたいのだろう。

志貴が生まれ、七夜一族が退魔組織を抜けることで状況は一変している。生業からも手を引いた。七夜は殺し屋ではない。

だと言うのに、自分は鍛えられ、望まれている。

人を殺す技術、人を壊す精神、人を解す肉体。

何のために？何のために？

自分はなぜ黄理になりたい。

自分はなにになりたい。

一族の担い手。里の尖兵。

そうなるように望まれている。

そうなるように求められている。

それは分かっている。分かっている。

だが、自分は

「朔」

不意に、声がした。

いつの間にか、離れに黄理がいた。

母屋からきたのだろうか。今は淡く染められた着流しを見につけている。

黄理が離れに足を運ぶのは珍しいことだった。黄理は基本この離れにやってきたりはしない。

それにしてもなんなのだろうか。黄理からなにやら戦意のようなものが滲み、妙に意気込んでいるように見える。

ただの用事には見えなかった。ただ事ではない雰囲気は黄理にはある。

「なんででしょうか、御館様」

朔の返事になにやら黄理が動きを止めた。

一体何なのだろう。

しばらくして、妙に落ち着きのない黄理だったが、どうやら決心をしたらしい。

「風呂には入らぬか」

「もう入りましたが」

間断なく応えられた返事に黄理は呻き声をあげた。

朔は今、黄理と同じように着流しをまとっている。色は藍色。使用人が昔着けていたお古らしい。

朔は先程母屋にある風呂に入ってきたばかりなのだった。

そしてしばらくすると「そうか……」と力なく声を漏らし母屋へと帰っていった。その際に背中が煤けて見えたのは朔の気のせいだろう。

志貴が生まれてから黄理は変わったと話聞く。それはそうだろうか、と朔は思ったりしたが、別にそれは問題ではないしどうでも良かった。

黄理を見て、黄理になんともなかりたいと思っているが、彼の性格面はどうでもいい朔だった。

七夜黄理

朔と一緒に入浴イベントを起こせず。

第三話 月下（後書き）

朔は考える殺人鬼というスタイル、もしくはは人格です。

第四話 志貴（前書き）

まさかの連投です。

ちよっと短いかもしれませんが。

そしてよつやく志貴がまともに出てきます。

それでは、どうぞ。

第四話 志貴

志貴にとって朔は非常に不思議な存在である。

七夜黄理の子として生をうけ、健康的にすくすくと成長している志貴だったが、生まれて僅かでない志貴にとって疑問を受けざるを得ない存在がいた。

それが朔である。

志貴が住んでいる家の離れに住んでいる自分よりも年上の子供。母屋には入浴するときのみしか訪れず、睡眠食事は全て離れにて取っている、らしい。

幾度か目撃したのはいいものの話しかけることも出来ず、またあちらも志貴に気付いていない、もしくは気にも留めていなかったようで完全にスルーされていた。

一体誰なのかと話を家のものに聞いてみると、どうやら黄理が面倒を見ている子供らしく、志貴とは従兄弟の関係にある、らしい。

話を聞いているうちになんだか気になって仕方なかった志貴は好奇心の赴くままに朔が生息しているらしい離れに忍び込むことにしたのだが。

現在離れの中で志貴と朔は正座して対面していた。

なんだこの状況、と志貴は内心どきまぎしながら対面に座る朔を見る。

なんだが微妙に睨まれた。

それがなんだか怖くて漏らしそうになったのは志貴の秘密である。

そもそもなんでこのような状況になったのか。

それは志貴が思い立って離れに忍び込んだことにある。志貴の父親である黄理と朔が訓練を行っている時間を見計らって決行したのだが、離れに朔がいなきや意味無くな？と思いつかなかった志貴はただいま五歳児。国民的アニメのジャガイモ頭と同じ年齢である。それぐらいのうっかりは許してほしい。

ただ里には電気が通っていないので家電製品が無いので志貴はアニメの存在自体知らなかった。

ともかくにも離れに侵入を果たした志貴だったが、離れには見事にも何もなかった。押入れの中にある和箆笥には藍色の着流

しが数着あるだけで他には何も無い。それ以外探してみてももの特に何も見当たらず、畳が敷き詰められた部屋の中には本当に何も無い。これは困ったと志貴は考えてみた。朔に関して何かしらのヒントを得たいがために行動したのはいいが何も見当たらない。果たしてどうしたものか。

困り果てた志貴は畳に寝っころがってみた。

畳のいいにおいがして心地よく、目をつむる。

そして朔のことを考える。

いつも見かけるとき朔は一人でいる。それは母屋でも里内でも変わらない。ただひとつ例外があるとすれば黄理だろうか。朔の訓練のときのみ朔は誰かという。当主の子供として生まれた志貴の周りには何かと人がいる。それは家族だったり、里にいる子供だったり、一緒に訓練を受けるものだったり、はたまた当主に用事のある一族の者だったり、志貴は生まれてこのかた一人でいることが少なく稀だ。だからいつも一人でいる朔の存在が気になったのもその要因ではないだろうか。

そして朔はが一人でないときがある。それが黄理と訓練しているときだ。

朔の訓練を幾度か見たことがあるが、あれは凄まじい。志貴だつて七夜の通例に習って訓練を始めて一年以上経つがだいぶ力をつけてきたと思う。同年代との訓練では常に標準以上の動きを見せていて、志貴としてはそれが密かな自慢でもある。

しかし、それは朔の訓練を見て粉々に砕かれた。

なんなのだろうかあの動きは。ひたすらに速く、疾い、二人の組み手が目に焼きついて離れない。朔は黄理との戦闘訓練をこなし、

あまつさえ追随しようと思えていた。

志貴が七夜の戦闘訓練を受け始めたとき、父の話を幾度も聞かされてきた。

曰く殺人機械。曰く鬼神。曰く七夜最強の男。

七夜の一族において自分の父が一番強いという話を聞いて、朔は父に尊敬の念を抱いた。

そんな父と、朔は対等に組み手をこなしていた。

そして傍観者たる志貴だったから分かったことがある。朔はあのギリギリの訓練のなかでさえ更なる動きを見せていた。

それはつまり朔が更なる飛躍を見せているに他ならない。あの訓練で朔は研磨され、鋭くなって黄理に喰らいつこうとしている。

当主に自分と年のそう変わらない子供が、である。

更に驚くべきは黄理である。

志貴は父のことが大好きであるが、同時に怖い存在と認識している。立場ある一族の当主としてなのだろうが、黄理の威厳と言うか鋭い雰囲気志貴は苦手だった。そして常に鋭い目つきなのもその要因であろう。どうにもあの全てを射抜く視線が志貴には怖くてたまらなかった。

その父が朔との訓練で微笑んでいるのである。何度か朔の戦闘訓練を覗いていた志貴であったが、その時黄理が笑んでいるのを見たことがあった。それは朔が一撃でもって叩きのめされ気絶したときのことである。表情のあまり変わらない黄理であったが、気絶していた朔を見下ろすその顔は周りのものは分らないだろうが、志貴の目には笑みを浮かべているように見えた。

それがなんだか悔しく、朔が意識を取り戻して訓練が再開される前に志貴は黄理のもとへ駆け寄って訓練の邪魔をしようとしたが、結局訓練は行われなかった。

志貴は朔が黄理に笑みを向けられているのがなんだか面白くなかった。

自分の父が他の子供の面倒をしているのは当主だから、と許容できたのだが、そればかりは受け入れられなかった。他の子供に父が微笑んでいるのは自分の父がその子供にとられているような気がしてならないのである。

更に朔の力量を見て志貴は自分自身が情けなく思えた。自分はそのように苛烈な訓練をこなせないし、早朝から昼まで組み手を行えるような体力も無い。あんなに速く動くことも出来ないし、なににより父と組み手を行うのも叶わない。

それが悔しくて情けなくてしかたがない。同年代でも優れていると思えば天狗になって、上を見ていなかった。上には上がいるのだと志貴は思い知らされた。だって志貴では朔に敵わない。

この話を聞けば黄理は喜びのあまり滂沱の涙を浮かべ更なる結果の強化に励むことになりそう（無論里の者に全力で阻止されるだろうが）だが、あいにくそのような話を志貴は出来なかった。自分がかっこ悪いようにも思えたし、そして楽しそうにしている父にこの話を聞かせるのはなんだか忍びないような気がしたのだ。志貴すげえいい子。

なので今回の調査である。

朔を知り己を知らねえんとやら、と勢い込んで行動してみたはいが成果はまったく無い。そもそも知ってどうするのかとか考えていなかった。

だが、志貴の思い込みというかほとぼしる熱いパトス溢れた脳に
ノンストップはない。

そつだ。そつだとも。自分がやらなければ誰がやる!!

寝っころがる志貴の身体に熱が灯り始めた。

自分がやるべきことは終わっていない。否、始まってもない!!

自分はこの達成困難な任務を遂げることで始めて終息を得、この
天井の向こうにある大空を抱いて羽ばたくのである。

ならば今こそ自分を奮起させるとき。このまま眠ってなんかいられ
ない!!

少年よ、神話になれ……………!!

そして志貴は目を開けた。

目前に朔がいた。

「

ふえ？」

志貴と朔のファーストコンタクトはそんな志貴の間抜けな声と共に幕を開けた。

第四話 志貴（後書き）

この時点で志貴は殺人を忌避していません。
むしろ特になにも考えていません。
やっぱり先生の影響はすごいです。

お話はまだつづきます。

第五話 対面（前書き）

もうひとつ投稿。

これで今日は最後です。

さすがにこれ以上は無理です。もっと頑張れよ私。

では、ごうげ。

第五話 対面

空を翔けてはならない。

それが黄理の言だった。

即ち空中に足場は無い。そして人間には空を羽ばたく羽が無い。だから空中で攻撃されたとき、身じろぎもしくは防御姿勢をとることとでしか攻撃を回避できない。しかしそれは選んではならない方法だった。七夜は人間である。もし身じろぎして回避できないほどの範囲、防御して凌ぐことが出来ないほどの火力で攻撃された場合、七夜はあっけなく死ぬだろう。

近親相姦を重ね人知を超えた能力を保有し、いくら人間の限界を超えた身体能力を得てしても、あくまで七夜は人間だった。ゆえに空中で移動するという手段を持つことが出来なかった。

だから空中を翔けるな。空中では格好の的だ、と黄理は言う。しかし、選択肢として空を封じられたとき、空中しか回避できない攻撃を受けたときどうやって回避すればいいのか。

黄理は言う。空間を移動しろ。

常に足場から足場へ移動することで七夜は高速機動を可能とする。足場は地だけではない。壁、天井、足場として利用できるものは全て利用しろ。

全ての遮蔽物は七夜の足場だ。
それが黄理の言葉だった。

閃鞘。

閃走。

七夜の空中利用術である。

生い茂る森の中、木々の合間を縫って朔は移動していた。

それはどう見えるだろうか。朔がいるのは地上二十メートル以上もある木々の間である。それを朔は脚で木を蹴っては他の木に移動し、腕で身体を突き飛ばしては他の木に移動するという芸当をこなしている。この動作を延々と繰り返している。無論それは通常の間ならば目が追いつくことの出来ない速度である。

空中を縦横無尽に移動する様は果たして人間に見えない。人間以外の何かのよう。

それはまるで獲物を追いつめる虫のような

朔が違う動きを見せる。延々と繰り返された動きの中で。始めて動きを止めた。

木の幹に足をつけ。地面と直角のままに。地面へと身体を向けてそしてそこからゆっくりと。

朔は墮ちていった。

最初はゆっくりと。だが次第に速く落下していく。

景色は視界から後方へと流れていく。身体を突き上げる風が頬を撫でる。

迫りくる地上。叩きつけられれば死は免れない。

人は一メートルの高さから落下し、着地を誤れば死ぬ。

人は簡単に死ぬ。それは抗えない。
死が近づく。
だが。

地面。朔の視線の先。
そこに七夜黄理がいた。

地面との距離はもう僅かばかりも無い。だが地に叩きつけられる
ようなまねはしない。

視線の先の黄理は泰然と落下する朔を睨んでいる。
接触まであとコンマ何秒か。
だがそれを、朔は選択しなかった。

木が爆ぜる音。

朔の足が足元の木を叩く。爆発的な速度で朔の身体が移動する。
落下速度も相まり、朔は風のように空間を凧いだ。
その軌道は斬撃に似ていたのかもしれない。
直線的な飛翔はそう呼ぶに相応しい。
そして先程よりも対面五メートル以上あった木へ着地。
先程よりも下方の位置だった。
黄理の背が見える。そこに向かって真っ直ぐに往く
！

地面を滑空するように黄理へと進む。
彼我の距離は僅か。
そのまま斬りかかることも出来る距離。

だが、朔はその選択をしない。

急制動。足元に負担をかける事で生まれる急停止。

そのまま真横へ直角に駆け曲がる。

背後は黄理の死角ではない。いや、暗殺術を極めた七夜最強の男に死角など存在しない。ゆえにあのまま斬りかかるのはナンセンスな選択。

朔は加速的に考える。黄理に届く算段を、必勝の戦術を。

だが考えれば考えるほどに黄理は雄々しく圧倒的な姿で、朔を容易に下す。

しかし、それが分かっていたとしても朔は黄理に届いてみせたかった。

いつもそうだ。いつだって朔は全力で黄理に挑む。それは訓練段階の子供からすればあまりに困難なことだ。

だが、それでも自分は。

瞬間。

悪寒が朔の危機を救った。

そしてただ一步。ただ一步踏み込んで朔は再び駆ける。

甲高く木霊す金属音。

目の前に、黄理がいた。

音の正体は黄理が斬りつけた小太刀を朔が握る小太刀が防いだ音。刃が狙ったのは首。すんでのところで防いだ。

だが接近戦には近づきすぎる。

しかし、それは同時に。

「　　っ！！」

超接近戦の距離。

小太刀を抑えたまま体を捻ることで生んだ加速が右足を俊敏に振るわせ黄理の左鼠径を強かに打つ。鋼鉄めいた硬さが足を痺れさす。肉の感触ではない。

それを同じくして、黄理の小太刀を握らぬ手が朔に向けて打ち込まれた。拳の形は貫き手。そのままそれは目前の小太刀を無視して朔の喉笛を貫かんとする。

右足は不安定。

だが、かわせないわけではない。

縦に回転。朔は飛んだ。

軸を真横に朔は回転蹴りを放った。

跳ね上がった右足が唸りをあげ貫き手を打ち落とす。

乾いた、鞭を打つような音がした。

そのままなる右足は黄理の小太刀を打ち払おうとするが、それは黄理が小太刀の向きを変えることでかわされた。

そしてそのまま、どうやったのか。

黄理が握る小太刀に先程打ち落とした手が添えられて

朔をそのまま吹き飛ばした。

。

空に吹き飛ばされ朔は地面に叩きつけられる衝撃を最小限に抑えながら、先程の衝撃の正体を看破する。

おそらく、あれは発勁の応用。自身が生み出した力を導くことで

放たれた不可視の衝撃。だが、それは七夜の体術には存在しないものはず。しかも物質を伝って、朔に襲い掛かった。

しかしそれを黄理は放った。おそらく自ら調べ、鍛え、研鑽したものだろう。

どれだけ巧く人体を停止できるかのみ追求してきた過程の産物か。

努力を惜しまない殺人鬼は正に化け物だ。

起き上がる朔は新たに加わった戦力をどう攻略すればいいかと考えるが、更に黄理との距離が延びたことを痛感する。

立てた対策は接触を避ける他ないと結論付けた朔は、再びどうすれば黄理に届くのかと考え出したところで。

「時間だ」

粛々とした黄理の声が訓練の終わりを告げた。

「移動は今の段階では上出来だ。だが今だ甘い」
「はい」

「七夜が蜘蛛と呼ばれる由縁を知れ」

「もうしわけありません」

訓練後の反省もそこそこに二人は別れた。訓練の後は黄理が朔の悪い部分を指摘するのみで他の会話は交わされない。あくまで事務的なスタンスは崩されないうままだった。ある程度話しが終わったところで、黄理が微妙な空気を滲ませたのが気になりはしたが、話しかけも来なかったので大したことではないだろうと判断し、先に戻ることにした。一体なんだったのだろう。

訓練場として使われた場所から朔の生活する離れはわりかし近い場所にあった。朔は訓練を済ますと真っ直ぐに離れに向かう。

離れに向かう途中、朔は何人か里の者とすれ違った。里の者は何やらもの言いたげな表情をしていたが朔はそのことごとくを何なのだろうと思いつながら、結局何も話しかけてこないのですそのままれ違っていた。

朔は訓練以外の全てに受動的だった。

特殊な生活をしているからだろうか。里の者と触れ合うことも無かった朔はひどく我の無い人格を形成してきている。

何をするのも受動的なのはそれ以外の受け答えを知らないから。

我の無い人格なのはそれ以外の生き方を知らなかったから。

もしかしたら。朔はものすごく愚直な性格なのかもしれない。

ただ黄理の姿だけを見てきた朔にとって、それ以外はどうでもいいことなのかもしれない。少なくとも、同じ里に生きている者だといふのに、朔は里たちが自分とは全く違う生き物で、遠くに生きているように思えてならなかった。

里の者たちを見る。現在朔は里の開けた場所を横切ろうとしている。そこは一族の広場みたいなもので、よく人が集まる場所だった。そこで里の者たちは楽しそうにしている。

女は会話を楽しみ。子供は遊びに笑顔をこぼしてはしゃぎ。男は仕事に励み。年老いたものはそれらを眺めて安らいでいる。

それを見て。朔はなにも思わなかった。
何も、感じなかった。

ただそれが彼らが楽しそうなのは、感情が豊かだからなのかと考えたが、それはきつと何か違うのだろうか。と瞬時に打ち消した。そのような安直な理由からではないと思う。

ただ、それらに何の感慨も抱かない自分が壊れているからなのだろう。

彼らの笑顔は尊いものなのだろうか。彼らの感情は素晴らしいものなのだろうか。

朔の間断無い自問自答には答えが無い。ただ疑問に思うことはとても大事だと理解してのこと。それ以外のことはない。

そうして導いた結論はどうでもいいことだ、という思考放棄だった。

広場から朔は離れていく。

どこか空気が寒かった。

離れにたどり着くと朔は違和感を感じた。何者もないはずの離

れに何者かの気配がある。

離れに朔以外の人間がいることは一人を除いたら稀で、その一人とは使用人である。だが、室内から感じる気配は使用人のものではない。

幼く、まるで子供のような
。 。
そこまで考え、朔はふと気付いた。

この気配は知っている。

朔は息を潜め、気配を絶つことで離れの中に入ろうと、開かれたままの襖から中を覗いてみた。

志貴がそこにいる。

やはりか。

呟くことも無く、朔は一人思った。そして疑問を解決したものの今だ志貴がなぜこの離れにいるのかがまだ解決できていない。志貴はこの離れには今まで近づいたことも無かったはず。

七夜志貴。

朔が見続ける黄理の実子。

自分とは違う、温度のある子供。

志貴の存在は朔にとって黄理に次いで気になる存在だった。

現当主の息子として生れ落ちた志貴の存在は黄理を変えた存在だと認識している。事実彼が生まれることで七夜は生業だった退魔組織を抜け、今は森の奥で暮らすただの村人だ。

その原因は間違いなく志貴に違いない。志貴が生まれたことで当主は何かしら影響を受け、今のような一族へ変えたのであろう。

だが、それは一体なぜ？

朔は何度か志貴の姿を目撃している。それは母屋でのことであつたり、訓練を行っている際のことだつたりで、その度に志貴が自分に視線を投げかけていた。ただ、話しかけてきたりはしなかった。朔は気にしていなかったのだが、今回をしてその志貴が離れにいく。これはなぜだろう。

気になった朔はとりあえず、何やら寝転んで目をつむる志貴の側にすり足で近寄る。無論気配は断っている。当主仕込の気配遮断だ。黄理にはやはり劣るものの、式神並みの隠密行動に届こうとしている気配断ちは、ただの人間には視覚さえ出来ない。それが朔とさして年の変わらない幼子ならなおさらだろう。

事実、すぐ側で見ているのに志貴は気付いていない。

二人の距離は近い。志貴と朔の額がくっついてしまっようなほどだ。

視線を落とせば幼少期特有の突き立った唇があつたが、なにやらぶつぶつと呟いている。

なんだこれは、ととりあえず何を言っているのかと聴力に意識をまわし音を拾おうとすると。

志貴と目が合った。

それを無感動に感慨なく見つめる朔。志貴が目を開き、見詰め合うことに問題は無い。

「
ふえ？」

っ

ただ、志貴の気の抜けた言葉は少しだけ面白かった。

第五話 対面（後書き）

話はまだ続きますが今日はいったんこれで一休。

また次回お会いしましょう。

あと意見を下さるかた。

あなたに感謝を。

それでは六でした。

第六話 価値（前書き）

急ぎすぎ感が否めません。

どうしたものか……

他の方々の作品を拝見してやっぱり自分はまだまだだと反省。
もっと努力します。

では、そうぞ。

第六話 価値

空気が重い。

離れの内部は現在なんとも言えない微妙な沈黙の空気に支配されていた。志貴としては何でこんな目にあわなければならぬのかと内心涙目だったのだが、それは朔にしても似たような状況だった。

それはそうだろう。自分が世話に（？）なっている相手の子供が、いくら敷地内とはいえ自分の住処に不法侵入しているのである。それが今まで交友のある人物だったら、このような空気にはならなかっただろうが、第一前提朔にそのような存在はいない。得てして指南役である黄理、もしくは使用人の女、それが黄理の相談役である翁ぐらいで、それも個人的な友好関係とは程遠いような関係だ。彼らの内心を知らない朔としてはそれぐらいの僅かで細い関係でしかない。そしてそれ以外の人物と朔は会話を交わさない。だからこの離れにやってくるのは三名のみに限定されていた。

はずなのだが、なぜか志貴がいる。そもそも志貴とはいままで接触も無い。だというのである。現に志貴は離れにいて、目の前で正座をしている。

とりあえず戸惑っている、というかひたすら答えを自問自答し続けている朔、そして志貴は互いになぜか正座状態である。

この微妙な空気がそうさせているのかどうか、志貴としては本来の目的である朔本人がいるのだから速く何かしら話をするべきなのだ、なかなか切り出せない。

朔は朔でひたすらに考え、目の前にいる人物が一体何が目的なのかと観察している。だったら聞けばいいのでは、と思うかもしれないが今まで興味はあったが近づくことのなかった人物が急接近して

きたので、やはり朔としても戸惑っていた。

そして朔の観察をどう間違ったのか、志貴は睨まれたと勘違い、結果漏らしかけるといふある意味馬鹿らしいような状況が完成していた。

つまりめっちゃ気まずい。ただそれだけである。

互いに緊張しているという前提で見る光景はお見合い会場の二人だと見ようとさえ思えば見え、ない。全然見えない。残念ながら、何が残念なのかも分からないが兎にも角にも見えなかった。

しかしこのままではどうしようもない、と考えを導いた朔は声をかける。

ただ、なんて話しかければいいのだろう。そもそもなんて呼ぶべきか。

呼び捨てはない。相手は当主のご子息。それに対しこちらは預けられている立場の人間である。志貴のほうか立場としては上だ。ならば他の者と同じように志貴様、と呼ぶべきだろうか。

それが妥当のような気がした朔はとりあえず、

「志貴様」

そう話しかけてみた。

ビクつかれた。

空気は変わらない。

志貴としては話しかけられたのは有り難かったが、なんだろうか、里にいる他の子（自分も含め）とは全く違う雰囲気を持つ朔に正直どのように接すればいいのか掴みかねていた所でのことだった。

その声は静謐で落ち着き払い、かつなんとも感情のない無機質な声音だった。

いきなり話しかけられ、少しばかりチワワ並みの小刻みな震えを起こしてしまった志貴である。軽くちびつた。

やっべちびつた、と軽く自己嫌悪しながら志貴は目の前で自分と同じように正座している朔を見た。

朔は話を聞くところ年上。だからだろう背が高い。子供は年齢でだいぶ肉体の成長の差が現われやすいが、志貴と朔は頭ひとつ分以上差がある。おそらく里の同年代の子らと比べて最も高いのではないだろうか。体つきもよく、訓練用として使われる動きやすい服からは筋肉の盛り上がりが薄っすらと確認できる。それもただ筋肉を搭載したものではなく、引き絞られ引き締められた肉体だ。

さすが自分の父の教えを受けている。おそらく朔は次世代を担う子供たちの中で最も当主の座に近い成長を見せている。それは自分

たちと比べて作り上げられた身体の違いや、志貴が目撃する訓練の密度や質などから考えた結果である。

それがなんだか悔しかったが、それも当然かと漠然に思った。なんて言ったって自分の父が鍛えているのである。そうでなければ父が教える意味がないだろう。

次に顔つきだが、やたらと目つきが鋭い。そのくせに瞳は茫洋としていてどこを見ているか把握できない。今でも本当に自分を見ているのだろうか。視線が志貴に向けられているだろうかその判断が出来ない。本当にこの相手は自分と同じような子供だろうか。見かけからも幼さが見られず、少年と言うよりも大人のような顔つきに見える。

そして、志貴にはそれがなぜだか終ぞ分からなかったが。

志貴にはその風貌がどこか自分の父と似ていると思った。

「志貴様。なぜここに」

気付けば目の前で朔がこちらに言葉を投げかけている。これには答えなければならぬだろう。だって忍び込んだのは自分だし。

でも何を言う？

そもそもこの離れに侵入したのは志貴の衝動的なもので計画なんて全くなかった。しかも侵入した理由は「朔が一体どんな人物か知る」というものだ。それを「君のことが知りたかったから」と馬鹿正直に言えるほど、志貴は頭が悪くは無かったし、人並みの羞恥心も持っていた。

ただそれをただ志貴の理由と行動のみで考えてみると、まるで志貴が朔を恋い慕ったから故の行動のように見える。恋する人は大よそ想像では飽き足らないものだが、それが暴走することも有り得る。しかし今回はそもそもそんな理由じゃないし、志貴が抱いたのはそんな感情でもない。また志貴はまだそんな甘ったるい感情を知らなかった。

だいたい二人は男の子同士。そんな事は無い。ないったらない。ないんだってば。

しかしなんて答えようか。子供ながらに考えて悩み脳内が熱を持ちスパークするんじゃないかと自分を褒めたくなるほど考えた結果、志貴は、

「……………」

だんまりした。

いやいやちょっと待てよ僕。

志貴はかなり焦り始めている内心に困惑しながら自分の声の無い返事にくらくらし始めた。そもそも黙ることを返事とは言わない。

しかし焦れば焦るほど志貴は口元を固く結んだまま縮こまるように俯く。そしてこんなことをして一体何がしたいんだ僕はと自分を奮い立たせようとするが、志貴の身体と意志はそれとは反対の行動しかとろうとしない。

そして某福音の少年のように「動け動け動け動け！」と内心で叫びどろにかして朔に目を合わせようとするが、沈黙が痛くてどうにかなってしまいそうだった。その沈黙を増長させたのは志貴自身である。最早どうしようもない。

朔は何も言わなかった。何も言わずに志貴を見ている。そのどこを視ているのか分からない瞳が今の志貴には辛かった。

ともすれば下を俯く志貴の目には涙が出そうだった。だって何をしてるんだらう。こんなかつこ悪くて、しかも何も出来なくて。

凄く惨めな気分だった。朔に抱いた悔しさや、自分自身に抱いた情けなさとも違う、棟の中心に重い石を入れたような感覚が身体を苦しめる。しかしそれをどうにかする術を志貴は知らなかった。

次第に潤んでぼやける視界。身体は緊張してがちがちに固まっているくせに震えて俯いたまま。怒られているわけではないのに、なぜだか凄くこの時間が怖くなってきた。

だけど。

「志貴様。理由はないのですか」

朔の容赦ない追求にぐらりと意識が揺れた。それに答えられずよ
りいつそう俯く。だって答えられるはずなのになんでこんなに自分
は答えられない。それを考えて、ひたすらに考えて。なるべく目の
前の朔を視界にいれず考えたくも無いのに意識は朔にばかり向かう。

一体沈黙はどれほど流れただろう。生憎時計などない離れに時間を
知る術などない。一分か十分か。結局朔の言葉に答えることのでき
なかつた志貴はひたすらに俯いたままだった。実際はほとんど時間
も経っていないのだが志貴の体感時間はひたすらにおかしくなつて
いた。

するとその時だった。

ぽぷっ。

頭部に何かの感触があった。

よく分からないが、その感触が温かくて、ふと視線を上げてみると

「え？」

朔が志貴の頭を撫でていた。

「なぜ志貴様がここにいたのか知りません」

そういいながらも慣れていないのだろうか、機械的に志貴の頭を撫でて

「ただ」

「今言いたくなければ、また次に言えばいい」

そう言った朔は無表情だった。

声音は相変わらず無機質で温度が無く、鋼のようだ。頭を撫でる手も全く優しくないし。

でも、それは無骨ながらも、まるで父のような。

「……………あ」

そして気付いた。この感触は黄理に、父に似ているのだと。

しばらく撫でられ続けどうにかして落ち着いた志貴は次第にその心地よさに身を委ねていた。それは内心合点がいったからである。

この人は黄理に似ている。だからなぜか気になったのだと。

果たしてそれがあっているのか間違っているかの判別がつくほど、志貴は大人でもない。だが子供心の純粹をそのままに、志貴はなんとなく思った。

「（兄ちゃんってこんな感じかなあ？）」

目の前で何も答えず、こちらを何か驚いた顔で見る志貴。

なぜこのような顔をするのか分からないが、朔はそれを分からないままに志貴の頭を撫でている。なぜ志貴の頭を撫でているのかも、朔には分からない。

何か痛みをこらえるような志貴の姿を見て、自分は何かしただろうかと考えてみた。しかしそれは結局朔には無い答えだった。

ただ、こんなとき黄理はどうするのだろうかと夢想した。彼は志貴の父親である。父というものに関して想うこともない朔ではあるが、黄理が志貴を大切にしていることはわかる。それが自分にはない温度の行方を搜索しても追いつくことも理解することも出来ないことであることはわかっている。だが父という黄理は子である志貴になにをしていただろう。

残念ながら二人が触れ合う姿を朔はほとんど見ない。それはタイミングもあるだろう。自分がそうゆうモノとは無縁なこともあるだ

ろう。だがそれ以上に、朔にはその光景が価値あるものとしては映らなかつた、という自分自身の壊れ具合を再確認する作業にしかならなかつたのだった。

それは尊いのだろう。美しいのだろう。もしかしたら、温かいものなのかもしれない。だが、それを判断する価値観が形作られなかつた朔が、それを判断しようとしても人が持つ情や義はたまた悪や邪に価値が見出せない。

この時。いや、もつと遙か昔、おそらく朔が成長過程のことだ。

特殊な一族のそれ以上に特殊な扱いを受け、事情を持つ朔は壊れてしまったのではない。壊れるとは、得てして形として一応の完成を成していたものが欠損することである。

だが、朔はそれがなかつた。

人が当然として持つ倫理や価値観。それが形として作られることもなく成長していった。

ゆえに。朔は壊れているではない。

徹底的な欠陥がある。

それはただ、それだけのことだった。

兎にも角にも目の前の志貴にどうするべきかと考え、こんなとき黄理ならばどうするのかと考察し、朔の圧倒的に足りない判断材料から吟味した結果、朔がとつた行動は志貴の頭頂部を撫でるといったものだった。

それだけでとりあえず行ってみようと考える朔も朔だが、突然とはいえそれを受け入れている志貴も志貴だった。

しかしこの行為に一体何の意味があるのだろうかと考えた朔だったが、落ち着いた様子で目を細める志貴の姿を見て、これにはそのような効果があるのかと認識した。

「ねえ。あの、ね？朔、さん」

「なに？」

「あの、その、えっと……」

「別に何かあるなら今度でもいい」

「次も来ていいのっ？」

「はい」

「うんっ。(やった!)」

「？」

というやり取りがその後あったとか無かったとか。

七夜朔七歳
なでポ(仮) 体得

第六話 価値（後書き）

この作品の目的のひとつは志貴に兄ちゃんと呼ばせることです。

あと、この作品これでいいのかと疑心暗鬼で進める中、感想を下さる方の声がこんなに励みになるとは……

しかし、これでいいのかなあ？

第七話 骨師 前編（前書き）

まさかの二部構成。

というのも一話に纏めるには長すぎるだろうと判断。構成力不足に頭が痛い。

アリスのチャンピオンを聞きながら書きました。あれはいい曲です。

では、どうぞ。

あと、またもやオリキャラが登場します。ご注意ください。

第七話 骨師 前編

それは、おそらく運命と呼ばれるものだったのだろう。

男はそのような曖昧なものを信じるほど夢を見るたちではなく、非常に現実主義な男だったはずだ。一族を束ねる棟梁としてそういう生き方を選び、行動してきた。時には身内を切り捨てて一族を永らえさせたこともある。そのようなモノとなるよう自身を戒め、そのように自身も、自覚していた。

だが、この肉体を燃え焦がす激情を抑える術を、男は知らなかった。

ともすれば身体が内側から破裂してしまいそうな感覚。血が煮えたり、骨が熱せられ、肉が震える。それは歓喜の感情。思考はそれに塗りつぶされ、精神はそれに押しつぶされている。このような感覚は知らない。今までに無い、経験もしたことも無い感覚。それが肉体を駆け巡り、そして、それに陶醉しきっている自分がいた。

だからこれは運命なのだろう。

その時、男は一人の少年と出会う。

少年の名は七夜朔。

男が自身の全てを捧げる子供である。

その日、七夜黄理は当主として自身の屋敷の客間に座していた。太陽は天に差し掛かり、少しばかり冷たくなつた空気を温めようとしている。季節はそろそろ秋になるのだろうか。一族が住む森も鮮やかな彩りを見せ始め、生き物はそろそろ冬支度を始めようとしている。

最近では二足歩行のキノコが増え、報告によれば多数の群れが確認されている。秋だからだろうか。どうやら繁殖しているらしい。それが群れを成して回転をしながら浮遊していたということらしいが、生憎と黄理は今だ目撃していないので何ともいえない。被害があるわけでもなく、ただ浮遊しているだけなので今のところは放置している状況である。ただきのこは緑の傘には白い斑点、そして目のあたりがやたらと輝いているらしく、それが群れを成して浮遊している様はオカルトでありながら少々コミカルだ。結界強化をしまくつた影響から生まれた突然変異種の中では特に進化した植物(?)として恐れられていたか。

現在、黄理は客間にてしばらく目を瞑っていた。この時間帯、いつもならば朔の訓練時間である。早朝から始まり昼となって天上に太陽が昇るまで行われる訓練は、訓練と言う大義名分を使った朔とのふれあいタイムである。その時間だけは黄理が朔の面倒の一切を見ており、他のことは後回しにすることが一族の暗黙の了解だったりする。

しかし今日はそれを行なっていない。と言うのも黄理に客が来るからである。

七夜は退魔組織を抜け出してから人里離れ閉鎖された空間で生きているが、それでも外部との繋がりはある程度存在している。それは情報の交換であったり資源の回収であったりと、いくら一族が励んでも足りないものは多い。ゆえに外部との繋がりは切っても切れないのだった。

そして今回訪れるものは七夜に於いても重要な存在で、蔑ろにすることの出来ない相手である。七夜とのつながりも長く、黄理の先

代から交流が行われているため黄理が相手をしなければならぬ。ゆえに黄理は今日ばかりは朔の相手が出来ず、泣く泣く訓練の中止を申し立てたのだが。

「翁め……」

その一言にありつただけの罵詈雑言怨念憎悪を込めて呟くが、果たしてそれは届くはずも無い言葉であった。

訓練を中止したは言いものの、それでは朔はどうするのかと云うちょっとした問題が起こったのだが、それを解決したのが七夜のご意見番にして黄理の相談役でもある翁である。

黄理が朔の相手を出来ないと決まると、朔の座学教授として名乗りを上げたのだ。

朔には座学をあまり行わせていない。黄理としてはそういうものは実戦で学ぶことで必要なものは自然と身につく。興味を覚えれば自分で調べ研究するだろうと考えていた黄理は朔に対し座学をやつてこなかった。

それに待ったをかけたのが翁である。

確かに実戦から覚えることもあるだろうが知識は必要である。知識を学んで備えを知れば選択の範囲も広がり、敵の対応にも役に立つ。それを蔑ろにしてはならない。

大体その考え方は黄理を対象に前提とさせた話である。人体をどれだけ巧く停止させるかを探求していた黄理は興味の幅は狭いが、それなりの武術などには興味を覚えていた。しかしそのように活発的な七夜は稀であり、黄理にのみ限定したことであった。だから前提からしていかなものか、とそう言い争って長いが、今回黄理が相手を出来ないということに翁が名乗りを上げたのである。

朔はほとんどを黄理との組み手で費やし座学をほとんど行っていない。それに対して危惧を抱いた翁は朔の世話を行う女性と共謀することによって今回の運びとなったのである。

事実今日黄理は朔と会っていない。訓練は無いが顔を合わすぐら
いは構わないだろうと来客が来る時間前に思った黄理は朔がいるは
ずの離れにむかったのだが、

「おや。御館様」

なぜか翁がいた。

翁は畳に座り茶を啜っていた。正座で湯飲みを傾けるその姿はい
つそ優雅と言える。だが離れにはなぜか朔の姿が見えない。それに
疑問を抱いた黄理は朔の居場所を聞いてみたのだが、

「さあ？ 私も存じませぬなあ。ご自分でお探しになったらいかが
ですか？」

なにやら好々爺の顔に人を食ったような色を混じらせてのたまっ
たのである。

それを聞いて黄理確信。

こいつ会わず気ねえ。

だいたいこの時間帯に翁がここにいるのがおかしい。翁は当主の
補佐を任された人材で、今の時間は来客を出迎えているはずである。
里は結界を張らせていて普通に危ない。なので来客には案内役が必
要である。ただでさえ広く雄大な森で、突然変異種やら植物に襲わ
れたら堪ったものではない。そしてその案内役には翁を指名してい
たのだが、

「おやこんな時間でしたなあ。私もついっかり和んでしまいまし
た」

なんか翁は目の前にいる。

案内役は今森のルートにいるはずである。しかし翁が離れにいるということは、おそらく案内は他のものに任せたのだろう。でなければこんな落ち着いて茶を飲んではいない。しかしそれはなぜだ。なぜそのようなことを、と考えた結果、翁が何かしら謀をしていると導き出したのである。

では朔はどこだ、と考えた黄理は翁なんかにはわき目も振らず朔がいそうな所に手当たりしだい出向いたのだが。

「おや。御館様」

「これまた奇遇ですな御館様」

「そろそろお時間ではないですか？御館様」

そのことごとくに翁がいた。

離れ、母屋、鍛錬場、はたまた確立は少ないが広場。片っ端に探してみたものの翁としか会わない。朔には会わないし志貴もなぜかいない。

そういえば近頃になって志貴が朔となぜかしらいる。それはいままではなかったことで、朔が拒絶もしていないことから、それまで顔馴染み以下の関係でしかなかった志貴がどうやって朔に近づいたのかと思いはしたが、結果としては良いことである。

未だ成功もしていない『朔の黄理父さんは発言イベント計画』には大きな足がかりであると言えるだろう。志貴の父としては嬉しいことである。ただその自分に朔がそのような感情を抱いてないと感じている黄理としては残念である。実際自分よりも先に朔と心理的距離を縮めた志貴に少しばかりの嫉妬心を抱いたとか抱かなかったとか。兎に角今後も朔との仲をよくするのは黄理的最重要事項である。

その朔になぜだか会わせないように動いている翁は黄理からすれば大変うざい。

先代から七夜のために尽力する翁の存在は一族にとつても黄理個人にとつても欠かすことの出来ない存在である。その知識、経験、修羅場を幾度と無く超え、死線を幾つも潜り抜けた胆力。得がたい人材だと黄理は思っている。

が、こればかりはさすがにない。

彼が貴重な存在だとか欠かすことのできない人材だとか、そんなこと一切関係なく黄理は思わず本気の殺気を翁に叩き込んだ。退魔から退いたとはいえ、鬼神として今もお恐れられている男が放つ殺気は、胆無き者が触れればあっけなく気がやられ、動物は本能のままに逃げ出す。それを翁に叩き込んだのである。黄理実に大人気ない。

しかし翁もさる者。そんなの全く関係ないと涼しい表情で受け流した。しかも若干鼻で笑った。

なんだこいつはと思つた黄理は臨戦態勢に突入しようとしたが、来客の時間になってしまい、有耶無耶になってしまったのである。ゆえに現在黄理は少しばかり朔成分が足りていない状況である。朔成分つてなんだ。

客間で見かけ泰然としているものの、少しばかり落ち着きが無い果たしてどうしたものか、むしろ翁どうしてくれようかと考えを巡らせていると、襖の向こうから人の気配が近づいてきた。

「御館様。刀崎様です」

襖の向こうには翁がいた。あいつめえ、と内心思つたりしたがさすがに客が来ているのに怒気は発しない。そうして襖の向こうから男が現われた。

男は、妖怪のような老人だった。

座布団に座る黄理からすればそびえるような高さの身長。2メー

トルを優に越える身長で、着ているのは擦り切れた着物でよくよく見れば、筋骨隆々な肉体をしていたが、着物から覗く手足が不自然なほどに長く不気味な印象を与える。

更に特筆すべきはその顔だろうか。深い皺に豊かに蓄えられた白髪と白髭。それだけ見ればただの老人に見えなくも無いだろう。だが、そのギョロリと大きすぎる眼が無ければの話だが。その風貌から黄理には伝承に残る妖怪爺に見えて仕方ない。

「邪魔するぞい、糞餓鬼」

妖怪は合わさりあつた金属のような声を軋ませ、不遜に備え付けられた座布団によつこらせ、と声を上げ座した。

「お前と会つのはいつ振りだ糞餓鬼」

「さてな。もう覚えていない」

「全く。お前らが退魔業から離れたと聞いたときは驚いたもんだ。

混血からは鬼神と呼ばれた男の突然の引退。冗談にしては呆れたもんだ。つたく、お前は何様だ」

「それこそ分からん。それより梟。来訪とはどうした。早々に用件を話せ」

「うるせえこの糞餓鬼が。久しぶり交流を楽しむことも知らんのか」

そういて妖怪、刀崎梟は快活に笑つた。

刀崎。

混血の宗主遠野の分家のひとつ。

そして刀崎梟は刀崎の棟梁である。

混血と混血の暗殺を担う退魔の一族だった七夜が交友を結んでいるのは少しばかりわけがある。

混血は人と魔が交じり合つた者のことで、それは超越者であつたり幻想種であつたりと種は多々いるが、日本において混血とは鬼種

と交じり合ったものを指す。そしてその混血を纏め率いる立場にいるのが遠野と呼ばれる混血の宗主たる家である。

その宗主である遠野の当主はある特別な務めが存在する。それは反転した者の処刑または処罰である。そのため混血は退魔とは時には協力関係を結び、時には天敵となる存在なのである。

その一例が今黄理の目の前にいる老人、梟である。

刀崎と七夜は協定が結ばれており、黄理の先代から交流が行われている。それは七夜という武装集団と刀崎の相性が悪くなかったからだ。

刀崎は骨師と呼ばれる鍛冶師の一族である。武装を造り、刀を鍛える刀崎と暗殺に武器を用いる七夜は売り手と買い手という関係が昔に生まれ、そのおかげで協定が結ばれた。

「お前、変わったなあ。機械だった糞餓鬼はどこに消えた」

「……消えたわけではない。ただ、他の行き方を見つけただけだ」

「はっ。今のお前は詰まらん」

人を馬鹿にするような笑みを浮かべながら、いつの間にか入れられた茶を啜る梟は一拍おいて、

「どうも遠野に動きがある」

と言った。

「対象が自分よりも強い存在ならばどうしますか？では志貴様？」

「ん〜っと。一度退いてから倒せる準備をする？」

「それもひとつの手で御座います。しかしそれは七夜としては正しくありません」

「そうなの？」

「それで御座います。では朔様？朔様はどうしますか？」

「殺す」

朔は臆面無く、瞬時にそう答えた。

そこは里にあるこじんまりとした平屋である。当主の屋敷からは少し離れた場所にあるそこでは現在、朔そして朔についてきた志貴への座学教授が行われていた。

先生役は翁。長机に並んで座る朔と志貴を相手に和やかな雰囲気です座学を進ませている。生徒役の一人である志貴はなんだか楽しそうにそわそわとしながらこの時間を楽しんでいるようだ。

それに対し朔であるが、こちらは微動だに動かず、楽しいのかつまらないのかも分からない無表情。その茫洋な瞳は果たして翁を見ているのだろうか検討もつかない。

今日は朔の訓練が行われなかったため、翁が訓練の時間を使って座学を教え込んでいた。そのために朔の世話を行う方と相談し、来客のある今日に計画を決行。そして黄理の行動を先回りすることで今回の実現と相成ったのである。

朔は才のある子供で、子供の中では里一番の成長を見せており、その成長速度は黄理が瞠目するほどのもの。だがいかんせん戦闘訓練ばかりである。これはいかんだろうと前々から翁は危惧していた。何者にも座学は必要だ。ついては思考力を備え、戦闘での思考停止を減少させ、生きる確立をあげる七夜にとっても欠かすことの出来ないものである。だが黄理が如何せん戦闘訓練を重視するばかり朔には座学が全く行われていなかった。確かに実戦でのみ得られることもあるという黄理の言も分かる。知っている事と分かっている事の差だ。事前に知識として得たものが実戦に於いて通用しないことなどごまんとある。実戦でしか得られないことがあることもまた事

実。だが、それでも知識は身を救う。それが長年七夜として生きた男の言である。

そついう訳で黄理から朔を一時的に切り離すことで座学を行い始めたのだが。

「朔様……。確かに結果的にはそうではありますが……」

「やることは変わらない。殺す。相手が強くても殺すことに変わらない」

いかんせんこの様である。

黄理の訓練の賜物かはたまた影響か、朔は非常に極端な思考を持っていた。戦闘での問題では七夜として相応しい答えを持っているが、それもまた非常に極端的である。

曰く、殺す。それだけ。

それが戦闘における座学で朔が持ちえるたった一つの答えだった。それにいよいよ焦りを感じ始めた翁は志貴にも問題を振るい、選択の幅を広めようとするのだがどうにも功をそうしていない。志貴の答えを全く聞いていないとは思えないが、歯牙にかけていない様子。志貴は志貴で朔にかつこよさを見出しているらしく、朔が答えるたび瞳をきらきらと輝かせて尊敬の眼差しを向けている。どうしようもない。

だからと言ってここで諦めるのは翁に在らず。これぐらいの困難幾度となく超えてきた。

「まあ、実戦はこれぐらいにしておいて、次いでは七夜が持つ魔眼についてお教えしましょう」

とりあえず切り口を変え、攻めを変化させてみた。

七夜の一族は超能力を保持している。七夜は本来一代限りの超能力を近親相姦によって色濃く継承し、退魔としての活動を可能とさ

せた一族であり、一族の人間は無制限で超能力を保持している可能性が高い。

そして、七夜が保持し、望まれ、多くいるのが浄眼と呼ばれる魔眼の一種である。

それは魔術師などが行使する一工程の魔術行使ではなく、本来から備わっている能力である。目としての機能と認識能力の向上によって備わった視界は通常では視えないものが見えるもので、七夜の浄眼は本来見えないものを視るといふ能力を期待されたものだ。しかし、もちろんそれが継承されないものもいる。

「七夜の魔眼は見えないものを視る能力です。しかしながら一族の人間全てが同じものを見るといふわけではありません。私のように継承していない者もいれば、御館様のように人間の思念を視れる方もおられます」

翁は魔眼を保持していなかった。それに気付いたのは早く志貴と同じ頃のことだった。そんなの関係ねえ、と叫んで敵陣に突っ込んだ記憶が懐かしい。

「思念って何なの？」

志貴が不思議そうに首を傾げた。

「思念とは思っていることで御座います。人間が内で考えていること、それが思念です。普通それは視えないものですが御館様は視えます。この能力は浄眼と呼ぶには余りに弱いもので御座いますが、御館様はこれを用いることで多くの暗殺を完遂しております」

「どうしてなの？」

「志貴様は気配の消し方を習いましたか？人は気配を隠せても、思念は隠せないものなのです。ゆえにそれを辿ることで隠れたものさ

えも見つけ出し暗殺されたのです」

「へええ、お父さんすごい！」

志貴が父である黄理の株を上げているが、これを知った黄理がほくそ笑む姿が思い浮かぶ。しかしながら朔は反応もしていない。こつやつて他人から黄理の評価を聞くことで朔の反応も変わるのではと少し考えてのことであつたが、それは失敗したらしい。少し無念だがここで終わつてはならないだろうと話を振る。

「しかし、朔様は御館様に聞くとこころ魔眼は未だ発現されていないとか」

「はい」

こつやつて素直に肯定する様は同年代の子供たちと変わらないのだが、無表情で頷くのは少しばかり怖い。

「ふむ……。私は魔眼を持っていないので何とも言えませんが、どうですか？ 普段不可思議なものが視えるということはありますか？」

「ない」

「ふつむ……。こればかりはその人のものですからなあ。外部からの影響から発現することもあると聞きますし、これから焦らずに待つのがよろしいかと思われまますよ」

ただそれがいつになるかは誰にも、その人にも分からないが。教授を進めようとすると、一族の者が休憩用に茶と菓子を少々持ってきた。時間的にもちよつどいいのでそのまま休むことになった。

妖怪のよう。

「なんだ、梟」

内心苛立ちまぎれに声を突き刺す。しかしそれを受けても梟の笑い声は止まらなかった。

「ひひひ……。ああ、ああ！笑った。笑ったぞ黄理。久しぶりに面白かったぞ」

「……」

「糞餓鬼。さっき変わったつつつたが、あれ訂正するぞ」

「糞餓鬼、お前全く変わってないな」

「なに……」

ぴしり、と黄理は固まった。

「機械じゃないなんていつて悪かったなあ。お前は変わらん。変わるはずがない。人間がそんな簡単に変わるはずがねえんだよ。俺らの原始は動かない。変わるはずがねえのさよお」

そういつて、梟は未だ愉快そうにくつくつと笑う。

しかし黄理にはそれが受け入れられない。朔を預かり、志貴を授かってから黄理は変わった。憑き物が落ちた黄理は自他共に認めるような変化があった。それはただ人を殺めるだけの機械が始めて温度を得たのである。

それを変わっていないと、変わるはずがと、目の前の妖怪は言う。

そして、今の黄理にその言葉は許せるものではなかった。

「訂正しろ梟」

若干の殺気を込め梟に言う。それはいつでもお前を殺せるという黄理の自信だった。そして黄理は事実目の前の妖怪を殺そうと思えばいつでも殺せる。梟自身は戦闘は可能としているが刀崎の生業が戦闘向きではないのであまり戦闘を行わない。ゆえに殺し合いの場では不利。

だと言うのに、妖怪は、刀崎は、梟は、侵しそうに笑う。

「何だ。気付いてないのかお前」

それさえも可笑しそうに、

「だってお前、殺人機械の顔になってるぜ」

そう言った。

それは、黄理に衝撃を与えるには充分なものだった。殺人機械？殺人機械？

誰が？俺が？

そうして黄理は自らの顔に触れた。

硬く、機械のように冷たい無表情がそこにはあった。

「ひひひ……。全く、わからねえ野郎だ。詰まらんヤツだと思えば、いつの間にかいつものお前だ。俺が知っている糞餓鬼だ」

そうして笑い疲れたのか、茶を飲んで梟は笑いを収めた。

しかし、その言葉が黄理にどれだけ突き刺さったのか、梟は理解して言っているのだから質が悪いと言える。

昔から梟はこのような男だった。変わらないと言えばこの男も変わらない。

先代当主に付き従い、始めて出会ったときもこの男は黄理を糞餓鬼とのたまい蔑ろにしていたが、それは今でも変わらない。そう言えばその頃から梟は刀崎の棟梁だったはず。一体年齢はどれほどなのだろう。不老と聞いても案外納得しそうな自分がいることに黄理は気づき、少しばかり口元に笑みが浮かんだ。いつの間にか動揺は消えている。消えていくだろう。

「へ、また詰まんねえ奴に戻りやがって。詰まんねえ糞餓鬼は嫌いだ。俺は帰るぞ、こんなわけの分からんとこさつさと退散するに限る。おい糞餓鬼、俺はここにたどり着くまで空を飛ぶキノコを見てるんだぞ。なんだあいつ幻想種か？いつのまにここはテーマパークになってんだから」

キノコの存在を訴える梟の姿がなんだか無性に面白い。それを見て驚愕する梟の姿を想像すると余計におかしい。シユールにも程がある絵だ。

しかし、次の梟の言葉は聞き捨てならなかった。

「そついや、糞餓鬼。お前子供いたな。おい、いつ二人目生んだ？糞餓鬼の子が二人いるとは聞いてなかったぞ。会わせろ」

最近、志貴が身近にすることが多い。それが良いことなのか悪いことなのか朔には判断しかねるが、おそらくあの日、志貴が朔の離れに訪れたときからだろうが、次の日から志貴が離れに訪れることが多くなった。朔が住む場所は当主の屋敷の敷地内であり、朔が住んでいるのはその離れに当たる。志貴はその屋敷の母屋に住んでいるので、当然顔を見ることもあった。だがそこに会話もなく、離れに訪れるような関係でもなかったはずだ。しかし、どうだろう。事実志貴は朔の側において、共に時間を過ごすことが多くなった。

それは離れにいる時だったり、朔が母屋にいる時だったり、はたまた里の内部のどこかだったり、更には訓練の時であったりと多岐にわたる。さすがに朔の訓練に参加することは今の志貴には出来ないが、志貴の言によれば最近頑張っているとのこと。自主訓練も行い始め、今では朔以外の子供のなかで一番強くなったとのこと。何が面白いのか楽しそうに報告する志貴を無感動に見ながら、朔は志貴の話を聞いていた。

そしてそれに伴い朔と志貴にある変化が現われ始めた。それと言うのも、

「兄ちゃん、饅頭おいしいね」

「ああ」

「兄ちゃん饅頭もつと食べる？まだあるよ？」

「いい。いらない」

「そうなの？んじゃ僕が食べていい？」

「ああ」

「こういうことである。なぜだか志貴は朔を兄と呼び始めた。そして敬語の禁止を命じられた。敬語はいいだろう。もともとあまり固執していたわけでもなく、本人からの許可をもらってからあっさりといつも通りの口調に戻した。そもそも曖昧だった口調であったため、あまり意識もしていなかった。」

だが兄とはどういうことだろう。自分と志貴に直接的な血の繋がりはない。本来は従兄弟と言う関係だ。それがたまたま当主に預けられた朔を、志貴が兄と呼ぶのである。肉体的には近い存在なのだろうが、果たして事はそんなに単純なことだろうか、と考えたが、

「なんで兄ちゃん？」

「ええつとねえ。……なんとなく？」

「そう」

「そっだよ」

と言うことらしい。ならば別に何か問題が起こるわけでもないしと朔は放置していた。事実志貴が朔を連れ回すことはあるがそれも多くはない。訓練の邪魔をするわけでもない志貴の存在はそれだけの存在である。あるのだが。

「？ 何、兄ちゃん？」

首を傾げるようにこちらを見る志貴。

その姿は里の子供と同じように幼い。だが自分はどうだろう。朔は考える。自分は他の事はまるで違う。それは見かけとかではなく、存在が別の生物だ。いや、自分は本当に人間か？ 確認する術はなく、認識する事も出来ない。だが、志貴の存在を見て、自分との違いを発見することは可能だろうと考えた朔は志貴から離れることもしないし、思わないようになった。それは他人を見ることで自身の異常性を再確認する作業と同等の行為であったが、朔にはこれ以外

の方法も対応も思いつかなかつた。

「なにもない」

「そうなの？変な兄ちゃん」

おかしそうに笑う志貴。変なのか自分は。変なのだろう自分は。きつとそうなのだろう。そして志貴はなぜ笑うのかも理解できず、朔は静かに湯飲みを口元に運んだ。

現在朔と志貴は里の平屋にて菓子を食していた。本来ならば朔は黄理相手に訓練を行う時間だったのだが、今日は黄理に來客があるらしく訓練は行われなかった。ならば今日は、ということに名乗りを上げた翁の教授により訓練の代わりに座学を行うことになった。朔のみの話だったのだが朔と共にいた志貴が興味を覚え、急遽志貴も参加という訳で今回の運びとなったのだが、今は休憩時間とのこと。教授役の翁、生徒役の朔、そして志貴は使用人が運んできた茶と茶の子を楽しんでいた。と言っても朔は茶の子にはとんど手を伸ばさず茶を飲むばかりだったが。

「しかし朔様、よろしいので？」

一通り落ち着いたのか、茶を啜りながら翁が口を開いた。

「なにが？」

「いえ。座学と今日は言いましたが、朔様は一切何も言わなかったのですから少しばかり心配を」

今日の訓練の中止は昨日に言われたことである。そしてその場で、座学を行うと言われたのだ。翁の言葉で。それに朔はあっさりと従ったのみで、文句も驚きも言わなかった。だが、朔からすればそのようなことはどうでもいいことなのであった。

言われた。それだけで充分だった。それで朔は動く。それしかない。

「別に、問題ないから」

「それで御座いますか……」

朔の言葉を聞く翁の顔の色は一体何なのだろうか。痛ましいような、悔しがるような。それは朔に向けた色なのだろうか。それとも自分に向けた色なのだろうか。

わからない。わからないから考える。

考えてみたが、朔には分からないことだった。

「さてと、そろそろ休憩は終わりにしましょうか」

いつの間にか茶菓子が無くなっていった。そして志貴を見ると頬いっぱい茶菓子を含めていて、二人同時に見られたのが恥ずかしかったのかアワアワと慌てていた。それに翁は微笑み、朔は何で慌てているのだろうと思った。

「それでは座学の続き参りしましょうか」

しかし、もう口の中の茶菓子を飲み込んだのか、志貴が文句を言う。

「ええー。まだ座学やるのお？もう飽きたよ翁あ」

「ふうむ。それは困りましたなあ、座学が終わりましたら御館様に志貴様のことを報告せねばなりませんのに」

そう言ってニヤニヤ笑う翁にふてくされながらも、結局座学を受けられることにする志貴なのだった。やはり父は怖いらしい。

「では、今からは人体の構造を

っ！」

突然のことだった。

強烈な存在感が里を覆っていた。それはまるで殺気を出す黄理のような恐ろしい存在で、ぬかるんだ汚泥のような感触が空気を淀ませる。

それがこの平屋に近づいてくる。

肌が粟立つ。筋肉が収縮し、意識が次第に鮮明になる感覚を朔は覚える。

隣にいるはずの志貴を見る。この存在感に呑まれたのか、震える手は朔の袖を握りしめている。翁を見た。先ほどの好々爺の男は消え去り、その目はひたすらに鋭く近づく存在感を睨みつける。方角は玄関。平屋作りのこの場所からして、それはすぐそこ、左の方向だが、朔は身を襲う不可思議な衝動に身体を固まらせる。

なんだこの衝動は。これは知らない。これは知らない。身体が何かを訴え熱を持つ。精神が何かを叫んでいる。だがこの感情は何だ。

なぜこんなに突き動かされる衝動が湧き上がる。

最早内側は雑音が混じり始めている。視界が定まっていない。だが、その存在感だけはやけに知覚できる。

揺れる、淀む、濁る。

鮮明。鮮麗。鮮烈。

だけど、意識が何かに呑まれていく。それは存在感にはない外部からではない内部から。

それを抑える術を自分は知らない分からない学んでいない習っていない倣っていない。

音が消えた。

だが心臓の鼓動がはつきりと脈打っている。
それは激しい激情を訴えていた。
だがそれが何なのか朔は分からない。

「
誰の声だろう。いや、この声はなんだろう。誰を呼んでいるのだ
ろう。」

身体が震えた。だが何に。精神が咆哮した。だが何に。
意識が消える。

もう限界だった。意識が消えることを抑えるのに？

いや、身体を抑えるのに。

それはなぜ？なぜ身体を抑える？

それは、それは、それは、それは、それは……
それは？

。

暗転。

第七話 骨師 前編（後書き）

前半に引き続き後半に行きますが、それがいつになるかわからない六です。

いままで勢いで書いて衝動書きしていたのですが、少し反省。出来が悪い悪い。

というわけで今回は私なりの真面目で書いてみました。

いかがでしょうか。お気に召しましたか？

これを御読むになった方々で、もしよければ感想または意見を下さったら嬉しくて頑張るかもしれません。

あと、主人公の設定なども掲載したほうがよろしいですか？

なくても問題なくね？ と送ってくださいましたなら掲載はしません。

そこらへんも含んで感想をよろしくお願いします。

それでは六でした。

第八話 骨師 後編（前書き）

リアルが忙しくパソコンの前に座る時間すらもてず、投稿に間が空いてしまいました。

もしかしたらいるかもしれない、私の作品を楽しみにしている方、ごめんなさい。そしてお待ちたせいたしました。

では、ごうぞ。

第八話 骨師 後編

「子供に会いたい？それはなぜだ梟」

「なに、ほんの興味だ。糞餓鬼の子供つつうんだから期待も出来る
つてもんだ」

「興味、だと？」

目前の妖怪の言い分を信じれるほど、黄理は間抜けでも警戒心が強い訳ではなかった。

確かに嘘は言っていない。だが、真実を口にしてしているわけではない。目的を本意に隠している気配がある。それが自分の子供の命を狙っているのならば話は早かった。懐に忍ばせてある黄理の武器を使用し、首を断てばいい。その後面倒なことになるそうだが、子供の命に代えられるものではない。黄理はあの二人のことは大切に思っているし、未だ関係は微妙な朔もいるが自身の子供として守っていきたいと思う。

そのためには容赦なく躊躇いなく感慨なく感情なく殺す。殺してその後の面倒も排して殺す。

まるで殺人機械だと、黄理は思った。そして、それが以前の自分なのだと、認めた。だが、今の自分が機械であるとは、受け入れられない。自分には守る者が、守りたい者がいるから。

しかし、梟を注視する。そのような気配無く、空気も無い。目的は不明だが殺害が目的ではないことは分かる。衣服を見ても武装を隠し持っているようには見えない。いや、この男も混血。人外のものであることは確か。ならば子を殺すのに武装など不要か。

ではどうするか。梟を会わずことでメリットはあるだろうか。七夜との協定上は問題ないだろうが、だからと言って会わず必要性はないだろう。

さて、メリット……？

「梟、まさか。お前は未だに諦めていないのか？」

脳裏に過ぎった僅かな可能性が黄理の口を開かせた。

そして梟は質問に答えることも無く、意地の悪い笑みを浮かべるだけだった。

刀崎。混血の一族、遠野の分家。だがそれ以上に彼らは職人なのだ。鍛冶師として自身の腕で武器を生み出すことを誇りにした者達。そして、それは目の前の男も変わらない。

刀崎梟は鍛冶師として数々の名刀を生み出した男として遠野でも重宝されてきた男だ。だが、それほどの腕を持っていながら梟の望みはシンプルに至上の武器の作成である。そしてそれは彼が刀工職人であることから生み出されるのは刀に限定されている。

至上の刀。極上の真剣。それだけを求め続けた。

この世界には概念武装と呼ばれる反則級の礼装が存在しているが、刀崎梟が求めているのはそれに近い。刀崎には、自身の腕を差し上げる者を見つけた時、その腕の骨を材料に作刀する事を可能とする秘術がある。

そうして生み出された大陸の山絶の剣に似て非なる性質を持っていると聞く。そして梟は自身が生み出す最高の刀をそれとしている。だが、梟は未だにそれを作れていない。その証拠に、梟は五体満足。肉体に欠損は無い。

理由は単純に梟の目に適う使い手がいなかったのだ。梟は刀崎の棟梁として長く刀を鍛え続けた職人気質な男だった。その梟の目にはどれほどの使い手も、稀代の達人と呼ばれる人間すらも価値の無い人間にしかならなかった。

黄理が梟の望みを知っているのは、黄理もかつて彼の篩いにか

られた人間だったからであった。

殺し屋として活躍し始めた頃の話だ。突然現われた梟は黄理を見て、お前じゃない、と言われたのだ。

そして、お前が最後だったんだがなあ、と小さく呟いたのを、黄理は覚えている。

それから幾年経った。最近ではめつきり梟は作刀していないと聞く。

だが、もしまだ梟が自身の望みを諦めていなかったら。

もし、その候補に志貴か朔を見に来たのなら。

そして、そのために七夜の里にやって来たのなら。

「会う必要性は？」

「糞餓鬼の子供と会うのに理由があんのか？」

言葉面だけで考えればその通りのようにも聞こえる。だが、

「俺はこの当主だ。俺の子もある程度の立場がある。そして価値もある。ゆえに子を使えば七夜の危険ということにも繋がりがねない」

「はっ、それこそまさかだろ。そんなことやって俺に何がある」

恐らく見当違いな話を振ってみても、梟の表情は変わらない。意地の悪い笑みが梟の本心を曖昧にさせる。だが、黄理は梟の執念を知っていた。

疑念は疑念を呼び、想定はさらなる想定を生む。そうした結果、黄理が導いた結論は。

「お前と会わせても意味が無いだろう。諦める梟。お前には会わせない」

僅かにでも疑いがあればそれを排除する。臆病者の発想だ。だが、一族を率いる立場、子を守る立場を考えた結果、会わせないという選択に到った。

梟は面白くなさそうに、んだあとお、と息巻いた反応を見せたが、それもあつという間に消えうせた。

「はいはいそうかよ。まったく詰まんねえ奴だ」

ぶちぶちと文句を言いながら、結局そのままその場はお開きとなった。

だが、黄理は知らなかったのだ。

刀崎梟という男の執念深さを。

最早、それが梟の生の全てであることを。

そして疑念を抱くべきだった。

そんな男が黄理の言葉などに止まることがないことを。

それはだから、それだけの話。

刀崎梟は混血の一族として生を受けた男だった。それに関して思うことはない。ただそうなのだろうと受け入れた。刀崎は混血として骨師と呼ばれる鍛冶師の一族だった。梟もその一族に習い鍛冶師

としての道を歩み始めていった。刀崎の鍛冶とは刀工を指す。長い年月をかけて刀を作ることで、自ら刀崎と名乗ったと梟は幼少の頃に聞いた。そして刀崎の鍛冶は全工程を全て一人が請け負う。砂鉄を集め火にて溶かし、鋼を鍛えて形を造り、刃を研いで鋭さを増し、柄に銘を刻んで名を宿し、刀に合わせて鞘を生む。その全ての工程を誰の手も借りずに行い、そうして完成した刀は一切の歪みなく、ただただ武具として美しい。それは作刀者自身を映す心鏡。刀崎が刀崎たる由縁は、詰まるところ彼らが生み出したものが彼らの象徴たる刀だったのだ。

そして彼もまた刀崎が生み出す武具に心奪われた一人だった。幼い頃から刀崎が生み出すものを見てきた。ゆえに彼が一族としての義務ではなく、自らの信念を持って鍛冶師となるのは当然の事だったと言える。

砂鉄を見極め、玉鋼を生み出すのは心が弾んだ。

熱気滾る鋼を鍛え、刀としての原型を作り出すのは歓喜の瞬間だった。

鍛えた刀を水で冷やし、冷たい輝きを放つそれを見るのは心が安らいだ。

刀を研磨し、ひたすらに鋭さと美しさを求める時間は至福の時だった。

柄を生み出し刀と合わせ、その刀の名を刻むのは涙が出るものだった。

そして刀に見合った鞘を作成し、出来た鞘に刀を納めた瞬間は背筋が震えた。

最初の作品など疾うに忘れたが、それでもそこから梟が始まったと考えれば、それは彼の原始であった。

刀鍛冶こそ自身の全てであり、それ以外には何もいらないと生き方を定めてからは早かった。梟は多くの失敗と試行錯誤を重ね、駄

作を生んでは血涙を流し、完成間際に己が力量不足を感じた時など、身体が分解せんばかりの絶叫を上げた。そうして幾重の刀を生み出し、時間が流れた時、梟はいつの間にか刀崎随一の鍛冶師として堂々と棟梁の座についた。それが大よそ梟、が三十を過ぎたばかりの頃だろうか。

棟梁として刀崎を導きながらも鍛冶師として多くの武具を生み出し、時は直ぐに過ぎていった。梟が生み出した武具は宝剣として買われることもあれば、その価値に目をつけられ難癖によって奪われることもあった。

だが、梟は自身が生み出した刀には興味を持たなかった。他の鍛冶師が到底登れない頂にいなからも、常に最高傑作を目指し続け、そして年を取った。年を取ってもなお梟の生み出す刀剣に届く刀崎はおらず、彼は未だに健在であるが、しかし彼は未だ諦めきれていなかった。

至高の刀を。最上の刀を。人がまだ見ぬ、自分の最高傑作を。

それをただ目指し続けた。それだけをただ追ってきた。だというのにそれは未だ叶わず、時間ばかりが過ぎて梟の時間はどんどん短くなってきた。年を取りすぎたのだろう。鍛冶師として刀を生み出すことが減ってきた。それだけのことであったが梟にそれは致命的だった。このままでは望み叶わぬまま死んで行く。それは嫌だった。死ぬことはどうでも良かったが最高傑作を作り出せぬまま死ぬことだけは許せない。決して許されざることだ。

ゆえに梟はある賭けをしていた。

それは誰にでもない、自身による賭けだ。

刀崎は鍛冶師である。そして刀崎は骨師と呼ばれる一族だった。

骨師。

混血の種族たる刀崎は、人間には不可能な領域に到達できる可能

性が秘められている。

刀崎の者は生涯において、これは、という使い手に出会う時、自身の腕を差し出し、その骨でもって刀を生み出す。

そして生み出された刀は鍛冶師として最後にして最高の逸品。大陸に伝わる山絶の剣と似て非なる性質を持つとされる。

梟の狙いはそれだ。

自身の身を捧げることによって生み出される究極の形。最高の武器。刀崎の最終到達点。例えそれが鍛冶師としての人生の終わりであり、再び刀を生み出すことが出来なくなろうとも、それが自信の全てだと信じ、そして終わりが近い梟にはそれだけが縋れる最後の術だった。事実、梟は自身の腕を差し出して刀を鍛える刀崎を幾人も見てきた。そして出来上がった刀は確かにその刀崎の最高傑作と言える輝きを持っていた。だからだろう。梟には確信があった。自分が生み出すものは、刀崎が未だ到達しなかったものであると。

だが、同時に問題があった。

肝心なのは自身の腕を差し上げる者の存在。使い手によって武器は更なる輝きを放つ。ゆえに自身の望むべくもない使い手に差し上げることなど言語道断。

そうして見極め続けた結果、梟の目に適う存在がいなかったのだ。しかし、それでも彼は諦めきれなかった。例え命が尽きようともそれだけは認められない。認めるわけにはいかない。それは自身の否定に他ならない。今までの行き方、自身の理想、信念。全てを裏切ることには他ならない。

それは妄執、あるいは執念と呼ばれる感情だった。

ゆえに、賭けた。

七夜黄理。

殺人機械として混血に恐れられ、混血の天敵として恐れられる殺人鬼。鬼神の名を欲しいままにした男ならあるいは、ただ殺人術を

磨き続けた男ならばあるいは、と思ったのはいつの頃だろう。噂はあつた。強い男がいると。それはかつてあつた男だつた。出会いはあつた。縁もあつた。だから見極めにいった。その結果。

梶は賭けに負けた。

確かに黄理は素晴らしい男だつた。ひたすらに鍛錬し続ける男。己を昇華させ続け、殺し屋としての格は高く、凄まじい。鬼神と呼ばれるだけのことはあつた。

だが、黄理は梶が惹かれる使い手ではなかつた。

殺人機械。

黄理は殺すことに感慨も感情も持たない人間だつた。それはいいだろう。それもひとつの果てだ。だが、黄理の殺意には魅力がなかつた。冷たく、無機質な殺意。絶対的な死のイメージを叩きつける殺意。

梶は古い人間で職人氣質な男だつた。何かが違う。何かが違うと彼の本能が訴えていた。こんなものではない。自身が捧げるのはこれではない。自身が求めているのはこんな人間ではないと、梶は感じた。

だから、梶は負けたのだ。

賭けに。人生に。信念に。理想に。

その賭けから幾年経つただろうか。

梶は刀を鍛えるのを止めた。諦めたのだ。もうじき寿命も終わる。だからそれでもいいだろうと、自分を納得させ、理解させた。これでいい。これでいいはずだと、自身に言い聞かせながら。

若い者を育成させ、棟梁としての最期を選んだのだ。

その証拠に、梶の身体は五体満足。欠けることのない身体。

そうして梟はそのまま終わり、朽ち果てる。

はずだった。

妙な噂を聞いた。

七夜が退魔組織を抜けてから子供を育てている。殺人機械だったあの男が子をもっていることも意外だったが、黄理に子供が二人いるという。

それはおかしいと思った。なぜもう一人いるのだと。

黄理に子供が生まれたから七夜は退魔から身を引いたなどと聞いた時は冗談にしか聞こえなかったが、しかし、その計算だと子供が生まれたのは五年前。

七夜と刀崎が協定を結んで長いが、刀崎でもある程度の情報はあ
る。それによれば黄理が子供を育て始めたのは七年前だという。こ
の違い。この差。この二年という年数は一体どうということなのかと
考えることで梟は憶測した。黄理には子供が二人いる。

憶測の域を出ない稚拙な考えだと思いましたが、考えてみると妙
に気になりもする。何分昔見極めようとし、違和感に見切りをつけ
た男のことだ。違和感がなくなっているのではと、消し炭の理想が
少し揺れはしたが、梟は見極めには自信があつた。だから、それだ
けはあり得ないと。

だから、この確認はただの暇つぶしにすぎない。それだけのこと
でしかないと思いで笑い、刀崎の棟梁として得た情報、遠野に何かし
らの動きが見える、という情報を手土産に、梟は懐かしい七夜の里
に向かったのだ。

そして梟は再び黄理と出会った。随分と顔を合わすのは久しぶつ
た。だが、梟は黄理にあつた違和感が増したと見えた。それは黄理
の変わりようもあるだろう。だがそれ以上に梟の目がフィルターを
かけていたのかも知れない。こいつでは、自分の望みは叶わない。

子供の話を振ってみると。すぐさま反応した。噂と自らの憶測の

正しさが真実めいてきたが、黄理は梟に疑念を抱いていた。その正しさを認めながら、梟は強引な方法を取ることにした。

そして、今。

刀崎梟は、畏れに身を震わせた。

空気を壊死させる、殺意。

質量を持った殺意が生命の動きを許さない。

身体は軋み、肉体が悲鳴を挙げた。

視界はノイズ交じりの砂嵐。

だというのに。その姿だけははっきりと見える。

小さい身体。鋭い目つきに無機質な瞳。身につけるは藍の着流し。

少年。
少年だ。

今しがた平屋の内部から飛び出してきた子供が、姿勢を殊更に低くし、鼻を見ている。無機質なその瞳が鼻を捉えている。

七夜の子供。七夜の人間は近親相姦を繰り返すことよって人の退魔衝動を特出していると聞いた。ならば混血たる鼻に反応するのは当然のことだろうか。

だが、震えが止まらない。

この少年が放つ殺意。

た、まさしく梟の叫び声。それが刀崎梟の身体を震わせ体中を駆け巡る。誰にも見えなかった、見出せなかった。自分の上位者。自分の腕を差し上げる者、自分の全てを捧げる者

！

そうして梟は、遂に見つけ、出会ったのだ。

「お前……。名は？」

震える身体を抑えることも忘れ、梟はそう問わずにはいられなかった。

「！！！！」

最早人の言葉ですらない咆哮。発音器官を解していないような大絶叫が梟を突き抜けた。

爆発。

それを表現するにはそのような安易な言葉の他になかった。

平屋の襖が内側から爆ぜた。事象を短い言葉にすれば、それだけのことだった。

襖は粉微塵に炸裂し、散弾の如くに平屋の前にいた男、梟に襲い掛かった。それを梟は避けることなく、ただ襖を突き抜け眼前に現われた朔を注視した。

その様は虫。

地面に舐めるようにひたすら低い体勢は狡猾に獲物を絡めとり、

肉を貪りつくす蜘蛛の名を借りた蹂躪者に似ていた。

それが、襖を突き破り、地に四足を這わせながら梟の目の前に出た。四足に収束された力が解放を訴え、ぎちぎちと筋肉の引き絞られる音が、不気味に静まる里に沈む。

そう。里は余りに静かだった。ともすれば沈黙のような静寂が里に訪れている。人が生活するうえで音が無いことはありえない。本当の無音とは無のなかにのみ存在している。だが、この沈黙が朔には相応しい。

朔には何も無い。自身のものなど何一つ与えられず、手に入れてこなかった。人間の殺め方などは幾つも学んだが、それは自身に帰る望みから来るものではない。それだけが彼にはあったのだ。だが、殺人術すらも自身が望んで手に入れたものでもない。それ以上に、朔には望むなんて大層なものは入っていなかった。中身のない空。空の殻。

だからだろう。この沈黙こそ朔の居場所に思える。

その茫洋だった瞳は最早何も写してはいない。光すら届かぬ無機質な瞳は、今この時その無機質すらも無くした暗闇が覗く。だといふのに、その目は梟を視ている。

朔には何も無い。それは人格を形成され始める時期に人間との接触がほとんど無かったことに他ならない。離れに放り込まれ、ほつとかれた。周りには使用人しかおらず、それ以外には誰もいない。ただ、遠くに黄理の姿があっただけ。

今でこそ訓練のために里内に姿を現せてはいるが、それ以前、朔が訓練を始める以前、朔は屋敷から足を踏み出したことが無かった。外を知らず、他人を知らず、人を知らずに育った。

だからだろう。朔には人が育まれるはずの感情がこっそり欠けている。感情は他人から与えられ、そして覚えていくもの。しかし、朔にはそれがなかった。ゆえに今となつてはそれが理解できずにい

る。

欠陥の子。持っていない朔はそう呼んでも良い。

だが、だが。

今この時、この瞬間の刹那に於いて。

朔の虚無な内側に朔の知らない衝動が宿った。

いや、宿ったというのは正しくない。それは朔が生まれた時には既に存在していた。無から何も生まれない。ならばそれは最初からあった。

ただそれに誰も気付いていなかった。志貴も、翁も、黄理も、そして朔自身も。

考え直して欲しい。

七夜朔。

七夜の鬼才。鬼神の子。

里の中で朔はそう呼ばれている。七夜当主黄理の手解きを受け、それをこなしあまつさえ黄理を喰らおうとする七歳の子。その才は折り紙つき。里の子では群を抜いて成長し、今となっては大人の者ですら抑えきれない。

以前、朔の組み手の相手を黄理以外の里のものが受け持ったことがある。たまには違う相手と行うことも大事だという翁の説得から行われたそれだったが。

結果から言おう。朔の相手をしたものは完膚なきまでに敗北した。現役として活躍していた七夜が、当時まだ七歳ですらも無かった朔に反応も出来ず、喉を潰され四肢を折られた。

それを知って里の者は言った。

さすが鬼神の子、と。

さすがは黄理の息子だと。

だが、だ。

七夜朔は一体誰の子供だったか。

里の者は故意にか、はたまた自然に忘れていた。

生まれたのは七年前。黄理に育てられ、いささか噛み合っていないが一緒に生活していると見えるかもしれない。その様は子供にどうやって接すればいいのか分からず距離感に戸惑っている親とそれに無関心な子のように見える。

しかし、朔は黄理の実子ではない。

朔は甥なのだ。二人には直接的な血の繋がりはない。

では、朔の父親は一体誰なのか。

かつて、七夜に一人の男がいた。男はその類稀な膂力から爆撃機のような蹂躞を得意とし、好みとしていた。殺めることに愉悦を見出し、そして最期には狂気に吞まれた男。

黄理の兄。

それが朔の本当の父親だった。朔が生まれた直後に妻を殺め、黄理自身の手によって討たれた男だった。

黄理の兄が狂った原因。七夜は近親相姦を重ねることで超能力を保持させたが、それは七夜の者に人が持つ退魔意思を特出させる結

果を生んだ。退魔意思とは自身とは存在そのものが違う魔に対して遠ざけたい、排したい、殺したいという人間が隠し持つ意思である。そして黄理の兄はこの特質を色濃く継承し、その結果殺人の快樂であり、狂気に吞まれた。

はたして、それに気付いていた者はどれだけいたのだろうか。

黄理の兄の子として生まれた朔に才があつたのなら、その男の特質を引き継いでいるなどと。

それは梟の混血に反応したものだつた。

初めてだつた。突き立ちを始めてこの時魔的存在と対面したのだ。だからだろう。だれも気付かなかつた。

朔はこの時、始めて感情を宿した。

殺める意思。殺める意識。殺す気配。殺す正気。
それらが朔のなかに蠢き、解き放たれる。殺気が鳴動し里の空気を軋ませ、生者の正気を奪う。

感情と呼ぶには余りに禍々しく、荒々しく。

だが、それは自身から生まれ出でた純なるモノ。

その存在は濁りなく混ざりの無い朔の感情だつた。

「お前……。名は？」

「……………」

瞬間、朔の姿が掻き消えた。

影すら残さぬ瞬間の移動。七夜の体術。それを梟は目で見ていたのに視認することが出来なかった。霧散するかのように朔が消えた瞬間、梟の老いた身体に警戒音が木霊す。それは長年棟梁として一族を率いてきた混血としての五感の鋭さにあった。

骨が軋むほどの殺気。

肌が粟立つ。

それを梟が回避出来たのはほとんど偶然だった。

ただ、回避できぬと判断した梟は前方へ無様に転がった。朔の位置も分からぬ故の判断だった。

梟が飛び込んだ瞬間、梟がいた空間を何者かが通過した。いや、通過とは言い難い。梟には視認不可能な朔がいつれかの方向からか襲撃をかけたのだ。ただ、それが一体どこから来たのかすら梟には分からない。まさしく瞬間の英断。

だが、一度回避したからといってどうなる。梟には対応できない。梟は混血であるが戦闘を行わないため、そのような手段など取れるはずも無い。しかし、その瞬間にもアレは来ようとする。

再び、気配が近づく。

風を切り裂きながら、空気を突き抜けながら。

依然梟は転がったままの不恰好な状態。動くには体勢が不十分。回避不可能、回避不可能。梟の生存本能が悲鳴をあげる。死が近づく。

だと言うのに、梟は笑んでいる。楽しくて仕方ないと、肉体が、精神が、魂が興奮し歓喜の声を上げている。事実、朔が強大であれ

ばあるほどに梟は子供のように笑うのだ。

「ひひひひ　　っ！いいなあ、お前はいいなあ！」

回避不可能な不可視の朔の攻撃を身を捻ることで何とかやり過ぐす。しかし身につける着物の裾が引き裂かれた。その瞬間に感じた力強さに心が躍る。肉を引き千切られたような感触が梟を襲った。

「何なんだろうなあお前、お前って奴は一体何なんだい！こんな奴い
なかつたぞ、今まで出会わなかつたぞ！だと言うのにお前は、お前
は　　！」

興奮で何を言いたいのかすらも定まっていない。だが、梟はこの
出会いの素晴らしさを教えたくてたまらなくなる。一世紀近く生き
てきた。出会うために、巡り合うためだけに。この瞬間をどれだけ
待ち望んでいたか、憧れていたか、焦がれていたか。伝えたい、教
えたい。この身が張裂けそうな衝動と歓喜の正体を。

襲い掛かる不可視の攻撃。それを何とかしてやり過ぐしていく。
だが回避するたびに、梟の身体はかすり傷を受ける。少しばかり掠
つた指先。紙一重に横切った拳。知覚できぬままにそれらは梟に教
える。僅かに触れた攻撃の感触は人間を一撃で絶命させるものだ。

「ひひひ　　はははははははははは　　！！！」

朔が、眼前に現われた。

高速で移動し、真正面から梟に向かって真つ直ぐ突っ込んでくる。
それは、ほんとうに偶々だった。流星の如くに梟へ襲い掛かる。そ
の時は刹那。朔を視認してから梟に接触するまでの時間は瞬きほど
の時間も与えられず　　。

梟の眼前に、背中が現われた。人外の膂力を秘めた背なの筋肉が盛り上がりを見せる。

男は、黄理は、梟を守るようにして現われたのだ。

その手に握られているは撥のような鉄棍二振り。それは黄理の本来の武器。訓練では使用されない、殴打のために使用されるそれを斬殺に用いる、黄理の真正銘人間を解体する愛器だった。

それを交差させ、目前にいる朔の腕を抑えている。ギリギリと力がぶつかり合い、朔を抑える腕が小刻みに震えていた。

梟は激昂した。それは自分の楽しみを台無しにされた子供の癩癩のような、けたたましい激怒だった。だが、黄理はそれに冷酷に返し、朔を見た。

「朔！おい朔！どうしたっ！！」

あきらかに正気ではない。黄理の言葉に反応を示さず、その空洞の瞳は何も見っていない。黄理の姿だけが瞳の空洞に映っていた。

何よりこの尋常ではない殺気。梟が何やら気配を大きくし始めた時点で動いていた黄理だったからこそ、この瞬間にここに来れた。

そして、超絶な殺気を感じたのだ。七夜の者でもここまで練りきることの出来ない、超越種が発するような暴力めいた殺気。嫌な予感に駆られた黄理が見たのは、梟に襲い掛かる朔の姿だった。

無表情ながら、ひたすらに力を籠めた朔の力みが突如として消えた。

その瞬間だった。

「っ！！」

黄理に真横からの衝撃が襲った。

「つく！」

場所は腋の真下。肋骨に重く衝撃が響いた。

朔が移動していたのは気付いた。瞬間移動めいた動きによって移動した朔に完全に対応してははず。だと言うのに、黄理は朔の攻撃を防ぎきれなかった。

朔は現在武器を持っていない。身につけている藍色の着流しにも、武器になるような細工は施していない。先ほどの一撃は防御した黄理の腕を掻い潜って放たれた拳の殴打。幸い骨に異常はない。ただ衝撃が重く残る。

問題なのは、それを防ぐことが出来なかったという事実だった。

「どうということだ……？」

疑念が黄理の思考を埋め尽くす。

朔は黄理には届いていない。黄理の実力に届いていない。それは毎日行われている組み手でも明らかだ。朔は確かに強い。だが、黄理に一撃を入れるまでには及んでいない。しかし。

「っ
！」

またもや、一撃を喰らった。空気の弾けるような音。しかも今度は防御体勢に移ることもできずに。

真正面に、朔はいた。その爪先が、黄理の腹に突き刺さっていた。固めた筋肉を突き破らんばかりの威力がその爪先にはあった。内臓に少しばかりの痛みが走った。それを無視する形で、再び内臓を狙

う追撃の膝を打ち下ろす形にて握られた撥で迎撃する。

しかし、その疾さのなんたること。目の前で展開される刹那の攻防が梟には見えない。残像すらも残さず、一瞬の過程が省略でもされているかのように疾い。気付けば接触している。

こんな化け物に自分は襲われていたのかと、梟はにたついた猛禽の笑みを漏らした。

黄理の握る撥と膝が打ち合った。

打ち合った瞬間に鈍い音がした。短い撥がしなり、襲い掛かる膝を打った。折れていてもおかしくないそれを、朔の骨は耐え切ったのだ。

そして、その時点でようやくその正体に気付いた。

「まさか、朔　　っ」

今度は側頭。雷光のように放たれた右蹴りを寸でのとこで防ぐ。地面に四肢でもって着地した朔の目は空洞。それが何かを視ている。梟か、それとも　　。明らかに、朔は疾くなっている。それも、黄理がやっと追いつくほどの速度。七夜最強の男が対応できないほどの早さに朔はなろうとしている。

だが、昨日はここまでではなかった。強くなってきたはいたが、ここまで異常ではなかった。ここまで異様ではなかったはず。だが、現実はどうだろうか。追隨なんてものではない。これではまるで

黄理の脳裏に、自身が殺めた兄の、狂い姿が一瞬過ぎった。

「っ！！！！！！！！」

その音は、自動車が追突事故を起こしたようなけたたましさだった。

肉体を地面に這わすことで蓄えられた方向性の無い力。四肢は地面と縫いあわせるように、身体は低く、顔は上げられて。その力が解放される寸前のことだった。

黄理の踵が唸りをあげ、朔の顎を捉えた。

本気の一撃。

常人であれば頭部ごと弾け飛ぶそれを黄理は放った。

そしてそれを喰らってなお、朔は生きている。

叩き飛ばされた朔は意識をその時には失っていたのだろう、受け身を取ることでもできず地面に叩きつけられ勢いのまま転がり、やがて止まった。

あの重圧のような殺気は今では消え去っている。七夜の里に生気が戻った。だが、朔を打ったままの姿で、黄理はしばし苦悶の表情を作り上げた。

余韻が沈黙の里に染みる。

それは、何かの始まりを終えた瞬間でもあった。

だが、その静けさすらも里には許されなかった。

「黄理」

金属の合わさりあった音が、不愉快な感覚を里に滲ませる。

「お前、あれがお前の子供だな……？」

黄理の背中に問いかける鼻。それは質問ではない。最早鼻には確信があった。間違いない、あれは確かに黄理の息子だと。あれ以上に黄理の子供と呼べる存在はいないだろうと。

「なぜ、教えなかった、なんて言わねえぜ。そんなもんだっていい、どうだってよくなった。なぜなら俺は見たのだからなあ」

その表情のなんたる禍々しい。邪悪にさえ見える笑顔を嫌らしくにたつかせ、鼻は言う。

「だからよう、俺は」

「五月蠅い」

冷たい殺気が、鼻を殺す。殺してなどいない。だが温度の無い殺気が鼻の息を止めんばかりに襲い掛かる。

鼻の喉元には鉄の撥。それが突きつけられていた。

お前を殺す。完全な意思表示。

事実黄理は鼻をこの場で殺す。何かしらの原因で交戦状態に入っただかは知らないが、十中八九鼻に原因があるだろう。その証拠は先ほど感じた鼻に肥大した気配。あれは恐らく焙り出し。そうやって七夜を刺激させ、目的の、黄理の息子に出会うつもりだったのだろう。

それを見抜けなかった、考えなかった自身を黄理は恥じる。自分の考えが足りないばかりに、このような状況になった。判断が甘かったと痛感する。

梟は最早殺す。その原因となったこいつを許しはしない。黄理の視線が真っ直ぐに梟を射抜く。返答次第殺す。返答しなくても殺す。嘘も、真さえも許さない、機械の目。

「なんだ？ 気に喰わないってか？」

しかし、梟は笑みを深めるばかり。殺気など風の如く、より深く、より深く邪は色を増す。

「……」

「だんまりってか。はっ、そんなもん、どうだっていい。ああ、糞餓鬼、お前のことなんてもうどうでもいい」

「どうでもいい、だと？」

黄理の殺気が増す。この状況で、この現状においてなお、梟は不遜。

そして梟は笑うのだ。声を上げて、歓喜の声を上げて、黄理など知らぬとばかりに。その姿のなんて邪悪。梟は緩慢な動作で立ち上がり、ギョロリとした眼の狂気にも似た瞳は朔を見ていた。

「俺は見つけたぞ、黄理」

そして梟は言った。

「俺は止まらない。もう止まらない、止まるわけがない。なにせ一世紀だ、それだけ待っていたんだよ糞餓鬼お前にはわからんだろうこの気分がこの幸せがどれほど焦がれていたかお前如きにはわかるは

と。黄理は自分を殺さないという確信が梟にはあった。

黄理は詰まらない。理由はたったそれだけだった。

そして黄理も歩み始めた。志責が不安がっている、少しでも早く側に行つてならなくてはならない。

「梟」

遠ざかる、梟に向かつて、黄理は背中を向けながら言った。それは事実黄理の敗北宣言に近かった。黄理は梟という男に、梟が持つ執念に結局勝てなかったのだ。

「お前には里の出入り禁止を宣告する」

里に金属の合わさりあう、邪悪な哄笑が響いた。

第八話 骨師 後編（後書き）

オリキャラばっかりな六です。

ここから七夜襲撃へと連なり進んでいきます。

出来るだけ早く投稿したいと思いますが、私自身の時間やら構成力の無さやらがマツチして長くなるかもしれません、と言っわりには明日には投稿するやも知れません。

つまりは不定期です。

志貴が主人公なのに、あんま活躍しないなあ。

第九話 後日（前書き）

クオリティの低さが否めません。

書いてて、これはつまらないなあ、と感じ、しかし繋ぎとしては必要なため自分の力の無さを噛み締めながらも書き上げました。

宣告したとおり酷いです。ぐだぐだです短いです。

それでもいいんじゃないの？と思った方。見捨てないでください。

では、どうぞ。

第九話 後日

黄理の屋敷にぽつんと立てられた離れ。人の寄り付くことの少ない、簡素な離れ。家主に似た温度の無い寂しい離れ。そこに朔は寝かすつけられていた。

三日前、あの男 梟という混血との衝突後黄理の本気の一撃を受け、急激な脳震盪を起こされたことで現在朔は意識不明となり、この離れにて深い眠りについている。

その呼吸は死んでいるかのように静かで、耳を澄まさなければ息をしているかどうかすら判断がつかない。布団の僅かばかりに上下する胸の動きだけが朔が生きている証拠に見える。その眠りにつく表情は微動だにせず、精巧な人形を思わせた。

それを志貴は見ていた。その表情は不安や恐れ、はたまた彼自身にも判断つかぬ感情が複雑に絡まりあっている。

豹変した朔。

襖を突き抜け、男に襲い掛かる朔。

朔を止める黄理。

黄理に攻撃を仕掛ける朔。

黄理に吹き飛ばされる朔。

動かなくなる朔。

笑う男。

殺そうと動く黄理。

全てを、志貴は見ていた。

朔が意識を失い、既に三日経った。

隣にいた朔が豹変した時、志貴は声すら上げることできず、その雰囲気にもまれた。今まで感じたもとも無いような重圧を感じ、同時にそれは起こった。

空気が硬くなった。軋むように動かなくなる深海のようなそれは、朔が放つ殺気だった。志貴自身訓練を受けている際、殺気に慣れるよう幾ばくかの殺気を受けた経験がある。だがそれとは比べ物にならない殺気を朔が放った。その時、志貴は自身の死を幻視した。いまだ戦場を知らず、本番さえ行っていない志貴にとって、朔は真実怖い存在となった。息が出来ない。息をしまえば、それが自身の最期だと思つような感覚。

だが、朔が黄理と不可解な事に対峙し、黄理に吹き飛ばされたとき、朔は死んでしまったのではないかと、恐怖を覚えた。

志貴と朔の交友は未だ短く、始まったばかりだ。兄と称しているがその距離感は曖昧なままで、志貴が縮めていても朔は何も反応しない。そればかりか朔からは何もしてこない。志貴としては朔は友達という感覚ではなく、それよりも近い場所にいてほしいと感じている。同じ敷地内に生活しているのもあるだろう、本来の関係が従兄弟ならば朔とはもしかしたら家族になれるのでは、と志貴は思ったのだ。志貴は一人っ子だ。家族といえるのは好きだが、兄弟というものに憧れている部分があった。里の七夜たちを見て、自身と同じ年齢の子供に友達とは違う、歳の近い家族がいるということがひどく羨ましかったのだ。だから朔と交友を深めることで、兄弟のような関係になりたいと、子供ながらに思っていたのだが。

「兄ちゃん……」

志貴は布団でまだ意識覚めない朔を見る。

あきらかに他の子供とは違う存在。黄理に似た、自分の従兄弟。

朔が豹変したあの時、志貴は朔に恐怖を覚えた。尋常ではない殺気。自分とは違う、まるで獣か鬼のような存在に朔は果て、それが

怖くて怖くてたまらなかった。一体どうしたのだろうか、朔に勇気を出して尋ねてみても、また側にいた翁が止めようとしても、朔は無反応でひたすらに前を見て、翁の拘束を振りほどいて飛び出した。

だが、黄理が朔を気絶させたことで志貴はそれを恥じ、朔が死んでしまったのではないかと恐怖した。どれだけ変わっていても朔は朔のほずで、自分が兄と決めた従兄弟なのだ。それを自分が怖がってどうするのかと。

そう思い、思ったけれども、本能は理解を超える。いまでも、ここにいて怖い。もし目が覚めた時、朔は自分の知っている朔ではないのではないか。いや、むしろあれが朔の本当の姿ではないのか。そして、もし、朔が目覚めたとき、あの殺気が自身に向けられるのではないか。

志貴の中は感情がごちゃ混ぜになって、自分自身でも持て余している状況だ。だけど、それをどうすればいいのだろうか。未だ志貴は幼く、人生の経験などほとんど無い。志貴が七夜であるということもあるだろう。特殊な生活を行っているせいもある。外界から隔絶され、人間としての向上や経験を増やせるには向いていない場所だ。回答を導くには志貴はあまりに七夜として馴染みすぎている。

僕は朔を兄と呼んでいいのだろうか。近づいてもいいのだろうか。側にいてもいいのだろうか。そもそも、朔は自分をどう思っているのだろうか。

恐怖や不安が志貴を襲う。それは朔への気持ち揺るがせるには十分なものだった。しかし、志貴は朔から離れることも嫌だった。恐怖さえも超えて、朔と志貴は家族になりたかった。父や母とは違う自身の居所を見つけた。抛り所を欲した。

でも、どうすればいいのかわからない。分らない。分らない。だから、志貴はただ黙って朔を見守り続けた。

震える心を抑え付けながら。

それは、屋敷内部に一瞬の余韻すら響かせること無く、どよめきと怒号によって遮られた。

「どづいっことですか御館様！」

翁は吼えたて、自身が当主として仰ぐ黄理に向かい噛み付いた。

ことは朔と黄理の衝突から三日と経過し、里内部の混乱も抑えられ一族の者が当主の館に召集されたことに始まった。黄理から刀崎との協定を検討しなおすむねが伝えられたまでは良かった。あの日、梟の行動は里に混乱を与え、決して好意的に受け止められるべきものではなかった。そして大人の者は挙って梟の討伐を狙っていた。子は家から出さず、一重には発見されぬ隠密によって確実に梟を仕留める算段を一族はつけていた。結局それは黄理の命によって叶わなかったが、危険分子は排除されるのが世の常だろう。無論それに気付かぬ梟ではないことは知られていたが。

現在梟に襲い掛かり、黄理と衝突した朔は意識を失っており、昨日から未だ起きてこない。黄理が召喚したヤブ医者 of 処置により肉体的な損傷はある程度回復していたが未だ目覚めていない。そして今朔は離れにて安置されているが、それは隔離にも近い状況であることは現在この場に召集された者も承知していた。

朔の豹変。

それが七夜に動揺をもたらした。

常軌を逸した殺気。かつて黄理の兄がそれに近しかったが、朔のあれもそれに近いだろう。正気を失った朔は梟に襲い掛かり、あまつさえ当主である黄理にも襲い掛かったのだ。今までの朔を知る黄理や翁にとってもそれは衝撃を与えるには充分なものだった。更に二人はかつて黄理の兄を粛清した身だ。あの殺気を知らぬほうがかしいだろう。

ゆえに黄理はある決定を下した。

「くどい翁。何と言われようと決定は変わらん。……皆聞いたな。お前たちには

今後七夜朔との接触の一切を禁じる。

以降朔と接触するのは俺を除きその一切を許しはしない。これは提案ではなく最早決まったことだ」

黄理は冷たい表情のままに宣言した。もともと朔と話す人間は極僅か。動揺は広がり、そして反対する物もいた。それが先ほど噛み付いた翁だった。

「しかし御館様。朔さまは未だ十にも届かぬ子。人との関わり無くばどのような影響が出るかわかったものではありません。いくら朔さまが御館様の兄の子とはいえそのような……」

「口を慎め」

瞬間。黄理が発する威圧に屋敷内にいる七夜の全てが呑まれた。

「翁。朔が兄上の子である事実は変わらぬ。俺がどれほど朔に触れ合おうとも、その事実には変わりはない。ならば、朔が持っている殺人衝動を抑えるため、あいつには暫く行動を厳守させ、衝動を抑えるための枷を作る」

それは、ついには朔の為にもなるだろう。彼らは未だ覚えている。黄理の兄の圧倒的な姿、その蹂躪、その狂気を。肉片すら残さずに散っていく生者。亡者ですらない死を幾重にも見せ付けた男を。

だが、だがそれを黄理が言い、認めたことがこの場の空気を変えた。

黄理は志貴や朔に言いはしませんが子煩悩だ。自身の子（と予定の子）のためになりふり構わず行動し、それは七夜の常識と化している。もちろん彼のそんな気持ちは子供には伝わっていないが。

子煩悩な黄理が朔を縛り付け、枷をつける。

それがどれだけ朔を苦しめる結果になるか。それは黄理自身もわかっていて。わかっているが、それ以外の方法がない。あの悲劇、身内殺しを再び起こさせることなど断じてあつてはならない。朔がそれを苦しいと思うような人間ではないことは百も承知だ。なぜなら朔は確実に黄理と同様な存在になるうとしている。ただ殺すだけの殺人鬼に成って果てようとしている。しかも、黄理の殺人機械としての冷たさと、兄の圧倒的な殺人衝動を併せ持っている可能性がある。

それはいかほどの怪物になるのだろうか。

黄理は朔に自分のような人間にはなつてほしくないと願っている。あのような人外にはなつてほしくはない。だが、事実朔はそのような人間になるうとしている。圧倒的な暴力と冷酷な意思を持った鬼になるうとしている。

今の朔、そして三日前のあれはその片鱗だろう。人間味の薄い人

格と、殺気。しかも動きの切れは増して黄理には対処できないほどになるうとしている。

いや、最早化けているのか。人外の鬼に。

ゆえに黄理は精神的に束縛することで、強靱な精神力を朔の身につかせようと考えたのだ。これは親心とは違う、当主として、あるいは保護者としての処置だった。

だが、この時点で、黄理は選択を誤っていた。

結局のところ、黄理もまた七夜の間人だったのだろう。

朔は黄理を目指し、なるうとしているのではない。

それ以外のものが何もなかった。

それだけしか、見えるものがなかったのだ。

ゆえに、他人との接触を禁じ、黄理とのみ関わらせても、朔をよ
りいつそう加速させる結果しか生まなかった。

だからだろう。

この選択があのような結末となったのは。

目が覚める。

見覚えのある天井が目前に広がった。

そして手を握っている感覚に気付く。

視線を辿る。

そこに志貴がいた。

志貴は泣きそうな笑みを浮かべ「おはよう」と呟いた。

それを聞いても何も感じない。何も思わない。

ただ、

目の前にいる子供を見て、

殺す、と精神が吼える。

それを朔はよく分からない。ただ、どうすればいいのかわからず、それを無視し、なんとなく志貴の手を握りしめる。

そして、この解体を促す内側を、朔は悪くないと感じた。

第九話 後日（後書き）

短い。セリフが無い。これはひどい。六です。

必要なことだと自分に言い聞かせながらも、あまりのクオリティの低さに、これってホントに必要なのかと感じています。

ああ、努力が足りない。

番外話 とある女性の一日（前書き）

六です。

十話を越し、いつの間にかユニークが5000を超えている事実が発覚。

まじか、とこぼしてしまいます。

この作品を呼んでくれる皆様に感謝を。

記念と言う形で番外の話を書きました。

このまま本編に突っ走るのも良いと思うのですが、それだけだとちよっと味気ないと思い、日常的な話をひとつ。

あ、ちなみに内容がいつの話しかは設定していません。皆様の頭の中で想像してください。

では、どうぞ。

番外話 とある女性の一日

東の地平から太陽が顔を出し、日差しが里にかかりだす頃に目覚めるのが私の習慣で、それはもうずいぶんと長く続いている。

鶏が鳴くのと同時時刻に起きてしまうのは少し眠い。だがそれも馴れてしまえば早くに起きないほうがもったいないと思い始めた。だって寝ている時間よりも、起きている時間のほうが楽しいことはきつとあるだろう。

起きて先ず私は布団の上へ立ち上がって背伸び、全身の血のめぐりを良くする。こうすることでスッキリとした目覚めとなるらしいと聞いたが、それは本当だろうか。曖昧なことだが、なんとなくこれをやらないと一日が始まらないような気さえしてしまうので、最早日課だ。

数箇所の関節から小気味よい音が小さく鳴って背伸びをやめる。全身に脱力感。だけど、少し身体が温かくなつた気がする。

布団を畳んで押入れの中にしまい、庭先に向かう。木製の屋敷、言うなれば武家屋敷のような造りをした屋敷の中を移動し、縁側へ。私の部屋は屋敷の端にあるので、縁側は近い。

縁側から見える光景は密かに私が好きな場所だ。この屋敷は里の中で一番に高い場所、と言ってもそこまでだが、開けた視界が見える。そこから見えるのは里に点在する屋敷や平屋、その向こうには深い森が広がっている。

東の木々の隙間から太陽が昇り、日差しが里を明るく染めていく。

私は目を細めて暖かくなっていく地と澄んだ空を眺めた。

「今日もいい天気になりそうだ」

くうっ、と再び背伸び。

さて。身支度を済まし、食事の準備を開始しよう。

部屋の中に戻り、寝巻きを着替える。

下着を着けている以外では何も着けていない状態で私は、ふと部屋の中に設置してある姿鏡の前に立った。

女性にしては高い身長。肉付きの少ない身体。そして引き締まった肉体。良く言えばスレンダー、悪く言えば男性的な身体の私が鏡に映る。

その顔つきも色気が無く冷たい印象を受ける。更に目は若干鋭い。ここらへんは私の家族（まだ私は未婚なので夫や子ではない）の血を色濃く受け継いでいるようだ。その顔つきは私の兄様あにさまと似ているような気がする。

兄様は七夜の当主であり、七夜としては最強の座にいる男。そんな人間に似ているのは女性としてどうだろう。出来れば私は義姉様あねさまのような姿に似たかった。

義姉様は兄様と夫婦の契りを交わしたお方で大変女性的なお方だ。朗らかで身体も女性らしい。豊かな胸など見るたびにため息が出る。私とは比べるまでもない。七夜としては別に問題ないのかもしれないが、女性としては少し、いや少々、いやいや結構考えものだ。

内心、なんで見てしまったんだろう、と思いながらさつさと着替えも済ませ、台所場に向かった。

今日の朝餉は昨日の晩に食した川魚が余っているので、これを焼いてほぐす。しかしそれだけでは寂しいので、汁物と漬物を添えて彩りを増そう。あ、あと米も炊かなくてはならない。

身支度を済ませた私は台所場に向かう。

まずは米を炊く。あらかじめ井戸から汲んであつた水で米を研ぎ、そのまま釜の中に。竈に運んだらさつさと炊いてしまう。火をつけるのは面倒だが、それも手馴れたもの。少しばかりの藁に火打石で火種を点ける。僅かな時間で火種がつき、それを竈の下に敷き詰めた藁に投入。そのままでは消えてしまうので火吹き竹を使う。

暫く息を吹き続けていると火が点いたので、更に強く吹いていく。目に見えるほど火が安定してきたのでそのまま少しの時間放置しておく。

七夜の里は人里離れた森の奥にあるので電気が通っていない。なので電化製品が使えない。これは少し面倒かも知れない。生まれた時から七夜にいる私にはあまり関係ないのだが。

「~~~~~」

料理をしているうちにちょっと機嫌がよくなってきたので鼻歌交じりに竈で川魚を焼いていく。昨日採ってきたものだが、まだまだ鮮度はよく、取った直後にしてもあるので味は大丈夫なはずだ。あ、ちゃんと下ごしらえはしたぞ？

焼き加減を確かめながら、汁物を作ったり漬物を小皿に盛ったり。ちなみに私は白味噌が好きなのでいつも白味噌。今日はほうれん草や甘い人参を入れた野菜汁だ。肉は入っていないが野菜のほのかな甘みが絶妙だ。

ま、私だけが食べるわけではないのだが。

用意する食事は二人分。魚は二匹だけ。川魚はこれで終い。この料理を食べるのは私と、私が世話をさせていたお子。いつも無表情で無感想。おいしいともまずいとも言わない。一度試しにとんでもなく苦い食事を一品用意したが、その時も何も言わずに食べ、むしろ作ったのは言いけれど食べられなかった私のもも食べてもらった。反省。

と言うか私の話をちゃんと聞いているのかも怪しい。だからその子においしいと言わせるのが私の密かな目標だ。

そうしているとちょうどいい時間となった。釜から炊き立ての米の香りが漂ってくる。魚もいい感じなのでそろそろだろう。釜の蓋を除くと蒸気がふわっと登ってきた。それもまた良い匂い。お米の甘い匂いが食欲をそそる。だからだろう。

お腹から音がなった。

くう、と小さな音。

恥ずかしくて思わず辺りを見渡す。ちょうどよく人もいなかったのてちよつと安心。これが義姉様に見つかったら微笑みながら「早く食べましようねえ」と言うに違いない。少し顔が熱い。

落ち着いたところで、米、川魚、野菜汁に漬物を盛って朝餉を完成させる。今日の朝餉もおいしそうに出来上がっている。密かに料理を得意としている私としてもまあまあな出来ではないだろうか。見た目は少なめにも見えるが、朝の食事なのだからそこまで大目でもきつと食べられないだろう。

それらを大き目の盆に二人分乗せる。では運ぼう。台所場を抜け、目的地を目指す。玄関に一度向かって草履を履き、無作法だが足で引き戸を開ける。場所はこの屋敷の敷地内にある離れ。小さい建物だ。この屋敷が大きいからか余計にそう思う。

今、時刻で言うところの六時前ぐらいだろうか。いつも台所場から私が立ち去った後で義姉様が朝餉の準備を始める。

どうせなら一緒に調理すればいいと思われるかもしれないが、私早起きすぎるのと義姉様が朝に弱いので合わせることが出来ない。決して義姉様のマイペースに巻き込まれるのが嫌だとかそんなわけではない。

離れには縁側が小さいながらもついているので、そこに越し掛け一度盆を置いておく。

「失礼します」

襖から声をかけるが返事はない。これはいつものことだ。なのでそのまま襖を開く。

するとそこには壁に寄りかかって座る子、朔がいた。

目つきは鋭いのに茫洋な瞳はどこを向いているのだろう。天井あ

なりに顔を向けているが果たして天井を見ているのだろうか。私には判断できない。

布団はしまわれているようで畳みの上には何も無い。朔は大変早起きらしく、私が朔を起こすなどほとんどなかった。なので朔の寝顔などレア中のレアだ。

「朔さま、朝餉をお持ちしました」

話しかけても朔は無言。しかし無反応ではない。いつも食事を取る自身の定位置へと移動する。

その動きの何と滑らかなこと。重心がどの位置にあるか把握できない。私も七夜として幼少から訓練を受けてきた身だがこんな何気ない動きの中で訓練の成果、朔の才が見えるのだから凄いことだと思う。

縁側に置いてあった朝餉を室内に入れ配膳。朔が座るのは部屋の中心。朔の目の前に一人分を配膳し、その対面にもう一人分、私の分を配膳した。

「では食しましょう」

配り終わり、食事を開始する。ただ私はまず手をつけない。目の前で朔が食事を口元に運んでいく。それはほぐされた魚。食べやすいようにあらかじめほぐしておき、絶妙な塩加減と焼き加減をした今日の会心の朝餉。それを食べ、朔は反応するのだろうか。

「……」

個人的な目標で内心緊張する。ただそれを悟らせるのは愚の極み。見かけは装い、朔を見守り続ける。ただ、悟らせたとしても朔が何

かするとはとても思えないが。

徐々に運ばれていく魚の身。それに合わせ少し開く朔の口元。ただそれだけの事だというのに時間が遅くなっていく。スローな時の中で朔の姿だけがリアル。無表情な朔。淀みの無い動き、そして。

「っ!!」

はむ、と朔が魚を食した。そのまま味わっているようなわけでもなく咀嚼していく。口をもごもごと動かす仕草は無表情ながら子供らしく少し可愛い。

しかし、今は朔が反応をするのが肝心だ。名残惜しい気もするがいったん我慢しよう。結果が肝心で、朔が反応を示すかどうか重要だ。そして朔がおいしいと、その口で言ってくれるだけで、私には充分だ。

そして嚥下。

魚を飲み込み、そして朔は。

美味しいともまずいとも言わず、そのまま食事を進めていった。

「(……わかってた、わかっていたさ)」

密かな挫折感があった。

悔しいがそれを表に出すわけでもなく、二人は無言のまままで食事を進めていった。うちひしがれるのは慣れている。

食事を済ませ、朔が兄様との訓練に向かった後、私は家の家事を行っていた。その時ふと思ったのだ。食器をかたし、洗い物をして、掃除。普段と変わらない、私の時間のことだった。

「（そういえば、もう七年経つのだったな）」

竿に洗い物を干しながら、私はなんとなく思った。

私が朔の世話を行って七年経つ。思えば随分と早い。

兄様が連れてきた時など、生まれたばかりの赤子だった。世話を
する人間がいないと知った私はすぐさま朔の世話係を名乗り出た。
それが長兄の子であることに関係ないと言えば嘘になるだろう。

七夜朔。

私たち三兄妹の長兄の子。生まれた時には親を亡くした子。

長兄は一族の掟を破ったことで名を排されており、その名を呼ん
ではならない。私自身長兄に対し肉親だった感情はない。

長兄は強かった。圧倒的な力量で、単純に言えば暴力で蹂躪する
様を強かったと言うのは少し語弊があるかもしれないが、それ以上
に私はその存在が恐ろしかった。

七夜の者は退魔衝動を色濃く特出させる。そして長兄は通常の七
夜より遙かにそれを継承し、その影響で長兄は本人の気質と交じり

合い殺人に快楽を見出す人間だった。その姿、その在りかたが、私には長兄は魔物に見えた。私たち七夜に存する異物。人間のようなナニカ。私と血をわけはるはずに人間を、私はそう思った。

だから私は長兄からはなるべく離れて生きていた。長兄が死んだ一年前には気がおかしくなっていたため余計に遠ざかっていった。だからだろう、長兄が粛清されたと兄様から聞いた時、私は安堵した。

これには私自身の気質も影響していると言えなくもない。

私は七夜でありながら魔を殺せぬ七夜。色濃い退魔衝動は反転すれば、それだけ魔へ過敏ということだった。

アレが恐ろしい、アレが怖い、アレは嫌、アレは死。

そんな認識が脳髓に叩きつけられ、とてもではないが前線で活躍することは出来なかった。

例え認識を克服しようとしても、本能的、あるいはこの身体、もしくは魂が恐れを抱く。ゆえにだろう。私は魔的なものに排他的だ。もとより私は七夜。それは最早本能に近い気質。

しかし、私は許すことが出来ない。魔的なものがある事も、生きていることも、呼吸をしていることも、地に立っていることすらも。思考の隅に過ぎただけで、私は耐え切れなくなる。

そんな私を七夜は当然のように受け入れた。七夜全てのものが退魔として生きれるわけではない。ゆえに私は七夜として活躍することも、女盛りでありながら誰かと契りを行うこともしなかった。跡継ぎの問題は自分には関係ないことだと、考えていた。

そんな私に変化があったのは、朔の世話を始めた頃。

そもそもなぜ私が朔の世話を名乗り出たのか。

世話をする人間がいなかったこともある。当時の七夜に朔を世話する人間がいなかった。そして死した長兄の子、というものに興味を覚えたのかも知れない。狂気に飲まれた長兄が、手につけなかつた子。ただひとり生かされていた子が朔だった。

もつどのような理由で名乗り出でたのかは正確には覚えていない。だが、一ヶ月経ち、半年が過ぎ、一年を跨ぎ。

朔が目立ったことはなかった。いや、何もなかったといえは嘘になる。

何も無かったということがあった。

離れに放り込まれ、そこで世話を受けていた朔。だが、朔と関わる人間は私を置いて誰もいなかった。朔を連れてきた兄様でさえ離れには近づかず、存在を忘れているのではないかと思えるほど話題にすら上がらなかつた。推論したところ、朔の存在は当時施行令が敷かれていた可能性がでた。ゆえに朔は当時存在していなかつた可能性がある。

ゆえに朔が関わるのは私一人。この里の中で朔は誰にも知らされず、存在していない子。

私が朔の歪みに気付いたのは直ぐだった。

笑わない。泣かない。喋らない。

たった一人で世話を行っていた私だったから分かったのかもしれない。あるいは、側に兄様という殺人機械がいたからかもしれない。

子は訴える。生きるために訴え、そして生かされる。それは七夜の里の赤子も例外ではない。生まれえたばかりの子は生きようと反応する。

だが、朔にそれはなかった。

訴えようとしれない。時折どこかを見ているのは知っているが、それはどこだったのかわからない。少なくとも私ではなかった。

そして気付いた。この子は異常だ。

だが、処理とは違うだろうとわかっていた。

異常だ。確かに異常ではあったが、害はない。

ただ、憐れだった。

誰も側にいない子。誰も守ってくれない朔。

そして何も訴えず、ただ在るだけの赤子。

恐らくこの時、私は朔の側にしようと思ったのかもしれない。

七夜ではない七夜の私が、始めて自分から進もうと決めた。

朝になれば起こして食事を共に食べ、昼も夜も同じく。最初の頃は共に風呂にも入っていた。そのような生活がもう七年以上。朔は私をただの使用人としか考えていないだろう。いや、朔の思考の隙間に私がいるのかと不安に思うこともある。

だが私が感じた七年は、朔と共に過ごした七年であると言える。

そう思うと、少しだけそんな自分が誇らしい。

干し終えた洗い物を見渡す。暖かな日差しにあてられたそれらは緩やかな風に踊っている。

その中に一着だけ干された藍色の着流しが、ひときわ軽やかに揺れていた。

「どうすれば朔と食事をとれるのだろうか」

「知りません。そうしたければ、そういえばいいのです」

「つく、それが出来ないからお前に聞いているのだ」

「それこそ知りません。そのようなことを意識したことなどありませんので」

そう言つと目の前で当主、兄様は苦虫を噛み潰したような表情をし、私を睨む。ただそれはお門違いだと直ぐに考えたのだろう、兄様は落ち着きを取り戻したようだ。

昼になると兄様との訓練が終了するので、朔との昼食を済ませた後（もちろん朔に反応はなかった）、母屋の囲炉裏の間で朔の持っている着流しにほつれを見つけた私は裁縫を行っていた。長いこと

家事を行っているので裁縫などお手の物だ。チクチクと裁縫を行っている、その場に兄様が現われた。

「だいたい、今こうしている間に朔に会いに行けばいいのでは？」

「だが……私は朔と何を話せばいいのだろうか」

「（うざいぞ、こいつ）……兄様、別に無理に話さなくてもいいのですよ」

「何？」

ほとんど補修が出来上がっていた時のことだった。ゆえに兄様に視線はほとんど向けず、手元のみを注視する。しかし応答は行っていないので問題はないはずだ。

「何かを話そうとしなくても、共に過ごす時間が多ければそれだけで変わるものもあります」

「なるほど……」

私のそれとない提案を受け、兄様は思案を深め、言葉を止めた。

その思案顔を見て思う。兄様が変わったのは兄様のお子である、志貴が生まれたからだ。それから兄様は憑き物が落ちたように豹変し、その影響で七夜は退魔の生業から離れることとなった。

それはいい。退魔業から抜けた七夜は平穩そのもので、実に穏やかな日々を私自身過ごしている。それを得難いものだと気付いたのは私自身の進歩だろうか。元から事情により前線に出ることの出来なかった私には、あまり関係ないことと思われるかもしれない。だが、七夜の雰囲気が変わってきていると肌で感じている。里に生きて戻らぬ者も在り、日々暗澹と殺人術を磨き続けた七夜とは一変し、実に安穩とし、温もりのある里になりつつある。これは、素晴らしいことだろう。

しかし、懸念するのは朔のこと。

朔はこの七夜が過ごす平穩とは隔絶された場所にいる。朔は人とかかわりをほとんど持っていない。兄様、翁、私、そして最近になってそこに志貴が加わったが、それだけだ。温もりがわからず、温度の有難みがわからない子。それは一体どうしてかと、考えた時、要因が目の前にいる兄様にあるのではないかと思いついた。

「（ただ、それも今更なのかもしれないな……）」

確かに要因かもしれない。だが、それを考え始めたのが最近。動き出すには遅すぎたのだろう。根付いた習慣は拭えず、朔は以前の兄様のような性格になりつつある。

それをわかっていても朔を変えることの出来ない自分が腹立たしい。

……そういえば。

「以前翁と話し合っていたご入浴の件はどうしましたか」
「……」

兄様が固まった。いつだったか朔と一緒に入浴したいと兄様は言っていたが、今ではすっかり話を聞かなくなっていたのを思い出した。

「それが、なあ……」

硬いままに兄様は私に視線を合わせず妙に動揺していた。

「私が提案してもだいたい朔は既に入っている状態がほとんどでな

……」

「それで、本当は？」

「いや……、一度断られてから、全く聞いてもない……」

「（このへたれがっ）」

どんよりとした空気を纏い始めた兄様を無視し、修繕の完成した朔の着流しを離れに持っていく。この時間帯、兄様との訓練が終わり食事を済ませた朔はだいたい離れの中にあることが多い、というかほとんどだ。それは朔自身が用もないのに外出することを理解していないかもしれない。しかしそれ以上に兄様の訓練が厳しいことに尽きるだろう。

兄様はあれでも七夜で一の強さを誇る七夜の当主。その力量は折り紙つきで、七夜の鬼神とは兄様を指す。混血の天敵として恐れられ、前線を離れた今もなおただただ強い。その強かさはほとんどの七夜では対応が出来ないほどのもの、なのだが、それに朔はついていっているとのことだ。しかも、時たま兄様を凌駕しようとさえしていると聞く。

それを聞いて、少し嬉しくなり、そして悲しくなったのはいつの日か。

朔には才があると知り、嬉しくないはずはないだろう。私が朔を今まで育ててきたと考えるのならば、自分の身内が褒められるのはいいことだ。

だが、今の七夜でその訓練が必要なのだろうか。退魔組織から抜け、人里離れた場所に住まう七夜に、必要はあるのだろうか。外敵

から身を守ると考えればいいのかもしれないが、それは大人の仕事であって、朔のような子供には訓練もまだ早いと感じる。

ただでさえ朔は訓練を開始するのが早かった。未だ歩けたばかりの子供に課すには疑問を抱く事態。だが結局兄様の当主としての命令で、朔は訓練を行わされた。

そして兄様の訓練は苛烈。ただの子供が行うにはあまりに厳しい。それに朔は追隨していると言うのだ。

もう七夜は退魔ではないのだ。だからそれだけ鍛えられても、ほとんど意味は無いのではないのかと、私は思い、そして過酷なことをさせている朔が文句を言わずに過ごしていることが、悲しかった。

「おや？」

離れにやってくると、離れの中に朔以外の気配を感じた。襖の中を覗いてみる。堂々とすればいいのかもしれないが、ちょっとした好奇心だ。

……あとで気付いたが、襖を覗いている私の姿はなんと間抜けだったのだろうか。

そして中を覗いてみると、なんとそこには横になって眠りについている志貴と朔がいた。

志貴が朔と距離を縮めたのは最近のことだった。理由は結局わからずじまいだが、朔が誰かと仲を結ぶのは大変いい事だ。ただでさえ人との関わりのない朔に近い人間の有無は微妙なところだろう。私は言うに及ばず、兄様や翁に繋がり的情を感じているのか。

だから志貴の存在は稀有だ。得がたい存在だと思う。従兄弟とい

う関係ではあるが、今まで近づいていったこともなかった。それに歳が近い。ほとんど同じ年同士だ。志貴にはぜひとも朔とより仲良くなつて欲しいと思う。

二人はお互い近づいて眠っている。志貴が近づいているだけかもしれないが、志貴に手が朔の着流しを掴んでいる。その光景は微笑ましく、温かみのある絵だ。

ただその光景は少しばかり私には刺激が強い。

「（おっと、よだが）」

使用人と思われている女性。

クールビューティー。

七夜黄理の妹。

少年嗜好者。

密かに朔を喰つてしまおうと目論んでいる。

七夜黄理。

七夜黄理は『へたれ』の称号を手に入れた。

番外話 とある女性の一日（後書き）

六です。またまたオリキャラです。申し訳ありません。

ただ一言。

朔逃げて。超逃げて。

第十話 蠢動（前書き）

久しぶりの投稿。執筆時間が取れないほど忙しく、だと言うのに月姫のアニメ、漫画を久しぶりに見直し読み直し。そこで色々と齟齬に気付き自己嫌悪な日々を送っていました。

では、どうぞ。

あ、あと今回からお試しに感想の制限を外してみます。もしよければ感想などをひとつ。

第十話 蠢動

七夜は決して最強ではない。

思えば、七夜黄理との訓練の際、教えられた全ての事柄は否定から始まった。

七夜は最強ではない。決してこの世界で最も強い存在ではない。ただ超能力を保持し、人外の身体能力を持ち、暗殺術を伝えているだけの存在。それ以上でも以外でも以下でもない。それは隠しよのない、紛れも無い事実。もし七夜がこの世界で最強だということなら、なぜ七夜のものは死ぬのか。

それが答え。七夜は死ぬ。簡単に死に絶える。それは我々が弱いからではない。人間と言う領域ならば七夜は極めて高い場所に座する一族。長い時をかけて繰り返された近親相姦は、七夜の血を澄まし不純物のない身体を持つに到っている。ではなぜ七夜は死ぬのか。

この世には人間ではない存在が溢れている。人外の化け物。悪鬼羅刹の魑魅魍魎が跋扈する現界の地獄。これが世界の現実。

そのような者に七夜が勝てるのか。

勝つこともあるだろう。川原の砂金を発見するような確立で。

勝ちを捨つこともあるだろう。

だが、それは絶対ではない。

世界は化け物に満ち満ちている。裏に、夜に、影に、闇に、あるいは無にそれは潜み、あるいは闊歩している。そんな世界では、人間の想像を超える存在が当たり前のように存在している。

超越種と呼ばれる人間という種よりも上の存在がいる。それは血を好む吸血種とでも考えればいいだろう。中には肉を捨て事象に成り果てた存在もいると伝え聞く。そのような存在に七夜は勝てるのか。

勝てない。七夜は容易に死ぬ。ゆえに絶対は無い。七夜が勝つという絶対は無い。

覚えておけ。

七夜は退魔組織では混血を相手にしていた。それはつまり七夜にはそれ以外の道が無かったといえる証明。そして七夜はそれ以上の相手には相性が悪い。純粋な魔という存在に七夜は太刀打ちが出来ぬまま殺されるのみ。

だが、それでも七夜がなぜ蜘蛛として恐れられ、禁忌の存在となっっているのか。

それは偏に、殺す殺さないという領域で、七夜に敵う存在がいないからに他ならない。

七夜は殺しを目的とし手段とし結果とする一族。

ゆえに殺すことを第一に、必殺を教え学び考え鍛え磨く。

他の退魔組織ではどうか。確かに彼らもまた魔を対象に動く集団だが彼らの目的は七夜とは異なる。彼らは魔を相手に討伐し封印し祈祷し被うことを目的にした一族であり、殺しは手段の一つあるいは結果でしかない。

これが魔なら更にはつきりとしている。魔が行うのは暴力。彼らはその自らが生まれ持った素養や能力を行使し、相手を圧倒する術を持っている。それは鍛えて得たものではなく、また望んで手に入れたものではない。彼らは自らが持っている力によってのみ暴力を行使し、その結果が死ということに他ならない。

七夜は違う。七夜は殺す。確実に殺し、必ず殺す。

それ以外は出来ぬ。それ以外をやるうと思わない。

それが七夜にとっての最善であり、存在証明でもある。だから七夜は恐れられる。

七夜は殺人鬼だ。殺しを目的とし手段とし結果とする殺人鬼だ。

これほど最悪な者がいるだろうか。

七夜は生きているから殺すのではなく。

殺すために生きているなどと、自ら証し立てているのだから。

呼吸は深く長く。五体の隅々の先、指の末端にまで酸素が行き渡るように息を吸い、そして吐く。吐く息が白い。肺と胃の中にある酸素を吐き出し、肉体の中身を搾り出すようにして吐き切る。それが終わると再び息を吸う。それを繰り返すこと数回。冷たい空気が体中に染みる。姿勢は直立、あくまで自然体。そうすることで意識は次第に澄んでゆくのがわかる。雑多なものは消え去り、余分なも

のは取り払われ。

その呼吸は空手などに伝わる呼吸法に似ている。特別な呼吸によって全身の筋肉を刺激させ、更なる動きの発展へと結びつける。武道家が行うそれは、例え殺しの術を磨き続ける殺人鬼であっても変わりはない。肉体を駆使する、という意味では両者共に同存在だろう。

夜。朔は訓練場にて一人佇んでいた。冬となって訓練場は夜の静寂が増していったような気がする。

時刻は幾ほどばかり経っただろうか。黄理との訓練は疾うに終わり、朔は訓練場を動こうとせず、黄理に教えられた動き、黄理の行っていた動きを吟味していた。反復運動を繰り返し、自分なりの最良を見つけ出す作業。最短の動きで最速となる動き、肉体。それらを手にするため訓練が終わった後も一人鍛錬を行っている。食事を取ることなく、休息を取ることなく。

呼吸を整え、静かに目蓋を下ろしていく。疲労からか意識が解けていきそうな感覚が数回、それをあの日の残像で拭っていく。

あの時、目の前に現れた異物。

それを自分の内側は殺せと吼えたて、同調するように肉体が猛っていく。筋肉は痛いほどに熱を持ち、ともすれば自身の意識さえも侵食してしまいそうな感覚。

だが、これではない。こんなものではない。あの時の自分はこんなにも静寂な存在ではなかったはず。

意識を沈め、自分の中に潜り込み、あの混血という魔の姿、存在そのものを思い描く。姿ばかりが似ていても意味がない。魔。それにならなくてはならない。自分とは違う、人間とは違う、人間ではないもの、人間以外のもの、正真の化け物。

だが、脳裏で創造しようとするほど混血の姿は歪と化し、あの日の存在とは似ても似つかない存在に成り果てる。違う、これではない。

創造と否定の作業をどれほど繰り返したのだろう。元から出来ぬことだとわかっている。だからと言ってやらない理由にはならないが。しかしこの作業は混血と出会ったあの日から始まりこれまで続けられてきた。それはどのような反応を自分は示したのかと確認するためであり、そして自分自身の変化に対する問答でもあった。

変わったのは周囲だけではない。朔自身も変わっていった。取り返しがつかぬほど遅くなりながらも。

朔には人間がわからない。それは自分が周囲の人間と違うからだと思っていたからだだった。だが朔はそれでもなぜ自分は違うのかと思ひ、ひたすらに思考を重ねていった。それだけが朔に出来る解答への至りだった。だが、今となって、朔は疑問を疑問と思わないようになってきたことに気付いた。自分が以前なら疑念を抱いたような事柄に対し、朔は以前よりも淡泊、無機質になっている。それを良いことか悪いことかの判別はつかない。だが、そのような判断すらも朔にとっては価値の見出せないものになりつつある。

だからだろう。あの日の自分へと近づき、その答えを見つけようとしているのは。

梟と朔が対峙した後、朔の生活は一変していった。

朝、目が覚めると、縁側に朝食が置かれ、誰が作ったかもわからぬそれを誰も訪れることのない離れの中で一人食す。食した後、黄理との訓練が始まり、食事を取ることにも休息を取ることもなく昼が過ぎるまで訓練を行い、その後夕刻となるまで一人訓練場で肉体を酷使用する。そして疲労がピークに達する頃、黄理の命によって鍛錬を止める。その後食事を取った後、一人で就寝する。

そんな生活を自発的に朔は行っていた。自発的にだ。黄理によって気絶させられ、目が覚めたあの時から。自身を苛め続け、更なる高みを目指す。現在生活の全てが以前と比べ、はつきりと高みへ登るためだけに消化され続けている。一日中動かし続けた肉体は痛みの中の危険信号をけたたましく鳴り響かせ、それに合わせ意識は次第に澄んでいく。痛みが増すほどに意識の蒙昧さはどこかへと消え去り、あの日混血と対峙した自分と同じ状態へと近づいていく。

だがそれも一定以上凝らしていくと、意識が飛んでいく。そして気付くと離れで寝ている。おそらく誰かが運んでいるのだろうと推測し、その誰かを予想することなく再び訓練場に向かう。その度に朔は視線を感じたが、それもどうでもいいことだと思った。そんな生活も幾ほど経っただろうか。最早覚えていない。

最近志貴が六歳になったと、誰かから聞いた。その誰かは女性で、なぜか自身の表情を隠していたような気がする。震えるように感情を隠して。そして会話は禁止されていて、この会話も秘密なことだと言われた。

だが、果たしてあれは誰だったのだろうか。

『食事はちゃんと取っていますか』
『休息は充分ですか』

あれは自分と親しかったのだろうか。柔らかな表情と、暗い色を湛えたあの女性。

記憶の中に似たような存在がいたような気がする。

だが、それが誰だったのか、わからない。

しかしそこでどうして自分は疑問に思っているのだろうかと、考えてみる。だが、その考えは果たして必要なかと考え、そもそも自分に疑問は必要なのかも考え、その考えを切って捨てた。

そして、それも、最早どうでもいいことだろう。自分にはきつと意味の無いことなのだろう。そもそも意味を求めること事態間違いなのかもしれない。そして朔はそれを間違いと決め付けるほど朔は判断材料を持っていなかった。

今となつては黄理とほとんど言葉を交わさなくなつてきている。それは普段の生活のみならず訓練の時においても。その理由を朔は求めはしなかった。ただそうなのだろうと、変化していった周囲を受け入れた。疑念を抱くこともなく。

だがそれでも、変わらないものも、もしかしたら。

「兄ちゃん……」

気付けば、そこに志貴がいた。

終わらぬ精神統一を図る朔の側に、いつのまにか志貴がいた。夜

の鮮やかな黒に紛れることなく、小さな少年は朔の側にいた。

「兄ちゃん。もう、夜だよ？家に、帰ろうよ……」

志貴は揺れる感情を持って余しているようにも見えた。落ち着きなく揺れ動く瞳が朔を見つめている。その感情が一体何なのか朔にはわからなかった。

いつからか、ひと気のなくなった朔の側。だが志貴だけはなぜかそこにいる。いつも変わらずに志貴は朔の側にいる。それが不思議でならなかった頃もあった。だが今となっては朔にその答えを求める感情は芽生えることもない。

しかし、帰りを促す志貴の存在を考え、志貴は黄理の代わりにやってきたのだと推測した。

それを、黄理とはもう会うことも出来ないのか、と漠然に思った。

残念とは思わない。

ただ、内側に余韻が虚しく響いた。

「兄ちゃん……？」

「……」

視界が僅かに霞んでいる。

しかし、自身の瞳が濡れていないことはわかっていた。

時折だ。朔の視界に突然微かな霧がかかることがある。

それはこの時のように志貴に見つめられている時だったり、あるいは離れに一人でいる時だったり、母屋にいる時だったり、はたまた訓練場にいる時だったり。高い頻度で靄がかかる。

だが、この靄。色がついているようにも見えない。ただその色彩の判別が朔にはつかない。

そして視界いっぱい靄が広がるのではなく、道筋のようにどこからか繋がり漂っている。これが何なのか朔にはわからない。他の人間、例えば志貴にもこれは見えるのだろうか。

「……………」

そこで朔はかぶりを振る。

そんなことを考えてどうするのだろうか。考えたところ、自身に答えなどわからないだろう。

朔は志貴の視線、不安そうな志貴の目を受け、離れに向かって歩いていく。この靄が何なのかわからないが、見ても感慨が浮かびはしない。

はんば志貴が見えていないように動こうとする朔。

その身を、引っ張る力があつた。

着流しの袖を志貴が掴んでいる。だがここに押し留めるような力はない。だと言つのに志貴は朔の袖を掴んで離さない。

「……………」

志貴は俯いている。俯いて、黙り、朔の袖を掴んで離さない。

そして朔には、この手を振り払おうと思うことが、なぜか出来なかった。

そのまま二人は歩いていく。朔が志貴を連れて行くように。

頭上には月。冬の冷たく澄んだ空気、月の輪郭がよく見える。

満月まで、あと少し。

「御館様」

「翁、か」

屋敷の中、囲炉裏の間。火の灯る囲炉裏の前。そこに黄理と翁はいた。と言つても翁は先ほどになって現われたばかりだ。黄理は静かに座布団へ座し、黄理は力なく側にいる翁を見る。その翁を視界に納める瞳に僅かな疲労が見えた。それは肉体的なものでなく、精神的なものだと、翁にはわかつていた。

翁は先ほど見た光景を見て微笑みを湛えた。それは孫を見つめるような好々爺の表情だった。

『なんで兄ちゃんと会つちや駄目なの？』

『どうして誰も兄ちゃんと一緒にいないの？』

『なんで！？答えてよ、お父さん！』

『もう知らない！お父さんの莫迦！！』

目前で繰り広げられた志貴と黄理の問答。

その光景は正に親子の喧嘩にしか見え、翁は密かに笑いを堪えていた。こんな何気ない光景が、七夜には生まれている。いつかと比べれば、七夜は変わっている。癩癩を起こす志貴、受け流すことも出来ない不器用な黄理。これを親子喧嘩と言わず何と云う。

だが、今現在の事態が重いことを翁は充分に承知していた。

「朔様が離れに戻ったようです」

「……そうか」

朔の名を聞き、黄理は僅かに視線を床に向けた。

あの時から始まった朔への接触禁止は今のところ滞りなく進んでいるようにも見える。だが、それは里の中に僅かな、逃してしまいうるほどに小さな亀裂が生み出されていた。もとより朔と関わるものは少ない。だが、それでも皆朔を大事にしていきたいと思っている。それは朔が優秀だからとか、やがては当主になる可能性が高いとか、そういう打算のようなものも含まれているが、それ以上に通常、七夜の仲間意識は高い。

朔の父、名を排された黄理の兄は禁を破ったことで肅清されはしたが、それ以外の事態ならば七夜の意識は覆されない。

だが今回、黄理の命によってそれに動揺が生まれている。なぜ朔の扱いが変わってしまったのか、その原因を七夜の者は知っている。圧倒的な殺気。それを皆知っている。だが、それでも朔は十にも満たぬ子供。人の温もりが必要だ。例えば朔がかつての父のようになる

うとも、それだけではなくてはならない。

ゆえに皆接触を禁じられた朔に憐れみ、黄理に疑念を抱いている。

事実、黄理の妹は密かに朔と接触している。それはほんの数分の出来事。だが、そんな僅かなことでも咎めなくてはならない。しかし、いざそれを妹に言っつて、妹の冷たい視線に晒された。

『兄様は、それでいいのでしょうかね』

あの言葉が、耳から消えない。

そして黄理自身、自分の行いが本当に正しかったのかと、後悔に身が震えた。

当主としては正しいのだろう。事実あの時感じた朔の気配。あれはかつて黄理の兄が発していた存在感そのものだった。遠からず、朔はそれに極めて近い存在になるという予感が黄理にはあった。

だから朔を隔離した。

精神的な枷を作り、もし朔が暴走しても他の七夜に危害が及ばぬように。そして、もし朔が狂気に吞まれた時、その時黄理は

「……………」

だがその答えを理性で捉えようととしても、黄理の父としての顔が歪んでいく。当主としてこれはきつと正しい。だが。

朔が徐々に変わりつつある。

それを肌で感じなくとも、黄理ははつきりとその目で見てきている。

より無機質に。より機械的に。それでいて暴力的に。

あの目。朔の目。

無機質だった目が、今では何者も見つめていない。それはかつての自分を思い抱くには、黄理には充分すぎるものだった。

「翁

「はっ

「今の朔。お前には、どう映る」

それはかつて、黄理が翁に問うた言葉だった。

朔が変わったのは、それだけではない。

飛躍的に伸び、そして今もなお昇華していく運動能力。

打撃は重く、鋭さを増し、より狡猾に敵を、訓練の相手である黄理をしとめようと動いていく。その姿は正に蜘蛛だった。

今となって黄理は自身の得物、二本の撥を使用し組み手の相手をしているが、抑えているのがやっとの状態。いや、それも危うい。さながら暴風雨のように動き回る朔は、最早黄理と同等の力量にたどり着こうとしている。

僅か、八歳の子が、だ。

ゆえに黄理は時折、朔に対し怖気のような感情を抱く。それは畏れと言ってもいいだろう。

そう遠くない未来。

朔は黄理を超える。

それは、はっきりと、異常。

「そうですね……。ただただ恐ろしく思います。あのままではどうなってしまうのか、と」

「そうか……」

最早予想のついていた答えだった。このままでは朔はどうなってしまうのだろう。

「ただ……。御館様は正しいと、里を守る者からすれば正しいと思います。しかし、御館様。あなたは胸をはれますか？」

翁の言葉が響く。それは黄理を確かに揺さぶるほどの力を秘めた言葉だった。だが。

「……翁。私は、どうすればいいのだろう」

黄理はどうしようもないジレンマに陥っている。最近では志貴との関係もうまくいっていない。今回の喧嘩がいい証拠だろう。志貴は黄理に向かって反発し、そしてそのまま朔のもとに駆けていった。

疲れていると自覚する。だが、どうしようもない状況に気が休ま

らない。朔のことが一時たりとも頭から離れないのだ。こうして悩んでいることも朔のことばかりで、解決策が見当たらない。

答え見当たらぬ泥濘の中、黄理は悩んでいく。

それでも月は関係なく輝いていく。

鮮やかな月が天上に吊り下げられ、地上を照らし出す。

だが、月の光は眩くとも儂く、触れてしまえば消えてしまいそうに淡い。

だからこれは、月にも映し出されぬ宵闇の中。

暗い底の会話。

「それで、お前はいいのか。確か刀崎は七夜と協定を結んでいたのでは」

「構いはしねえよ。そんなもの、今となってはどうだっていい」

「どうだっていい、だと？」

「ああ、そうだ。今の俺にとっちゃそんなもんどつでもよくなつちまっつたよ」

「ふむ。……ならば、いい。私にとつてもどうでもいいことだ。約束を違えなければそれでいい」

「ひひ。あんたは話がわかるからいいな」

「……。では手筈を整える。お前は道筋を教えればいい」

「あいよ。その代わり、だ。条件を破るなよ」

「本来なら、それも破り捨てるどころだが、ルートを知るのがお前

第十話 蠢動（後書き）

お久しぶりです。六です。

何とか時間を確保し執筆しました。

今回は課題でもあるテンポを考えて作っていったのですが、出来たものは結局いつも通りの作品。がっくりきてます。

あと、今の朔の状態について補足いたします。

現在朔は梟と対面したことで、潜在的なたがが外れました。なので爆発的な身体能力の獲得と成長を得ました。

しかし、黄理が行った隔離により、もともと薄かった人間味が磨耗。興味の幅がより狭く深く、それ以外、例えば人物に対する記憶力も薄れています。

普段接する人物、黄理や側にい続ける志貴は別ですが、直接会うことを禁じられた妹様はだいぶ忘れてきた状態です。

あと七夜襲撃は手引きする人間がいなけりや無理だと考え梟の登場です。

それでは次回お会いしましょう。

番外編 ななやしき君の冒険 前編（前書き）

諸事情により番外編です。

では、どうぞ。

番外編 ななやしき君の冒険 前編

「森の奥ってどうなってるのかなあ」

その日はそんな言葉から始まった。

志貴は目の前で何やら翁と会話している父の黄理に向かいそう言った。話の所々で「……朔が……しかし……」「朔はやはり……」「風呂……朔……」と朔の名が頻繁に出てくるので一体何を話しているのだろうと思ったが、それを聞いても微妙にはぐらかされるので少し拗ねた。そんな父に最近朔の世話をしている叔母から聞いた『へたれ』という単語を黄理に浴びせかけ黄理が落ち込み翁が励ますなど、なかなか混沌とした空間を作り出したのでとりあえず志貴は満足していた。

志貴の何気ない一言が飛び出したのは、その空気が落ち着き始めた頃のことだった。志貴としては本当に何気ない一言であった。志貴はこの七夜の里から出たことはなく、当然外界がどのようなものか知らない。さらに人里から離れたことはなく、遠くはなれることは子供たちには禁止されていた。朔と黄理が早朝森の奥に向かい基礎訓練を行っているのは知っているが、しかしそこが一体どういう場所なのか全く教えられていない。だから志貴としては未知なる場所に興味を持ち、気になっているのだ。

志貴の幼い冒険心が燻り訴えているのだ。森はなんだかすごいところと違くない、と。

だがそれを聞いて黄理と翁が固まる。

里の外、つまり人里から子供を出すのを禁止させたのは黄理を含めた七夜大人組の総意である。

七夜の里は森の内部にあり、そこは外部の敵を撃退する罠で埋め尽くされている。撃退と嘯いているが、対人地雷がいたるところに設置されていることからどう考えたって殲滅を念頭に置いた罠である。

そもそも七夜は裏の人間であるため敵は多い。混血との協定を結んではいるが、それは薄氷の協定。七夜の安全が確保されているとは程遠いのである。

それゆえ森には数多くの罠が設置され、その種類は七夜のものですら完全には把握することが出来ず、正規のルートを通らなければあつという間に死体と化す。それゆえに子供は里から出してはならない。

と、これが建前である。

本当の所、そんな罠が云々より、七夜の森にかけられた結界がヤヴァイ。

過去志貴が生まれた黄理はそれまでの人間性が嘘のように変わり、言ってしまうえば、はっちゃけた。さすがにモヒカン軍団のような奇声を発声することはなかったが、その行動から自重が消し飛んでいた時期が黄理にはあったのである。

その頃黄理は生まれてきた志貴のために、といままであった結界を強化することを決意。そのために異例であるが外界の魔術師と協力するほどの徹底振りである。そんでもって完成した結界により、森の生態系が突然変異を起こしたのは完全に黄理のせいである。植

物が獣を襲い、獣がおかしな姿で動き回っているのである。幸い現在確認されている獣の中に七夜の脅威となるような存在はいなかったが、それでも危険なことに変わりない。最近の目撃例では空中浮遊のキノコが大量発生し、独自のヒエラルキーを生み出したとある。その他にも生き物を捕食しようと蠢く鳶や、闊歩する大樹など、とんでもない場所なのだ。

そんなわけで七夜の森は現在子供たちだけで進むことは硬く禁止されている。今の森は言わば黄理の黒歴史であり、それを指摘すれば、あの頃の俺は若かったと視線を逸らすことも出来ずに身を擦じらせる黄理が見れるだろう。

そんなこんなで人里を離れるのは大変危険である。生命的にも黄理の体裁的にも。

「志貴様。森は危険がいつぱいですので、子供をいかせるわけにはいかないのです」

二の句が告げられない黄理に変わって対応に出たのは翁である。黄理は大した変化なく泰然と志貴を注視しているようにも見えるが、長年黄理に仕えてきた翁は黄理の額に浮かぶ脂汗を見逃さなかった。

「でも、それは子供だけでいくのは駄目だって事でしょ？ だったらお父さんといけばいいってことじゃないの翁？」

「ふむ……確かに、そうでございますな」

確かに大人の者といくのは認められていなくもない。子供のみでいさせるのは大変危険であるが大人の者、つまり安全な道筋を知っているものが一緒についていけば畏にかかることはないだろう。

ただそれだけだと少し問題が起こる。先ほど言ったとおり森は黄理の黒歴史そのものであり、そこから誕生した突然変異種はほとんど調査が行われていない。調査が行われようとしてはいるのだが、昨日向かった場所の地形が変化していたり、生態系が一日だけで変わっているなどざらで、調査が追いついていかないのである。わかっていることと言えば、その影響が里にまで及ばないことであろうか。結界の影響か、里を守る方向性を持っていることからか、突然変異種はなぜか里に現われず、植物たちもその足を伸ばさないのだ。

「しかしそれでも、子供をいかせるのは大変危険でございまして……」
「じゃあなんで兄ちゃんはいいの？」
「むぐつ……」

それを言われてしまえば翁としても何も言えなくなる。

朔は黄理の預かりとなって早朝には森の奥に向かって基礎的な訓練、つまりは足腰の強化、俊敏性の強化、持久力の強化、空間把握と判断能力の強化を備えるため走りこみのようなものを行っている。走りこみと言っているが、覆い尽くす木々の合間を七夜の移動術をもつてして縦横無尽に飛び交うそれを走りこみと言うのは少々、どころかかなりの語弊が生じるだろうが。

その走りこみの中で判断能力の強化を期待されているのは、走りこみを行う場所に訳がある。

黄理の暴走の末、森は七夜の者も吃驚な変化を遂げ、ここは腑海林かと突っ込みたくなるほど植物が暴れまわっている。獣を襲い捕食する植物が今日も活発に育っているのである。夜中など植物に襲

われたのか獣、あるいは侵入者の断末魔が響き渡るのでかなり怖い。子供としてもあれは普通に怖い。悲鳴はやがてか細くなっていき次第に聞こえなくなる様など普通にトラウマとなる。

想像出来るだろうか。四方八方から襲い掛かる植物たちを。それは鳶のような柔らかいものだけではない。視界を覆い尽くすような大木が向かってくるのである。それもいたるところから。それゆえ黄理は森に着目し、朔の訓練、危険把握能力を高めるため森にて走りこみを行っているのである。

とは言え、正直にそれを志貴に言ってもいいのかと翁は吟味する。これで森の中はこれこれこういうことで、こんな理由があるから危険なのですと教え、その原因が自分の父と知った時志貴はどのような反応をするのだろうか。少なくとも評価が上がることはない。

翁はちらりと黄理を見た。なんか獣が死んだふりをしそうなほどの凄みで睨まれた。

しかしこのまま答えないのもなんだかアレである。はぐらかす事も出来るだろうが、そのまま放っておくと勝手に森に行きそうだ。

なので朔に関しては。

「私としましても、朔様がなぜ森に行ってもいいのか疑問に思っていたのでございます」

まとめて黄理に丸投げしてみた。

一瞬黄理の表情が「なにいつつつつつ！」と歪み、翁に向けて憤

怒の殺意を向けた。しかし翁は知らぬ顔をするばかり。

この老人、自分が仕える相手を窮地に立たせるなどなかなかいい性格をしている。

そして困ったのは黄理である。

まさかお前のためはっちゃけちゃいましたとは言えない。一時期暴走してはいたが、常識らしい常識は情報から隔絶された場所に生きてきた黄理でもある程度持っている。後悔は微塵もしてはいないがかなり痛い過去であることには違いない。

しかし志貴はそんなこと知らない。子供の穢れない純粋な瞳で「どうして？」と訴えている。その輝きが黄理には辛い。

「朔は、な」

散々考えあぐねた結果、黄理はおもむろに口を開いた。

「朔は特別だ」

「なんでなの？」

「朔は私が訓練を付けさせている。だからだ」

「どうしてなの？」

「それはな……つまり……」

「ねえお父さんどうしてなの？なんで兄ちゃんがよくて僕は駄目なの？」

答えに窮した黄理に対し、志貴は次第に機嫌を損ねてきたらしく、軽くぶーたれ始めている。その瞳が興奮か少し潤んでいた。どうしたものかと黄理は翁に視線で助けを求めた。

翁は優雅に茶を飲んでいた。翁しかとである。

黄理はこの世全てから裏切られたような衝撃を受けた。

結局、あの後黄理は志貴が納得するような理由を話そうとはしなかった。いや話すことが出来なかった。黄理としては志貴に話した内容ではなかったが、話さずにいると志貴が不機嫌になり、もしかしたら嫌いとかわられるかもしれない。そして黄理には灰になる自信がある。

しかしだからと言ってあの黒歴史を志貴に教えるには些か辛い。主に父としての威厳が。ゆえに黄理は当主としての仕事が未だ残っていたと、そそくさいなくなってしまったのである。もちろん逃げのための口実である。しかも志貴の視界から消えた瞬間閃走を使用するほどの徹底振り。黄理実に大人気ない。

そうするとそれに追隨するように、それでいて「今度教えて差し上げます」と口ぞえしながら翁もどこかに行ってしまった。

不満なのは志貴である。事実一人残された志貴は憤っていた。誰も教えてくれないのだ。志貴の頭の中でこれは、皆自分に対して意地悪しているのだと解釈した。子供ながらの素直な思考であるが、それゆえ思い込みと決定は固い。

実はこの話、黄理に話す以前に何人から聞こうとしたのである。

例えば母。

母にどうしてなのか、と問ってみると母は「大人になればわかる

ものよ」と優しい微笑を浮かべ言った。

そして叔母。

自身が兄と慕う朔の世話を行っている叔母に聞いてみると、叔母は視線を背けながら「とても私の口からは言えない」と若干苦味のある引き攣った笑みを顔に貼り付けていた。

更には里の大人。

そこらにいる里の大人に聞いてみても「いや、あれはなあ……」と遠い目をしてしまい聞くに聞けなかった。

そういう訳で誰も答えてくれないと、思い込んだ志貴。しかしどうしたものだろうか。大人に聞いても答えてくれない。でも子供だけで行くには危ないらしいし、とウンウン考えた。

必死になって考えるその様はなかなか微笑ましく可愛らしい姿である。だが本人はいたって真剣。
子供ながらに考え考え、考えすぎで頭が痛くなってきた頃、ハッと閃いたものがあった。

「　　　　　」
「　　　　　」

「……………」

「結局お父さん理由言ってくれないし……。だから僕考えたんだ」
「何？」

「兄ちゃんと一緒なら大丈夫なんじゃないかなあって」

七夜当主である七夜黄理の住む屋敷の離れ。簡素な部屋である。物らしい物がない、ひどく寂しい内部だ。そこに志貴は訪れていた。

その対面にいるのはこの離れの住人、朔である。二人はいつぞやと同じようになぜか正座で対面していた。

「なぜ？」

「んとね、だって大人の人は教えてくれないし、でも僕たち子供だけじゃ今まで行った事もないから危ないし。だからね、何回も行った事ある兄ちゃんなら大丈夫だって、僕思っただんだ！」

すごいでしょ、と志貴は満面の笑顔で言った。

志貴の考えではこうである。

子供だけでは駄目、大人は教えてくれない、ならば朔と一緒に自分の足と目で確かめればいいんじゃない？ である。

こんな流れが志貴の頭の中で完成され、そしてそれは最早朔さえよければすぐさま発動可能な計画でもあった。大人は駄目だから、志貴と同じ子供でありながら里を離れることが許されている朔ならば外に出ても問題ない。子供だけ、と言うのは懸念事項ではあるが、もしなにか問題あっても朔は志貴よりも遙かに鍛えられているし、志貴自身も最近頑張っている。七夜の移動術もある程度ならば使えるようになった。だからきつと大丈夫だろう、と考えたのである。

何とも子供らしい安直な考えではある。だが志貴としてはこれ以上の案はないだろうと踏んだのだった。

「……」

「だからさ、兄ちゃん」

志貴は真っ直ぐに朔を見て言った。とても楽しげな笑顔で。

「森に連れて行って」

駄目かな？ と若干小首を傾かせながら志貴は頼み込んだ。

そんな志貴の姿を、朔はその無機質な瞳でじっと見ていた。

今現在昼を過ぎた頃。朔は僅かながらにもコロコロと表情を変える使用人と昼食を済ました後、特にやることもなく離れの中に寝転んで無意識のうちに黄理の動きを脳裏に描いていた。そして想像の中、朔と黄理の対戦で朔の殺された回数が十を越えた頃だった。離れに志貴が訪れたのである。

そして用件は森に連れて行って欲しいとの事である。

この頃朔は志貴と共にいる時間が多くなってきた。閉鎖された里というのも在るだろうが、一日で会わないことはない。常にいる、と言うことはないが極めてそれに近い。遊戯に付き合うことはあまりないが、時たま共に夜を過ごす事もあった。無論二人で眠っただけのことだったが、次の日使用人の鼻息がやたらと荒かった。

兎にも角にも人里を離れることを志貴は望んでいる。朔は考える。以前から朔は訓練のため森の中に向かうことが許されている。なぜ許されているのか。森は子供には大変危険、らしい。全方位から襲い掛かる植物たちに、突然変異を起こした生き物たち。自然のヒエラルキーは逆転し、植物が生き物を喰らうという関係が形成された。森は同じく生きた者である人間にとっても危険地帯に変わりない。それでも朔が森に行けるのは朔自身の生存率が極めて高く、無傷で生還が可能だからである。幼少の頃、気付けばそんな場所へ当たり

前のように行けた朔だからだろう。

そんな朔にとって森は危ない場所と思うことが出来ない。確かに危険な場所ではある。朔自身判断を誤り、命を落としかけたこともあった。

だが、朔にとって自身の命の価値を判断することは難しく、死ぬことに厭いはない。ゆえに森の中に行くことは命を落とすことはあるだろうが、別に問題らしいことはない。

朔は改めて志貴を見た。その茫洋な瞳に期待をしている志貴の姿が見えた。

「……」

不意に立ち上がった朔に志貴は少しばかりの戸惑いを覚えた。

もしかして駄目なんだろうか、と不安が過ぎる。

朔はそのまま歩き出し、外に向かおうとする。そして座ったままの志貴に振り返ることもなく、

「行かないのか」

と言った。

始め朔が何のことを言っているのか分からなかった志貴であったが、次第に朔の言葉に思考が追いついた。

「行く！うん、絶対に行くよ！」

嬉しさと楽しさが混じりあったような笑みを浮かべ、躍動するように朔の後姿を追った。

朔の判断では、志貴が自ら森の奥に行きたいと志願したのは詰まるところ、森の奥に行っても生還できる自信があると判断したからに他ならない。森は大変危険な場所であるが、志貴は行きたいと言った。動物の本能には危険な場所には近づかない生存本能が存在するが、志貴は森を危険ではないと判断したのだらう、だから行きたいのだ、と朔は考えたのだ。

当然の事ながら。

志貴は森が危険な場所であると知ってはいるが、分かっているではない。志貴の想像する危険とは、精々危ない場所と言うことで、怪我しても仕方がない場所である、ぐらいのものでしかない。つまり朔の考えた志貴の判断は、全く見当違いなものであった。

それ以前に子供は行くことを禁じられていると、朔は知っていて、それではなぜ断らなかったのか。

朔自身、なぜかは知らないが、志貴の話はなんだかんだで断ることが出来ない、未だ自覚していなかった。

兎も角、他の七夜が聞けば全力で阻止しそうな朔の思考経路によって、志貴は里の外に向かうこととなったのである。

始めていく場所ほど興奮する場所はないんじゃないか、と志貴は

密かに思っている。

何しろ七夜の里は、外部から隔絶された場所にあり、志貴自身人里から離れた経験は無い。里は確かにいい場所ではあるが、未だ幼い志貴にはそれはわからない。この変化のない里はなんだか詰まらない所としか思っていなかったりする。

自身と同じ子供と遊ぶのは楽しいし、訓練も辛いがやっているうちに面白いと感じるようになった。だが、いかんせん里は娯楽が少ない。外部から志貴の好奇心が満たされるようなものは入ってこないし、僅かにある楽しみと言うのも発展性が少ない。

そんな折、志貴の前に現われたのが朔である。

朔は兎に角凄い。志貴と同じくらいの子供でありながら、黄理と訓練が出来て、志貴には出来ないことが何でも出来る。志貴の思い込みも多々あるだろうが、志貴の中で朔のイメージ像は大変膨れ上がっている。だからだろう、従兄弟という関係であるが、朔を兄と呼んでいるのは。兄は凄い。未だ朔と話したこともなかったあの頃は、朔は志貴にとって未知の塊で、朔の話や聞けば聞くほど志貴の好奇心は高まっていった。そして実際に会って、話してみても、共にいる時間が多くなり。志貴は朔と共にいることで、家族といえるような安心感を見出していた。

そんな訳で、朔と一緒にいるなら大丈夫だと思った志貴は森の奥に行きたいと朔にお願いしたのだった。

志貴の視界には広大な緑。そして地面、そして空。それ以外の雑多なものはない。家もなければ、人もいない。いつもよりも濃い自然の香りが鼻腔に満たされる。それを吸って、吐いて。

そして志貴のわくわくはピークに達しようとしていた。

「うわあ、なんだか凄いよ兄ちゃん！何も無いよ！」

「ああ」

「ほら、里があんな所にある！さっきまであそこにいたのに、凄い小さい！」

「ああ」

興奮冷めやらぬ志貴の言葉に、朔はまともに聞いているのか聞いていないのか判別のつかない返事を返した。

今現在、二人は人里を少しばかり離れた場所に入る。そこは朔や志貴の他に里の者が使用する訓練場を抜けた先の所だった。

里を離れ、森に向かうのは良いが、果たしてどうやって行くか。いざ向かわんと意気込む志貴の目の前にそんな問題が現われたのだ。つた。

志貴と朔が話し合った結果、家のある場所からは少し離れた訓練場から向かうことになった。里には何人かの見回りがいて、外部からの敵の侵入を監視し、里から安易に子供が出ないように回っている者がいたが、そこは朔の出番。朔は人の視線の間隙を縫っての移動を敢行。同じ七夜の志貴ですら分からぬ、人からの視線。それを感じ取り、何者からも視線を感じない瞬間、二人は里から離れたのである。

実際、里の実力者ですら容易には行えない芸当を苦なくこなせる朔の凄さが垣間見えた瞬間であり、志貴の中の朔への尊敬がまた大きくなった。だが既に限界値を突破しているので、意味がなかった。

さて、そうして里を離れていった志貴と朔であるが、始め朔が先行していたのだが、高まる胸の鼓動を抑えることが出来なかった志貴の歩調が次第に速くなっていった。

普段見慣れる風景。里から少しばかり離れたただけだというのに、志貴にはこの空間が別の世界のように見えた。

苔むした植物たちの匂いは遙か太古の原始を感じさせた。果てしなく広がり途切れることのない大樹は志貴の冒険心をくすぐらせた。そして後ろに振り返ると里がもう見えない。側には朔。朔がいるだけで冒険心を高ぶらせながら、その存在に安心感があった。

怖いものなんて何も無い。

幼い冒険心は未知への好奇心を飛躍させるばかりだった。

目的地なんてどこにもない。ただ気の向くままに進んでいく道がきつと正しい。

だから志貴はそのまま進んでいくとして。

「待て」

朔に呼び止められた。

朔の言葉に振り返ったなぜ呼び止められたのか不思議に思い、朔に聞こうとして。

「何かいる」

その冷たくも意志の有無を許さぬ言葉に固まった。

何かいる。なにかいる。ナニカイル？

志貴は慌てて辺りを見回した。しかし志貴の視界には取り立てて生き物の姿は見えない。ではなぜ朔は呼び止めたのだろうと、不思議に思い、再び聞こうとしたその時だった。

志貴の後方、朔の視線の先にある茂みから、草を踏む擦れた音が聞こえた。

「
っ！」

突然現われた。一切の気配を志貴に感じさせることなく、志貴の直ぐ後ろに何かがいる。慌てて朔の後ろに隠れた志貴は、その茂みにいる何かに僅かな不安と多大な好奇心を揺らめかした。そんな志貴のことなど知らず、朔は携帯していた小太刀を鞘から抜き、腰を落として茂みを見つめていた。

その何かが何であれ、朔は殺す気満々だった。

次第に大きくなる茂みの音。

志貴の喉が鳴った。

そして一瞬の静寂。

その瞬間だった。

茂みから、何かが見われた。

「……………」

びくつく志貴。襲い掛かろうと低い姿勢になる朔。

だが。

「

……………
「…？」

呆然とした志貴の口元から表記しにくい音が漏れた。

緑の傘。

白い斑点。

デフォルメされたように輝く眼に、淡い黄色のぼでい。

あえて言えばキノコ。頑張つて言えばキノコ。苦しいかもしれ
ないが、キノコ。

それが二足歩行で、なんかそこにいた。

番外編 ななやしき君の冒険 前編（後書き）

こんなに熱いのに九月とは。恐ろしいばかりです。六です。

今年はホントにどうした地球。

以下言訳。

本編更新を期待していた方々、申し訳ありません。

話はだいたい出来上がってきたのですが、出来に納得がいかず、もう一度作り直しています。

こういうものは、日常から遠のいていくから良いんだよねえ、とふ
と思い、番外編としてこれから何話か番外編を書いていくつもりで
す。日常編をある程度保管させたら本編を進ませるつもりです。

そうじゃないと、何と言うか映えないので。

番外編 ななやしき君の冒険 中編（前書き）

始めに言っておきます。

この話はかなりふざけている。

申し訳ありません。

変態を書くのは楽しいです。

番外編 ななやしき君の冒険 中編

その日、私は悩んでいた。

恥ずべきことだとは分かっていた。だが、自らを律しようとする理性と、私を掻き乱す本能がせめぎあっているのだ。羞恥や背徳を超越する欲望によって。

胸の鼓動が高まり、鳴り止まない。恐る恐る手を伸ばそうとして、いや、やはりやってはいけないとその手を押さえる。だが視線はそれに釘付けで、逸らすことが出来ない。

それでも、私は、私は……！

正座で座る私の目の前の座布団に置かれた布。それは何者にも価値がなく、はっきりと取るに足らないものだと思われよう。だが、それが私には、とても甘美なものに見えて仕方がない。

だが、だが、私には　　！

切欠は些細な、それこそどこにでもあるようなことだった。

今日、私はいつもと変わりなく屋敷の家事を行っていた。朔のために朝餉を作り、朔と共に食事を取り、その後訓練に向かう朔を送り、昼食には再び朔と食事を取った。食後しばらく朔の部屋にいたかったが、まだ家事が終わっていなかったたので朔と少しばかり言葉を交わし母屋に向かった。

屋敷の家事は私が全て受け持っているわけではない。この屋敷に

は使用人はおらず、主に家事を担当しているのは私と義姉様だ。

義姉様は私と違って大変女性らしい方で、私の憧れでもある。料理は美味しく、その身のこなしも参考になることばかり。さすがあの兄様と契りを結ぶ方で器量良く、何一つ取っても私なんぞでは逆立ちしても太刀打ちできない方だ。

だが、だからと言ってこの屋敷の家事の全てを行えるわけではなく、私としてもそれは忍びない。家事は数少ない私の趣味でもあるので家事の負担を減らすため義姉様だけにやらせるのではなく、私も家事を行っている。

そして私は母屋にて溜まっていた服を纏めて洗っていた。それもあと少しのところ、ふと何気なく残った洗濯物を確認したのだが、その中にひとつ、あるものを見つけってしまったのである。

いつもならば、いつもの私ならばそれをそのまま洗い物として洗い済ましていた。だが、その時は止まってしまった。それがなぜか、今となつては検討もつかない。ただ、私はそれ以外の洗濯物を洗い終わると、それを衝動的に着流しの袖の中にしまい、他のものを干し終わると急いで部屋に戻ってきたのだ……。

改めて目の前にある品を見る。

……はつきりと言ってしまえば、朔の下着だ。

それが目の前、敷かれた座布団の上に乗っかっている。

果たして私は何でこれを掴み取ってしまったのか理解できない。ただ朔の汗やら体臭やら、その他諸々が染みている可能性があるが私

としても何とも甘美な予感があの時はして思わず手に取り匂いを嗅いだり口に含んで唾液に混じり滲み出た汁くあwse dr ft gyふじじip!

「　　っは！」

危ない危ない。

もう少しで踏み出してならない領域に足を届かせようとしていた。

だいたい朔はまだ子供。調べた限りでは精通もしていない。それなのに手を出しても意味は無いだろう。

伸ばしかけた手を息を吐きながら戻そうとし、一瞬過ぎる未来の展望にそれは空で止まった。

待てよ？ 私は七夜なのだし近親相姦は全然構わないのでそこらへんは問題にしていない。むしろばっちこいだ。

七夜は早い内に子供を授かるのが望まれている。何せ七夜の家業はあれだ。将来現役は難しく、肉体の衰えなどで第一線を引く事が多くない。

翁？あいつは駄目だ。あの狡猾な突撃莫迦を当てはめて考えてはならない。

この歳になって私が未だ誰とも契る事が無かったのは、私自身身を固める必要性を感じなかったこともあるだろう。しかしそれ以上に七夜の男に感じ入るものがなかったのだ。魅力と言えればいいのだろうか、それがこの里に生きる者には感じられず、好き合ってもい

ない者と結ばれる事もただけず、ずるずると時は流れていった。そしてそのまま私は老いていくのだろうと思う。思っていた。だがそれは朔の存在で覆される事となる。

朔と触れ合うこと七年以上。着実に私たち兄弟の血をひいた成長を見せている。それを側で見守り続け、同じ時を過ごしていくうちに、私の中のナニカが産声を上げたのだ。

今まで感じたことも無いような温度。朔の事を思うと胸が締めつけられるほどに切なくなる。始めこの感覚はなんだろうかと戸惑い、しかし誰かに相談することも出来ず我慢していったのだが。

最近になってそれが抑えつけられなくなってきた。

朔は子供ながらにその肉体は早くも男性的な引き締めを成しているが、ふとした時に見せる歳相応の幼さ、それに目を奪われる。訓練後の僅かに乱れた着流しの隙間から覗く身体。あれは素晴らしい。胸の鼓動が早くなり、少女のように赤面したものだ。

朔の近くにいた志貴にも時たまそれに近い衝動が起こる。だがそれは朔以上ではない。志貴には感じられぬ、私を突き動かさざるを得ないナニカが私の中にはある。

朔が寝静まった後の茫洋な気配がなりを潜めたあとけない寝顔など興奮した。思わず全力で気配を消し、その頬に触れ、拳句の果てには興奮の末、頬を舌で舐めてしまった。あれは良かった。気配を読む事に長けた朔からこのような事が出来ることは全くといって良いほど無い事だった。いつ朔が目覚めるかも知れぬ緊張の中、沈んだ夜の空気に頬を舐める湿った音のみ聞こえてくるのだ。

あの時はそれ以上進めば止められなくなりそうだったのでそこで止めたが、もし次回ような機会があれば次はもう少し大胆に行ってみたいと思う。

それは兎も角。

問題となるのは朔の年齢。未だ子供であるから性交は出来ない。意味が無い。だが、もし今後朔を狙うような輩が現われた場合はどうだ。朔は受動的だ。もしかしたらそれを受け入れ、拳句の果てにはそのまま……。

「駄目だ。それだけは駄目だっ」

朔がまだ赤子だった頃から育ててきたのは私だ。そんなどこの馬の骨かも分からぬ女に青い果実を掠めとられるなぞあってたまるかっ。

そうだ、私には責任がある。朔を育てている私には朔の成長を認める責任があるのだ。ならば朔に関する事の大抵は私自身の目で知っておかなくてはならない。

朔のためならばこの下着をどう扱おうとも問題ない。むしろ誇るべきではないか！

答えは、得た。

「ならば。……躊躇う必要は、無い」

良心の呵責やら理性によって震える手に力をこめ、恐る恐る朔の下着に手を伸ばし掴んだ。その厚みの何て頼りない事。このような

薄布で、朔のあ、あ、アレは包まれているのか。赤面を自覚する。

しかし、手に包まれた下着を見て、迷う。

私は本当にこれを行ってもいいのだろうか。決定的な間違いを犯そうとしているのではないか。

不意に浮かんでは消えを繰り返す私の弱さ。そして私は弱気な私を叱咤した。

そう、これは私のやらなければならない事。私の責任、私だけの義務だ。私がやらずに誰がやるっ！

心臓が痛いほど脈打っている。全身が熱を持ち、眼前にある布しか目に入らない。

そうだ、躊躇うことない……！

そして私は、ゆっくりと朔の下着を嗅ぐ。

「
っ……！！！！！！」

禁忌を犯すような背徳感が、私の背筋をなぞる。

鼻腔が朔の匂いで満たされていく。少しばかり汗の混じったその匂いは、あつという間に私の中を蹂躪していく。痺れにも似た感覚が全身を駆け巡り、私の頭の中は次第に白くなっていく。

嗚呼、これは、良い。

「あ、ふぁ……」

前にいるアレはなんだろうか。志貴の想定範囲を超えている。

キノコ。見かけはまるでキノコであり、見事なキノコっぷりである。形状的に考えてキノコ以外の何者でもない。だがこれをキノコと呼ぶにはあまりに強引過ぎ、志貴としても些か首肯するには戸惑う。

キノコとは本来、菌から発生した植物であり、その性質は花に近い植物である。そしてそれらは食用として食されることもあれば、命を脅かすような毒を持つものもある種類豊富な植物である。

そして志貴の知識では、キノコは生物ではない。

しかし、改めて目の前にいるモノを見る。

キノコ。形状はキノコである。

傘の部分は妙に毒々しい色をなし、その黄色のぼでは丸っこい手足のようなものがついている。そしてその顔面（この時点でおかしい）には輝く瞳。大きさは志貴よりも少し小さいが、何と云うかずんぐりむっくりとした感じであり、それが上目遣いで二人を見ている。

部分的に鑑みるにキノコではある。正直、キノコと呼ぶにはキノコに対して失礼な気もするが、それ以外に呼び方が無い。だがどうにも納得できない。

戸惑いを覚えながらも志貴はどうするべきかと朔に視線を投げかけたが、朔は朔で既に腰を落とした前傾姿勢。臨戦態勢である。その手に握られる小太刀はまっすぐに目の前の命を狙っていた。それ

を見て志貴は思った。駄目だ話にならない。

朔にとって志貴が戸惑う未知の存在など、さして興味も沸かない奴なのだろうか、と志貴は考え、改めてキノコを見た。

キノコは茂みに姿を現した状態のまま、そのつぶらな瞳で志貴と朔をじっと見つめている。キノコとしても二人に対し興味を持っているのだろうか。なんだかデフォルメされた瞳の虹彩が先程よりも輝いて見える。

しかし、ここで何もしないのはちょっといただけない、と志貴は次第に落ち着いてきた頭で思った。突然の出会いに混乱はしたものの目の前にいるのは志貴の望んだ未知である。想像の斜め上に突っ走っているが、冷静になってみると志貴の好奇心がむくむくと大きくなっていく。

志貴は再び朔を見た。キノコが未だ何も行動を起こしていないからなのか、朔に今のところ襲い掛かる気配は無い。しかし、このまま何もしなければしないで、朔が目の前の存在を廃絶するのは時間の問題である。その証拠に朔の身体から僅かながらに殺気が滲み出ている。それは朔という時間が多い志貴だから分かる、朔の機敏であった。

「兄ちゃん。どうしよう?」

朔にとりあえずどうするべきか聞こうした。

朔は既に足を踏み込んでいた。

志貴の気配読みはあてにならなかった。

「って、うわあああ！待って待って兄ちゃん殺しちゃ駄目だよ！」

本気で焦った志貴は今にも飛びかかろうとした朔の目の前に回りこんだ。キノコを背に庇うように。

そして志貴の目前で朔は止まる。その手に握られた小太刀は志貴の鼻先。あと少し志貴が遅ければ頭部が串刺しにされていた。

志貴ビビる。

「うわもうびっくりしたっ。兄ちゃんまだ駄目だよ！」
「なぜ」

志貴の焦りように朔は静謐な声を返した。そしてまだってことは後でならばいいのだろうか。

「なんでも！」

志貴は軽く怒ったように朔に言い、そして今しがた自分が守ったキノコに振り向く。

キノコは朔の殺気にあてられたのか完全に怯えていた。

「あの、えとごめんね大丈夫？」

とりあえず刺激しないようになるべく優しく接してみたが、キノコの瞳は潤んでいる。

この時、志貴にはやばい予感が過ぎった。

なにか自分たちはやってはいけないような、とんでもない事をし
でかしてしまったような気がする。

「べ、別に君に何かしようとか思っていないよ？うん、まずは落ち着
こう深呼吸して深呼吸は大事ってお父さん言った、あれでも君呼
吸しているの？違うそうじゃなくてとりあえず落ち着こう、うん、
そうしっ
「！！」

森が、ざわめく。

急激に接近する気配。

何者か、それも複数の気配がいつきに近づいてきた。

ニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲ
ロニゲロニゲロニゲロ。

志貴の脳内で逃亡を促すアラートが鳴り響く。しかし、志貴がそ
れに従い逃げるよりも早く、それらは急激に近づきその姿を現した。

キノコ。

「え、あの」

キノコキノコキノコ。

「え、え、あ、あれ？」

キノコキノコキノコキノコキノコキノコキノコキノコキノコキノ

キノコキノコ。

志貴の視界にキノコが現われた。しかも複数。いや、今こうしている間にもキノコたちはその数を増やしていく。なんだかキノコ以外にもいるような気もするが。

「……………えええ」

森に志貴の力ない絶句が沈む。

目前、いや周囲に渡って姿の似たキノコが蠢き犇めいている。数えるのが莫迦らしくなるほどのキノコたちが志貴や朔を取り囲んでいた。その光景の何とコミカルなことか。それら全てが二人を見つめているのである。しかし、数の脅威と言っべきか。同じ造形の生物に取り囲まれている志貴は怯えた。

こいつはやべえ。

「に、兄ちゃん……………」

志貴はそもそもの原因である朔に縋りついた。あまりの事態にすっかり先ほどの出来事が頭から飛んでいったのだが。

その朔は朔で、周囲に殺気を撒き散らしキノコたちを威圧している。瞳にキノコを映して。その増大な殺気にあてられキノコたちもなんだか怒っているような。その体を目一杯使って私たち起こってるんですアピールをする様はなかなかシニールである。

「兄ちゃん怖がらせちゃ駄目だよ！」

しかし今度は志貴の言葉に朔は耳を貸さず、両者の睨み合いは次第に熱を帯び始めた。色めきたつキノコの群れとそれに対峙するのは朔。志貴は朔を止めようとしているが、朔と関わる合間に志貴が朔を止められること等なかった。

それは詰まるところ、今この時点で志貴は役立たずということ他ならない。

なので、

「「「

「「「

「……」

しばらくお待ちください。

「ああもう！殺しちゃ駄目だからねっ！」

志貴は身の危険を感じ、とりあえず近くにそびえる木の枝に駆け寄った。あのままあそこにいたら巻き込まれるだろうと判断した結果だったのだが、おそらく正しいだろう。

眼下には正面から衝突した朔とキノコの大群である。

あきらかに数の対比がおかしい。朔一人に対し未知の生物であるキノコ。五十は確実にいる。これで正面から襲い掛かる朔は凄いがもう少し何とかして欲しかった。

「うわあ……」

見渡す限りのキノコの山に向かって襲い掛かった朔。とりあえず志貴の言葉を守っているのか、気付けばその手に小太刀はない。直接的な殺傷能力はこれで下がった、と思うかもしれないが、朔の膂力の凄まじさを考えればこれでも安心できない。

だつてそうだろう。

「
」

キノコが宙に舞っている。

群れの中に突入した朔は体当たりを敢行するキノコ共を千切っては投げ千切っては投げ。

キノコ乱れ舞である。

朔によって殴り飛ばされ、投げ飛ばされ、蹴り飛ばされるキノコたちは何やら悲鳴のような音を漏らしながらポンポンはねられていく。そしてその度にキノコの体から胞子が飛んで視界が悪くなっていく。キノコの色からして毒のような気もするが、とりあえず志貴は着流しで口鼻をガード。

そして高い木から俯瞰している志貴にも分かるが、このキノコたち戦闘能力自体はあまり高くない。先ほどから行っている攻撃手段は相手に近づいての体当たりのみであり、その他のような行動は見せていない。

だからだろう。朔の独壇場である。

碌な抵抗も出来ずポンポンとすっ飛ばされていくキノコたちの目

には涙。ホントにこれ植物か？

相手が悪かったのもあるだろう。キノコたちが挑んでいるのは朔である。移動速度、膂力、急所への的確な攻撃など根本的な七夜としての素質では七夜一。化生と殺しあうために存在した七夜において尚際立つその技量と膂力。さらに朔自身の努力でそれは更に磨きがかけれ続けている。そのような存在を相手に戦っているキノコが憐れでならない。いや、これは戦いとすら呼べぬ蹂躪だ。朔の動きに反応できているキノコがないのがそもそも問題だろう。なにしろ木にいる志貴ですら朔の動きに目が追いついていないのだ。

暴風雨の如くキノコたちを蹂躪していく朔。

気付けばそこに動いている者はただ一人となった。

「……」

無論朔である。

ぼっこぼこにされたキノコたちの亡骸が横たわる地面に朔は立っていた。

倒れ伏す異形のモノどもに対し残心なく油断はなく。

「あいも変わらず茫洋な目。」

その姿に志貴は自身の父である黄理の姿を重ね合わせた。

「あの、兄ちゃん？」

動くものがいなくなっても未だ臨戦態勢のままである朔に心配を抱き、志貴は木を降りて朔の側に寄った。

「……」

しかし、朔の返事はない。志貴の存在に気付いているのかも微妙だ。

そんな朔に懸念を抱きながらも、志貴は改めて倒れ伏すキノコたちを眺めたが、なんだろうか、漫画のように傘の部分にヒヨコが回っている。これを植物のカテゴリと呼ぶには芸が細かすぎるだろう。

そして志貴は今がチャンスと、ぴくぴくと痙攣しているキノコたちにおっかなびっくり近づいていった。朔が志貴の事を視界に納めながらも何も言わないのはきっと大丈夫だって事だろう。

気絶していたり、ダメージから動くことの出来ないキノコたちを憐れに思いながらも、それ以上の好奇心に罪悪感は薄れていき、目の前に倒れていたキノコの一匹。それに近づき、手で触れる。

ざらついた手触りがした。そして妙に生暖かい。

それを触りながら志貴は今更ながらに朔へ問うた。

「兄ちゃん、これなんだろう」

不思議な生物がこの森にいるなんて聞いてもいなかった。もしかして黄理や翁が言っていた危険とはこれに関係するのだろうか。

「知らない」

「そっかあ」

「でも」

「でも？」

「前に見た」

「そうなんだあ……って本当っ？」

「ああ」

朔は無表情に無機質に志貴の問いに反応する。

「兄ちゃんはこれいつ見たの？」

「訓練中に」

「森に入ってる時？」

「ああ」

話しによれば、黄理との訓練中の際何度か遭遇していたのだとか。

「それってお父さんは知ってるの？」

「伝えていない」

「どうして？」

「聞かれなかった」

「……そっかあ」

実に朔らしい事である。

「それで、その時にはどんな感じだったのこれって」

「変わらない。この形」

「それで、殺したの？」

そう聞くと、朔はしばし時を置き緩やかに首を振った。

「殺した。だけど、殺せなかった」

「え？それって、どういう……」

その時である。

志貴の触っていたキノコそれが。

むくり、と。

ぎこちない動きで起き上がったではないか。

「うひゃうー！」

そしてそれに呼応するかのようになり、周囲に横たわっていたキノコたちが起き上がり始めたのだ。

突然動き出したキノコたちに驚いてしまった志貴は朔の側に慌てて戻った。

「こいつらは殺せない」

そして志貴を庇うよう前に出た朔は再びその殺気を滾らせた。

「どうして!?!」

「何度でも甦る」

それを聞いた志貴は愕然とした。なんだそれは。本当にこのキノコたちは何なんだ。

ふらつきながらも起き上がったキノコたちは先程よりも怒っているようにも見えた。志貴は予想も出来ぬ展開にどうすることも出来ず、最早置いてかれているような状態だった。

「そして」

そしてキノコたちは怒りの興奮そのままに、志貴の目前にわらわらと集まり始めた。

やがてそれはひとつの集合体となり、塊となり、なんだか蟻の巣のような凄い光景である。

その時、森に突風が吹いた。

あまりに強い突風に志貴は目を覆う。

森のざわめきが再び起こった。ざあざあと擦れる葉の音は何かの前触れにも聞こえた。

目を閉じる志貴の体に舞い散る葉が何枚をあつたっていく。

だがその側にいる朔は目を隠すことなく、目の前の存在を見ていた。

しばらく経ち突風は収まっていき、森のざわめきが消えていく。

それに志貴は覆い隠していた目を徐々に開いていった。

「あれ………?」

そして、志貴の目の前にいつの間にか山が出来ていた。

「合体する」

番外編 ななやしき君の冒険 中編（後書き）

六です。

不思議だね、書いているうちに叔母さんが変態になってしまったよ。

あまりに書いてて楽しすぎたので無理矢理止めました。

そうしないともう話し自体別になってしまふ。

クールビューティーな叔母さんのママが良かった方々。ごめんね。

変態だけでひとつ話が出来てしまいそうで怖いです。

それを期待する方は感想に変態&Jとお書きください。

反省点。

朔と志貴が喰われてしまった（話的な意味で）。

番外編 ななやしき君の冒険 後編（前書き）

遅れていた番外編を投稿します。七夜編が終わってから七夜の里の話を書くのは少し違和感というか、言葉にし難いズレを感じてしまいます。

なので呼んでくれる片は、私が感じた以上の違和感を覚えるのではないでしょうか。

それと、気付けばpv15万、ユニークは1万五千アクセスをとっくに達成していました。どれもこれも皆様のおかげです。引き続き六をよろしくお願いします。

感想、ご意見、アドバイス、批判などをHBの鉛筆をベキツとへし折るような気軽さでお書きください。私のやる気が人間をやめるディオ・ブランドーのように燃え上がります。

では、ごんご。

番外編 ななやしき君の冒険 後編

それを見たとき、志貴は言葉も忘れて見入ってしまった。突然目の前に現れた小山は志貴にとつて想定外もいところ。無論魅了だとか、憧憬だとかそんな肯定的な感情ではないが。

大きい。ひたすらに大きい。

大人の者でさえも見上げてしまうような、そびえるキノコが、そこにはいた。

小山の如きキノコだった。先ほどまでの愛嬌はどこにやら。見かけ、腕を組んだ筋骨隆々なキノコである。一頭身であったはずのキノコは今では人間のような構成と化していた。

岩の如き大胸筋、見事な割れ目を成した腹筋。筋肉繊維まで見えそうな上半身であり、その下半身もまた然り。それでも顔に当たる部分はキラキラとしたデフォルメの眼が何とも言えない。子供ながらに志貴はその肉体の脅威に晒され瞠目した。だが何だろつか、この何とも言えぬ虚脱感。言葉にもし難い様相を成している。しかし、事はそれどころではない。

志貴が見上げるような高さを誇るキノコであるが、その身体の造りは男性の構造に酷似している。つまり、それが確認できると言うことは、キノコは男性の肉体でありながら、裸体を曝け出していることに他ならない。裸体である。裸体、なのである。大事なことなので繰り返す。

そして、志貴にはそれが見えた。

人間的構造、それも男性体に極めて酷似したキノコ。

その股間部分。志貴は見上げてしまったので、はっきりとモロである。

その部分に、先ほどまで散らばっていたサイズのキノコがちゃっかりと、おられている。

「うっわ……」

志貴絶句。

誇るように其れを突き出す巨大キノコ。何処からか「投影拳！」と聞こえてきたのは気のせいだろう。そう信じたい。仁王立ちのそれに時折その部分にいるキノコがピコピコと動いているのが、何とも不可思議である。

それが、二人を見下ろしていた。腕を組み、股間を誇張する巨大筋肉キノコ。どこそのボディビルダーもかくやのマッチョっぷりに志貴はドン引き。既にドン引きしていたが、そしてそれは、志貴たちを見てその顔を歪ませた。それは企みが成功し、そのまま勝利を確信したような表情であった。

組まれた腕が解かれる。

そしてその手が高く高く、その巨体からかゆつくりと持ち上がっていく。天高く上げられた拳が暗い森から、僅かしか入り込まない日差しを遮る。

恐らく、その馬鹿らしい大きさの手を叩きつけるつもりなのか。その動きは愚鈍であるが、巨体から鑑みるに決して軽く見ることは出来ない。当たれば二人なんて轢き殺された蛙と化す。

しかし、人は突発的な事態に遭遇した場合、動きが止まるものである。それは志貴もまた例外ではなかった。いや、だってこんな相手と対面するのだ誰が想像できるだろう。志貴の視線は巨大キノコ、股間のキノコに釘付けであった。

が、何事もうまくいくようには出来ていないのがこの世の常。

この突発的な事態を既に体験していた人間もここにいたのが、キノコ最大の不幸だった。

志貴の隣で、朔が動いた。

呆然とし動けないでいる志貴には目もくれず、臨戦態勢を解き放ち、キノコに向かって飛翔した。ハツとし、志貴は朔の姿を見る。無茶だと思った。あまりに巨体、あまりに巨大。そのようなものに挑むのは無謀だと。朔が負ける姿は想像できないが、しかし確実に手痛い目に会うことは容易に想像できた。

しかし、朔はそのような志貴の慮りなぞ知らないかのように、拳を打ち下ろすキノコに向かっていった。

「兄ちゃん!!」

激突の寸前、志貴は思わず目を瞑ってしまった。朔が叩き潰された姿を恐れたのである。

砂を打つ様な、くぐもった音がした。

それが耳に入り、志貴は朔が負けたのだと思った。信じられるはずなかった。だが、あまりに両者の差は広がりすぎていたのだ。それを埋めることが、出来るはずがない。そう志貴は思い込み、次は自分なのだと思った。

だが、待てどもその時は訪れなかった。何が起こったのかと志貴は恐る恐る目を開き。

巨大キノコの股間のキノコに拳をめり込ませた朔の姿が見えた。

「うわ……」

志貴、この短い時間でまたも絶句。

朔の拳は真っ直ぐに股間キノコへと突き刺さり、見るからにその形状を陥没させていた。どの様な威力を込めればそのようなのか。朔の渾身の一撃にキノコの顔は潰れ、皺が寄り、ほとんど確認出来ない。その手足が痙攣しているのが痛々しい。

しかし、それ以上に痛そうなのがそのキノコの親玉、巨大キノコである。

股間とは男女問わず急所である。人間の身体には様々な急所が存在するが、最もピュラーな急所として股間があたる。そこを陥没するほどの威力で打たれたのである。

「（あ、腰が引けてる）」

朔の攻撃に晒された巨大キノコであるが、あの堂々とした態度から一変、仁王立ちが内股と化し、膝に力が入らないのかガクガクと震えている。あのキラキラの瞳は今では涙目である。そして志貴もそれを見て、少しだけ内股になった。

「~~~~~」

数瞬遅れ、キノコが絶叫を上げた。すわ怒りに襲い掛かってくるのかと、志貴は身構えたが、キノコはその場に座り込み、股間を抑えていた。地響きを鳴らし、内股の女の子座りである。

そりゃ確かに痛いわなあ、と志貴は納得していたが、その志貴にいつの間に戻ってきた朔が話しかける。

「志貴」

「どうしたの？兄ちゃん」

「逃げる」

「え、そうなの？」

志貴の問い返しにコクンとひとつ朔は頷く。志貴はそこで先ほど朔がこれは殺せないのだと言っていたのを思い出す。合体キノコやマッチョやら股間のキノコやら立て続きに見てしまい、脳がすっかり動かなくなっていた志貴であった。

— 先ずこのキノコが股間を抑えている間は安全だと教えられた志貴は朔の言にしたがい、その場を離れることにする。怒り心頭と化したアレを相手するのは嫌だったし、志貴としても流石にそのような倒せない相手にもう一度会いたいとは思いたくない。頭からあの姿が離れないので暫くは夢に出てきそうだ。もし今日そうなら

朔と一緒に寝ようと思った志貴は、ふとある疑問を感じた。

「兄ちゃん。もしかして前にアレとあった時も、あれやったの？」
「ああ」

無表情に答える朔に志貴は若干の戦慄を感じたのであった。

男の象徴をそんな簡単にポンポンと潰せてしまうなんて！

男として生まれた朔にもあの痛みは分かるだろう。分かっただろうのかそれを！と、内心朔は絶対に怒らせたくはないと誓う志貴だった。

時は進み、志貴と朔は森を進んでいた。暗がりの森は方向感覚を狂わせ、自分が何処から来て何処に向かいたいのかわかせる。志貴は自分が飽きるまで進むと決めており、朔はそんな志貴を先頭についていくのみである。そもそも目的地があるわけでもない。

あの巨大キノコから逃げおおせる事に成功した二人はとりあえず現在地がどこかも分からぬまま好きな方向、主に志貴の進みたい方向へと進んでいる。倒壊した巨木を乗り越え、苔生した岩石に腰掛け、幾重もぶら下がる蔦をかわし。最早森は暗さを増して木々の隙間から差し込む光は少なく、湿気が生じ空気は少し涼しくなっている。その仄かに暗い森を進むのは若干の不気味さが生じるものなのだが、志貴の目的は冒険であり、また散策である。これくらいバッチコイと意気込んでいた。

「ねえねえ、兄ちゃん」

「何？」

それでも多少の不安はあるため、志貴はひっきりなしに朔へと話しかけていた。いくら冒険心という火薬があれども、それは爆発するだけのものでありそれを揺ぎ無く持たせ続けるのは困難である。森はその本性を曝け出し、やがて志貴に己の幻想がどれほど輝かしく、そして脆いものかを時機に教えることになるが、それを知らぬ志貴はこの身に巣くう不安を持って余しており、それは朔と会話をすることで何とか誤魔化していたのだった。

「兄ちゃんはいつも森で何してるの？」

「訓練」

「どんな訓練？」

志貴としてはそれも気になるところであつた。朔は黄理に直に教えを受ける。それは志貴でも出来ぬことであつた。確かに志貴自身、黄理の子という事で才はある。この若さにしてその片鱗を見せているだけでも充分だとは思うが、しかし、それは朔を見ると少々見劣りせざるを得ない。

七夜朔は里で密かに鬼神の子と呼ばれているように、その才は留まることを知らない。黄理の訓練に喰らいつき、更には大人の七夜との戦闘に勝利するなど、志貴には出来ない事を達成している。志貴にはそれが凄くて、そして少しだけ悔しいと感じていた。志貴と朔は同年代の子供であり、その歳の差も二つしか変わらない。しかし、差は縮まるどころか更に離れているような気がするのだ。なので、この機会に何か特別なことをやっているのか聞こうと思ったのである。

「閃鞘、閃走で森を動き回る」

「……それだけ？」
「ああ」

しかし、朔の答えは志貴の望むようなものと違っていた。

閃鞘、閃走。それは七夜に伝わる空間利用術である。関節の可動域を広げ強化することで可能な、人間には本来出来ない急制動及び加速を生み出す七夜の術理である。

無論、志貴は七夜であるので、それは使える。朔を除けば志貴は里の子供の中で一番にそれを使えるようになったのだ。当然自信もある。なので朔の答えは少し期待はずれであった。

「むむむむ。んじゃなんで兄ちゃんはそんなに強いのか？」

倒れた巨木の上を進みながら志貴は言う。どれほどの場所にあったのだろう。その樹皮は苔むしている。

「強くない」

朔はそんな志貴を見ているのかも分からぬ茫洋な瞳。その瞳に森の姿が写されている。

「え、なんで？兄ちゃん強いじゃん」
「強くない」

志貴の言葉を跳ね返し、朔は言う。

「御館様のように、強くない」

なんだそれ、と志貴は思う。黄理は志貴の父親であり、七夜の当主なのである。それはつまり父はこの七夜で誰よりも強いという事で、その父のようには如何な事だろう。

「御館様には、まだ遠い」

目標が高い、という事なのだろうか。それならば朔はまだ先を見据えていると言う事か。

「ふっん……」

そうして志貴は流したが、誰が知るだろう。

朔には、其れだけしかないのだと言うことを。

志貴はちらりと、朔を見た。

藍色の着流しを着た子供。鋭い目つきに、あいも変わらずの茫洋な瞳である。子供らしくない雰囲気を持った、志貴と同じくらいの歳の少年。抜き身の小太刀を左手に握るその身のこなしは今でも重心にブレがなく、いつでも戦闘可能なポジションへ極自然に移動している。

もしかしたら、僕を守ろうとしてるのかな。

何となく志貴は思い、朔に真意を聞こうとして。

その姿が掻き消えた。

「あれ？」

そして志貴はそれと直面した。

最初、志貴はそれが何なのか理解できなかった。

何か、影が躍り出たのだと思っただけだった。

だって信じられないだろう。

今しがた朔がいた場所に。

鳶が襲い掛かってきた。

「な、なにこれ……」

生きてるように、蠢くように、その蒼むした色の鳶は幾重にも襲い掛かってきたのである。森を構成する木々の隙間から、地面から、草葉の中から、それは何本も現われ朔がいた場所の埋め尽くす。その様はまるで触手。

視界一杯に現われたそれは、まるで捕食しているのかのようだった。

そして、それらは志貴を見た。音にしたらぐりゅん、とした感じで。

「ひっ!?!」

ヤバイヤバイヤバイ、と志貴の本能が悲鳴をあげた。いきなりのピンチである。なんだか分からぬが、アレに捕まえられると十八禁もしくは「ヒギイっ!」どころではない展開がやってきそうな気が

した。

もしかして朔はそれを知っていて姿を消したのか！？

瞬間である。それらが志貴に向かって襲い掛かってきた。

「う、うわあああああああ！！」

志貴は悲鳴をあげながら逃げた。咄嗟に閃走でそれらを振り切ろうとしたのだが、其れよりも早く触手は志貴を捕らえようと動きまわる。襲い掛かるそれらはまるで土石流のようであった。

束となつて迫るそれを寸でのところかわし、次は何処から来るのかと確認をする前には地面に振動。咄嗟に飛んでみると、そこから木の根つこのようなものが生えてきて、これまた志貴を狙う。それを間一髪と安心する暇もなく、飛んだ志貴の背後から蔦が左右分かれて襲い掛かってきた。志貴は飛んだことが間違이었다と、何とかして身体を捻り、それを避けた。

しかし、志貴の閃走、また閃鞘は未だ使えるのみであつて、極めているわけではない。何が言いたいのかと言えば、朔と比べ圧倒的に訓練が足りないのである。次いで状況判断、または空間把握に関しては今までこのような体験もしていなかったので論外である。なので志貴は簡単に追い込まれていたりする。志貴としても必死である。次々と襲い掛かる植物たちに対処が追いついていない。何とかして回避はしているが、どうにも危うい。そして志貴自身このような状況に対応することも出来なかった。予測を立てることもなく、目の前に現れる障害をやり過ごしていく。

故に、志貴はピンチだった。

「こんのおおおおお！！」

目まぐるしく変化していく状況に志貴は避けるために、倒れた大木の苔むした樹皮を走っていく。何とか気合で乗り越えようとするが、既に視界は襲い掛かる植物で覆われていた。最早脱出するには包囲網が完成しつつある。僅かな隙間しかなかった天井は覆われ、日の光は遠く轟く植物たちの動きだけが残り、志貴が逃げる樹皮の先に、なにやら枯れ木の化け物が鎮座していた。

それに気付いた志貴、動きが一瞬遅くなる。

そして、植物たちは当然それを見逃すはずがなかったのである。

「あ」

やべえ、これ死んだ、と志貴は視界に迫る植物たちを見た。植物たちは呆けるような志貴に容赦なく殺到していく。

志貴は、自分の未来を想像し。

「ぐええっ！？」

その首根っこが思い切り引っ張られていく。

突然の衝撃に志貴は噎せる。そしてそのまま志貴の体はバウンドするように樹皮を進んでいく。引っ張られる感覚に、志貴は何事かと着流しを引っ張る存在を見やれば。

朔が、いた。

どこからか現われた朔はそのまま志貴をその背に乗せて、おんぶの体勢となる。

その時点で朔に助けられたのだと状況を把握した志貴は、朔に礼を言おうとしたのだが、朔の軌道に啞然とし言葉を失った。

加速。急制動。地上にいるかと思えば、いつの間にか二人は空にいた。視界が流れる、なんてモノではない。急激な移動に、志貴は気付けばそこにいたのである。天を覆い尽くす木の葉が手を伸ばせば触れられそうな距離にあった。空にいる朔めがけ、再び触手が襲い掛かってくる。志貴はその量に悲鳴をあげた。どういうわけか、先ほどまでとは段違いの触手がやってくる。それはまるで鉄砲水の勢いで、複雑に絡まりあうかのように迫る。

だが、再び志貴は時間を加速させたような感覚を受ける。空気が圧力を持った。それに志貴は突っ込んでいき、自分が大海に包まれたような気がした。

その急加速に景色が見えない。

思わず目を瞑った次には、朔は樹皮を走っていたのである。どういう軌道を描いたのか目を瞑ってしまった志貴には分からないが、あの決して近くはない間隔をどう詰めたのか。しかも着地の瞬間が分からなかった。

志貴が驚いている合間に朔は風を切って走る。その直線状にいる、枯れ木のような化け物に向かって真っ直ぐに。

「ににに兄ちゃん!?前、前前前!」

志貴の慌てように気付いているのか、朔は反応すらせず、それに向かっていく。真逆、そのまま突っ込んでいく気か。ヤバイ、朔ならやるっ、と志貴は恐怖を抱いた。

目前にいる枯れ木は、巨木がそのまま枯れてしまったような木でありながら、それには長い枯れ木の手足がついていて、その胴体のような場所には顔らしき穴があった。先ほどのキノコもそうだが、この森は何なんだと志貴は始めて来た森に改めて恐れを感じた。しかし、そんな志貴なぞ関係ねえ、と朔は走る走る。朔の行進を止めるかのように植物たちが襲い来るが、それを軽々と朔はかわしていた。

すると、志貴はこの状態にあつて何気なく後方に振り向いた。なかなかいい神経をしているが、ぶれる体勢と突き進む朔に現実逃避を始めたのである。

だが、それが間違いだった。

「げっ！」

なんか巨大キノコが腕を組みながら浮遊し迫ってくる。それも夥しい数のキノコたちを引き連れて。回復したのかとか、またこいつかとか、股間のキノコは無事だったのかとか、なんで浮遊しているのかとかは考えなかった。

「もう、いやだなあ」

ただ志貴は森に来たのを後悔し始めた。

その眩きも力なく、思考は現実逃避をしたままである。

そんな志貴を置いて行き、朔は迫るキノコ、待つ枯れ木の化け物に挟まれてしまったのであった。

もうやべえ、もう死ぬ、と志貴は今日何度目かも分からぬ死を予想した。

そして朔は枯れ木に突撃していき、

するりと、その隙間を通っていった。

「あ、あれ？」

予想と異なる展開に戸惑い、志貴は横切り後方に置いていった枯れ木やキノコを見る。

「」

「っ！！！！！」

「

なんかガチバトルしていた。

キノコは組んでいた腕を解き、枯れ木は鎮座から立ち上がり。

拳と拳が唸りを上げながら互いの顔を殴打していた。なんだろうか、彼らが殴るたびに困う木々が揺れる。怪獣大作戦もかくやの戦いっぷりである。

「ああ……」

しかし、志貴はそんな光景を見ても納得するしかなかったのだ。

いや、なんかもう受け入れるしかないなあ、と志貴の脳は判断するのであった。

なかなか賢い脳である

時が少し経ち、志貴はある程度進んだところで降ろされた。植物たちはもう襲いかかってこず、森は落ち着きを取り戻し、あの怪物どもの殴り合いは夢だったのだと志貴は自身にそう言い聞かせた。

「あ、ありがとう兄ちゃん」

朔に助けられたのが嬉しくも恥ずかしかったので、志貴は少し頬を赤くしながらそっぽを見る。

しかし、朔は「別に」とそっけない態度であり、ちよっと怒っているのか、と志貴は思ったが考えてみればいつも通りの事だった。

だが、落ち着くと今自分は何処にいるのかと志貴は不安が増す。最早森には常識が通用しないと知った志貴は帰りたくなってしまった。だが、帰ろうにも今自分たちが何処にいるのか分からず、里が何処にいるのかすら分からなくなってしまった。迷子だと自覚が芽生え始めたのである。

「ねえ兄ちゃん。ここ、どこ分かる？」

「分からない」

「ですよー」

とりあえず朔に聞いてみたが、朔は首を横に振るだけだった。

さて、本格的に焦り始めた志貴は考える。幼い脳を絞って考えてみる。やれる事は少ない。帰る手段としては来た道を戻ればいいだけなのだが、植物たちに襲われたのと、朔に行き先を任せっきりだったので、そんなもの把握していなかったりする。闇雲に森を進んだら、それこそ森の餌食になりそうだし。

あれ、帰れない僕？と志貴は絶望する。ではここで野宿もありえるのか、と志貴は赤みを帯び始めた空を見やる。夕刻が近い。

周りは更に深さを増した森。ジメジメとしていて空気の冷たさも増している。現在二人がいるのはそんな森の開けた場所であった。そこには苔むした地面と、志貴ほどの大きさがある石がチラホラとある位である。この場所で自分は寝るのか、と志貴は思った。

幸だったのが朔がいる事だろう。朔ならなんか普通に野宿ぐらい余裕そう。適当に食べ物も取ってきそうだし、寝床も確保できそう。いや、寝床は無理だろう。朔はそのところ無頓着っぽいし。ただ、朔がいるという事が良かった。寂しくない。自分が兄と慕う少年の存在に志貴は感謝した。

だが、そんなすぐさま野宿に気持ちを持っていけるほど志貴は大人ではない。普通に里に帰りたいし。

「でも、兄ちゃん。どうしよう」

取り敢えず志貴は再び朔に聞いてみた。

隣に朔はいなかった。

志貴から離れるように朔は歩いていた。

「兄ちゃん？」

「……」

「ちょ、兄ちゃんっ」

慌てて朔に追いつがる志貴だったが、朔は言葉も返さなかった。

それを不信に思った志貴は取り敢えず朔の後ろについていく。はて、朔がこのように志貴の言葉を見捨てるのは珍しい。勘違いされがちだが、朔は話しかければ反応を示す。ただ極端な無愛想と無口なだけである。話しかけても言葉を返さぬこともあるが、しかしそれは無視ではなく、他に優先すべき事があるからなのである。

いつも朔の側にいる志貴だからこそ気付いた事。これが訓練以外は最低限しか関わることのない黄理や、食事を作り世話を行っている叔母も気付いているかもしれないが、志貴としてはそれを自分だけで気付けたことが嬉しかった。

朔は進む。木々の合間を抜け、広場を少し離れ、岩場に囲まれた場所に出た。

静謐な空間だった。冷たい湿気漂う、森の聖域のようにも思えた。

そしてその中央。苔むした地面。

そこに、一輪の赤い花があった。

「志貴」

それは、彼岸花と呼ばれる花だった。

美しい花であった。葉もなく、花弁だけの植物。赤い花弁が咲き誇る、たった一輪の花。他に彼岸花は見当たらず、これしか生えていないようである。

しかし、志貴にはこれが一体どんな花なのか知らなかった。

「なあに、兄ちゃん？」

彼岸花へと近づき、朔はそれを見下ろしたまま話しかけてきた。

「これは、綺麗？」

たった一人で咲き誇る彼岸の花を志貴は見入った。その孤高にも似た存在感は、まるでこの場所がこの一本の花のためだけにあるようにも感じられた。その独特の姿と、細く長い赤の花弁は、今にも折れてしまいそうで儂い。

「うん……綺麗なんじゃ、ないかな」

「そう」

そして朔は少し間を空け、

「これは、綺麗なのか」

と一人呟いた。

肯定や否定の混じらない、更には納得すら滲んでいない、透明な

声であった。

「兄ちゃん。もしかしてここ来た事あるの？」

「ああ」

「！なんで言ってくれないのさっ」

「そう聞かなかった」

「分かってるって事じゃん」

「ここが何処なのか、分からない」

「そうなの？」

「知っているだけ」

「……」

「……」

後日談。 と言うかその後の話。

志貴と朔は帰り道を知っていたと発覚した朔の先導にしたがつて里に帰ってきた。その途中仰向けに倒れ伏した巨大キノコと枯れ木を見たが、どうやら引き分けに終わった様だった。

志貴と朔が里に帰ってきたのは夕刻も過ぎた真夜中の事であった。流石にお腹が減ったなあと思いつながら里に帰ってきた志貴は、里の大人全員による捜索隊が組まれていて、運よく、あるいは運悪く、そこで志貴と朔がいかにか可愛らしいか演説している黄理と出くわしてしまった。

そこで志貴と朔がいかにか素晴らしいかを声高々に語っている黄理の姿に一瞬驚いた志貴は、その話している内容に照れてしまったがそれは割愛。

討伐隊が森に向かう前に帰ってきた二人は良かったものの、志貴は母に頬をはたかれた後、どれだけ心配したかを教えられ申し訳ない気持ちになった。翁にも軽い説教を受けてしょんぼりした。その側では朔も叔母に怒られていたが、全く話を聞いていないようだった。ただ叔母の手に朔の下着が握られているのが気になった。

その二人を見て大人たちは良かった良かったと喜んでそのまま宴会へと突入した。無論一番はしゃいでいたのは黄理だったとここに記しておく。

さて、大人たちが里の広場にて宴会騒ぎで盛り上がっている頃、志貴は朔の離れに訪れていた。夕餉を済まし、風呂にも入り今夜は朔と一緒に眠るためであった。

離れに訪れた志貴を朔は特に何も言わず受け入れ、二人はひとつの布団で就寝についた。

そして、今日の出来事を思った。

今日は大変だった。意気込んで森に行ってみれば歩くキノコに遭遇するは、そのキノコと朔は乱闘するは、敗れたキノコたちが合体するは、植物に襲われるは、枯れ木の化け物に遭遇するは、その枯れ木と巨大キノコのガチでセメントを目撃するは、迷子になるは。

兎も角一言では語りきれぬほど、今日という日は濃い一日であった。

確かに森は危険で、一杯怖い思いをしたが、それ以上に楽しかったと志貴は満足していた。未知との遭遇はドキドキしたし、言った

こともない場所に行くことはワクワクした。

勿論、また行きたいとは思わないが。

志貴は隣で寝ている朔を見る。朔は耳を澄まさなければ聞こえないほど静かな寝息をたてて眠っている。志貴はそんな朔の無防備な寝顔が好きだった。この時だけは朔は自分とあまり変わりのない子供のように見えるからだ。

朔はどうだったのだろうか、今日という日を楽しかったと思っているだろうか。

あの彼岸花を思い出す。あの場所で誰にも知られず咲いているたった一輪の花。それは凄く寂しくて、儂くて、その彼岸の花に志貴は朔の姿を重ねていた。

もし、志貴があのだ彼岸花ならきつと寂しくて凍えてしまう。あの湿気冷たく鬱蒼とした森の奥地。きつと誰も訪れず、そのまま枯れてしまっだろうか。

だけど、朔はそのまま何も思わず、ただひとりで咲いて、そのまま枯れてしまっに違いない。きつと寂しいだとか、辛いとか思わずに。

それは凄く悲しいことだと志貴は思った。

志貴は眠る朔にそつと抱きついてみた。

温かい、けど何の反応もしない。寝ているから当然だ。

あの赤い花と同じように、朔もまた一人なのだろうか。

誰とも心混じらず、ただひとり朽ちていくような、そんな在り方。彼岸の花のように。

それを思うと少し泣きたくなって、志貴は強く、自分の温度が朔に伝わるように強く抱きしめた。

「何？」

朔が軽く目蓋を開け、志貴に聞く。

その僅かに開いた茫洋な瞳には志貴の姿が映し出される。果たして、朔は志貴の事を見ているのだろうか。

だけど、それを聞くのは怖かった。もし朔が志貴なんか見ていないと知ったら志貴はきつと泣いてしまう。

だから、志貴は何も言わず、朔の身体を抱きしめる。

それだけでもいいような気がしたのだ。側には自分がいるのだと、伝えたかった。

そんな志貴にどう思ったのだろうか、朔は志貴の頭をその手で撫でた。

今までも、こんな風に朔に頭を撫でられる事があった。朔の掌は無遠慮で、全然優しくない。だけど、志貴はその掌に安心を抱くのだ。

その掌に気持ち良くなり、志貴はそのまま眠りについた。

遠いどこか。

月の光に照らされ、彼岸の花が、風に揺れた。

番外編 ななやしき君の冒険 後編（後書き）

この番外編は悪ふざけで出来ています。六です。

この番外編はプロットが出来上がっていたのですが、出来上がったの七夜襲撃の真っ只中。流れの雰囲気をぶち壊さないためにも投稿しませんでした。今投稿しても何かおかしいなあ、としか思えません。

さて、本編の流れがあらかた出来上がりましたが、流れを見て一言、これは酷い。

いや、もう月姫ファンの皆様方からボコボコにされる予感しかありません。戦々恐々あなおそろしや。

しかし、其れで行ってみようと思います。朔を主人公にするために！これからも応援よろしくお願いします。それでは、また。

以下今回のおさらい。

叔母は朔たちが里に戻るまで志貴の母に延々と説教を受けていた。

第十一話 満ちる(前書き)

今回は前書きなし。

第十一話 満ちる

食事を作る。

それだけの作業が楽しくなったのは、いつからだろう。

食事を作りながら相手に満足してもらいたくて、もっと頑張ろうと思った。

今度こそは反応してくれると期待しながら、無表情の少年の姿を想った。

そしていつもどおり何の反応も示さない少年に敗北感を覚え、次こそは、と執念の炎を燃やした。

何よりも、二人で食事を取ったあの瞬間は、何よりも温かく思えた。

何を考えているかわからない少年だったが、私が作った食事は欠かさず食べてくれていた。

それでよかった。

それだけで、私は良かったんだ。

だが、それはもう、訪れない。

母屋の居間にて一人昼食を取る。今屋敷内部には私以外の人間はいない。たまたまそのような事になっただけであって、私自身この状態を望んでいた訳ではない。稀な事だ。

屋敷の中は本当に静かで、自分が屋敷の中ではなく、暗い宇宙に一人だけにいるような孤独感があつた。

たった一人の食事。それだけだと言うのに、なんて味気なく、寂しい気持ちになる。以前ならば美味いと感じていた食事だったが、箸の進みは遅い。

胸の内に寂寞が巣くっている。それはいつの間にか私の中に宿つて、そのまま離れてくれない。そしてそれを自覚するたび、私はどうしようもなく叫びたい衝動に駆られる。この状況、理不尽から生まれたこの現状。そして自分。それら全てを纏めた感情の一片までも吐き出して、そのまま洗い流してしまいたくなる。

だが、そんなことをしても意味がないことは百も承知していた。私は子供ではない。子供でいられる時間は、疾うに過ぎている。駄々をこねて泣き叫んでいるだけの子供でいてはならない。子供ではない。

だけれど、あの子は、朔はどうだっただろう。

朔は今、私と同じように昼食を一人でとっているのだろうか。それも食事をとっているだろうか。

兄様の決定、朔に対する接触禁止令による隔離から幾ばくか経つた。時は流れて季節は移ろい、冬の冷たい空気が里を支配している。朝には地面に霜が降り、本格的な冬の訪れはもう僅かだろう。

そしてその冬の中で、朔は生きている。たった一人で。

あの日から直接的な接触を禁じられた私は朔といることが出来ない。一緒に食事を取ることも、何気ない時間を共に過ごすことも叶わない。私に許されていることは、ただ朔の食事を作るだけ。共に食事を取ることには許されていない。食事を作って朔と顔を合わすことも出来ず、縁側に置いておくだけ。

無論、私はこの状況を受け入れられない。当初、隔離の旨を一方的に告げられた後、私は兄様に問いただした。

なぜそのようなことをしたのか。

真実朔の事を考えたつもりなのか。

だが兄様は私に朔の現状を言ったうえで、里の者を守らなければならぬと、当主の顔で私に言ったのだ。

兄様はこの七夜の当主。七夜を守り、続けさせていくことが彼の義務。そのためならば、何かを切り捨てていかなければならない。そのためなら、かつて私たちの兄だった人間を、父となつたばかりの男すらも排さなければならぬ。

それはわかる。わかっている。私は当主としての兄様の姿を幾度となく見てきた。それが必要なことなのかもしれないと、暗がりでも囁く自分がいることも事実。だが、だが。

噛み締めた唇から鉄の味が滲む。

気付けば箸が止まっていた。

この身に宿る感情は後悔か、悲嘆か、あるいは罪悪か。

少し前のこと。私は自身の衝動を押さえつけることが出来ず、朔に会った。誰にも知られず、秘密裏に。

懸念もあった。手をつけた形跡の見られない食事や、屋敷に戻る時刻の遅さ。遠目に見ても明らかに休息を取っていない。だから、この目で確かめたかった。だが。

今、ここに告白しよう。私はあの時、安心したいがために朔へ近づいていったのだ。愚かな私は、自身の不安を払いたいがため朔のもとに向かったのだ。朔の事を考えていると自身では思っていないが、それは自身に戻る行動でしかなかったのだ。

それがどれほど、愚劣な行いだっただかも、考えぬままに。

「朔……」

思い浮かべる。夕闇の中、朱にも黒にも溶け込むように佇んでいた朔の姿を。

茫洋な気配、記憶よりも少し高くなった身長、それに対し削げた肉体。引き締められ、以前よりもその身体は子供特有の丸みを消失させていた。

あの時、私には朔の姿が幽鬼に見えた。

そしてあの目。

「朔っ……」

無機質な目。何者にも興味を持たず、何者にも関心を持っていないあの目。それが、深くなっていた。鋭い目つきながらもその中身は虚無そのもので、どこか闇色を孕み、それが私を映し出している。いや、あれは私を見てはいない。朔の視界の中に私がいるだけだ。

兄様の禁止令から幾ばくの時が過ぎた。それは短いと言うにはあまりに長く、長いと言うにはあまりに遅く、致命的だった。朔は、変わってしまった。

いや、朔を変えてしまったのは、果たして誰だ。

「っ」

何もかもが言い訳だ。

何者からも隔絶された子供にどのような影響が及ぶのか想像することもできないと言うのに、安直な決定で私たちは朔の人間らしさを奪ったのだ。

唇を噛み締める。そうしなければ嗚咽が漏れそうだった。

だが、そんなこと私に許されるはずがない。

朔は何も言わなかった。そして泣くこともない。

ならば、私が泣いていいはずがない。

わたしは、さくのそばに、いようと、きめた。

かつての誓いが、虚しく響いた。

「僕は兄ちゃんと一緒にいたいのに、だけど皆駄目って、行っちゃいけないって言うんだ。……僕は一緒にいたいだけなのに……、ねえお母さん、何で皆は兄ちゃんと一緒にいちゃ駄目だって言うの？」

「……」

「お父さんも答えてくれなくて、翁も何も言ってくれないし」

「……」

「だから僕、お母さんに聞きたいんだ」

「そうですか……」

そう呟いて、布団に潜り込んでいる志貴の額を母は優しく撫でた。

「志貴は優しいのですね」

「僕は優しいの？」

「皆怖いのです。何かを失うことが、誰かがいなくなることが。傷つくことが、傷つけることが。だから朔を遠くに置いた」

「どうして？」

「皆そこでどうしてと思わない。いえ、思わないようにしています。それが一番悪くない事だと、自分に言い聞かせているのですよ。だけれど、それが一番皆痛いと思気付かないふりをしているのです。しかし、志貴。あなたは違った。気付いた。痛みに向き合えた。だから、あなたは優しいの」

志貴にとって母は誰よりも優しい人だった。厳格な父や拠り所の朔、朔の世話をしている叔母や相談役の翁とも違う、柔らかな雰囲気

気を持った女性。それが志貴の母だった。そして志貴はそんな母から優しいと言われることが、くすつくつたいながらも少しだけ誇らしく思えた。

「痛いことは悲しいです。だけど痛くないと思うことが一番悲しい。だからまだ大丈夫だと私は思っています」

「なにが？」

「私たちはまだ踏み出せません。でも、志貴、あなたならもしかしたら……」

「お母さん……」

そして母は少し微笑んだ。

「もう夜も遅いです。おやすみなさい、志貴」

「……うん、おやすみなさい、お母さん」

襖を閉じる母に、そっと志貴は呟いた。

夜。敷かれた布団の中、志貴は天井を見つめていた。

僅かばかり開いた障子の隙間から差し込む月光が眩しい。

脳裏には朔の姿があった。

変わっていく朔の姿があった。

それをどうにかしたくて、でもどうすることも出来ない自分はまだ傍にいるだけ。それが悲しくて、父と喧嘩して、母に泣きついた。

そして今日もまた、志貴は朔を迎えにいった。

父は朔と会いたくはないのだろうか。その判別はつかない。

ただ、その役割は自分がやりたいと思った。せめて、たった一人でいる朔のその側にはいたかった。

だけど、それ以上に近づくことが出来ない。

朔は見えていない。何も見えていない。誰も見えていない。茫洋な瞳はそこではないどこかを映し出しているように思える。

それが志貴には悲しくて、その度に志貴は朔の袖を掴む。それ以上の上のことは出来ない。

だけど、ここで立ち止まっては駄目だと気付いている。

「僕が、頑張らないと」

周りが変わらない限り、朔は変わり続けてしまう。きっと志貴の手の届かない場所に行ってしまう。

それは、それだけは嫌だ。側にいたい、側にいて欲しい。あの兄と慕う少年のもとにずっといたい。

だから、志貴は決めた。

「明日、一緒にご飯食べよう」

もっと近づいて、あの頃の二人に戻ろう。そうすれば、他の人もきっと元通り。父は普段通り気難しい顔で朔の訓練をして、母は微

笑んでいて、叔母は冷たいながらも優しくなつて、翁は温かくなっている。

だから、僕が頑張る。

そう決めた。

だから、今はお休み。

目蓋を閉じる。

冬の外気に部屋が少し寒い。志貴は布団にもぐりこんだ。

部屋に入り込む月光は閉じた目蓋でも痛いほどに眩しい。

そのまま志貴は眠気に乗っかり眠りについた。

月が、満ちる。

「槇久どの。足並み揃いました。行けます」

夜の帳の紛れ込み、化生は訪れた。

「これは、肅清だ」

かつての恐怖を抱き込んで、男は眩いた。

「行くぞ」

その懐には鬼。人外の化け物。

殺人鬼を滅するために鬼を引き連れて、男はやってきた。

頭上には満月。忌々しいほどに輝く月明かり。

「七夜黄理を殺れ」

逢魔が時。

第十一話 満ちる（後書き）

まずは謝罪です。

ごめんなさい。

本編進めます。番外編よりもこちらのほうが浮かんできて仕方がありません。

番外編は気分が乗れば書きます。どちらと言えばアレは補足（私の妄想）です。

次回更新は明日です。

第十二話 月輪の刻（前書き）

題名は、がちりん、と読みます。

今日はお休みなのでこの時間に投稿。

では、ごうげ。

第十二話 月輪の刻

七夜の森は果てしなく広大であり、鬱蒼を成す森は正しく樹海と呼ぶに相応しい。太古の匂いを感じさせる緑の要塞、生者が入り込めば抜け出すことの叶わぬ自然の墓場である。

周囲を結界が囲み、その内部には罾が至る場所に設置され、結界によって変異した動植物たちが跋扈する七夜の城塞。

だから大丈夫だろう、とは誰も考えはしない。もとより七夜には敵が多すぎた。

例え退魔から抜け出そうとも、その血の業はあまりに深く、いつまでたつても忘れはしない。

それゆえに今日の夜は当然のことだった。あまりに必然だった。

片やかつての苦痛を、恐怖を忘れることが出来ずにいた混血。

片やかつては魔を狩る絶対の殺し屋。

その関係性は簡潔に尽き、雑多なものを含みはしなかった。

即ち殺しあう仲。

仮初の協定を結んではいたが、薄氷と呼ぶに相応しい薄っぺらさの関係は安易に瓦解し、やはりこうなるのが運命であったと、誰もが思っていた。

馴れ合いは無く、歩みよりもまた然り。互いに理解はすれども共感はず。

今宵は殺し合い。どちらかが滅ぶまで戦い続けるのみ。

その様はきつと、天上の月輪がちりんのみが覚えている。

森の中を武装した男たちが駆けていく。

物音は限りなく静かに、それでいて獣のような素早さで。満月を頭上に掲げ、獣道さえないような森の中、木々の合間を縫って、夜の森をひたすらに進んでいく。その手に銃器を携え、身に纏うのは戦闘服。顔を隠すような酸素マスクを点けたその出で立ちはいかに戦争に向かうかのごとくに見えた。

男たちは無線機と手信号のみで連携を取り合い、僅かながらも着実に進んでいく。目標は未だ遠い。がさがさと森の中、不規則のように、それでいて足並みの乱れぬ進行は正にプロのそれであった。

しかし、それが破られたのは、森に侵入して二十分も足らずの事だった。

「いぎや ああああああああああああああああああああああああああ
あああああつ!?」

突然、どこからか仲間の絶叫が聞こえた。

「!?!つ、状況報告っ」

「状況不明っ、何者かの襲撃にあっていますっ、う、うわあああ
!!!」

散開していた仲間たちに無線で状況を聞くが、返ってくるのは悲鳴のみ。

そして森の中、それが契機だった様に、遠くを進んでいた者たちからも次々と悲鳴が木霊した。

「た、助けてくれえ!!!」

「いやだ、死にたくない死にたくない死にたくっ

っ」

そして、何かが潰される音。

暗い夜の森の中、そこ等彼処から悲鳴が聞こえてくる。状況は分からずじまい。だが、仲間が今この瞬間何者かに襲われているという事実揺るぎは無い。

『孤立するな！全員密集し周囲を警戒しろ!!!』

しかし、返ってくるのは悲鳴、そして銃声。いたるところで絶叫が聞こえ、そして遠のいていく。まるでどこかに連れ去られていくかのようにも聞こえた。

そして、男の声に集まったのは僅かに五人ばかりだった。

「一体何があつたんだっ」

「分かりません、何か生き物のような者がいたとしか……」

「生き物、だっ」

その報告に絶句が漏れる。

そんな訳も分からないようなモノに、自分たちは窮地に立たされているのか？。

そうしている合間にも仲間達が何かに襲われていく。何かに引き摺られる音、何かを潰す音、砕く音。水っぽいモノが叩きつけられて様な音までする。瞬時にパニック状態と化した森に周囲を警戒しても木々が揺れるのみ、悲鳴をバックサウンドに地獄が展開していく。

そして、誰とも言わず、何かに気付いた。

「おい、なんだ、あれはっ」

月光が影となり、詳細は分からない。

視線の先、森の中、何かに引つ張られるように自分たちの隊員が宙吊りにされていた。

先ほどから悲鳴が聞こえる。最早何を言っているのかも理解は出来ない。

なにか触手めいたものがその隊員の体に絡みついでいて、それはやがて強く手足に巻きつき、そして。

「っ!？」

その体をいとも簡単に引き千切った。肉の千切れる形容しがたい

音がして、ぼくん、と骨の解体された音が隊員達の耳に届く。

影でも分かる、隊員の中身が零れて見るも無残な光景が。

ここに来て、生き残っている隊員は恐怖を覚えた。

ここはどこだ、俺たちはいつの間にか奈落に墮ちたのか。

「きききき、来たぞおっ!？」

いつの間にか、周囲を囲まれていた。そしてここまで近寄って、その触手が植物だということに隊員たちは始めて気がついた。のたうち蠢く植物は生き物の一部のようにも見えて、ここがこの世ではないような気がした。

「なんだ、ここは」

それは誰の呟きだったか。

「なんなんだここはっ」

そしてまた一人、一人と植物に連れ去られ、飲み込まれていった。血飛沫を撒き散らしながら。

「なんなんだお前らあっ!?!?!?!」

足元の地面から、何かが生えてきた。

ズン、と重く響く。

それが何かさえ分からぬまま、男の体は半身となった。縦に裂かれた男の意識は消える。倒れる間際、中身を零しながら、差し掛かる月光に照らされたその様は花にも見える。

そして木霊するのは悲鳴ではなく、ナニカの咀嚼音。

武装。

それが示すことは自分が弱いことを公表していることに他ならない。銃器を装備し、防護服を身にまとい、呼吸器によって顔を覆いその様は一見屈強のようには見える。だが、それだけだ。それ以上のことは期待できない。

男に自信などない。先も見えぬ森を老人の先導に進み、周りを武装した私兵に守らせ、しきりに辺りを警戒してはいるが、それは即ち不安と恐怖が緋い交ぜとなっているからに他ならない。

かつて受けた恐怖。それを思い出す度、男は男でなくなってしまうような気がした。あの目が忘れられない。斎木を売り、七夜の手に巻き込まれたあの時、倒れ伏す自らを見て、あの男は笑っていたのだ。

七夜黄理。

それが、あの男の名。混血の天敵であり、男に恐怖を刷り込ませた死神の名だ。

あの屈辱、あの陵辱を忘れはしまい、と自身に呟いた日々。だが

それは恐れを忘れることが出来ぬ自身の弱さであった。

目前、先頭を歩む老人に目を見やる。まるで妖怪のような男だ。異様に高い身長と長い手足、擦り切れた着物を着た老人。

この男の先導によって男たちは進んでいる。

……先ほど、先行していた部隊が壊滅したと報告があった。

妖怪の言を無視し、先ずはルート外から展開し侵入をしていたのだったが、ものの三十分にも満たず、無線の向こうから救助要請があったが、それすらも無駄に終わった。

悲鳴のままに助けを求めた隊員が、何物かによってその後食い殺されたらしい。

それを聞き、焦燥を感じる男を見て、妖怪は笑ったのだ。

『ほれみる』と。

その金属のような声を軋ませて、妖怪は言ったのだ。その全てを嘲うかのような表情は男に向けられていた。

神経を逆撫でるような言動。それがひたすら気に障り、不快だった。

ぎしり、と奥歯を噛み締めて男は妖怪を睨んだが、それすらも妖怪を楽しませる要因にしかないようだった。

男にとって妖怪はただ不快な存在であった。一世紀近くも生きて

化石でありながら、その発言は決して軽くなく無視できるものではない。それでいてその欲求や言動の勝手さに腸が煮えくり返ることもしばしば。

男は妖怪を信用はしている。だが信頼は微塵も無い。

もともとから被虐意識の強い男だった。他人に信を置くなど先ずありえない。

しかし、妖怪がいなければ男たちが既に骸だった可能性もあった。

「ここから先は大丈夫だ。獣道を辿ればまず死にはしねえだろう」

森の中、月光を纏い妖怪が口ずさむ。その楽しみようは出来の悪い劇を観賞しているように、見下している。

「俺の案内はここまでだ。なあに、安心しな、油断なく殺し合えばいい」

そして拉げた笑いを漏らした。背筋に寒気が走るような不快を感じ、男は鼻を鳴らす。

「いいだろう。案内感謝する」

心にも無い言葉を口にするが、不機嫌さが丸分かりの声音に妖怪は愉快さを増した。

「ひゃひゃひゃ……、老人への感謝痛み入るな。それじゃ気張れ、気張って殺される。それと」

ずっと、老人は男に近寄り、その耳元に囁く。
そこにいたのは先ほどの嘲う老人ではなく、百年近くを生きてきた妖怪の醜悪な邪笑だった。

「約を違えるなよ」

そうやって妖怪は森の中に消えていく。その確かな足取りはこの森の全てを分かっているような自信が見えた。

その背に感じる殺気の混じり視線さえも可笑しいと体を揺らしながら。

そしてその場にいるのは武装した男たちのみ。

いつの間にか、あの妖怪が発していた空気に吞まれていた隊員達は急いで状況を把握していく。その中心、そこにいる男は咳いた。

「……ああ、いいだろう。やってやる。条件は守ってやろう」

誤魔化しきれない緊張が男に中に宿る。冷や汗とも脂汗ともつかぬ滴が頬を垂れた。それを拭うことなく、男は身に巣くう恐怖を押しつぶして命令を下した。

「状況、開始。散開しろ」

男の言葉に私兵隊は散っていく。その手に装備された弱さを武器にして。

「守っては、やる」

例え粉微塵な肉体であろうと、ちゃんと確保してやる。

男は、遠野槇久は浅く笑った。

数は揃えてある。古い通説を信じはしないが、やはり殺し合いは数こそ全てだろう。

それに、布石は既に打ってある。

鬼札。

鬼に敵う者など、ありはしない。

天上に吊り下げられた月。夜だと言うのに明るく月光は輝き続けている。本来夜は魔の時間。人間以外が跋扈する魑魅魍魎の世界。生者が入れられぬ亡者の領域。そこにおつたが最期の時。この世と今生の別れ。あの世への誘い。

それならば自身も化生の類に違いはない。

森の中をただひとり歩み行く男もまた、何かに誘われるかの如くに月の光も隔たる鬱蒼の森を進んでいく。

己の生に実感を得られない。

それがなぜなのか男は知らない。

生まれいずつたその時には男は男として在った。

強大すぎる生、濃すぎる血。周囲に人はいなかった。

ただ孤独のままに。誰とも触れ合うこともなく、そして遂には身内の手にかかる運命となった。

だが、彼は死ななかった。

死なず、そして一族を滅ぼした。気付けば、焦土にも似た場所に彼は在った。

それに罪悪はない。ただ、疑問のみがあった。曖昧模糊の生の中で、自身が生まれいずった意味とはなんだったのか。

森の奥に生き、修験者の如くに生を送れども未だ答えは得ず。解脱の境地には到れていない。しかし、かつて一族を滅ぼした後、ある男と会い見え、この右目を奪われたあの時、自身は何かを分かりかけた。何かを見たような気がした。

あれは一体なんだったのか。

それが分からず、だからこそ、ここまでいずった。

森を彷徨うこと僅か。月光が輝くはずの森の中、生い茂る木々は影が差し、己が生のおく先に見えない。植物たちは襲ってこない。分かっているのだろう。この男が一体何なのか。

「それで、わらべ。お前が道先案内人か」

突然、人間がそこにいた。

目前に現われた子供。藍色の着流しをはためかせ、その手に握られるは小太刀。

そしてその目。その目は最早、人間の眼ではない。

茫洋な空洞を成した硝子のような瞳が彼を映している。

幽鬼の如き存在が、目の前にあった。

その子供の口が微かに動いたのが見えた。

「
」

瞬間、森が悲鳴をあげた。

殺気。

純然の殺意が、男を飲み込もうとする。人間の発する殺気とは思えない。質量を持った気が男を殺そうと風景を歪ませた。空気は軋み、森は泣き、生き物はそれに抗うことも出来ずに死に絶えるだろう。ただ立っている男にもそれが分かる。お前を殺す、と溢れかえる殺気は男に叩きつけてくる。

常人ならばそのまま死に絶えるだろう殺気。だが男は、その男だけ、その殺気あてられ、脳裏に何かが過ぎっただけだった。それは、かつてあの男の。

しかし、何も分からない。あれに近しいような気がする。それも遠いような気もする。

だから。

「……わらべと思ったが、悪鬼の一種だったか。鬼の相手に鬼とは、確かにこれは共食いか」

そう呟き男は、軋間紅摩は、一步踏み抜いた。

「御館様、準備は整いました」

「そうか」

何者かの襲撃の報があつてから僅かばかり、里の広場に黄理はいた。その身を黒の衣服で纏い、当主として、あるいは殺し屋としてその場にいる。その横に控える翁もまた剣呑とした空気を滲ませ、黄理の側にあつた。

「数は」

「はっ、実質出られるのは三十にも満たぬかと」

「充分だ」

そして二人の目前には、跪いた七夜達。その身には刀剣を武装し、自らの主に仰ぎ従う尖兵共達。

黄理にも、そして他の七夜にも検討はついていた。おそらく敵は、遠野。どういう訳か森に侵入を果たし、そして突き進んでくる。その理由は簡単に見当がついた。もとより両者は相容れぬもの共。かつて痛んだ古傷を思い出したのだろう。

しかし、この森にやってきた。それだけで、七夜が戦うには充分すぎた。思い知らせてやる。その者たちが何を敵に回し、そこに攻め入ったのか。

そこにいる者たちの目に暗い光が灯る。それは理性はあれどもあまりに暗い。今日この夜に、ここにいるのはただの殺し屋ではなく、ただの殺人鬼なのだ。

「戦闘は久しいな」

「確かにそうで御座います」

「だが、それも関係ない。我らがやることはただひとつ」

黄理の目は冷たい。そこにいたのはかつての黄理だった。黄理が厭い、それでも逃れることの出来ない殺人機械がいた。

今この時、身内のことは忘れる。志貴も家内も、そして、朔も屋敷の中にいるはずだ。

「迎撃に出る。殲滅しろ」

『応っ』

黄理の声ひとつで、目前にいた七夜たちはすぐさま行動に出た。掻き消えるような速さで七夜は森に向かっていく。

「俺も出るぞ」

「あい分かり申した。恐れながら私もお供に」

かしまり深々と頭を垂れる翁の声に反応することなく、黄理は駆け出した。

だが、

「兄様！！！！」

そこに黄理の妹が駆け寄り黄理を止めた。

「屋敷の中にいるといったはずだが」

妹を見る黄理の目はひたすらに冷たい。女子供戦闘に出られないものは現在、家の中に隠れているように命が下されている。妹は戦闘が出来ないのだ。ゆえに妹は外に出てはならない。

しかし、黄理の視線に晒されても妹は怯むこともなく、動揺したままその言葉を口にした。

「兄様つ。朔の姿がどこにも見当たりません！！！！」

何ものかが森に入ろうとしている。

先に気付いたのは、奇しくも七夜の大人ではなく、朔ただ一人のみだった。深夜。深く眠りにつくことも出来ない朔は庭先に出て地上を睥睨する満月を見ていた。最近あまり寝ていない。だが、寝ようとも思えない。体が反応しないのだ。

天上に居座る月を見ても感慨は浮かばない。浮かばなかった。そしてそれに対して、最早感情を抱くような無駄な機能を朔は持っていないかった。

亡と、瞳は月を映し出している。

何も思わない、何も感じない。

今この時、夜の月光に照らされても、朔に変化はない。

その姿はいつそこの世のものとは思えぬほどに儂い。

幽鬼の如くに、朔はそこにいた。

そしてその時だった。何者かが森に近づいている感覚が、朔には感じ取れた。七夜の森に展開する結界よりも尚早く、朔は感じ取った。

朔だから気付けたのかもしれない。ひたすらに自身を追い込み、精神を削いでいった朔だったから、極限にまで高められた朔だったから、自己を磨耗させ続けた朔であったから、その気配に気付いたのかもしれない。

辺りに靄が漂っている。

様々な色が入り混じりあいながら、森の向こうからそれが漂っている。

その中でただひとつ、紅い朱い靄が波濤のように流れ込んできた。

気配は未だ遠く、この里には遙か先の場所。

そこに何かがある。

温度が消えた。

体を突き刺すような冷たさを感じなくなった。

口中の感覚が消えた。

最早自分が口を閉じているのかさえ定かではない。

記憶が薄くなっていく。

既に自身という存在は消え去ろうとしていた。

しかし、朔という存在概念は朔自身が消え去ろうとしても消えない。

「それで、わらべ。お前が道先案内人か」

目前に、男がいた。

頑健な肉体。体を締めつけるような胴衣。そして左目だけ覗く修験者のような顔。

そしてその気配の何たる。男が無自覚に発する存在感に朔は自身の死を幻視した。それはまるで、黄理に対するような圧迫感。気を抜けば圧死するような重圧が男からはあった。

だが、朔は動じない。動じることも出来ない。

もし朔の中に、理性や本能と言うような珠玉全うな感覚さえあれ

ば、目の前の存在に怖じ、振るえ、怯え、そして自身を奮わせただろう。朔にはそれが無い、最早それさえ出来はしない。

この気配。この独特な重圧。

混血の気配。

朔がやることなど、決して変わらない。

いつだって朔はそれだけのために存在し続け、育てられてきたのだ。

そして今こそ、その時。

そうだ、いつだって朔はそうだった。

「殺すだけ」

そつと、久しぶりに喉を介して音を漏らした。しかしそれは声にもならない音でしかなかった。いつ振りに言葉を発しただろう。それは掠れ、かつて出会ったあの混血のようにひどく不快な音だった。

肉体の高ぶりが抑え切れない。血は熱く沸騰し、肉を温めている。

最早、姿勢に意味は無い。

ただ真っ直ぐに、男の命に向かうのみ。

「……」

」

確認は出来た。ならば穿つのみ。

弾丸めいた疾さ。朔はより速くなる。あの時よりも、黄理との訓練よりもより速く風を切り裂いて、真っ直ぐに心臓へ。

加速は既に最速と化した。

男は未だ反応できていない。

既に男との距離は然程開いていない。一秒にも満たぬ刹那には握られた小太刀が命を殺す。

それがきつと、朔の始めての殺人となる。

感慨はない。思想もない。

殺意以外の感情は持っていない。

ゆえにこの時こそ朔の満願成就。

朔の生まれ出でた意味を貫くのみ。

ガキン、と甲高い音がした。

「　　っ？」

朔には一瞬何が起こったのか理解できなかつた。だってそうだろう。小太刀は朔の速度、臂力、体重をかけ、男の背中に突き立てられた。突き立てられたのだ。

即ち、肉の中に入り込まず、突き刺してはいない。肉を突き破り、骨を砕いて心臓を貫く威力を秘めた朔の一撃が、肉に入り込むことも出来ない。どれほど鍛えられた筋肉なのか。盛り上がっているのは分かるが、それでも刃が通らぬ理由はならない。

背中に何か仕込んでいるのか。

いや、それはない。

小太刀を突き立てた朔の手には確かに人間の肉体の感触があった。だが、一瞬だった。

それが金属と化したのだ。

「俺の身体には通用しない」

声が、聞こえる。重く響く男の声がする。

「いつの頃からか分からぬが、身体を硬化させる術を身につけていた。お前のそれでは、俺の身体を裂く事は出来ない」

そして、圧迫感。男が振り向きざまに拳を振りかぶっていた。

一瞬のことだった。

威圧感を放つ拳が巨大化したようにも見えた。

それを回避する朔。身を霞ませでの回避。背筋に嫌な感覚が這いずり回った。最小限の動きでいなし、防いだ時、何か起きる。

一瞬にして消えた朔に対し、少しばかり驚いた表情をした男。だが、男の拳は止まらない。突かれた拳は推進力を持ち、男の踏み込みと相まって。

決して細くはない木に突き刺さる。

そして、木が爆ぜた。

その力の何たる。殴りかかった場所は碎け、そこからゆっくりと、みしみしと悲鳴をあげながら、木は倒れていった。

「疾いな」

男は呟いた。

「だが、それだけだ」

そして男は朔に振り向いた。
その様はまるで、鬼のようだった。

「ここはどこぞ。もし悪鬼と会わば。
ここは地獄ぞ。奈落の底よ。」

第十二話 月輪の刻（後書き）

七夜朔。特大死亡フラグと遭遇。

途中の植物の触手は宇宙戦争のあれを想像してください。

では、また。

第十三話 紅き鬼（前書き）

本当は二部構成にしたかったのです。しかし力量足りず中途半端な長さ。泣く泣く一話に収めました。中途半端な長さなので今ままで最長です。

読みにくく、ぐだぐだ続きます。

では、さっせ。

第十三話 紅き鬼

「ひひ、ようやく動いたか」

暗い、暗い森の中、月光にも照らされぬ黒い影の獣道。騒ぐ森に
愉悦を撒き散らし、一人の妖怪が歩みを進める。

妖怪は、刀崎梟は、笑う。

「いいね、いいねえ。戦場の空気だ。殺し合いの匂いがここまで伝
わってくる」

梟の歩みは淀みなく、夜の森をゆったりと歩いていく。

「死ぬ。全員死ぬ。そうだ、あいつ以外は全員滅べ」

その顔には邪悪が張り付いていた。そして楽しくて、待ち遠しく
て仕方がないと嘲う。

冬の冷たさと相まって空気が乾いている。それに漂って熱が伝わ
ってきた。殺し合いの空気。梟にとっては懐かしくも、嗅ぎ慣れた
匂い。

一世紀近く生きて人生の中で、殺し合いに巻き込まれたこともあ
った。刀を作るだけで良いと思っただけはいたが、いかんせん梟は刀崎
の棟梁。その肩書きに呼び出され、切った張ったも幾星霜。

しかし、今日だけは棟梁の肩書きに感謝した。それが巡り巡って、
梟の求めた存在を見つけ出したのだ。

そしてこの夜。混乱に乗じて梟は森にやってきた。再開を果たすために。

「嗚呼、待ち遠しいなあ」

その目は愉悦交じりでありながら、どこか恍惚としている。

梟を突き動かす執着心。それは紛れもなくただ一人のためだけに向けられている。そのためならば全てを利用し、淘汰する所存で梟はいる。

あの日から、あの出会いから、あの子供が忘れられない。黄理の言葉で知った、朔という名。それが思考から離れない。

朔の事を考えるだけで口から笑みが零れてくる。桁違いの存在、あの時は未熟であったが、遠くない未来、やがて梟も初見の存在となるに違いない。

あの殺気にあてられた時から、梟は朔に参っていた。あの目、あの軌道、あの容赦と言葉さえ知らぬような攻撃。それがいつも梟の脳裏に鮮明な映像となって映し出される。その度に梟は熱を帯びるのだ。

あいつだ、あいつこそ、と。

……もし、言葉を許されるのならば、梟は朔に恋をしたのだ。

歪み、逸脱してはいるが、方向は正しく紛い物もないそれは正しくそれだ。

そのためだけに梟は行動を起こしたのだ。

「ま、懸念と言えばあいつぐらいか」

準備はしていたが、まさかアレを引つ張り出せたとはなあ、と梟は誰ともなく呟く。

遠野分家軋間最後の当主、軋間紅摩。

「世俗からは離れたと聞いてたんだがなあ、どうやって呼び寄せたんだか」

あれはヤバイ。存在自体が神秘めいた混血。未だに正気が残っているのが驚きだ。

もし、あれが朔と当たるならば……、想像はしたくない。確かに朔は素晴らしい。おそらく人間の限界に迫っている。

だが、軋間紅摩。あいつだけはヤバイ。もともと存在が違うのだ。莫迦らしくなるほどに差は歴然。人間と魔との混ざり者。差ははっきりとしている。

朔と軋間がかち合う。それが梟の気になるところではある。朔が死んでは意味がない。この計画、この人生、そして梟そのものに意味がなくなってしまう。それはいただけない。

「んでも、あいつなら、て考えるのは臍貞が過ぎるかねえ」

どうしても期待してしまう自分がある。

もつと、もつとだと、朔の可能性に触れてみたい老人がいる。

「まあ俺にはどうしようもねえけどなっ」

くつくつと笑う。

梟如きではどうしようもならない事もある。なにせ自分は刀鍛冶、それ以外はまるで駄目だ。

「んじゃ、迎えに行きますか。……待っているよお、朔。お前は、俺のものだ」

そして梟は暗闇の中に紛れて消えた。

軋間紅摩を語るのに、多くの言葉はいらない。

その存在そのものが彼という神秘の体現であるからに他ならない。

混血ではあるがその血は遠野よりも濃く、かつて血のみではなく肉まで混ざり合った一族。狂気のような経過を経て、軋間という血族は混血と成った。ゆえに軋間の血はあまりに濃く、その結果軋間の当主は代々先祖返り、すなわち紅赤朱と成る事が宿命付けられている。彼はつまりそういうものだ。そういう風に出来ている、と言ってもいいだろう。

記憶の中、かつて彼の周りにいた一族にもそれに成り果てようとしていた者は多くいた。そういうものは大概人とは呼べぬ化け物と

化していたが。

そして軋間紅摩はそれら全て、軋間の者悉くを滅ぼした過去を持つ。

全身を硬化させ、大木を握りつぶす人外の力。

軋間が目指した成れの果てこそ軋間紅摩だった。

それに恐れを成した一族の手により、軋間紅摩は拳銃で頭部を撃たれた。

だがそれでも軋間紅摩は死ななかった。血すら流さなかった。

そしてそれにより自制を無くした軋間紅摩は、一族の者を皆殺した。

それほどまで強大な生命を生まれながらに与えられていた。

ゆえに軋間紅摩とは言葉通りに桁違いの存在であり、真実人外の化生に最も近い混血とも言えるだろう。

だが、それだけに代償はある。

紅赤朱に成る事が宿命付けられた彼だからだろう。その思考が、徐々にはあるが人外のものに成ろうとしている。もとより幼少の頃は言葉が理解できなかった。それが紅赤朱にいつなるかは定かではない。だが、いつの日かやがては真実化生になるだろう。

ゆえに、紅摩はここまで、七夜の森までやってきた。

遠野槇久に呼ばれ、命じられたから、と言うのも確かにある。

だが、紅摩は確かめたかったのだ。

かつて、紅摩の右目を奪った人物がいた。

一族を滅ぼした後、斎木の者に監禁されていた頃のことだった。反転した斎木の当主を殺すため、そこに鬼神が現われたのだ。

紅摩はその鬼に出会い、右目を潰された。

それが紅摩、十の事だ。

あの時、紅摩は何かを見て、そして感じた。だが、それが何だったのか、未だに分からずにいる。だから、紅摩はここまでやってきた。自分が誰かの役に立つならばと、思いここに来たのもある。だが、あの時感じたあれが一体なんだったのか、もう一度確かめるために、答えを得るために、自身が暮らしている森を離れ、この森にやってきたのだ。

そして、今。

軋間紅摩は一人の子供と対峙していた。

紅摩と比べ、あまりに脆弱な命。

だが、その身から発せられる殺気、気配の恐るべきこと。目の前の小さき子供から噴出する殺気は紅摩にとって少なくとも目を見張るべきものではあった。

ただそれは、目を見張るだけの話。

「兜神」

紅摩の踏み込み。爆発的な踏み込みに地面が砕け、弾ける様に子供との距離を刹那のうちになきものにさせた。

紅摩の生まれ持った肉体の性とも言うべきだろうか、世俗を離れ森の奥で手慰みに武術の真似事をしているが、それ以上に彼の強さと言つのはその肉体の潜在能力にあった。

絶滅種の血を色濃く引き継いだ紅摩の肉体は、鍛錬を行っているわけでもなく自然に作られている。

鋼の如く、と言つ表現がある。それはものを硬いものを形容するのに用いられる言葉ではあるが、紅摩の肉体は正にそれに当たる。

鋼の肉体。特に鍛えたわけでもなく、事実紅摩の肉体は鋼の如く硬度を秘めている。生まれながらにあった肉体を硬化する術、そしてその俊敏性もまた、彼が生まれながらに持ちえた彼の才だった。

それゆえに紅摩の踏み込みは、瞬く間に子供との距離を詰めた。

突進。爆発的な踏み込みと紅摩の鋼の肉体による体当たり。単純極まりない攻撃手段。しかし紅摩のそれは朔を引き千切るのは充分の威力を持っていた

だが、当たる寸前、子供の姿が掻き消えた。

そして。

「　　」

体に数度の衝撃。肉を切りつけられた。

振り向くと先ほどと同じような距離で、そこに子供はいた。

四肢を地へと突き刺し、殺しきれぬ移動速度に地面が盛り上がりを見せている。

その這う姿勢から、瞳は紅摩を捉えていた。

「……」

その体には切りつけられたような跡はあれども、引き裂かれた跡はなく、血は流れていない。

「その小太刀では俺に通用しない」

そう言って再び紅摩は踏み込む。

先ほどからこの展開が続いている。紅摩が攻撃を仕掛けても、子供の驚異的な速さに追いつけず、そして子供は回避しながら紅摩に切りつけ、再び姿を現す。この繰り返しだった。紅摩は子供の速さに反応できず、子供は紅摩の肉体に歯が立たない。このような千日手が続いていく。一度目の交差から始まった状況は依然として膠着状態のままであった。

自身に切りつける瞬間も紅摩は当然狙った。だが、子供が放つ人外の殺気に茫洋な子供の気配が隠され、子供の位置を把握することが出来ない。

何処を見ているか分からぬ無機質な目、その幽鬼のような気配、そして驚嘆する身のこなし、技量。首、心臓、動脈、それら全てを正確に狙い切りつけてきている。

惜しむべきはその小太刀であろうか。確かに刃物であり、真剣だ。だが軽く、そして少しばかり間引いてある。訓練用なのか、小太刀本来の切れ味はなく、肉は切れども裂く事は出来ない代物だった。それでも人間相手ならば殺傷は可能だろう。肉を絶ち中身を穿ち命を殺すことが出来るだろう。それは子供の技量だ。間引いた刃で切り裂く。凄まじい技である。

だが、そんなもので紅摩の体に傷を負わす事は出来ない。

軋間紅摩は別格なのだ。存在そのものが桁違いな生命。化け物揃いの混血の中で、より恐れられた化け物だ。そのようなモノを相手に常道の技が通用するはずがない。

朔では紅摩を殺すことは出来ない。だが、紅摩の攻撃が当たればあつけなく勝負は決まる。おそらくその時、朔には肉片も残っていない。紅摩の肉体は朔程度の生命を粉微塵にさせる事が可能なのだ。掠ることさえ致命傷の一撃となるこの理不尽。

しかし、紅摩が朔を捉え切れていないのもまた事実だった。

紅摩の突きや払い、または蹴りには朔を殺す程度造作もない。だが、それは当たればの話。

再び踏み込み。朔との距離を縮める。だが、朔は霞むように紅摩の視界から消える。七夜の移動術。人間ではありえない変則的な動きを可能とさせる七夜の技。それを捉える事が出来ない。

そしてまたも斬撃が迫る。この攻撃さえ、何処から打っているのか未だ捕捉出来ない。

依然として変わらない展開。人外としての力を揮う紅摩、七夜の体術と自身の技量によってそれをかわし、刃を揮う朔。

それを紅摩は厭わない。むしろどこかこの状況に身を委ねようとする己がいた。

この飽くなく続く殺し合い。いや、これは果たして殺し合いなのかと、紅摩は思う。互いに命を燃やし、相手の生命を絶たんと動いている。

思えば、殺し合いとは始めてだ。紅摩は殺し合いは行ったことがない。紅摩の戦い、それはただ一方的な蹂躪だ。強すぎる生命である紅摩を相手に、命はなす術なく潰れていく。圧壊の腕。鋼鉄の肉体。技量に秀でた者がいた。胆力ある者がいた。人間とすら呼べぬ化け物がいた。そのどれもに、紅摩は一方的な死をもたらしてきた。

しかし、目前の子供はどうだろう。紅摩に傷をつけていない。歯が立たない。だが、今も尚殺しに向かってきている。

この緊迫した状況の中、紅摩はふと考えた。この心持はなんだろうかと。僅かながらに疼く内側に疑問を呈す。殺気立ち込める殺し合い。始めての経験である。これが尋常の殺し合いであれば互いに命は消えていた。

今この時、紅摩は朔と出会った。紅摩には紅摩の目的がある。あの鬼神と再び会い見えるため、この森に来た。

しかしこの子供と出会った。不可思議なことに、紅摩はそれを良しとしている。良しと思おうとしている。

「……」

朔が攻勢にでた。驚異的な加速に朔の姿が霞む。そして気付けば懐に小さな子供がいた。

身体を開き、そこから突きを放つ。だが、それよりも速く朔の脚が動いた。紅摩の拳が加速されるよりも速く、朔の踵による前蹴りが紅摩の腹を貫いた。

硬化した身体の中身に衝撃が来る。その衝撃に目を見開き、だがそれ以上に紅摩は驚く。

紅摩に接近戦を挑むと言うのか。痛みを感じた。この殺し合いで始めてのことだ。

そして朔の抜き手が再び紅摩を襲う。

紅摩に対し、人外の肉体を持つ軋間紅摩に対して、その攻撃範囲に自ら入り込み接近戦を仕掛ける。それがどれほど危険なことか、朔は考慮さえしていない。

斬撃が通らない。幾重の交差で把握したのは、目前の混血が生命という領域において場違いな強さと硬さを持っていることだった。

紅摩の一撃。質量を持ったそれに、朔は当たってもいないのに自身が粉微塵と化した未来を見た。その一撃ひとつずつが砲弾と化し

朔は滾るような感情をもっていなかった。そんな朔に始めて生まれた感情は殺意でしかなかった。人間を理解することも出来ない朔にそれまで感情はなかった。在る、それだけ。それはまるで人形のよ
うな生命だ。

しかしそれがいま、温度を持ち始めている。感情が強くなっていく。内側から張裂けそうなこれは一体何なのか。

朔はそれに身を委ねた。悪くない、悪くないと温度を思い、だから紅摩に近づいていく。

そして始まった接近戦。一撃離脱の動きから一変した動きを見せた朔と、それに応じる紅摩。

そこは爆心地と化した。

紅摩の攻撃が激化する。炸裂するかのようになり、一撃一撃が朔を殺しうるそれが幾度となく朔の小さな身体を狙う。だが、それを朔はひたすらにかわし、かわしていく。いなすのは良くない。防御など最悪だろう。防げばそのまま潰されてしまう。

だが、それを正面から受けるほど、朔は猪突猛進ではない。

朔は把握していた。この男の長い髪によって隠された右顔面の目は潰されていて、そこは視覚範囲外ということに。

接近戦の最中、朔の動きはその死角に移動し続け紅摩に打撃を与える莫迦らしい戦術だった。嵐のように攻撃を繰り返す紅摩、その一撃は朔如きあっけなく死に絶えるだろう威力が込められている。

それを目の前の距離のぎりぎりの場所で回避しているのである。正気の沙汰ではない。

顔面の横を通る下段突きに朔の顔面が剥がれる。

錯覚とは分かっている。だが、紅摩の攻撃は朔に破壊のイメージを叩きつけるには充分すぎる。

しかし、恐怖はわからない。恐怖を抱くような、上等なものなどありはしない。

朔の攻撃には確かに人を殺める膂力はある。だが、未だいかんせん未熟な子供の肉体。ものには限度があった。紅摩のように人外に近い者であるならば桁違いの潜在能力を秘めているだろう。だが、朔は未だ人間である。

斬撃が通じない。どういうわけか、紅摩の身体に刃が通らない。目前の相手に自身の攻撃が通じないなど直ぐにわかった。そして今こうして爆心地の中にいて近距離の攻撃を繰り返しても、衝撃を与えるのみだとは、感触で分かっている。ダメージには及んでいない。しかし、これ以上に朔には術がなかった。

朔では、これを殺せない。

その事実が朔の目の前に存在する。

存在が違う。桁が違う。核が違う。最早人間の範疇には属することも出来ぬ混血。それに対し、朔は歯が立たない。

状況は変わらない。だが、朔ではこれに届かない。

放たれる威圧感。それと朔が発する望外の殺気が交じり合い、今この瞬間ここは異界と化している。その場に二人。他には誰もいない。朔のいるべき場所。朔の望まれた空間。

しかし、蓋を開けてみればどうだろう。朔は未だ殺せず、混血の脅威に晒されている。

恐るべき威力を秘めた上段蹴りが朔の頭を潰そうと放たれた。目視も出来ぬ速さ。当たれば頭部が爆ぜるだろうそれを身を地面と平行になる姿勢となって回避。そしてそのまま飛び上がるうとする朔の頭上に、かつて黄理から喰らったアレよりも威力を持った踵落しが襲い掛かる。稲妻めいたそれを身体を捻る事ですんに避け、紅摩を見やる。無機質な朔の目にはこの状況に薄く口端を持ち上げた鬼の顔。それは笑っているのか、はたまた皮肉なのか。

朔に判断できない。把握もしない。しかしこのままではジリ貧で危うい。

そもそも、戦闘になった時点で朔に勝ち目は少なかつただろう。

七夜は殺し屋、即ち暗殺者。戦闘になった時点で暗殺者としては失格に尽きる。

だが、朔は此度が始めての殺し合い。あの時は邪魔が入ったが、今回ばかりは違う。襲い掛かる混血、殺そうとする七夜。この関係は簡潔で分かりやすい。

だから朔は殺す。

それに、内側が先ほどからけたたましい。

紅摩の殺害を促し続ける内側に頭が支配されている。

思考はそれのみに割かれ、如何に混血を解体しえるか。

「殺す」

弾幕めいた攻撃をひたすらにかわしながら朔は再び呟いた。

それは自己暗示に近い。必ず殺す。殺す。殺す。

それが朔の意味、意義。

だが、変化は唐突に訪れた。

紅摩と対峙し、所詮拮抗状態などありはしないのだ。

「
っ?」

がくん、と足場が崩れた。

繰り返される交差、変化していく攻防。嵐のような攻撃を避け、常に紅摩の威圧感に晒され。意識は常に紅摩のみに向けられていた。

朔自身は気付いていなかったが、朔の肉体には無視できない疲労が蓄積されている。

ゆえに、気付けなかった。

紅摩の踏み込んだ地面が砕けている。不安定な足場。踏み込むには、あまりに拙い。

中途半端に沈下した地面に、足が取られた。一瞬、動きが止まる

「好機」

そこに影がさす。見逃す事はありません。

軋間紅摩の右腕が無慈悲に振り落とされた。

回避不可能。体勢不十分。迎撃開始。

唸りをあげて迫りくる豪腕に右手の小太刀が煌く。月光を浴びた冷たい輝きが拳に向かって突き立つ！

しかし、体勢も整わぬままに右腕の力のみで放たれた斬撃が紅摩に通じるはずがない。小太刀の迎撃はあっけなく弾かれた。

そして訪れる、凧ぎの一撃。頭部を狙った、拳。

迫る、死。

朔に、選択肢はない。

許さない。許せない。許しはしない。決して許すことは出来ない。

銃声と悲鳴の鳴り止まない七夜の森を疾走する。暗い森の中だが、七夜には大した事ない。生まれた頃から生活してきた森だ。ここは七夜の庭。例え先が見えない夜の暗闇であっても安易に進める。

だが、今そこに憎たらしい人外が入り込んできている。

許さない。許せない。許しはしない。決して許すことは出来ない。

憎悪で命を殺せるならば、すでにあいつらは絶滅している。奴らは犯してはならない罪を犯した。生きていることでさえ許せない事であるのに、この森に踏み入ったのだ。

許せられる事ではない。

断罪だ。絶滅だ。何を敵に回したのか、思い知らせてやる。

衝突は始まっている。今もこうして七夜の誰かが死に絶え、それ以上の数の敵が殺されていく。しかし、数の暴力というべきだろうか。敵の数は多い。更に暗視スコープを用いた遠距離からの射撃。七夜が近づくよりも前に七夜が死んでいく。

通常の人間相手ならばこうはならなかった。七夜の隠密技術そして移動術は人間相手には有効だ。だが、今七夜の相手は化け物どもの混ざり者だ。身体能力は高い。人間よりも。ならば七夜が押されるのも納得はいく。故に七夜は押されつつあった。

だが、立ち止まることは許されない。

死ねや死ねや。お前たちは死ななければならない。それだけの事

をしたのだ。滅んで償え。そしてこの世からその存在の一片まで消滅しろ。

七夜の退魔衝動が語りかける。殺せと。殺して殺せと訴える。それに嬉々として了承。

敵は確実に七夜よりも多い。物量作戦だろう。

だが、そのような事は関係しない。

「いたぞつ、七夜だあ！！」

混血の声。怒声にも似た悲鳴だ。化け物の側に人間が降り立った。この世には幾重にも理不尽が存在する。今この時、この森に入り込んだ遠野の私兵隊。混血である彼らは人間に劣ることはない。カテゴリーがそもそも違うのだ。故に比べることが誤り。だがこの時、彼らは確実にこの世の理不尽と遭遇したのである。

自身の得物を握りしめる。何の変哲もない短刀。しかし、それだけで充分だった。

血に塗れた七夜を目の前に恐慌もなく動けるとは、やはりプロだろうか。だが、しかし、それだけでは足りないのだ。

「つつつつつつ！！」

何処からか悲鳴が聞こえた。位置にして七夜の悲鳴だろう。今もこうして七夜は死んで行く。敵を殺しながら死んでいく。数を減らしながら。絶滅の道を歩もうとしている。

だが、それを是とする。死んで生き様を示すのみ。

何かおぞましいものでも見たような悲鳴が聞こえた。

血塗れの、殺人鬼が、にたりと笑みを浮かべた。

衝撃。

それはありえない光景だった。

人が宙を舞う。言葉にするならばそれだけのこと。だが、それがありえない。

成人した男の一撃とそれをぶつけられた子供の肉体。体重差は歴然としている。

だが、それでも人間が宙を飛ぶという非現実的な光景。

打撃で地上を遙かに飛ばされるといふ現実が展開された。

朔の身体が、冗談の様に、宙に弾け飛んだ。

衝撃。

地面に叩きつけられた。しかし、それさえも朔には理解できない。

咄嗟だった。

無意識のうちに、朔は後方に飛びながら、全身を脱力させ、頭部を狙った一撃をずらし防御した。まさに奇跡としか呼べないようなタイミング。日頃から黄理に叩き込まれた戦闘訓練による賜物なのだろうか。

だが、そんなことを気にする余裕など、朔にはない。

紅摩の攻撃を不完全ながらに防いだのだ。衝撃は凄まじく、視界はドロドロ、呼吸が出来ない、吐き気が込みあがる。口から滴る血。全身に苛烈な痛み。地面に叩きつけられた状態のまま、朔は動けなっていた。地面が赤く染まっていく。

そして。それは朔を追隨するかのように宙を舞い、地面に落ちた。

地面に落ちているそれは朔にとっても見慣れたかつての身体の一部だった。

僅かに指先が開かれた手。

着流しごと引き裂かれた腕。

その様は出来の悪い人形の一部にも見えた。

もげた、左腕。

「

っ！！！

！

それが紅摩の一撃を防いだ代償だった。

紅摩の一撃を防いだはずの左腕は関節を破壊し、筋肉を引き千切って朔の腕を根元から奪った。

ならば朔が殺す。

ずくんずくん、と失われた左腕が悲鳴をあげている。幻痛。最早なくなつたものが痛い筈がない。しかし、肩からの出血は軽視できない。危険な怪我だ。身体の熱が失われていく感覚。だが、徐々にはあるが朔の身体が起き上がっていく。

そして、思う。紅摩は答えを探している。求めている。そこに理解はなく、共感もなく、漠然とした認識。だが、それ以外を朔に期待するのが間違っているのだろう。

朔と紅摩。生まれは違えども、二人はどこか似ていた。孤独を知り、その才によって恐れられた二人だ。独りを受け入れた二人だ。温もりが分からぬ二人だ。確かに二人が置かれてきた環境はどこか似ていた。

違いがあるとすれば、己の生に意義を見出したことにあるだろう。

紅摩は世俗を離れ、解脱を目指し生の実感を求めている。

しかし、朔はそのようなことなど疾うに定められていた。

朔は殺す者。殺すだけの者。

殺すために生を受け、殺すために育てられ、殺すためだけに教えを受けてきた。

朔はそれだけだ。それだけの存在なのだと自分を定めている。

それ以外のモノに興味も持たず、それ以外のものを求めず、また視野にもくれない。

全ては黄理のようになるために。

情は理解できない。心など見出せない。

ゆえに立ち上がる。

「
づあつ
ぎ」

歯を食いしばって、立ち上がる。カモ入らぬ右腕に口元から呻き声がもれた。

だってそれだけしかないのだ。それしか理解できないのだ。殺す、殺すために存在している。それだけが朔の全てなのだ。黄理に届くためにそうなる事が朔の存在理由なのだ。

全身が言う事を聞かない。抜けてくれないダメージ。痛みを意識が持っていていかれそうだ。

左肩の出血が止まらない。致命的な傷だ。動脈諸々引き千切られたのだ。止まるはずがない。

しかしそれだけでは止まらない。止まることはない。

「ぐぎっ
」

硬いものが口の中で碎ける感覚。奥歯が噛み砕かれた。

あの時、紅摩の一撃に死を見た。鬼の豪腕に全身が砕かれた。

しかし、何も感じなかった。

痛みは痛い。しかし、それにどうすればいいのかわからない。痛がればいいのか、泣けばいいのか、苦しめばいいのか、怯え恐怖し、紅摩に対して許しても乞えればいいのか。

だが、それが出来ない。

自身が死ぬかもしれない、いや、あの時朔は死んだ。今生きていることがおかしい。

だが、それはきつと、何も感じることの出来ない自分こそが最もおかしい。

「が、あああああああああっ」

動く。未だ、身体は動く。動かなければならない。ここまで声を上げたのは生涯で始めてだ。

敵は目の前。殺す相手は目前だ。ならば動かなくてはならない。未だ殺していない。

そつだ。朔は未だあれを殺していない。朱の鬼を殺していない。殺意は消えはしない。

「……」

知らず、紅摩は動けなかった。

殴り飛ばした朔が、こちらを見ながら立ち上がったのだ。

拳には朔の身体を打ち砕いた感触がある。決して完全とは言えぬ一撃ではあったが、それでも朔を打ち砕くには充分すぎる一撃だった。

しかし、それでも朔は立ち上がった。その身体は満身創痍。藍の着流しは土に汚れ、肩から流れる血に染まっていく。地面に打ちつけた全身は擦り傷だらけ。しかしそれ以上の故障は幾つも見える。根元からもがれた腕のない左肩が不気味な様相を見せていた。その身体も支えきれぬのか辛うじて立ち上がっているよう。

だが、殺気は消えない。あろう事か更に鋭さを増している。

悪鬼のような子供だ。打ち砕いても死なない。自分では敵わないとは、当然ながら分かっているだろう。それでも立ち上がった。その姿はまるで死にたがり。死に向かって邁進する愚者。足掻いているその姿まで虫のようだ。

しかし、紅摩はその姿を笑わない。笑うことが出来なかった。

微かなシンパシー。生き方を定めていながら、それに縋るしかない子供。生を求めると言う意味では、二人とも同じ求道者であった。しかし、その生の実感を得られない紅摩にとって、例えそのような生き方であれ、生き方の定められた生は羨ましくからぬ事であった。

立ち上がり佇む朔は明らかに衰弱している。出血による影響、痛み、疲弊。既に声が聞こえているのかも怪しい。しかし、紅摩は語りかけた。

「問おうわらべ。お前にとって生とは何か」

佇む子供の姿が、何処となくあの男に似ていた。森に朔の苦しい呼吸が沈む。痛いはずなのに、朔は相変わらずの無機質な目。無表情。不気味だ。だが、それ以上にその反応のなさが痛ましい。

「殺すだけ」

紅摩に向けられた言葉ではない。それは己に向けられた言葉だった。ひどく掠れた、子供らしくない、始めて紅摩が聞いた朔の声。

「そうか……」

残った左目を閉じる。そして朔の生を思った。殺すためだけの人生。七夜という一族ならばそれはきつと正しい。何とも七夜らしい答えだ。だが、その人生、あまりに儂い。そのためだけに存在しているのだ。

それは、まるで自身と同じような存在。所詮殺すことしか出来ない紅摩と、殺すことこそ全ての朔。一体何が変わるのだろうか。

朔の出血は著しくショック死も可笑しくない。止血も行っていないのだから尚更だ。それでいて身体を自らの意思で動かし、紅摩を殺そうと殺気を滾らせているのである。その精神力は計り知れない。

だが、最早決着はついている。どれほど朔の精神が強靱であろうと肉体が限界だ。動かすには最早血が足りない。

終わり。この殺し合いは終わりだ。

紅摩は漠然とそう思い、そしてなぜか僅かばかりの落胆を抱く自分に気付いた。それがなぜなのか紅摩は分からず、その気持ちもやがては消えた。

しかし、紅摩は知らなかった。分かっていたいなかった。

七夜は殺し屋。殺すことを糧とする一族。故に殺すことへの執着は最早拭うこともできない。

魔へと対抗するために永の時を暗殺術の昇華へと費やし、近親相姦によつて人間が持つ退魔衝動を特化させた彼らなのだ。

その肉に流れる血の中へと刻まれた七夜の系譜は真に度し難く。

七夜の血は最早、人としての規格すらも越えようとしていた。

「
！！」

地を舐めるような低さで朔は霞んでいく。骨まで晒す肩の断面から血を撒き散らし、ただまっすぐに。影も置いていかんばかりの疾さで向かっていき、弾丸のようにそれを射出した。

「
っ」

それは、朔のもげた腕だった。

今しがたもがれた人間の腕が、真っ直ぐに恐るべき速さで紅摩へと投擲されたのだ。

恐るべきは朔だろう。自分のもがれた腕を拾い、それを投擲したのだ。不気味や恐れを感じることもなく。およそ通常の子供に出来る選択ではない。

紅摩もまた、自身に飛来する腕を見て目を見開く。

そしてそれ以外の方向から何かは空気を切り裂いてくる。

「な
」

全く別方向から、金属が飛来する。

それは、紅摩にも見たことがあるものだった。

月光を浴びて煌く刃。

小太刀。朔が振るっていたはずの小太刀が、飛来する腕とは逆の方向から飛んでくる。紅摩の視界ギリギリに刃が見える。しかもそれは投擲された腕と同等の速さ。刹那のうちに腕と全く同時に着弾する速度で紅摩に襲い掛かってきたのだ。

しかし、紅摩の身体にそれが傷を与えるのか。

朔は分かっているはずである。己では紅摩を殺すことが出来ぬことを。

ならばこの攻撃は囷か。だが、向かってくるそれらはどういうわけか、今まで朔が攻撃してきた手段で最も疾く、紅摩に突き刺さると迫ってくるそれらは、紅摩でも無視できぬ威力を秘めている可

能性がある。

しかしここにきて、紅摩は違和感を覚えた。

朔の気配が、ない。

先ほどまで感じていた殺気が嘘のように消え去り、森のざわめきも収まっている。どれほど気を巡らせ、あの曖昧な幽鬼の気配を読もうとしても、朔は何処にもいなかった。

撤退。それが浮かぶ。あるいは途中で息絶えたか。投擲の攻撃は少なくとも撤退のためのものだろうか。

瞬間の中、紅摩はそう思い、飛来するものから身を守るために、それらを何とかして同時に打ち払う。

刹那、紅摩の首筋を、ナニカが撫でた。

「っ！！！！」

紅摩の頭上、夜空に吊るされた満月を背に、朔は宙に飛んでいた。

七夜最秘奥、極死・七夜。

それは回避不可能な正しく必殺の一撃であり、それを放てば必ず殺す、必ず殺さなくてはならない七夜の最高技術。

武装の投擲に追随し、投擲された武装と同時に相手に到達、そして武装を回避しようとするれば接近した術者に首を搦じ切られ、術者

を回避しようとするれば武装によって致命的負傷を負う二段構えの攻撃である。だが、言うは易し。行方は難し。

この技術を会得するものは暗殺集団である七夜でも少ない。それは正確無比な投擲を要求し、更に投擲した武装と同等の高速移動。それに合わせたしなやかな動き、武装の追突と首を擦じ切るという行為を同時進行させる要領の良さなどが必要とされるからである。

それら全てを混合させることで始めてそれに近い動きを可能とする。

もちろん、可能とするだけでそれは完璧とは程遠い。

暗殺とは完全でなければならぬ。完全でなければ死ぬのは自己であり、それは即ち一族の危機にも繋がりがかねない。ゆえに七夜には完全、または完璧が要求される。

だからこの最秘奥を完全に体得することは七夜として最も必要とされ、また課題でもある。だが、これを体得するのは容易ではないため、これを会得する七夜は正しく七夜の最高戦力と言っても過言ではない扱いを受ける。

極死・七夜を会得する者は七夜の体現であり、それ即ち七夜一族の指針となるべき存在。

そして、朔もまたその術理を会得した七夜であった。

しかし、それを朔は知らない。

七夜朔は極死・七夜を授けられていないのだ。

七夜黄理に教わったわけでもない。

翁に口ぞえされた訳でもない。

誰からも、それを教わっていないのだ。

だが、七夜朔の中に滔々と流れる七夜の血は七夜の歴史を刻んでいる。

ならば、七夜朔の脳が、肉が、血が七夜最秘奥を知らぬはずがない。

七夜朔は純潔の七夜。

誰にでも無く、七夜朔はそれへと辿りつく。

視える。

紅い靄。それが、気体のようでありながら質量を持ち始め、朔の視界に展開されている。

そしてそれらは、紅摩の周囲を覆い、紅摩自身から発生していた。

紅いそれは紅摩を覆い隙間なく展開されており、どういうわけかそれは時折変化して一部が伸びたり、大きくなったりしていく。

最早考える意識もない。血が、足りない。

身体が冷たくなっていく。

人間が出血で死ぬ致死量は体を流れる血液の三分の一。

おそらく朔はそれに達しようとしている。

やがて、朔は死ぬだろう。肉体は限界だ。心臓の鼓動が激しい。命が燃え尽きる。

だが、駆けることは止めない。
まだ、死ぬわけにはいかない。

肉体を動かすのは意志。意思は既に消えかかっている。紅摩を殺そうとする意志のみが朔の体を突き動かす。森の中を駆け回り、木を走り空を走り、気配遮断を無意識のうちに行う。全てはアレを殺すために。

無意識の殺人行動。退魔衝動は既に朔そのものと化した。

動き続けるその様は腕を一本失ったことにより安定していない。更に意思の曖昧なその動きは退魔衝動による極めて本能的な動きであり、人間の機動ではない。

最早それは投げ出された人形のような、不気味な姿であった。

弾丸めいた朔の千切れた腕、満身創痕と化しても握り続けた小太刀。それが同時に紅摩へと向かっていく。移動と共に投擲されたそれらは、速度は違えど全く同時に着弾していこうとする。

そして視えた。

紅摩を取り囲んだ紅い靄が形を変えた。

同時に迫る弾丸に向かって紅が薄く伸びていく。

そして、紅摩の頭上。

そこに靄はかかっている。消えている。

靄の正体はわからない。それが一体何なのか見当もつかない。

だが、その空白に。その僅かな間隙に。

勝機を視た。

朔は紅摩の頭上へと飛翔し、残された右腕が紅摩の頸部を破壊しようとする。それはどう映るだろう。突然気配もなく音もなく空に朔が現われたのである。

その瞳は、蒼い。虚空を思わす空の蒼。

だが、最早それは死んでいる。瞳は既に生気を無くしていた。無機質だった瞳には力もない。それでも視えた、僅かな勝機。それに向かつて最早意識も消えようとする朔は滑空する。

そして、弾丸が着弾。

その瞬間朔の手が紅摩の首に僅かに触れ

朔の頭部を、無骨な掌が掴まえた。

紅摩の拳に握られた小さな子供の頭部。

振り向きざま、僅かな感触に反応した紅摩の腕が、いつの間にか朔の顔を掴んでいた。打ち払うはずの腕をそのまま頭上へと伸ばしたのである。

その体、心臓の上には肉にのめり込んだ腕と、首筋に僅かばかりに突き刺さった小太刀。そこから微量の血が滲み出た。朔の投擲は紅摩の皮膚を破れども、結局肉を裂く事は叶わなかった。

そして、吊り上げられる。垂れ下がる朔の肉体。抗う力さえ残っていないのだろう。掴んだ拳の隙間から、輝きのない蒼の瞳が見えた。

魔眼発現。

七夜の超能力、淨眼。ここに来て、朔は魔眼を発現させたのだ。

だがそれも及ばず、今朝は死のうとしている。

血は止まらない。流れ流れ、朔を殺す。

そして、目前の存在もまた、朔を殺す鬼であった。

恐るべき紅摩の握力に朔の頭部が悲鳴をあげる。

しかし、朔には声を上げること出来ない。時折、ピクリとその身体が動いた。

その様を見る紅摩の瞳は感情が読めない。朔では紅摩を殺しえない。分かっていたことだ。これは詰まるところ、必定の結末。

だが、少しだけ、ほんの少しだけその瞳が揺れた。

「……………」

朔を掴む紅摩の腕が、尋常ではない盛り上がりを見せる。筋肉は膨張し、それはやがて熱を生み出し。

紅摩の生み出す熱に、陽炎が現われた。自身でも制御できぬ熱をそのままに、紅摩は次第に力を増していく。

朔の頭部が軋む。それは紅摩にとって硬いが、それだけのもの。紅摩の握力は人間の頭部などあっけなく握りつぶす。

圧壊。

瞬間だった。

朔を潰そうと力をこめた紅摩の腕に、強かな痛みが奔った。

「　　」

そして反応も出来ぬ、風斬り音。ナニカが紅摩の側を通った。

「なに　　」

気付けば、紅摩の腕に朔はいない。

「餓鬼。俺の息子に、何してくれてる」

いつの間にかそこに、男がいた。

鋭い、研ぎ澄まされた抜き身の刃を思わす男。空気を切り裂くよ

うな雰囲気を滲ませ、
その場に佇んでいた。そしてその瞳。蒼く、ひたすらに鋭い視線は
得物を狙う鷹のよう。それが殺意を孕み、紅摩を睨む。しかしその
瞳は笑っている。嘲っている。殺したくて仕方がないと、紅摩を見
て笑っている。

「貴様は……」

黒い装束。細く、しなやかな肉体。

そしてその腕には、命消えかかる朔が抱かれ、握るは鉄の輝きを
放つ二本の撥。

「七夜、黄理

っ
」

男は、七夜黄理は、当たり前のように、そこにいた。

第十三話 紅き鬼（後書き）

勝てません。軋間紅摩に勝てるわけがありません。

どうも、六です。

紅摩の理不尽なまでの強さを表現したかったのですが、どうですか？無敵っぽいのですか？

私の中で紅摩の理不尽さはバーサーカーに匹敵しています。これで紅赤朱状態になったら手がつけられません。

あと、なんで黄理よりも先に朔を紅摩にぶつけたのか。

ぶつちやけ黄理よりも後に戦ったら余裕で殺されます。紅摩ヒヤッハーしてます。スイッチ入った紅摩を相手に朔が敵うわけがありません、

なので黄理よりも先にかちあってギリギリ生存させる形となりました。

この話となる以前ですが、いくら書いても朔が死ぬ結果になり頭を抱えました。紅摩に殺され、紅摩に潰され、紅摩に焼かれ、紅摩に紅摩に紅摩にe t c ……。

どう考えても紅摩に殺されるシナリオしか思いつかない。なので無理矢理この形となりました。それでも死に掛けていますが。

以下今回のおさらい。

七夜朔は厨二病（魔眼）を手に入れた。

七夜朔はロケットパンチを会得した。（ただし一回限り）

七夜朔は紅摩との強敵フラグを立ち上げた。回収は未定。

七夜黄理は美味しい所を持っていった。

七夜黄理はドサクサに紛れ朔を息子と公言した。

第十四話 鼓動（前書き）

今回は短めです。

アドバイス、感想、批判などなど。

もしよろしければ、お書きください。

執筆の指針、励みになります。

では、ごきげん。

第十四話 鼓動

世界が、死を望んだ。

この時、七夜の森にいる生命は自身の死を見た。無残に殺されていく死を幻視した。それは人間、混血も例外ではなかった。原型を留めぬほど殺されつくした自身の造形を見たのである。

森にいるあらゆる生命は自らの死を望み、自ら息絶えていった。虫は共食いを始め、鳥は飛ぶことも出来ずに墮ち、動物は壮絶に死に絶えていく。この世界そのものから逃げていくように。

動物は本能で生きているが故に賢しい。自らの死に敏感であり、読み取る力に優れている。老いた狼などには死期を悟り、群れを離れる習性がある事がそれを証明している。故に、今この時、七夜の森を飲み込んだ殺気。それに中てられ、生命は自らの死を選択した。今この時こそ自身の死期であると悟ったのである。

森の中、対峙するは人間と人外。

片や混血。人外の力を揮い圧倒的な力で命を押しつぶす絶滅種。

片や人間。長の時間を混血殺しとして歩んできた暗殺者。

遠野分家最後の当主、鬼種の末裔軋間紅摩。

退魔一族七夜現当主、鬼神七夜黄理。

七夜と遠野が殺し合いを今正に行っている。銃声は絶え間なく降り注ぎ、悲鳴は天にも届かんばかりに響いていく。しかし今、両者に於いては喧騒は遠く、互いの存在しかないよう。

今この時。かつて出会った二人は、今この時遂に会い見えた。

「……」

気がつけば黄理の後方、その側に翁がいた。

「朔……」

黄理は腕に抱かれた朔を見た。腕のない、今にも逝き絶えてしま
いそうな朔の姿。着流しは血に染まり、身体は赤に塗れ、ボロボロ
の姿で、動かない朔は黄理の腕の中にいた。

久しぶりに朔の姿を真正面から捉えた。思えば、朔を抱いたのは、
生まれたばかりの朔を運んだあの時のみだった。それ以来黄理が肉
体的な接触を行なったことはない。だからだろう、朔は黄理が思っ
ていた以上に軽かった。

丸みなく、削げた肉体。子供には似合わない、引き締まった身体。
朔よりも未熟な志貴と同等かそれ以下の重さ。それだけしかないの
に、朔は黄理の訓練についていき、化け物紅摩との戦闘を行った。

そんなことも黄理は今まで知らなかった。知らず、朔に押し付け
ていたのである。厳酷な訓練、里の者からの隔離。声をかけること
も無く、自分は一体朔の何を見てきたのか。

腕の中、朔は動かない。輝きのない蒼の瞳。浅い呼吸。表情は虚
ろ。血の気の無い顔。

死んでいるかのようにだった。死にいくようだった。

だが、未だ朔は生きている。死んでいない。

「朔」

朔がいないと知り、黄理は前線で敵を殺しながら全力で朔の姿を探した。人数は多く中てられない。現状、七夜は押されようとしていいる。人外に対し、前線を保っているが、それはいつまで持つか。

魔眼を使えども、朔の思念が見えなかった。黄理の魔眼は人の思念を視る。人は気配は隠せども、思念を隠すことなど出来はしない。この魔眼により、黄理は今まで暗殺を達成してきたのだ。だが、朔の思念が視えない。多くの思念に吞まれたのか、あるいは、朔は既に倒れたのか。

そんな時である。

森が悲鳴をあげた。

身も凍るような殺気が七夜の森を震わせたのである。それと同時にであった。紅い思念を捉えたのである。

黄理を動かしたのは予感であった。頼りなることも、頼ることも無い予感であった。ナニカ化け物がいて、そこに朔はいると。

そして黄理はたどり着いたのである。一瞬たりとも遅ければ、黄理の腕の中に朔はいなかった。紅摩と子供の死体のみがいたはず。

声をかけたかった。だが、自分は一体何を言えばいいのか。何を言うべきなのか。分からない。今までの影がちらついてくる。当主

として朔に接してきた。酷な事をしてきた。

だが。それでも黄理は。

「よく、やった」

朔の父になりたかった。

意識もあるか分からぬ朔に、微かに笑む。

不器用な笑みだった。

それは奇しくもあの時。

生まれたばかりの子供に名を与えた朝焼けに似ていた。

「翁。朔を連れて退き、治療を行え」

「はっ」

恭しく翁は朔を黄理の腕から引き取った。

翁は何も言わず、朔の着流しを肌蹴、一部分を裂いてその布切れを使い止血を始めた。腋の下にある動脈を圧迫させることで応急的な止血を瞬時に行ったのである。しかし、これは応急処置。大小多くの傷が見える。だが、何よりも左肩。赤く赤い傷口が曝け出されている。引き千切られた筋肉繊維、赤い色に塗れた白の骨止血すれども血は勢いを殺したのみ。早急な治療が必要である。

「御館様。朔様を運びます。……御武運を」

翁は消えていく。その腕に朔を抱きしめて。

そして残されたのは黄理と紅摩。互いに無言。ただ殺しあうためだけにめぐり合ったのだ。言葉は不要。交わすような言葉などありはしない。

ここに来て、黄理の内側に激情は無かった。我が子である朔が死にかけた根源が目前にいるのである。それなのに心は落ち着き払い、ひたすらに表情は冷たい。

心は何も無い。殺人機械。

目前に、金属が迫った。

猛り、紅摩が襲い掛かる。

瞬時に黄理の姿が消える。

瞬きも追いつかぬ疾さ。影すら置いていき、風すら起こさずに。

黄理は、紅摩の首を凧いだ。

交差が始まる。殺し合いが、始まる。

そしてこれが。

朔と黄理の、最後の会合だった。

七夜の森を全力で進みながら、翁は現在の戦況を鑑みる。

状況は不利。人外どもの戦術に七夜は押されている。七夜最強戦力である黄理は前線ではなく、一人の混血の相手をしている。遊撃の攻勢が減少したのは紛れもない事実。今こうしている合間に、七夜は死んでいく。死に向かって歩んでいく。これからどれほど耐えられるかが鍵だ。

しかし、問題はあの混血だ。

あれは危険すぎる。些か、黄理にさえ手に余りそうな存在。真正の化生の気配だ。あれがどうなるかで、おそらく勝敗は分かれる。七夜が減るか。混血が死に絶えるか。

「ふむ、早く戻るのが得策ですかな」

指揮を行えぬはずい。だが、それを抑えてなおも、あれは止まるかどうか。

「朔様。もう少しの辛抱ですぞ。今しばらくその命、彼岸に持つていかれまするな」

腕の中にいる朔はもう戦えない。目に見えるほどの重態である。肩は？げ、失血が激しく、意識が無い。チアノーゼが始めているのが確認できる。今も尚、僅かに開かれている蒼の瞳に生気はない。死に逝く者の目である。翁としてもこれ以上朔が戦うことは許容できなかつた。

朔は子供にしては異常な子供だった。高すぎる戦闘能力、早過ぎる成長速度。虚無に支配されたかのような様相。七夜の鬼才。鬼神の子。黄理の実子、志貴よりも次期当主として将来を囁かれ期待された子供である。

だが、それは翁にとってあまり関係のない話である。短くない時間を七夜として生きた。この里に生きる七夜は翁にとって、朔がどうだろうがあまり意味など無い。可愛い里の子供である。

翁としても朔を救いたい。志貴と共にいた朔の姿を覚えている。虚ろにも似た朔のそれまでとはどこか雰囲気が生じた差異そしてそれを翁は子供らしさと感じた。

死なせない。死なせるにはまだ幼すぎる。朔には生きてもらわなければならぬのだ。

胸の中、朔の鼓動は弱いながらも伝わってくる。

その鼓動だけを頼りに、翁は森を走った。

その道を、止まることのない朔の血が点々と続いていった。

遠くから悲鳴が聞こえる。

七夜かあるいは混血か。判断はつかない。ただ状況からして悲鳴は近い。悲鳴がどちらのものであれ、前線は下がりつつある。

それを知りながら、私は何も出来ない事に唇を噛んだ。

万が一のため屋敷は出払っている。最も前線に近い平屋の中で、私は震えている。本当なら屋敷の中にいるべきなのかも知れない。だが、それでも私はここにいたかった。

私たち七夜が暮らすこの森に、人外共がいると言う事実。七夜の領域に今唾棄すべき存在がいると言うだけで身体が憎悪に震える。しかし、混血が近くにいると言う現状に、身体が、精神が怯えを示す。空気から伝わる歪の存在。人間以外の気配が森に充満している。それが堪らなく怖い。

だがそれ以上に、朔が何処にもいないことが怖かった。

朔が何処にもいない。この夜に、朔の姿が見えない。混血の襲来を知り、慌てて朔が寝ているはずの離れに向かった。だが、中には誰もおらず、温もりの無い布団だけが敷かれていた。血の気が引くとはあのことだろうか。それから私は狂乱しようとする精神を堪え、兄様に報告しに行った。

朔がいない。それだけで、私は足元が竦んだ。

禁止令から幾程後悔を重ねただろう。悲嘆に明け暮れただろうか。側にいることも出来ぬ自らを罵倒する日々を重ねても、時間は過ぎていった。しかし、私が朔を想わぬ瞬間などなかった。

「大丈夫です」

気付けばそこに、義姉様の姿があった。

「義姉様っ？なぜここに？志貴はどうしたのです」

義姉様は現在屋敷の中にいるはず。だが今日の前に義姉様がいた。

「心配だったので、こっそりと。志貴なら今は眠っています。あの子寝付きがいいから、直ぐには起きませんよ」

そう言って義姉様は少し微笑まれた。

「ですが……」

それが納得いかなくて私は反射的に口を開こうとする。

だが義姉様は、そんな私を見て相変わらず微笑まっていた。

「納得出来る出来ないは問題ではありません。……私も、あの人を待っていたいから」

義姉様は言う。貴方と同じように、私も心配なのですよ、と。

義姉様は兄様と結ばれてからそれなりの歳月を過ごされてきた。前線に出ることも少なかった義姉様は、兄様が暗殺に向かう背中をこっやって待っていたのだろうか。

白く細い腕が私の拳に添えられた。いつの間にか、力強く握りしめられた私の拳から血が滲んでいる。気付かなかった。それを柔らかな手つきで解しながら。

「待ちましょう。あの人を、朔を。大丈夫です。二人は強い。だから」

「朔様を見つけました　　！！」

翁の声が聞こえた。突然聞こえたその声に一瞬理解が遅れた。だが、朔という言葉に身体が反応した。急ぎ外に駆ける。平屋を抜けた私が嗅いだのは血の匂いだった。夜に血が染みこんでいる。

翁は直ぐに見つかった。平屋から出てきた私に翁は真剣な鋭い眼差しを向ける。

そして、それを視た。

「え……」

イラつくほどに眩しい月光に照らされ、朔の姿が視えた。

「さ、く　　？」

七夜の森を駆けてきた翁の腕の中、そこに朔はいた。力の抜けた身体。傷だらけの姿。なぜだろう、朔のうでがいつぱんない。ひだりのかたから、先がない。

そこから血、血が血がながれて。
からだじゅうが血で塗れて。

朔の着た着流し。きれいだっただあいろは黒ずんで。

朔は、さくは、さくは。

おきなの中かで、うごいていない。

すこしだけひらかれた、めが生きていなくて。

それは、まるで、さくが死

「
」

乾いた音。

目前が暗闇に閉ざされようとする私の頬に衝撃があった。

見れば、義姉様が私の頬を張ったと気付いた。

「何をしているのですか？」

そして先ほどとは打って変わって厳しい表情の義姉様。

「あなたは何をしています？」

「……わ、わたしは」

だって、だって朔が

「動きなさい。失神するのは構いませんが、それではあなたは何故
待ち続けたのです」

それに見なさい。朔はまだ生きています。

義姉様の言葉が耳に、届いた。

朔を見る。すると僅かながらに、本当に見逃しそうなほど少し、胸が上下していた。

「あ……」

朔はまだ、生きている。

それが分かり、身体に力が入る。

そつだ。私は、何をしている。まだ決まったわけではないと言っているのに。

「翁っ！！朔はどうなった！！」

「混血との戦闘により負傷。その際に多量の出血が確認され」

「生きているんだな！！」

「はっ。命まだ繋がっておりますが、しかし失血が夥しく危険な状態で御座います。至急治療を行わなければ時期に」

「ならば良い。誰か、ありったけのお湯を沸かせっ。それと増血剤を持ってこい。至急治療に当たるっ」

翁から朔を受け取る。軽い。どれだけ強くなるうとも、朔は子供だった。

「それでは、朔様をお頼みします」

頭を下げた後、翁は消えていった。おそらく、兄様の側に行ったのか。

私が朔を育ててきたのだ。私だけが、朔の側にあっただのだ。そし

て幼い朔を守りきれなかったのも、私だ。

ならば、私が朔を救わなければならない。

これは贖罪であり、そして私だけの責務。

腕の中。朔は動かない。その僅かに開いた蒼の瞳。おそらく魔眼を発現させたのか。高みを更に登っているのか。

しかし、そんな事はどうでもいい。

僅かに伝わる命の声音。微弱ながらも、未だ朔が死んでいない何よりの証拠であった。それだけを頼りに、私は動く。それだけで私は動ける。それだけで、充分だ。

死んでいく。

先ほどまで生きていたはずの命が、死に絶えていく。死んで、殺され、共倒れていく。七夜の森の中、鬱蒼と茂る夜の森に、死が蔓延していく。

人間と混血。七夜と遠野。冷たい冬の満月がぶら下がる中始まった混血による七夜襲撃。戦闘開始当時、前線は互いに譲らなかった。だが、それでも勝敗の天秤は傾きつつある。

数。

単純ながらに何とも分かりやすい暴力。数によって礫殺する。明

快かつ分かりやすい力の象徴である。遠野が引き連れた私兵と七夜の対比は明らかに前者に分があった。

更に戦闘。

七夜は戦闘によって生き続けた一族ではない。長い間練り上げてきた暗殺術。それだけで退魔として混血を殺めてきた一族である。戦闘を前提とした術ではない。どれほど巧く命を解体しえるか。それを念頭に置いた一族。

状況は七夜の不利だった。

戦場に於いては七夜が有利だ。森全体に展開する結果、襲い掛かる植物たち、敷き詰められた罫の数。七夜には慣れ親しんだ森であり、この森での戦闘は七夜有利に傾くはず。

だが、それらを掻い潜り、混血たちはやって来ている。それが意味するところは、どういうわけか混血たちはそれらに対応する術を持っていたということ。幸運が幾たびも重なり、偶然に掻い潜ったなどは在り得ない。偶然に偶然が重なった結果は必然以外の何物でもない。

つまり、内通者の可能性。七夜の情報を持つものが、あちらにいて情報をリークさせている可能性がある。

それが起因し、七夜は今、滅ぼうとしている。

鳴り止まない銃声に肉体が舞いながら死んでいく。原型を留めぬままに死んでいく。仲間の死体に重なるかのように死んでいく。

止まない銃声。止まない悲鳴。止まない死。

それでも戦うことを止めない。殺すことを止めはしない。確実に滅びようとしているのに、七夜の者が退く事は無かった。皆死んでいく。殺しながら、死んでいく。

混血たちは進む。七夜が死んでいく様を、せせら笑うかのように。

鼓動を奏で、終わりが近く。

第十四話 鼓動（後書き）

相も変わらずテンポの良い文章を書けません。六です。

そろそろ本編開始にいかうかと思っっています。

このままぐだぐだと続けるのも、だれるかなあと。

ヒロインは既に決まっています。

ハーレムにはするつもりありませんが、意見があれば感想にお書きください。

稚拙な技量ではありますが、精一杯書きます。

それではこの辺で。

六でした。

お読みくださった貴方に感謝を。

以下今回のおさらい。

七夜朔は台詞がなかった。軽く死んでた。

七夜黄理は朔をちゃっかり自分の子供扱いした。

妹様は黄理の嫁に気合を打たれた。

第十五話 ひとつの終焉の始まり（前書き）

感想、アドバイス、意見、はたまた批判など。
もしよろしければお書きください。

私の血となり、肉となり、骨となります。

では、どうぞ。

第十五話 ひとつの終焉の始まり

あ
つ
な

さ

音が、聞こえる。

.....遠く、果ての方から。音が。

い

.....だが、それも、やがて薄れ。

そして、消えた。

.....
.....。沈黙に、身を委ねる。

それが少しだけ、心地よく思えた。

.....

始めて朔を抱いたあの日。それ以降、朔と関わる事など無かった。朔は妹が世話を名乗り出て、自分はその頃朔に興味を覚えなかった。殺人を考察し続ける殺人機械。それだけの男だった。朔の存在はすぐさま記憶の奥底に消えていった。

それから変わらぬ暗殺の日々。ひたすら己の腕を磨き、どれだけ巧く人体を解体できるかのみには思考は置かれた。リノリウムのように黄理にとっては変わることはない時間。そのまま黄理は自分は一生を殺し屋として生きていくと考え、決めていた。だが、それが変わったのは志貴が生まれてからだだった。自分の息子。跡継ぎのために生まれた子供。その存在が黄理を変えたのである。そしてその時になって、黄理は朔の存在を思い出したのだ。

自身が殺した兄の子供。元より黄理の兄妹は七夜としての血が濃く、妹は魔に怯え、兄はそれに飲み込まれていた。殺人に酔い、狂いの果てに子を産んだばかりの妻を殺めた。里の掟により兄は黄理の手によって粛清されたが、それが意味するところは、朔には親がいなくなった事だった。父は粛清され、母は父によって殺された。そして、朔は生まれながらに一人となったのである。

後悔は無い。兄ではあったが、理性をなくした獣と化した兄に情をかけるほど、あの頃の黄理は人間ではなかった。

ただ、未練はあった。過去に兄と過ごした日々を思い出すこともあった。そして、志貴が生まれた後、それが何であるかを知った時、

黄理は未練を知ったのである。

その兄の、子供。

理由はどうあれ、黄理が朔の父を奪ったのは消えない事実。

この気持ちは罪悪なのか、それとも贖罪なのか。それは黄理には判断しかねる。

故に黄理は自身の手で兄を殺しておきながら、父となろうとしている。

ただ、日増しに成長していく朔の姿を見るのは心安らぎ、訓練で頭角を現す朔に目を見張り、志貴と共にいる朔を見てると和んだ。志貴が生まれたあの時から、黄理は人間らしさを手に入れたのだ。

この気持ちが何か、未だ分からない。ただ、それでも、黄理は朔の父に成りたかった。

傲慢だ。自らの手で父親を奪っておきながら、自らが父に成ろうとしているのである。

無機質な子供。空虚が形を成したような子供。

かつての自分を思い起こさせるには、朔はあまりに黄理と似すぎている。

殺人機械と呼び恐れられ、血水を浴びる殺人鬼に。殺戮を重ね屍の道を成すだけの存在に。七夜の自分はそうなるように求めている。

だが、父である自分はどうかだろうか。

父である黄理は朔を自身の子供のように思っている。故に朔には自分のようにはなあってほしくない。しかし、今更何を言えるのだろうか。存在さえも忘れて、今更父親面など。

接し方が分からない。志責とは違う、自身の罪のような子供である。故に黄理には、戦闘訓練以外の接し方が出来なかった。それだけが黄理に出来る朔との時間だった。

だが、黄理が朔との時間を増やすため訓練を重ねることに、朔は黄理の姿に近づいていく。風貌が、ではない。無情。無機質。黄理の内包する全てが朔にはある。それをどうすることも出来ずに、時は過ぎ、朔は力をつけていく。

無力。朔に近づきたいのに、近づくほどに朔は黄理がなってほしくない存在へと近づく。黄理のように、あるいは兄のように。

それでも、黄理は朔の父でありたかった。

何て我儘。自分の都合でしか考えられない愚者。

しかし、それでも、黄理は　　。

故に。

こいつだけは、生かしておけない。

「
っ」

交差の瞬間に振りぬかれた撥。殴打器であるそれは鉄の輝きを放ちながら、混血軋間紅摩の肉体を刻む。七夜最高の七夜である黄理の技量により、ただの殴打器は人体を解体しせる威力を秘める。

迫る威圧。迸る殺気。

そして。

甲高い、金属を打ち付けたような悲鳴が響いた。

激情は無い。憎悪は無い。

心はただ凍てつき、温もりは消えた。

身体を捻り、独楽のように回転しながら、紅摩に反撃する思考すら与えず一撃を放つ。地面が抉れた。関節の軋み。足の指から伝達される力は分散することなく脚を、背骨を、腕を通る。閃光の如く、鋼色が延びる。狙いは人中。顔面を砕かんばかりに突きの一撃。

やることはかつてと変わらない。

いつもどおりに、殺すのみ。

顔の中心、紅摩の急所に突き刺さる鋼を無視し、僅かばかりに仰け反る紅摩の側頭部に左の撥が奔る。それは米神を強かに打ちつけ、紅摩の脳を撒き散らそうとする。だが、硬い。人間の感触が、伝わってこない。骨の硬さではない。密度の高い金属の山に打ち付けた

ような痺れが腕に伝わってくる。

黄理は機械だ。

殺人を考察し続ける殺人機械。それがかつての黄理の姿であった。志貴が生まれ、憑き物が落ちはしたものの、人間の本质はそう簡単に変わらない。

黄理は機械でしかないのだ。

そして、その首筋。

紅摩の巨木めいた首筋に僅かばかりに突き刺さる、銀色。

朔の小太刀。紅摩の首筋に突き刺さり、血が僅かに滲んでいる。

柄に向かい、掌底を叩き込む。

小太刀の柄が破砕した。だが、少しだけ、小太刀の刃が紅摩の首筋に入り込み、血の滲みが増していく。紅摩の鋼の肉体に、血が滲んでいく。

「っー！」

鋭い痛みを、紅摩は感じた。今まで、紅摩が感じたこともないような、刃物の痛み。紅摩の肉体に刃物が勝る。それは今まで体験もしたことのない痛みを、紅摩に与えた。僅かな、本当に極僅かに皮を裂いて肉に入り込む。そして肉が切れた。これだけの事。それだけの事である。だが、その痛みを、紅摩は知らなかった。

かつて、掠れそうなほど遠い記憶の奥底。子供だった紅摩は軋問の一族の手によってその米神を拳銃で撃たれたことがある。そして

その時には、血すら流さなかったのだ。

その紅摩の肉体に、血が滲んでいる。

この意味。朔の一撃は、紅摩に確かに届いていたのだ。

命を奪う事は敵わなかった。思い遂げられず、朔は敗北した。

だが、その起死回生の一撃は、紅摩の肉体に傷を負わず所業を成し遂げていたのである。

そこを黄理は強かに打った。肉を裂く刃。紅摩の傷は深くなる。

「
」

豪放。

それを表現するには、その言葉しかなかった。

紅摩の直線的な拳の一撃が、黄理の身体目掛けて放たれる。唸りを上げて迫る拳。黄理に瞬きを与える事もさせず、空気を突き抜けて放たれた拳を、黄理は周囲に乱立する木へと閃走で回避。その木を足場に、再び跳躍。駆ける術理である七夜の空間移動術閃走。足の腰の可変を強化することによって可能な変則的な移動は、人間の動きではない。

朔と同等以上の疾さで駆け巡る黄理の姿を、紅摩は視認できていない。

月明かり眩しい夜の森。影に暗闇に鬱蒼と茂る森の中、黄理の姿

は溶け込んでいく。身につける黒衣、式神にも勝る隠密に紅摩は対応できない。

そして紅摩の頭上。木々よりも高く夜の空を突き破り、黄理は急降下していった。夜を滑る黄理の目には紅摩の姿。

迫る黄理に気付いた紅摩であったが、時既に遅い。

黄理を相手にするには、あまりに遅すぎる。

紅摩が迎撃するよりも、防御し回避するより疾く。

黄理の踵。それが紅摩の頭頂、唐竹に突き落とされた。

かつて朔にも食らわしたそれよりも圧倒的膂力、それに加え落下速度、自身の体重が込められたその一撃に、紅摩の膝が怯み足元が沈む。

「つく!!」

呻き声にも似た呼吸が聞こえる。僅かに沈んだ膝を跳ね直すと同時に、紅摩の掌が頭部に突き刺さった足に向かい伸ばされる。朔を掴んだ圧壊の拳。子供の朔すら潰せた人外の握撃は黄理の肉体などあっけなく握り潰す。

しかし、それは空を切った。

翻る。空間を柔らかく舞い、旋回する黄理に紅摩の拳が外れた。そして背中から黄理の足が伸びる。鞭の如くにしなりながら、刺突の爪先が紅摩の首筋に襲い掛かった。

黄理の全身は言うに及ばず、黄理の限界まで鍛えこまれている。長く鍛えられた身体は正に凶器であり、例えば爪先の一撃は鋭ささえ得ている。人間であればそのまま首を落とすような一撃を、紅摩は嫌い打ち払おうとするが、防御に回された腕を掻い潜り、黄理の爪先が紅摩の首筋に突き刺さる。深く刺さる衝撃に紅摩の筋肉が痛み、爪先が刃を打ち付けた。更にめり込んで行く刃。それが紅摩の肉を裂いていく。それを紅摩は突進を敢行することで無理矢理黄理を弾き飛ばし。

「っがあ!!!？」

紅摩の後頭部を、衝撃が襲った。

後頭部が人間にとってどれほど危険なのか。背筋に近く、神経の集中する頸部、脳幹、脊髄を脳髄を守るにはあまりに薄い骨。後頭部を強打するだけで人は簡単に死ぬ。

そしてその部分に、紅摩は言い難い鈍痛を受けた。頭が割れんばかりに痛む。

何が、起こったのか。

理解が追いつかぬ紅摩の視界に、黄理の姿が見えなかった。

その光景を客観的に理解できるものはどれほどいるだろうか。

吹き飛ばされた黄理が、瞬時に紅摩の後方に現われ、その後頭部を撃ったのである。

紅摩の突進を黄理は確かに喰らった。だが、それはほんの刹那に過ぎない。

確かに衝撃は凄まじい。人間如き安易に磨り潰す突進を足の裏で受け、衝撃を殺した黄理は後方に飛びながら、吹き飛ばされる方向を修正し、木に着地して紅摩の背後に向い、反応すら出来ぬ疾さで翔けたのである。

言葉で現すにはあまりに疾く、言葉だけではその絶技を表すこともできない。

だが紅摩が黄理を探るよりも先に、後方に着地音が聞こえた。

振り向く。

そこには既に、撥を振り上げた、黄理の姿があった。

状況は黄理が優勢だった。

そもそも、黄理は朔の指針であり、そして師範である。朔に動き、技、重心移動、はては気配の消し方、効率のよい人体破壊術。それら全てを教え込んだのは黄理だ。確かに朔の成長は目覚ましい。時期に里一番の七夜になる。だが、黄理は七夜最強の男である。その黄理が朔よりも劣っているはずが無い

紅摩に反撃させる余地を与えず、黄理の波濤は止まる事を知らない。紅摩を殺す。解体する。生きたまま解体してやる。殺し尽くしてやる。黄理の瞳、その蒼の瞳は嘲いながら紅摩の姿を捉えている。

黄理の魔眼は思念の可視化。人は思念を隠すことが出来ない。そ

の瞳に紅摩の姿はいる。赤い思念を噴出させて。

人間の思念は濁った透明だ。その流れは緩急によって感情を映し出すが、稀にそれ以外の色を持つ存在がいる。そしてそれは人間と呼ぶこともおこがましい人外の化生であるが、黄理の視界には朱の色が激しく噴出していく。

流石は紅赤朱であると言えようか。その存在は完全に化け物だ。軋間には人間の血も混じっていると聞かすが、それは本当だろうか、と黄理は思う。

そう、この気配。そうだ、昔暗殺の際にかつて感じたことのある、圧倒的化け物の感覚。

それが今、こうして黄理の目前にいる。

あの頃よりも、更なる化生と化して。

それを証明するかのように、黄理は未だ紅摩を殺していない。

鍛えこんだ技量。人体をどれだけ巧く解体できるかのみ探求し続けた黄理の技を、紅摩は身に受けながら、未だ生きている。黄理が全てをかけてきた殺す術を、紅摩は血を僅かに流す呑みでいる。これは驚嘆に値する事である。それがこうして、殺し合いという結果を招いた。

こんな化け物を相手に、朔は立ち向かったのか。

えたのか。

そして、こいつが、この餓鬼が、朔をあのような姿に変

地に降り立つ黄理の視界に、それが映る。踏み込む地面は赤黒い。

地面に落ちた朔の左腕。千切られた腕は力なく、地面にある。

肉体の一部が欠損する事はどれほどの事か。肉体的精神的影響は計り知れない。特に肉朔は体を千切られたのだ。黄理では想像もできぬ痛みが朔を襲ったに違いない。

心がざらつく。

朔を傷つただけでこの混血は許されない。紅摩は黄理の禁忌に触れたのだ。死しても許しはしない。殺してもう一度殺す。殺し尽くしてやる。

紅摩の分厚く高密度の筋肉、生命力は今まで黄理が暗殺してきた混血とは比べ物にならない。黄理の技が通用しない。

だが、それが何だと言うのか。

通用しないなら、届かせるまで。

紅摩の首筋に突き刺さった、光る冷たい刃に血がつたう。

あれは紅摩の肉を裂いている。朔が紅摩に届いた証。肉に刃が突

き刺さっているのだ。ならばあれは殺せる存在。

それを執拗に狙うことで、紅摩を殺す算段を立てる。

決定打、ではない。

決定打には位置が違う。刃が刺さっているのは首筋。分厚い筋肉に覆われた首の筋。

狙いは喉。確実に破壊することで、人外の命を潰す。

人外を殺すための段取りを考える。

殺し合いは黄理には始めてのことだ。暗殺者として大成した黄理はその圧倒的な強さにより、何かと勝負し殺し合う事は今までなかった、このような殺し合いと言う始めての経験の中、それでも黄理は馴れない状況でありながら、紅摩を殺すと動き続ける。

空間を立体的に動くその様。

周囲の木々を足場に、移動するその姿。

狡猾に、確実に、対象を狙い殺すその暗殺者を。

人は蜘蛛のようと称し。

混血は黄理を鬼神と呼び恐れた。

鋼が冷たく輝いた。月光を浴び、閃光を放ちながら撥の打ち下ろしが迫る。

それを紅摩は無理矢理の突進で回避。地面を踏み砕いて突き進む。その姿は硬質な身体と相まって、紅摩の姿を犀のように思わせる。幾度黄理が打ちのめそうとも、ダメージを与えようとも、紅摩は黄理に迫ってくる。風を巻き起こし、混血は止まらない。軌間紅摩は止まらない。

黄理を轢殺せんばかりに奔る。今この時に至って、紅摩はこの時を待ち望んでいた自分の正しさを実感していた。この森に訪れた自身の判断を認めた。

なぜなら、この森で紅摩は多くの始めてを体験したのだ。

始めて殺し合いをした。

始めて血を流した。

始めて、人間に圧倒されている。

知らず、紅摩の肉体が熱を帯び始めている。

それに戸惑いを覚えることも無く、紅摩は黄理に突っ込む。

だが、その姿がまたもや消えた。

それと全く同じに、

「ぐっ！」

胸骨が痛みを感じた。打ち据えられた痛み。心臓の上。そこは、投擲された朔の腕がめり込んだ場所である。そこに殴られたような

痛みがあった。

おそらく、朔の投擲により元からその部分は傷めていた可能性。真っ直ぐに心臓を狙ったその一撃は、紅摩の胸骨を強かに打ち、罅を与えていたのである。

そこを狙った黄理の一撃に、紅摩の胸が痛み出す。亀裂の走る紅摩の骨が、軋みだした。起点は既にある。朔の一撃。後はそこに衝撃を与えれば、いくら紅摩の肉体であろうとも耐えることは出来ない。何せ紅摩の相手は黄理。純粹な戦闘力であれば、朔以上。

だが、それもまた、紅摩には始めての事だった。

痛みを感じることに紅摩の身体が熱を帯びていく。痛みがあるということは生きていくことだ。痛みは肉体からの訴えである。すべてからず、生命活動に支障を起こさせる可能性を訴えている。

それは、軋間紅摩が生きていくからに他ならない、はず。実感はつかめない。いまだ紅摩に理解は出来ない。

故に、それらをもっと感じたくて。

あの日感じた何かを分かりたくて。

届かないと分かりながら、紅摩は拳を振るった。

そして紅摩自身も気が付かず、紅摩の全身が、みしり、と音をたてた。

みちみち、と筋肉が盛り上がり、鋼鉄の身体が彫刻のような陰影

を更に深め、一種異様としか言いようがない姿へと、肉体が変わっていく。

その表面には陽炎。体温と呼ぶにはあまりに高温。

それは、いつそ炎だった。

熱が、空気を焦がす。

「触診の結果罫が二箇所、完全骨折が肋骨を含み七箇所。粉碎骨折は左鎖骨一箇所のみ。膝周囲の筋肉が断線している可能性あり。腱に損傷はなし。今現在内臓に影響ないようですが、左の折れた肋骨が少々危ういかも知れません」

「朔の止血はどうなった！」

「肩以外は大丈夫です。しかし、依然肩からの出血は完全には止まっていますせんっ！」

「糸を用意しろっ、暗殺に使うもので良い。それを肩に縛って止血を完成させる！傷口は洗い邪魔なものを落とせっ」

「縫合はしないのですかっ」

「傷口が荒れすぎている！縫合は今不可能だ！今は綺麗にして包帯を巻くんだ！」

平屋の中、朔を中心に多くの七夜が動き回る。この平屋はかつて朔と志貴が共に座学を行った場所であった。普段は使われていない平屋は火がついたかのように騒々しい。横にされた朔を中心に七夜の者が慌しく動き回っている。

木張りの床に寝かされた朔の姿。物言わぬ死体のような姿である。

ここに到るまでに朔が流した血は決して樂觀視出来る量ではない。お湯を浸した布によって拭われた身体には幾つものチアノーゼが現われていた。血が足りず、肉体に血液が回っていない証拠である。顔色は既に土気色。唇は青く、その姿は死人。

左上半身は破壊されている。人外紅摩の一撃のみで朔の鍛えられている肉体は破損した。引き千切られた左肩。そこから先には腕がない。

それでも、朔はまだ生きている。僅かに、ほんの少しだけ上下する胸の動きと、脈の鼓動。それだけが、朔の存命を伝えてくれる。

だが、ここに運ばれるまでの出血を考えれば、朔が助かる見込みはかなり薄い。朔はこのまま死に絶えるのではないだろうか。

「五月蠅い！増血剤はまだかつ」

自身の内側から囁きかける妄想を掃う。

医者はいない。いたにはいたが、流れ弾に巻き込まれ既に死人だ。故に朔を本格的に治療できる人間はこの場所にいない。頼れるのは訓練の際に習っていた応急処置のみ。

しかし、死なせない。死なせはしない。

まだ朔には、これからがある。

「増血剤今届きました！」

「よし、至急朔に投与しろっ！」

「っ！お待ちください。止血も終わっていない今増血剤を投与しても出血が増すだけですっ」

「その出血を止める前に朔が死んでしまっ。血が足りないんだ、今直ぐ投与しろっ！」

「！分かりましたっ、朔様に嚙下させます！」

「！待て、それは私がやるっ」

そう言って私は一族は運んできた増血剤を引っ手繰るように奪った。手の中に握られた瓶は、以前里の結界を強化させた魔術師から買い付けたものだった。薄黒い瓶の中に液体状の薬が入っている。失われたものは戻らない。流れた血は戻りはしない。なら今あるものを増やせば良い、と内臓を活性化させ強引に造血させるこの薬は作られたと聞く。効果は期待できる。即効性の薬は瞬く間に骨髓へと染み渡り、造血細胞を無理矢理作り上げていく。

だが、無論副作用が存在する。

この薬。云わば劇薬である。肉体に負担をかけ、その効果を発揮することで人工的に血液を作り上げるのだ。血液を構成する成分は無論、心臓を強引に脈動させることで、全身に血液を流し込んでいく。衰弱している朔にはあまりに酷。死にかけの身体に文字通り追い討ちをかけるのである。無い物を無理やり作り出していくのだ。反動に服用したものは暫く目が覚めない。少なくとも一ヶ月。魔術師の実験からすれば平均三ヶ月以上、目が覚めない。

それに、朔の肉体が耐え切らなければ、朔は死んでしまっかもしれない。

「朔……」

力なく横たわる朔の頭部裏にゆっくりと腕を回し、持ち上げる。

何処を見ているのかも分からなかった瞳は虚空を思わす蒼。だが、それも輝きはなく、生者の瞳とは程遠い。まるで死んでいるかのよう。身体は冷たい。熱がない。

死なせはしない。自分は朔の側にい続けると決めたのだ。かつての誓い。側に誰もいない朔の側にい続ける、果たすことの出来なかった誓い。

それは私の弱さだった。長兄に抱いた恐怖を、朔に対して抱いてしまったのだ。あの時、混血と出会った朔の豹変に私は長兄の姿を重ねたのだ。厚かましい女だ。恐れを誤魔化すように、兄様に当たったのだ。

朔を信じることも出来ない莫迦な女。どうしようもない愚か。

だが、朔の事は何よりも大切だった。朔といる時間は心安らいだ。気付けば朔の事ばかり考えている自分がいた。訓練に傷を作った朔の事が心配だった。朔がいない事は何よりも辛い事だった。

私は愚かだ。救い様もない愚かな女だ。自分に都合の良い、最低な女だ。

それでも、

「戻って来い」

朔が好きなんだ。

どうしようもないくらい、朔の事が好きだ。

だから、朔を失いたくない。

朔を死なせたくない。

「　　っ」

瓶の中身を一気に口に含む。

形容しがたい匂い、味が充満する。以前外界から手に入った珈琲に甘ったるい味が絞られたような、臭みのある酸味が更にぶちまけられた様な、身体に悪い味だ。

だが、これで朔が救われるならば　　。

「……ん」

力もない朔の唇に口付け、舌をねじ込み、喉を開かせる。舌根が喉に落ちていかないように舌で絡ませ抑えておく。口内から液体が朔へと流れていく感覚があった。

始めて味わう朔の口内に背筋が痺れた。こんな時でありながら、結果的に朔へ口付けを交わした事で、少しだけ内側が疼いていく。甘く、痺れるようなもどかしい感覚。口元は増血剤と唾液に濡れた。私たちの口元を伝い、透明な滴が落ちていく。

「んむう……」

朔の口内に、硬いものがある。柔らかな口内の異物に気づき、欠

片のように転がされていくそれを、取り除くため舌を這わしていく。舌先で歯をなぞる様に伝っていた先、奥歯の辺りへと深く侵入していきそれを見つける。それを慎重に私の中へと運んでいく。

唇を離す。唇に透明の糸が繋がった。口の中にあるものを吐き出すとそこには、歯の破片があった。恐らく衝撃に耐え切れず割れたのか。

そして、増血剤の効果は私の想像以上の速さで現われ始めた。

「朔っ!？」

びくん、と一度朔の身体が震えた。劇的な速さで、死に掛けた顔色の血色が次第に良くなっていく。染み渡るように肉体の冷たさは、徐々にではあるが温かみを増していつている気がした。

心臓の鼓動が加速していく。朔の肉体が発熱し、命を生かせようと脈打つ。

「止血完了いたしましたっ」

止血を行っていた七夜が声を上げる。見やると、朔の左肩に清潔な白い包帯が巻かれていた。ギリギリ間に合っただらしい。

「そう、か……」

緊張状態が、ふと弛緩した。

増血剤の効果で朔は暫く目が覚めない。長の間、眠りの底についているだろう。しかし、これは応急処置の段階でしかない。本格的

な治療には医者がない。

その間まで、どうにかしてこの襲撃を凌がなければならない。

ここは私たちの森、七夜の故郷。

七夜はここで生まれ、ここで育ち、ここではないどこかで死んでいく。

ならば、この森を守らなければならない。

だが、私の願いは叶いはしない。

願いは叶わない。私の願いなど、叶う事はありません。今まで朔の側にすらいることも出来なかった私如きの願いなど、一度たりとも叶った事はなかった。

「報告しますっ」

突然、平屋の中に血相を変えた七夜が入り込んできた。全身に返り血を浴び、肩で息をしながら。

その者は、前線で動いているはずの七夜だった。

「前線崩壊しましたっ！迎撃は失敗、混血がやってきますっ！」

悲鳴交じりの報告。

それは、確かにひとつの終わりを告げる声音だった。

視界が揺れた。

頭部を激しく打たれたかのような感覚が私の脳を揺さぶる。

前線崩壊。迎撃失敗の報告。

七夜が負けた？七夜の森で、七夜が敗北を喫したのか？

グラグラと、グルグルと。それが脳内を流れていく。

少なからず動揺している七夜が見える。何かを考えているような義姉様が見える。

では、混血はどうする？混血は、何処に向かってくる？

決して遠くない未来が、七夜にとって最悪の未来が見える。

それを塗り替えたのは、腕の中にある朔の重さだった。

腕の中にいるひとつの命。死ぬ一歩手前だった朔。止血し、血を無理矢理増やしはしたが、依然危険な状態は脱していない。だが、何もしなければ、確実に死んでいた。失血死か、あるいはショック死か。血の巡りが及ばず、脳死になる危険性もあった。

しかし、まだ朔は生きている。生き長らえた。ならば、ここは死に場所ではない。死なせはしない。私がそうはさせない。

だが、状況はどうだ。

前線は崩壊し、七夜は滅亡の危機にある。

「そうですか。それでは皆さん、表に出ましようか」

思考を繰り返し、どうしようもなく行き詰った状況の中、動揺する七夜たちの耳に、その声は澄み渡って届いた。本当に気軽な、まるで近場に遊ぶにいく様な軽やかさ。

その声は、義姉様は私たちを見回して言う。

「状況は芳しくないようです。時期にここにも敵はやってくるでしょう」

そうだ、その通りだ。だから私は考えているのだ。

だが、私ではどうしようもならない。殺す術を学んだ。殺す技量を学んだ。だが、殺す心胆がない。魔を相手に私は怯える事しか出来ない。

今こうしている合間にも、混血共はやってくる。獣の臭気を撒き散らし、悪意を孕んでやってくる。

もし。もし兄様がここにいるならば、兄様はどうするだろう。

「ここで無残にやられますか？何もせず、ただ死んでいくのみですか？」

反応することも出来ない七夜を、義姉様が飲み込んでいく。決して狭くない平屋は今や義姉様の独壇場と化した。

「迎撃は失敗です。だけど、まだ私たちは負けていません。いまだ滅びを迎えていません。そして私は、このまま死んでいくのは嫌です。拒否します。だから抗います。抵抗して、七夜を示そうと思いません。皆さんはどうしますか？」

義姉様は女性的な方だった。物腰柔らかく朗らかな女性。だが、今窮地に追い込まれた七夜を前にして、その表情は凜として、怯えも恐れもないよう。その姿はまるで、兄様のようなようだった。

そして義姉様は言った。

「立ち向かきましょう。立ち向かって、敵に思い知らせましょう。だって皆さん、あなた方は何ですか？あなた方は一体何ものですか？」

声は消える。そして、怒号のような合唱が平屋を埋め尽くした。

自分たちは七夜である。退魔の一族七夜である。敵を殺し、葬るだけの存在である。殺しの果てに殺しを目指す殺人鬼。

その我らが、迫る混血相手に何もしないなど、言語道断。

「そうです。私たちは七夜。私たちはそれ以上でもそれ以下でもない、ただの七夜。殺すことが私たちの生きる術、生き様です。だから行きましょう。最後の一人になっても、倒し続けましょう。それに、私たちにはあの人があります。黄理がいます。あの方は負けません。あの方は、きつと誰よりも強い」

無条件の信頼。兄様に対して、義姉様は真つ直ぐな眼差しを作る。兄様は七夜最強の存在。私たちの御館様。そんな兄様が、きつと何とかしてくれる。私たちの中にある、兄様への信頼を、共通意思として感じる。

熱気が高まっていく。気付けば蔓延するはずだった動揺は鳴りを潜め、七夜は意気込んだ。殺すことこそ我らの。

そんな七夜を、見て義姉様は言った。

それは宣誓であった。宣言であった。

「それでは皆さん。殺しにいきましょう」

そう言つて、義姉様は表に出て行く。その後姿に、平屋にいる七夜すべてが着いていく。皆がいなくなつた後に、私は朔を抱えて外に出る。冷たい空気が私を包み込んだ。

そして目前。そこには、

「
」

里の七夜が出揃っていた。彼らは皆武装し、その表情は鋭く、それだけで恐れのない。

中には前線には出ていなかった、女、果ては未だ幼い子供までいた。その表情はこれから死に行くものの表情ではない。ただ殺すだけの、七夜としての表情だった。瞳。その瞳は嘲っている。混血を殺そうと、嘲っている。

その先頭に、義姉様はいた。

「あ、義姉様……」

声が自然と震えた。震えを無理矢理押さえ込もうとして、失敗した。

七夜。退魔の一族七夜。近親相姦を繰り返すことで人が潜在的に持つ退魔衝動に特化した一族。魔への衝動。それは最早感情であった。

そして瞳は笑う。皆、魔眼を発動させて笑っている。

早く殺そう、と、今すぐに殺そう、と嘲っている。

それに、私は、恐れを抱いた。

だけど、そんな私を見て、義姉様は緩やかに笑まれた。怯える子供に向けるような、自愛を秘めた笑みだった。

「あなたは、逃げなさい」

「っえ？」

理解の及ばなかった私に、義姉様は何が可笑しいのだろう、くす

くすと笑いを零した。

「ここから先は、あなたには無理です」

「そ、そんなこと　　！」

「もし行きたいのならば、その身体の震えを抑えたらどうです？」「つく！」

私は強がるだけしか出来ない。感情的に言葉を返そうとして、何も返すことが出来ない。それでも頭では理解していた。私は立ち向かえない。私では立ち向かえない。混血に怯えるしかない私では、役に立たない。私は七夜でありながら、七夜の存在価値を持っていない。殺すことも出来ず、ただ怯えるだけの女。

唇を噛み締める。口の中に鉄の味が広がった。無力感。鼻がツンとする。涙が出そうだった。

嗚呼、私は結局、何も出来ない。

「そんな事、ありません」

だけど、そんな私を見て、義姉様は優しく、柔らかかに笑む。

死にいく彼らを、見ている事しか出来ない私に、義姉様は笑まれる。

「貴方には、貴方にしか出来ない事をお願いしますよ」と思います」

「私、にしか出来ないこと……？」

「そうです。貴方にしか出来ないこと。……それは、朔を医者に連れて行く事です」

意識が沸騰した。自分の弱さ、愚かさを跳ね除け、義姉様に食って掛かる。

「　　ッ私に、逃げろと言うのですか!!」

それだけは、許されない。それだけはやってはいけない。敵前逃亡。七夜にとつての生き晒しになれば、義姉様は言った。七夜の誇り、それらを捨てて生き延びると。魔を殺すことの出来ない私であっても、七夜として生きることの出来ない私でも、それだけは、駄目だ。

「そう、貴方は逃げて、朔を助けてあげてください」

「何故!？」

「理由は必要ですか？」

「　　そんな事っ」

「朔が死ぬにはまだ早いです。朔はまだ生きていない。大丈夫。あなたが逃げられるだけの時間は稼ぎます」

ね、皆様？

義姉様の声に、そこにいる全ての七夜が、吼えた。

「　　っ　　っ　　っ　　!!!!」

大気が、震えた。

「　　っ　　」

涙が出そうだった。朔を助けたいがために、それ以外を切っ捨て捨てる。一族を切っ捨て捨てる。義姉様はそう言っているのに、一族は皆それを肯定するのだ。

「朔様の事、頼みます！」

「どうかご無事で！」

「時間稼ぎぐらいぼくたちにもできますっ」

男も、女も、子供も言う。熱を帯びた口調で朔を助けて欲しいと、口々に言う。

「皆、朔の事が好きなんですね」

「……っ」

「私たちは、前に踏み出すことが出来なかった。ずっと、見て見ぬふりをして、朔の側に入れなかった。自分たちの望みを無意識に朔へと押し付けて、苦しむ朔を見てあげられなかった。……でも、あなたは違う。いつも朔の事を考えたあなたです。朔の側にいてください」

「しかしっ、義姉様はどうするのです！志貴はどうなってもいいのですか！？」

そうだ、義姉様は志貴がいる。志貴は未だ六歳。義姉様はこんなところで、死んでいいはずがない。

「私は、あの人の妻です。当主の妻である以上、私は逃げてはなりません。確かに、志貴を連れて逃げるのは、出来ます。出来ますが、それは選んではならない事。最後の最期まで、私は当主の妻として全うしなければなりません」

凜々しく、私を真っ直ぐに見つける瞳。静謐に言葉を紡ぎ、意思を示す。

そして私は、何も言えなくなった。

義姉様を動かす強い意志は私如きでは揺るがすことも出来ない。当主の連れとしての自覚をはっきりと述べ、逃げることはしない。私には、出来ない。そんな義姉様に、私は何を言えればいいのだろう。

そんな私を尻目に、義姉様は私の腕の中、意識なく眠り続ける朔を見る。

「朔。あなたには、負担ばかりかけてしまいましたね」

少しだけ、眉を悲しげに震わせて、義姉様は朔の頭に触れた。

「ごめんなさい。私は、あなたを見てあげることが出来なかった。貴方が怖かった、気が触れた人間の子供と言うだけで、あなたを遠ざけてしまった」

優しげな手つきで朔の頭を撫でる姿は、まるで朔の母親であるかのようにも思えた。

「あの人が変わって、あなたを自分の子供のように接し始めた頃、実は私はそれが嫌だった。嫌な女でしょう。私は家族に亀裂が走るのではないのかと、思っていたのです。だけど……あなたという、志貴は笑っていて、あの人は楽しそうで。皆、あなたという時間を大切にしていた」

言葉を切る。

「もし。もし、あなたが良ければ、志貴の事を守ってあげてください。厚かましい事ですけど、志貴にはあなたが必要です。あの子は寂しがりやだから、だから、お願いします」

お兄さん。

「いやあ、感動するねえ。お涙頂戴ものの喜劇だわなあ」

以下血迷ったNG。

「何をしているんだ、お前たち？」

朔に増血剤の投与が終わり、周囲を見回すと、何と云うか微妙かつニヨニヨとした表情を浮かべながら私たちをちらちらと見てくる。何だろうか。

「ええつとですね？」

「何でしょうか義姉様」

義姉様が微妙な表情で私に話しかけてきた。

「その、朔はまだ早いと思うのですけれど……」

「……何を言つて　　っ」

義姉様が何を言っているのか理解できず、そして瞬時に理解した私は慌ててその場にいる七夜を見回した。所々で「やっとこさ契りを結ぶ相手を見つけたか」「しかし朔様はいまだ幼い。子種はまだであろう」「いき遅れ、か」「愛さえあればそんなの関係ありませんっ」「えつちいのはいけないと思います！」など一族の者が好き勝手に喋っている。

ああ、私は朔との接吻を見られていたのに、自分の世界に入って周囲に気付いていなかった。莫迦だ莫迦だと思っていたが、これほどまでとは。

混乱する内心を落ち着かせようとする。自然と力の込められた全身は、朔を抱きしめるような格好を生む結果となった。

「……おおおおっ!?!」「」「」

「喧しいぞ貴様らっ!」

「あのお、朔様の止血完了しましたよ？」

「……あ」「」

何か雰囲気の色々とぶち壊れた。

第十五話 ひとつの終焉の始まり（後書き）

くだら文章が板についた六です。本当にどないしよう。

歌月十夜やっていないので、黄理対紅摩はこれが私の限界。勘弁してください。

さて、ここで質問と言いますか、ちょっと相談したい事があります。

出来るだけ早く更新をと心掛けているのですが、時間が足りない技量が足りないなど、どうしても今の書き方では毎日更新できません。

毎日更新している方の作品を見て、ただただすげえと思います。

ここで皆様方にご相談なのですが、少ない量でもいいから毎日更新するべきか、それともこのまま私のペースでいくべきなのか。

私自身多くの作品を読むので、作品の更新が早いと嬉しいです。しかし、書き手になるとそれが出来ません。

本当に皆様方からすればどうでもいいような相談ですが、もしよろしければ感想などにお書きください。心よりお待ちしております。それでは六でした。

以下今日のおさらい。

七夜朔は気絶している間に大人のキッスを体験した。

妹様はこの歳にして始めてキスをした。

第十六話 U n d a w n (前書き)

気付けば早いもので二十話(番外含め)。

ここまで来れたのも皆様のおかげです。貴方方に感謝を。しかし、原作開始までだいぶかかってしまっている現状。あと、2、3話で七夜編終了を予定しております。

皆様気を長くしてお読みになっけてくれれば、嬉しいです。

では、ごじぞ。

第十六話 U n d a w n

声が、聞こえた。

金属を擦り合わせているような、哄笑を混じらせた不快な音が、内臓を這いずり回る虫けらの様に、七夜の脳髓を支配した。その音は人間の笑い声だと気付くのに、少しばかりの労を必要とした。

私たちは皆、今から殺しに向かおうとするものさえ、死に向かう者でさえ。一斉に声の聞こえた方角に顔を向けた。

そこには、妖怪がいた。

2メートルを優に越す身長で、擦り切れた着物。筋骨隆々の身体ではあるが、着物から覗く手足が不自然なほどに長い。皺の刻まれた顔面には豊かに蓄えられた白髪と白髭、そして何よりも異様な目ギョロリと大きな眼球は魚類を思わす。

「ひひひ、面白いな手前ら。そんな三文芝居な喜劇を俺に見せてどうしようってんだ？」

ひたりひたりと地面を踏み歩きながら、妖怪は大げさな身振りで私たちに近づいてくる。ここにいることが不自然なほど気楽であり、それでいて何か嫌な感覚を滲ませながら笑っている。嘲っている。

「まあいいさ、どうだっていい。そんな事どうでもいいしなあ」

その笑いを私は知っていた。私たちは知っていた。空気に亀裂を走らせながら、軋むような笑い声。七夜にとっては慣れ親しんだ、

ホントに黄理の妹か？」

何か言っている。何か音を発しているが、何を言っているのか理解できない。

梟の視線を感じる。混血の視線を浴びる。魔の意識を感じる。人外の気配を感じる。

相反するもの、人間以外の化け物の匂いが伝わる。

姿が、声音が、形が、精神が、魂が、気配が、存在が。

アレを構成する全てが臭気を放ち、私を捉える。

それら全てが、私には耐え難い恐怖そのものだった。

恐れを誤魔化すことも出来ず、胸の中の朔を抱きしめた。

「っち、つつせえぞ餓鬼。手前には何もしねえよ」

そしてその瞳は私に少しばかり興味を覚えたようだった。だが、その色もすぐさま消える。どうでもいい、お前などどうだっていいと、瞳はまざまざと語っていた。

「それよりも、だ。なんで手前が朔を持ってやがる。そいつは、俺のだ。手前如きが触っていいもんじゃねえんだよ糞餓鬼」

梟の視線の先、そこには私の腕の中で眠る朔の姿があった。

梟の瞳。そこには先ほどとは打って変わった熱があった。まるで

恋しい者を思うような、何とも似合わぬ不気味な表情。

口を動かすことも出来ず、何か其れまでとは違った危険を感じ、
鼻を鼻から隠すように強く抱く。

「しっかし、あんの糞野郎が。……随分と派手にヤツテクレタじゃ
ねえか」

私のことなど眼中にないと言わんばかりに、鼻の独白がここでは
ない場所にいる誰かへと向けられる。言の葉の端に憎悪すら滲ませ
て、罵倒を投じている。

「糞、糞糞糞、あの餓鬼め。しかも、まだ足りねえだと？ありえね
えよ、マジ蛆沸いてんだろ莫迦野郎が。くそつたれめ、造る前だっ
たから良かったもんだが、腕一本はだけえなあ。足じゃなかったの
が幸か。いや、死んでねえ事が幸か？ああもう、回収はできたがそ
れどころじゃねえだろボケが」

ぶつぶつぶつぶつと何もの視界に入っていないかのように、私た
ち七夜などいないかのように、鼻の独白は加速していく。

「感応者を使うか？いや、確かあそこは没落したと聞くな、いや待
てよ？そついやあいつ、確か巫浄分家筋の餓鬼何人かを引き取った
つて話があつたな。それを使って何とか戻すことは可能か？しかし、
繋がってねえものを繋げるなんて芸当は無理か。部分的な問題とし
てそもそも生命力を増幅させるものであつて離れた部品を繋げるに
はお門違いが」

「よろしいですか？」

熱を帯びる梟の独白を義姉様が断ち切った。その視線は鋭く、そのような鬼気迫る表情は今まで見たことがない。

「何故あなたがここに居るのは知りません。……しかし、ひとつだけ答えてください。あなたは私たちの敵ですか」

義姉様の言葉に呼応するように、その場にいる七夜たちの踵が地面から離れ、軽い爪先立ちと成りいつでも梟に飛び掛るような姿勢となる。事実、梟の答え次第では次の瞬間ひとつの屍が出来上がっているだろう。今この瞬間、梟が呼吸しているのは、単に義姉様がいるからに他ならない。今義姉様がこの場の暫定的なまとめ役だ。その義姉様がまだ指示を出していない。もし、ここに義姉様がいなければ、とつくに梟は死んでいたはず。

充滿する殺気。男も女も、子供でさえも殺気を滾らせ、目の前にいる混血に対し敵意をむき出す。空気を覆う殺しの気配に、私は少しだけ安心すると共に、息苦しさを感じた。

大丈夫だ。七夜がいる。この殺気が私の怯えを拭い落とそうとする。

「ん、手前は。確か黄理の女、だったか？」

しかし、梟は実質六十名弱の七夜を前にして、緊張するわけでもなく、だからと言って怯えるわけでもなく、不遜に鼻を鳴らした。

「はっ、俺はなんでもねえよ。あんたらの敵かといえば敵だ。敵じゃないと言えば敵じゃねえ。第一、俺は混血で、手前らは退魔だ。そんな判断、生まれた頃からわかってんだろっが」

「……」

その言葉に、明確な敵対宣言を前に、七夜の者が踏む混もつとして。

「ちよい待て」

待ったをかける様に、その掌を私たちに突き出した。

「なあに。敵かそれ以外かの判断はまだ早え。俺はな、提案を持ちかけにきたんさ。それ次第じゃ、七夜は生き残れる。どうだ？悪くはねえ話だと思わねえか？」

気軽に話を振る梟を不信に見つめながらも、七夜は義姉様の出方を伺う。義姉様は何も言わず、梟の話を促した。

気付けば、私たちは目の前にいる混血に空間を支配されている。混血ならば、ただ殺せばいい。そう思いながらも、目の前の人外に未だ飛び掛っていない。梟が発する邪悪な気配。何か良くないものを滲ませ、梟は何とはなしに言う。

「話しがわかんじゃねえか。何、大した事じゃねえ。ほんのちよつとした事だ」

「七夜朔を俺によこしな」

「「「つ！」「」」

その話しを聞いて、我慢のならなかった七夜が飛び出そうとするのを、義姉様が手で制した。顔つきは厳しく、だが梟の話しを聞くうとしている。私自身驚愕に心揺さぶられながらも、そんな事を口にした梟に七夜は憤怒を抱いた。

「何を言ってるんだ貴様っ!？」

溜まらず、嫌な感覚を無理矢理押し殺し、思わず叫ぶ。しかしそんな事を意に介する風もなく、梟はここにいる全ての七夜に話しかける。

「何を？当然のことだ、交換条件だよ、交換条件。朔の身柄を渡すことで、俺直々に口利きしてやって手前らを助けてやるうって言うてんだよ」

「何を莫迦な……」

「莫迦？んな訳ねえだろ？少し考えれば分かることじゃねえか。手前らのうち誰かを俺に渡すことで、手前ら全員生き残れるんだぜ？釣り合いどころか釣銭が出る話だろうが」

そんな事も理解できないのかと、にやにやと悪意ある笑みを顔に貼り付けながら、梟は私たちを見回した。動揺が生まれ始めている。そして既に何人かは、私を、いや朔をちらちらと見るものが現われ始めた。感情は見えない。彼らが何を考えているのかわからない。だが、このような条件、たった一人を差し出せば自分たちが助かる

なんて、破格の条件に揺れないはずはない。

「それで、朔を引き取ってどうするつもりなのですか？」

それでも、このような状況であっても、義姉様はただ静謐に梟を見つめていた。私たちの同様など意に介さないように。

「ひひ、決まってるんだろ。側に置いておくのさ。それで朔の為に刀を作り、進化していくそいつを見つけてやんのさ。何せそいつは俺が見つけた使い手だ。これからの短い寿命、そいつに捧げようと決めてんだよ」

「それはつまり、朔に人殺しをさせようということですか？」

その声に温度はない。ひたすらに無機質な声音。私情を一切殺すかのような、そんな声だった。それに私は、少しだけ不安を覚えた。

「そりゃそうだろうが。俺がつくんのは所詮は人殺しの道具。殺さずに飾る刀に刀としての価値はなく、それを持つものは殺し続けることで自身を成す。古くから伝わるもんだろ？そういうのってのはな」

何を今更と愉快に顔を歪め、梟は笑う。

其れを聞き、義姉様は小さく、そうですか、と呟いて。緩やかに私を見た。底冷えするような瞳が私を、朔を見つめていた。

心臓が激しく鼓動した。嫌な予感が体中を激しく蹂躪していく。骨まで恐れで震えながら、それでも私は朔を放すまいと抱きしめた。

しかし、時は待ちはしない。嫌な予感が作り出す最悪の未来が頭の中を駆け巡った。

先ほどまで、朔を逃がそうとした意志は何だったのか。自分たちが生き残れるならば、朔を引き渡してもいいのか。私は声を張り上げて訴えることも出来ず、喉は緊張に張り付いて巧く呼吸が出来ない。

涙が零れる。悔しさや理不尽が瞳から零れて、頬を伝い地面に落ちた。嗚咽はまだ出しはしない。

しかし、それでも分かっている。その選択こそが今の最良であることぐらい、私にだって分かっている。一族を永らえさせる。決められた滅びの未来を回避するためには、切り捨てなければならぬこともあるだろう。

皆が私を見つめていた。何か居た堪れないものを見つめるかのような視線。その瞳を私は直視することも出来ない。

義姉様の声があった。いつもならば柔らかな声が、今は聞きたくもない。

「刀崎。その提案に、おこたえしましょう」

足に、力が入らなくなった。地面に崩れ、目の前が真っ暗なる。

七夜が私たちを見つめている。何人かは、私の側に近づいてくる。

月光に伸ばされた影が近づいてくる。私は朔を渡すまいと、力強く朔を抱きしめた。胸元に、鼓動を感じる。朔のまだ生きている証

扱。それが、温かった。

分かっている。分かっている。其れしかないのかもしれない。私たちが助かるには、それだけしか、無いのかも知れない。

それでも、私は、例えば七夜が朔を見捨てようとも、私だけは。

「七夜はそれを拒否します」

不意に、目前に壁が出来た。

それらを見やると、七夜たちが鼻から私を遠ざけるように、周りを囲んでいた。

「え　？」

私は声を上げることも出来ず、ただ呆然と彼らを見ることしか出来なかった。そんな私を見て、彼らは笑った。私を安心させるかのように、暖かく笑んだ。

「なに？」

彼らの行動に、義姉様の返答に梟は心底不思議そうに顔を歪めた。

「聞こえませんでしたか？ 私たちは拒否すると言っているのです、
刀崎梟」

そして、七夜は裏切らないのです、と義姉様は言った。

「わっかんねえな。身内がそんな上等かね」

「ええ。私たちは何よりも一族が大切です。貴方には理解出来ない
でしょうね」

不機嫌を隠そうともせず、義姉様は梟を睨む。それは最早蛇蝎の
如き憎悪をぶつける凄まじい形相であった。

「それに、朔に殺しなどさせません」

その言葉に、梟が反応する。

「何言ってやがる。殺しは七夜の専売特許だろうが」

確かに、それはそうだ。七夜が退魔組織で揺ぎ無い地位を気付い
ていたのは、暗殺によるもの。その為、近親相姦を重ねることで私
たちは退魔衝動を強化させるに到ったのだ。

つまり、義姉様の言葉は、その我らの行き方を覆す発言に他なら
ない。

「そうです。だから私たちは朔に背負わせた。七夜の業を背負わせようとしてきた。それが結局、朔の幸福を奪ったのです。朔は優しい子です。しかし、それを歪めたのは私たち七夜。あの人も、きっと望んでいません」

だから朔に人殺しは行わせない。

何もかもを背負わせすぎたのだ。

「だから貴方に朔を渡しません。それは朔の幸せではありません。朔に血は似合わない。あの子には、そんなもの似合わない」

「手前……、七夜を否定してんぞそれ」

いつそ呆れた梟の表情。

それを受けて、それがどうしたと言わんばかりに、七夜はその手に武器を握る。最早交渉は決裂した。交渉と呼べるほどのモノではなかったのかも知れないが、私の不安は拭われていく。進む殺気は限界を迎える。何か切欠も必要とせず、七夜は梟を殺そうと迫る。

「その為には、滅んでもいい、つてか」

「はい、本望です」

「まったく……莫迦ばっかか。さすがは糞餓鬼の一族、融通の聞かない」

そう言って、梟はため息を零した。心底面倒そうに。

「ま、どうでもいい。原因は俺ではねえが、間接的は……しかし、

これで手前から死んだぞ。跡形もなく七夜は滅ぶ」

「其れもまたひとつの未来。しかし、ただでは死にません。今この時もきつとあの人は戦い続けているでしょう」

その時だった。梟は突然、身体を震わせたのだった。

それを訝しげに、其れでいて警戒心を鋭くいつでも殺せるように、七夜が動く。

そして梟は、笑うのだった。

「ひひひ、ひひっひひひひひひひひひ！ああ、なんだつまりそうか、ためえらはまだそうだったか！そりゃそうだは、知らなきゃそうなるわな！」

不快な、軋むような笑い声が響く。

「そうか、糞餓鬼か、糞餓鬼か！あいつか！」

最早堪えきれないと、身体を擦りながら、首を捻りながら梟は笑った。哄笑。邪笑。それは収まることを知らず、七夜の里、広く暗い森の奥底にまで轟いていく。

その姿の、存在のおぞましさに誰かが息をのんだ。

「なるほど、なるほど！手前らは見てはいないのか、気付いてはいないのか！なら、だったらアレを見なっ」

犯しそうに梟はある一方を指差す。その指先につられる様に、私

たちは梟の指先を見た。

すると、どうだろう。

夜の帳は平等に森を包んでいる。今は夜だ。太陽も昇りはしない。

だと言つのに、私たちの視線の先は、仄かに明るい。

まるで朝日を告げるかのように、暗い森にそれは浮き出る。紅く赤く朱く。

「前線は崩壊している。手前らが知ってるのはそんな所だろ？」

軋む。空気が軋んでいく。梟に空気が覆われていく。

「それが意味すんのはなんだ？組織だった行動が出来なくなっちゃまったとか、動けるものが少なくなったとか、んなところか？だったらてめえら救い様のねえ莫迦だ。なんで前線は崩壊した？なんで奴さんがやってくんだけ？」

金属の声音が響き、そしてそれを告げた。

「全員おっちゃんじまったんだよ。それはつまり、糞餓鬼、黄理も含まれてんのさ！……！」

瞬時に、誰かが馬鹿なと声を上げた。

しかし、それは。

「」

「!???」「」

近づいてくる何かの気配に、音は死んだ。

何か、とんでもない存在が、桁違いの雰囲気を放ちながら、徐々に近づいてくる。

「あいつも、俺とおんなじで朔に執着持ちまっただからよ。出来るだけ早く確保したかったんだが、こいつはやべえなあ」

そうは思えぬような狂った血走る瞳。

七夜は動く。瞬時に動いた。その場にいるのは危険だと判断したのだろう。

だが、私は動けなかった。動こうとはした、だが、足に力が入らない。

近づく気配に、私は既に飲み込まれていた。

「あ」「!」

遠くから、私を呼ぶ声が聞こえる。だが、それを私は果たしてちゃんと聞こえていない。ともすれば幻聴のようにも思えた。

木々がなぎ倒され、真っ直ぐにそれは駆けてくる。地響きのよう
な、足踏みを感じた。

そして。

「あ　　う、あ

」

熱が。肌を焼く。見えない炎が空気を焦がした。

強大な生命。最早声を出せない。

鋼鉄のような身体。視線が逸らせない。

僅かに血を浴びたその身体。それは誰の血か。

修羅を体現するような厳格な表情。

鬼神が、そこに現われた。

「　　わらべは、どこだ」

第十六話 U n d a w n (後書き)

とりあえず意見の通りに二日に一回を目安に励んでいくことにしました、六です。

グラーム様にはこの場を借りても感謝いたします。

ご意見くださり嬉しかったです。

する、と黄理を死なせたように書きましたが、次にその場面を書きますので、ここに記しておきます。

アドバイス、ご意見、感想、批判など、気軽に書きください。

私のテンションが鰻上りとなります。

以下今回のおさらい。

七夜朔は相変わらず目覚めない。単に脇役なオリキャラと化しつつある。

刀崎梟は惚気話を始めた。

妹様涙目。

第十七話 鬼神二人（前書き）

書き足りない。全く書き足りないっ！私のグダグダ表現が唸りをあげるぜっ！！

しかし、短めを目標にこつこつと行きます。

アドバイス、感想、意見、批判なんでもお書きください。

私のやる気が無限大の彼方へ飛び立ちます。

では、どうぞ。

タダ、モシカシタラカキナオス、かも。

第十七話 鬼神二人

鬼神の腕が迫る一瞬を永遠の如くに感じる。想定外とは安易に言い難い悪夢のような存在。質量や気配、存在果ては概念に到るまで、最早核が違っている。根本的な部分から、目前で拳を揮う存在が違うことをまざまざと見せ付けられた。辺りは破壊の跡。鬼の拳に巨木は抉れ、鬼の踏み込みに地面は割れた。鬼神が何か動いたたびに、何かが形を変えて壊れていく。

その腕の一撃が腹を指して放たれた。拳は重く、其れでいて冗談のような威力を持ちながら、黄理を殺そうと、潰そうと迫る。黄理自身人間の頭部を身体にめり込ませた過去があるように、通常の鍛えられ方では持ち得ない膂力を持っているが、目前にある拳はそれ以上。生物としての原型を留めることも出来ずに黄理は搗り潰されてしまう。

その一撃を寸でのところで避け、頭部を横切る握りこぶしに一瞬脳が揺れた。僅かに歪む意識に視界が淀みかける。それは紅摩には正に好機。

豪腕は止まる事を知らず、逆の腕が跳ね上がった。筋肉が膨れ上がり、血管が浮き上がる。急激な回転に紅魔の立つ地面が沈む。足元から始まる回転力は足を伝わり、腰骨を捻る。筋肉の連動は正確に拳へ走り、近代ボクシングで言う所の右フックに近い拳が迫る。だが、紅摩の筋肉から放つそれが所謂スポーツの範疇で収まる事はない。紅摩は混血、人間以上の存在をその身に混ぜた一族の最終地点。そのような男が放ったモノが、人間程度の威力で収まるはずがない。

それは雷光だった。紅い雷光であった。

時の止まるような刹那を伸ばした空間を、紅摩の一撃が迫る。光速にも似た拳が限界にまで引き絞られ、黄理の肉体を破壊し尽くさんと鎌の如く襲い掛かり。

其れよりも尚早く、銀の斬撃が紅摩の目を打った。

「っ！」

残された紅摩の左目を強かに打つ。眼球が眼底ごと潰れても何ら不思議ではないはずの威力に、紅摩は堪らず視界を閉ざす。目測を失った拳を黄理は後退によって回避し、距離を離す。空気の弾けた音が、紅摩の拳から生まれた。

気付けば地形は変わり、そこは草原だった。気を一瞬でも逸らせば己が命を代償として支払わなければならぬ緊張状態の中、繰り広げられる攻防以外に気を囚われてはならない。特に黄理はそれをひしひしと感じていた。無論肌で感じたのではなく、勘ですらない、純粹な経験則だった。

だってそうだろう、幾程の交差を重ねたのか、黄理には既に定かでない。その中で、黄理は幾度となく死んだ自分を見た。かつて退魔として暗殺を行う時の中ですら感じたことのない死の気配。

濃厚な死が焦げ付いた臭いを放って黄理の鼻腔をくすぐる。黄理は夜を風ぐ草原に、炎に焼かれた焦土を幻視した。

呼吸が少し荒い。殺すことに息を乱すなど、有りはしなかった。

それを覆した存在、軋間紅摩。

対して紅摩もまた、この状態に言い様のない違和感を覚えていた。始めての経験、殺し合い。そう、両者共に殺し、合う事は無かった。なぜならば彼らは死そのものであったからだ。

卓越した暗殺術に一方的な死を与える七夜黄理。

超越した生命で太刀打ち出来ぬ死をもたらず軋間紅摩。

彼らは、そのあまりの強さに、今まで殺しあう事が無かった。

それこそ、この違和感の正体。命を奪い合うという状況、馴れはしない攻防の連続。神経は尖り、肉体は過剰に反応を示す。猛る筋肉は見逃せぬ疲労を蓄積し、だが、それでも止まらない。攻防は拮抗している。

この状況に、幸か不幸か黄理はこのタイミングで、この殺し合いに精神が高揚しているのを感じた。ただ一方的ではない殺し合い。

殺しに、殺しの中で、生を感じたのである。

それは黄理には感じたこともない、熱であった。

しかし、今この瞬間である。この刹那の間隙において、黄理は算段を見つげ出した。

目前の敵、軋間紅摩の視界は不明瞭と化した。元より紅摩は視界に不利があった。かつて黄理自身が潰した右目。それにより紅摩の右側には死角が存在する。そして今、紅摩は黄理の打ち据えた撥に

より、左目の機能を低下させている。黄理からすれば、今の一撃で眼球が健在である事に脅威を感じた。かつてよりも生命としての規格が進化している証拠を示されたのである。

人外の混血。規格外の化け物。紅赤朱。恐るべき化生であると、真実黄理は戦慄を抱いた。戦慄を抱くと言うこと事態、黄理にはありえなかった。攻撃が通じない。あらゆる手段を講じても、紅摩を殺すには至らない。状況開始直後に紅摩に届かせようと決めたものの、それは未だ実っていない。理不尽が形を成したような存在である。眼球を突いても潰れるどころか失明もしているようには見えない。

最早一刻の猶予も無いはず。戦況はどうなっているのか、紅摩を相手にしている黄理には判別もつかない。しかし決して楽観視出来ない状況であることに変わらない。紅摩の相手をしてる間に、一刻と滅びへの秒針は進んでいく。

ならばと、黄理は決断する。状況を考じるならば、それは極自然の事であった。

そして全てが終われば、今までと何ら変わらない日々へと戻る。

志貴と過ごし、女と在り、朔と家族になり、一族の長として何も変わらない、この暗く鬱蒼とした静かな森に生きていく。

それでいい。それが良い。それこそ黄理にとっては新鮮な日々だ。望むべくも無い。

だから、こいつが邪魔だ。

「お互い、損をしたな。小僧……っ!!」

本当に損をした。こんなものを、生の熱を知らず、未来を思うことも知らずに、遠野の狗と化した紅摩に言う。自分にはそれがある。今、分かった。今、理解した。それは果たして紅摩も感じているのだろうか。

息を吸い込む。筋肉を動かすのには酸素が必要だ。それは七夜も変わらない。そして動くこうとする筋肉たちは熱を放ち、黄理の全力を許容する。例えば疲労がたまり極度の緊張状態に在ろうとも滞りなく。それは即ち黄理が持つ機能を動かすエンジンに他ならない。

そして黄理は、前方に倒れこむようにして、走り出した。

地面に擦れるギリギリまで傾けられた前傾姿勢。地を舐めるような滑走。

加速は一気に最高速度へ。地面が爆ぜる。

この時、黄理は草原を凧ぐ一陣の風と化した。

狙いは始めから決めてある。

そのための布石は幾つもあった。

左目の打撃。

頸部への執拗な攻撃。

そして、かつて黄理自身が奪った右目。

左目の殴打により、紅摩の視界は万全ではない。

頸部に刺さる刃に注意を向け、それを狙うと見せかけた頸部への攻撃。

執拗に狙われた紅摩の首は確かな悲鳴をあげている。例え紅摩が化生であり、人外の固さを誇ろうとも、人間の構造である以上、首の軋みは確かに生まれている。

遙か昔に奪った右目の死角へと潜り込み、そこからの一撃。それで終いとする。

紅摩の喉。

そこを潰す

！

「

っ？」

紅摩も接近する音に気付いたのだろう。抑えた左目が、黄理を見た。

打撃によるものか、その目は紅く赤く朱く血走っていた。

まるで鬼の如し。

表情は厳しく、迫る黄理に拳を放つ。

しかし黄理が眼前に迫ったその時だった。

紅摩の視界から、黄理の姿が消えたのである。

今までなら紅摩も対応できただろう。反応できただろう。

だが、紅摩の左目は黄理の打撃により、ほとんどその機能を果たしていない。

霞の如くに姿を掻き消した黄理は、その瞬間には既に紅摩の死角にいた。

紅摩の右側。踏み込みと共に、黄理は右手に持った撥を投げ捨て、右手を左手に持つ撥に添える。下から鋭角に突き出された黄理の一撃が、鋼色を残して紅摩へと伸びた。体重、踏み込みの力、地面の硬さすら加わって、それは紅摩の首を破壊せんと奔る。

今こそ勝負の時。

これぞ乾坤一擲。

終いの一撃必殺　　！

紅摩の喉に、金属が肉薄する。

それが、皮膚を押し潰し、筋肉を破碎し、喉笛を噛み千切る。

「　　っあ？」

ずんっ、と表すればいいのだろうか。

言い様の無い、鈍い衝撃が腹部から生まれた。

何かを引き千切るような、そんな音と共に。

不思議に思い、腹部を見ようとした。

最初に見えたのは、草だった。赤い草原だった。

そして、下半身が消えうせていた。

否、ギリギリ皮膚によってくつついている。

腹から溢れた臓物が場違いな彩りを持っている。中には原型を留めていない胃袋があった。

赤い液体は止め処なく零れていった。液体は、草を赤く染めていく。

あと少し、あと少しで、紅摩の首を壊せた。僅かばかり、体重を傾ければ、破壊できた。

だが、踏み込もうにも、黄理には脚がなかった。

「……死角は、慣れた」

どこか、遠くから、ナニカの声が聞こえた。

そちらを見やる。なぜか力が入らない。ゆるゆると定まらぬ視線の先、紅摩がいた。

その喉には鉄の撥。突き刺さっているはずの銀色。それによって

紅摩は死ぬはずだった。

「貴様が、来る前」

しかし、紅摩は死んでいない。生きている。喉は潰れているはず。それに近い感触が黄理の手にはあった。

「……似たような、奴が、幾度も狙った」

掠れる声で在りながら、その声ははつきりと黄理の耳に聞こえた。

似たよな、奴。

「……さ、く？」

呟く声が、己の耳には聞こえない。

朔もまた、黄理と同じように、死角からの攻撃を狙い、それも幾度となく行っていたのならば、紅摩はどれほどその攻撃に晒されたのか。そして紅摩は次第に適応し、死角を死角と思わないようになったらば。

思考は続かない。

闇へと解けるように、意識が消えていく。

視界は失われつつある。

その中で、黄理は見た。

遙か昔、自身が朔を抱いたあの時を。

そして、それから時が流れ、暗い森の自分の屋敷。その縁側に黄理は腰を下ろし、自分の視線の先で、志貴と朔が遊び、隣で女が笑んでいる光景を。

その中で、朔は振り向き、今まで一度も変わることもなかった表情が、少しずつ笑みへと変わり、黄理に向かい、父上と呼んだ。

それを自分は嬉しく思い、朔の名を呼びかけ、優しく、抱きしめて

.....
.....

物言わぬ屍が、そこにはあった。

身体は半分なく、その顔も爆ぜたように散り散りだった。

良く見ればその周囲に、その中身だったものが散らばっていた。

それを見て、紅摩は不思議と昂っている自身を思った。

あの瞬間、黄理の一撃に、紅摩は死を見た。回避できぬ、死を見たのである。迫る銀の一撃は確実に紅摩を食い破り、彼に死をもたらさずだった。それを塗り替えたのはひとえに黄理よりも前に殺しあった、子供の存在があったからである。

あの子供の戦闘方法は、紅摩の死角へと執拗に移動し続け、そこ

から紅摩を狙う戦法であった。幾度となく、紅摩は子供の攻撃に晒された。それにより紅摩は死角からの攻撃に、適応を見せたのである。

あの時、確かに紅摩は黄理の姿を見失った。黄理の打撃により、左目は酷く痛み、視界は驚くほど狭くなっていた。歪む視界に、黄理の姿はない。

それが分かった刹那。紅摩は死角への一撃を放ったのである。

そしてその結果が、今紅摩の前にあった。

屍、骸、死体。それこそ、紅摩が生き残った結果だった。

紅摩は、僅差のところまで黄理に打ち勝ったのである。

其れに対し、喜びはない。

ただどうしようもなく、自分の死を思った。そしてそれは反面、黄理との殺し合いは熱を感じ、それを紅摩は楽しいと思えたのだった。

この熱は、紅摩が生きている証に他ならない。

身体が昂る、精神が温度を放つ。

それを紅摩は忘れたくはなかった。始めて紅摩が手に入れた生の実感。

熱い。気付けば、草原に火が灯り始めた。

それは次第に広がっていく。嗚呼、熱い。それが心地よい。

やがて草原は炎の海と化した。周囲は明るく、ひたすらに燃えていく。

燃える。燃える。

空が紅く焦げて燃える。

夜を染め上げて、紅く燃える。

紅摩は、その光景に見入っていた。

この熱さに、一人酔いしれたのである。

そして、これを忘れたくないと、再度思った。

では、どうすればいいのだろうか。

もしかしたら、黄理と同じような姿、技ならば、それを実感するかもしれない。

それならば、と。紅摩は進んだ。

「嗚呼……」

そう言えば、黄理に酷く似た存在がいた。

「やぐ」

黄理の死に際に聞こえたナニカの言葉。それを名前だと、紅摩は

漠然と感じた。

何故だかわからない。だが、それは紅摩に確信を与えた。

あいつなら、あるいはあのわらべならば、この熱を感じさせてくれるのではないか。

そう思う。そしてそれを紅摩は、素晴らしい事だと思った。

しかし、先ほど紅摩は既にその子供を破壊しかけた。

未だ、生きているのだろうか。

いや、きっと生きているに違いない。アレは随分と生き汚い。死に掛けの身体で紅摩を殺しかけた存在である。黄理に似た子供である。

それならば、期待できるかも知れない。

燃える草原。歩むは赤い鬼神。

その後方、鬼神の死体がひとつ。

目指すは、わらべ。

鬼神の口角が、僅かに持ち上がった。

第十七話 鬼神二人（後書き）

ギリギリ間に合いませんでしたか。六です。

悔しいなあ。クオリティ低いし。二日に一回の難しさ、そしてそれを怠らない書き手の皆様に脱帽です。

以下今回のおさらい。

軋間紅摩はストーカー予備軍と化した。

七夜朔は男にモテて仕方がない。

七夜編最終話 朔

始まりがあれば、終わりが来る。
終わりがあれば、先に何かがある？

ふいに、目が覚めた。

広い屋敷の中は誰もいなくて、痛いほどに静かで、僕は寂しくな
って外に出た

離れに向かっても兄はいなかった。皆何処に行ったのか分からな
い。中には敷かれた布団だけがあつた。

静かな夜に何処からか音が聞こえた。遠く耳を澄ませばそれが森
の方からだと分かり、誰もいない事が嫌になって森に向かった。森
の中は子供だけで行つては駄目だと言われていたけれど、誰もいな
い屋敷にいるのが怖かった。

森は暗くて、冬の空気がシンと身体に痛い。息は白く、先も見え
ない暗がりを進んだ。

流れる黒のヴェールに月の光は届かない。森は深く深く、先に何
があるのか分からなくて、僕は少しドキドキしながら音の聞こえる
所に進んでいた。

ナニカが弾ける様な音、硬く乾いた様な音が、聞こえる。それは
どこにだろう。

森を進んでいると、誰もいなかった。人も、動物も、皆いなくなっていた。誰かとすれ違うこともなく、鳥の鳴き声も聞こえない静かな森が横たわり、夜には森の向こうから聞こえる音しかなかった。

し、き。

名前を呼ばれた気がして、そちらに向かう。

わからない。

広い場所に皆いた。

赤い赤い、赤い地面。赤い水が、広がっていた。

その中に、皆いる。だけど皆ナニカが欠けてて、バラバラになっていた。

手がない。足がない。身体がない。頭がない。

赤い水の中を泳ぐように、皆倒れている。

わからない。

誰かが僕の前に現われた。僕をバラバラにするために、やってきた。

そして、誰かが僕の目の前に飛び出て、僕の変わりに倒れていた。

赤い水を浴びる。

僕の代わりにバラバラになった、お母さんと言う人は、そのまま動かなくなった。

わからない。

赤い水が目の奥に染みこんでくる。

それを拭おうとは思わなかった。

わからない。

僕の前に、誰かが来る。僕をバラバラにするために、やってきた。ナニカ鋭いものをその手につけて、僕に向かって突き刺す。痛いとは、思わなかった。

だけど力が入らなくて、そのまま地面に座り込んだ。

この人は僕をどうするのだろう。

僕を皆みたいバラバラにするのだろう。

そして

「
っ
」

その背中が、見えた。

僕の前で、僕を守るように、その背中があった。

半身は肌蹴っていて黒ずんだ藍色の着流しは破れていた。

僕よりも少しだけ大きな背中は引き締まり、だけど細く。

その左腕は短くなっていて、巻かれた白い布には赤色が滲んでい
る。

その背中が、なくならない。

それに僕は安心して、涙が出そうになった。

力がなくなつて、僕はそのまま倒れてしまう。

頭が靄にかかったように曖昧で、自分でも何を考えたいのかよく分からなかった。

倒れて、空が見えた。夜の空に、月が独りぼっちで吊るされている。

そして、思う

ああ、何で気付かなかったのだろう。

見やる空に浮かぶは、満月。

今夜は、こんなにも、つきが
だ。きれい

七夜。

その名を聞けば、混血の者は忌み嫌い、そして恐れた。人間の身でありながら混血を打倒する術を長の時をかけて練り上げてきた一族。それは最早本能に刷り込められた退魔衝動によるものもあるだろう。七夜の退魔衝動は何よりも恐ろしい。

だが、それ以上に彼らが恐れたのは、その徹底振りにあった。

暗殺のプロ、と言えば聞こえはいいかもしれない。徹底されたス

ペシャリスト。依頼達成の為に如何様でも身を振るその賢しさ。一族に伝わる技量もまた然り。その技法、手際よさ。鬼神と呼ばれた七夜黄理の暗殺は芸術とさえ呼ばれたこともある。

しかし、それ以上に混血が恐れたのは、その執念にあった。

必ず殺すと書いて必殺。それを生き様の如きに体現させる集団。

そのためならば、命を投げ出すほどに。

「おや、どこに行かれますかな？」

暗い森の中、前線の掃討を完了し七夜殲滅へと向かった本隊へと合流するため、後方にて待機していた別働隊が森の中を進んでいる時だった。

彼らの頭上、暗い森を構成する木々のひとつ、そびえる樹木の枝に座り込むように、一人の老人がいた。顔に刻まれた皺が枯渴した大地を思い起こさせるような老人である。

その衣服、雰囲気から老人が七夜だと判断した別働隊は有無を言わず老人へ発砲を仕掛けようとして。

「ふむ、数は大よそ五十を下りますか」

『！？』

彼らの中心部に、突如として老人が現われた。

先ほどまで腰掛けていた枝には姿は既になく、気付けばその場所

にいた。まるで空間を飛んだかのように、音も気配も感じさせず、老人はそこで周囲を見渡していた。私兵隊が銃を構える。

「この老いぼれがあ！！」

そのあまりの穏やかさに苛立ちを隠せなくなった混血の一人が、衝動的にその手にある銃火器で老人を射殺しようとする。

「いいのですかな？お仲間方にも当たりますが」

老人の立ち位置。森を進む私兵隊の編隊のど真ん中である。老人を取り囲むようにして私兵隊はいるが、逆を返せばそれは好機とは一言に言いたい場所であった。フレンドリーファイアを考慮するならば、この密集地帯で銃を撃つのは仲間に対して危険が伴う。

「つく！」

「ほっほ。それで良いですよ」

仲間への誤射を考えるのならば、銃の選択はナンセンスだと気付いた混血は舌を嚙む。だが依然銃に狙われていることに変わらない。

戦力は歴然である。老人には見たところ武器らしいものはない。黒衣の老人は丸腰に見える。既による殺害も出来なくはないが、それは効率が悪いだろう。其れに対し私兵隊は銃火器をそれぞれ所持し、今も尚老人を狙っている。もし何らかの動きがあるのならば射殺の可能性は充分あるが、しかしたった一人相手にわざわざフレンドリーファイアの危険性を抱える必要はない、と私兵隊は判断した。

だが、七夜に対し近接戦闘を挑むのもまた不安であった。混血たちは確かに人間以上の力を秘めているが、七夜はその混血に対し暗

殺を仕掛ける一族。身体能力は計り知れず、先ほどの移動を見てもそれははつきりとしている。

故に私兵隊は勇んで行動するのが憚られる状況にあった。

それを肌で感じながら、老人、翁は言った。

「さて、ここで皆さんに教えておきたいことが御座います」

その口調は朔や志貴に話しかけるのとはまた違った穏やかさ。その中には見逃すことも出来ぬ冷たさがあった。

「皆様が現在お立ちのこの場所。実は地雷原でしてな」

「「「!?!?!?!」」」

翁の言葉に驚愕した私兵隊は慌てて地面を見やる。そこで動き出さないのも、彼らの経歴を表している。

しかし。

「いや、ここは正規のルートなはずだぞっ?」

兵たちの動揺を抑えるように一人の混血が言う。確かに、今彼らがいる場所は罠なども設置されず、また植物たちの襲撃にも逢わない安全なルートとして教えられている。そのような場所に、地雷原があると聞かされても、其れが果たして真実なのか判別はつかない。

「まあ古いものですから、最近は何動しないモノも多く御館様には全品交換を申し立てているのですが、なかなか巧くゆかぬものでし

て。なので踏んでも別に問題はないのです」

困っているように翁は頭を掻いた。

「しかし、このまま放置していても罫として活用できぬ。それで私は考えたのですが、これを地雷としてではなく、ただの爆弾として使ってみればいいのではないかと思ったので御座います」

「なので、皆様。ここで私と死にましょう」

翁の発言にこれから何が起こるか思いついた混血たちは慌てて翁を射殺しようとするが、それは七夜を相手取るにはあまりに遅すぎた。いつの間にか翁の手に握られた起爆の仕掛けらしきスイッチが目に入った。

思えば、随分と遠くまで来たものだ。

七夜として、存分に生きた。老年に差しかかるうとも一所懸命に生きたつもりだ。

ここ数年では、今まで感じたこともないような穏やかな日々を過ごした。

暗殺集団として長い間生きた翁には、そのあまり血生臭くない日々がとても楽しかった。

志貴様、朔様。

懸念は二人。

二人は未だ幼子。ここで生涯を閉じるか、はたまた先を見出し生き残るか。

そこで翁は思考を振り払った。

いや、自ら死にいかうとする人間が、そんな事考えてはいけない。未来は未来を見るものが考えればいい。

黄理の助けに間に合うことも出来ず、辿り着いた時には全てが終わっていた。そして、燃えさかる草原に黄理の亡骸を見て、翁は七夜の終わりを悟った。

嗚呼、不甲斐なし。黄理の相談役でありながら、死ぬその時に立ち会うことすら出来ず。

なので、翁はここで死ぬ。死んでいく。

ただ、一人のまま死ぬのは御免被る。

やはり、翁は七夜だった。

死ぬ時は、殺して死ぬ。

「今、向かいます。御館様」

仕掛けを発動する。

地面からの激しい爆発に翁の思考は一瞬で消えた。

その爆発の向こうに、黄理の姿が見えた。

其れの登場に、時が止まる。声を上げることが出来た人間は、其処にいなかった。

軋間紅摩。赤い鬼神。

其れの存在に、皆恐怖を抱く。紅摩の肉体から放たれる威圧感。人間サイズの生命でありながら、その規格は人間以上の化物であり、今まで出会った混血共を遥かに凌ぐ事が最早瘴気となって七夜に伝わる。それが、彼らの目の前に現れたのである。

紅摩を見た七夜たちは、経験ではなく直感で、その存在が朔を瀕死に追い込み、梟の言を信じるならば黄理を殺した相手であると知った。

そして、それは立つ事も出来ぬ女の腕の中に朔の姿を見つけると、しばし時を置いて女の下に歩み寄り、そのままゆっくりと腕を振り上げて。

造作もなく、それを、振り下ろした。

「っ!?」

鉄槌めいた腕が放たれる。見掛けからして鋼の如き硬さを持った筋肉によって振り下ろされた一撃は、あっけなく女を磨り潰し、出来の悪い標本のような体を成す。

悲鳴が、聞こえた。

だがそれは、女の声ではない。

「何をしているのです！早く朔様をつれてお逃げください！」

紅摩の身体に三人の七夜が張り付き、その急所に己の武器を叩き込んでいた。首に、動脈に、心臓に、鋭利な刃物が切りつけられていた。

心臓の辺りに長刀を突き立てた七夜が言う。焦燥を隠すこともなく、鬼気迫る表情を浮かべながら、動くことも忘れ呆けている女に叫ぶ。

七夜の攻撃に対し、紅摩の身体は無傷。かつては現役で活躍し、幾度も暗殺を行ってきた三人の攻撃に紅摩の身体は皮膚さえ傷つけられない。

女はその絶叫に身を一瞬強ばらせ、思い出したかのように力も入らぬ足を無理矢理立たそうとして。

その顔に、肉片がついた。

そして、女は見た。

先ほどまで紅摩に取り付いていた七夜たちが、腕の一振りのみによつて、無残に身体が千切れていく様を。ある者は腕を、ある者は首を、ある者は胸がなき別れを果たす。一体どういう膂力を持つてすれば、そんな結果が生み出せるのだろうか。

撒き散らされた肉と血が地面に赤い花を咲かせ、紅摩は返り血に更なる紅みを増す。ただ無造作に振られた腕に秘められた桁違いの力。確かに、其れと同じ結果を生み出せることは可能だろう。だが、

それはこのような力技の成せるモノではない。

崩れ落ちる七夜。紅摩の前に彼らはあっけなく死ぬ。

そしてそれらを一瞥することなく、紅摩は再び歩み始める。

「　　　　　つあ、あ、あああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

女が動けたのは偏に恐怖であった。恐怖に身体がすくみ、生存本能が逃走を促した。ふらつきながらも立ち上がるうとする女は、腕の中にいる朔を決して離すまいと抱きしめた。自身が七夜であるとか、敵前逃亡だとか、そんな事は頭に過ぎることはなかった。ただ、女は紅摩から離れたかった。

恐怖に駆られた身体は反転する暇すら惜しいと、閃走によってその場を離脱し　　。

眼前に突如として、紅摩が出現した。

「　　　　　つ!」

恐怖に竦む肉体と言うのはどうしようもなく反射能力に鈍る。精神が恐慌状態であり、正常な心理状態でない今、女の動きは僅かに遅く、その遅さを紅摩が狙わぬはずがない。今まで朔や黄理に翻弄されていたのは、紅摩の反射能力がその疾さに適応できなかった事に他ならない。しかし、今や紅摩はその二人さえ撃破し、それ以下の使い手である七夜に追いつけぬ道理はない。それを証明するように、紅摩が先ほどいた地面は爆発的な踏み込みに割れていた。

目前に現われた紅摩の姿に恐怖しか抱くことの出来なかつた女の判断能力では、紅摩に太刀打ちは出来ない。足が、止まった。

瞬きほどの膠着に動きの止まつた女を嘲うかのように、無慈悲な一撃が迫る。それは中国拳法にある崩拳と呼ばれる打突に似ていた。風を突き抜ける轟音を生み出し、拳は女を撃ち殺そうとして。

「!!!!!!!」

風が、紅摩の動きを止めた。

急激な突風。それは七夜のものだった。回避できぬ女を引つ張りその場を離脱させる。その刹那の中に行われた動きに、紅摩は狙いを外し拳は空を切る。

そして、その場に七夜たちが現われた。突然の攻防、紅摩の異常さに動きを忘れた七夜たちが紅摩を殺そうと動く。

「っ駄目だあっ!!!」

それは誰の悲鳴だっただろう。

悲鳴を無視した七夜たちは急激な加速と共に紅摩を攪乱させようとするが、それには反応すら示さない紅摩に一気に攻勢をかける。

そして惨劇が始まった。

紅摩の命を狙つた七夜の数七人。

その悉く、あっけなく死んでいく。

ある者は心臓を狙い急襲をかけ、その頭が拳に爆ぜた。

ある者は後方から走り寄り、胴回し回転蹴りに上半身を失った。

ある者は頸部を狙い上空から滑走し、そのまま頭を握られ人外の握力に潰された

死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。

大よそ尋常の死に方ではない。まるで枯れ花のような脆さで、人間が形を変えていく。そして七夜は知った。これに自分たちは太刀打ちできない事を。

立ち向かってきた七夜を破壊した紅摩の姿は正に鬼神の如く。

返り血が月光に照らされ、人間の力の及ばぬ存在の姿をまざまざと映し出す。

「待たんか糞餓鬼っ」

走り寄る声の主、刀崎梟は愉悦交じりの嘲笑ではなく、その顔に憤怒を塗りたくり紅摩を睨む。その視線の鋭さは大きな眼と相まって爬虫類を思わせた。

「おい軋間。……てめえ今何しようとしてた？」

腹の底を震わす、怨嗟さえ込められた声に紅摩は無反応を示す。その瞳は梟を見ていない。ただひたすらに、女の腕の中にいる朔だけを見つめていた。何を考えているか判断は出来ない瞳だが、その

狙いは明確だった。

「ふざけんなよ？こいつは、俺のだ。餓鬼はすっこんでやがれっ」
応えなき紅摩に鼻は紅摩に歩み寄ろうとした。

だがそこに、七夜の悲鳴が聞こえた。

「遠野を確認っ！来ます！」

其れを聞いた七夜たちは悪化していく状況に舌打ちを漏らす。鬼神軋間紅摩、更に遠野私兵隊。明らかに危険なのは紅摩である。だが、私兵隊も危険であることに変わりはない。

黄理も生存不明。七夜に生還の術はない。

そして。

銃声。

それに合わせ、七夜が動いた。

皆殺しを心に秘め、七夜は動く。

紅摩には敵わない。だが、それでも殺してやると、今誓う。

今現在確認されている遠野私兵隊の損害は全体の約三割。

そして七夜の残存兵力五十二名。状況は圧倒的不利。形勢逆転の策はない。

虐殺が、始まった。

つんざく悲鳴。鳴り止まない銃声。

七夜が死ぬ。七夜が死ぬ。七夜が死ぬ。

銃弾を掻い潜り、混血の懐に潜りこもつとする七夜を別の混血が狙い打つ。

闇夜に紛れ襲撃をかけようとする七夜が十字砲火に粉微塵と化す。

そして接近した七夜には混血としての能力で打倒する。

七夜は暗殺を担う退魔の一族であった。それは正面から混血と対峙することの危険性を充分承知の上での選択であり、それ以外では劣る事の証明であった。人間としては上位の領域に入り込む規格であろうが、それは混ざり者の混血に対しては、あまりに力不足。それゆえの暗殺。

しかし、今この時、七夜の暗殺術は完全に封殺されていた。

暗殺とは気付かれずに果たすものであり、気付かれてでは遅すぎる。

「　　っ！！」

また、一人、死んだ。

男も、女も、子供さえも関係なく、混血の暴力に生絶えていく。

死体が積み重なる。血が湖のようにたまっていく。

その光景を、私は加速しながら呆然と眺めていた。

死ぬ、死ぬ。死ぬ。

溢れかえる死のにおいに、硝煙と血が混じる。それは今まで嗅いだこともないような臭いで、私の鼻を詰まらせる。

周囲は混血によって囲まれている。包囲網は徐々に狭まり、この虐殺に終わりを告げるのだろう。七夜の滅亡と共に。

感覚が麻痺している。あれほど恐ろしかった混血が近くにいると言つのに、それが現実感を抱かせない。これは私がおかしくなったのか。混血が可笑しいのか。

しかし、それでも朔だけはやらせはしない。

生き残りはどれほどいるのだろうか。

判断はつかない。七夜と混血が入り混じり、殺し合っているのだから。

「　　つち！」

駆け回る私の肩に、銃弾が掠る。肉が多少持っていかれたがまだ大丈夫。朔には及んでいない。それに、アレと比べれば遙かにマシだ。

背中に悪寒。

急激な旋回に膝が悲鳴をあげるが無視する。視界を流れる惨状の光景は加速し、それを判断する暇もなく、足首の力で前方へ回避する。息を吸い込んだ瞬間血煙が肺に入り込む。耳をつんざく轟音。回避した後方を見やると、地面が割れ、砕けていた。そこには地面に拳を突き立てる紅摩の姿。あれを喰らっていたら、などと考えたくもなく、人知を超えた力の一撃が私に向けられてきている。それを回避するのに必死で、その他の混血に対し注意が払えない。

アレに比べれば、銃創はまだ可愛げがある。喰らえば傷どころではなく、ただの肉塊。

軌間紅摩の存在が状況をさらに悪化させていく。朔を狙い続け、朔を抱く私を必要に狙ってくるが、それを刀崎梟が邪魔する。しかし紅摩の蹂躪に、紅摩を狙った七夜は原型を残さず破壊された。

紅摩の発する熱気、圧力。人外の気配に感覚が狂う。

しかし、私にはやるべきことがある。

朔を連れての脱出。

「つくそ！」

激情が破裂する。

一族を見捨て、朔を助ける。それが、酷く悲しい。

だが、そんな私の嘆きなどこの地獄を彩る事もない。

炸裂するマズルフラッシュに夜が光る。

銃声の果てにまた誰か死んでいく。

託された。朔をよろしく頼むと。

里にいる七夜の全てが、朔の事を心配し、生きていく事を願った。

皆、朔の事など、考えていないものだと思った。

朔に関わらぬ者共に憤りと嘆きを抱き、彼らを恨んだ事さえある。そして何故朔はこのような生を強いられているのかと、自らを棚に上げ、悲しんだ事もあった。

しかし、それは私の思い違いで、皆朔の事を大事にしていたのだった。それに気付きもせず、私は何も出来ず。なんて愚かな女。

だから、朔を助ける。それが私に出来るたった一つの事。

何とかして密集する混血たちを出し抜いて、この地獄と化した森を脱出し、朔を医者に連れて行かなくてはならない。

そして私は　　。

「あ

胸に、痛みを感じた。

背中から、ナニカが突き抜けて、肺を食い破った。それは私の心

臓すらも打ち抜いて、そして朔に掠りながら飛び出した。

弾丸は、周囲の肉を焦がしながら、私を打ち抜いたと気付くのに少し時間が掛かった。流れ弾。戦線を離脱する私に、偶然にも打たれた弾丸が、私の命を打ち抜いたのだ。

「　　つくう！！」

一瞬の間を置いて、苛烈な痛みが襲い掛かる。火傷のような痛み。

しかし、足を止めない。

こんな所で、倒れることは出来ない。

未だ、戦線の中にいる。ここで倒れることは、朔が巻き込まれることにある。

朔を死なせはしない。未だ腕の中に生きているのだ。

足は動く、まだ動く。

喉から血がこみ上げてくるが、朔にはかかって欲しくはないので、それを無理矢理飲み込む。胸が痛い、傷が痛い、心臓が痛い。心臓は人間の急所ではない。全身へ血の運搬を行うこれが損傷してしまえば、死ぬ。

だが、それでも動く。

心臓は破損部分が無茶に動かし、何とか稼動している。しかしそれがいつまで持つのか分からない。

それでも、動く。

この全身全霊に、身体に熱が生まれる。それは死ぬ直前の前触れ、蠟燭の灯火が消えかかる時、激しく燃え散るように、最後の一片までその存在を示すのと同じ。

だが、今ではない。死ぬにはまだ早い。

足を踏み出す。私は、こんな所で、朔を死なせるわけにはいかない。

しかし、現実は無情だった。

逃げようとする私をせせら笑うかのように、背後に威圧感。

再び、来る　　！

しかし、その一撃を回避することは、私には、出来なかった。

足を、破壊された。

「が、ああああ！？」

水面蹴り。地をから救い上げるような一撃が、肉体を抉り、骨を破碎した。

たまらず、踏ん張ることも出来ず、地面に倒れた。

後方を見やる。血の流れ。胸の地が、朔を濡らしている。

拭う事も出来ず、胸元の血を止めることも出来ない。

「……」

そんな私を、それは見続けていた。

まるで、お前のことなど興味がない、と。そして、朔を見ている。

僅かに上がる口角は、笑み。

死なぬはずと、誓いながら、このさま。

虫けらのように。

腕の中、朔を見つめる。

「朔……」

そこには、私の知っている、朔がいた。私の好きな、朔がいた。

意識が、消える。

「ち、く」

「じゅめんな、さい」

そして、物語は終幕を迎える。

朔。それは始まりであり、始まりの前に終わりを告げる。

漂う。

揺蕩い、彷徨い、意識は散り散りとなりながらも、この柔らかく温かみのある暗闇をあてもなく漂い続ける。先の見えない暗い闇は真っ黒で光も見えなかった。果ては見えない。いや、果てはあるのだろうか。何となくそのようなものは何処にもないような気がした。

幾程の時の手を揺られ続けた。不快ではない。疑問も浮かばなかった。ただそれを受け入れようとした。居心地のよい無の空間に己と言う存在は何処までも広がっていき、肉の持たぬ意識は固体としての定義を曖昧にさせた。

だが、自分は何故ここにいるのだろう。疑問ではなく、漠然とそう思った。

記憶はない。覚えもない。ただ、気付けばここにいた。

それを不思議とは感じなかった。不安を覚えなかった。しかし。この音も聞こえないこの場所、あるいは世界が、自分の居場所のよう思えて仕方がなかった。沈黙にも似た深遠だけがこの場所にはあった。静かですらない、無音。

そこで、ふと思った。自分は死んだのだと。

そう思えばあとは楽だった。曖昧模糊な所在はつまり死んだ自我そのものであり、故に肉を持たないのだ。そして自分は死んだ精神が漂った状態で、果てもなくあてもなき存在でしかなく、精神であるからこうやって思考を重ねることも出来るのだと。それに対し何

も思わない。だがそれが自然な事だと思った。

しかし、疑問が生まれた。肉も持たぬ身であるならば、何故温もりを感じるのだろうか。漂っているかと分かるのだろうか。考えを巡らせども、答えらしい答えには辿りつかなかった。ノイズ交じりの音声の果てに、見えた。

それは誰かだった。誰かの背中だった。

大きく、其れでいてしなやかな造りをした背中であった。自分は確かいつもそれを、見つめていたような気がする。見るようなものが何もなかった生に、遠くに見えた人の背中だった。周囲に人はいなかった。誰かはいた気がする。だが、それを果たして見ようとも思わなかった。

その人は、その人だけが見えた。誰もいないような空間に、生にその人だけが現われた。だから次第に自分はその人の背中を目で追っていた。

景色は変わる。

自分は立ちながら、誰もいない空間、目の前に現れたその人を観察した。その人は男だった。目つきは鋭く、何を考えているかも分からないような無表情だった。男は御館様と呼ばれていた。だから自分も御館様と呼んだ。

御館様が自分に話しかけてきた。そうだった。御館様が自分に話しかけると、自分はいつもそれを真っ直ぐに聞いていた。

お前が、朔か。

朔。それは確か、自分の名前だったような。そうか、自分は朔と言っのか。

。

景色は変わる。

朔は自分の腕と同じくらいの長さがある刃物を持っていて、それで目前に佇む御館様に斬りかけた。

始めての訓練。自分の一族は訓練を重ねる一族なのだと教えられ、そうなのかと納得した。しかしそれは届くこともなく、朔は刃物の重さに負けて転んでしまった。その時御館様は見ているだけで、朔には手も貸さなかった。転んだ朔が立ち上がるのをじっと待っていた。

その佇む姿を、朔は見つめていた。

。

景色は、変わる。

訓練の途中のことだった。組み手に失敗し、手の骨が折れた時、御館様は黙々と添え木を当てて手当てをしてくれた。その表情は少しだけ柔らかかった。

景色は、変わる。

景色は、変わる。

景色は、変わる。

変わる景色の全てに、御館様がいた。

次第に朔は御館様しか見えないようになっていった。様々な人間がいた気がする。誰かが話しかけたような気がする。だが、誰も側にはいなかった。御館様だけが、見えた。それを自分は何も考えず、ただ見続けていた。その背中を、姿を、追いかけていた。

しかし、それはある時変化があった。

。

突然現われた異物。朔の側に其れはいた。それは子供で朔よりも幼く、其れでいて子供らしかった。そして志貴はそれが御館様の子供であると理解していた。とりつめて関係らしい関係も今まで持っていないかったその子供の提案に、朔は答える術もなく、ただ受け入れた。そうして朔の側にその子供はいつの間にかいるようになった。

子供は気付けばそこにいた。朔が今まで知らなかった知識を誇らしげに話し、父である御館様の事を自慢げに話していた。更に表情をころころと変え、いつも楽しそうにしていたのを覚えている。

時には何もしない日もあった。遊ぶわけでもなく、朔が住んでいた離れの縁側に朔が腰掛け、その隣に子供は寄り添うように座った。交わす言葉は少なく、しかしそれでも子供は側にいた。次第に朔はそれを受け入れていた。

景色は生まれては消え、そして霧散していく。

そしてまた景色は変わる。

。

朔の視線の先に、御館様と子供がいた。

二人は朔の視線の先で話し合っていて、時折子供がじゃれ付く様に御館様の身体に寄りかかっていた。それを御館様は受け入れて、少し笑んでいた。その光景には温かさがあつた。穏やかさが、あつた。そしてそれは、朔には無い物だった。

それを朔は見続けていた。

二人は朔に気付くわけでもなく、ただ楽しそうにしていた。そして朔にはその光景がよく理解できなかつた。二人が親子として戯れていると言う認識は出来た。ただ、それに何の意味があるのかと考察し、朔には答えがなかつた。

あんな風に、誰かと戯れた記憶がなかつた。だから、理解できないのだと、思った。しかし、そこにある感情、穏やかな笑み、空気、それは朔にはないのものと理解はした。そして二人がどこか遠くにいるような、朔だけが遠くにいるような、そんな感覚を味わつた。

それを朔は、見続けた。

よく、やつた。

暗闇にそれは見えた。

臃気で、今にも霞んで消えてしまいそうな視界に、御館様はいつもの無表情でありながら、御館様は朔に笑んでくれた。その腕は、その身体は温かかった。

何か、聞こえた。

戻って来い。

静寂の世界に音が生まれた。

何処からか聞こえてくるそれは、確か誰かの声だったような気がする。いつも傍らにいたような、気がする。だが、身体が何かに包まれた。それは少しだけ朔に温もりを与えてくれた。

志貴の事を守ってあげてください。

沈黙の世界に音が生まれた。

何処からか聞こえてくるそれは、確か誰かの声だったような気がする。いつもどこかで聞こえていた声だった。そして、あの子供が志貴であることを思い出した。それを頼まれたのかどうかは定かではない。だがその人の手は穏やかだった。

連続する記憶の断片を掠れた意識のままに朔は見ていた。

それはどこか淀んでいて、今にも消えてしまいそうな映像だった。

そして、それを聞いた。

おっちゃんじまったんだよ。それはつまり、糞餓鬼、黄理も含まれてんのさ。

急速に広がっていた意識は集まり始め次第に質量を伴い、ひとつの集合体と化した。それは朔の意識、朔の自我であった。ただ薄れていくばかりの精神は今この時、再び朔としての意味を見出した。

死。死。死。

御館様が死んだ。

御館様が、死んだ。

御館様が、死んだ。

おやかたさまがしんだ。

おやかたさまが、しんだ。

おやかたさま、が、しんだ。

記憶の中の黄理を思い出す。圧倒的強さを保持する黄理が、死んだ。死ぬのか。御館様でも死ぬのか。朔よりも強い、御館様でも死ぬのか。

.....

.....それは、如何ほどの化物だろうか。

「!!!!!!!!!!」

咆哮。

それは、そうとしか言いようのない、まるで雷鳴のような絶叫だった。

蠢く。それは、子供の姿を借りた悪鬼であった。

跳ね上がる。息絶えた女の拘束を抜け出して、それは宙に飛び立つように跳ね上がった。

起き上がることも出来ぬ肉体にありながら、朔は動いた。地に降り立つ朔の姿は奇妙な出で立ちであった。佇むそれに下を俯き、肩を落とした様は動く死体のよう。その眼光は濁り、意識があるようには見えない。ただ、その瞳の蒼は深く、全てを映し出すかのように深い蒼である。

そして、それを確認できたものは、ほとんどいなかった。空に響き渡る絶叫に何事かとそちらを見れば、それは既にその場にはいなかったのである。そして、その近くにいた混血の襲撃者はいつの間にもやら首を失ったのだ。

首のない死体。引き千切られたように首を無くした混血は血をその頭のなくなつた断面から噴出させて倒れていく。鎌鼬にも似た所業に気付いた混血は警戒心を強める。だが、それも甲斐なく、その全てが首を奪われた。

そして、それは軋間紅摩にも襲い掛かった。

その存在を見た紅摩はその顔に凄みさえ感じさせる気迫を張り付け、不可思議な惨劇に躍り出た。その合間にも首なし死体が生み出されていく。それに向かい、地面を砕きながら紅摩は突進していった。

何処にいるかは正確には分からない。だが、紅摩の目は確かにそれを見ていた。

それを頼りに、紅摩は拳を振りぬき。

その首に、手があった。

「！！」

僅かな感触を頼りに、その場所に向かって拳を伸ばしたが、それは空を切る。しかし、首にあった圧力は消えうせ。

そして、それを見た。

地上に、朔がいる。

せせら笑うかのように、月の元、その姿を曝け出した。血の赤の川に。

アンバランスな姿。手当てしたばかりの包帯には血が滲んでいる。

蒼い蒼い瞳は輝きを放っているが、それは意識ある者の目ではなかった。

なのに朔は動いている。意識のない身体が、動くと言う事実。

だが、それを考慮することも出来ず、紅摩、そして朔の存在に気付いた混血、あるいは七夜はそれを見た。

頭。

朔の片方の手に、頭が掴れている。

そして、その口にも頭が啜えられている。引き千切られた筋肉繊維に噛み付き、人間の頭部が揺れている。

それは、いつそ恐怖と呼べる感情を混血たちに与えた。それは紅摩もまた然り。そして、七夜もそうだった。

ナニカとんでもない者の生誕を垣間見てしまったような、そんな心配。

そして朔は、宙に駆ける。

その背後には、憎らしげな満月があった。

七夜編最終話 朔（後書き）

こんばんわ。六です。

遂に、ひとまずの終わりを迎えました。

しかし、これは始まりに過ぎません。

本編の幕開けです。

長かったあ。

ちなみにこのお話はわざとぼかしているが多いです。描写することもなくもないですが、皆様に想像する余地を与えないのでは、と考えた結果です。七夜の最後だからこそ、というのがありますが。

プロローグ 月（前書き）

幼い頃

魔法使いに逢った事がある。

プロローグ 月

目が覚めた僕が始めに見たのは、落書きだらけの天井だった。

それは天井のあちらこちらに走っていて、黒い線は亀裂のように伸びていた。

僕は白いベッドにいつの間にか眠っていた。起き上がって辺りを見回す。落書きは天井だけではなく、壁や人にも見える。点滴装置があつてその時に僕は自分が病院にいるのだと気付いた。

誰かの温もりが、腕の中にあつた。温かい訳ではないけれど、腕の中や身体にあつた。そこがぼつかりと空いていて、だけどその隙間に誰がいたのか思い出せない。でもその熱を失いたくなくて、僕は自分の身体を抱きしめた。

「始めまして、遠野志貴君。回復おめでとう。私の言っていることが分かるかな？」

気付けば僕がいるベッドの横に、白衣を着た男の人と女の人がいる。お医者さんだった。

「まあ、無理もないか」

何を答えていいのか分からず、黙って見ているだけの僕にその人は一人で納得をしていた。

そしてその人は、僕に起こった事を落ち着いて説明してくれた。

道を歩いている時、自動車の交通事故に巻き込まれたこと。

その時、胸に硝子の破片が突き刺さったこと。

それが、とても助かるような傷ではなかったこと。

僕が助かったのは、奇跡に近いと言っていた。

僕は、自分が知らぬ間に死にかけていた。でも僕にはその実感がなくて、辺りを何とはなしに見回す。落書きが消えない。

でも、それ以上に、僕には気になっていることがあった。

「あの、聞いてもいいですか？」

「何だね？志貴君」

「僕の側に、誰かいませんでした？」

「……ふむ、そのような事は聞いていないな。君は知っているか？」

「いえ、遠野さんに見舞いはまだ来ていません」

僕の質問に、お医者さんとナースさんは首を横に振った。本当に知らないらしい。

僕自身、其処に誰かいたか、分からない。

でも、誰かが遠くへ行ってしまったような喪失感を、僕は持て余していた。

「もう、質問はないかね？」

「あ、もうひとつだけ」

どうしてみんな落書きだらけなんですか？

僕の話しを、誰も信じてはくれなかった。

ベッドも、壁も、床も、誰かの悪戯みたいに黒い線をした落書きが走っている。それを見てみると気分が悪くなって、誰もいないとき、ふと触れてみると指が沈んだ。其れが気になって、たまたま置かれていた果物ナイフで線をなぞってみると、その部分から綺麗に切れた。そのまま僕はベッドをバラバラにする。熱で溶けた発泡スチロールのように綺麗な断面。

その綺麗さが、不気味だった。

「先生もう一度聞くけど、どうやってそのテーブルを壊したのかね？」

お医者さんは僕がどうやってモノを壊したのか問いかけてきた。だけど、僕が正直に落書きをなぞった事を答えても信じてくれない。それ以前にお医者さんには落書きが見えなかった。お医者さんだけではない。皆には、病院中にある落書きが見えていなかった。

ベッド、イス、机、床、壁。落書きをナイフで切ると何でも切れた。力なんていらなかった。試したことはないけれど、きつと人間も線を切ればバラバラに出来るのだろうか。

なのに。誰も、信じてくれなかった。僕を、遠くからみるだけ。

そして、何となく分かったのだ。

黒い線は継ぎ接ぎで、世界は脆いという事を。

それが怖くて夢にも見た。

世界が継ぎ接ぎで壊れていく、崩れていく夢を。

そしてそれが夢だと気付いて、僕は無性に誰かも分からぬ誰かを求めた。温かい誰かを。でも、それが誰なのか、僕は分からなかった。胸の奥に、空洞があった。

継ぎ接ぎだらけの病院はたまらなく嫌だった。だから、黒い線の見えない場所に行きたくて、病院から抜けた。

走って。走って。

あてもなく走る。この空洞を埋めてくれる誰かが欲しくて。

でも黒い線はなくならなかった。そして、僕の求めている人は見つからなくて。

何処まで走ったのだろう。

胸が痛くなって、そこが草原であると倒れてから気付いた。

背中にむず痒いような草の感触があったけれど、僕はそれが気持ちいいとは思えなかった。

空を見上げる。手を翳してみると、手には線が見えた。けれど、空にだけは、線がなかった。

「君、そんな所に寝転がっていると危ないわよ」

ふいに、声が聞こえた。

誰もいない場所だったはずなのに、声が。

声の聞こえた場所を見た。

其処には赤い髪の女の人がいた。

「誰……？」

その不思議な雰囲気の人に、僕は不思議と吸い込まれていく。

赤く長い髪が、風にそよいだ。

「私？私はね」

「

それが僕と魔法使い、先生との初めての出会いだった。

プロローグ 影（前書き）

これは、とある少年が魔法使いと出会う前の話。
誰にも見られることのない、月にも照らされぬ、影の出会い。

される。 される。 される。 される。 される。
される。 される。

涙も、もうでない。

早く、朝になればいい。

そうすれば、夜になるまで されない。

でも。

朝になって、明るくなっても。

私には何も無い。居場所も、ない。

私は、遠くから、眺めるだけ。

様がくぐもった声を上げた。

顔に、生暖かな がかかった。

私は、まるで、人形のようにだった。

「よう、嬢ちゃん。嬢ちゃんに少し頼みてえ事があるんだが」

昼、誰もいない私の部屋に、その人は入ってきた。昼は、私には
夜よりも辛い時間だった。夜になれば、また 様に される。

窓の向こう、 の子供と仲良く遊んでいる ちゃんが見える。

ちゃんは笑っていて、凄く楽しそうで、あの子を守りたいともう一度思う。窓の外に見える　　ちゃんだけが、私の支えだった。でも、時たま思う。

なんで、私はあそこに、いないのだろう。

眩しい場所に、私の居場所なんて、ない。

その人は、突然目の前に現れた。

妖怪のような人だった。背が高く、異様に手足が長い、着物を着た老人。

怖いとは、思わなかった。

心は、もう、動かない。

その人は、私の事なんかどうでもいいような瞳をしていた。私の事を、人形のように見ているような目をしていた。

その人は、自分を　　だと言った。確かに、そのギョロリとした眼球は　　のように見えた。

「こいつを、暫く預かって欲しいんだが」

そう言って、その人はおもむろにベッドにそれを横たえた。

人形かと、思った。

人形だと、思った。

いつそ、死体だと思った。

血の気のない肌。左腕のない身体には包帯が到る所に巻かれていた。

そして、その子は動いていないのに、目を開いていた。

瞳の色は、蒼。深い深い虚空を思わすような、空の蒼色。

生きているようには、思えない人だった、その生気を感じられない目が開かれている。それは少し滑稽に思えた。

だけど、何故だろう。その蒼色をした瞳が、何よりも澄んでいて、綺麗だと思った。

そんな事、思うはずなのに。

「なあに、 には許可取ってる。それにあいつも親類から言われたんだ。蚤の心臓してやがるあいつだ、従うっきゃねえだろうよ。ま、俺が他の の連中に言ったから、ってのもあるんだがなあ」

そう言って妖怪は笑っていた。この世全てを見下したかのような笑い顔だった。

でも、そんな事、私には気にならなかった。

ただ私は、ベッドに横たわっている少年を見続けた。

「嬢ちゃんにやって貰いたい事は、ひとつだけだ。 に やっ

て欲しい。手段は問わねえ。何、嬢ちゃんが　と　しているのは知ってる。アイツも犬みてえにずっと盛ってるわけじゃねえんだろ？それ以外の時間は、　に使え」

人形の名前は　と呼ばれていた。でも、そんな事は、私にはどうでも良くて。

結局、私が期待されているのは、そんな事だった。私は、そんな事を、また。そしてこの人は、私が　様に何をされているのかわかっていて、それを頼んでいるのだと、直ぐに分かった。でも、助けてくれはしないことも、直ぐに分かった。

私は汚されて、穢されて、毎日辛い思いばかりしているのに。

ちやんとも遊べなくて、外にも全然行けないのに。

だって、この人は、私の事なんてどうでもいいんだ。この人は私なんか見てなくて、ずっと　を見続けていた。

「んじゃ、頼むぞ。嬢ちゃん」

そして、その人は消えた。

残されたのは、私と　のみだった。

静かだった。生きている人間が、誰もいないようだった。

そこには、沈黙だけがあった。

「……………」

私は に近づいてみた。

様が許可しているという事は、私には拒否出来ない事だった。私の関わらない所で、私の事が勝手に決められていく。それをどこか簡素な部分で受け止めた。

の顔に手を翳してみた。 はそれを見ていないかのように、瞬きもしなかった。まるで人形みたいだった。

私も、この人形みたいになれば、痛いと感じないのだろうか。

それは、私にはとても魅力的に思えた。

だって、痛い事は痛いから。辛い事は辛いから。

何も感じないようにになったら、それは、とても幸せな事だと思う。

でも、 は動かない。人形みたいな は、生きているのかも、分からない。

こんな全然動かない人形になってしまうのは、少し、ほんの少しだけだけど、怖いと思えた。

外を見る。 暖かな日差しが、外にはあった。 ちゃんが、笑っている。

だけど、この部屋は冷たくて、暗い。

そんな場所に、私以外の誰かがいる。

それが凄く、不思議だった。

そして、人形に成り掛けた少女と。

人形に成り果てた少年は出会った。

ブログ 影（後書き）

お気に入り登録がなんかもの凄い勢いで増えていますが、何が起ったの。

理由が分からなくてちょっと怖いです。

第零話 始まりの始まり（前書き）

鎖の、引き千切られる音が、響いた。

第零話 始まりの始まり

眼球を潰す。

眼球はその造形に反して存外に硬く造られている。硝子体と呼ばれる無色透明なゲル状の液体が眼球の形を整え、外部からの力に反発する役目を持っているのが原因である。外界からの情報を取得するための機関だからだろう。頭蓋に収められながらも同じ五感である聴覚や味覚とは違い、薄い目蓋によつてのみ守られるだけの眼球はそのように自己を硬くすることでその形状を保っている。

それを、潰す。しかし、加圧による破壊は時間が掛かる。それを、さして時間の掛かる事、とは思ふ事なかれ。瞬間の判断によつて状況が左右される戦闘時などでは、ほんの僅かな時間が命取りとなる。故に、どの様にすれば眼球を時間の無駄なく潰せるのか。

答えは簡単である。

瞬間的に、眼球の耐久力以上の力で、穿てばいい。

即ち、指による目潰し。それも眼球を貫いて眼底を破壊するほどの威力による。

人差し指に、力を込める。ただし、これは眼球を潰す事のみを想定に置いた選択ではない。

腕を、揮った。指先が眼球を潰す。眼底を砕く。

そして、脳を抉る。慣れ親しんだ、張りのある脳の柔らかな感触が指に感じる。

びくん、と、脳の持ち主が身体を痙攣させた。

「う、あ、あああああああうううううあああ？」

知性ある生命ではない、動物のような鳴き声だった。舌がない事もあるだろう。痛みによるものではなく、脳がやられたのだと推測今、この人間は今まで感じたこともないような感觸を味わっている。脳は頭蓋に守られているものであり、それを直接触れられる事などなかっただろう。

眼孔に潜り込んだ指先によって抉られた脳の部分を出鱈目に動かすことで、それは涎を垂らしながら鳴き声を零し、懇願するのでもなく、声を漏らすのみ。このような手段を選ばずとも、この人間を殺すことは出来た。だが、それをしなかったのは、眼球から脳を破壊すればどのように死んでいくかを見極める必要があったからだった。

眼孔から指を引き抜く。指先に血と硝子体、そして爪の間には、ぐちゃぐちゃになった脳の残骸がこびり付いていた。一瞬それを舐めてみようかと思ったが、自分はカニバリストではないのでそれは行わない。

それに、あまり美味くはない。

先ほど自分が脳を掻きまわした人間が着ていた服で拭き取る。

「そのまま、食べてしまうのかと思ったのですが、どうやら違つようですね」

堅牢な室内。余りに広い空間だった。高くそびえる本棚が壁を埋

め尽くした、いつも黴臭い場所である。背後の窓から差し込む光がこの部屋を浄化しようとしているようにも見える。

その室内、重厚なドアの前に一人のシスターがいた。

「ふむ、もし私がそうしたらどうする？」

「勿論然るべき処置を。教理に反しますので」

「ほう。　　だが、それは本当に教理に反しているのかな？」

「そうです。それは禁忌ではありません」

シスターは嫌悪に染まる表情を変えず、言う。

血臭漂う女性そのものに対する嫌悪だった。

「くっ、それは異なことを言うものだ。禁忌だからやってはいけない、とな。 私たちも過去にはそんな禁忌を行っていたと言うのに。十字軍でそれは証明されている。異教徒相手に私たちは何を、何を口にしたのかね」

かつて、の話である。聖地奪還を目指した第一回十字軍はマアツラ攻囲戦にて、異教徒を惨殺しその肉を喰らった。異教徒を虐殺した後、大鍋で大人を煮込み、子供は鉄串に刺して火に炙っていたと多数の記録書からも記されている。理由はある。十字軍は強行軍であり食料の確保があまり出来ず、更には占領したマアツラは肥沃な土地ではなかったため、飢えに耐えかねた十字軍たちは異教徒を喰らい始めたのである。

「勘違いは止めたまえ。摂理は善ではないのだよ。そして禁忌もまた邪ではない。神こそが唯一の善であり、それ以外は雑多なものに過ぎない。ほら、神こそ絶対であるというのに、それ以外を私たち

が悪と定めるのは行き過ぎている。神の決めた事ではないというのに、私たちが悪と定めるのは、私たちこそ悪という存在に他ならぬ
い」

「……相変わらず、司祭全てを敵に回しそうな考えですね」

「既に嫌われているさ。中には私たちこそ異端だというモノもいると聞く。だが、それも意味など無い。雑多な生命は雑多なままだ。それ以外にはなれない。故に、塵は、塵に返る」

「……」

「それに、だ。私たちに教理とはあまり意味を成さないだろう？ 構成員を見れば一目瞭然じゃないか。吸血鬼もいる、私のような性癖を持った人間もいる。そして、『蛇』の抜け殻たるお前。ハハ、痛快だな。お前のような禁忌からわざわざ禁忌を説かれるとは」

嗜虐心溢れる笑みを浮かべる。それは見ようによつては妖艶にも見える笑みであった。

「……」

「おや、だんまりかね？ もう少し会話を楽しもうじゃないか。私はお前たちとは違ってここからあまり出られないのだから寂しくてね。たまの会話を楽しむことが最近の私のモットーなのだよ」

ふふふ、とシスターの反応を楽しむかのように笑う。

「そこにいるのは、なんですか？」

シスターは舌打ちを漏らしながら、女性の側に置かれた人を見た。

それは、もう人とは呼べぬような姿をしていた。

四肢をもがれ傷口を縫合された、達磨のような姿。服を着せられているが、それは人形が着ているような可愛らしい服であった。片目を潰され、口元から涎と泡を零し、それは女性の側にあった。

「ああ、これか？新しい玩具だよ。お前が以前やったような事をやってみたのだが、これはあまり面白くない。何より、破壊衝動は私には無縁だしな。……良い機会だ、お前にひとつ聞きたいのだが、人形遊びの何が楽しかったのかな？」

「っ！最低ですなっ、ナルバレック！」

「ああ、私は最低だよ。ではお前は最悪と言った所かな、シエル？」

そう言っつてナルバレックと呼ばれた女性は、残った眼球に指を突っ込みそれを抉り出す。眼球の奥から視神経の束が引き千切られた。声を上げることも出来ず、呻きの音が漏れる。

その姿に、シエルはかつての自分を思い出し、すぐさま其れを払いのけた。

「いや、もしかしたら最悪ではなく、災厄と言った所か？町ひとつを舐り尽くして悦に溺れたお前には実に似合う」

シエルの瞳が殺意に染まる。がりり、と歯を砕かんばかりに食い縛った。

もしこれ以上ナルバレックが何かを言うのなら、すぐさまその

顔面に鉄塊を叩き込んで、その魂ごと打ち滅ぼすだろう。

「まあ答えは期待しないがな。さて、一体何の様だ。下らない用件ならばぶち殺すぞ?」

抉り取った眼球を掌で弄びながらナルバレックはシエルの用件を聞く。だが、シエルはナルバレックに対する憤怒と殺意を抑えるのに必死であった。ナルバレックがこのような行いをする事は、極当たり前であった。ナルバレックは人を苛める事を好んでおり、人のトラウマをいとも容易く抉る。それがナルバレックの娯楽であった。その他にも死ぬほど仕事を寄こす為、構成員全員が殺そうと思うくらい嫌われていたりする。

憤りを殺すのにしばしの時間を要した後、シエルは口を開く。

「死徒ロアの十八代目転生体対象のあたりを見つけました」
「ほつ」

知らず、ナルバレックから吐息が漏れた。少しの感嘆が混じる。

この世には人間のみならず魔と呼ばれる存在がいる。それが神の奇跡によるものではなく、摂理に反し教義に存在ものであり、代表的なものとは総称して吸血鬼とも呼ばれる。その大部分は吸血行為を行う死徒であり、それらの頂点に立つ存在が死徒二十七祖である。

そも死徒は始めから吸血鬼だった者達ではない。死徒とは吸血鬼によって血を吸われたモノである。そして始めの死徒は吸血鬼として生を受けた存在、真祖の餌だった。真祖は生物として格別の規格を約束された存在であり、それから血を吸われたモノが与えられる力も別格である。原初の死徒の数は二十七。それは既に人知を越し

た存在であり、それに対抗するため人類、ひいては教会は異端審問のエキスパートであるエクスキューターの存在を認めた。

そして、彼らのトップこそ、埋葬機関。

それは吸血鬼専門の異端審問機関であり、また教会の切り札。教会の教義には存在しないモノたちを排除する存在であり、また唯一不徳を許された部署。

聖遺物の回収および管理を担当した埋葬教室が始まりであり、それは長い時を経て神の代行者たる殺し屋となったのである。埋葬機関の目的は到ってシンプルだった。

即ち、自然の摂理に反した人間以外の絶滅。死徒二十七祖を始め、あらゆる死徒、あらゆる魔、そして真祖さえも撃滅させることが、彼らの目的である。そのためならば教義に反し、教会の意向さえも逆らう悪魔殺しの集まりである。

その彼らが狙う死徒の一体こそ、ロア。

「中々あいつが顕現する前に探し出すのは骨が折れるものだが、魂が共鳴したとでも？」

「……違います。ロアの転生対象条件から割り出したものです」

何か、含むような目線を無視し、シエルは言う。

「ふむ。場所は？」

「日本」

「極東か。確か最近どこかで、吸血鬼騒ぎの報告があったが。使えないな、日本支部の奴等。……そう言えば、あそこにはあいつがい

たな」

小さく呟く声にシエルは何を言っているのか聞こえていなかった。

そして、埋葬機関第一位ナルバレックは、第七位『弓』のシエルに命ずる。

「まあ、いいだろう。……埋葬機関第七位シエルに命じる。日本へと向かい、ミハイル・ロア・バルダムヨオンを滅ぼせ」

「はい」

そしてシエルは踵を返し、室内から退室しようとする。

一刻も早くこの場から立ち去り、直ぐにでも日本へと向かいたいと、背中に憎悪が揺らめいた。

「ああ、そつだ」

しかし、その背にナルバレックの声がかけられた。

「今回は日本の退魔に接触しろ」

「……何故です？」

振り向くこともせず、シエルは問う。

基本的に埋葬機関は他国の退魔組織と協力することはない。埋葬機関は埋葬機関として常に単体で行動するのである。だが、ナルバレックはそれを今回は行わないと言った。

「理由は二つ。日本は私たちには鬼門だ。独自の退魔組織を形成し、

外部からの干渉を良しとしない。そこに外部から許可もなく入り込めばたちまち戦争だ。日本人何をするか分からんからな。故にだ、あちらの退魔組織と交渉を行え。手筈はある程度行おう。……そしてもうひとつ。噂によれば、一人面白い奴がいると聞いた。出来ればそいつと接触しろ。そして、もし接触を果たしたならば、埋葬機関に勧誘しろ」

「……？」

「返事は？」

「……前者は分かりましたが、後者は納得しません。理由を」

「断る。お前は私の言う事を聞けばいい」

「では勧誘もしません」

「うち。……話を聞く限りでは、なかなか馬が合いそうな奴だということだ」

埋葬機関第一位ナルバレット女史。

埋葬教室を立ち上げた一人である初代ナルバレットから教会の埋葬機関に束ねてきた一族の女性であり、埋葬機関執務室に半ば幽閉された身でもある。異常者揃いである埋葬機関を束ねる実力者であり、若いとされる年齢でありながら死徒二十七祖三体を捉えた化け物。ナルバレット以外の名は不明であり、彼女はただのナルバレットとして存在する。

しかし性格悪く、埋葬機関全員が殺そうと思うぐらい嫌われており、その悪名は敵対関係にある魔術教会にも響き渡っている。何故彼女が其処まで嫌われているのか。その理由のひとつが彼女の殺人癖であった。

ナルバレットは殺す。殺す事に歓喜を感じる。殺しに悦を見出した異常者であり、人間が苦痛に顔を歪め、屈辱に震え、絶望に沈み死んでいく姿を見て悦楽を覚える人間であった。無作為に人間を殺

す性癖を持った彼女の犠牲者は絶えない。埋葬機関からも何人が犠牲者は出ている。今、彼女が弄ぶ憐れな犠牲者はどこか適当なところから運んできたものだろう。

そんな人間が目をかける人間など、まっとうなはずがない。

「……実力は？」

またそんな人間が増えてたまるかと、シエルは嫌々ながらも話を聞く。

「ああ、実力は折り紙つきだそうさ。少なくとも、純粋な殺し合いであるならばお前を下せるほどには」

「私を？」

「まあ、これには憶測も混ざっているがな。しかし、向こうの教会からの報告と日本で起こった事件を合わせると、なかなか……」

そしてナルバレックは犯しそうに笑う。狂気交じりに堪えきれないと身体を震わせて。その姿にシエルは舌打ちを打ちたくなる。理由はともあれ、ナルバレックが愉悦を感じる事がただただ不快であった。

「総合的にはお前に劣るだろう。だが、限定的な条件でならば、お前は確実に負ける。ま、補欠程度と考えればいい。だが、確実に会い、確実に勧誘しろ。もし、そいつがいるならば、私の退屈も消えるだろう」

待ち遠しくて堪らないと、ナルバレックの視線は遠い。

埋葬機関第七位に所属するシエルは『弓』のシエルとも呼ばれる

代行者であり、これまで数多くの死徒を滅ぼしてきた。未だ死徒二十七祖を倒すには到っていないが、ある事情から戦闘を優位に進めることが出来るシエルが敗北を喫するなど、そう多くはない。

そのシエルが負ける。それは彼女の持つ特性を覆す何かを持っているということだろうか。

「名前は？」

それが少し気になり、シエルは対象の名を聞いた。

「七夜朔」

「七夜、朔……」

「そうだ、よく覚えておけ。……もういいだろう。早く行け」

ナルバレックはシエル事などどうでも良い、と見ていない。その手はギリギリ生かされた生命の腹を裂いて内部に潜り込んでいた。決して少なくない血がナルバレックを汚す。だが彼女はそれをむしろ楽しみながら、その腕を深く深く潜り込ませ、心臓を掴んでいた。最早、助かる見込みもないだろう。痙攣を繰り返すその様は死ぬ兆候であった。

「……分かりました。至急準備し日本に向かいます」

「ああ、早くしろ」

「ですが、その前に」

弾丸が炸裂した。

驚異的な速度でシエルから射出されたそれは、視認も出来ぬ速さでナルバレックの側にいる犠牲者を打ち抜いた。その数三つ。心臓、

頭部、腹に突き立ち、勢いそのまま物体と化したそれを壁に貼り付ける。

それは、十字架にも似た剣であった。

「私は貴方と違って、吸血鬼を娯楽の対象と見ていません」

吸血鬼の残骸が、発火した。

夜である。

寒くなり始め月は遠く、空気が澄んで星が良く見えた。夜に吊り下げられた半分の月を町を見下ろす坂の上に立てられた洋館を淡く照らし出していた。洋館は静まり返り、夜の寂しさを際立たせている。大きな洋館である。その敷地もまた広い。その外観は左右対称に展開され、翼を広げた鳥のようでもあった。

その館のとあるテラス、石造りの柵に寄りかかるように、一人の少女が町を見下ろしていた。物憂げな感情を顔に滲ませ、艶めく長い黒髪の少女は僅かに吐息を零しながら、しかしその瞳は穏やかに言葉を紡ぐ。

「明日……」

短く、たったそれだけの言葉に、万感の想いが込められていた。

明日。明日になれば、この洋館にとある人物が訪れる。いや、戻ってくる。

長かった。どれほどの季節を数えたのだろう。変わりゆく町並みに、変わらぬ屋敷。そこに残り残され、時間に取り残されたよう、外観の変わらぬ屋敷に少女はいた。

「兄さん」

かつて、この大きな館にいた男の子。その人が、戻ってくる。戻した。

切欠は、父の死だった。

ある事情により身体を弱めていた父は、あっけなく死んだ。

よって、殺された。それがついこの前のことだった。それから父に代わって当主の座についた少女は、媚びた顔ですりよる大人を払いのけ、我が物顔で屋敷内を闊歩していた親戚一同を追い出し、父が逗留させていた者共は悉く追っ払った。使用人すらも殆ど解雇した。そのうちの一人には、もうこの町に足を踏み込まないことも了承させている。

故に、この屋敷に人は殆どいない。少女を含め、たった三人だけである。しかし三人には屋敷は広すぎる。使わない部屋が増大し、管理も追いつかないだろう。それゆえ厨房、屋外浴場は閉鎖してある。

がらん、と人気のない屋敷はまるで死んでいるかのよう。敷地を囲う壁は高く、外界と屋敷を隔離している。町の喧騒も届かぬ屋敷は静かに沈んでいた。

しかし、それも今日で終わる。

「秋葉さま。そろそろ中に入らないとお体に障りますよ?」

夜を見下ろす少女の後方、着物姿の少女が一人、室内からテラスへと現われる。薄い紅色の髪を青いリボンで纏めた女性はその顔に柔らかな笑みを浮かべ、少女 秋葉を見る。

「ええ、分かっているわ琥珀。でも、もう少しだけ」

琥珀の言葉にはにかみながら、秋葉は夜風に揺れる髪を流す。

「長かったわ。本当に、長かった」

「……」

「兄さんがいなくなって、この屋敷は時間が止まってしまった。だけど、それもお終い。ようやく、この屋敷は動き出す」

「確かに、今のままじゃ少し寂しいですよねえ。翡翠ちゃんも、志貴様が帰ってくるの楽しみにしてるようですし」

「そうかしら?」

「はい。翡翠ちゃん、今日はずっとソワソワしていました。明日を待っているのは翡翠ちゃんも同じですよ」

「そう……」

この誰もいなくなった屋敷が、それでも機能しているのは琥珀と翡翠のお陰であった。遠野当主として動く秋葉をサポートし、遠い学園に秋葉が通っている間、屋敷の全てを二人に任せている。苦勞

をかけていると秋葉は自覚する。だが、それでも果たしたい願いがあつた。

過去。秋葉、翡翠、志貴、そして　　はこの広い屋敷の敷地内で遊ぶほど仲がよかつた。志貴と　　、そして翡翠が先で遊んでいて秋葉はそれについていくのが、あの頃はいつもの通例であつた。そして、その秋葉の隣にはいつも　　。

頭を、少し振る。

そこから先は、考えてはいけない。今は、明日からの未来を想像していれば良い。

しかし、それを確実のものとするためにも、　　は始末しなくてはならない。

それが、遠野当主として務め。

「それで、琥珀はそれだけの為にここに来たのではないのでしょうか？」

一瞬過ぎる映像を消し、秋葉は琥珀に問う。

「はい。今日の報告を」

それは、翡翠もさえも知らぬ、二人だけに交わされる情報であつた。

「まず、今日全国で起こつた殺人事件がおよそ六件。ですがこれは隠蔽工作が行われた数を含んでいませんので実際は十一件。更に行

方不明者は総計五十名弱。そこから退魔組織からの情報を合わせる
ともつと数は増えます。そこから条件を当てはめ、死者の数が一人
以上の事件は二つ。このどちらかには関わっているかと思えます」

「場所は？」

「××県とN県」

「規模は？」

「××県では死者数五名。こちらは犯人は捕まっています。しかし
N県では数が分かりません。そして犯人も不明です」

「と言うと？」

「ぐちゃぐちゃになりすぎて数が掴めないそうです。死体がバラバ
ラではなくて、もう原型を留めていないような状況らしくて、詳細
はまだハッキリしていません」

「……それで？」

「はい。殺されたのは久我峰傘下の人間。場所は仇川マンションの
最上階。隠蔽工作も行われていますので、間違いありません」

「そう……」

報告を聞いた秋葉の表情は先ほどとは打って変わり暗い。それは
凍えを無理矢理抑えているかのよう。そして、いつしかその顔には
笑みが張り付いていた。暗い笑みだった。

「……N県。近いわね」

「はい」

「……」

「……」

「……」

「……風が、冷たくなってきたわね。そろそろ戻るわ」

「……はい」

部屋に戻る秋葉を琥珀は見ていた。何を思っているのか、その表情からは分からない。ただ、近い未来に喜びと悲しみが、秋葉の心に訪れることを、琥珀は何となく悟った。

その秋葉の背中を琥珀は、笑みながら、見ていた。

そして夜は深みを増し、月は夜空に輝きを増す。

日月の繰り返しを重ね、明日は再開の時。

琥珀は秋葉の部屋を離れ、一人廊下を歩いていく。その顔は少しばかりの笑みである。口角を上げた、挑発でもなく、悪意を放つわけでもない、ただの笑み。それが一体何に対しての笑みなのか、琥珀自身でさえも分からない。ただ、琥珀は。

「姉さん」

廊下を進み、広いロビーを訪れると給仕服を着こなす少女に出くわす。薄い紅色の髪にカチューシャを飾る、琥珀と良く似た顔立ちの少女であった。どうやら見回りを行っていたらしく、反対側の館は既に消灯されている。

「あら翡翠ちゃん？もう見回りの時間だった？」

「そうです」

簡潔かつ表情に起伏のない翡翠であるが、実は感情表現に富んでいる事を琥珀は知っていた。

「もう時間も遅いし、翡翠ちゃんもそろそろ寝た方がいいわ」

「でも、私まだ眠たくなって」

「ふふ、本当に明日が楽しみなのね」

琥珀の言葉に、翡翠は僅かに顔を俯かし、頬を赤く染める。

「でも、それなら尚更ですよ？睡眠不足は乙女の敵。乙女の肌が傷ついちゃう。翡翠ちゃんも、志貴様に綺麗な姿を見て欲しくはない？」

「そ、そんな事は……」

「あらら、余計に赤くなっちゃいましたか」

「……！」

頬の火照りが増していく翡翠を、琥珀は柔らかな笑みで見つめていた。しかし、翡翠は少しばかりの不安さを顔に表す。

「でも、姉さん」

「なあに？」

琥珀は翡翠といる時、必ず柔らかな対応を行う。やはり双子の姉妹であり、琥珀が姉であるからなのか、妹の発言というのは不思議な優先順位を持っている。

「……志貴様は、私のこと覚えているかどうか」

かつてこの屋敷にいた少年が、少女たちの前から消えたのが八年前の事。それから顔を合わすことも、連絡を取り合う事もなく、少年と少女たちは歳を重ねた。少女の不安は正鵠を得ている。人間は忘れる生き物。例え、大事な事があるうとも、それも次第に薄れ掠れ磨耗し、最後には姿なく消えてしまう。そして少年の事もある。少年はあの時。

「大丈夫よ、翡翠ちゃん。志貴様はきつと覚えてくれている」

それでも。人には忘れない事もある。

「……でも」

「不安になっちゃ駄目よ。それに、翡翠ちゃんと志貴さまはあんなに仲良しだったじゃない」

記憶とは曖昧ながらも、断片的な切欠さえあればそれが復元する。記憶が消えることは稀である。記憶は忘れるものであり、それはどこにあるのか分からないようなもので、発見することが出来ないだけなのである。記憶の成層は消滅することなく、脳の中に残されている。

「だから、安心して。翡翠ちゃんは翡翠ちゃんの思うままにすればいいの」

「私の、思うままに？」

「そう」

翡翠の中にある不安を取り除くのは琥珀の役目だった。そう、姉はいつだって妹の味方。

「でも……姉さんは」

「何？翡翠ちゃん」

「……なんでも、ありません」

姉の表情を見て、翡翠は言葉を紡ぐことも出来ず、そのまま引き下がる。

琥珀は笑んでいた。

「変な翡翠ちゃんですねえ。兎も角、翡翠ちゃんはそろそろ寝ないといけませんよ？あとは私がやりますから」

「……わかりました、後は姉さんに任せます」

「はい。じゃあ翡翠ちゃん、おやすみなさい」

「姉さんも、早くおやすみください」

翡翠が離れていく。それを確認し、琥珀は消灯を行うため廊下を歩く。

静かな館に琥珀の歩む音が頼りなく響く。

「そう……」

琥珀は笑んでいた。

「思うままにやればいいの」

琥珀は笑んでいた。

「思うままに、ね」

琥珀は、笑んでいた。

そして。

『ああ、こちら。仕事は終わりだ。いつもどおりやってやったぞ。……五月蠅いなあ、手前らは何時もどおりにやりゃあいいん

だよ。はいはい、わかったわかったワカリマシタつつつてんだろ木瓜が！喧しいんだよギャーギャー騒いでんじゃねえつ。手前が依頼したことだろうが！あ、何だ？だったら余計な仕事増やすんじゃねえつて？だったら依頼すんじゃねえよ！……だからどうした？それを俺に言っても意味ねえ事ぐらい手前知ってんだろうがつ。だからなんとかしろつて、何で俺がそんな面倒な事やらにやいけねえんだよ、大体俺が止めねえ事分かってて言っただろソレ。……余計な仕事増やすんじゃねえつて、そんなちつちええ事気にすんじゃねえよ、禿げんぞ？ああ禿げてたか。はっソレこそ笑わせるな、そんなもん意味ねえよ。さつさと無駄な抵抗やめて剃つちまえ！！　　ちち、分かった分かった泣くんじゃねえよ。手前がツラに手えだそうとしてんのは、俺と手前だけの秘密だ。

あ？ヴァチカンがどうしたつんだ？……埋葬機関、だと？あの殺し屋共が日本に来るつてののか。いい度胸してんなあいつら、独逸に持ちかけて戦争でも仕掛けんぞ。んで何処で調べたんだ？……は？あいつらから話が来たつてか？なんだソレ、キチガイどもがどういうつもりだ……？それで、埋葬機関がどうしたつんだ。……は、莫迦だろソイツ、なんで態々接触してくんだ？死にてえのか？　　ああ、あいつらは死にたがりの殺し屋だったな。んでだ、用件は何だ？……何？ソレは直接話すつてか。ハイハイ手前があいつらに恨みがあんのは分かったから、俺に呪詛呟いてんじやねえ。にしても狙いがわかんねえなあ。日本にわざわざ攻めてくる理由は何だ？……ああ、それを知るために行けつて事か。

あ、おいちよつと待て、何処に行くつもりだ。……気配だと？俺には何も感じねえが。……ああ、そうだ。手前、何処に行けばいい？三咲町？　　方角はそっちに向かつてるな。そっちになにがあるつんだ……わからんか。　　ああ、わかった。多分辿りつくだろう。んじゃ行くわ。　　しっかし、あそこにはつくづく縁があるつてことかねえ。なあ、お前？』

第零話 始まりの始まり（後書き）

こんにちは、六です。

前回あとがきにて、お気に入り登録が一気に増えていることに恐怖を感じたと書いた所『草葉の陰的な何処か』というサイトにて、「七つ夜に朔は来る」が紹介されている事を親切に教えてくれました。シャクレ兄さん様、ありがとうございます。

無論『草葉の陰的な何処か』にて紹介をしてくれた方に、ここで感謝の意を伝えます。貴方に感謝を。紹介してくれた事、そしてこの作品を読んでくれた事がとても嬉しかったです。

これからも精進させていきますので、朔をよろしくお願いします。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、いつでもお書きください。

心よりお待ちしております。

第一話 反転衝動？ 表（前書き）

あの背中を、覚えている。

だけど、それは一体誰の背中だっただろう。

第一話 反転衝動？ 表

目覚めた時、いつも誰かを探している。

でもそれが誰なのか分からず、そして何で自分が探しているか理解できないのに、いつもそうやって何かを求めている。それは寝起きの水分不足だとか、空腹だとか、寝不足だとか、そういった満ち足りていない状態とかではなく、自分の内側に無視できない空っぽがあつて、それを持って余しているという事に近い。

だが、この空白が一体何なのか、そして何で空白はあるのか、自分には知らない。いや、忘れているのかもしれないし、気のせいなのかもしれない。ただ、気のせいだというには余りに長い間、これは自分の中にあつた。

感傷に浸っていると、少しばかりの頭痛を感じた。

気持ちは悪くなる。

線。

視界に、黒い線が見える。

天井にも、壁にも、物にも。

そして、自分の体にさえも。

亀裂のように線が書かれている。子供の描いた落書きの様。滲むように、だがはっきりと視える。

それを見たくなくて、側に置いてある眼鏡を手に取る。何の変哲もない、ただの眼鏡である。

かつて、記憶の中にいる先生からもらった眼鏡だった。

これさえあれば、この世界の気持ち悪さを見ずにすむ。

俺にとって何よりも大切なモノだった。先生との思い出の品というのもある。だがそれ以上に、俺はこれがなければ、真っ直ぐに生きることも出来なかった。

眼鏡をかける。すると、黒い線は忽ち見えなくなって、気持ち悪さも消えていった。

気持ち悪さが収まり、自分の部屋を、ベッドから体を起こして見渡す。何もない。がらんどろな室内。荷物は既に送られている。私物としては随分と少ない量ではあるが。部屋には、制服しか既にな

い。
きつと、これはこの家から離れる寂寥に違いないと、あたりを点けた。だが、この家の異物で、有間の人と触れ合うことも躊躇っていた俺が、そんな理由で寂寥を消すには、余りに滑稽だと自覚した。

「それじゃおばさん。長い間お世話になりました」

少ない朝食を済まし、身嗜みを整えて制服を着た後、薄い学生靴を手に抱え、玄関にておばさんに別れを告げた。おばさんは影を顔に纏わせながら、それでも笑んでいた。俺との別れを惜しんでいるのか、と調子のいい事を考える。見やる有間の家は和風の造りで、

この家にいるのは心が随分と落ち着いた。別れ難いと、寂しさの中に身の虚ろが震える。

でも、呼ばれたならば、そこに帰るだけ。

「向こうでも、元気で暮らすのよ」

「おばさんも、お元気で」

今日、俺は実家に戻る。

有間の家は、俺の本当の家ではなかった。

過去に事故を受け、体の弱くなった俺は実家である遠野から勘当を受け、有間の家での暮らしを余儀なくされた。理由は遠野の長男に相応しくないから、と親戚に決められたからだった。それは有間の家に行った時、二度と敷居を跨ぐなと言われた事にも現われているだろう。酷く疎まれた記憶がこびり付いていた。

それから有間の家に馴染もうとして、結局出来なかった。仲は良かったと思う。おじさんも、おばさんも、勘当された俺は二人には他人でしかないのに良くしてくれた。何度か養子にならないかと、言われたこともある。人柄のよい二人に俺は、人の優しさを感じたのだ。だけど都古ちゃんとは、結局殆ど会話することも出来なかったのが、心残りだった。

だが、そんな生活は今日で終わる。

高校に向かう途中、目に入る坂の上の馬鹿でかい洋館。丘の上にあり、平地から見ているというのに、それでも大きい。

アレが、俺の家、らしい。

一ヶ月前、俺の親父遠野楨久が死んだらしい。らしいというのは、その事実を俺は新聞で知ったからだ。親のことであるというのに、そんな事を知らなかった俺は、親父という存在、遠野という存在を過去のものとして、その時既に清算していたのだろう。それを証明するように、俺はソレを遠野から知らされなかったし、知った時、何も感じなかった。それでも親父が死んだという事が分かったのは、遠野が巨大企業家であり、親父が其処のトップだったからに他ならない。遠野グループはあまりに有名な資産グループであり、そのトップが亡くなれば報道されるのも頷ける。

ただ、自分もかつては其処の人間であった事は、あまり実感が無い。

しかし、そんな俺の認識など関係なく、先日手紙が来た。新たに成り代わった遠野当主からの手紙。

戻って来い、とたったそれだけの内容の手紙だった。

何を今更、とは思わなかった。

ただ、今の生活の終わりを感じた。

それに、秋葉の事も。

眼鏡の位置を直す。

「まあ、なんとかなるだろう」

一人呟く。そうして思考停止。

いつも通りの道を歩きながら、この道をもつ歩く事もないのだと、感慨深く思っていると高校に辿り着いた。さっさと教室に向かおうと、何気なく校舎を見渡す。

すると。

「？」

二階の教室。その窓際から、そ知らぬ女性が手を振っていた。

青みがかった髪の毛、眼鏡の女性。

にこやかに笑う女性は、こちらを見下ろしている。

「俺？」

取り合えず手を振り返しながら、小首を傾げた。はて、あの人は誰だろう。

結局疑問は教室に入っても解けなかった。誰かも分からぬ人間に手を振ることはないだろう。では、俺はあの人を知ってるかと言えば、素直に首肯できない。なら、あの人とは他人か。でも、女性は手を振っていた。多分、俺に対し。

「……」

手を振り返した手を見る。

何も、分からなかった。

「遠野。お前もスミに置けねえなあ。朝からいちゃいちゃしゃがって！」

そんな俺の首に誰かが纏わりついた。

「……何の事だよ、有彦」

赤毛にサイドを借り上げ、制服をだらしなく着こなしながらも、それが実に良く似合う男だった。俺よりも背丈があることもその要因だろう。耳にはピアスを幾つかしており、不良としか形容できない男である。

名前は乾有彦。小学から続く腐れ縁の悪友である。

そして、有彦が言うのはあの人 俺に手を振った女性 の事らしい。

「いや、あれは向こうが勝手に……」

「そうか……勝手にか。なあんて恍けるなっ、ちゃっかりやる事やりやがって！」

首を絞められる。普通に苦しい。朝から何をやっているのだろう、俺たちは。

「相変わらず、仲良いんだね二人とも」

声の先に、一人の女生徒がいた。

染めていない淡い栗色の髪を両サイドで縛った 俗に言うツイン

テール 女性。

人懐っこそうな雰囲気を持った、クラスでは比較的仲が良い、と思われる人。

クラスメイトである、弓塚さつきさんだった。

「にしても、どういう事だ有彦。万年遅刻魔のお前が何で朝から来てるんだよ？」

有彦の束縛から逃れ、俺は窓際の席による。絞めつけられた部分が痛んだ。

乾有彦は、このように朝から学校に来る人間ではないと認識している。小学からの腐れ縁はこのような妙な信頼を得ている。嫌な信頼だ。大体有彦はこの学校が進学高校でありながらアウトローを貫いている男であり、学校に来ない日だってある。周りに迷惑を掛けないような生き方をしているので、周囲も強くは言えないが少なくとも、このように朝早くから学校に来る人物ではなかったはず。

「おう、最近夜遊び控えてっから早くに起きちまってな。暇だから来てみたってわけだよ。最近物騒だから姉貴が五月蠅いんだよ」

設置された机に寄りかかり、踏ん反り返る有彦を見て思った。

いや、それが普通なんだけど。

とは言え、そんな一般的な生き方を互いにしていないため、そこは強く言えない。

でも、物騒？

「知らないの遠野君？この町で起きてる連続殺人事件の事」

反応も出来ない俺に弓塚さんは親切にも教えてくれた。

最近この三咲町では連続殺人事件が起こっている。それは猟奇事件と評される事件であり、殺された人間は皆全身の血液が無くなっているらしく、巷では「現代の吸血鬼」とまで言われているとか。そして被害者は既に五人にも及んでいる。

こんな身近で、そんな事が起こっていると、俺は知らなかった。

「テレビとか見てないのか」

「ああ。ここんところ、引越しの荷造りで忙し」

「え！遠野君引越しするの！？」

俺が話している途中、いきなり弓塚さんが声を上げた。そういえば、この話は有彦と学校の先生にしか言っていない。

弓塚さんを見る。この世の終わりを知らされたような、絶望と形容してもいい表情をしていた。何故だろう、あうあう言っている。

……そんなに驚くような事だろうか。

「違うよ。住所が変わるだけで、引越し先もこの町」

「よかったあ」

つまり高校は変わらない事を告げると、弓塚さんは心底安心したような表情をした。色々忙しい人だ。

「と、と……」

「うん？」

「遠野君が引越すのって、あの丘の上にある……」

「うん、そこだよ」

三咲町に住んでいる人間なら、丘の上にある洋館と遠野の名前は簡単に繋がる。遠野の存在はソレほどまでに大きく、弓塚さんが知っているのも何ら不思議ではない。

そうすると、弓塚さんはもじもじとしながら、それでいて顔を若干赤らめて何かを口にしようとしていた。もごもごと動く口元からぶつぶつと「……そう、勇気出さないと……帰ろって……」何か言っている。何が言いたいのだろう。

そしてキツと顔を上げた弓塚さんは、何やら意志の強そうな瞳を俺に向けて、

「あ、あの遠野君。わたしも家がそっちの方なんだっ」

「へえ……」

「だからっ、もしよかったら今日私といっ『さつきー先生がプリント運ぶの手伝ってだっ！』」

もう、せんせいのほかあつ。

弓塚さんの消えた廊下から、そんな声が聞こえた。

結局、何を言いたかったのだろう。

「まあ、運が無かったと思え。てか、あいつも大概だなあ」

ニヤニヤと笑顔を浮かべる有彦の言葉が、少しだけ気がかりだった。

授業には身が入らなかった。勉強は標準ぐらいには出来るし、この学校は進学高校なのだから、ある程度真面目にやらないといけないのだが、どうも今日の事が頭から離れなかった。

学校が終われば、向かう事になる遠野の事。今までの有間での日々。

そして、妹の事。

八年前、遠野から勘当された俺には、妹がいた。秋葉。それが、妹の名前。

でも事故によって体を弱めた俺は、有無を言う事もできず遠野から追い出された。親父も、親戚もあまり俺の事を良く思っていない。それが原因なのかもしれない。手続きはあつという間に済んでしまい、勘当された。妹の秋葉を、置いていくような形で。

秋葉は恨んでいるだろう。何も言わず、そして、連絡も取らなかつた俺の事を。もしかしたら、俺の事なんて忘れているかもしれない。それならば、そのままが良いのかも知れない。お互いに不干渉なまま、過ごしていければ、秋葉が苦しむ事も無いはずだ。

だけど、今日俺は遠野に戻る。今の当主が誰かは知らぬが、随分と奇な事だと思う。

勘当された俺に、戻って来いなどと。

何も言わない。何も思わない。それが一番悪くない。

そうやって、思考を停止させる。

なるようになる。なるようにしかならない。

胸の空洞が、少し痛んだ。

「……」

いつもと違う帰り道を歩く。学校から見えてどんどん大きくなっていく屋敷の外観に、不思議と緊張が高まってきた。

そして慣れない道を進みながら、ふと思い出す。

学校で手を振った女性の事、秋葉の事、いつも良く遊んだ女の子の事。

そして最後には　　。

いや、それはいつも、気付けば考えている事だった。

記憶の奥底に映る、　　背中。

夢に出るような映像ではなく、きつと記憶の奥底、あるいは脳裏にある、背中。

誰の背中か、分からない。

肌蹴た上半身。それは子供の背中だった。

細く、それでいて子供らしくもない引き締まった背中であり、簡単に手折れてしまいそうなほど、儂げな姿。

それが一体誰で、いつ見たのか、まるで分からない。自分は子供、だったのだろうか。

その背中は、まるで先に行くように前だけを向いていて、志貴には顔も分からない。

でも何故だろう、そんな背中に、今の自分から見ても小さな背中に。

こんなに、安心するのは。

「……」

考察はいつも立ち止まる。いくら考えても、それが誰なのか俺には分からないのだ。そんなあやふやかな感じ。模倣なイメージ。先に進まず、説明されない。

だけど、不思議と不快ではない。中身の空洞が少しだけ、満たされるような感覚。

これは、あるいは。

「で、でかい」

気付けば、辿り着いた。

かつて暮らしていて、そしてこれから過ごす事になるだろう、遠野の洋館。

見上げるほどに大きな外観。その構造は正面から見て翼を広げた鳥のようにも見えた。何だこの学校のグラウンドくらいありそうな広さは。

開かれた門の前で愕然としつつも圧倒されるといって、見事な混乱っぷりを展開させながらも、俺は進んでいった。門から洋館までなかなか距離がある。今なら遅くない、有間の家に戻る、と怖気づく内心を無理矢理ねじ伏せて、これまた大きな、見上げるほどの高さある玄関に辿り着く。

普通の家で、両開きの扉など、クローゼットぐらいしか思いつかないが、それが門のように設置されていた。現実味の無い場所に、自分がいるのである。それでも玄関に呼び鈴があるというのは、ちよつとした親近感が沸いた。

「お待ちしてりました」

パタパタとした軽やかな走り寄る音の後に、玄関が開かれた。目の前には、いつか見たような、それでも靄がかかった記憶の中にある光景に似たロビーが見える。奥にはグランドピアノらしきものまで置かれていた。そして、淡い紅色の髪を青いリボンで纏め、着物に白くフリルらしきものをついたエプロンをつけた女性が、其処にはいた。

「よかったあ。あんまりにも遅いから、道に迷っているのかなって

心配しちゃってたんですよ？日が落ちてもらっしやらなかったら
お迎えに行こうかと思っていたんですから」

妙な組み合わせを着こなした女性のいきなりの朗らかさに、軽い
戸惑いを覚える。

「あ、ああ。心配かけたみたいだ。ごめん」

「え……」

女性の顔が固まる。不意をつかれた、感情の無い表情だった。

でも、それは一瞬の事で、それはすぐさま消えた。

「すみません。すぐに秋葉様のところにご案内しますね」

取り付くような感じではなく、其れでいて慌てた様子も無く、一
瞬の空白めいた表情がまるで夢だったかのように、少女は笑みなが
ら先導を始めた。

自分が気にする事ではないと、俺は努めて屋敷の構造を思い出そ
うとしながら、少女の後をついていく。ロビーを横切り、立派な内
装の内部を進む。

確か、この先は、リビングだったような気がする。

「お帰りなさいませ、志貴さま。今日からよろしくお願いしますね」

先導していた少女が振り向きざまに俺を見た。

「ああ、こちらこそよろしく」

「どうもありがとうございます。居間はこちらですよ」

辿り着いた居間には、二人の少女がいた。

備え付けられた高そうな、実際高価なのだろうソファに腰掛ける深窓の令嬢のような黒髪の少女と、先導してくれた女性に似た給仕服の少女がその傍に佇んでいる。

「琥珀、ご苦労様。下がっていいわ」

「では、失礼します」

凜とした声。琥珀と呼ばれた少女はそのまま一礼し、居間から離れていった。

そして、残されたのは黒髪の少女と、給仕服を身に纏った少女。

「お久しぶりですね。兄さん」

予想は、していた。だが、人はこれほどまで変わるものなのか。目の前にいる少女が、あの。

「兄さん？」

「秋葉、か？」

記憶にいる少女は、こんなにも美しくなるなんて、想像してもいなかった。

「ええ、そうです。秋葉は私以外いません」

若干の棘が混じる声音。

「そ、そうか。……久しぶりだな、秋葉。綺麗になってて分からないかった」

「……兄さんはお変わりないようで」

「……」

「体調がよろしいなら話をしましょうか。立ったまま話すのはお疲れになるでしょう」

「……ああ」

目の前にあるソファに座る。やはり、考えていた通り秋葉は俺に對しあまり良い感情を持っていなさそうだった。まあ、当然だ。

そして俺らは様々な事を話した。

親父の死を直接伝えなかった謝罪、秋葉が当主と成り親戚一同及び使用人に到るまで殆ど追い出した事、親戚に対する悪態、俺はこれまででの生活、遠野の館に対する率直な感想など。どうにも長い年月に遠野の家の事は忘れていたので、これから思い出すだろう、と最後に付け加えた。だけど、やはり秋葉は少し表情を変えて俺を見ていた。最早感覚では遠野ではなく、他人に近い俺がこんな事を言うのは変かもしれないが、でもこれから一緒に暮らす事になる秋葉には伝えたかった。

そして、最後に。

「この子は翡翠です。これから兄さん付きの侍女にしますけどよろしいですね？」

有無を言わさない秋葉の声。そして翡翠と呼ばれた女性は無表情のままにお辞儀をした。

え？

「秋葉、お前、今なんて言った？」

呆然とする俺に、秋葉は不思議そうな表情。

「分かりやすく言えば、召使という事です。……有間ではどうだったのかは知りませんが、これから兄さんは遠野の家で暮らすのです。兄さんには遠野としての嗜みを覚えていただかなくてはなりません。なので遠野の人間としての待遇は当然受け入れてください。それに、食事掃除洗濯それ以外の雑務、兄さんに出来まして？」

何も言えない。それに、何も出来ない。情けない事であるが、生活力には自信が無い。

「分かった」

捲くし立てるように言い放った秋葉の勢いに押された俺は、結局其れを受け入れてしまった。何とも弱いな、俺。

「では翡翠、兄さんを部屋に案内して差し上げて」

「畏まりました、秋葉様」

静かに歩み寄る少女の人形めいた雰囲気、少しばかり身構えるが、それは意味の無い事である。

「それでは、お部屋にお連れ致します」

「ありがとう。じゃあ、秋葉また後で」

「はい、兄さん」

秋葉は、少しだけ笑んだ。

ロビーを抜け階段を上がって二階へ。淡い光の中、翡翠に先導される。そして一つの部屋に辿り着く。

「こちらが志貴様の部屋です」

案内された部屋に、俺は圧倒された。高校生が使うにはあまりに立派な造り、無駄に広い中はリビングと言い張っても通用しそうだった。これが、俺の部屋？

「……志貴様？」

圧巻とした部屋に飲み込まれていた俺を、翡翠は僅かにだが心配そうに声をかけた。人形めいた、と先ほどまで思っていたが、どうやらそんな事は無いらしい。

「いや、なんでもないよ」

俺は場違いな感じがしてならない。

「お部屋は八年前から手を加えていませんので、不具合は無いかと思われます」

「もしかして、ここって俺の部屋だった？」

翡翠は戸惑いに表情を変えた。

「そのように聞いておりますが……」

女の子にそんな表情をさせるのは良くないと、罪悪感が働いて咄嗟に言葉を紡ぐ。

「八年経てば違和感があるのも当然か。けどやっぱり落ち着かないな、高級ホテルに泊まりに来たみたいだ」

「お気持ちは分かります。ですが、どうかお慣れください」

そう。馴れなくてはならない。でなくてはここでの生活なんて無理だ。

「志貴様のお荷物は全て運びました。何か足りないものはありますか？」

「いや、ないはずだけど。どうしてそんな事を？」

「……いえ、差し出がましいようですが、お荷物は足りているのでしょうか。少なすぎるような……」

「ああ、もともと荷物は少ないんだ。大丈夫」

「そう、ですか」

すると翡翠は安心したように、息を吐いた。本当に、表情豊かだ。

そうして翡翠は部屋から立ち去っていった。

改めて部屋の中を見る。広すぎる部屋に、大きなベッド。イスも幾つか置かれて、本当にここは俺の部屋なのかと、不安感というか落ち着かなさを味わう。

しかし、時機に慣れるだろう。

俺は、自分の家に、帰ってきたのだから。

食事とは和やかな雰囲気なモノで行うものだ、俺は思っている。硬い雰囲気のまま食べる食事というのは空気に感化されて、硬くなり、冷たくなり、味気ないものになってしまう。

例えば、今日の夕食のように。

料理は素晴らしかった。今まで口にしたこともないような、所謂高級な料理である。恐らく食材から調味料の段階までこだわっているのだろう。庶民的な生活に馴染んでいた俺には、美味いには美味いがどうにも舌がついていかない様な料理だった。それでも、美味いと正直に頷けるモノだった。

「……………」
「……………」

無言。

冗談のように長いテーブルの端、対面するように座りながら、俺と秋葉は黙々と食事を進ませていた。馴染みの無いナイフとフォークに四苦八苦する俺に、秋葉は若干ではあるが苛立ちを滲ませていた。いや、そんなテーブルマナーなんて知らないぞ俺。琥珀さんと翡翠は主人と同じ食卓には立てないと、二人とも食事を取らなかった。

胃袋を満たすための時間だというのに、結局胃袋を痛める様な時

間となつてしまった夕食を終え、俺と秋葉は食後の紅茶を飲むことにした。取り合えず、秋葉と何か同じ事をする事がいいのではないかと、思った結果だった。

「どうです、お口に合いますか？」

「ああ、種類は分からないけれど、美味しいなコレ」

食後のお茶は、夕食と打って変わって和やかな雰囲気だった。神経質な空気は消え去って、俺たちは同じ空間を楽しんでいた。

「有間では紅茶を嗜んだりはしなかったのですか？」

「ああ。向こうはどちらかと言えば日本茶だとか飲んでたような気がする。でも、それも趣味の範囲ではなかったなあ」

あの和風な家で紅茶を飲む機会があったが、それでも日本茶よりは少なかった。

「秋葉は紅茶が主か？」

「そうですね。紅茶は種類も多く、更に時間によって味が変わっていくので、様々な味を楽しめますし。今度よろしければ教授差し上げましょうか？」

「うん。秋葉が良ければ」

秋葉は本当に楽しそうだった。それにつられて俺もなんだか楽しくなつていった。そして、これが家族としての時間なのかと、俺はしみじみ実感した。今まで離れ離れで交流も無かった、たった一人の肉親とこうやって同じ時間を楽しむ。そんな事が、とても心地よい。

秋葉も、この時間を楽しんでいるだろうか？

楽しんでくれたら、俺も嬉しい。

そして気付いた。冷たく、刺々しいと思っていた秋葉だったが、話しているうちにそんな意識は変わっていき、お堅いような感じはするが、決して嫌な性格ではない。

秋葉は、俺の妹なのだ、と改めてこの時実感した。

すると、何故だろう。

空っぽな内側を感じた。

今までよりも、強く、響くように。

「そう、言えば」

だからだろう。こんな質問をしたのは。

「親父は、どうして死んだんだ？新聞にも書いてなかったし」

少しの間を置き、秋葉は言う。

「お父様はお体の弱かったお方でした。なので、其れが原因で」
「ああ、そうだったか」

記憶の中に映る父の姿は妙にやつれ、床に伏せている事も多かった。それが何故なのか、俺は終ぞ知らなかったが、それでも親父が健康体ではなかった事は覚えていた。

そうか、親父の最期はそんなものだったか。特に記憶にもいない親父の事を思ったが、結局感慨深さは浮かばなかった。しかし、体が弱いか。

「やっぱり、俺も親父の影響を受けてるんだなあ」
「え？」

一人呟いた言葉に、秋葉が反応を示した。

「ん、どうした秋葉？」

「いえ、影響がどうとか……」

「ああ、俺の体が弱いのも、親父の影響があるかもってさ。最も、俺の場合は事故が原因なんだけどな」

「そう、ですか。そういえば兄さんもお体の方が、その、あまり……」

「そうだな。貧血持ちで良く倒れるし、あまり多く食べる事も禁止されてるし」

「……今日は、大丈夫なのですか？」

「今日は調子いいな。貧血も起こしてないし、だから安心だ」

そう言うと、秋葉は少しばかり柔らかかな笑みを浮かべた。

「安心しました。もし、調子が悪かったらすぐに言ってくださいね」

それを聞いて、少しだけ可笑しくなった。

「どうして笑うのですか。私は兄さんのことを心配していて……」
「だからだよ。秋葉結構優しいんだなって」

すると、秋葉の顔はあっという間に真っ赤になってしまった。

「……当然です。兄さんは遠野の長男なので。……心配して、何が悪いんですか」

そっぽを向いて小さく呟く秋葉の姿が、妙に可愛く思えた。

自分の部屋に戻り、そのままベッドに横になる。

慣れない部屋で寝れるのかと少しだけ心配になったりもしたが、果たしてそんな事は関係なく順調に睡魔がやってきた。視線の先、天井が随分と高い。

それを見ても、全く違う内装を見ても、やはりここは自分の部屋なのだろうか、改めて思う。でも、今更有間の家に戻っても、居場所なんて無い。今日、別れを告げたのだ。

帰る、か。

「帰って、来たんだよな」

実感は無いけれど、それでも秋葉と会話して、少なくとも足がかりのような、折り合いのようなものは出来たような気がする。

記憶の中にいる少女たち。そして自分。

不安はある。杞憂もある。

だけどもあ、これから馴染めばいいだろう。

なんとかなる。

今は、このまま睡魔に任せて眠るに限る。

そうして、俺はまどろみ、やがて眠りにつく。

内側にぽっかり空いた虚ろは、結局虚ろのままだった。

遠く、どこからか犬の鳴き声が聞こえる。それは月に届かんばかりに響く遠吠えであった。夜を切り裂くように、犬は吼え続ける。

でも眠いから、自分には関係ないと眠り続ける。

どうせ外の事。時間が経てば、犬もどこかに消える。

だが、犬たちは喧嘩でもしているのだろうか。

遠吠えはやがて吠え立てる犬の鳴き声へと変化していく。

まどろむ意識の混濁に聴覚は次第に機能を失っていく。

そして、犬の悲鳴が聞こえたような、気がする。

第一話 反転衝動？ 表（後書き）

気付いている人は気付いているはず。六が調子に乗っている事を。でなければ、無謀な挑戦しません。

第二話 反転衝動？ 裏（前書き）

私には、好きな人がいます。

第二話 反転衝動？ 裏

夕暮れの空に黒が混じる場合に、一人の女子高生が学生鞆を片手にトポトポと歩いていく。少し丸顔に愛嬌のある顔つき。左右で縛った栗色のツインテールが歩調に揺れ、町の中を歩いていく。

「酷いよせんせええ、結局こんな時間まで先生の手伝いだっだし」

落ち込み気味に肩を落とし、暗い表情、というか滂沱の涙さえ見える気がする。

しょんぼり弓塚さつきである。

本日弓塚さつきは密かな恋心のままに、勇気を出して憧れの遠野志貴という少年に声をかけ、彼が引越しをすることを知った。始め志貴がいなくなると勘違いし、いろいろ想像してしまったりもしたが、結局引越しはするが学校は変わらず、引越し先は丘の上の豪邸しかも帰りの方向は途中まで同じだという。それを聞いてさつきは思った。

これチャンスじゃね？

昔、中学の頃に起こったある事が切っ掛けで、自然と目で追うようになつた彼。しかし、志貴は周りにいる人たちとはどこか違い、そこにいるのどこか遠い場所において、違う場所を見ている。唯一彼と親しげな乾有彦といてもである。それが余計に気になつた。一体今志貴は何をしているのか、どんな事を考えているのか。

中高とクラスも同じになり、触れ合う機会はあるはずなのだが、

何せさつきはいざと言う時に運がないというか、怖気づくというか、そんなものが混ざり合って悉く失敗を重ねている。そもそも話しかけることだけで大事件。仲良くなるなんて天変地異だと思っていた。でも、神様はそんなさつきんを見捨てはしなかった。

夢は、願いは、いつか叶う、と誰かが言っていた気もする。

引越し先の方向はとちゅうまでさつきの帰宅方面と重なる。即ち帰る道行も同じに他ならない。これは一緒に帰るなんてイベントが発動可能だという事である。

動揺と安心のせめぎ合いに、さつきは志貴を帰宅時に一緒に帰ろうと声をかける。ぎゅんぎゅん漲る乙女心。恋の情熱はさつきを突き動かした。

しかし、である。

「もう、先生もタイミング悪いなあ。なんであのタイミングなんだろう」

誘う正にその瞬間、先生の呼び出しに心砕かれたのである。さすが乙女心、直線は強いのに横からの衝撃には脆い脆い。

「すぐに終わるとか言って、全然終わらないし。もう夜だよお」

なんだかんだで、人のいいさつきは誰かの頼みを断る事ができない。根っからの善人である。頼まれれば嫌とは言い辛い。その人の良さがあるからこそクラスでも人気がある。それを承知の上でさつきに用事を頼む先生もなかなか良い性格をしているが、さつきは気

付きもしない。

すでに夕闇が街並みを染めようとしている。夜の訪れ。昼と夜の間の時間である。街には影が差し込み、闇色をした空が夕暮れを追い立てる。冬も近くなってきたので、夜が早くなってきた。早く帰らないといけない。

確かに、志貴と帰れないのは残念だ。折角そんな機会が巡り回ってきたのだ。これを活用しない手はない。今日は、駄目だった。

でも、明日からはどうだろう。

「よしっ、明日は絶対遠野君と帰るんだからっ」

チャンスはきつと今日だけではない。明日も、その次の日もやってくる。

憧れのままに進んでいく弓塚さつきに不可能はない。今年の目標は遠野君と気軽に話し合える仲になる事。前途多難な目標だったが、それももう終わった。今年も既に後半に入り、ようやく目標が実現可能になりそうだった。随分と遅いスタートダッシュである。

さて、さつきが決意を新たに燃やした時だった。

「あれ、遠野君……？」

視界の端、街角の曲がり角、そこにちらりと見知ったような影が見えた、ような気がする。閑静な道並、舗装された道を挟み込むように家々が乱立している。その影を曲がるように、ちらりと、さつきの想い人が見えた。辺りは暗い。影は見え辛かった。でも、さ

つきはそれが何となく志貴の姿に見えて仕方がなかった。

時間も時間。既に志貴はあの豪邸に帰宅しているはずである。彼は部活動には所属していないし、アルバイトも行っていないと何となく聞いた。だからこんな時間に外にいるのは少し不自然。

「（友達と遊んでいた、とか？）」

自分で考えながらそれは随分と稚拙な予想だと思った。志貴の友人である有彦と遊んでいる、というのはいくらなんでもありえないと思った。他に友人がいないとは限らないが、さつきの思う志貴はそんな人間ではない気がする。何となくではあるが、彼が友人と遊ぶ姿が想像できなかつたのである。

「（じゃあ、元の家に行くのかな？）」

そちらのほうが大分マシだろう。豪邸が馴染めず、元の家に戻る。もしくは何か忘れ物をして元の家忘れ物を取りに行く。うん、こちらの方がしっくりする。でもこんな時間に？違和感を覚える。

そして、さつきはハツとした。

「（も、もももしかして）」

夕暮れも過ぎていく。夜は間近に迫り、少しだけ寒い。太陽が見えなくなり始めたから。

「（ここここ恋人に会いに行くとかっ！？）」

その想像にさつきは愕然とした。有り得る、有り得るぞそんな未

来が！

何せ志貴はカッコいいし優しい。幾分かさつきの主観が混じっているが、少なくとも志貴の恋人がいても可笑しくない。健全な高校生だ。恋人付き合いに眉を潜める事もない。思春期を経験して女性への幻想を打ち砕くには頃合な年頃だ。

「す、少しだけ、少しだけ見に行くだけだし……」

そんな結末は嫌だ。ずっと志貴を追っていたのである。自分の好きな人が、誰か他の人と付き合っているのは絶望以外の何物ではない。でも考えれば考えるほどさつきのビジョンは埋まっていく。誰も見ていないのはその人をずっと見ているから。側にいないのは、心がその人に向けられているからだ。そして、志貴の笑顔も。

「いやだ……」

ぼつり、とさつきの口元から零れた。

「いやだよ、遠野君……」

だから少しだけ。確認のために。この予想がただの空想だと信じて。

さつきは志貴の影が見えた後を追った。

空には星の輝きが見え始めていた。

道路を進んでいくと、決して確認できない距離ではないはずなのに、影の姿が曖昧にさつきの視界の端にいた。それが何だか追いか

けっこみたいで少しドキドキした。幼心にさつきは志貴との追いか
けっこを自身が恋人という設定で妄想。

うむ、実に好い。

閑静な住宅街とは打って変わった明るい街並み。途切れる事のない人工ネオンの輝きは、無秩序な様相を見せて人に夜を忘れさせようとする。道行く人たちは慌しそくに先を行き、すれ違う人々は何が楽しいのだろう、馬鹿みたいな笑い声を響かせる。

「うー。こんな所まで来ちゃったよお」

あまり遅い時間に、ここには来たくなかった。昼とは違う顔を見せる、この街の二面性はさつきには辛かった。まるで今まで信じたものが偽者であるような気がするのだ。派手な服装に身を包んだ若者が多い。酒気を放つ大人の姿。ティッシュを配るアルバイト。ティッシュはもういらぬ。もうここに来るまでに六つも貰ってしまった。

「　　です。どうぞ」

「はあ、どうも」

七個目。

志貴の影を追い、こんな所まで来てしまった。ちよつと帰り道を外れただけで、さつきには馴染まない場所にたどり着いてしまったのである。

いやだな、早く帰りたい。でも、あと少しだけ、と。自身の不安のままにさつきは歩いた。視線は先を見ている。でも、今この時になってさつきは、今自身が追いかける影が志貴ではないのではないのか、と思考の隙間に入り込んでくる。志貴を疑っているのではない。ただ、今さつきが志貴と思っ込んでいる存在が志貴ではない違う人だったら。どうだろう。凄く恥ずかしい。

でも、そんな考えを払いのけるさつきの不安。それがさつきを突き動かしている。確認するだけ、確認するだけ、と自分に言い聞かせる。志貴が何処に行くのか、果たして目的は恋人に逢う為なのか。それともあれは志貴なのか。

パチンコ店の無節操な音があちらこちらから放たれている。本格的にさつきは帰りたくなり始めた。さつきが不安と共に抱いているのは若干の恐怖であった。それらが突然さつきに牙を剥くのではないか。そんな馬鹿らしいが実にリアルな恐怖がさつきを包む。二ユースでも、学校でも、こんなところに近づいてはならない、と言われてきている。それをさつきは真っ直ぐに受け取ってきていた。

でも、それでも、である。

さつきの中にある仄かに淡い想い。それを今、脅かす影がある。それをどうにかしなくては、さつきはさつきでいられなくなるような気さえした。

「あれ……?」

気付けば、影は又もや角を曲がっていく。

あそこは確か路地裏だったはず。そんな所になにがあるのだろう。

「ううう」

気後れして歩調は少し遅くなる。暗い場所は苦手だった。昔話でも、童話でも暗がりには良くないものがいて、そこに入り込めば二度と出られないと言った様な、とても不吉な場所。世上でもそんな所に入り込めば何か起きるか分からない。不良の巣窟、あるいは悪い人たちの溜まり場だ。

「遠野、君……」

不安だ。あれが本当に自分の想い人なのか。今この時になり、さつきのなかにある恐怖はその姿を現し始めた。

誰だつて我が身が可愛い。恐怖とは本能が正常に働いて本人が生き延びる為に鳴り響く警告音である。警告音は静かに、囁き告げた。もう帰るべきだと。あそこに行つてはならないと。行つてしまえば、もう戻れないと。

この時点で、さつきは少し帰りたくなっていた。さつきは一般家庭に生を受け、育つてきた普通の女の子だった。本能を克服する術は、志貴を想う気持ちだけであった。

暗がりを進むには恐怖が足を遅くさせる。でも志貴は　。

さつきはかつて、死に掛けた事がある。

でもそこを助けてくれた志貴に、さつきは恋を知った。それは稚拙で、何とも幼い、でもそれ故純真で素直な恋だった。それを憧れと呼ぶ事もできる。それを気のせいだと、言われることもある。

しかし、さつきは知っていた。それが憧れならば、こんなにも胸

は苦しくない。それが気のせいならば、これ以外の想いは全てまやかした。

記憶を巡らせる。その中にいる志貴の姿に、さつきは勇気を振り絞った。うん、大丈夫。

その時であった。

人ごみの中を洗われるさつきは。

ぞわり。

と、何かを感じた。

「え？」

さつきの横を、何かが、通り過ぎた。

黒っぽい、何か。

背筋を逆撫でする寒気。良くない気配だった。今まで感じたこともないようなそれを感じ、咄嗟に今しがた横を通り過ぎた存在を確認した。

後ろを振り向く。

「あれ？」

何も、いなかった。

黒っぽいものは何処にもいない。黒い服装をした人は何人かいた。

でも、あの存在が黒いような人間はいなかった。

いや、アレは。

本当に、人間だろうか？

「ひうっ！！」

不器用な悲鳴を、さつきは飲み込んだ。

何か、見てはいけないようなものを見てしまったような、気がする。

ぞわりと不安は活性化し、さつきを追い立てた。

体を反転させた。纏れるように、走る。

一刻も早く家に帰りたいかった。なけなしの勇氣は散り散りに消え、その場所を恐怖が支配した。今まで感じたともないようなモノがさつきの中をぐちゃぐちゃにさせる。混乱に心は志貴の姿さえも曖昧にさせた。

本能は既に志貴の影を一片たりとも脳裏から吹き飛ばした。

さつきは走る。影ではなく、家に。

頃。
空には星が瞬いて、月も見えていた。月の形は半月を少し過ぎた

その空は、黒と橙が交じり合って、見事な藍色を成す。

一瞬、視えた。

しかし、それは消えてしまつ。立ち止まり、辺りを探るが何も感じない。視えない。

だが、あれは　。

『どうした？』

声が響く。金属を擦り合わせたような声。

再び歩く。すれ違う人間たちは、存在に気付いてすらない。

気配は、覚えた。

ならば、見つけるだけ。

人ごみに紛れて、それは消えた。

第二話 反転衝動？ 裏（後書き）

さっちゃん成分が足りません。

さっちゃんが襲われなくてもいいじゃない。

第三話 反転衝動 ? (前書き)

夢は、見ない。

見るのは、思い出だけ。

第三話 反転衝動？

女の子がいた。

小さな黒髪の女の子。

女の子は花の円環を頭に飾り付け、笑っていた。

暗転。

女の子がいた。

小さな黒髪の女の子。

女の子は草の生えた地面から立つ事もできず、泣いていた。

暗転。

少年がいた。

血に塗れた、少年がいた。

暗転。

少年がいた。

血塗られた少年の背中を見続けた、少年がいた。

「起きてください志貴様。朝です」

ゆるゆると、目が覚める。

窓からの日差しが温かい。薄く開いた目蓋の隙間から、ぼんやりと見慣れぬ天井が見える。白い天井は簡素ながらに儼かな造り。横たわっている布団も素材良く感触は極上。はてここは何処だろうか。寝起きに血の巡りの悪い頭は、どうにも上手く働いてくれない。

やがて開かれた視界の端に、人の姿が見えた。霞む視界を凝らしで見ると、そこには一人の少女。給仕服を身に纏った、淡い紅色の髪をした少女が、俺の横に直立していた。

「おはようございます。志貴様」

果たしてこの人は誰だったかと考える前に、少女は一礼する。その丁寧な仕草に、なにとはなく俺は少女の姿に見とれた。精巧な人形のように整ったその顔造り。顔を上げた少女の瞳は美しき翡翠色。そうだった。昨日は分からなかった。それは彼女の名前をそのままに現した澄んだ瞳であった。

「あ、ああ、おはよう翡翠。わざわざ起こしてくれてありがとう」

でも、長い間は正視出来ない。

翡翠の姿は黒い亀裂だらけだった。

眼鏡をかけていない世界は落書きだらけで、其れは人間すらも例外ではなかった。

眼鏡をかけようと、適当にそこらに投げ出していた眼鏡を探すが、俺が探すよりも先に、すつと翡翠から手渡された。いつまでも身を横たえておくには失礼だろうと、眼鏡をかけつつも慌てて体を起き上がらせる。部屋を見渡した事で、この見慣れぬ場所は自分の部屋なのだとうやく分かった。

「勿体無いお言葉です。志責様をお越しするのも私に任された責務ですから」

完璧な物言이었다。

翡翠は秋葉に言われ俺に付けられた従者、らしい。生活力のない俺のために付けられたらしいが、そのような立場、生活に慣れない事と同年代の少女、それこそ高校生として自分と同じように学校へと通っていきそうな年頃の少女が、俺の従者、などと言うのだ。

「あの、翡翠さん」

でも、それを素直に受けられるほど、俺はこの状況を良しとしていなかった。

「昨日から思ってたんだけど、堅苦しいから俺の事は呼び捨てでいいよ。その変わり俺も翡翠って呼ぶからさ。昨日会った、琥珀さんにもそう伝えておいてくれないかな。翡翠」

今まで普通の生活を送ってきた。有体に言えば庶民的。こんな扱いを受けるのは、少しこそばゆい。窮屈な感じが否めない。堅苦しいは慣れていない。

翡翠はしばしの時を置いた後、

「……分かりました志貴様。姉に伝えておきます」

一礼。道のりは遠いらしい。

しかし、話を聞いて少しだけ引つ掛かりを感じた。

「姉って、琥珀さんの事？」

「はい。申し遅れました。すみません」

確かに二人は良く似ていた。雰囲気は大分違ってはいるが。朗らかな印象の琥珀さんと、静かな印象の翡翠。二人とも見かけは似ているが、中身は違う。

「お召し物をお持ちしましたので、こちらのほうにお着替えください。お着替えが終わりましたら居間にいらして下さい。秋葉様がお待ちしています」

そう言つと翡翠は俺に着替えを手渡し、そのまま一礼し部屋を出て行った。糊の効いたワイシャツ、皺一つない制服のズボンは俺が遠野へと戻る前に送っていたものだった。

「てか、俺制服のまま寝てたのか」

今自分は制服を着ていた。どうやら着替えもせず、そのまま眠ってしまったらしい。

翡翠が部屋から出て行くのを確認した後、身につけていた生ぬるい人肌の制服を脱ぐ。その際、胸の辺りを大きな傷跡が蹂躪していたのが見えたが、最早慣れてしまっているので何も思わない。翡翠

から渡された服は清潔で、少し冷たかった。

着替えを済まし、部屋を出る。一人で歩く廊下は広すぎてどうにも寂しい。しかし、これだけ屋敷自体は広いと言うのに、汚れ一つ、埃の一片も見えないのが不思議である。

居間に着くと、イスに座った秋葉が紅茶を飲んでいた。秋葉はこら辺では見慣れない青いイメージの制服を着ていた。制服自体は凡庸な服装だと言うのに秋葉が着ているだけで随分と上質な物の様に見え、優雅に嗜む姿から本当に紅茶が好きなのだと思った。その隣には先ほど俺の部屋に訪れた翡翠の姿もあった。

「秋葉、翡翠。おはよう」

「おはようございます兄さん」

「おはようございます、志貴様」

秋葉に声をかけた後、テーブルを挟んで秋葉の正面に設置されたイスに腰掛ける。しかし、秋葉は兎も角、先ほど会ったばかりの翡翠は又もや一礼を返してきた。生真面目な少女だと改めて思う。気軽な仲となるには道のりは険しい。

「おはよう御座います志貴さん、こちらが朝食になります」

「うおっ」

後方からいきなり声をかけられた。虚を衝かれ、慌てて振り向くとそこには朝食を運ぶ琥珀さんの姿があった。びっくりした。後ろに琥珀さんが現われたのに、全く気付かなかった。

「あ、ああ、おはよう琥珀さん」

「はい、今日の朝ごはんですよ」

気さくな態度でにこやかに微笑む琥珀さんは楽しそうに朝食を配膳する。改めて琥珀さんを間近に見るが、やはり翡翠と良く似ていた。琥珀色の瞳と着物とエプロンの装い。それと青いリボンがなければ見分けもつかないほど、その顔つきは似ていた。

用意された和風の朝食を食べながら、居間に設置された年代物の様な柱時計を確かめると学校に向かうには少し早く起きていた。だけど慣れない道のりを確認しながら向かうだろうし、それこそ以前の有間と比べてみたら距離が違っだろう。これぐらいが丁度いいのかも知れない。

朝食は美味しかった。シンプルでありながらワカメやネギの食材及び調味料を最大限に生かした味噌汁や、炊き立ての白米、そしてふんわりと甘い食感の卵焼きなど、一般高校生が食べるような朝食としてはあまりに上等なものであった。

「昨日の晩御飯も美味かったけど、料理は誰が作ってるの？」

ふと気になり聞いてみる。

俺の問いに、秋葉の隣に移動していた琥珀さんがにこやかに応えてくれた。

「あは、実は私が作ってるのですよ？」

「え？そうなの？」

「はい、今現在この遠野の屋敷には秋葉様と翡翠ちゃん、それに志貴さんと私の四人しかいません。なので私が頑張って料理を作ってるのです」

昨日から思っていたのだが、この屋敷にはあまりに人がいない。ガランとした印象が刻まれている。会っているのも今この場所にいる四名しかいない。だけど、まさか本当にこの四人しかいないなんて思ってもいなかった。

「へえ、凄いな。という事は昨日の晩も？琥珀さんって料理が上手なんだね」

「いえー、これも長年の賜物ですよ。それにしても志貴さんはお上手なのですねえ」

クスクスと口元を着物の袖で隠す琥珀さん。そう言われてみると、少しだけ照れくさくなった。でも、本当に凄いなと思う。こんなに美味しい料理を作れるなんて。少しだけ空気が和んだ。そこで暫く談笑が続くかと思っただが。

「こほんっ」

咳払い。見ると秋葉が半眼となって俺を見ていた。

「兄さんは私と話すよりも琥珀と話するのが良いそうぞ」

やばい。何故か秋葉の機嫌が悪くなっていた。

「それに、食事をしながら談笑なんて。兄さんは遠野家の長男なんです。もう少し遠野の人間としての自覚を持ってください」

確かに、少し行儀が悪い、のだろうか。言われて気付いたが、あまり良くはない、のかも知れない。しかし、秋葉の態度がやたらと怖いぞ。

「ごめん、秋葉」

そこからは黙々と食事を食べる。

朝食を済ますと翡翠が紅茶を注いでくれた。食後のお茶はこの家の習慣なのだろうか、と俺は思いながら温かい紅茶を飲む。鼻腔に紅茶の味わい深い匂いがふんだんに広がる。紅茶は良く分からないが、やはりコレも昨日の紅茶と種類は違うが良い紅茶なのだろう。

秋葉と共に紅茶を飲んでみると、先程よりかは秋葉の態度も軟化したようだった。険のある眉間の皺も解される。

「兄さん」

そんな時だった。秋葉はティーカップを置いて、俺を見た。

「昨日は言いそびれていましたが、屋敷の門限は七時です」

「七時!？」

度肝を抜かれた。門限にしてはあまりに早すぎるだろう。高校生の身分である俺からすれば尚更の事だった。

「はい、七時には正門、八時には全ての門を閉めます。十時以降は屋敷の中を歩き回るのも控えて頂きます」

「それは、いくらなんでも……」

無茶ではないか。その言葉を紡ごうとした。

「私は」

「ただ、秋葉の有無を言わさぬ視線が俺を貫いた。」

「今までこうして来ましたが、兄さんには出来ませんか？」

威圧感すら覚える秋葉の瞳。何だろう、体からオーラのようなものすら漂っているような。

「覇気？」

しかし、其処まで言われたら俺としても出来ないとは言えない。

妹が今までやってきたのだ。兄が出来ないとはあまりに不甲斐ないだろう。努力はする。

「努力の必要はありません。結果を出して頂ければそれで充分です」

「そんな、手厳しい。」

「ただでさえ最近は何騒なんですから」

一人呟くような声を俺は聞き逃せなかった。

「何騒？」

思わず聞き返した俺に琥珀さんが反応する。

「町で起こっている猟奇殺人事件の事です志貴さん。ご存知ありませんか？」

「……」

そういえば昨日、学校で有彦や弓塚さんから聞かされた。殺され

た人間は全身の血がなくなっていて、現代の吸血鬼とまで呼ばれているとか。そんな事件が起こっていたと昨日知ったが、その事件がこのように近くて周りに影響を与えているなんて思っても見なかった。つまり俺の門限が早いのも、その殺人犯が原因、という事だろうか。

しかし、それは考えても有り得ないと思った。そんなのこじ付けでしかないだろう。

「とにかく。今まで兄さんがどのような生活をしてこられたのかは知りませんが、遠野に帰ってこられた以上は我が家に馴染んで頂きます」

ぴしゃりと秋葉が言い放つ。

理不尽な部分を感じながらも、仕方ないと諦める。ちらりと隣に控える翡翠の姿を盗み見たが、何も反応を示さないと言う事は、これは既に決定事項という事なのだろう。

だけどここの家に馴染む、か。

俺は、帰ってきたんだよな。多分、きっと。

実感が得られない。久しぶりなのか分からないが、見覚えのない自室に対しても、本当にあそこは俺の部屋なのかと思う。

暫く手元に握ったままだった紅茶を口元に傾ける。

喉に入り込んだ紅茶は既に冷たくなっていた。

「志貴様、そろそろお時間の方はよろしいのでしょうか？」

翡翠に言われて柱時計を確認すると、学校に向かうには丁度よい時間となっていた。登校に費やす時間は憶測で三十分近いだろう。

「それじゃ秋葉、そろそろ行ってくるよ」

秋葉に声をかけながら立ち上がる。

「ええ、兄さんお気をつけて。私もそろそろ失礼します。兄さんも勉強に励んでください」

本当に手厳しいな、秋葉。

居間を出て自分の部屋に置いてある学生鞆を取りに向かおうとしたところ、既に翡翠が準備をしてくれていた。感謝をしながら受け取ると「勿体無いお言葉です」と一礼を返した。制服の上着も序に受け取って、申し訳ない気持ちになりながら、そのままロビーに向かい玄関を出ようとすると。

「志貴さん！ちょっと待ってくださいーい！」

ぱたぱたと階段を下りてくる琥珀さんの声に呼び止められた。

何だろうかと、琥珀さんに振り向くと、その手には木製の箱が持たれていた。

「これ、昨日有間の家の方から届けられたんですよ」

「おかしいな。俺の荷物は全部持ってきたはずんだけど」

「はあ、なんでも志貴さんのお父様の遺品だそうです。志貴さんに

譲るように遺言があったとか」

親父の、遺品？

思わず、それを見る。

親父が俺に対して何かを残す事など、ある得るのだろうか。俺を勘当した、親父が。

琥珀さんから受け取ってみると、見かけに反しての重量感があった。恐らく中身に何か重いものが入っているのだろう。でも、興味はそれほど沸かなかつた。俺を勘当した奴の遺品なんて、と反発にままだ。

「まあ、いいや。琥珀さん、これ部屋に置いて……」

しかし、視線を感じた。文字とするならじいー、とした感じだ。

見れば琥珀さんが笑顔のまま、興味深そうな顔で俺と、手に握られた木製の箱を見ている。

「……中身が気になるんですね、琥珀さんは」

「いいえ、そーんなことありませんよー」

笑みのままの応える琥珀さん。その表情に変化はない。なかなか調子の良い人だと思った。

「はあ、じゃあ開けてみましょう」

乾いた音が木霊しながら、箱は簡単に開いた。中をそのまま琥珀さんのと確認してみると、中には、何だろつか、平べったい鉄の棒のようなものが収められていた。長方形の、掌サイズの棒である。こんなものを残すなんて、親父もどうして子供みたいな嫌がらせをぶちかましてくれる。

「これは、ナイフですね」

黙って案外子供っぽい親父に対し思考をしていると、琥珀さんが箱から棒を取り出しながら言う。

「ほら、飛び出しナイフってあるじゃないですか。あれと同じです。せーの、はいっ」

パチン、と小気味悪い音をたてながら、それは姿を現した。

刃。

包丁や鋏とは違った狙いで作られた鋼の刃が鉄の握り部分から飛び出してきた。

芸術品のような美しさなどない、無骨な刃だった。

刃文は真っ直ぐ。

刀身は日本刀の切っ先にも似た造りをしているようにも思える。鎗造もそれに近い。

しかし、其れよりも肉厚で耐久性のない日本刀と比べたら頑丈そ

うな造りだった。

刃の長さは恐らく十センチ以上。

その趣から鈍器のようにも見えるが、それは日常用に作られた刃物しか見た事がない俺の感性でしかない。それにこれはナイフと言っよりも短刀に近い。

「随分と古い物みたいですけど、造りはしっかりとしていますね。あ、裏に年号が書かれていますね」

再び刃を仕舞い、琥珀さんから受け取る。

確かに握りの下には『七夜』という字が刻まれていた。

「なな、や？」

口ずさむ。

何気なく零れた言葉の中にしっくりするような響きがあった。

まるで、以前、どこかで聞いたことがあるような。

っ。。

「姉さん、これは年号じゃない。七つ夜って書かれているだけよ」

「っ！」

思考を切り裂くように、突然背後から声がして振り向く。

先ほどまで黙り込んでいた翡翠が、いつの間にか後ろからナイフを覗き込んでいた。

翡翠はその瞳に熱を宿し、亡、と魅入られたかのように刃を見つめていた。

「……翡翠、人が悪いぞ。そんな後ろから覗かなくなつて見たかつたら見せてあげるのに」

「あ」

声をかけた途端、翡翠の顔が僅かにではあるが赤くなる。

そんな翡翠に少しの苦笑を見せ。

あれ？

俺は。

今、何を考えていたのだろう。

「し、失礼しました。あの……短刀があんまりに綺麗だったから、つい」

「綺麗？綺麗、というよりは、おんぼろって感じだけど」

「そんな事ありません。見事な刃文をした、由緒正しい古刀だと思います」

熱心にこの刃物の素晴らしさを伝えようとする翡翠の言葉に、何だかこの七つ夜が凄く立派なものに見えてしまう。

「……」

しかし、さっきまで何かを思い出したような気がするのだが、それは靄のように消えてしまった。記憶、なのだろうか。でも、一体何の記憶なのだろう。七夜なんて、聞いたことはない、はず。

でも、だったら何で。

七つ夜を握る手を自分の胸に押し当てて。

こんなにも、空白は揺れ動く？

学校まであと少しという新しい道の途中で、振り返る。坂の上だというのにここからでも分かる巨大さ。聳えるように、あるいは誇るように居を構えた、我が家。丘の上に立ち、周りを森で囲まれた其処はあまりに不自然であり、まるで森に佇む孤高の古城だった。

家を出る途中、翡翠が門前まで送ってくれた。どうにも慣れないが車での送り迎えと比べたら遙かにマシだと自分を納得させた。

校門をくぐり、教室を目指す。階段を上りながら学校の雰囲気にも包まれる。滑らかな廊下。思い思いに話す生徒たち。それが随分と久々なような気がした。どうにもあの家の生活は肩肘張る。秋葉はあのような生活を今までずっと行ってきて、今回当主にまでなったのだから大変だろう。遠野グループの当主は伊達ではないはず。秋葉が望むなら不甲斐ない兄は見せられない。でも、それはそれ、これはこれである。

「あ、遠野君おはよう！遠野君聞いてよっ、乾君ひどいんだよ！」
「よ、よう遠野」

弓塚さんは、有彦に対する態度とは少し変わって俺に挨拶してきた。それに対し有彦は酷い。息も絶え絶えながら、それでも引き攣るように笑っている。笑いすぎたのか、目尻の涙が大変うざい。

「まあ、落ち着いてよ弓塚さん。それでどうしたの？」

席に座りながら、あまりに意気込んでいる弓塚さんを宥めすかす。すると弓塚さんは、はっとしながらも少し落ち着きを取り戻し、俺を真っ直ぐに見て、体を寄せてくる。

「実は私、昨日」

「うん」

「幽霊見たんだよ！！」

「……はい？」

眼鏡を外し、亀裂だらけの視界を見ながらも目頭を揉んで、眼鏡を制服の袖で拭いて、眼鏡をかける。そして再び弓塚さんを見た。

「……はい？」

「もう、遠野君も信じてくれないのっ？昨日私、夜に幽霊見たんだってばっ」

胸の前で握りこぶし。

幽霊って、弓塚さんあなた。

その口ぶりに我慢できなかったのか、横で有彦が馬鹿みたいにまたもや笑い出した。ああ、そういえば有彦は馬鹿だった。周りを見ればクラスメイトもまた、くすくすと笑っていた。教室が騒がしかったのは、これが原因だったか。

「幽霊、ですか」

「そう、幽霊」

「昨日？」

「うん、昨日」

真剣に俺を見つめる弓塚さんの瞳は、嘘を言っているようには見えない。でも、どう反応すればいいのだろう。朝からこのような事態に遭遇するなんて想像もしていなかった。

けど、取り合えず言える事がある。

「……………弓塚さん」

「なに、遠野君？私の話信じてくれるよね？」

「いや、まあ、それは置いといて。……………弓塚さん、近いです」

弓塚さんの顔との距離、1cm弱ぐらいだろうか。吐息のかかるような距離に弓塚さんはいた。やたら近い。机の上に身を乗り出すように、弓塚さんは俺に話しかけてきた。眼前に弓塚さんの顔があり、その瞳には俺の姿が見える。そして、今まで気付かなかったが、

「お前、アホだろ？」

有彦だけには言われたくない。

授業はとんとん拍子に進んでいき、そして今の時間は昼休み、昼食の時間である。俺と有彦、そして授業開始前には教室に戻ってきた弓塚さん。それでも何故か顔はまだ赤かったが、と共に学生食堂へと向かった。

「にしても、弓塚が未だに幽霊なんて信じてるとはねえ」

月見うどんを啜りながら有彦は言う。その後方では学食に設置されているテレビ、ビデオデッキがその下に置かれている。そこでは小難しい顔をしたコメンテーターたちが最近の事件や政治に対し、大層な高説を我が物顔で喚いており、その映像と有彦の間抜けな顔のギャップが笑いを誘う。

弓塚さんはそんな有彦の茶々に機嫌を損ねたようだった。

「もつっ、ちゃんと聞いてくれない乾君には何も言わないから」

「ま、信じるのは人それぞれだわなあ。くけけけけ」

「むっつっつっつ」

小さく唸りながら頬を膨らませる弓塚さんだった。

人は一時期、そのようなモノを信じる時期がある。それは幼年期、まだ世界がとんでもなく広くて、自分の知らない事があまりに多すぎる頃。その時に教えられた事柄の全ては真実だった。純粹に何か

を感じた時、それは理屈を越えた。その理屈さえも良く分からなくて、難しくこんがらがった筋道の証明なんて想像もできない。

でも、少しずつ歳を重ねていき、世界が見え始めたころ、小難しい事も理解できるようになって、そのようなモノが嘘っぱちに見えるてしまう。だから、幽霊が見えると公言する人はそれを信じているか、単に見える人だけなのかもしれない。見間違えと言う事も在るだろう。弓塚さんがどちらかなのかは知らない。俺は今までのようなもの見たこともないから何とも言えない。

しかし、有彦、うどんの汁を飛ばしすぎである。

「有彦、其れぐらいにしておけよ。弓塚さんだって、別にからかつてるわけじゃなさそうだし」

「遠野君……」

「確かに、本人がその気じゃなくてもだ、俺はこう思っちまうぜ。こいつ頭やべえんじゃねえかってな」

「!?!」

愕然として声も出せない弓塚さんに代わって有彦の頭を殴っておく。わりかし本気で額の辺りを。「ぬおおおお」と有彦は額を抑えながら呻いていたが、当然自業自得だった。俺も腹が空いていたので手加減出来なかったのだろう。憐れとは思わないけれど。

「随分と楽しそうですね。遠野君」

ふと、そこに聞きなれない声が聞こえた。仄かに漂うカレーの匂

い。声の聞こえた方向に首を傾げる。

俺の斜め後ろ。カレーの乗ったトレーを携え、その人はいつの間にかそこにいた。

見慣れない人だった。青みがかった黒髪に眼鏡をかけた女性。レズンの奥には黒がちの瞳。うちの学校の制服を着ているのだから、この学校の生徒、だろう。落ち着いた雰囲気と、柔らかい表情から、女性が俺らのうちの誰かの知り合いであり、上級生つまりは三年生のようにだ。

でも、こんな人、この学校にいたのだろうか。

「あ、昨日の」

そして、はたと思い出した。

昨日の朝、俺に手を振ってきた人だった。

「よろしければ、ご一緒してもいいですか？」

「何言ってるんすか、先輩なら大歓迎っスよ！」

復活の有彦が調子の良い事を言っていた。

「あ。そうだ先輩」

俺の正面、有彦と弓塚さんの間に座り、カレーに舌鼓を打つ女性に弓塚さんが声をかけた。

「何ですか？弓塚さん」

「この前言ったお話なんですけど……」

「あ、皆で遊びに行けたらってお話ですね。それじゃ、次の休日なんてどうでしょう。弓塚さん、何かリクエストありますか？」

「え　　っと、じゃあ遊園地なんてどうですか？」

「あ、いいですね、それ」

「お、いいじゃん！俺もつきあおっかな」

俺の目の前で仲のよい会話が広がっていった。その内容から気心知れた会話のようにも聞こえる。けれど、うどんを啜りながら疑問を呈する。

「二人とも、この先輩と知り合いなんだ……」

ポツリと零した俺の言葉に、空白が降り立った。女性と話していた二人は怪訝そうな顔つきで俺を見る。

「何言ってるんだ遠野？」

「前から皆でこうしてお昼食べてたじゃない」

しかし、二人の返した言葉に疑念が高まる。

前から？皆で？

不確かなわだかまりが生じる。

そんな記憶、俺にはない。

本当に、この人が誰か全く覚えていない。

いや、それどころか今まで会ったような事も

「ひどいです遠野君!!」

声高々に信じられないと叫ぶ女性。思考が掻き消された。

「確かに引越しかたで疲れているのは分かりますけど」
「何で、引越しの事まで」

不安感が増していく。

なんだ、この感じは。

「遠野君がこの前自分で仰ってたじゃないですか」
「そ、そうでしたっけ？」

知らない。そんな事。俺は知らない。

「昨日だって窓から手を振ったのにポーっとして」
「い、いや……あれは」

二の句も告げられない。間断なしに言葉をかけられ質問も出来ない。頭がこの人の対応で一杯になる。でも違和感は拭えず。

「もしかして……私のこと、忘れちゃったんですか？」

迫る瞳が、俺の目を見る。

自然に俺はその瞳以外、見えなくなつて。

。

「……すみません、忘れちゃったみたいです。シエル先輩」

不意に、何もかもが、消えた。

そして、すとん、と其処に入り込む。

「そっか、シエル先輩だった。何で忘れてたんだ……？」

そうだった。

この人はシエル先輩。俺たちとは仲がよくて、何かとあれば一緒にいた人だった。面倒見もよくて、俺たちは何回も頼ってばかりだった。そんな先輩の事を忘れたなんて、どうかしてる。

『えー……続きまして、殺人事件の続報です』

疑問も消えてスッキリとした思考の空白に、その情報は歪みなくすつと耳に滑り込んだ。

『本日早朝、河川敷で一連の連続殺人と思われる死体が発見されました。発見された死体は死後三日経過しており……警察では付近の住民に』

思わず、聞き入ってしまう。

「あー、例の吸血事件ですね。遠野君もやっぱり気になります?」
「いえ、それほどの事じゃないんです……」

でも、この三咲町でこんな事件が起り続けているとは。琥珀さんも今朝この事件について言っていたけど、本当にこの話は遠くで近い事件だと思う。同じ街で起こっているというのに、俺は昨日まで知らなくて、それほどの関心なんて聞いた当初は持っていなかった。

だけどころやって絶え間なくこの話を耳にしていると、否応なく意識してしまう。

テレビのほうに意識を戻すと、この事件に対する憶測や犯人像の予想などが立てられていたが、どれもこれもが当たり障りもない情報にくせに、それが真実であると真面目くさって語っていた。それがどうにも滑稽で、俺は何だか馬鹿らしくなり、伸びきる前にうどんを啜りきる事にしたのだった。

そんな俺を、何故か弓塚さんは暫く見続けていた。

放課後。何となく俺は教室の中に留まっていた。理由らしき理由は見当たらない。強いて言うなら気分としか言いようがない。座りながら窓の向こうからは校門を潜って家路に着く生徒たちの姿が見えた。最近この辺りも物騒な事になっているらしいので、俺も早々にその中に入らなければならぬのだが、果たしてそのようには気分が乗らない。どうにもあの家に帰るにはまだ抵抗があるらしい、と俺はあてっずっぱうな理由をこしらえた。

無視できない、空白を感じる。

右手をズボンに潜り込ませ、その中に入っている鉄の塊を握りしめながら、もう片方の手は俺の胸を抑えていた。

それだけで、虚ろが消えるとは思わない。

でも、抑えずには、いらなかった。

少しばかり夕日が傾いている。季節から考えてもやっぱり夕暮れが早くなっているようだった。生徒たちの姿も橙に吞まれていた。

そろそろ、帰らなくてはならないだろう、か。

有耶無耶な抵抗感で帰らないなんて、馬鹿げているか。

まばらな生徒の影に追隨するような形で席を立つ。黒板の上に付けられた時計を見れば、先ほど帰りたいと思えない理由を探っていた時間から長針は殆ど変わっていなかった。どうにも俺は適当だった。

「あの、遠野君」

階段を降り下駄箱に差し掛かると、そこには弓塚さんの姿があった。

弓塚さんは俺を見かけると、顔を綻ばせた。

「弓塚さん……」

「帰り道が同じだから、その、もしよかったら……」

そう言えば帰りの方向が同じと、弓塚さんは昨日言っていた。ならば、そのまま一緒に帰る事もありえるかと思い、了承すると、弓塚さんは凄く嬉しそうにしていた。

残り少ない生徒たちがすれ違う俺たちを見ながら「おっと、遂にさつきに転機がっ」「いや、相手は遠野だぞっ、弓塚の戦力では苦戦必須だ」「まあ、確かにそうではあるが」「しかし、自体が好転した事は確かだな。ここは周りから固めていくのがベストだろう」と好き勝手に言っているが、無視する事にした。しかし、なんで見ず知らずの生徒、それこそ明らかに後輩の人間にそんな事を言われるのかは激しく謎だった。

靴を履いて、俺たちは並んで家路を進んでいった。外の空気は少しだけ寒いと思った。暮れなずむ斜陽に照らされ、俺と弓塚さんは町の中を歩きながら他愛も無い話を続けていた。

「今日、実はお父さんが誕生日なんだ」

何気ない言葉に喜びを交えて弓塚さんは言った。

「それで、今夜家族でセンチュリーホテルに泊まってレストランで食事をするの」

「へえ……いいね」

「そこってよく雑誌にも載ってるところでね、とってもおいしいイタリアンのお店なんだけど」

本当に弓塚さんは楽しそうに、明るく話していた。

俺の詰まらない対応にも嫌な顔せず、むしろ嬉しそうに。

まるで、それが無理矢理そのように自分を震わせているようにも見えた。

それが気になって、ほつと置いて置けなくなって、俺は今までの流れも全部断ち切る。それが、ただの興味本位であることは否定の仕様もない。でも、ナニカの影に取り付かれたような弓塚さんを放っておく事が、俺には出来なかった。

「あのさ、弓塚さん」

「なに？遠野君」

住宅街に入り込んで、俺たちは分かれ道に差し掛かっていた。聞けばここまでの道が同じなのだという。という事は、これ以上先は一緒に帰れない。聞くなら今しかない。

「今日、どうしたの？何だか落ち着きがないって言うか、拳動が不審と言うつかさ」

まるで、怯えているみたいだ。

「……やだな、遠野君。そんな訳、ないじゃない」

俺は、弓塚さんの影が増した瞳を見逃さなかった。

揺れる視線に内包された、確かなぐらつき。

「もしかして、今日言ってた幽霊関係？」

幽霊の言葉に、一瞬だけ弓塚さんの体が硬直した。分かりやすい反応。だけど、それだけ弓塚さんにとって無視できない事である、と同時に感じとった。

俺たちは、自然に立ち止まった。人気のない道の真ん中で、弓塚さんは俯いて、俺はその前に回りこみながら、弓塚さんの姿を見つめ続けた。

「……遠野君ってさ」

静かに、躊躇うように弓塚さんは語りだした。

「幽霊って、信じてる？」

「……今まで見た事がないから、なんとも言えないけれど。多分いないんじゃないかな」

「そう。私もそう思ってる。今まで見た事ないから、そんなのいな
いって思ってた。でも、それは分かってなかったからだっただ。
どこか、胸の中でそんなのがいるはずないって思い込んでるのに、
それをどこかで見ているんじゃないかって信じてる自分もいたりして」

「それは……」

「御伽噺みたいなものってさ、現実にはないものだって分かってる
はずなのに、期待したりするんだ。白馬の王子様が助けに来てくれ
るような、そんな有り得ないような事。それと同じ事だって、昨日
気付いたんだ。私がそれを心のどこかで信じてるから、それが出て
くるんだって」

ぼつぼつと語る弓塚さんの肩は、震えていた。

「昨日、私ね。帰り道の途中で、遠野君を見かけたんだ」

「え……？」

「昨日の、大体六時ぐらいかな。その時に」

「いや、俺はその時間には家に戻ってたから、多分……」

「気のせい。そうだよな、やっぱり。……昨日、私学校から帰るのが少し遅くなって、一人で帰ってたんだ」

どこか納得をしたような吐息が聞こえる。

「先生の手伝いで、もう暗くなってきちゃったんだけど、その時に私遠野君に似たような人を見つけ、思わず追いかけたんだ。でもその人はちらっとしか見えなくて、追いつこうと思っても全然追いつけなくて。そうやってる間にあっちの繁華街の方についたの」

「……うん」

昨日、俺は真っ直ぐ家に帰った。繁華街のほうには、行ってない。

「繁華街でもその人は見えているのに届かなくて、どんどん進んでいくんだ。私、その時になってその人が遠野君なのかって、少しだけ思ってたんだけど、どうしても気になって。そしたら、その人大通りを曲がって路地裏の方に入っていったんだ、それで……」

「それで？」

「それで、私迷ったんだけど、でも本当に遠野君だったらと思って追っていかうと思った。でも、その時に」

「うん」

「何か、私の横を、通り過ぎた」

俯いたままの弓塚さんの表情は見えない。弓塚さんは体だけではなく、声まで震えていた。

「その時、なんて言うんだろ。今まで感じたこともないような、寒気、みたいなものを感じて、驚いて周りを探してみただけど、何もいかなかったんだ」

「寒気？それに、いなかったって」

「うん。凄く、寒いような。おつきな氷を背中に入れたような、体中が冷たくなるような感じがあった。危ないものを目の前に突き付けられて、それを見て嫌になるような。上手くいえないような、怖さがあった。私、だから急に怖くなって、それを探してみただけど、全然見当たらずに、急いで帰ったんだ」

「でも、弓塚さんは、見たんだ」

「黒っぽい何か。それが、見えた」

でもそれが何なのか良く分からなくて、弓塚さんは怖くなったと言っ

「それで幽霊、か」

「うん。……遠野君は、私の話、信じてくれる？」

見上げるように、弓塚さんは少しだけ顔を上げて、俺を見た。

その視線は、不安に震えていた。その瞳を見て、俺は弓塚さんが嘘を言っていないと、漠然に考えた。

そんな弓塚さんを、放ってはおけなかった。

「信じるよ」

「え？」

一瞬の空白。弓塚さんは俺が何を言っているのか理解できないような表情。

「俺は、弓塚さんの話を信じる」

「え、でも、……どうして？」

「だって、弓塚さんは、嘘をつかないって。何となく思ったから」

安っぽい言葉。そんな言葉しか、俺はかけられない。もっと上手い言葉があるんだろうけど、そんなかつこつけた言葉が思い浮かばなかった。無様だった。

「そっか」

でも。

「遠野君」

弓塚さんは。

「ありがとう」

そんな俺に、笑ってくれた。

酷く安心したような、子供が投げ所を見つけたような、混じり気のない、純真の笑み。それは優しい彼女には相応しい気がするような、笑顔だった。夕暮れの柔らかな光と混じって、それは一枚の絵になるような姿だった。

「その、上手く言えないけれど、弓塚さんには元気でいて欲しいからさ。俺でよければ話も聞く、出来る限りでいいから」

果たして俺は踏み込んでいいのかと、これ以上弓塚さんの中に入り込むには、躊躇いを覚えた。だから、聞くだけだ、と予防線を引く。俺は、卑怯だ。

「それだけで、いい。それで、私は充分だから」

ありがとう。

と弓塚さんの口元から零れてくる感謝の言葉。

「この話、本当は色々な人に話したんだ。お父さんにも、お母さんにも。でも誰も、私の話信じてくれなくて、笑ってた。それが、何

だか寂しくなつて、私」

誰もまともに取り合つてくれなくて、理不尽と理解者の得られなかった弓塚さんの孤独を感じた。それを何とかしたいと思つたけれど、俺には言葉をかけることしか出来なかった。

「でも、遠野君は凄いな」

「え？」

「私の事、助けてくれたから」

「……そんな、事」

弓塚さんの言葉に申し訳ない気持ちとなる。

俺は、そんな人間ではない。

「ううん。私がそう思うから、そうなんだよ。私が思いたいから、そういう事にしておいてよ」

明るいい口ぶりに、これではどちらが励ましていたのか分からないと、少しだけ可笑しくなった。

そんな俺に、弓塚さんも釣られて微笑んだ。

そう言えば、弓塚さんとこんなに話すのは初めての事だった。

改めて意識すると、この状況はかなり不思議な感じがした。

今までこんな事なかったのに、弓塚さんと話し合っている。いつもなら必ず有彦がいた。有彦が調子の良い様な事を言って、それに俺が振り回されて、弓塚さんがそれを見て反応する。そんな関係だった。でも有彦もいない今、俺はこの慣れない筈の空気にキマズクなるどころか、すっかりこの空気に馴染んでいた。

そして気付く。

こんなにも、真っ直ぐに弓塚さんを見たのは、初めてだった。

「うん、遠野君に話したらスッキリしたな」

「そっか、それは嬉しいな」

もう其処には、俺の知っている弓塚さんがいた。

「また何かあつたら聞くよ」

「優しいね、遠野君」

少し話しすぎたかもしれない。夕焼けは眩しさを潜め、空には黒色の夜が訪れ始めていた。それが混濁となって、藍色が見える。それはどこか不可思議な印象を俺に与えた。

「それじゃ、弓塚さん。また学校で」

そろそろ帰らないと、秋葉に何を言われるか分からない。門限の時間にはまだなっていないと思うが、あまり遅すぎても良い顔をしていないのは見なくても分かる。なんか、秋葉はそっという雰囲気を持っていると確信はしている。

だから、帰らないといけない。

「……」

だけど弓塚さんから、声が返ってこない。

そして、見た。

弓塚さんは、固まっていた。

「弓塚、さん？」

呼びかける。でも、弓塚さんは固まったまま、目を限界に広げていた。

まるで、何か恐ろしいものにも出会ったかのように、俺の肩越しの向こう、後ろを見ている。

それに気付いた俺は、急いで後ろに振り向く。この先に、何がいるのかと。

「つ……！」

橙に照らされて、影の暗がりが強まる斜陽の中、俺の視線の向こうに、それはいた。

和装の人間だった。

藍色の着流しに、下は白い七分丈。

着流しは、どういいうわけか俺から見て右側の袖が垂れ下がって

て、緩やかにたなびいている。

左側の腰には黒い色の鞘、日本刀らしきものが佩かれている。

ざんばらに伸ばされたかのような黒髪からは、顔の全貌が見えない。距離が開いているのもあるだろう。

でも、その髪の間隙から、夕闇と黒髪に紛れても、それはハッキリと、見えた。

蒼い、瞳。

虚空を思わすような、深い蒼の色。

それは光すら放つように、蒼く輝いていた。

その姿は影に暈されたように、茫洋。

輪郭は曖昧。幻影のように霞んだ姿。

でも、それは、確かにそこにいた。

幽霊が、そこにいた。

「う、あ、あああ………」

弓塚さんの、力なき悲鳴が頭の後方から聞こえる。

何だ、アレは。

声を張り上げたかった。

全身に蟲たちが這いずり回るような気持ち悪さを感じる。

腹の奥底から、胃液がこみ上げてくる。

口の中に苦味が広がった。

。

死。

それを見つけて、俺たちは意識がそれに飲み込まれていた。

首。

着流しから覗く、尋常ではない引き締められ方をした右腕。

人の頭部。

生首を、それは右手に掴んでいた。

彼らは、逢い見^{まみ}えた。

決して語られるべきではない、物語の始まり。
葬られるべき、彼岸の断章。

第三話 反転衝動？（後書き）

試験的こんな時間投稿。

少し間隔空けるとモチベーションの上がない六です。

いや、難産の良い訳が欲しかったのです。最近めつきり寒くなりましたが、私は見事にやられている感じです。外に出て頭痛や気だるさなど、体調を崩し、家に帰れば直ぐに寝て、限界まで眠る事で体調を回復させて、そして、また外に出て体調がおかしくなるなんて事を繰り返しています。そんな訳で投稿が遅れました。恐らく荒耶の太極螺旋に囚われているのでしょう。皆様も体調には置きをつけて。

それと、誤字脱字のチエックが全然進まないのも、もしよろしければ皆様教えていただきませんか。私自身どこにあるのかサッパリです。怠慢だとは自覚しているのですが、何卒ご協力願いたく。

それでは、また。

第四話 反転衝動 ? (前書き)

第四話 反転衝動？

闇色が増す。

冷たい夜が差し込む。忍び寄る夜の気配は深さを増し、空に広がる藍色の闇には一つ二つと小さな星が瞬いて、太陽は町の向こうに殆どその姿を消していた。街路地は疎らながらも道を歩く人がいて、その景色の合わりは普段俺が見慣れた、それでいて心安らかなる光景であった。視界の端に映るそれは、あまりに普段通りで何事もないかのようにだった。

「　　」

だが、視線の先にある存在が、その風景を侵している。そして俺はそれ以外の事柄がモノクロのような色合いを成しているような錯覚を覚えていた。だが、目は閉じられない。目を閉じれば、きっと何かが終わる。

異様。

それ以外の言葉が見当たらないような、男だった。

藍色の着流しと、白い七分丈をはいた男。俺たちとの距離は二十メートル弱か。そこからでも男の異様さが理解できる。細身であり、それでいてかなり背が高い。少なくとも俺よりも頭一つ分以上は確実。

「……」

すれ違つ人々の話し声。

それは静々と、すり足のよう歩いてくる。こちらに向かつて。

男は裸足だった。この舗装された道を歩む事と、季節的には考えられない。物乞いとは考えもしなかった。このような男が物乞いのような存在ではない事が、俺の細胞の一片までもが警告音と共に知らせてくる。もっと逸脱したような、何か。

男が近づくと、その姿がよく見えた。

ひらめく袖。それは中身が無いからだ。男は左腕が存在していなかった。もしかしたら着流しの中に左腕を仕舞っているのかもしれない、とは思えなかった。肩口からはためく藍の布はあまりに不自然すぎて、それが左腕の有無を裏付けた。

着流しから僅かに覗く男の素肌は、恐れすら抱くほど鍛えられ、暴力的にそれが引き絞られていて、その肌は幾重もの傷跡が這いつつていた。そしてその顔。

長いざんばらな黒髪の間隙には削げた頬と、そして日本刀の切っ先のような鋭い眦。その瞳は西洋人形のような蒼い瞳。人工的な造りではない、吸い込まれそうな虚空を思わす深い蒼色だった。

「あ、あ、ああ」

連れ歩く女子高生の歓声。

俺は動けなかった。

視線は近づく男のみに注がれて、それ以外がまるで見えない。

男が足を一步前に出すたび、嘔気が強くなっていく。それは嫌悪とか、一般的生活において排他されてきた感情、それが形となって俺の体を内側から侵していく。

恐怖が人間の形を現したならば、それはきつとあんな人間なのかもしれない。

だって、そうだろう。

男は人間の首を、その手に持っているのだ。

見間違いなんかじゃない。それ以外に見えようが無い。

根こそぎ食い千切られたような断面から頸椎と、でろんと力なくぶら下がる気道の繊維。開かれた口から、舌が垂れていた。妙な鮮やかささえある生首が、人間の成れの果てだと俺に認識を叩きつける。でも、その顔は見えなかった。確認するよりも先に生理的嫌悪や恐怖が俺を絡め取り、首を見させない。そしてそれを俺は心底ありがたいと思った表情を確認したら、きつと俺は駄目になる。そのようなモノ、明確な死なんて視たくはない。

乾いた革靴の足音。

「人、殺し」

最近耳にした連続殺人のフレーズが脳内を駆け巡った。

これは、夢だ。

漠然と、己の理性が訴える。

こんな状況、ありえるはずがないと。

でも、そんな理性の無駄な足掻きを嘲うかのように、男は近づいてくる。夢幻に現れる陽炎のような男は、その手に首を持ち、どんどんと近づいてくる。

その異様な男の存在はあまりに強烈で、これが夢ではないと無理矢理俺を納得させていく。

雑音。

考える。考えるんだ遠野志貴。

この訳の分からぬ状況を脱却するために、考えるんだ。そして気付き、閃け。それこそが。

見つける。それが。

無意識な思考回路の囁きはおかしなモノだった。

何せ聞いたことも無いような声すら聞こえるのだ。

知らない。こんな、子供の無機質な声音、知るはずが無い。

どつやら混乱は妄想すら幻聴すら生み出すらしい。

でも、狂乱ではなかった事を今は感謝する。

注視。

観察。

監視。

見ろ。

観ろ。

視ろ。

みろ。

ミロ。

そして。

人々の話し声。

「え」

この状況のあまりな不自然さに、俺は言葉を失った。

なんだ、これは。

俺たちは、今。生首を持った男の近づいてくる道路にいる。

男の存在自体異様で、そんな男が生首を持っているのだ。

なのに。

なのに。

なのに、なんで。

男に注がれた意識を剥がして、辺りを見渡す。

行き交う人々。人の数は決して多くはない。

帰宅途中の女子高生。

サラリーマン風の大人。

中身の一杯詰まったビニール袋を持った女性。

携帯で話している若者。

周りは、何でこんなにも、普通なんだ。

見える景色は、いつも通りの穏やかなものだった。普通、こんな存在がいれば嫌でも目に付く。離そうと思えば思うほどに。しかも、男は生首を持っているのだ。真贋及ばずその首は注目を浴びる材料でしかない。そして悲鳴が上がる。日本はそんな国だ、平和だからこそ、異常に敏感。

でも、これは一体なんだ。

混乱も、騒乱もない。

それどころか、これはまるで。

「気付いて、いない？」

よく視えたな、手前。

それは、擦り合わさる金属のような音だった。

空気を切り裂くような、金属の軋みにも似た音。

「な、あ？」

それが声だと気付くのに、少しの時間が必要だった。

『なんだあ？珍しい奴がいると思ったが、いかんせん見栄えのしねえ奴らじゃねえか』

近づいてくるその声は、男の声ではなかった。

前髪に口元は隠されていない。口は全く動いていなかった。

鋭い眦に蒼い瞳。その全てを映し出すような瞳は、俺を見ていない。

無表情。感情も、ひよっとして人格すら存在しないような、まるで人形の形相。

だけど、その声は聞こえる。

まるで天上から注ぐような、地面から響くような。あるいは、空間を犯すような、声。

『まあ、いいさ。んなこたあどうでもいいさ。こいつだって興味も糞もねえ』

不自然な声は、俺の脳を浸食する。

この夢だと思ひ込みたい状況を、更に悪化させていく。

そして、状況の変化は、それだけではなかった。

「 「

ちらちら。

さらさらと、男の掴む首が崩れていく。

それはまるで積もる埃のようなきめ細かさで、あるいは残滓のような脆さで消えていく。首から始まりそれは顔まで崩し、更には髪まで消えてなくなっていく。

なんだ、これは。

まるで粒子のように消えていく首。

首が、消える？

そんな、莫迦な。

そんなこと、ありえるはずが無い。

理解が、追いつかない。

なんだ、これは。

骨まで消し飛んで、首は幻のように消えていった。

そしてそこには、何も残らない。

なんだ、これは。

「そう、か」

そうだ、そうだよ。

とつとつ俺は理解した。

きつとこれは。。。

『夢、だといいなあ？』

出来の悪い悪夢に決まっている。

そう言葉にしようとして、その声はそれを許さなかった。

逃避は許さない、と何処からか聞こえてくる声が俺を否定する。

さつきから支離滅裂だ。自分が何を考えているのか、まるで分か

らない。

「うっ
」

後方から弓塚さんの呻きが聞こえ、咄嗟に後ろにいる弓塚さんへと振り向く。弓塚さんは口元に手を当てていた。背中を丸めて吐き気を堪えている。体は震えて、今にも倒れてしまいそうなほど顔は蒼白。なのに、その目は近づいてくる男を見ていた。瞳は揺れて、呼吸は荒く。それでも弓塚さんは男から視線を逸らす事が出来ない。囚われている。突然訪れた事態に思考は落ち着かない。俺が果たして先ほどまで何を思っていたかすらも、混濁に突如として浮上しては消えていった。

顔色悪く、今にも崩れ落ちてしまいそうな体。こんな弓塚さんを、俺は見たことが無い。いや、こんな状態の人を俺は今まで見たことが無かった。出来れば、こんな状況に遭遇したいとは思っていないかった。

逃げ出したい。こんな事、こんな場面、夢でしかないのだと自分に言い聞かせようと無駄だとは分かっていた。でも。

「とおの、くん」

弱りきった弓塚さん。怯え、震え、途切れる声音にいつもの朗らかさなど無かった。こんな弓塚さんを置いて逃げるなんて、出来るはずがない。

だけど、そんな俺の強がりなど嘲うかのように。

男の姿が、加速した。

俺たちに向かって、真っ直ぐに。

「あ、ああああ」

喉から微かに空気が漏れる。悲鳴にもならぬ叫び声だった。

殺される。

ぞわり、と。意識が、白熱した。

殺される。俺は、俺たちは殺される。

認識よりも先に、俺は理解した。

男は迫る。

殺される。理不尽だ。本当に、理不尽だと瞬間に思えた。

こんな訳も分からない、唐突な事で。

殺される。目の前の男は恐怖だった。

恐怖が形を成した人間だった。

人殺し。

そんな存在が俺たちの目の前にいる。

それが俺たちを殺そうと迫ってくる。

何も出来ない。何も、出来なくなる。

死。

そして。

男の腕が、眼球の直前にあった。

眼鏡に触れるか触れないかの辺りで、そのまま俺を潰そうとしていた鉤爪状の五指は、不自然に固まっていた。

『運、いいなあ。手前ら』

どこからか声が聞こえる。

それを遠くに聞きながら、俺は腕を伸ばしてきていた男を見ていた。

蒼に俺の姿が映る。

黒髪の隙間から見える深い蒼の瞳。それが俺を、見ている。

視線が、絡む。

感情も見えない瞳の色を不気味に感じながらも、俺は素朴にもこんな状況でありながら綺麗だと思った。恐怖のあまり頭がおかしくなったのだろう。

でも、それは本当に僅かな時間で、数えてみても一秒にも満たな

い瞬間の事だった。男はあらぬ方向に顔を向けた。俺でもない、弓塚さんでもない、どこかを見ている。

その方向は　　。

男の姿が、掻き消えた。

どういうことか、其れを俺は視る事が出来なかった。

視認することも出来ず、あの圧力さえも連れて、男は嘘のように消え去った。

気付けば、息が苦しくなっていた。呼吸が止まっていた。

「つかは、あが　　つく」

思い切り息を吸い、胸を抱く。内容物を吐き出さないだけよかった。周囲の人が怪訝そうな顔で俺を見ている。助けてくれる事もしてくれないのか。

「遠野君。だい、じょうぶ？」

でも、弓塚さんはそんな俺にも優しい。本人だって辛いはずなのに、こんなにも。

「あ、ああ。大丈夫だよ」

顔を歪める弓塚さんに曖昧な苦笑を返しながらも、苦しみに紛れた胸の痛みに俺は戸惑いを覚えていた。

だけど、痛いとは少し違う。でも、そう表現するほか無いような

言葉を許されるなら、切ないとさえ思えるような、そんな痛みだった。

弓塚さんを家まで送り届けた後、俺は遠野の屋敷に帰った。弓塚さんを一人で家に帰すには、弓塚さんは焦燥しすぎていたし、俺自身出来る限りでいいから誰かといたかった。別れ際に俺たちは微妙な空気を共有していた。今日起こった事柄、出会った男の存在。それらが思考から離れない。

「遠野君……」

玄関に入る事もなく、ただ俺を見る弓塚さん。苦しげに揺れる弓塚さんの瞳を、俺は解きほぐす術を持たない。俺だって状況を把握できていないのだ。気安い慰めの言葉、あるいは気遣い、そんなちやちな言葉で、果たしてどうにかなるのだろうか。結局、それ以上の言葉を俺たちは持っていなかった。

既に夕焼けは地平に沈んでいた。頭上には幾つかの星、そして月がぶら下がっていた。街灯の点いた道を歩き、遠野の家まで辿り着く。門限には間に合っていたが、それでもギリギリの時間。

「お帰りなさいませ、志貴様」

門の前には翡翠の姿があった。翡翠は俺に対して一礼した後「お荷物をお預かりします」とその手を伸ばしてきた。

女の子に荷物を持たせるなんてとんでもない、と俺は断つたのだが、

「……」
「……」

翡翠は逡巡の後に無言の圧力を強めるばかりで動こうともしなかった。困っているような、そんな視線。気まずい雰囲気は横たわり、其れをどうする事もできない俺は結局苦笑気味に翡翠へ学生鞆を渡すのだった。

「あの」

ロビーを横切り、自分の部屋に入ろうとして、翡翠に呼び止められた。

「志貴様、その。何か、不手際がありましたか？」

「え？」

ドアを開けかけたままの状態で振り向く。そこには少し不安げな表情を表す翡翠の姿があった。しかし、俺は翡翠の発言が唐突過ぎ一体何のことを言っているのかサツパリ分からなかった。

「えっと、どうしてだ翡翠」

「……その」

躊躇いを混じらせて翡翠は言う。

「あまり志貴様のお顔が優れていないご様子なので……、私が何かしたのではないかと」

自覚していなかった。そんなに俺は、顔に出ていたのだろうか。

「いや、翡翠のせいじゃないよ。ただ、ちょっと気分が悪くて」

「そうですか。……あの、もしかして体調の方も」

「それも平気。うん、大丈夫だよ、貧血も起きてない」

「よろしければ姉さんをお呼びしますが」

「平気だつてば。と言つか何で琥珀さん？」

俺の体調と琥珀さんの存在はリンクしないはず。

「姉さんは薬剤師の資格を持っていて、薬の方にも精通しています。もしお体の調子がよろしくなかつたら直ぐにでも姉さんをお呼びいたします」

「へー、そうなんだ」

意外だと思った。琥珀さんにそんな一面があるなんて。

「でも、大丈夫だから。少し部屋で休んで。夕飯の時間になつたら呼んでよ」

「……分かりました。では、後ほどお呼びいたします」

もの言いたげな翡翠の視線を振り切つて、部屋の中に入り込む。相変わらず大きなベッドに倒れこんで、亡、と目を閉じる。

今日遭遇したアレが、幻覚だなんて、思いはしなかった。

何より、俺のほかにもあの場所には弓塚さんがいた。その弓塚さんが怯えていたのだから、アレが夢幻とは考えにくい。お互いに光化学スモッグのような脳に何らかの影響を与えるものにやられていたのなら、また話は別だろうが、今日そんなものは無かった。それにあの恐れや不自然さは、悪夢にしては良く出来すぎている。

思考は潜る。

目蓋の裏にはあの男の姿。

あの亡霊にも似た人殺し。でも、その首は消えて、しかも変な声まで聞こえてきた。金属を擦り合わせる不快な軋みの音。

そして何よりも不可解な事は、その状況が目前であつたというのに、それに俺たち以外の誰も気付いていなかった事。あの場所には少なくとも数の人たちがいた。その人たちが、誰一人として騒いでもいなかった。あれは、まるであの男が存在していなかったような

「……」

でも、それ以上の思考は続かない。続かないと言うか、進まない。行き止まりに突き当たってしまった感覚。何か刺激を与えようにも、これ以上の事は見つからない。それに、こんな話、人に言っても信じてもらえるかどうか。

「ああ、そうか」

俺自身が信じていないのに、こんな夢物語にもならない話を誰かに言っても誰も聞いてくれはしないだろう。こんな気持ち、誰からも理解されない気持ちを、弓塚さんも。

正解の得られない問答。ヒントも出現しない疑問。

結局、不安材料ばかりの思考は長続きしない。

打ち消す。

「でも、あの時……」

なんで、俺は。

あいつを見て。

。

そう言えば、思い出す。

あの男は、なんで学校の方向を見ていたのだろう。

「兄さん？お食べにならないのですか？」

食事の準備が出来たと、部屋に再び尋ねた翡翠に促され、俺はリビングというか食堂に辿り着き、冗談のように長いテーブルに腰掛けた。今日の夕食は洋風の造りとなっていて上品な見かけと匂いは食欲をそそると思う。琥珀さんが丹精に造ったのだから。でも。

「もし、あまりご気分が優れていないなら……」

秋葉の言葉に曖昧な笑みで濁す。

改めて、夕食を見る。彩り鮮やかな料理の並びは視覚でも料理を楽しませてくれるような工夫が凝らされてあった。それを見て、とても不味いなんて思えない。

だが。

「……」

それらを見ても、食欲がそそられない。

口を開いてみる。其れと同時に。

あの生首が目の前に現れた。

「っく」

吐き気を催しながらも、琥珀さんに申し訳ないから食べようとして、結局殆ど口に出来なかった。

分かっている。生首なんて、ここにはない。

でも、記憶の中にいる男が持った生首は、絶えず胃袋を苛んだ。

「大丈夫ですか、兄さん？顔色が……」

「ああ。……ごめん、あんまり食欲わかなくて」

「翡翠から聞いていますが、まだ体のお加減が優れないのですか？あまり無理をしないでくださいよ」

「ああ。……琥珀さんも、食べれなくてごめん。凄くおいしそうだけど、体が」

本当に申し訳ない。折角造ってくれたのに、全く食べる事も出来ない俺は、琥珀に頭を下げた。

「いえいえ、お気になさらず。でも、もし胃の調子がよろしくないのなら薬をお持ちしますが?」

「そうだな……折角だから、頼めるかな?」

薬で治るものではないと分かってはいたが、でも琥珀さんの好意を無下には出来なかった。自身の我儘で料理を食べないのだから、其れぐらいはするべきだろう。

「わかりました。それでは夕食が済み次第調査しますので、お部屋にお持ちしますね」

そうだった。翡翠も言っていたが、琥珀さんは薬剤師の資格を持っているのだ。なら自分で薬を調合するぐらい朝飯前だろう。夕食なのに朝飯前というなかなかおかしな発想に内心首をかしげながらも、了承の意をとった。

「……」

部屋に戻って後、俺は琥珀さんが部屋にやってくるのを待っていた。夕食を済まし、風呂に入った後の事だ。十時にはまだ早い。部屋の外に出ているも良かったのだろうが、何故だろう、そんな気分になれない。だから大人しく琥珀さんを待っている事にした。

しかし、部屋でやる事はない。部屋の中には娯楽になるようなものはないし、そもそも物自体少ない。俺の所持品が少ないのもあるだろう。だから課題とかをやればよかったのだろうが、それもやる気になれない。あまりに今日の事がシヨックだったからだろうか。この無気力にも似た遣る瀬無さを俺は持て余していた。

ベッドに腰掛けて、何となくそのまま俯く。

何も考えられなかったし、何も考えたくなかった。

「志貴さん。いらっしやいますかー？お薬お持ちいたしましたよー」

ドアを叩く乾いた音が軽く響く。琥珀さんの声。

「いるよ、琥珀さん」

部屋の中に入り込んで、琥珀さんは部屋の中に備え付けられていたイス一脚をベッドの横に持ってきた。俺が対応するべきなんだろうけれど、琥珀さんの動きの自然さにそれも忘れていたのだ。

「さてさて、それでは志貴さん。お薬を持ってきましたけれど、より詳しく知るために幾つか問診をさせていただきますけれど、よろしいですか？」

「うん。お願いします」

「さて、それでは」

それから幾つかの質問があった。体の状態、気分の確認を始め、具体的に何処に違和感があって、何処がいつも通りなのか。更には瞳孔の確認なんて、本当に医者のような対応を琥珀さんは展開し、いつしか俺は琥珀さんのペースに任せているままになっていた。

「さて、それでは最後にですが、今日は最後に何を食べましたか」

「えっと、昼にうどんを一杯、ぐらいかな」

「なかなか消化の良いものですねえ。おなか空いたりしませんか？」

「小腹が空いたぐらいだけど、別にそこまででは」

「なるほどー……。別に体調的には問題ないようですよ、食べたも

のに問題もない。更にはどこが明確におかしいのかも曖昧です。むむむー、困りましたねーこれは」

傍目には困っているなさそうな声音だった。

そして、思考の最中に琥珀さんは俺を見た。何だろう、きゅぴーんとした感じで。

「もうこれはあれですね。面倒なのでお注射した方がよろしいですかね」

「え、そうなの、てか今面倒って」

「はい、ここは琥珀特性のお注射でズバツと解決ですっ」

すると琥珀さんは懐に手を突っ込み、次の瞬間その手には注射器が握られていた。しかし、

「それ、明らかに普通じゃないですよね」

だって、容器の中の液体が紫色ってどういう事だ。

戦慄する俺を尻目に状況はどんどんと進んでいく。

「大丈夫ですよ、辛いのは最初だけで次第に痛いつて事も忘れてしまえますよ」

「いやいや、其れ大丈夫じゃないでしょ」

「そうですか？実験ではそんな感じな雰囲気だったのですが、まあいいじゃないですか。あんまり深く考えちゃ頭痛くなっちゃいます。ここは私に全部任せて」

琥珀さんの笑みが迫力を伴う。じりじりと近づいてくる琥珀さん

の張り付いたような笑みは、ハッキリと怖い。

やる、琥珀さんは、やるっ。

「ここは任せちゃ駄目な気がするんだけどっ」

「まあまあ。ここはバシツと一発元気に逝ってみましょう!」

「いや、ちょ、琥珀さん……っ」

徐々に迫る琥珀さんに後ずさりし、思わず目を瞑ってしまった。
琥珀さんを無理に突き飛ばすなんて出来ない。

そして。

「なーんて、嘘に決まっていますよ志貴さん」

「……っへ?」

その言葉に目を開くと、そこには悪戯っぽく笑っている琥珀さんの姿があった。

もしかして、悪ふざけ?

「嫌ですよ、志貴さんにわざわざそんな事するわけ無いじゃないですかー」

口元に着物の袖を当てて笑う琥珀さんに、憤りも戸惑いも感じる事もできず、脱力。いつの間にもやら先ほどまでその手に握られていた注射器が消えていた。恐らく着物の懐に仕舞われているのだろう。

「……あのね、琥珀さん」

「あはっ」

笑って済まさない。

しかし。

「でも志貴さん。すこし顔色良くなりましたねえ」

琥珀さんの言葉に、はたと気付く。俺は今、少しだけ気分が良くなっていた。琥珀さんと話をしているうちに、少しだけ暗闇が晴れたような感覚があった。もしかして琥珀さんは、これを考えて。

じつと琥珀さんを見つめる。

「熱い志貴さんの視線、さては私にホの字になりましたか？」

……本当にそうだったのだろうか？

でも、こんな遣り取りは悪くない。むしろ良い。

緊張感も無い遣り取り、これは凄く慣れ親しんだ、日常の匂い。

ああ、そうか。

これか。

これが俺の側に先ほどまで、無かったのだ。日常。俺のいる、そして俺の望む日常。俺はこの日常を大切だと当たり前のように甘受していながら、実のところちゃんとそれを気付いていなかった。日常を、今日あんなのと遭遇して、見失いかけていたのだ。

「でも、志貴さん今日はどうかしたのですか？もしかして何か学校であったのですか？」

そして、俺は琥珀さんの声音に、今日の事を話してみることにした。もしかしたら馬鹿にされるかもしれない。信じてもらえるだなんて思いもしない。ただ、琥珀さんに俺の話聞いて欲しいと、漠然に思った。

「実は今日、俺帰り道の途中で変なもの見たって言うか、会ったって言うか」

「はい」

話し始める俺に、琥珀さんは真剣に耳を傾けてくれた。

「それが何だか不思議で、俺たちはそれに気付いているのに、周りが全然気付いていなくて。だけど、そいつは確実にいたんだ。……」

友達はそれを幽霊と呼んでたけど、本当に幽霊みたかった」

「では幽霊なんですか？」

「いや、多分違う。あれは、いた。足もあつたし、体も透けているようには見えなかった。ちょっとぼやけている様には見えただけでも幽霊じゃないと思うそいつは、何故か人の首を持ってて」

「人の、首ですか」

「うん。首を持っていたんだけど、その首が途中から消えて、そしてら何処からか声が聞こえて、でもそいつは話してなくてそしたら男は俺に走り寄ってきて俺を殺そうとしてでもそいつは俺を殺す前にどこかに消えて あいつは、俺を殺そうとしたんだ。本当に突然に、今まであつた事もないような俺を、俺を殺そうとして。真っ直ぐに俺に向かってきて、でも俺の前で」

「志貴さん、志貴さんっ。落ち着いてくださいー！」

いつの間にか、体が震えていた。

消えかかっていた恐怖を、思い出した。俺はあの時、あの男に殺されかけたと言っ事実。人間の生首を見た嫌悪感。聞こえる金属音。全てが、理不尽だった。

「落ち着いて、ゆっくり深呼吸してください。志貴さんが見た人はここにはいませんから」

肩を抑え、琥珀さんは俺を見つめた。俺を覗き込む琥珀さん。その瞳の琥珀色に思わず魅入られていながら、今日の光景が思わず過ぎる。あの男は。

「蒼」

口から零れる。

「……え？」

「あいつは、蒼い目をしていた」

そして、何も言えなくなった。

互いに、無言。

俺は何を話しているのか分からず、そして琥珀さんは何を思っているのかすらも分からない。

室内は凍ったかのように固まり、その中で俺たちは互いを見てい

ない。俺は、あの男の幻影を見つめ、琥珀さんは俺を見つめていなかった。でも何処を見ているのか、判断がつかない。しかし、それは一瞬の事だった。

止まってしまった時間を動かしたのは、琥珀さんの声だった。

「もう、落ち着きましたか？」

琥珀さんの柔らかな声音は俺を優しく包み込んで、混在する恐怖や不安を払いのけるような、そんな力があつた。

「……ああ、ごめん。俺も、混乱していて」

それでも、怖さがなくなるわけではなかった。俺は、あの時、訳も分からず死に掛けたのだ。それが今更になって、認識が追いつくなんて。

「鎮静剤をお飲みになります？嫌な事を全部忘れる事は出来ませんが、少しでも楽になれるのならば、飲んだほうがいいと思います」

「……お願いできる、かな」

少しでもこの状態から逃れられるのならば、そんなものに頼ってもいいだろう。

すると、琥珀さんは懐からオブラートに包まれた粉薬を取り出してきた。

「実は、このお薬は飲むと副作用で眠たくなっちゃうのですが、よろしいですか？」

「構わない。むしろそれでちゃんと寝れるよ。ありがとう、琥珀さん」

夜は深みを増し、星を彩る宝石は闇夜に消えた。

第四話 反転衝動？（後書き）

世間は、
とつか色々と揺れ動いていますが、
どうにも遣る瀬無いですね。

第五話 人殺の鬼？（前書き）

記憶の中、あの人は側にいた。

いつもいるわけではない。

けれど、その姿を見せたとき、前を走る　　の近くではなく、
後ろから追いかけるばかりの　　の側にいた。

第五話 人殺の鬼？

ため息ひとつで壊れてしまいそうな、張り詰めた緊張感があった。

秒針の刻む音が室内を静寂とは無縁のものとしている。ただ時を刻んでいるだけだと言うのに、歯車が起こす音はやけに良く響き、広い空間の調和を乱している。耳障りなまでに聞こえる秒針音である。

手元にある書類をつぶさに読み取る。端から端まで、丁寧に丹念に。そして必要なものを選んでいく。発案を吟味し、他の家の報告を懸案する。当主としての勤めである。

質素ながらも確かな造りをした調度品が置かれた部屋だった。秋葉の自室である。秋葉は現在遠野グループを治める立場としての仕事に従事していた。

確かに秋葉は亡くなった父に代わり当主の座に座ったが、秋葉は未だ若輩者であり、その経験も少ない。幼少期から受けていた英才教育により、会社経営などの才を花開かせているが、しかし組織の長としては未熟者でしかない。財閥組織の当主とはそんな簡単に行えるものではないのだ。一つの決断が多くの人間、または会社の命運を分けるのだ。その立場は重い。

それでも秋葉が遠野家当主、ひいては遠野グループを纏め率いていけるのは、他の者の助けがあったからこそだ。かつて遠野に滞在していたものごとくを追い出しはしたが、彼らが持つ影響力は計り知れない。そして彼らがトップである秋葉の判断の必要なものを吟味し選抜する事で、秋葉の負担を減らしている。その筆頭は久

我峰である。彼らは遠野を凌ぐ資産力を保持しており、その立場も遠野では蔑ろには出来ない。久我峰当主は仕事が出来る男である。そして食えない男であった。秋葉はその腹の中が凝固するほどドロドロなものである事も理解していた。それでも久我峰を使っているのは、その腹黒さ、えげつなさも含め彼の辣腕を認めているからだった。無論それは決して好意的ではないが。

そして今、秋葉は取り寄せた報告書を手にしていた。

内容は久我峰傘下仇川について。

『久我峰傘下仇川トップ仇川辰無は書類を改竄し、私腹を肥やしたため処理した』

要約すると、このようなもの。

しかし、それは大いに疑問である。

「あの男が？」

仇川は近年久我峰に吸収される形で遠野グループへと参加した企業家だった。最終的に仇川の参加を許可したのは生前の父である。秋葉も仇川が参加する際顔見せで一度あっているが、静謐の中に確かな才気を見せる実直な男だった印象がある。それをまともに信用するのは些か行き過ぎやも知れぬが、しかし秋葉は己の感覚が誤った事がないのを知っていた。

話を聞く限りでは妻と幼い子供を至極大切にしていた。写真も見たことがある。ありふれた、それでいて微笑ましい家族の姿を覚えている。壮年の男と、少しばかり歳をめした女性。その間に挟まれた太陽のような笑みを零す少女。

そんな男が果たして私腹を肥やすために、己の欲を満たすために会社の金に手を出すのか。

それに。

「それだけで、あの久我峰が処理なんてするかしら」

引っ掛かりではなく、確かな疑惑。

久我峰は財閥を治める者として良くも悪くも大器である。資産を増やすため、会社を増やすためなら不正さえ許容する男だ。あれは恐らく秋葉よりも人間を分かっている。財閥当主ではあるが、政治家としてもやっつけていけるだろう。その男である。不正一つで果たしてそこまでの判断を下すのか。

そして処理の内容が最悪だった。

仇川は取り潰し、その財全ては久我峰が取り押さえ。仇川の人間は悉く裏で処理を行われたこと。過激なまでの判断だ。容赦のなさには上に立つものとして必要不可欠なものであるが、一つの事象で全てが瓦解している。

「何か、そうする必要があったってこと？」

知らず呟く。

この書類は久我峰から直接取り寄せたものである。あの男は嘘は言わない。だが、何か隠している。それが何か分からない。

そもそも、この書類を取り寄せたのは理由がある。

以前、琥珀から報告があった、もしかしたらそうかもしれない事件。

それをどう取るかの判断のため、今回秋葉はこの書類を取り寄せた。

確かに、筋道は通っているようにも見える。

悪い事をしたので、処理をした。そんな事。単純明快な結末。けれど、この中には幾つもの思惑がある。

それは秋葉自身同じだ。秋葉には秋葉の思惑がある。想いはある。懸念もある。けれど、それが形として成り立っていない。

そして書類を見た結果、判断は保留。もう少し調べる必要があるだろう。

そもそも秋葉は、それを知ってどうするのか、未だ自身でも分かっていない。

「……………」

テーブルの上には未だ多くの未読書類と、消化した書類が分けられて置かれている。そして今しがた読み終わった書類を置き、また一枚取るうとして、その手は宙に浮いてそのまま引き返された。ちらりと柱時計を見る。長針も短針もさして進んでいない。

どうにも喉が渴いた。書類に伸ばしていた手を側に置かれたティークップへ。すっかり冷めた紅茶は随分と味気なく、一息に飲み干し、カップソーサーへと置いた。

「秋葉様。琥珀です」

「入りなさい」

緊張を崩すように、部屋の外から柔らかなノック音。

室内に入ってきたのは、代えのティーポットを淹れた琥珀だった。

「そろそろ秋葉様が紅茶を全部飲んじゃったと思ったので持ってきたのですが、タイミングばっちりでしたね」

琥珀はにこやかに今しがた空となったティーカップに秋色めいた紅茶を注いでいく。温かな匂いが仄かに漂っていた。ティーカップを手に取ると指先にじんわりと熱が伝わってきた。

「ありがとう、琥珀」

「いえいえそれほどでも」

何気ない会話で場の空気が一変していく。それは琥珀のもつ柔らかさだった。琥珀の柔和は秋葉が放っていた緊張感を解きほぐしていくのだ。琥珀は今の遠野では一つの緩衝材としての役割を持っている。それは彼女の性質もあり、また秋葉や翡翠にはそのような役割を受け持つには些か不向きだった事もある。

こんな琥珀にいくつも助けられたと、秋葉は改めて思った。

それと同時に多大な申し訳なさも感じた。

「琥珀」

「はい、なんですか秋葉様？」

小首を傾げるように、ソファへと腰掛ける秋葉の横に立つ琥珀へと声をかける。

けれど、その瞳に秋葉は自分が何を言いたかったのか良く分からなかった。

「兄さんは、どうだった？」

だから兄の事を聞いた。秋葉の中の多大なる懸念事項だった。

「そうですねー。お加減はよろしいようでした。体調不良と食欲不振に関してですが、肉体的には問題ありません。ただ精神的にかなり参っていたみたいです」

「精神的……」

兄は体調が芳しくないらしく、食事も喉を通らず早々に自室へと戻っていった。秋葉としても心配だ。何せ兄の事である。兄は元から健康体ではない。些細な事で体調を崩す可能性があるのだ。久しぶりに遠野へと戻ってきた兄のため、気を使うのも妹としては当然だろう。

だが、その兄の体調が優れていない。しかもその理由は精神的なものだという。

「遠野での生活が負担になっているのかしら……」

まだ帰ってきて日もあまり経っていない。けれど今まで生活していた有間を離れ、格式を持つ遠野へと戻ってきた。有間での生活に慣れた兄には、遠野での生活に追いついていないのだろうか。秋葉として兄と再び共に暮らせるのは嬉しい。けれど、それは今までの兄の思いなどを無視して押し付けた結果だ。それが分かっている、けれどなお秋葉は。

「それも確かにあるとは思いますが。けれど、今回は全く違つと思つ
んですよ」

「それは、どうして?」

「えーっと、これは言っているのやら良くないのやら。私としても
大変迷うのですが」

そうして琥珀は唇に指を当てて少し迷つたように、けれどそれを
口にした。

「どうやら、志貴さん。」

あの方にお会いしたみたいです」

瞬間。

空気が凍えた。

緩んだはずの空間内が固定化され、摩擦を起こす。
秋葉を中心に空間が抜れる。

僅かに、ほんの僅かに秋葉の髪が揺れる。
窓も閉ざされた室内に風は生じない。
しかし、秋葉は身じろぎもしていない。

空間が歪むだけ。

「っ

」

それでも秋葉は自身を鑑みるほどの理性を持っていた。
故にティーカップをそろりと両手で握りしめた。温かい。
ぎりぎりティーカップに力が込められる。

「そう」

搾り出すように、秋葉の声が漏れた。

「……あの人が、兄さんと」

無理矢理自身を抑えこもうとする震えがあった。力みすぎて、自壊を促すような抑制だった。

ばきり。

その音はやけによく聞こえた。

秋葉の握るカップに罅割れが走る音だった。

「秋葉様」

カップソーサーが割れんばかりの勢いで、カップが叩きつけられた。

突然立ち上がる秋葉に琥珀は瞠目する。

「琥珀。出るわよ」

「え？」

「あの人を見つげ出しに行くと言ったの。聞こえなかった琥珀？」

そのまま秋葉は歩を進めようとする。けれどそれは秋葉の手を握る琥珀の腕によって抑えられた。秋葉は自身を捕らえる琥珀を見る。あまりに冷たい瞳だった。

「何？」

凍える怒りが琥珀にも向けられようとす。視線一つで息の根を止めてしまいそうな、鋭い眼差しだった。けれど秋葉の冷たい視線を受けて、琥珀は不動だった。

「落ち着いてください秋葉様。今の秋葉様、秋葉様らしくありませんよ」

「何が言いたいの琥珀」

ぎりぎりと、硬い空気が抜れていく。全ての柔らかなものが硬質に変化していった。それはモノを無機質へと返還していくような工程で、滑らかさを失い冷たさが増していく。

「今闇雲に探しても、見つかるかどうかはわかりませんよ？それに今は志貴さんの体調も良くないです。秋葉様のいない間にもしなにかあつたら」

「翡翠がいるから問題ないわ」

「確かに翡翠ちゃんは頼りになりますけど、翡翠ちゃんの手には余る事態が起こつたらどうするんです」

「っ！じゃあどうすればいいのよ！！」

行方をなくした感情の捌け口が声となつて放出される。琥珀が志貴の名を口にすることで秋葉の激情が力を失った。それを受け琥珀は秋葉を落ち着かせるように物腰柔らかかに言う。

「様子を見て明日以降にしませんか？それだつたら志貴さんの体調も良くなるでしょうし、それに一日で果たして見つかるかどうかも分かりませんしね」

「それを私が素直に聞くと思っっているの？」

「はい。だつて秋葉様、志貴さんのこととても大切にしていらっしゃいますから」

「……………」

暫く、そのまま二人は見つめ続けた。秋葉はその瞳に凍えを孕ませて。琥珀はあいも変わらず笑みを張り付かせて。空気は固まっている。動いているのは、柱時計の秒針のみ。

「はあ……」毒気を抜かれたように、秋葉の吐息が零れた。「分か
ったわ」

「秋葉様」喜色を隠しもせず、琥珀は秋葉の手を取り握った。

「そうね。確かに、私らしくない。ここは様子見。……琥珀には負けるわ」

自嘲するように秋葉は言う。

「けれど、琥珀が私を止めるなんてね。しかも兄さんの名前まで使
って、随分と偉くなったのね琥珀？」

それは秋葉の負け惜しみだった。

「あはー。だって私は秋葉様のお世話をしているのですし、そりゃあ秋葉様に似ます」

琥珀はただ笑むだけだった。

そうして硬質だった空気は少しだけ収まっていった。秋葉は浮き足立った己を見て急に恥ずかしくなり先ほどまで自分が座っていたソファへと気持ち急ぎ気味で座り込んだ。

そんな秋葉を琥珀はニヨニヨと見つめている。秋葉は琥珀にはあまり強く出られない。心情的に彼女に対しては強気のままの秋葉で

はいられなくなるのだ。事情がある。申し訳ない気持ちはふんだんだ。しかしそれ以上に、秋葉は琥珀に頼っている事を自覚していた。

だからだろう。彼女に優しく見つめられるのは苦手だ。嫌いではないけれど、何となくこの柔らかな空気は離しがたいと思うが。

「この前言っていた仇川のことなんだけれど」

だから先ほど読んだ書類を指し示した。曖昧な空白を埋めたため、咄嗟だった。急に思いついたような白々しさが鼻につき、どうにも赤面が抑えられない。

「あなたはと思う。この件に関して」

しかし、琥珀は思いのほかこの話に食いついたようだった。

「あーなるほど。私の意見でよければお話しますが、よろしいですか？」

「ええ」

「では、私はこの件は間違いないと言いましたよね。それは詳細を調べてみれば分かりますが、この件には必要なパーツが揃っているんです」

「パーツ？」

「はい。まず大量に人が死んでいる事。あれから分かったことですが死者の数は五十を下回りませんでした」

「……そんなにも」

五十以上の死者。

数字で考えれば楽でいい。けれど秋葉はこの件に関してはそうや

つて割り切る事は出来なかった。死んでいくものには愛する人がいた、大切なモノがあった、手放したくない思いがあった。彼らには人生があったのだ。それが、死んでしまった。それを想うと、秋葉は胸の奥に重石を付けられたような鈍痛を感じた。

「けれど妙なんです。遺体があったのは数箇所なんですけど、どうにもその殺害方法がばらばらなんです。まず最上階で見つかった遺体は一つで、エントランスに一つ。こちらの死因なんですけど、最上階のほうは喉を食い千切られていて、もう一つのほうは首を断たれています。後は全部地下で見えました。地下はもう酷いらしいです。バラバラ死体と言いますが、ぐちゃぐちゃ死体と言いますか。つまり惨殺です」

「……」

「地下で見つかったのはペースト状までに押しつぶされた死体でした。この両者の違いです。これは一つの手がかりでしょう」

「……なるほど。それは妙ね」

殺害手段の違う死体。そこからある程度の想像はつく。しかし、秋葉の記憶の中にいるあの人はそのような事あまり関係がないように思えてならない。

琥珀の言葉は更に続く。止まらず、淀みなく、空間を支配する。

「そしてもう一つなんですけど、その最上階とエントランスで殺されたのが仇川トップの仇川辰無さん、そしてエントランスで見つかったのがその娘であるしほ子ちゃんだったそうです」

知っている人間の死ほど辛いものはない。それに幼い子供まで巻き込まれているのだから尚更だ。なまじ写真でその姿を見て、仇川辰無と言葉を交わしただけあり、その感慨は現実。

「つまり、二人は仇川の血です。おそらくその二人が殺されたのは……それは、二人が魔のある人間だったから」
「……」

琥珀の雰囲気飲み込まれる。

彼女は先ほどまでの彼女でありながら、その中身を少しずつ変質し始めたような。室内はいつの間にか先ほどと立場が逆転していた。秋葉が空気を生み出すのではなく、琥珀が気配を侵食していく。

「実は地下にも惨殺死体ではない死体がありました。その死体ですが仇川唯葉さん。辰無さんの妻です。こちらは完全に殺されてます。首を断たれ、心臓を潰され、頭部を潰されています。そして調べた結果唯葉さんは反転していた可能性があるんです」

琥珀は言う。

「この書類には久我峰さまが仇川の処理を決定したと書かれているように見えますが、遠くから見たらちよつと見方が変わります。久我峰さまが仇川をどうこうするのを決めたのです。だったらそれを実際に行ったのは誰かと言う事です」

はたと、秋葉は立ち返つてみた。そして無造作に置かれていた書類を掴み、食い入るように読み直す。確かに、久我峰がこの件の判断を行ったとは書かれている。しかし、その実行者がまるで書かれていない。不自然なまでにそこは空白だった。

「そして、隠蔽工作が行われたと言ったのを覚えていますか？」
「……ええ」

「実は、退魔組織が動いたと言う報告がありました、隠蔽工作は彼らが行ったものではないでしょうか」

「
退魔組織。」

それが動いていたと、琥珀は秋葉を見つめていた。

「琥珀は何故それを知っているのから？」

「はい。実は私もこの件に関しては少し違和感と言いますか、ちょっとした不自然さを感じていましたので、興味本位に調べてみたんです」

「それを報告しなかったのは？」

「ええと、それを報告するのも兼ねて今秋葉様に訪ねてきたのですよ」

「……なるほど」

秋葉は取り敢えずの納得を示したが、しかしそれは認めざるを得ないだけの事だった。秋葉が許容しようが拒絶しようが、その事実には確かにあるのだ。

「……だから、私はこの件。あの人、七夜朔が関わっていると

「
琥珀」

室内に、秋葉の悲鳴にも似た声が響いた。

それは小さいながらも、確かに聞こえた。

頭を垂れるように、秋葉はソファに身を沈ませた。

先ほどの苛烈な怒りを思えば、その消沈する姿の何とか弱き事だろっ。

「……その名前は、出さないで」

囁くような声音だった。消える前の掠れた音。悲嘆だった。

「失礼しました。申し訳ありません秋葉様」

深く腰を折り秋葉へと頭を下げる琥珀。秋葉はそれに応えず、ただ俯いていた。

そして沈黙が生まれた。

髪がたなびく。

風が少しあった。粘り気のある空気と相まって、ぬるい混濁に包み込まれる気分。鬱陶しく思い、舌打ち。

ストックが切れた。

与えられたモノがなくなったら補給しなければならぬ。それは世の中が回る真理だ。足りなくなったら足りさせる。その手段は人によるが、彼の場合はそこらの路地裏にでも孤立しているような自動販売機へと赴くことだった。

酷く喉が渴いている。

正直何故このような面倒な思いをしなければならないのか、わからない。

もつと貰っておけばよかつたとか、何で自分が買いに行かなくてはならないのだとか、思わないこともない。けれど、頼れるものはいないし、欲しいと感じているのは自分だった。

夜の中、滑るように歩いていく。人氣もない街中を浸り浸りと空気が泥のように粘り気を持ち、肺の中にへばりついて離れない。荒い息。酸素を求め喘ぐように息を吸い込む。

街は静かに沈んでいた。人の談笑も、呼吸も、温もりも嘘のように消えていた。それはきつとこの空気の粘着質に飲み込まれてしまったからに違いないと喉を鳴らした。

喉が渴いている。

そうしている内に、細い道の先、道路にぼつんと光を湛える自動販売機に辿り着いた。そこは寂れた狭い丁字路のど真ん中だった。自動販売機以外の光源は、遙か高くに昇る不揃いの月。しかし、入り組んだその場所に月の光は届かない。

光のない場所だった。大通りを少し離れたその場所。あまり寝床からも離れていないし、いい感じ。次回からストックが切れたらここにこよう。

そして。

破壊音。

自動販売機の前面を力任せにひっぺはがした。拉げた金属板をおもむろに舗装された道路へと落とす。

横並びに陳列された缶を幾つか適当に見繕う。

全て缶コーヒーだった。

苛む喉の渴きを癒すため、プルタグを抉じ開け口内へと流し込む。苦い。カフェインの香ばしい匂いが鼻に抜けて、ただ不味い。

一本目を飲み干した。喉の渴きは消えない。

二本目を流し込んだ。喉の渴きは癒えない。

三本目を飲み終えた。喉の渴きは拭えない。

四本目を叩き込んだ。喉の渴きは萎えない。

口元から零れる茶色の液体が喉を通らずに体を濡らした。

しかし、そのような事気にする余裕がない。無視できない喉の渴き。喉元を焦がす欲求は荒立つ神経を更にささくれださせ、目に見えるものは苛立ちを覚える以外の意味を成さない。

故にわき目も振らず、がふりがふりとコーヒーを流していく。

五本目。

六本目。

七本目。

そして十を数える空き缶を握り潰したところで、手持ちの缶は無くなってしまった。捻くれた缶が手元から落ちる。

喉は、渴いたままだった。

「つ！！！！！」

それは悲鳴だったのか、怒号だったのか。喉から迸る咆哮は体を張裂けんばかりに轟いた。けれど、そこは声が響くのみのものであり、誰にも気づかれるはずがない。木霊する音は何処にも辿り着かない。誰にも辿り着かない。へばる風は声を届かせない。

喉の渴きが抑えられない。

何故ここまで喉が渴く。

ささくれ立つ神経に更なる苛立ちが募っていく。

何故自分はこんな思いをしなくてはならない。何故自分はこのような目にあわなくてはならない。何故だ、何故だ、何故だ。

繰り返される自身への問答は、すぐさま答えへと導かれる。それは直接的な、考えるまでもない事だった。

「あいつのせいだ」

眩いた瞬間、それは激情をもたらした。

「っクカ　　！」

引き攣る。表情は笑いだった。あまりに禍く邪悪と害意を孕んだ笑顔だった。吊り上げられた口角に歯肉が姿を見せる。力の限り食い縛られた歯の隙間から憎しみが漏れた。激情で体が破裂しそうだった。

落とし、自動販売機へと。

轟音。

「　　！んな、に！？」

持っでいかれた髪の毛が数本、驚愕する顔面へと散っていく。瞬間自動販売機へと突き刺さった、それを見た。

それは刀だった。

所謂、日本刀と呼ばれるものだった。

しかし、日本刀と思われるその全体像を見ることは叶わなかった。

鞘ごと自動販売機に刀は根元まで、鐔の手前、はばきまで突き刺さっていて、刀身の全容はこちらからでは見ることが出来なかったのだ。

何だ、これは。

よう、景気はどうだ。

軋む、金属音。

それは鳴動する地響きのように、決して耳から離れぬ金切り音。

『嗚呼、手前も不幸だったな』

金属を擦り合わせたその軋む音が声だと言う事に暫しの時を有した。

何だ、これは。

聞き間違いとは、あまりに程遠い。

それを認めるではなく、ただその事実が突き刺さっていた。

「なんだ……てめえッ？」

意味が分からない。意味不明もいいところ。

何で、何で。

「剣が喋るとか、どういうことだよおいッ？」

理性が狂い始めたのか。朦朧の意識は事実を錯覚させているのか。それは確かに、金属の塊に突き刺さる日本刀は確かに音声を発していた。

頭がおかしくなったのだろうか。

気付けば、空気が重い。

粘着質どころではない。

まるで、これは。

空気が

死んでいく。

温度を奪われているのではない。空気そのものが自身を消失させていく。それはまるで死んでいくかのように。空気は無となり始める。軽さを無くした空は重くなるだけ。

風は止まない。

それはまるで、羽をもがれた鳥のよう。
虚空から墮ち、地上へと叩きつけられるだけ。

『ここで死んどきゃ楽でよかったのによ』

ヒヒ、と金属が嘲う。

先ほどまで自身が笑んだ邪悪と遜色のない悪意が、
声音の中に潜んでいた。

やばい。なにかがやばい。

肉体が警告音を掻き鳴らしている。生命が悲鳴を上げようとしていた。

何かが、起こり始めている。

背骨に氷柱を生やしたような、凍える寒気が肌をなぞった。
全身の肉が粟立つような感覚。血が冷たくなっていった。

背後へと急転回。

自動販売機の光が届かぬ闇の向こう、細い道の先。
何かが、そこにはいる。説明できない、理解できない、想像できない。

気配がない。気配がないのに、そこに何かがあると分かったのは、ケタケタと笑う刀の存在もあるが、それ以上に空気の異質さは異常の登場によく似ていた。

それはまるで、自分のような。

触れられそうな闇の中に、何かがいる。

それを理解する瞬間を、肉体は待つことを選択しなかった。

「ふざけんじゃねえッツッ!!」

許せない。

このような状況に置かれた原因。何故ここまで震えなければならぬのか。

理由は分かっている。闇の向こうに何かがいるのだ、ならばそいつは邪魔だと本能が告げた。

いい加減、喉の渴きも抑えられない。

抑圧された感情は余すことなく襲撃者へと向けられた。

故に、殺す。

「ヒャッハアアアアア!!」

獣じみた加速で闇に突っ込んでいく。必ず殺してやると誓いながら。

この憎しみを、この渴きを、この苛立ちを、この怒りをぶつけてやる。

脳内は相手をどう殺すか考える。

八つ裂きにして四肢をもぎ、そしてその首筋に口を

未来を考えるだけで愉悦を感じる。

怒気と笑みを混じらせた顔つきのまま闇のなかへと入り込み。

「は？」

右手が、剥がされた。

まず理性が追いつけなかった。あまりの事に思考が止まってしまったのである。視線の先には今しがたもがれた右腕の跡。

掌はある。

しかし、そこに指がない。

五指が消失していた。骨と腱が顔を見せ、赤く、赤く、赤く、赤く、赤く。

思考停止は刹那。しかし、その刹那瞬き一つは襲撃者の好機でし
かなく。

ぞわり、と。

背筋に虫が這い寄った。

「　　っ！！」

理性は肉体を動かす事を停止させた。ならば肉を動かすのは今や
本能のみ。

かくして本能は見事にその命を生かすことに成功した。傾けられ

た肉体、その箇所を何かが通り過ぎた。

地面を踏みしめる。刹那肉体はこの場からの離脱を選択した。迎撃は無理だ。相手がどのような存在なのかまるで不明。心情ではそれを否と叫ぶが、それは賢しい選択ではなかった。

闇を抜ける。

道路を叩きT字路を離れ、出来るだけ走る。

寢床には行かない。行けない。寢床を見つけられては困るのだ。

人の気配なく、また光のない街を錯綜する。

「なんだよ、あれはっ!？」

感情が爆発する。姿も見せぬ襲撃者。喋る刀。突然奪われた右手。

分からない。分からない。分からない。

理性はこの状況に追いついていかない。今、体を動かすのは何もにも向けられた憎悪だった。

自分が何処を目指しているのか。

決まっている。

殺すための場所である。

走る。逃げているのではない。跳躍。夜を切り裂くように、体は空を駆けた。ふわりとした感触が体を包む。それは外側からではなく、内側から力の奔流だった。

夜の街を肉体は一直線に駆け巡る。地上を見下ろす建築物に挟まれるよう駆ける。少しでも速く。質量ある風を掻き切るそれは、間延びする影だった。それをどう見るか、肉体は夜を駆ける。人の姿がまるで見えないビルの合間を刻むように。

走った。

走った。

走った。

走った。

そして、

閃光。

「っちい!!」

それは不可視の斬撃だった。夜の闇を切り裂く妖光は、左脇腹を浅く裂いた。

激痛。舌打ちを一つ、滑空するように地上を舐める。

一体どういう事か。迫るアレは地上だろうが、空中だろうが関係なく襲い掛かる。そもそもその正体は未だ見えていないのだ。恐るべき疾さで、制止することなく夜を支配するそれは最早ただの残像でしかなかった。

「くそがあつつつつ!!」

最早、転がり落ちるように白色の布へと駆け込んだ。

滑り落ちた場所は建設途中である工場現場だった。ドアを閉めた先に展開するそこは？き出しの鉄骨が奇妙なオブジェのように天へと伸びていた。外観を隠すように白いシートが垂れ下がり、外からはこの中が見えることはない。限定的に天上が切り開かれており、ドアを閉めた今、そこからしか入る事は叶わない。空には輝く半分の月。そう夜であるのだ。自身の領域だ。

しかし。。

荒い息。街中を駆けずり回って、わき目も振らず無様な逃走を経て、呼吸は抑えきれない。呼吸に鉄の味が混じりこんでいた。

天上から入り込む風は渦を巻き、外よりも少し強い。

組まれた鉄骨へ隠れるように着地する。そこは天上からは死角とされる場所だった。工場現場の端。上から見ると、鉄柱が邪魔して姿は発見されない。

忌々しげに、先ほど落とされた右手を再び見る。指がない。傷口はずたずただった。まともな傷ではない。まるで獣に無理矢理食い千切られたように削り落とされた。あれは、あの感触は何だったのか。

痛む。傷口がじくじくと疼く。ありえない。このような痛みを感じる意味が分からない。激烈な痛みではない。まるで、侵食されているかのように痛む。じゅくじゅくと傷は手首を痛めつける。左脇腹からの出血が止まらない。

「……………何故だ」

何故こんな目にあっている。

意味がわからない。

奥歯をぎりりと噛み締める。

出血が止まらないという事態がありえない。

そのようなもの、自身にはまるで関係のないものであるはずなのに。

生命としての基本だ。そも、基礎が違うのだ。

意味がわからない。

「糞があああつ！！！！！！！！」

この理不尽に対する憎悪を吐き出すにはまだ早い。
目的を、目標にむけるため、今はまだ早い。

まだ、見つけてもいないのだ。

見つける。見つけだす。見つけて、見つける。

そのために。

「
つ」

寒気にも似た気配が漂う。それは香りすら放ち、鼻腔をくすぐった。

死臭。

肉が腐り、血の溢れる匂い。それはそのまま死を形として視せる

ような気質を秘めていた。

影が落ちる。

場所は、開かれた天上。

それは、未だ満ちぬ月輪を貫くように夜を漂っていた。

亡霊。

一瞬、そう見えた。夜を舞う狩人の姿は追われる身となって始めてその目に映し出された。

藍色の残像が、そこにはいた。

亡羊だった。曖昧な男だった。

佇む和装の男。長すぎる髪からその顔は見えない。はためく着物から、その左腕が存在せぬ事が証明されていた。しかし、それを補い余る男の気配。男からは何も発せられていない。存在を停止したように、男はいた。

ただ、その右手には異様が握られていた。

刀。形は日本刀である。生憎知識はからつきしたが、あれがまともなモノでは無い事は明らかだった。

鋼色の刀身。その刃は朽ちたように罅割れ刃毀れしていて、およそ殺傷力に富んだ造形を成立させていない。握られて入るが力は込められているようにないそれは、切っ先が垂れ下がっている。真剣そのものへの恐怖にも似た感慨は浮かばない。あれでは、まともに

切れる筈がないのだ。

だが、それは、あまりに異様だった。

黒い、光。

それは蒸気だった。あまりに濃すぎる闇がその刀身から噴出し、男にすらまとわりついていた。轟く風に飛ばされぬ闇は、死臭そのものだった。全ての生命を死に到らせる、腐敗と血の混じる匂いだ。

そして。

死ネ。

声が、現われた。

死ネ。

それは空気を震わせる音ではなかった。あの金属音でもない。現実には聞こえないような、幻。

死ネ。

闇から、それは聞こえてきた気がした。

死ネ。

頭の中に直接叩き込まれるような感覚。脳を蹂躪し、そのまま飛び出していきそうな声が、聞こえる、

理不尽だ。

このイラつき。この恐怖をどうする。説明も出来ぬ不快感が飛び出して体が張裂けそうだ。腸が煮えくり返るとはこの事だろう。沸騰する憎悪は耐え難く。

殺してやる。

注がれる月の光を浴びながら、視線の先、その男は全ての闇を飲み込んだかのように禍く存在していた。いや、事実黒い。あれは闇だ。ただ佇んでいるだけだというのに、まとわりついた闇と相まっつて悪夢のよう。

殺してやる。

「
」

ぐりん、と男の顔がこちらに向けられた。ありえない。ここは死角の角はず。姿は完全に隠していた。物音すら立てていない。なら何故こちらを覗く。

竦む。どういつわけだ。理解できない。

いや、もう既に何も不思議には思わない。ただただ不気味な藍色は、最早何でもありなような気がした。

ならば。

『よう、暫くだな』

神経を刺激する不快な金属音が周りを囲まれた工場現場に染みる。

最早姿の見えるアレ。もう逃がさない。必ず殺してやる。これ以上何も奪われはしない。憎悪のなかに決意を秘めた瞳を眦が裂けるまで開き、その挙動の一切を見逃さないと。

そのために、出でた。

例え刺し違えても、殺してやる。

互いの距離は二十メートルぐらいか。

通常ならば、そのような選択は却下だ。

だが、それを可能とする種が、ここにはある。

指を失った右手。

それを、下へと空に揮う。

肉を失い、骨を失い、皮を失った付け根。飛び出す深紅。血飛沫はやがて流れ、形となり、整われ、凝固を始める。それは血の鉤爪だった。本来の指よりも長く鋭角に伸びる深紅の刃。

『ヒヒ、おもしれえもん持ってんじゃねえか』

腰は深く落とされる。

硬いコンクリートの地面に足は推進力を溜め込んだ。

『追いかけてこは終いか？もう走らなくていいってか？』

視線の先。

長い髪に覆われずにいるその口元が、もごもごと動く。その顔が動く事は意外だった。

だが、アレはなにを口に行っている。

『渡すもんがあつたんだが、いきなりいなくなるからよ。渡す事が出来なかつたわ』

最早聞こえる金属音とあの男は別の発信源だと分かっている。故にいま聞こえる音は刀であり、男は喋っていない。

口がもごもごとしていた。

あの中には、何がある？

気になりはするが、そんな事は関係ない。

今から襷褌切れにする奴の何を知っても、それはすぐさま消え去るだけの事。

そして、男の唇からそれは姿を現した。

『忘れもんだぜ』

ぬるり、と。

閉ざされた男の唇から、赤く染められた滑らかな肌色が零れた。唾液と赤に塗れたその柔らかさは、内臓とは違った張りを見せ、場違いな輝きを見せていた。

「おまえ

つつ!？」

指。

指が、口内から零れる。

ぼたぼたと、男の口から溢れて落ちる。

地面に落ちたそれは、死んだ芋虫にも見えて、現実感のなさ不気味さと気味悪さが際立つ。

男の口から零れる五指。

口元に人の部品を食むその姿。

あまりに異質なその姿。亡霊なんて、とんでもなかった。

アレはそれ以上の最悪。アレはそれ以外の災厄。

鬼。

「俺の、指をつ！」

その指には見覚えがあった。

意識しなくても、それを知っていた。生まれた時から、それを持つていた。

それは、それは。

「喰いやがったなああああああ つつっ！！！！！」

煮え立つ憎悪が遂に激昂へと変容する。

突き動かされるように、肉体は地面を踏み抜いた。

渦巻く風を突き抜けて、障壁にもならぬ空気を切る。切れた空間

の裂け目から、肉体は跳ね上がる勢いのままに男へと射出された。

獣じみた加速。ただ真っ直ぐに激情のまま、感情のままに駆ける。動きは恐るべき程に疾い。ただの人間には出せぬ、ありえない加速。一息に男との距離をつめ、そのまま右腕を振るいて喉から股まで掻っ捌こうとして。

怪しく輝く妖光が、それを受け止めた。

「つくそが！！」

闇色の刀が血色の爪を弾き、追撃の爪はそのまま受け止められた。

間際に見える男の顔。額がくつついてしまいそうな程に距離は互いから失せた。憎しみをそのままに、激烈を瞳から滾らせ、殺意が視線となる。

その時、轟く風に男の髪が揺れた。

「おまえ、はっ」

長い黒髪から覗く男の相貌。

削げた頬に、人形めいた無表情、感情を宿さぬ鋭い眦。

そして、それを見て、僅かな驚愕に顔を歪めた。しかし、それにより圧倒せしめん力は更に増し、ぎりぎり刃を押しつけようと重くなる。

ぎらついた笑みが張り付いた。それは狂気を孕んだ壮絶なる笑みだった。

第五話 人殺の鬼？（後書き）

分かりました。私には纏める力が備わっていない。六です。

約一ヶ月ぶりの投稿でしょうか。なにやら執筆の感覚を思い出せず、四苦八苦の途中です。果たして皆様のご期待にそぐえるか不安でたまりません。

皆様方の送ってくださるご感想に助けられています。ありがとうございます。

執筆速度はかなり遅れてしまいましたが、これからも頑張っていきたいと思います。

では、六でした。

第六話 人殺の鬼？（前書き）

握る掌は冷たい。

まるでこのままずっと冷たくなって行って、そのまま全ての熱を失っていくようだった。

その危うげな冷たさに、そんな険しい現状に心が凍ててしまう。

だから今はこの手を握ろう。

少しでも、温かくなるように手を握ろう。

私の熱を、貴方にあげます

第六話 人殺の鬼？

これが夢だと、直ぐに気付かされた。

不定形であやふやな意識。これが幻であると、全くもって分かった。

感触がない。匂いを感じない。息遣いが自分のものではない。体が自分のものではない。意識だけがそこにあるような感覚。

それに、そうでなければ自分が納得いかない。

だって、そうでなければ、本当に困るのだ。

藍色の和装。違和感のない隻腕。

ざんばらに伸ばされた黒髪の間隙から、虚空を思わす蒼の瞳。

連続殺人の犯人が、あの時弓塚さんと出会った人殺しが、当たり前のようにそこにいる。

それを受け入れがたいと感じて、これは夢なのだと思理自身を収める。でなければ、こんなに意識は客観できない。傍観できない。俯瞰できない。何も出来ない。だから、妙に冷静なのは、そうやって自分を押さえつけることで、この夢を何とかやり過ごそうとしているからだ。

「 八 八 八 」

どこからか荒い息が聞こえる。それは今にも途切れてしまいそうな荒さで、それでも呼吸は強引に行われていた。しかし、呼吸では沸き立つ肉体が押さえきれない。

熱い。けれど冷たくて、寒い。

左の脇腹に違和感。触れる。血が、零れていた。

相反する温度を感じる。体の奥底から煮えたぎる熱さと、それを凍らせる寒さ。この反発が鬨ぎあっている。肉体が混乱している。

日本刀。あの時見た、鞘の中身。男はその口元に刃毀れした日本刀の柄を啜え、陽炎のように揺らめき佇んでいる。藍色が陽炎に見えたのは、黒い蒸気を噴出させる日本刀のせいだろう。それこそ夢であると裏付ける、理解できない現象だった。

その瞳。その瞳は何も見っていない。ただ、深い蒼は全てを映し出しているかのよう。

冷たい。骨の髄まで冷たくなっていく。空気が冷えているのではない。

けれど、その色は、蒼い瞳の奥に映るそれは。超越的な意志を瞳に湛え、それが形となったような。

そして、場面は動く。

視線が動く。ありえない加速が体を震わせた。真っ直ぐに、藍色へと突撃する。潜り込むように体を沈ませる。体の昂り、肉体の限界を考慮していない筋肉の動き。

瞬き一つも許さない疾さ。

臍下まで沈んだ体は、相手の視線を掻い潜るかのように、飛び上がった。

さながらそれは海面から跳ね上がる魚類の動き。肉体の酷使に太腿の血管が爆ぜる寸前だ。

しかし、それは相手の意識を剥がしたも同然の動き。不意をついた動きは、死角からの襲撃を可能とさせ、そのまま藍色の命へと赤の爪は伸びて。

「つ!?!」

藍色の姿が爪の触れる寸前、消えた。

霞の如くに、その姿はその場から消えうせた。

元から其処には誰もいなかったように、影もなく 跡形もなく。

音があまりに遠い。壁越しに聞こえる物音を耳に聞く感覚。

音のないなか、藍色は何処に消えたのかと、瞬時に辺りを見渡すが、探す色はすぐさま見つかった。

後方。五メートル以上は離れたその場所に、藍色はいた。

目に映る藍の背中。背中。背中。背中。

砂嵐。砂嵐が映る。映像が刹那ぶれる。

奥歯を噛み砕かんばかりに歯軋りし、そのまま飛びつこうとした瞬間。

「」

それが見えた。

『残念だったなあ』

金属音。全てを嘲う金属の軋み。意識が蒙昧であっても、その耳障りな音は不快なまでに聞こえる。

藍色。

その右手に、なにかがある。

「あ」

藍色の肌に、赤が伝う。背中を見せる藍の右手。

塊に見えた。それは肉の塊だった。

張りのある表面に赤色の管と青色の管が走っている。柔らかかな肉感は繊維は赤く赤く、黒く黒く。赤い塊は、その掌に収まりながら、それでいて指の間から余る肉がはみ出して。引き千切られた血管は力なく垂れ下がり、そこから赤が漏れ、鼓動はなく、脈動もなく、ただ赤く在り、赤は流れ。

思わず、視線は外され、胸元を見る。傷がない。目に見えるような傷はない。

しかし、その肌の隙間から、赤が滲み、紅は侵し。次第に肌は赤くなっていく。

そこは胸の中心。骨の隙間。肉の間隙。

心臓を、抜き取られた。

「あ、あああ」

声が、零れる。赤と同じように。

そしてそのまま、藍色は見ている先で、見せ付けるように心臓を握る。

明確なまでに殺された。

視界は明るい。けれど、意識が揺れる。

そのまま、心臓を奪い返したくて、走り出そうとする。

しかし、藍色はその行動を知る由もなく、心臓を握りこむ掌に力を込めていく。ぎちぎちと、次第に指の間からはみ出る肉が膨れ上がる。未だ中に収められた血液がこぼれ出る。圧迫。握る。潰す。

「

」

やけにそれはクリアに見えた。

破裂する。肉が圧力に耐えかねて、握り潰された。

肉は搾り取られるように潰された。

それを、呆然と、見。

死を見。

死を。

殺された殺された殺された殺された殺された殺された殺された俺が、俺は、俺こそ、俺、が俺が俺が。

絶叫。

絶叫。

絶叫。

死が起きた。死は起きた。死こそ起きた。

俺は何処だ。何処にいる。これは夢か。現実か。いや、現実なんてどこにある。現実はいつだつてここではなかった。

喉からあらん限りに迸る悲鳴は、最早声ではなかった。ただの音に過ぎなかった。体を覆う何かを握りしめる。強く、強く、強く。

「ああ、あああつあああああううあああああああああああああああ
ああ つ！！」

殺された瞬間、死を理解した。死を理解した瞬間、殺された。

息が苦しい。呼吸が辛い。胸が痛い。ただ悲しい。気持ちが悪い。きもちがわるい、キモチガワルイ。

「つ！！」

心臓はあるのか。心臓はまだ動いてきているのか。分からない。分からない。

孤独。

「ま　　つ、　　！」

刹那的な喪失感。それはどこにもなくて、だからこそ辿り着けないはずなのに、しかし連れてかれてしまう。持っていかれる。運ばれてしまう。取られてしまう。奪われてしまう。盗まれてしまう。この、命を死へと。

瞬間感じたあの感覚。

それはまるで、あの時のような。

砂嵐。砂嵐。砂嵐。灰色の嵐が、体を攫い、視界を覆い、聴覚を巻き込む。乱雑な錯綜。有形無形が雑多なものとし、意味を失った。

それは、なんて、死　　。

「　　き　　、　　し　　　！　　？」

何処からか、悲鳴が聞こえる。

幼子の、母とはぐれて途方に暮れる迷子にも似た、悲鳴が。

何処だ。何処だ。

生は何処だ。

布を握り潰す手を、誰かが握っている。温かい。

「　　し　　　さま！　　　し　　　きさま！　　志貴さま、気を確かに　　！」

嗚呼、この声は知っている。
この声を、俺は。覚えている。

「ひ、すい」

慟哭の声音に、生命の温度を耳にした。

泣き叫ぶような声を上げる翡翠。その悲痛な叫びを頼りに、死から逃亡する。囚われる前に、逃げ出す。我武者羅に、遮二無二に。無に取り込まれる前に、少しでも早く。泳いで、走って、飛んで。少しでも遠くへ。

「っ！ そうです、翡翠です！ 使用人の翡翠です！！ しっかりとしてください！ 今姉さんが来ますから！」

衰弱する一方の俺に、翡翠は泣きそうになりながら声をかけてくる。その何て力強さ、翡翠の言葉は眩しく、俺を導いてくれる。

砂嵐。

砂嵐を乗り越える。気持ち悪さを退けて、翡翠へと、命へと向かう。翡翠の掌の温かさ、生の強さを頼りに、言葉を指針に砂嵐を越えて。

視覚が回復する。

そして。

「

！！？？」

最初に見えたのは、死だった。

線が、線が、到るところに見える。ハッキリと、黒く、その存在は髪の毛並みに細いながらに自己主張している。天井が、壁が、家具が、布が、モノが、肉が。黒い線で描かれている。それは罫割れにも似た線で、ただ亀裂だった。そう、こんなの、前から見えていた。見えていたはずなのに。

それが以前よりも、ハッキリ見える気がして。

思わず、手を覆う翡翠の掌を掴む。

「志貴様っ！私は、ここに……っ！」

翡翠の呼び掛けに、俺は、翡翠を見た。

「あ、

ああ

」

悲鳴にもならず、絶叫にもなれず、恐れにもならず、音は漏れるだけだった。か細い声音は、力を失った。

翡翠、翡翠がいる。

けれど、線が見える。

線が、視える。

翡翠の体に亀裂が走っている。

見える。翡翠が、崩壊する線が見える。視える。見える。観える。バラバラになる線が。翡翠が、分解する線が。

キモチガワルイ、キモチガワルイ、キモチガワルイ。

キモチガ、ワルイ。

胃液がこみ上げる。

確かな吐き気。

許容しがたい異物感。

「げ、えあ。あ、が ああえあがああっ!!」

吐いた。反動的に上体を起こし、逆流する胃液が喉を焼いて吐き出される。昨日の昼から殆ど何も食べていないのだから、出てくるものは胃液ぐらいだった。口内から零れる酸味の効いた苦さは、どうしようもなく不味かった。

「志貴様！？姉さん、早く来てください！志貴様が 志貴ちやんが……!!」

突然吐き出す俺に翡翠は慌てふためきながら、己の信頼している姉の名を叫び、ひたすら俺の背中をさすり続けてくれた。

「んー？じゃあ今日遠野はこれないって事ですか？」

『そうです。ちょっとお加減がよろしくないようですよ』

「あー、あいつ体ちよいと弱いつすからね。んじゃよろしく伝えと

いてください」

そう言って、乾有彦は受話器を置いた。

「それで、遠野くんは大事無いのですか乾くん？」

「そうらしいっすね。体調崩して寝ゲロしたらしいんですけど、今は落ち着いてるとか」

「ね、寝ゲロですか……」

もっと言い方はあるだろうに、とシエルは若干口元を引き攣らせた。

場所は高校の校舎。職員室の近くである。

今朝方、有彦は学校へと辿り着いてから志貴は今日休むという連絡を教師から聞いたのである。確かに志貴は元から体が弱い。学校にて貧血を起こすことなどざらで、有彦自身気分を崩した志貴の対処を何度も行ってきた。彼自身は不良と呼ばれる部類の人間であるが、其処のところは面倒見が良い。小学から何かと仲良くしてきた相手というのもあるだろう。波長が合う、というか志貴と有彦は在り方が似ていて、同類であるからだった。

しかし、だからと言って休みの志貴に電話をいれるほど、有彦は志貴相手に気を使っているわけではない。それなりの理由がある。

「しかし、弓塚も休みらしいし。偶然か？」

「確かに、ちょっと気になりますね」

クラスメイトであり、比較的仲の良い弓塚も本日は休んでいる。理由も体調不慮らしいあの二人が同時に学校を休んだ。珍しいと言

うよりも奇異である。もしかして狙って同時に休んで、そのままラ
ンデブーなんかしてんのかあいつらはと、勘ぐった有彦は取り合え
ず一時限をサボり遠野の家へと電話を入れた次第である。

すると何故かシエルがいたので、そのまま志貴の様子を聞くこと
にしたのである。

「まあ、もしかしたらそのままどっか遊びにいつてんのかもしれな
いですし」

「あ、二人はもしかしてそんな関係でした？」

「ああ、違います。先輩は知らないんすか？弓塚のやつ、遠野にホ
の字なんすよ。んでも付き合ってる訳じゃないんすけどね。遠野は
弓塚がそうだって全く気付いてないし」

鈍感と言うか学友とは少し距離をおき、それでいてズレタ志貴と、
いざと言う時に踏み出せない弓塚。相性としては最悪である。もし
かしたらはあるのかもしれないが、その確立は低いだろう。

「なるほど。言われてみれば弓塚さんと遠野くんって、温度差があ
るよつな、壁があるような気がしますね」

「やっぱそう思います？」

「なんとなく、ですけど」

「全く、遠野も人が悪いって。あいつ、そういうの興味持とうとし
ないんすよ」

やれやれ、と首を振る。

今この時授業が行われている校内では二人以外の人間は廊下に出
ていない。廊下には教室内から届く授業の物音と話し声、側にある
職員室の物音が聞こえるくらいで、閑散とした廊下に二人の話し声
は良く響いた。

しかし、この話はもついいだろうと、切り上げようとした有彦の
顔に影がかかった。

「それって、どういうことですか？」

シエルの顔である。斜に構える有彦を真つ直ぐにシエルは見つめ
てきた。その少しばかり興味を傾けた瞳の色に有彦は、苦笑しながらも口を開く。

「なんつーか、あいつって人から離れてんですよ。周りに迷惑掛
けないってか、俺の場合俺がそうしたいから一人にいるんですけど、遠
野の場合気い使いすぎで、いつの間にか離れてるんですよ」

端的に表して不良の有彦と善人のような見かけである志貴の共通
点はそこにあった。そもそも二人の出会いには小学校にまで遡る。そ
の時彦は志貴を見て、こいつは仲良く出来ない人間だと思ったも
のである。子供ながらの嗅覚とでも言うべきか、気の合う合わない
をあの時彦は身につけていたのだが、それが発揮されたのは志貴
にも同じである。ただ、今もこうして親しくしているのは、二人が
同じだから。

「一人でいる理由が違ふんです。俺は俺のため、遠野は周りのため
みたいな。……直接聞いた訳じゃねえんですけどね。匂いつてか、
勘違ってやつで」

「遠野くんにはそうする理由があるんですか？」

「どうだろ、正直理由はいろいろと思いだたりますけど、体が弱い
だとか、家の事情がややこしいだとか。んでもこれといって直接的
な理由はわかんねえっす」

「……そうですか」

眉間に若干の皺を寄せてシエルは暫し考えるように唇に手を当てる。そして有彦はそんなシエルを見ながら、苦笑いを張り付かせた。

「ってか、興味あるんですか？こんな話」

「そうですね、少し興味があります」

「んな、弓塚といい先輩といい、何であいつに……」

頭部をガシガシと掻きながら有彦は疑問の表情。一人の人物に関してあれこれと本人のいぬ間にするのは良くないとは、有彦は全く思わないが、少なくともこれほどまでの関心を示すのだから何かしら志貴の事で琴線に触れたのではないだろうか、と勘ぐった。

「ぬぐぐ。こうなったらアイツ一度とっ捕まえて尋問しねえと」

そうして苦悶と共に何やら危ない考えを抱き始める有彦に、シエルは呆れと共に少しの羨ましさを顔に滲ませた。柔らかさの中に、僅かな引っ掛かり。それが気になって、有彦はシエルに声をかけようとした所で。

チャイムの音が校舎に響く。

人のざわつく話し声が聞こえてきた。廊下が少し騒がしくなる。そろそろ授業終了時刻だった。そぞろに増える学生の姿に、何だか有彦は自分が聞こえたことかどうでもいいようなものに思えた。

「あら、もうこんな時間になりましたか。そろそろ授業に行きませんとね。それじゃ乾くん、ちゃんと授業受けましょうね」

「あ、ああ。んじゃ先輩」

そう言って、シエルは気さくな笑みを浮かべながら離れていった。

有彦は背中を見せながら離れていくシエルに、どうしようもない違和感を感じ、そして呟いた。

「んでも、なんであんな事話したんだ？俺」

何かがスツと、有彦の心の重心を傾けた。今になったその自身に働いた不可思議に、有彦は首をかしげながらも、自身の教室へと向かうのだった。もちろん寝るためである。

取り替えられたシーツの中に苦しみ呻きながらも気絶したように眠る志貴を、琥珀は見つめていた。

志貴の額には汗が吹き出て、翡翠は甲斐甲斐しくも湿らしたタオルでそれをふき取っていく。その顔に張り付く心配の色は消えていない。むしろ時間が過ぎるほどに増しているような気さえる。視線の先志貴の眠るベッドの側、翡翠の隣には秋葉が膝をつき、苦しくも息をする志貴の手を握りしめていた。

「兄さん……」

志貴の手を握る秋葉の手は白い。しかし、志貴の肌の色も秋葉と同等かそれ以上の白さを見せていた。まるで死体のようなだと琥珀は

思った。血の気の引いた肌の色は、心臓の鼓動を停止させた死者の肌だった。

今朝方、志貴の絶叫が朝の執務を行う秋葉とそれを手伝う琥珀の耳をつんざいた。決して人の多くない屋敷内には、志貴の悲鳴はひび割れ響いた。断末魔の如き叫びは秋葉の体を突き動かすにはあまりに充分だった。そして二人は瞬時に動き出した。秋葉はもしものために琥珀に救護用品と薬をありったけ用意させ、すぐさま志貴の部屋に駆け寄った。そして扉を突き破るように室内へとなだれ込んだ秋葉が目にしたのは、嘔吐を繰り返す志貴と、憔悴しながらも懸命に志貴の背中をさする翡翠の姿だった。

現在志貴は琥珀の応急施術により一応の落ち着きを見せ、取り替えられたシーツの中で眠りにについている。しかしどうしたものかと、琥珀は冷静な思考で捉えていた。

「琥珀。今日になれば、落ち着くんじゃなかったの」

志貴の手を握りながら、秋葉は言う。その表情は琥珀には見ええない。しかし、表情が苦虫を潰したようなものになっているのだろう、と琥珀は推測。

「はい。診察した限りではそのはずなんですけれど」
「じゃあ、どうして兄さんは……兄さんはどうして、こんなにも……」

苦しんでいるのだろう。

それは言葉にならなかった。音にもならぬ秋葉の悲嘆を琥珀は聞いた気がした。

昨夜行った診断の段階では、志貴は既に回復の段階に入っていた。元々精神的な問題であり、繊細なアプローチが必要なのかも知れないが、琥珀が聞く限りでは志貴は問題を認める段階には入っていた。あのまま捉えようとせず、逃げ出して内側に溜め込むことも出来ただろうが、あまり溜め込むのは良くないと判断した琥珀は志貴に働きかける事でそれを自覚させた。

もしかしたら、アレが良くなかったのかもしれない。志貴の肉体は健康とは程遠い。故にアレによって肉体に何らかの悪影響が発生する可能性もあった。

しかし、あの段階ではアレが琥珀のベストだった。襲い掛かる苦痛に歪む志貴の顔はなんとも情けなかった。その情けなさで回復の兆しに差し掛かるのだから、安いものであろう。

だから、声を荒げた秋葉が求めるような答えを琥珀は所持していない。心辺りはいくつかある。しかし、それを琥珀が言つつもりはなかった。

「わかりません」

「わからないって、貴方兄さんを診たのでしょっつ！ だったら何かあるはずじゃない!？」

「確かに私は志貴さんを診ましたけど、あの時はアレ以上の成果は認められませんでしたし、だから私としましてはアレ以上の事は分からないんです」

「見落としてはなかったの？何か重要な事が見れていなかったんじゃないかしら？」

「私が行ったのは問診です。ちゃんとした設備を使って見ることもなくはないですけど、あの時は私の目からしても、あの事以外に志貴さんの負担になるようなことはありませんでした。秋葉様だったら何か分かるんじゃないんですか？」

「……」

あくまで淡々と対応する琥珀に秋葉は志貴の手を握りながらも苛立ち混じりの視線を寄越すが、琥珀には通用しなかった。しかし、琥珀の口にするあの事に心当たりがあるからか、それとも秋葉自身分かっていないのか、口を閉ざす。それほどまでにあの事は、秋葉にとつて軽視すべきものではない。それを知っているからこそ、琥珀は秋葉の気持ちを悟っていた。

「あの」

一瞬生まれた室内の空白に、翡翠の揺れる声が入り込んだ。

「志貴様は、大丈夫なんでしょうか」

息苦しくも眠る志貴の顔を一心に見つめながら、翡翠は答えを求め。だが、秋葉には何も言えない。原因は分かっているのだ。それを断たなければ、何も変わらない。

「取り合えず今は落ち着いています。衰弱していますけど、それ以外には主だった変化は見えません。けれど、よかったです。不幸中の幸とでも言いますか、寝ゲロ「琥珀」……寝ながら嘔吐していたら吐瀉物が気管を塞いで窒息していた可能性がありましたし、直ぐにでも起き上がって吐いたのはナイスな判断でした」

「翡翠が兄さんを起き上がらせてくれたの？」

「いえ……私は何も、出来ませんでした」

翡翠の表情に悔恨の色が浮かぶ。しかし、翡翠が何も出来なかつたわけではない。翡翠は苦しむ志貴の手を握りしめ、懸命に声をかけ続けていたのだ。琥珀や秋葉には室内に入りこんだ時には、取り乱しながらも志貴の名を呼び続ける翡翠がそこにはいたのだから、何も言えない。

「……翡翠、兄さんはどんな感じだったの？」

「はい。……志貴様を起こそうとお部屋に入ったのですが、眠りながら志貴様は魔されていたようで、それで、私どうしていいのかわからなくてお声をかけたのですが、そしたら志貴様が突然叫びだして」

「悪い夢でも、見たのでしょうか？」

「分かりません。けど、苦しんでいる志貴様を見てられないから、私、志貴様に声をかけ続けていたら、突然、目を開いて、私を見たとき、何かに取り付かれているような目を為さっていて。次の瞬間には吐いてしまわれました」

「……分かったわ。ありがとう、翡翠」

秋葉の礼に、翡翠は力なく首を振った。実際翡翠は無力感に苛まれている。苦しんでいる主人を前に、翡翠はその苦痛を取り除く術を持っていなかったのである。それを仕方のなかったことだと、割

り切れるほど翡翠は人間が出来ていなかった。そんな翡翠を見ながら、琥珀は苦笑を漏らしたのだった。

「でも、何かに取り付かれたようになって。兄さんは何を見たのかしら」

「んー、案外夢の続きだったりするかもしれませんが？ 起き抜けに脳が混乱して夢なのか現実なのか分からなくなるような」

「……実際に兄さんの話を聞かなければ、何も分からないわね。琥珀、それに翡翠。今日は学校を休むわ」

それは唐突な言葉ではあったが、琥珀と翡翠にはそれが自然に思えた。

「よろしいのですか？」

しかし、それでも琥珀は聞かなければならないのである。秋葉は遠野のトップでありながら、未だ学生の身である。やるべき事は多く、見なければならぬ報告書はごまんとある。ただ、それでも。

「構わない。それにこんな時でない兄さんと長くはいられないから」

家族と言っても互いにそれぞれの人生があり、それは二人が共に過ごす時間をとことん奪っていった。今となつては秋葉は遠野グループ総帥であり、また県外の高校へと通う身である。本来ならば、寮に入る事が原則的なのだが、ただ兄と共に過ごしたいから少しでも多くの時間を確保したかった秋葉の努力により、秋葉は特別に自宅からの通学を許されたのだった。

「かしこまりました。それでは学校へは志貴さんとご一緒に一報入れますので」

「ええ」

懸念は募る一方であり、それを拭える一考に志貴の回復を待たなければならぬ。志貴の事は、心配だった。秋葉は昨夜琥珀に言葉屋敷を離れなかった事を正しかつたと認識し、今この場に入れる事に少しの安心を覚えたが、それは増す不安に押しつぶされるばかりで、ただ秋葉は志貴の手を握りながら、言葉を紡いだ。

「早く目覚めてくださいね、兄さん。秋葉はいつも兄さんの心配ばかりしてるんですよ」

その顔は憂いを湛えながらも、僅かな苦笑を浮かべるのだった。

そんな秋葉を見つめた二人は互いに見つめあった後、琥珀は笑み、翡翠は頷いて部屋から退室していった。

「それじゃ翡翠ちゃん。秋葉様のスケジュールを見直しておいて。

私は志貴さんの学校に電話をしておきます。今日は志貴さん寝ゲロしたので休みますって」

退室した後、二人は歩きながらもそれぞれ今日の予定を確認していた。秋葉が学校へと赴かないのであれば、そのスケジュールも整合しなければならぬ。遠野の中心は言わずとも秋葉である。そして普段秋葉は県外への高校で学んでいる事から、その時間帯を拘束されている身だった。緊急の事態が起これば解放される事になって

いるが、そのような事にならないよう秋葉は執務をこなしている。しかしそれでも当主として動く時間は短い。その為秋葉は寝る間を惜しみ、朝早く起きる事でそれを解消している。

だが、今日は別である。秋葉は恐らく一日中いるのだからその分だけ仕事を行える。故に仕事を一息に終わらせてしまおう、と琥珀は画策しているのだった。

「はい。私は館内の清掃などを。姉さんはどうするの？」

「取り合えず時南先生の所に行ってみて相談しようかと思ってるんだけど。と言うか翡翠ちゃん寝ゲロはスルーですか」

いつの間にそんなスキルを、と琥珀は若干の驚愕を覚えるのだった。

時南は琥珀がかつて世話になった医学の師匠である。全うな医者ではないが腕は確かであり、そこで琥珀は医療の知識を身につけた。先代当主の方針だった。薬を調合する腕も姉弟子に学び、今でも参考になることは多いだろう。

「わかったわ姉さん。いつ頃行くの？無視なんてしてません」

「そうですねー、あんまり早くても相手にされないでしょうから昼頃に行ってみようかしら。それまでは屋敷の事もやっておくから安心してね？くれぐれも私のいない所で料理しちゃ駄目よ？そう？だつたら嬉しいわ」

「分かりました。料理に関しては領きかねます。ただ何を言っても無駄だと思うので」

「ちよ、翡翠ちゃん酷い」

よよよ、と琥珀。そんな何気ない遣り取りが、二人のスタイルだった。琥珀の口調は明るい。自分を元気付けるためだと、翡翠は考えるまでもなく分かっていた。

翡翠は姉である琥珀を大切に思っている。双子だから、というのものもあるが、感情表現を得意としない翡翠の代わりに琥珀は良くしてくれていた。それを申し訳ないと思うのは、仕方のない事だろう。けれど、それでも琥珀の仕草を見ていたら、翡翠はほんの少しだけ険の取れた表情となるのだった。姉は偉大だとつくづく思う。

「あ、それと時南先生に行ったら少し帰ってくるの遅くなるかも」

それを聞いて、積もる話もあるのだろうと、翡翠は一人で納得した。ならば動かなくてはならないと、翡翠は自分がすべき事を考え始める。今現在、未だ朝である。やるべき事は多い。実質三人で今の屋敷は動かされているので、一時の停滞は回避すべきである。時間の出血はよくない。と言っても、翡翠は清掃などの雑務以外は行えないのが現実だ。やはり人手不足である。翡翠しか館内の清掃、書庫整理を行える人物がいなのが現状だった。故に翡翠は今日の日程を脳内で構築させていく。

だが、その思考の連続には必ず志貴の姿が見えた。
心配だと、心から思う。

「姉さん。志貴様は、大丈夫なの？」

それは先ほども聞いた事だ。けれど、やはり心配なものは心配な

のだ。

琥珀は翡翠のそんな姿を見て、仕様のない子だと柔らかさを笑みに馴染ませた。

「多分大丈夫。一時軽いショック状態にまで行ったけど、今は回復に持ち込んだ。楽観視は出来ないと思うけれど、でもそこは翡翠ちゃんの出番よ」

「私の？」

いきなり自分が話しに出てくる事で、翡翠は目を見張る。

「そう。志貴さんが苦しんでいるなら側にいて、それで助けてあげなくちゃ」

「……でも、どうやって」

「苦しんでいる時、誰かが側にいるだけで安心できるのよ。手を握ってくれる人がいるだけで、それで充分。あとは何をしてほしいのかとかを気を使って見抜く事ね」

「……でも、秋葉様が」

「ううん。秋葉様だけじゃなくて翡翠ちゃんもいなきゃ。それに身の回りのお手伝いをするのが翡翠ちゃんのお仕事なのよ。二人で支えないとね、病気の人は不安になっちゃうものよ」

「……」

「それにしても、志貴さんは本当に大切にされてるなあ」

ね、と琥珀は笑んだ。

あまりに自然な笑顔だった。

そのあまりに自然な笑顔に、翡翠は何も言えなくなつた。

一人。

それを自覚する事がある。

琥珀は現在屋敷内の庭に広がる落ち葉を愛用の箒にて掃いていた所だった。太陽は朝を温めてから天上へと昇り始めている。日差しは柔らかく、それでいて不快でもない。洗濯物も大いに乾くだろう。今頃は翡翠が今朝方洗われた洗濯物を干しているかもしれない。

時刻は昼に差し掛かろうとしていた。朝の慌しい一面から離れ、何気ないいつもの時間が過ぎていく。

違いがあるとすれば今の時刻に屋敷内に秋葉がいる事。そしてこの屋敷の長男がいる事だろうか。

二日前、勘当扱いを受けていた遠野の長男、志貴がこの屋敷に戻ってきた。

先代当主が亡くなり、当主の娘である秋葉が当主となつてから決められた事だ。先代当主が決めた事を変えてもいいのかと、屋敷に住む親戚たちが抗議を行ったものだが、秋葉はそれを実力にて叩き伏せ、正論によって自らの主張の正当性を述べ、それでも反感を抱く者共を追い出すと言う強引さで志貴を屋敷へと連れ戻した。かな

りの無茶だった。

それでも志貴と暮らしたいと言う秋葉の願いの強さを推して然るべきだろうか。

「まあ、私もお手伝いしたんですけどね」

誰にともなく、琥珀は呟く。

秋葉の願いを叶えるため、琥珀は色々と手回しを行ったのだ。渋る親戚の身边を調べ秋葉に渡し、秋葉には言えないような手も使った。

元々、親戚と秋葉の仲は悪かった。それゆえ秋葉は当主となり、徐々に親戚を追い出していったのだ。それが加速した原因が志貴であつた。

「本当、秋葉様は志貴さんを大切にしていらっしゃいます。大切というよりも、いなくなる事を怖がっている感じでしょうか」

琥珀は見逃さない。長い間屋敷で暮らした相手である。それを琥珀が分からないはずがない。故に琥珀は秋葉の願いを叶えた。秋葉の願いを叶えるためにさり気無いバックアップを行ってきたのだ。

それが功を奏し、今志貴は遠野にて過ごしている。秋葉は今の生活を良しとしているし、翡翠も嬉しそうだ。琥珀としても手伝った甲斐があるというもの。

しかし、その秋葉が果たして何故其処まで志貴に固執しているのか。琥珀には何となく察しがついている。秋葉は喪失を嫌う。自分

のものがなくなる事を恐れている。殊更心を許すような相手に恵まれなかったのもあるだろう。幼少から回りは大人だらけで、遠野に相應しい人間になるように言われ続けたと聞いたことがある。それゆえにいらぬものばかり押し付けられて、本当に欲しいものは中々手に入らなかつたのだとか。

だが、それも今となっては志貴と共に暮らせているのだ。その志貴も今の暮らしをどう思っているのかは分からないが悪い気はしていなさそう。実情は分からない。今度それとなく聞いておくべきだろうか。

本当に、全てが上手くいっているように思える。

「……」

日常の最中に突然として誰もいない場所、あるいは誰かがいるはずなのに一人ポツンという事がある。料理をしている時、庭で植物を育てている時。温かな空間の中、誰かが、例えば秋葉が側にいるのに、ポツンと。隙間の時間とでも呼ぶべき、そんな瞬間だ。

そのたびに琥珀はそれを誤魔化す事も紛らわす事も行わない。それは無意味だと、笑う。

自分は一人だ。自分はたった一人なのだ、それを撤回する事に意味は無い。例えそれを改善したくて明るく誰かと会話をしても、一人であることに変わりはないのだ。

それを、琥珀は抱えている。

「そつえば、そろそろでしょうか」

自然と、琥珀の握る箒の柄に力が込められる。ぎりぎりと、力が次第に強くなっていく。

屋敷の中、今秋葉は何をしているのだろうか。志貴の面倒を見ているのだろうか。翡翠は志貴の汚したシーツを干しているのかも知れない。何となく、であるが屋敷の中心が志貴になり始めている。取り合えず皆幸せそうだ。

「
」
幸せそうだ。何かを排他して、誰かを忘れようとして、皆動いている。

それを思うと、自分が一人なのだという思いが強くなっていく。

志貴。

あの人がいるだけで、光が強くなっていくような気がする。それは遠野の屋敷を照らし出し、皆を幸せにする。

ただ、それゆえに。

「あの人と、会うなんて」

琥珀は笑みだ。しかし、その表情の本質は笑みとは異なる。笑みと呼ぶにはあまりに陽性を放たない、おぞましいまでに笑みである。

琥珀は志貴に対し、これといった複雑な感情は抱いていない。そもそも琥珀には琥珀なりの目的があるから秋葉に賛同し、志貴を屋敷へと呼び寄せた。

その目的には志貴の存在が必要不可欠で、だからこそ志貴をきちんと扱っている。

目的がなければ、そもそも関わる事もなかっただろう。そうでなければ、何故関わろうだなんて思う。

あんな、人と。

「
」

光も当てられない闇は次第に濃くなっていく。

だから琥珀は箒を胸に抱いた。

強く、強く。琥珀だけは、一人だと。

「時間、かな」

たった一人の、あの人を思う。

焦がれぬ刹那など、ありはしない。

「待っててね、朔ちゃん」

第六話 人殺の鬼？（後書き）

友人に言われた一言。「読みにくい。読む気になれない」が突き刺さる六です。

うん。自覚は、正直ありました。

言われたことは三つほど。

読む気になれない。

長すぎて途中で飽きる。

何より、中途半端。

何も言い返せないのは思い当たる節が多かったからでした。言い返す気概も起こらなかつたです。読者の気持ちになつて考えろ、と友人は私に熱く語ってくれました。ありがとうございます。ただ金は返してくれと切に願います。それだけが私の願いです。

第七話 人殺の鬼？ (前書き)

とある男の話をしよう。

ただ殺すために生れ落ち、それゆえに血に塗れ続けた男の物語を。

第七話 人殺の鬼？

七夜朔は自らを人間と思っていない。

人間であるはずがない、とさえ思っている。

そう確信し、確証している。自分は人間以外の何かなのだ、思
い込んでいる。

何故なら、彼には望みがなかったからだった。

夢がない。希望がない。理想がない。目的がない。理由がない。
価値がない。意味がない。

そして、生きようとする渴望もない。

彼の中身には何も注がれる事がなかった。七夜朔という器には彼
以外から注がれる意というものが何もなかった。彼には何も注がれ
なかった。

それを是とも思わず、また非とも思わない。

彼には彼のものしかなかった。彼が自ら抱いた願いしか、なかっ
た。

故に、彼は人が理解できない。他人から影響されず生きてきたも
のが、他人を理解できるはずがなかった。そうして彼は呼吸を続け
てきた。

だから、七夜朔は自分を人間だと思っていない。そんな上等な生
物である、はずがない。

もし、彼が人間であるはずならば、彼は人間の感情を理解できるはずだった。

無上の至福に歓喜し、腸の煮えくり返る憤怒を抱き。
悲嘆に声を上げて絶望し、幸福に唇を噛み締めて涙を流す。

そのような事が、彼には理解できず、共感できない。
それを彼は不幸と思わなかった。何故なら彼は幸福がどういってものかさえ理解できないのだ。

そんな存在が、果たして人間であるはずがない。

だから彼は機械だった。自らが持つ機能のままに動き、結果を生み出すだけの機械。ただ無情に、ただ無機質に、己の持つ機能のままに動く。そんな精密機械でしかなかった。

そして、七夜朔の機能とは殺す事だった。それだけが彼の持ちえる唯一で、全てだった。

それ以外を持つことなく、理解する事もなく、ひたすらに殺意を研ぎ澄まし、研鑽を重ねた。内臓を握り潰し、首元を打ち砕き、喉笛を噛み千切り、心臓を抉り出し、脳髓を撒き散らす。それだけが彼にできるたった一つの機能だった。

そして彼の足元には屍が積み上げられ、血だまりの海が広がった。彼の周りに生者はおらず、亡骸が道を成した。

そんな者が人間であるはずがない。人間でいいはずがない。

彼はきつと侮蔑と嫌悪に塗れ、畏怖と恐怖に溺れ、憎悪と害悪に歪み、全ての負に晒される。人間を理解できず、共感も出来ず、ひ

たすらに殺戮を続ける彼が、人間でいいはずがない。それを果たして人と呼ぶべきか。そんな存在が、まるで化け物のような存在が、人間と呼ばれるべきか。

彼はきつと化け物のような化け物なのだろう。

それ以外にはなれない。それ以外には、成れない。成り果てるしかない。

故に、彼は　　。

昨夜と今朝の狭間の時間。それは目蓋を薄く開いた。

鉄骨に身を委ねながらも、虚空を思わず深く静謐な瞳はゆれることもない。僅かに届く人工の光も入らぬ埃っぽい暗がり、虚空を思わずその蒼色は煌々と輝いていた。左肩から不自然に垂れ下がる中身の無い袖。妙に違和感を感じさせぬ出で立ち。

そこは街中にあるどこにでもあるような工場現場だった。乾いた空気が白色の布に覆われた工場現場の中に渦巻き、淀みすらも開かれた天蓋へ吹き飛ばしていく。

そんな場所に人はあまり来ない。来たとしても、今の時刻。従業員すらも立ち寄らぬ深夜に人は侵入してこない。用もない者が好き好んで立ち寄る事もしないような場所である。

男はそんな場所にいた。藍色の和装に身を包み、中身の無い左側の袖を揺らしながら、その男は布を被ることなくこの工場で一眠りした。冬に移行する秋の夜を過ごすには、少しばかり肌寒い時機で

あるが、男はそのようなものには影響もないように、そこで眠りについた。

『よう。目醒めたか、朔』

そのままその場にて動かない男、七夜朔に対し、頑健な工場の鉄くずが声帯を持ち、口を開いたかのような金属の悲鳴にも似た声がかけられた。

七夜は反応しない。響く声にも、声と呼ぶにはあまりに不快な軋む音にも、まるで聞こえていないかのように反応しない。ただ、そのような事は分かっているのか、金属は引き攣る笑いを堪える事もなかったのだった。

『ひひひ』

けたけたと、金属は愉快に笑う。

工場現場には七夜以外の人間は見えない。それ以上に生物の気配がなかった。害虫や、害獣。それらが一切その現場にはいない。ナニカの存在を感じ取り、近づくのを嫌悪したかの如くに。

故に、そこには金属しかなかった。真っ白な布。朽ちた金属。欠けた鉄骨。

そして、打ち捨てられたように地面へと放り出された日本刀のみである。

鞘に収められた日本刀は七夜の手元に置かれているのではない。七夜からは離れた五メートル以上の場所、それこそ投げ出されたよ

うに、それはある。

不可思議な事に、黒漆塗りの鞘は数枚の札と数珠が巻かれ無理矢理何かを抑え込んでいるかのような印象を与える日本刀だった。これと言つて刀を特徴付けるものは鞘に収められているからか見られない。

ただ一つ、それを何かと現すので在るならば、柄に骨喰ほねほみと銘が刻まれているだけであつた。

そして、日本刀 骨喰は如何様な怪異か、その収められた刀身から軋むような音を発するのであつた。

『んでだ、約束は今日らしいな。ヒヒ、勝手なもんだ』

「……………」
『朔。手前は行くか、行かんのか』

そのどちらを選択しても面白いと、骨喰は言外に囁く。どうせ俺たちには、個人には関係ないのだと、骨喰は笑つた。

「……………」
『……………』
考えるまでもなかつた。七夜は七夜のまま動く。誰の意志でもなく。自らの意志で。

体を動かす。半端な体勢によつて眠りについていたせいか、体の筋肉と関節が僅かばかりに固まっていたが、それを無視する形で立ち上がる。動きに淀みはなく、ゆらりと立ち上がった。隙間から差し込む明るい光が七夜を映し出す。

温もりなく、感情も宿さぬ蒼の瞳。

深く深く、空を思わすその蒼は、なおも蒼く輝く。

そして、立ち上がるその右腕から、未だ乾かぬ朱の色が肌を伝い、錆色に垂れた。

『血ぐらい拭え。獲物に餓えた獣が這い寄って仕方ねえ』

垂れる血は溜まり、やがてソレに伝っていく。

朔の前方。蒼く全てを映し出すような瞳の中に、ソレはあった。

着物を纏った、白髪の男がそこで倒れ伏していた。投げ出され手足は強ばり、髪の間隙から見える表情は瞳を閉じながらも驚愕を張り付けている。

呼吸はしてない。

心臓は、ない。

深夜の始まりに、朔は何かを殺した。ナニカが存在が放つ気配、人外の匂い。魔の匂い。人間とは相容れぬ者の匂い。それらを感じ、朔は名も知らぬ、それが一体何なのかさえ知れない存在の心臓を抜き取り、握り潰した。

その存在が何なのか、朔にとってはどうでもいい。今となってはどのような事を口にしていたか覚えていない。心臓を完膚なきまでに破壊した後、死体はそのまま放置した。それは朔の役割ではない。それは考慮する事ではなかった。その様な事、朔にはまるで関係のない事だった。

アレを殺す理由すら、朔には持ち合わせていなかったのだ。

しかし、朔は殺した。

完膚なきまでに心臓を破壊した。心臓を握り潰し、破裂する心臓を磨り潰し、千切れた肉片と化すまで握り続けた。

もし、七夜朔に理由があるとするのならば

『おい、俺を忘れてんじゃねえぞ』

骨喰の言葉を朔は無視しながら、歩み始める。

そして死体だけが残された。

右腕を血流に赤く染め、地面に血痕を残しながら、勇気の如くにゆらゆらと歩むその姿。

その姿は、殺人鬼以外の何物でもない。

頭上、開かれた天蓋。

そこに、月はなかった。

日ノ本の国とは魑魅魍魎たる者の巣窟である。

人が存在するからこそ、人とは対極的な魔も存在する。その関係性は喰うか抜られるかのものであり、極僅かに人間社会との共存を果たす魔もいなくはない。国としての気質とも言つべきか、周囲を海に隔離され、その国土の殆どが山であるため、古来に産声を上げた怪異はその独自性を保ち続けた。それ故に他の魔とは一線を書く者が多い。それ故に日本は独自の組織形態を形成し、それらに対抗

してきた。

退魔、と呼ばれるモノがいる。彼らは悪霊、あるいは怨念と言ったものや、果ては物の怪と称される存在に対応するものたちである。彼らは被い、封するものたちであり、其処が殲滅を是とする教会とは異なる。更に行つてしまえば、彼らは魔の存在を考慮し、受容している部分さえある。それが教会と、日本の退魔が折り合わない根本の理由だった。

神の教義では対応できぬものへの絶滅を第一とする教会と。人間の生活を守るための手段として魔に相對する退魔。

彼らはそもそも目的が違っているのだから、反りが合わないのは道理である。

「……」

其処は香辛料の香りが満たされた店内であつた。スパイシーかつエスニックな香りが鼻腔をくすぐり食欲を誘う。時間は昼時であるから、店内には人が多い。中々繁盛している様子だ。なればこそ、早めについて良かったと、シエルは改めて思った。

店内の奥、一番端のテーブル席であり、そこからは硝子越しに店外の道なりや行き交う人々が良く見える。そこでシエルは片手にスプーンを握りしめ、黙々と真剣に、それでいて笑顔を惜しみもせずにかレーを口に運んでいた。

食事中である。シエルはここ、メシアンのかレーを食していた。

一人でかレーを食し、一口食べることに笑顔を零すその姿は料理

人冥利に尽きるやも知れないが、一人つきりで食べているのにその満面の笑みは少々不気味ですらある事を今ここに記しておく。しかしながらシエルはただひたすらにカレーを食していた。

目の前にカレーがあるのにそれ以外を優先させるのはカレーに対しての無礼である、とさえ思っている彼女はカレーを食している間、他の作業を行う事を良しとしない。嘘偽りなく、自分の全てをカレーに対して曝け出す。それはあたかも神に跪く聖職者の如く。

そんな彼女の仇名はインド。正しく彼女を表した名であろう。

だがこのような時間帯。食事時の頃に制服姿のシエルがいるのはあまりに不自然なようにも思える。それでいて彼女は西洋人。注目の的にならないほうがおかしい。

しかし、事實はどうだろう。

周囲の人々、そろそろ満席となり始めた頃に、彼女の座るテーブル席には相席する者もおらず、誰も彼女を見ていない。それどころか、誰も彼女に気付いてすらいなかった。

あまりに不自然だ。一種異様とも呼べる。

だが。

「失礼。相席をしても？」

シエルに近づく男がいた。

男は少し寄れた背広を着こなし中肉中背の男だった。穏やかな表情に銀縁眼鏡をかけた、何処にでもいるような姿の男だった。一見

してサラリーマンが食事に来たような、そんな気軽さと気だるさを醸し出した男である。

「ええ、よろしいですよ」

そして、それにシエルは眉を潜めることなく微笑で応えた。

シエルの言葉に男は「よっこらせ」と零し、シエルの対面の席に座る。

それから暫く二人は無言だった。二人のいるテーブルはまるで周りに切り離されたかのように喧騒が遠い。男は何も喋らず、ただ口元を緩めてシエルを見つめ、シエルはそんな男を気にすることなくカレーを堪能していった。カレーの盛られた皿が綺麗になり、そこで一段落したのち。

「驚きましたよ。教会の、それも埋葬機関の人間が日本の退魔に正式に接触してきたなど」

口元をハンカチで拭きなおすシエルに、男は声をかけた。

「ええ。私も少々驚いています。けれど機関長の命令なので、命令には従わなくてはなりません」

「そうですね。私も上からの指示には逆らえません」

「お互い、苦勞していますね」

「全くです」

上辺だけの言葉を互いに並べる。

しかしながらその苦勞は推して図るべきだろう。上司に苦勞する

部下の構造は何処に行っても同じと言う事だろうか。二人は全く同時に己の上司を思い浮かべ、そしてため息をついた。

「埋葬機関第七位シエルです。今回は協力要請にお応えくださり感謝します」

「私はこの一帯を纏める退魔の人間です。今回は教会の協力要請に答えるため、ここへ」

二人は、所謂日の目に当たることなき世界に属する両者である。世界には表に出すべきではない闇がある。それを殲滅し、撃滅し、封殺し、隠蔽する事が二人の仕事でもあった。そしてシエルは教会の暴力である埋葬機関に所属する者であり、今回は日本へとある存在の討伐に赴いてきた。

基本的に教会は他の退魔組織に関し協力を要請することなどない。そも、彼らすら教会の教義に従わない異端である。そのような存在に対し、協力など結べるはずがない。だが、今シエルはここにおいて退魔はその目の前にいる。

「しかし、何故制服なのですか？」

「潜入していた学校から抜けてきて直接ここに来たので。着替える暇がなかったのです」

シエルの言葉に、男の表情が僅かに曇る。

己の管轄を他のものが勝手に潜入し探りを入れているなど、決して良い感情は与えないだろう。

しかし。

「それはあまり他の者には言わないでくださいよ。手続きやら工作が増えて仕方がありません。最近はただでさえ忙しいのですから。」

強硬派が拳つて行動を始めたら胃が持たない」

気苦労を吐くように、男は肩を落とす。

「すみません」

悪びれもせずにシエルは言う。その姿に男は更のため息を吐くのだった。しかし、その対応は、シエルの行動を黙認すると言う事に他ならない。なるほど、とシエルは男を見る。組織としてではなく、役割としての実を取る。中々賢しい人間であるようだ。

「しかし、ここにいるという事は協力関係を結んでもいいということですね」

「ええ。中央の命令には逆らえません。それに今は協力してくれたらありがたいです」

「今は、ですか。それは最近の吸血鬼騒動ですか？」

「まあ、それもあります」

どこか歯切れ悪く、男は肯定を示す。

ここ数日。この三咲町一帯で吸血鬼騒動と称される事件が巻き起こっている。それは被害者の首元に日本の穴があり、そこから血が抜き取られているというものであり、被害者の数は増加の一途を辿る。マスメディアや警察では愉快犯の犯行と見られ調査が進められている。

しかし、それは表での話しだ。

「吸血鬼が登場してから行方不明者の後が絶ちません。今は表沙汰になっただけですが、しかしこのまま犠牲者が増え続ければ、大変

なことになります」

吸血鬼は実在する。いや、正確には吸血種と呼ばれる存在は確かにいる。

そして今、三咲町を騒がす犯人の正体は吸血鬼。

「正確な数は？」

「五十は下らないかと」

情報では死者ばかり報道されているが、しかし実際は行方不明者の数が増加してる事が問題だった。現在は情報規制を行い、混乱を防いでいるが、もしそれが表沙汰になってしまえば三咲町は恐怖の町として恐慌状態になる可能性がある。余計な混乱を防ぐためには致し方ない事なのかも知れないが、住民の安全を確保するためにはある程度の情報は流すべきではないだろうか。

「公表は現在不可能です」

「え？」

「情報規制を行っているのは私たちではないのです」

思っていることを当てられ、シエルは思わず声を漏らす。

表情を全く変えていなかったのに、この男はシエルの疑問に答える。

「では、誰が？」

「遠野です」

そこで、男はカップに注がれている水を口元に傾けた。溜飲を押さえ込めるように。

「現在三咲町では退魔と遠野の協定が結ばれています。なので三咲町のことに関して表も裏にも名がある遠野がそこらへんを纏めているのです」

「ですが、それでは住人の安全はどうなるのです」

「今現在、起こっている事に関しては何とも言えません。確かに報道を規制する事で無用な混乱を防ぐ事はできます。しかし、それは安全ではないのです。どれほど隠そうとも危険には変わりありません。だから私たちは誰にも知られる事なく人々の安全を守らなくてはなりません」

「そうですか。……遠野は何故その様な事を？」

「さあ。現在の当主である遠野秋葉の決定らしいですが、詳しくは分かりません。しかし、私たちのやることに変わりはありません。ただ私たちは原因を取り除けばいいのです。所詮末端でしかない私にはどうでもいいことなんです」

所詮上が何を考えているかなんてどうでもいい。

ただ実を取り、ひたすら命令に従う。

それはまるで軍人のような意志であった。

「……」

「ああ、そうだ。シエルさん。吸血鬼に関して、何か情報はありますか？お恥ずかしい限りですが、私たちは対応に追われる一方で犯人像……犯鬼像を掴んでいないのです」

「ある程度、ならですが」

「それは話しても差し支えない内容ですか？」

「未だ憶測でしかないようですので、教えても問題はないかもしれませんが。しかし、それを聞くと言う事は協力していただけ、という事ですか？」

「……私に確約できる事は情報の共有ぐらいでしょうか。共闘とな

れば難しいかもしれません」

「それでもかまいません。情報だけでも充分かと」

男は暫し黙考する。そして「協力しましょう」とだけ言った。

そしてシエルは己の考えである犯人像をつかませない程度の情報を話す。全てを話すには信頼と言うものがあまりに足りない両組織である。男もそれは分かっているだろう。何も言わずに頷くだけで深くは追求しなかった。しかし、シエルの人柄ゆえに、ほんの少しだけの確信にも似た憶測を言葉にする。

「もしかしたら、犯人に遠野の人間が関わっている可能性がありません」

「それはつまり、遠野が犯人であると？」

「いえ、それは尚早です。ただ、可能性での話です」

「何故、そう思うのですか？」

「遠野が情報に関わっている、というのも一因ですが。あとはそうですね、勘、でしょうか」

「……」

シエルにとっても、男にとっても勘というのは意外と馬鹿にならない。それは魔に関わる二人だからこそ分かる、常識外の力であった。ただ、シエルにとって違つとすれば、それは感でなく、確固たる理由があるからこそ。そして犯人の特徴が分かっているからこそ。

「分かりました。それとなく遠野に探りを入れておきます」

「よろしく願います」

そこで話し合いは暫しの落ち着きを見せた。気付けば時間は少々経ち、人が少なくなり始めている。その流れに身を任せることはな

い。何故ならシエルには学校へと戻る理由がやってきていないし、何より目の前の男に対し、もうひとつだけ聞かなければならないことがあるのだ。

「もうひとつ、聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」

「かまいません。時間にも余裕があります」

「はい、それでは」

そこでシエルは一端言葉を区切る。

「七夜朔という人物をご存知ですか？」

瞬間。恐らく七夜の名が飛び出た時、男の表情が一変する。それまでの表情、まとう雰囲気とは打って変わる。凍えるような無表情。気軽さ、気だるさは掻き消され、銀縁眼鏡の奥にある瞳はひたすらに冷たい。氷のような、瞳だった。

あるいは、この表情こそ彼の真実の顔なのだろう。今までの表情は全てがフェイクであり、しかしその仮面の内側には怜悯が湛えられていたのか。

「どこで、その名を？」

慎重に、あるいは荒を探すように、男は言葉を選ぶ。

「冬木の報告書から。私たちの部署の物好きな機関長にその内容が目をつけられたでしょう。私も少しだけ目を通しましたが、詳細が全く掴めないのです」

「むしのおきな蟲翁の件か……」

舌打ちを一つ。

とある異変がここ数年の内、日本で起こった。

妖怪、蟲翁が討伐されたのである。

蟲翁とは、かつての資料によれば西洋より日本に渡った魔術師の一族の妖怪だった。それが時を重ね、その体を蟲に組み替えた事により各地の人間を襲い始めたのである。魔術師であることもおこがましいものだと言うのに、ただの人を襲い始めたのは許されざる事ではない。

それ故幾度となく討伐隊が組まれたのだが、悉く撃退され、殲滅された。肉片すら残されずに、討伐隊は蟲翁の腹に収まったのである。そのあまりの非常識さ、強大さ、狡猾さに、ここ数十年蟲翁は放置されてきた。

しかし、それが討伐されたのである。

そして、討伐した人間が七夜朔という存在だった。

七夜朔の存在が教会に知らされたのは、とある報告書だった。その近辺を纏める教会の男、蟲翁の討伐に共闘した男が記した報告書が、気まぐれを起こした埋葬機関ナルバレック女史の目につけられたのである。あるいは、共に性格の悪さに評定のある二人が何らかの縁を生み出したのかも知れないが。

「流石に、教会の人間への隠蔽は不可能だった。という事か」

苦渋を舐めるように、唸りが漏れる。

「あなたは七夜朔を知っているのですか？」

「……………」
「教えていただけますね？」

念を押すシエルの言葉に、男はくぐもる。

「だが、それは」
「情報の共有」

口元を濁そうとする男を、シエルは逃がさない。

「貴方は先ほど情報の共有なら可能だと、言いましたよね？」

「……………」それは今回の吸血鬼事件に関することだけだ。それ以外の情報を提供する事は認められない」

「認める認めないの問題ではありません。あなたが七夜朔を知っているかどうかです」

「……………」

そして二人は見つめあった。若干の敵意と、疑念を秘めた視線。シエルの瞳が、僅かに煌く。それは美しさを湛えながら、空洞のようになぜか揺らめく。

「強引だな、教会の人間は」

「ええ」

「傲慢だな、埋葬機関は」

「はい。それに関しては自負があります」

「魔眼まで用いるとはね。それも命令か？」

「残念ながら。確実にと言われたので」

「……………」七夜朔に関しての情報開示は認められない。それは最早中央

でも決まっている。私の逆らえるものではない」
「……そうですか」

男は相変わらずの無表情である。しかしながら、その冷たさは少しばかり変質し、若干の呆れを含ませていた。シエルの無理矢理な行動に、ありえなさを見たのであろう。交渉役としての行動ではない。

命令を遵守する。それは末端の役目なら極自然なことだ。当然守らなくては成らないものである。そうでなければ、疾うに切り捨てられる。それは裏の世界の住人であるならば尚更な事だった。

「ただ」

そこで、はたと男は言葉を止めた。

「中央の情報は駄目だが、私自身が聞いた話だけならば提供が出来る」

「……何故、教えてくれる気になったのですか？」

ありがたさよりも先に、疑念がシエルを包み込み、口を開かせた。

情報提供を拒んだ相手が、突然翻意し七夜朔の情報を晒す。あまりに納得のいかない事である。故にシエルは疑りの目を向ける。

それに、七夜朔の情報を提供しても、この男には役得がない。七夜朔の情報はシエルが現在追っている吸血鬼とは別な案件であり、ここでシエルに話したとしても今回の三咲町には全く関係がない。組織は情報の開示を殊更に拒絶する。故に情報を話したとしても、

この男の身边に影が差し込む危険があるばかりで、実利がない。

シエルの疑念を浴びて、男は柔らかく笑んだ。

「シエルさん。私は今日、捨て駒にされたのです」

柔らかな仮面。態度が変化していった。厚い、感情を隠す仮面。

「埋葬機関の対応とは、恐らく貴方が思っている以上に厄介です。別に敵対していれば問題なのですが、埋葬機関（貴方たち）と退魔（私たち）は今まで互いに不干渉を貫いてきた。しかし、欧州を遠く離れたこの極東の地でも教会の暴虐は聞き及んでいます。その横暴とも取れる実力行使と他を省みぬ振る舞いは、日本人たる私たちに脅威以上の恐れすら抱かしたのです。その相手が自らこちらに接触してきたのですから、上は歯噛みしたのでしょう。それ故にどうするかを検討したのです。碌な手続きすら行わずに強引な接触ならば、まだやりようがあった。敵意を剥いた相手には悠然と立ち向かえばいいのです。しかし、現実には正式な手続きを踏んだ接触です。そのような相手を無碍にする訳にはいかない。誠意には誠意を返さなければならぬ。突っぱねれば良かったのかも知れませんが、悲しいかな日本人の性質は真に度し難いものです。受け入れてしまった。あまりに強大な存在を懐の内にです。でなければどうするかという訳で、選ばれたのが私です」

「……」

埋葬機関が他の組織に正式な接触、しかも協力要請を行ったのは、埋葬教室から始まる歴史においても前例を見ない。彼らが動いた結果は常に事後承諾だった。

「今、私の体には爆薬が巻きつかれています」

「なっ
!？」
「ここら一帯、一キロ以上を地獄に出来るくらいには威力のあるもの
のです」

シエルの目の前で、男は背広の中身を開く。背広の内側には糊の効いたワイシャツと、それを覆い尽くすように、薄いプラスチックの入れ物が到るところに張り付いていた。背広を着こなしていればまるで分からぬ凹凸のない滑らかな入れ物だった。

その中には特別製の爆薬が納入されている。爆薬とテルミットを複合せたようなそれは猛火と爆炎を徒に撒き散らす代物であり、小規模な街ならば丸ごと消毒せしめる威力を誇る退魔特製の一品だった。

「もし、今日ここにきた埋葬機関の代行者が無作法にも実力行使に出るのであるならば、せめて一矢報いる。それが上の消極的な結論です。それ故に、下っ端であり碌な働きもしない私が選ばれたのです。捨て駒として」

「そんな事などして、意味はないはずですよ」

「そう。意味は無い。しかし、ただでは返さない。必ずや抵抗を行うべし。そんな命令です。どうです？あなたには理解できないかもしれない。けれど、一矢報いる。もしかしたら起こるかもしれないその時のために用意されたのが、私です。どうです、シエルさん。あなたは笑いますか？」

シエルは絶句を、しなかつた。

ただ瞠目し男の言を聞き続けた。

そして脳裏に映るのはかつて自らが体験した筆舌にし難い地獄だった。

「……笑いません」

「……」

「私はそれを笑いませんよ」

そうしてシエルは男が見惚れるほどの笑みを見せつけた。

「……そんな貴方だから、話す気になったのです」

どこか安寧を滲ませて、男は言葉を漏らした。

しかし、男は見逃したのだった。

シエルの双眸、瞳の奥に覗く影を纏わりつかせた執念の業火を、
執着の憎悪を。

第七話 人殺の鬼？（後書き）

ご無沙汰です。六です。

ここ暫く執筆できなかったことをお詫びいたします。

年末身内に不幸が起こり、執筆どころか普段の生活すら気力が出ませんでした。

それが原因なのか要因なのか私自身判別がつきませんが、しかし一ヶ月執筆しなかった事には謝罪をしなくてはなりません。申し訳ありません。

それと、恐らくですが後にこの話の加筆を致します。所用と、そして生存報告のためこのようなもので投稿しました。

第八話 人殺の鬼？（前書き）

そして、遂に彼は一人になった。

だが、彼はそれを寂しいと覚えることは終ぞありえなかった。

何故なら、彼は孤独を知らず、寂しさが何たるかを理解できなかったのである。

第八話 人殺の鬼？

響く、鉄を打つ音。

煉獄の如くに燃えさかる火柱。

混じる悲嘆と憎悪の怨嗟。怒号が割れんばかりに劈き、幾重にも阿鼻の叫びは木魂する。

やがて劫火は闇色と化し、それは狂笑に齒肉を晒した。

「七夜朔とは、一概に言えば退魔に類する暗殺者です」

どこか言葉を吟味するかのように、男は慎重に口を開く。

店内は既に昼食時を過ぎたからか、客もまばらに成り始めている。しかし、そうであってもシエルと男が周囲に着目される事はない。テーブル席に展開された認識障害の結界は少なくとも通常の人間には、この場所は制服の少女とサラリーマン風の男が一緒に食事を取っていると思われるだけで、その話している内容や、二人の組み合わせに対し違和感を抱かせない。

「暗殺者、ですか」

「はい、そう聞き及んでいます」

暗殺者。それが意味する事は、七夜朔は純粹な戦闘者ではないという事だった。

「けど、退魔の者が暗殺なんて」

シエルは瞬時に疑問を呈する。それは暗殺で、魔に挑む無謀を指摘している事に他ならない。

魔とは、人間の理が通用しないからこそ魔である。その呼ばれる所以をそのままに一切の常識が通用しない相手である。

埋葬機関に所属するシエルでさえ、対魔専門の純粹殲滅主義である埋葬機関のシエルでさえ勝利の掴めぬ存在は数多といる。そのようなモノに対して暗殺など、結果は見えて透いている。

「そうです。確かに、魔に対し暗殺を仕掛けるなど、愚劣の極みでしょう」

「でしたら、なぜ」

「シエルさん。物事には、役割というものが在るのです」

「……役割、ですか」

その役割ゆえに、七夜朔は暗殺者なのだ。男は言う。

「貴方がこうやって私の目の前に座り、私が捨て駒とされたのと同じように、人にはそれぞれ役割があります。元々、七夜一族とは殺し屋の一族でした。長い間、その業と血統を秘匿させ続け、そして暗殺を成功させ続けることでその地位を確立させてきたのですが、七夜朔はその生き残りです。七夜は混血に対する抑止です。外れた混血を処理するための退魔でした。」

朔が確認されたのは、約五年前。その頃から七夜朔の噂が飛び交い始めました。嘘か真か、真贋も確かめられないものばかりですがね。

曰く、殺し屋。曰く、暗殺者。曰く、殺人鬼。曰く、亡霊。曰く、虐殺の輩。曰く、殺戮人形。曰く、最後の七夜。曰く、七夜の体現。

あまりに呼び名が多すぎる。それこそ作為的なまでに。だから七夜朔に対しては判断が難しいのです。噂ばかりが飛び交って、報告書にも名が記されていない。正式には確認がされていない状態です。しかし、七夜朔の存在は私たちの中では既に周知のものとなっています」

「……物騒な呼び名ばかりですね」

長の時を経て、己の価値を示し続ける事でその保全を獲得し続けた一族。

そうなるために、一体どれ程の淘汰を行ってきたのだろう。

「依頼されて動くから殺し屋。姿を見せないから暗殺者。対象を選ばないから殺人鬼。実像が掴めないから亡霊。標的以外の全ても殺してしまうから虐殺の輩。一端動いたら止める事が出来ないから殺戮人形。滅びを免れた最後の一人だから最後の七夜。七夜の集約だから七夜の体現。謂れは多く存在しています。しかし、それを確認する事も困難なのです。情報が錯綜していて、どれが真実なのか、どれが真実ではないのか」

「確認できないと言うのは？」

「誰も七夜朔を見た事が無いのです」

すんなりと、男は言う。

「見た事が無い？」

「ええ。誰も彼もが七夜朔の存在を知っているのに、誰もその姿を見た事が無いのです。しかしです、確かに七夜朔は存在している。

それは間違いありません。事実、彼の所業と思われる惨状は幾つも見つかっているらしいです。ですが、中央がそれを隠している」

「それは、何故です」

「さあ。下つ端の私にはさっぱり。詳細も聞きません。そうせざるを得ない理由が中央にはあるのかもしれない……。ただ、退魔はかつて遠野が七夜を攻め込んだ際、静観したと聞きます。その七夜が復活し、退魔に復権したとなれば中央も何か起こすかもしれない」

シエルの耳に、聞き捨てならない名が入り込んだ。

「遠野が、ですか？」

「はい。遠野は七夜を滅ぼした過去があります。その際に七夜は全滅したと、報告があったのですが」

「……七夜朔だけが生き残った」

「七夜朔が本当に七夜一族の生き残りかどうか分かりません。ただ、その手腕は本物です。騒がれるほどの腕は確実です。そうでなければ、殺害が不可能とまで言われていた蟲翁の討伐なぞ出来るはずがないのです」

客の入りが減り始めた店内。気付けば店員も近くにはいない。メシアンは喧騒も遠く、二人の座るテーブルはどこか隔絶されたかのように、固い静けさが覆い尽くしていた。

「先ほど」

それを気にするでもなく、シエルは懸念を告げる。

「七夜朔は混血専門の暗殺者だと貴方は言っていました。でも、それだったら何故混血ですらない吸血種と化した間桐臓硯を相手に動いたのです？相手は二百年以上生きた魔術師で、魔でもある存在と報告書にはありました。しかも、その一族は七夜朔の手によって全

員殺されたともありません。貴方が言う役割を考えれば、これは明らかにおかしな事ではないですか」

「……」

七夜の役割が混血に対する抑止、討伐要員であるのならは魔術師であり純粋な魔ですらある間桐臓硯を相手に動く。報告書と男の話聞いた限り、シエルはその不可解さに首を傾げざるを得ない。

指摘を受け入れ、男は黙考した後。

「シエルさん。煙草の煙は平気ですか」

「え、ええ」

突然の申し出に、シエルは反射的に男の言葉を受ける。それを遠慮するでもなく男は無造作に煙草を口元へと運び、着火させた。吸い、そして紫煙が吐かれる。

シエルの視線の先で、ゆらゆらと煙が揺れる。

「……憶測、ですが。七夜朔にはある目的があるのだと、私は思っています」

「目的、ですか？」

「これは、私だけの考え、というわけではありません。退魔の人間は恐らく似たような考えを持っているのかもしれませんが。七夜朔は恐らく己の有用性を証明し、自身の立場を確保し、強固にしようとしています。その結果のひとつが蟲翁です。彼が蟲翁を討伐した事により、七夜朔の立場は以前よりも更に磐石なものとして化しています」

「……何故、そのような事を」

「一つは、七夜の復権。退魔組織に七夜を復活させて、その恩恵を確保しようとしている」

かつて滅ぼされた一族の復活を願い動く。それは、長の時を経過させた一族の者という立場を考えるならば、安易に考え出される事だった。そのために、七夜の名を再び知らしめる。滅ぼされた一族、しかも七夜を名乗る存在ならば、僅かなりとも注目を集める。それがどの様な感情であれ。そして、現在裏では七夜の名は公言こそされないが、その存在は周知のものと化している。

ただ、七夜朔の狙いは、それだけではない。
復権は途上に過ぎないと、男は睨んでいた。

「そして、恐らく七夜朔は七夜を復権させ、ある事を行おうとしています」

七夜の復権。

混血の討伐。

蟲翁の殺害。

全てが、たったひとつの目的のために起こされたと言っているのであれば、それは。。。

「それは、遠野への復讐です」

そこは、所謂病室のような室内だった。わずかばかりに香る薬品の匂いと、周囲を医療器具に囲まれた場所であるが、その医療器具が使用されることは稀である。それはこの場所を訪れる人間が極僅かであり、暫く客が来ない事も珍しくない事もあるが、それ以上に医者役が所謂闇医者と呼ばれる人間である事が最大の要因であった。彼の気まぐれと、意地の悪い性格に客足は遠のくばかりで、果たして医療としてやっていっているかどうかは甚だ疑問である。

そんな場所にその老人はいた。時刻は昼を過ぎた頃だろうか。外は明るいカーテンを締め切り、電灯の光が室内を照らす。窓も扉も閉め切ったそこで老人はうつらうつらと転寝気分に寝台へ寝転がり、目を瞑りながら半ば夢心地に待ち人が来る瞬間を待ち侘びていた。いかにも安楽な老人である。

そして。

「
」

風もないはずなのに、閉め切った部屋のカーテンが、僅かに揺れた。
た。

「いつ以来じゃろうな。おぬしがここに来たのは」

目蓋を閉じたまま、老人は低く呟いた。

老人が寝そべる寝台から離れた位置、そこに一人の男が音もなく忍び込んでいた。

如何なる怪奇か、男は完全に密室であるこの場所に、入室を果た

したのであった。

藍色の和装の男だった。下は白の七分丈。右手に納刀された日本刀を握り、中身の無い左の袖に、長身瘦躯は暴力的に引き締められ、長すぎる黒髪の間隙から、削げた頬と温かみも冷たさもない無感動な蒼の瞳が見える。

男、七夜朔はいつの間にもやら、そこにいた。

「退魔の者からおぬしの話聞いてまさかとは思っておったが、本当にこの街に来ていたとは、な。声をかけておいた甲斐があった。

懐かしいものじゃ。……確か、アレは七年以上前か。刀崎の三女がおぬしをここに連れてきたのじゃったな。最終調整のために」

起き上がり、胡坐を掻いて老人、時南宗玄は朔をまじまじと見や
った。

「ほう……」

その出で立ちには異様な程である。大よそ常人の領域ではない総身の鍛えられよう。蒙昧な気配。あまりに無機質な瞳など、注目する点は多々とある。しかし。

「あの時も思ったが。……おぬしはアイツ以上に黄理に似ておる」

風貌が、出で立ちが、立ち振る舞いが。それはそのような分かりやすいものではない。

かつて退魔業を営み、今となつては遠野の監視役として専属医に

もなっているが、以前には七夜一族の主治医を担当していた宗玄だからわかる。

七夜朔は、先代当主　七夜黄理に良く似ている。

七夜とはかつて魔への抑止力として、それも混血という限定された相手を対象に動く退魔の一族だった。魔でありながら人である混血と言う、世界の修正を脱した存在を殺すために動く一族。そのために永の近親相姦を重ね、一代限りだった超能力を　魔術師でもない人間が　持つ能力を次がせる事に成功した者たち。他の血を混ぜないために他の人種を超えた身体能力を得るに到り、人体の可能性を開墾した人間。そして特筆すべきなのは、七夜が異常の存在に対する手段とはただひとつ。暗殺である事だった。

彼らは暗殺を生業とする生粋の殺し屋だった。

暗殺の技巧をひたすらに研磨し、鍛錬を重ねる。永の時を暗殺のためだけに費やす事で、彼らは確固たる結果を残してきた。そうする事が必然的に彼らを守る事と知っていた。それ故に彼らは結果を収め、存在価値を示し続けた。暗殺者の頂点として。

そして、かつて七夜を率いていた男がいた。

その男とは、混血から恐れられ蔑まされた七夜にいて尚、禁忌として口にすることすら憚れた存在であり、退魔組織では七夜の最高傑作とまで称された男。鬼神、殺人機械と多々呼び名はあれど、どれもが畏怖を象徴させ、その存在の異常さを際立たせていた。

名を、七夜黄理といった。

「まあ良いわ。診るからここに座れ」

七夜黄理を時南宗玄は主治医として幾程か診察を行った事がある。それにより分かった事は七夜黄理の体とは人間の理想像を希求し、そして完成させた肉体骨子であった。七夜黄理の肉体は七夜黄理が望む結果を取得するため、その欲求に悉く応えたものであり、猫科を思わすしなやかさと柔らかさに、十全の膂力を秘めていた。そしてその後継である、朔もまた。

「どうした、座らんか。診る以外には何もせんよ」

反応も示さない朔に、宗玄はため息を吐く。

そして、今。

時南宗玄の目前、茫洋に佇む青年こそ、七夜一族最後の七夜。

七夜朔だった。

『朔。ここはこのジジイの言う事を聞いとけ』

金属の軋む音が室内を侵す。

「相変わらずじゃな妖怪」

『そう言うな。ヒヒヒ、久しいなヤブ』

ぎぬり、と宗玄は朔の握る日本刀、骨喰をねめる。

「貴様にヤブと呼ばれる筋合いなどないわ。生き汚いやつめ」

『何言ってやがる。あの時アレは滅んだ。俺はアレじゃねえんだよ』

刀はそう言っただけでまた笑う。悪辣に嘲う。

骨喰は、正確に言えば日本刀ではない。遠野分家、刀崎が作刀した骨刀である。かつて刀崎には稀代の異端が存在した。

刀崎棟梁、刀崎梟である。

骨師と呼ばれる刀鍛冶の一族である刀崎の技術を二代先にまで進歩させた男、とまで称された男であるが、その男が最期に作刀した逸品こそが、現在朔の所持する刀、骨喰だった。

華美な装飾も施されていない鞘に幾枚もの呪札が貼られ更に白色の数珠が巻かれている。何かを抑え封じ込める働きを期待したかのような装飾である。そして鞘に負けず劣らず、刀崎の棟梁にまでなった男が鍛えた刀身が常識に囚われるものはずがない。

出来上がった骨喰には魂が宿り、擬似的な人格まで表出するに到ったのだった。

「……………」

それから暫く経ち、朔はゆっくりと宗玄の腰掛ける寝台へと近寄り、すくと無造作に座った。一見乱雑な座りであるが、その実いつでも宗玄に殺人行為を成せる体勢なのだから怖ろしい。

自らの判断によるものだろう。人の話を言うことを聞かないところも、宗玄の覚えている黄理に良く似ていた。

順次、朔は着流しを肌蹴る。まず目に付くのは、その体を覆い尽くす傷跡であった。何かに切られた痕、何かに打たれた痕、何かに食まれた痕、何かに焼かれた痕、何かに貫かれた痕、何かに突き立てられた痕。それが、朔の暴力的に引き締められた肉体に這っている。

「ん？なんじゃこれは。朔、おぬし最近傷を負ったか。いたるところが珍妙な事になっておるぞ。治りかけか、傷口がやたらと不安定じゃ」

「
「反応ぐらいせい」

寝台に座る朔を宗玄は文句を口走りながら、しかし確実に触診していく。張り柔らかさを保つ筋肉。関節の拳動範囲の広がり具合。瞬発力。筋持久力。長年の経験と人体に精通する者としての勘により、指先から様々な情報が宗玄へ伝わっていく。その合間、宗玄の記憶の中、驚愕を覚えた子供の姿が脳裏に現れる。

七年以上前の事だ。

両手足の関節を外され、口には固定具が嵌められた朔が刀崎の三女によって運びこまれた時は眉を顰めたものだった。更に無理矢理薬によって意識を朦朧とさせていた事も印象深かった。

そして、それが処置として実に適切であった事も、その時理解した。

大よそ子供とは呼べぬ肉体の適応力、破滅的なまでに鍛えられ、苛め抜かれた肉体。蒙昧な意識であっても、瞳は全てを映し出し。

「どつじゃ。あれから喋れるようになったか」

朔の口内を見つめながら、宗玄は気がかりを口にする。

七夜朔は言葉を話せない。

かつて、朔は出血多量により瀕死状態に陥った事があった。左肩をもがれ、左上半身は破壊された。一命は取り留めたものの、出血は夥しい量であり、後遺症が残った。朔の舌は重度の麻痺状態と化し、喋る事も食物を嚥下する事も儘ならぬ身となった。

朔が以前時南医院を訪れた際、七夜朔はまともに言葉も発する事ができなかつた。それを憐れと宗玄は思いもしないが、なるべくして多少の治療を施した。しかし、宗玄の治療も虚しく、朔の舌は治療出来なかつた。

「あー、相も変わらず舌は殆ど動かねえよ。んでも別に問題ねえだろ。契約は出来てんだから、俺が朔の代わりに話すことも出来んだし」

「貴様には聞いとらん。だいたい、貴様がおるから治るもんも治らないんじゃない」

「はっ！それを治すのが手前の仕事だろうが」
「治療するのには原因の根絶が基本だろうが」

宗玄は半眼のままに、今も尚朔が握る骨喰を見やる。

鞘に収められてもなお、宗玄の眼には視える。

魔眼も持ち合わせていない宗玄にも、ハッキリと。

刀身から瘴気の如くに滲み出る、邪悪の限りが。

「しかし、何と禍々しい……。いかにも体に悪そうな刀だ。朔、悪い事は言わんぞ。それは即刻破壊すべきじゃろう。そのままではお前さんのためにならん。舌も回復には向かん。それは毒だ。おぬしの体を蝕んでいる」

「のう、朔。……わしも黄理を知らんわけじゃない。だからこそ忠告をしとくぞ。あやつは既に手遅れじゃった。どうしようもなく手遅れじゃった。それはあやつも理解して追った。機械として生きながら、最後には人間になりかけ、そのまま死におった」

「しかし、おぬしはどうだ。未だそのようにもなつたらん。おぬしは何の変化もない。それではあまりに詰まらんぞ。確かに黄理の跡を継いだ事も一つの結果じゃ。おぬしが絶滅したとされる七夜を復権させてから良く聞くぞ。七夜朔は七夜黄理の後継であると。それも悪くない。悪くはないが、果たしてそれは『おい手前』っ、なんじゃ原因」

朗々と紡がれる宗玄の言葉を止めたのは骨喰の無遠慮な軋み声であつた。

『手前が朔と何の関係がある』

「なに？」

『確か、手前は七年近く朔と会っていない。そこまで言われる筋合いなんぞこれっぽっちもないだろうが』

「……」

拒絶。骨喰の嫌らしい金属音が室内を軋ませる。それは精神を掻き乱し、脳内に侵食する不快であった。なるほど、さきほど宗玄は骨喰を毒と表したが、なかなかどうしてそれは正鵠を得ていたようであった。

そして宗玄は暫し骨喰の言葉を反芻したのち、感慨深げに口を開いた。

「黄理だ」

『あ？』

「わしはな、黄理からもしもの時には頼まれたのよ。朔を頼む、とな。四時間近くもおぬしらの自慢を聞かされた後にの」

そして、沈黙が舞い降りた。宗玄は何も言わずに朔を見る。しかし、その瞳には何かしらの色が見える。それは憐れみか、それとも情けか。淡々と朔の肉体に針を打ち込みながら、宗玄は自分がどのような顔をしているのか想像する。

だが、その思考は昔に赴いていた。かつての記憶。そこはいつもの病室だった。そして黄理との最後の会合だった。そこで黄理は言葉少なに朔の心配を口にするのだ。

どうしようもなく七夜黄理は手遅れであったが、アレは人間に成りかけていて、親としての自己を育んでいたのだった。その終わりがどうであれ、それがどうなるか見てみたいと、あの時は思ったものだが、それは叶わなかった。

「それに気にもなる。果たして正統の七夜が人間に成りえるかどうか。黄理は駄目だった。シキは結局アレだったが、おぬしはどうなるのか」

シキ。

その名を、宗玄は口にした。

朔は、その名を、知っている。

知って、いる。

記憶は駆け巡る。

だが。

『ヒヒヒヒヒ』

あまりに不気味な邪笑。神経を逆撫でる骨喰の声音が朔の思考を切り裂く。

侮蔑と嫌悪を嘲笑に含有させて、骨喰は侵食するように言葉を紡ぐ。

「何がおかしい、化け物」

『なあに。あんな成り損ない如き何ぞあるか？』

室内の空気がざらつく。

「何じやと？」

『アレの本質は七夜じゃない。アレを七夜と呼ぶにはあまりに滑稽に過ぎるってもんだ。俺は知ってるぞ。会ったことも興味も関心もないが、風の噂に聞いたことがある。あの餓鬼を。あの成り損ないの出来損ないを』

「ほう、出来損ないか」

『それ以外に何を言う。殺さぬ七夜なんぞ笑い話にもならない。馬鹿馬鹿しさが捗々しいというものだろうが。七夜は殺して何ぼの一族だ。暗殺を極めてその存在意義を証明し続けた者たちだ。だってら殺す事こそあいつらの存在証明に他ならない。だが、七夜は既に滅んで、今では朔一人だ』

「……」

『そつだ。七夜はすでに朔ただ一人。だったら基準は朔だ。七夜朔こそ七夜の体現。朔こそが七夜だ。それ以外は七夜ですらない。半端な存在が七夜を名乗る事すらおこがましい。……まあ、そいつも既におっちゃんじまつたらしいがな。これでもう、それが証明されたつつつ事だろ。七夜朔は七夜最後の一人なのだ』

宗玄は骨喰の言に顔を顰めさせる。

『事実、裏じゃ七夜は朔の一人しかいないのだと認識もされている。俺がそういう風な噂が立つように仕向けたわけだがな』

「……全く、貴様頭おかしいのではないか？」

『頭すら俺にはねえんだから、そんなの関係ないさね』

「よく言うわ、化け物」

退魔、あるいは混血に流れる噂の発生源は今朔の手に握られる刀であると知れば、両者はどのような反応をするのだろうか、宗玄は考える。嘘か真かも分からぬ情報が流れ、それに右往左往する憐

れな者共が溢れんばかりにいるのだろっ、と組織の情けなさが浮かんでは消える。

そして。

「ふむ。だいたいこんなものか。どうだ、朔。少しは良くなつたじやろ」

触診と処置の同時進行に一定の成果が現われ、診断は取り合えず終了した。

朔は暫し時を置いたが、肉体がどのような状態なのか確認を行わなかった。

「しかし、あまりに体を酷使し過ぎる。関節と幾つかの腱、それに骨自体に疲労がたまっておる。それに、傷を受けた箇所が多すぎる。おぬしの体なかなか危ういぞ。いかにおぬしがとんでもないとはいえ人体に変わりはない。おぬし、体が悲鳴をあげている事を理解しておるのか？ 自覚があればよい。しかし自覚すらもないのならば、もう少しいたわるべきじゃと思うぞ。無理な可動も軌道も、肉体にはつけが溜まつていく。もしもの場合が来ないためにも、こまめに体を慰めるべきだ」

「……………」

『なあに、問題ねえさ。俺がいるからよ』

「貴様には聞いとらんわ」

『朔がそう言ったんだよ』

「本当か？ 朔」

「……………」

「何じゃ、その様な事全く言っとらんではないかっ」

『おいこら、何で手前がそんな事わかんだよ木瓜がっ』

「そのようなものきまつとる。勘じゃよ勘！」

『言い切りやがったな手前っ、勘なんぞ信じるとか莫迦のすること
だろつが！！』

「わしはそうやって生きてきたっ！！」

『やべえ、こいつ莫迦だっ！！』

それから暫く老人と金属の罵りあい発展するが、その光景を一切の興味もなく眺める朔の平らな瞳に映る両者はどうにも滑稽である。

しかし、この両者どうにも噛み合っ。

「んでだ」

罵りあいがようやく終わり、宗玄の関心は朔自身に向かった。

「おぬし、一体何ゆえにこの街に来た」

それまでの雰囲気、不意に一変する。

「」

「噂に聞くぞ。おぬしが混血を問答無用に襲い掛かっているのを。その被害も尋常ではないと。生者悉く滅ぼして、屍ばかり積み重ねておぬしは一体何がしたいのか」

退魔が混血に対し攻勢を仕掛けるのは幾つかの条件がある。人間社会に溶け込んだ混血はそのままならば害はない。しかし、魔としての比重が傾き、人間ではなく魔として覚醒した時、その猛威を揮い始めた時、始めて討伐対象となる。

だが七夜朔はそれを破り、先祖返り、あるいは反転した混血のみではなく、人魔のままである混血すらも襲いかかり、その腕を血に染めてきた。

「……………」

「それに、おぬし。混血のみを対象に動いておらん。七夜の領分を越えて、色々と殺っているらしいではないか。……のお、朔。ものには限度つてももある。退魔かあるいは混血か、はたまた他の存在から討伐隊が組まれるやもしれん。事実遠野グループはおぬしに対し睨みを効かせておる。それなのにだ、その遠野がおる三咲町におぬしが来ておる」

「……………」

「最近起こっている吸血鬼事件のため、ではないな？おぬしがそのような事に首を突っ込むとは思えん。故に、おぬしに聞く。何のためここに来たのじゃ？」

「そんなの私と会うためにきまつてるじゃないですかー」

その声は、場違いなほど陽気に、そしてどこか空虚に聞こえた。

宗玄は、扉を見やる。

朔は、まるで反応しない。

白い、リボン。和装の少女。

琥珀が、いつの間にもやそこらにいた。

全てを話し終わり、男は啞え煙草に暫し煙をふかしていた。銀縁眼鏡の奥、眉間に寄る皺は消えず、その視線も危うい。

ゆらゆら。ゆらゆらと。紫煙が揺れる。

自分の憶測は恐らく正しいと、男は思っている。シエルには言っていないがそれを実証させるものが、昨日男の下に報告書が届いていた。

七夜朔が三咲町に出現した。

実は、七夜朔に対して退魔は特別な処置を施している。

不可視な移動を展開させる朔の行方にプロファイリングを常と行う事で、それがどこにいてこれからどこに向かうのか、他の退魔の担当地区へ報告をするのである。そうする事で七夜朔にどう対処を行うかの決定が下されるのであった。

そして、男は今日になってその事実を知った。組織の末端である故に情報取得の遅さが際立っていると見えよう。

だが、その七夜朔がこの三咲町に来たのであるならば、男の考えも当て嵌まるのではないだろうか。

遠野に対する、復讐を。

一族という集合体は、なかなか業が深い。

永の歴史を積み重ねた純潔の一族。

その血が受けた屈辱を、果たして払わずにいれるはずがない。

「実はですね」

思考を巡らす男が吐く煙の先に、シエルの顔が見えた。

その言葉は唐突に、男の顔を驚愕に変貌させ、思考は途切れる。

「私は七夜に一度会っているのです」

唇に啜えられた煙草の先から、灰が落ちた。

第八話 人殺の鬼？（後書き）

定期的な更新が難しいと感じる今日この頃です。六です。

相変わらずのゆっくり展開です。テキパキとした展開は未だ遠く、速度ある展開を行うにはあまりに技量不足です。精進、精進。

今回は説明しか行っていないですね。必要とはいえ、なかなか大変でした。どれだけ過不足なく情報を書けるか苦心します。あまりに書きすぎると、興醒めかと思われそうです。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、送ってきてくれたら嬉しいです。執筆の励みとなり、また新たなインスピレーションが生まれるかもです。

以上、六でした。皆様、またお会いしましょう。

第九話 人殺の鬼？（前書き）

そして、柔らかくその少女は血塗れの少年に笑んだ。

白いリボンが小首を傾げる少女の頭と共に揺れる。

少女がその手を伸ばす。少年はそれを拒否しなかった。

頭部から血を浴びた少年の頬に、少女は唇を当てた。

少女が始めてつけた紅の化粧けわいは、妖艶と冷酷を少女に与える。

しかしその笑顔は、きつと何よりも美しい。

第九話 人殺の鬼？

弓塚さつきは、迷っていた。

「うーん……」

部屋着姿、俗に言うパジャマ姿で電話の前をうろつくと右往左往していた。

実はさつきが所属するクラスの教員から志貴が学校を休んでいるという報告を受けたのだが、その彼に連絡をいれようか迷っているのである。

現在昼を過ぎて、そろそろ小腹も空き始めた時間である。おやつの日間だった。今日のおやつはチョコレートビスケットである。学校を仮病によって休んだ彼女がぬくぬくと家の中で過ごしているのは如何なものかと思われるが、それを突っ込む人はいない。さつき自身自覚しているのだから、改めて突きつけられるのは勘弁願いたい所である。

「むむむむむー」

昨日の影響がまだ抜けていなかったさつきは、大事をとって学校を休んだ。夢見が悪かったのか、どうにも身体の調子が優れなかった。それでも気にしなれば問題なく学校に行けたのだが、無理を推すには気分が良くなかった。なので母親に学校を休む旨を伝え、自ら今朝学校へ連絡をいれたのであるが、その時電話越しに遠野志貴も休むのだという呟きが聞こえたのであった。

「ぬぬぬぬぬー……」

しかし、それを確認しようとして、弓塚は踏み出す勇気が出なかった。好きな相手が病欠をしたと言うのだから心配しないわけがない。もしかしたら自分と同じように昨日の事で休んでいるのかもしれない。そうでなくとも、声が聞きたかった。

昨日、二人が出会ったあれは一体なんだったのだろう。脳は恐怖する情報を巧みに手繰り寄せるものであるが、さつきには一定以上の情報を捉える事ができなかった。二度目の会合にして直視した存在は生首を片手に佇む殺人鬼だった。それだけでもさつきは一杯一杯だと言うのに、それがこちらに向かってくるのだから堪ったものではない。そんな恐怖を共有しても、意味など無いことはわかっている。しかし、それでももしかしたら聞かされる志貴の慰めを期待して、さつきは電話をかけようとしていた。いや、慰めの言葉がなくても構わない。ただ、志貴の声を耳にしたかった。

だが、こんな何気ないところで踏み出せるような簡単に決心がつけられるようでは弓塚さつきではないのである。

「……はーあ」

そうしてトボトボと弓塚は電話から離れていった。決心できずに後悔ばかりが募るばかりである。

きつと一時間後には電話の前で再びうつろっているだろう。

その少女は場違いなほどに明るく声を発した。朗らかさと軽やか

さを合わせ、淡い紅色の髪を白いリボンで纏めた少女は柔らかな笑みを浮かべながら、空気のようにそこにいた。

「琥珀。おぬし、いつの間にきおった」

振り向きざまに挨拶もなく言葉を告げる宗玄の瞳は、少女の陽気な雰囲気に対し頑なだった。それは嫌悪や拒絶のような悪感情ではなく、面倒なのが登場した事に対する諦めから発する、溜め息にも似た反応であった。

「先ほど先生がこっそり話していたので、気付かれる前にこっそりと」

宗玄の反応に琥珀は企みの成功した意地の悪い、それでいてどこか楽しげに応えた。

琥珀と宗玄の付き合いはそれなりに長い。先代当主遠野楨久存命時、楨久の命によって琥珀は薬剤師の資格を取得しなければならなかったのだが、その時琥珀に教鞭を揮ったのが遠野との繋がりがあった時南宗玄と、宗玄の一人娘であり琥珀の姉弟子である時南朱鷲恵だった。彼らの助力により琥珀は薬学の勉学を修め、薬剤師の資格を得るまでに到ったのだが、その関係は今も続いていた。

「それでも、七夜朔さんにはばれていたようですが」

琥珀の視線の先、そこには寝台に着流しを肌蹴たままの七夜朔の姿があった。朔は其処で身動きもせず、また琥珀に視線を投げかけるでもなく、先ほどと全く変化のない姿勢のままである。しかし、その重心は僅かにずれ、腰が心なしか浮ついていた。その変化を琥珀は目聡く見つけていた。

「それですが、今日はですね」
「何？小僧が？」

宗玄と琥珀の会話に対し、朔は耳を傾けることもなかった。もとより興味もない話だった。医療関係に明るくなく、二人が話している内容が薬の効用であることすら、朔には理解できない。そも確かな教育すら受けていない朔には無用な知識であった。

『さすがは三咲町つてか』

その時、朔の脳内に骨喰の声音が侵食する。鼓膜を震わせずに聞こえるその金属の軋みは、二人の間に交わされた血の契約が果たす恩恵の一つであった。

『朔。あれは遠野の使用人の一人だ。手前の仇の身内だぞ』

言外に視ろ、と骨喰は囁く。

骨喰の言葉に朔は間を置いて琥珀を視た。

遠野。

遙か昔に魔の血を一族に取り入れた、常識では考えられぬ所業を果たした一族の取り纏め。

人は古くから存在する人外の魔に嫌悪し、そして憧憬を抱いていた。人間とはあまりに差がある生命力、知識、単純な力。その破格な力に人は恐怖し、欲した。思いつくことも禁忌極まる結論だった。故に契約を交わしてその血を取り込もうとした人間が幾重にも企み

を錬り、そして魔に食われ吞まれた。人魔の間に隔たる存在の差異は、大よそ超えられるものではない。核が違うのである。その交配など不可能なはずなのだ。

しかし、文献に見えるとおり人と魔の混ざり者は歴史上には存在した。不可能を踏破し、諦めを超越した、己の宿願を果たした人間は確かにいた。そんな気の触れた所業を果たした人間たちが、確かに存在した。

そして遠野こそ人と魔の狭間に生きる現代の混血だった。

小豆色の着物を纏う小柄な少女、琥珀。現在宗玄と会話を交わすその少女は楽しげに笑みを浮かべている。宗玄と話している事が楽しいのか、何が楽しいのか朔には分からない。

少女、琥珀が遠野の者。一見すれば、分からないことだ。彼女には魔の匂いがしないのだ。

しかし、仇だと骨喰は謳った。仇、仇だと。

七夜はかつて、遠野という混血に滅ぼされたのだと、骨喰に教えられていた。

七夜朔は故に一人である。七夜はもう朔一人なのだ、教えられた。

「。。」

朔が所持する魔眼は人間の視界を超える。常時発眼し、隠す事も消す事もない朔の蒼の瞳。今もなお虚空を思わす蒼色の瞳は通常の生物とは異なる視界を映し出し、更なる情報を見出す。

魔眼は靄を捉える。

匂いなく、音もなく、気配なく。靄が室内を満たしている。

朝霧の爽やかさではなく、小雨の涼しさもなく、不気味な靄が重苦しい沈黙の如くに漂う。それが朔の魔眼が映し出す世界だった。それは現実には視えることのない視界。朔のみが視る事を許された世界の、あるいは生物の趨勢だった。

白色の靄は琥珀の周囲にまかれ、それでいて薄く宗玄にかかっている。その宗玄もまた白色に灰の混じる色めきが噴出していた。

だが、靄はそこで途切れない。

濃い靄が琥珀から噴出し、七夜朔の身体にまで伸びていた。それは朔に近づくほどに濃くなり、手を伸ばせば掴めてしまいそんな質量を秘めた靄だった。

「それならば朱鷺恵に聞くべきじゃろう。今はおらんが、電話すればよい」

その時、朔の視界の中で二人の会話にある程度の目処が立つたらしい。内容までは把握できない。それを考えるのは朔の役割ではない。朔はただ在ればよい。思考は骨喰の役割である。

「お願いできますか先生？」

「おぬしがすればいいじゃろうが。何でそこまでやらねばならん」

「えー、可愛い教え子の頼みじゃないですか」

「教えただけの関係じゃろうが」

「あ、酷いですね。そんな事言っちゃうんですか先生？」

「そんな事を言って何が悪いか弟子」

両手を合わせて小首を傾げる琥珀の仕草に他意は一見覗けない。

しかし、その意識が宗玄に向かつていない事は明らかだった。そのあまりに邪気のない様相に宗玄は更に面倒さを増すばかりだった。そんな遣り取りも幾程繰り返されたか。滑らかな言葉の報酬は決して薄い関係ではなせない時間の経過を垣間見せる。その内に宗玄は至極面倒そうに頭部を掻きまわった後に盛大な溜め息を吐きながら扉の向こうへと消えていった。

「さて、と」

そして、扉が閉じられた瞬間、琥珀の視線が朔を捉える。

琥珀から発せられていた全ての靄が朔を絡め取る。周囲に振り撒かれていた靄が、朔ただひとりに向かい、白き靄は雲海のように朔自身を飲み込んでいく。

しかし、それを遮るよう。

泥水のような黒色が朔を取り囲む。

骨喰から滲む邪悪の魂が、朔を包み込む。

まるで、呪いのように。

『時間は過ぎても朔にしか関心はなしか。しつこい奴め』

げらげらと愉快に骨喰は笑う。その苛立ちと邪心を孕む愉悦の笑いは生者二人しかない空間に亀裂を走らせる。あらゆるものを見下しながら蔑み笑う、人外の笑い声であった。

「いえ、そんな。いつまでも朔ちゃんにとり憑いてるおんぼろさんには勝てませんよ」

骨喰の蔑みを受けて、くすくすと琥珀は静かに笑む。空虚な笑みである。骨喰の言葉などに一切の価値など見出してはいないあまりに無機質な笑み。

互いが互いに対して笑い合う。ただそれだけだというのに、何と禍々しい。室内が錆びつき、それを虚ろが侵す。二人は拳銃を突き付けあいながら笑いあっている。己の毒を弾丸に、想いを貫くために相手を殺し尽す。

『嬢ちゃん。また会うとは思わなんだ。相も変わらず破綻しているよのだが』

「全くです。私は会いたいなんてこれぼっちも思いませんでした」

『奇遇だな。俺もだ』

「そうなんですか？吐き気がしますね」

『同感だ。ゲロくせえ匂い染み付かせる。俺にや嗅ぐ鼻の穴も吐き出す内臓もネエが』

「そうですか。まあ、貴方なんて知らないんですけど」

密やかに琥珀の歩が朔へと向かう。彼我の距離は短く、それこそ大きく歩めば容易く辿りつける。しかし、琥珀は急ぐ事無くその一歩一歩を踏みしめる。その歩みは惑いなく、迷いない。朔の姿勢が琥珀を殺す意志を示していると知っていても、琥珀の歩みは止め処なく、恐れを抱く事もなし。朔の変化に気付きながらも琥珀は遂に。

「 ああ 」

琥珀の唇から吐息が漏れた。

万感の思いが言葉にもならない。琥珀の身を溶かす温もりが琥珀を包む。

「 朔、ちゃん 」

側に辿り付いて、琥珀は手を伸ばす。朔の視界は琥珀を捉えている。儚く今にも壊れそうな笑みを湛えた少女を見据えている。故に朔は伸びる手に応える如く、右手に握る手放す。重心は螺旋を描き、緩やかに投げ出された足が跳ね上がる。そして琥珀の細き首を刈り取るうとした瞬間。

砂嵐。

白黒の砂嵐が、朔の意識に到来する。

「 ずっと、待ってたんです。私、ずっと朔ちゃんの事を、ずっと 」

ザ ア 。

白い、リボンの、人形のような、少女。

砂嵐。 砂嵐。

どこかで、見たことが、あるような、映像。

寝転がる朔を覗く、砕かれた破片を繋ぎ合わせたような少女の顔。

その頭部に、白いリボン。

これは記憶。あるいは記録。あるいは記述。

そんなもの。朔には有り得ないものだというのに。

朔に記憶など存在しない。朔は兆候なく突然に現れる人殺の鬼。思い出は持ち合わせていない。いつの頃からか朔には分からぬが、朔の脳には致命的な欠陥が生じていた。果たして朔には無駄な記憶が記録もされぬ身である。そういう無用な不要は全く持って機能を働かせることなく、朔はただの殺戮人形だった。記憶も、記録も、記述も、あるいは思い出も、朔には搭載されていない。それは骨喰の機能である。ならば、血の契約から辿る骨喰の記憶なのか。

しかし、今朔に視える映像は何だ？

そう、知っている。知っているのだ。映像に映る少女を、朔は知っていた。

だが、それが誰なのか、朔には。

意識は朦朧に霞む。しかし、視界だけは明瞭だった。

朔の身体は蒙昧なその意識に反し動こうとする。何ものであるとともに、視界に入らば解体せしめん条件反射であった。それしか知らぬ朔の取れる唯一の手段こそ、十年近くもの間朔の手によって生み出された殺人行為であった。

「
」
だが、身体は動かず。

朔の顔に少女のたおやかな両手が添えられた。

細い指先は咽び泣くように震え、包み込むように、抱きしめるように。
うに。

「
、
」

「
」
どうしましょう。言いたいことが沢山あるはずなのに、何が言いたかったのか。……私、分からなくなっちゃって」

『ならば黙って沈め嬢ちゃん。大体、何でここに朔がいると分かった』

「何言っているんですおんぼろさん。朔ちゃんて知らない事なんて、私にあるわけじゃないじゃないですか」

『答えになってネエなあオイ』

骨喰の言葉にこれ以上応える気もないのか、琥珀は朔だけを見つめ続ける。

少女の顔が近づいてくる。この時になって朔は動く事が出来なくなった。頭部は固定化されたように動くことなく、朔の蒼色は琥珀色の瞳から離れない。

この手はなんだ。何故、その顔は近づいてくる。

「嗚呼、そうだった。ずっと、一番最初に朔ちゃんに、言いたいことがあったんだ」

そして。

少女の額が、朔の動けぬ額を小突くように押し付けられる。

「お帰りなさい、朔ちゃん。……会いたかった」

目蓋を閉じながら、琥珀は静かに呟いた。
朔の確かな感触に、少女の睫毛が震える。

「……………」

朔の視界が少女の顔で覆われてる。

目の前には白い肌を感嘆か、あるいは歡喜に頬を薄く赤へと染めている。

砂嵐。

意識は潜る。

間近にある少女の笑顔は、どこかで見たあの血生臭い惨劇の光景で見た、誰かも分からぬ小さな人形の笑顔に似ていた。

時は、遡る。

月も見えず、太陽も昇らない間隙の時間の事だった。街頭の明かりだけが暗闇を灯し、人の気配も伝わらない夜。人々が眠り、静かに更けた夜の黙まじの街中を幾人かの男女が乗車する黒の車が舗装された道なりを直走る。中にいる者は全員が黒服である。没個性を醸し出す黒服の集団であった。しかし、その顔つきは皆険しく、また気配は鋭い。明らかに常道の人間が出せる雰囲気ではない。

彼らは皆、退魔の人間だった。

「報告。七夜朔が工事現場から遠ざかったのは十分以内」

「報告。その前には自動販売機の破損を確認」

「報告。七夜朔が三咲町に訪れたのは三日以上前との事」

「報告。恐らく七夜朔は死者の掃討を行ったものと見られる」

「報告了解。確認は終わりだ。急げ」

蔵かに情報を交換する退魔達。彼らはおおさっぱに括っ飛ばしてしまえば三咲町支部の退魔だった。日本に敷く退魔は所謂組織構成が組まれている。中央から命を発令し、それを各支部が執行するといった組織形態が行われており、中央は所謂退魔一族と呼ばれる複数の一族らによる独裁が長い間支配していた。

そして中央から離れている各支部は、中央から発せられる命を調整するぐらいにしか権利もない。長年その組織支配に物議が醸し出されているが、それが覆される事もない。現在の日本を反映しているかのようである。

「しかし、面倒は挙ってやってくるものだ」

「無駄口を叩くな」

ぼやけ気味に愚痴を零す男性に対し集団の隊長格である冷気を伴う女性が叱咤するが、愚痴を零す事も無理からぬ事であると自身も

重々承知していた。

現在三咲町には吸血鬼が出現し、その被害は日を追う毎に増えていくばかりであった。吸血鬼が一体出現するだけで、一つの町が死都と化するなど稀な事ではない。吸血鬼に血を吸われた人間からそれは化け物と成り果て、そしてその化け物が人の血を吸う事でまた新たな化け物が誕生する。その繰り返しを阻止するために人間は魔へと対抗する組織を構成してきた。それが教会であり、また退魔だつた。

犠牲者の数は抑えることも出来ず、退魔は秘密裏に死者を見つけでは大小の犠牲を払い処分する工程を地道に行っている。三咲町は混血の党首である遠野が根城にする支配地区であるため、退魔の人間にも腕利きの刺客が揃っているが、しかし彼らをしても状況に追いつく事がやつとの事で実質大本の吸血鬼の正体を捉える事も出来ない状況であった。

決して彼らが無能なのではない。秘密裏に動かざるを得ない行動の制限を始め、遠野と牽制し合い情報の取得に苦心する彼らである。手段を選ばなければ、この街一つ殺菌消毒を行う事ぐらいは容易い。何も知らぬ人命を切り捨てて、街を消し飛ばす事で他への被害を抑えるという大義名分は振りかぶれる。しかし、それを行ってはならないのである。古くから政府の闇に属し保障されてきた退魔が、国民の命を切り捨てているなどあってはならない。世界大戦を二度経験し、周囲に戦火を振り撒いた国でそのような決定はあってはならないのだと政府の指針は定められている。過激な発言は拳って潰され、消極的な態度も批難される国では変革の少ない現状維持こそ国是だつた。その肯定が国民の意思は別として。

「七夜朔。実在するのか」

事実を確信するかのように、誰かが呟く。恐らく賛同か、あるいは否定を期待しているのだろう。だがその声に反応する者はいない。

皆、中央が七夜朔の情報を制限している事を周知している。それが何故なのか詳細までは知らぬが少なくとも七夜朔が存在し、劇薬であることを予想していた。その容姿も、その手段も情報はない。

誅戮のためではなく、ただ魔であるがために殺害する生粋の殺人鬼。七夜を復権させた鬼神七夜黄理の後継。使い勝手によって猛毒にも神薬にもなる気鋭の鬼札。

それが中央に類さない退魔の間に流れる七夜朔の情報であった。

その七夜朔がこの三咲町にいる。

情報を鵜呑みするならば、現状を優位に働かせる事もできるかもしれない。

「厄介だな」

情報の詳細も知れぬ劇薬など使える事もできない。しかも、正体がかつかめないのだから協力も行えない。なれば共闘など叶えるはずもなく、しかし勝手に現われては惨劇だけを残して亡霊のように消える存在である。七夜の生き残りだと考えれば、暗殺者であることは想像がつく。人伝に聞く数々の仇名にもそれを予想させるものがある。他の地区によれば、マンション一棟に住む住人すら虐殺せしめたと聞く。使い所が難しい所の騒ぎではない。情報の隠匿も楽ではないのだ。

到来は予想されども、惨状を最低限に抑えきれぬなど。

「いや、災厄か」

自身の思いつきに、女性は皮肉に笑みを零す。冷笑は車内を凍らせるには充分であつた。

災厄の七夜。

なんだ、それは。

まるで出来の悪い喜劇ではないか。

かつて混血を恐怖の底に叩き込んだ七夜黄理の後継であるだけでも冗談のようであると言うのに、無秩序に殺害を重ねる七夜など笑い話にもならない。周囲を振り回して、立ち去った跡には死体だけが残される。七夜の体現と称される実力を存分に振り翳して猛威を揮うなど、災厄でしかない。

それを証明するように、彼らは七夜朔が倒した死者がいるとされる現場検証に向かつているのである。もしかしたら輪禍の根源である吸血鬼なのではないかという少量の期待と、予想される結果の多分な諦観を持って余しながら。

「到着しました」

そして彼らは報告にある工事現場へと到着した。意気も漫ろ（そぞ）に白い布の内側へと入り込んでいく。工場現場は天蓋が切り開かれた構造だからか、風が渦巻いて星の見える黒の空へと空気が僅かに立ち上げていた。滑る風が些か不愉快で、女は髪を押さえつけ

た。

内部を散開する退魔を横目に、女は足を進ませる。柱が乱立し、鉄骨が到るところに設置された空間である。

「七夜からすれば、狩場もいいとこだな」

決して狭くない、開けた空間である。しかしその周囲は布に覆われ、閉じられている。内部は鉄骨が様々に設置されていた、端的に言えば骨組みしか作られていないこの場所は檻のようであった。こんな場所、暗殺集団である七夜からすれば絶好の狩場である。

「これは……なるほど。心臓か」

女の視線の先、コンクリートに舗装された滑らかな路面、工場現場の中央部からは離れたその地点には、咲き乱れた花卉のような紅の色素が散らばっていた。月明かりもなく、その赤色はただ地面を濡らしている。

確かに、ここで殺し合いにも似た一方的な狩猟が行われていたようだ。

「しかし、何故内蔵が未だある？」

死者の死とは消滅である。その肉体の名残は消えるのが常だ。元から生きていない死者が死体を残せるはずもなく、肉は灰と化して塵に消える。太陽に背き、日の光から嫌われた者達には相応しき無残な末路だ。

だが、今女の目前には内臓の破片が残されている。

「死者ではない。しかし、存命の吸血鬼か？……一体何だ？」

唇に人差し指を添えて考える。標的はどういう存在だったのか。

人間、では無いはず。工場現場には幾重かの血痕が見つかった。そして、そう遠くない場所に設置された自動販売機が破壊され、その近辺には少量の血が発見されていた。まず普通の人間が標的ならばまずそこで死体となっているはずなのだ。

死者でもない。死者ならばその肉片が残っているはずが無い。粒子のような塵が散る事無く残されたのならば話は別であるが、それでも肉があるはずがない。

吸血鬼も論外だ。彼らは死者が時間を経た結果である。ならば、その最期の様も同じであろう。死んでいない、とならばまた別だが、

では、一体何だ。

「……知らぬ間に、違う魔が出現したか？」

相変わらず、情報が少ない。判断材料が少ないのだ。

残された肉片。人間か、はたまた存命する吸血鬼の残骸か。

推論では動けない。退魔もまた組織。動く事にも瞬発力がない。しかし、これが七夜朔の所業であると、確信ではないが判断の要因が取得出来たのは上々だろう。問題が多い現状。それでも思わなければ、あまりに遣る瀬無い。飛び越した発展の得られない現場検証に歯噛みする衝動を抑える。何事も儘ならないものなのだ、納得

しなければならぬ。短くない時間を退魔として生きた女には、耐える事は慣れている。

「現在の調査報告を聞かせろ」

それでも零れる溜め息を吐きながら、女は散開する他の退魔に声をかけた。

やる事は多い。情報操作、現場の清掃、破壊された物品の再設置。無駄に増える仕事に七夜朔が目の前にいたらどうしてやるうかと想像することで女は内心のさざれを抑えた。

そしてあらかたの調査を終えた退魔は、一つの結果を知る。

死体は、何処にも無かった。

第九話 人殺の鬼？（後書き）

ブルーハーツの青空を聞いて泣きかけています。六です。

大よそ五日ぶりの更新です。コンスタントな更新を心がけ、何とか執筆できました。皆様のお眼鏡に合うものが出来たか不安ですが、ゆっくり展開なもので、どうしても速度に欠ける内容ですが、これからも励んで執筆します。しかし琥珀さんの嘔吐発言連発は流石に反省します。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、大歓迎です。内容の大よそは決まっていますが、詳細が決まっていないので、刺激から何かアイディアが浮かぶんじゃないかな、という下心です。稚拙な内容ですが精一杯返答させていただきます。

以上、六でした。

まだまだ寒い日が続きますが皆様風邪などにお気をつけください。

次回予告は、したほうがいいのかなあ。
とりあえず次回から考えておきます。

第十話 人殺の鬼？（前書き）

誰かの背中を見ている。

誰かの背中を追っている。

いつも、そうだった。

君はずっと、彼の背中を追い続けていた。

第十話 人殺の鬼？

遠い。

手を伸ばせば届いてしまえそうな場所にいるのに、その人の背中
はどこまでも遠い。

追いかけた。離れていく背中を、追いかけて続けた。

けれど、その人は振り向かず、歩いていく。

君はその人の名を叫び続け、涙さえ零しながら、走った。

しかし、声は届かない。

君の心も、まるで届かない。

。

でも、それでも君は絶え間なく声を張り上げ続けた。

いつかきつと、たどり着くと信じて。

夢を、見た気がする。

悲しい、夢を。

だけど、その夢が何だったのか確かめるよりも前に夢はどこかへ
と霧散していく。詳細も分からぬまま、物悲しさだけを残して、夢
は軽く綿雲のように消え去った。

「……………」

ぼんやりと、目が覚めた。

意識がハッキリとしない。どこか透明な壁が目の前に反り立っているような視界。蒙昧な感覚が意識を覆い尽くしている。夢の中に快活を置いてきてしまい、そのせいで体も精神も気力が失せているのだろうか、と明瞭でない頭で思った。果たして、自分は何をしているのだろうか。

部屋の中には明かりが灯されていた。今まで眠っていたのだから、電気がついているのはおかしいはずだ。誰かが一度来て、そのまま電気を消し忘れたのだろうか。

朝の雰囲気、ではない。朝特有の柔らかい冷たさが、ここにはない。

藍色の光が窓から差し込んでいる。カーテンが閉め切られ、薄い布の向こうには茜を飲み込まんとする黒の空が広がっていた。

「……夕方？」

いや。もうほとんど夜だ。

何故自分は、こんな時間まで眠っていたのだろうか。今日は平日だったはず。学校に行かなければならないはずなのに、こんな時間まで寝ているなんて。それに、もし自分が起きなくても、昨日と同じように翡翠が起こしてくれるのではないだろうか。いや、もしかしたら、アレは昨日だけの事だった？

疑問が身体を動かす。咄嗟に何かを確認したくて、身体を起き上がらせようとする。

だが手を握る、小さく温かな掌が体を引きとめた。

肌触り良く、繊細な白い手。その感触は滑らかで上質な絹を思わせた。

「秋葉？」

先ほどから、疑問ばかりが口を開かせる。だけどそうせざるをえない。状況にまるで追いついていないのだ。視線の先、そこにはイスに座りながらベッドへと寝そべるように身体を寄せて、静かに眠る秋葉の姿があった。巡りの悪い寝起きの頭はこの状態に少しばかり思考を停止する。何故ここに、秋葉がいるのか。この手を握っているのか。

耳を澄まさなければ分からないほど小さな寝息。その穏やかな寝息に秋葉の顔を見れば、そこには幼い少女が眠りについていた。

記憶の中にいる小さな秋葉と変わらない、可愛らしい顔つきだ。遠野当主としての顔ではない。そのままの秋葉の姿だった。

「さ」

夢でも見ているのか眠りについていて秋葉が僅かに、何かを喋った。しかし、それが一体何を言っているのか聞き取れない。恐らく寝言だろうと、それとなく自身を収め、口元を緩ませた。

ふと、口内がどこか苦い。粘っこい酸味のような味が舌の上に残っている。

それをどうにかしたくて、横に備えられた棚の上にある水差しに

手を伸ばそうとして。

「　　そうか、俺」

口内の苦さは吐瀉物の味だと、理解が追いついた。それを認めて、志責は自分に何が起こったのか理解した。

そう。夢を見た。命の潰える喪失の夢を。何も出来ず踏み躪られる様に、死んでいく。夢の中で志責は死んだのだ。心臓を抜き取られ、取り返す間もなく、握り潰された。あの時出会った藍色の亡霊に。あの殺人鬼に。その様が悲しく、消えていく命が寂しかった。夢であるのに、恐ろしいほどにリアルだった。

そうだった。自分はそれに衝撃を受けて

「あれ？……でも」

それは、今しがた見た夢ではない。何がどうと言っことも出来ないが、なんとなくそれは違うように思える。その夢は、今朝に見たものだ。もっと違う、何か大切な事を夢見たような気がする。

しかし、最早夢は消えた。名残さえ失い、もう思い出せない。胸の虚ろはいやに震えている。

あるいは、あの夢がこの虚ろの理由、なのだろうか。

砂嵐。砂嵐。砂嵐。

「……兄さん？」

ふと、かすかに囁く音が耳に届く。

身体を揺らして秋葉が目蓋を薄く。秋葉はどうやら寝起きが良いらしい。すぐさまに頭で働くようで、声音の主の姿を注視した瞬間に瞳は見開かれ、しかし翳りを帯びさせながら、ベッドへ寄りかかる身体を起き上がらせた。

「ああ、おはよう。秋葉」

出来る限りの自然さを醸し出して、秋葉へと笑いかけた。

秋葉の目に、志貴のその穏やかさはどう映っただろう。瞳を瞬いて、秋葉は兄の声音に反応するのが少し遅れた。

「……兄さん。……その、大丈夫ですか？」

「ああ。多分平気だ」

多分という所に、自信の無さを如実に現している。

今しがた起き状況を把握したばかりなのだ。整理も行っておらず、自分の体がどのような状態に在るのか定かではない。確か、吐いた夢を見て、それと何かが原因で。しかし、それ以外はまるで覚えていない。

それでも妹に心配をかけるのは兄としての姿ではないと思う。情けない今の姿を秋葉に見られているのに、そのような物は今更なのかもしれないが。

「気持ち悪さは無いし、お腹も減っている。食欲があるって事は健康体って事だろ？」

影を覗かす妹にわざとおどけて、志貴は応えた。

何よりも志貴がすべきなのは体中から心配を滲ませる秋葉を安心させることであった。眉を悲しげに傾かせた表情も含め、生命を確かめるように志貴の手を強く握りしめるその態度から、秋葉がどれだけ志貴を心配していたかは明らかだった。

そんな志貴の心配りをどう受け取ったのであろう。秋葉は眉間に皺を寄せて俺の目を覗いてくる。

「お、おい秋葉？」

「兄さんが、嘘を言っているかもしれませんが」

どうにも信用がない。

確かに信じられるような事、今の今まで一度足りともしたことがない。長い別離の時には交友すらなく、お互いの状況も把握できず、家に戻ってきてても心配をさせてしまうまるで駄目な兄のままなのだから。秋葉の行動も貧弱な兄を心配しているからゆえのものだと思えば、何も言うまい。

それを証明するように、秋葉によって握られた手が更に強く、温かさを確かめるように握りしめてくる。その痛いほどの力が、秋葉がどれだけ心配をしていたかを物語っていた。

だが。

「
っ」

志貴には秋葉の姿を長く見つめるのは辛すぎた。

秋葉の姿はまるで継ぎ接ぎなのだ。黒ずんだ線が秋葉の体中を蹂躪していて、触れてしまえばそのまま崩れてしまいそうな感覚がある。秋葉の身に走る亀裂。線は脆いのだ。近づきすぎれば壊れてしまふ、と志貴は危惧する。何が、とは考えたくもなかった。

そして志貴は違和感を覚えた。
気のせいだろうか。

線が以前よりもハッキリと見える気がする。

視界に走る黒色の亀裂が、どこか少し濃い。
頭に僅かな痛みを感じた。

痛みというよりも僅かに突っ掛かるような、脳内が痒いと表す事が正しいような痛みがあった。

でも、ここで瞳を反らす事も出来ない。それでは嘘を言っていると公言しているようなものだ。だから真っ直ぐに笑みを湛え秋葉の瞳を見続けた。苦痛にも似た気持ち悪さを飲み込んだ。視線が絡み、少しばかりの時間が流れる。

そして。

「……嘘は、言っていないようですね」

「まさか。嘘なんてつくはずないだろ」

「分かりません。兄さんが嘘の上手な方でしたら装う事も得意ですよっ?」

「お前なあ……」

最早降参だと肩を竦ませた。そんな呆れ交じりの仕草に、ようやく秋葉の仲に渦巻く不安がその質量を薄くしていくようである。顰められた眉の形が整っていく。こんな遣り取りで、秋葉の中にある影は薄れていくのだ。

それが例え長い間を共に過ごす事もできなかった二人であろうとも、確かな家族の感覚である。苦笑と共に、この空間をどこか安易とは言わないまでも受け入れた。

「ああ、そつだ」

そんな雰囲気、そう言えばと改めて思った。

「なあ、秋葉」

「どうしましたか？」

「俺は返事を聞いていないんだ」

「何がです」

要領を得ぬ志貴の言葉に秋葉は僅かに小首を傾げる。

そんな少し子供らしい仕草が可愛らしく思え、この顔が見られただけでも痛みを我慢した甲斐はあった気がした。

「おはよう、秋葉。……と言っても、もうこんばんはの方がいいのかな」

出来るだけの、柔らかい笑みを秋葉に送った。

そして、今しがた気付いたのか「あっ」と声を漏らし、暫しの時を置いた後に秋葉は眩しげに微笑んだ。

「おはようございます。兄さん」

時機としては、それぐらいだろうか。
硬い扉を叩く、ノック音。

「失礼します」

静かに扉が開かれて、翡翠が姿を現した。

「おはようございます。志貴様、お体のほうは大丈夫なのでしょう
か」

翡翠は変わらない静謐さで言葉を紡いでくる。まるで先ほどの秋
葉のような繰り返しだった。それを苦笑して受け入れる。

「ああ、おはよう翡翠。もう大丈夫だよ」

「でも、暫くは体を養生しないといけませんよ。兄さんは元から体
が良くは無いのですから」

「秋葉。そんな人を病弱みたいに言うなよ……」

「あら、違いますか？」

「……違うぞ、多分」

改めて言われれば、自信は無い。

最近は何事もないが、かつて受けた事故の影響により志貴の体は
貧血を患っている。頻発する貧血は志貴の生活を確かに不便にさせ
る重いもので、そう思えば病弱といわれても仕方が無く、今回の事
も有って指摘をされればぐうの音も出ないことは明確であった。

しかし、そんな志貴の反応に秋葉は仕方のないことだと小さな笑

みを口元に浮かばせるのであった。その笑みを受けて、志貴としては最早どうしようもない。

「あの、志貴様」

翡翠はどこか顔を曇らせて志貴に声をかけた。

「ああ、どうした翡翠」

「先ほどご学友の方から電話があり言伝を預かっております」「有彦から？」

今はこんな時間なのだ。学校には休みの電話は早朝に入れてあると、秋葉が教えてくれた。しかし、志貴に電話を入れるような友人は限られてくる。それこそ悪友ぐらいなものだろう。故に有彦の名を出したのだから、しかし志貴の予想は以外にも外れた。

「いえ。クラスメイトだという弓塚様からです」

「弓塚さんが？」

意外だった。弓塚さつきから電話が来たとは。二人には共通点が少ない。同じクラスメイトであるが、しかしその距離は決して短いものではない。だがそこで、はたと思った。

昨日。昨日である。二人はある共有を果たしたのだ。

「……………」

「それでなのですが『私も今日休んじゃったから、明日学校で会おうね』と」

「そっか……………」

弓塚と志貴は昨日一緒に帰り、そしてあの藍色に出くわした。その影響なのだろうか。あの藍色と出会った二人が体調を崩した。藍色の存在に、消えた首に気でもやられたのであるうか。でなければ、休む事も吐く事もなかっただろう。

でも。

「そうか」

噛み締めるように、志貴は呟いた。

辛かっただろう。怖かっただろう。日常にいるはずなのに、まるで現実味の無い場所に降り立ったような感覚があの時襲った。それを弓塚も感じているはずだった。しかも、所在のない弓塚に志貴は言葉をかけることも出来ずにいたのだから、自らの至らなさを痛感した。でも、弓塚はそんな志貴に、気を使ってきている。優しい人だ。

それが、嬉しかった

「そうか」

「兄さん？」

「いや、なんでもない。ありがとう、翡翠」

「いえ……」

そして用事は終わったのか、何事かを口に仕掛けて、しかしそのまま押し黙ってしまい、そのまま翡翠はあっさりと部屋から出て行った。一礼は欠かさずに。

「学校か……」

学校で会う約束なんて、今まで交わした事もなかった。有彦とはある程度の約束自体を交わすこともあったが、それもくだりのないことで学校とは無縁の約束だ。だから二人は悪友なのだろうが、それが今しがた打ち破られた。

何故だろうか。志貴はどこか明日学校へ行く気力を増していった。

「兄さん」

しかし、そんな志貴にどこか秋葉は先ほどまでとは異なった表情を見せる。

「その、弓塚さんとはどのような関係で？」

「ああ。同じクラスメイトだって翡翠が言ってただろ？友達、かな」

「それは女性の方ですか？」

「そうだな」

「……」

「秋葉？」

「……莫迦」

どこかむくれたように、秋葉はそっぽを向くのであった。

「……志貴様」

安堵に緩んだ口元から零れた声が人気のない廊下に落ちる。誰に聞かせるでも無く、しかしその言葉は狭い廊下の壁を反発して翡翠の鼓膜を震わし、今朝から固まったままの心を次第に溶かしていった。

そこは志貴の部屋から扉ひとつ隔てた廊下だった。扉の向こうには志貴と秋葉の声音が伝わってくる。翡翠は離れる事も無くその場に佇んでいた。

遠野における翡翠の仕事のある程度をこなしていると、時間は瞬く間に過ぎていくように思えるが、今日だけはその感覚が狂った。今朝に志貴が体調を崩してから、気がそちらにばかり向いて仕事の傍らに時計を見た回数も数知れない。

仕事は重要だと思っている。翡翠はこの遠野では使用人なのだから、仕事はこなさなくてはならない。けど、今日ばかりはその仕事へと傾ける集中力はすぐさま霧散して、頭には苦悶に顔を歪ませる志貴の事ばかり浮かんだ。

清掃の合間に何かと用事を見つけては志貴の部屋へと足を向けた翡翠である。秋葉が執務室で仕事を行っている僅かな時間は、翡翠が志貴の様子を見守り続けたのだ。

志貴がどれほど苦しんでいたか、その目に全て収めた翡翠なのだ。眠りにつきながら苦しみ、やがて絶叫を上げて、嘔吐した志貴の姿を翡翠は全て見ていた。主人の顔色がどれほど悪かったかを心細げに見つめ、躊躇いがちに顔から吹き出る油汗をふき取った。その危うげな生気に彼女の不安は一人に肥大していた。部屋の片づけを幾程か間違える事もあった。志貴がどうなっているか心配し、いつのまにか上の空へと赴いた事もあった。

「よかった……」

翡翠の精神に張り巡らせた緊張が柔らかくなっていく。一時の安

堵に息を吐いた。

秋葉もようやく心安らいだらう。仕事のために志貴の部屋を離れる事さえ躊躇い、頑なに志貴の手を握り続けた彼女を、側で仕事をしていたら志貴の寝つきも悪いだらうと説得したのは意外にも翡翠である。志貴の苦しむ様をその目に収めた翡翠だから、志貴の身を案じ、秋葉には休息の意味を込めて翡翠は説得したのであった。

その志貴が、夕刻も深まり夜が訪れるこの時に、ようやく意識を回復した。

しかし。

「……」

翡翠にはその安堵を確かめる事は出来ない。

扉一枚隔てた向こうに、目覚めた志貴がいる。扉越しに聞こえる兄妹の会話を耳にしながら、翡翠はその扉の側から離れる事が出来なかった。

何も立ち入り禁止だと命じられたわけではない。入ろうと思えば、先ほどのようにいつでも入る事ができるだらう。そして目覚めた志貴の顔をちゃんと確かめたかった。

だが。部屋の中にいる二人は仲睦まじくて、長居し割って入る事はどこか躊躇われた。

温かな室内を乱すことは避けたい。室内に満たされた柔らかかな空気を硬くする事は良くない。そのような温度、自分が味わうなんていいはずがない。

そうやって自分に言い聞かせ、この場にいる。入りたくなければ、この場にいななければいい。翡翠は使用人なのだ。仕事を行うために、この場を離れなくてはならない。

しかし、それを思えば思うほどに翡翠の足はこの場から離れようとはせず。

「翡翠ちゃん？」

そんな翡翠の側にその人は、いつの間にもやらそこにいるのだ。一人でいる、翡翠の側に。

「姉さん……」

どこかいつもよりも明るい雰囲気を含ませながら琥珀は帰ってきた。

琥珀は今日、体調を崩した志貴の相談を行うために昼頃から時南へと赴いていた。時南は琥珀が医学の師事を行っていた人物であり、やはりその手腕は目に付くものがあるらしい。姉の処方の腕を知っている翡翠は漠然と時南の情報を耳にしていたが、その場所に姉が行くのだから師弟関係で話も弾んだのだろう。昼頃に遠野を出て、戻ってきたのが夜も間近に迫った頃である。

顔つきはいつもと変わらないが、何だろうか、隠し切れぬ陽気はその体から溢れている。普段遠野からは買い物以外に外出しない琥珀にとって本来の意味以上の時間が過ごせたのだろうか。

「姉さん、お帰りなさい。……用事はもう終わったの？」

「ええ。こんな時間になるまで話こんじゃったけど、もう大丈夫。元氣そうで安心しちゃった」

「……そう」

琥珀は本当に嬉しそうに笑っていた。此処まで嬉しそうに、こんなに中身のある笑みは翡翠にとっても久しく見ない光景であった。

琥珀はいつも笑顔だ。感情豊かにする事もできない翡翠とは違い、琥珀は澆刺と笑む。陽気を満たす笑みでもって、人の少ないこの屋敷に柔らかさを運んでくるが、今目の前にある笑顔は、いつも見る琥珀の表情とは質が異なっているように翡翠は思えた。

それが具体的に何なのかは分からないけれど。

しかし、それに応える言葉がそっけないと自覚する。翡翠の心の奥にある自身へのわだかまりが言葉に温もりを失わせている。

765

いや、翡翠にはそのようなものは必要が無いのかもしれない。

「それで翡翠ちゃんはどうしたの？志貴さん起きたんでしよう、入らないの？」

「……」

そしてそんな翡翠を見抜いているように琥珀はいつも翡翠の核心をついてくるのだ。流石は姉ということだろうか。

「私は……」

「うん」

「私は、この中に入っではいけないんです」

「え？」

「志貴様が目覚めた事は嬉しいです。秋葉様も、喜んでいます。私も、嬉しいです」

「翡翠ちゃん、なら」

「でも……私がこの中に入るのは、なんだかいけない事なんじゃないかって思うの」

「どうして？」

「……私が、使用人だから」

翡翠がこの部屋に入る事は分相応ではない。今、喜びを分かち合っている二人は翡翠の仕える主人なのだ。その二人が温かな会話を交わしているのである。その中に入り込む事は、それは。

「それは、使用人がしてはいけない事だと、思います」

先ほど入室したのは、志貴の学友から預かった言伝を志貴に伝えなくてはならなかったからだ。主人と使用人が空気を共有する事は使用人としての役割があるからである。そうでなければ、本来であれば家族ではない翡翠がこの遠野に入れるはずが無い。それを翡翠は使用人としての役割を会得しているから、ここにいるのだ。

しかし、今。

翡翠が部屋の中に入る事は、それはもう使用人としての役割を越えた話である。

本当は、翡翠もこの部屋の中にもっといたかった。部屋に入って真っ先に志貴の顔色を確認したい。そして、その声音を聞き、安心したかった。

だが、それは翡翠の役ではない。

それは、使用人として踏み込んでならない翡翠の境界線だった。

ここを踏み越えていく。それは、家族や親しい人間の行うべき事であり、ただの使用人でしかない翡翠には、あまりに遠い断崖であった。

使用人である翡翠は、志貴や秋葉とは異なる場所にいる。まるで一人だ。

「……そっか」

翡翠の密やかな答えを、琥珀は困ったように苦笑しながら頷いていた。

翡翠の言いたい事は、何となく琥珀にも理解できる事であった。

その意味合いはまるで異なるが。

「それじゃ、翡翠ちゃんはどうする？」

「私は、これからお粥の準備を」「それは駄目だってば」…使用人としての仕事を、します」

「そう。じゃあ」

愛しむ様な琥珀の視線。

それはただ妹を想う、姉の瞳であった。

「使用人として翡翠ちゃんは病み上がりな志貴さんに何をすればいいのかしら？」

琥珀の問い掛けに翡翠は、はたと思う。

己は志貴に対して何が出来るのだろうか。

体を患っているかもしれない志貴のために色々世話を行わなくてはならないだろう。水差しの水は充分だろうか。寝汗に召し物は不快になっていないか。いちようの意味も込めて着替えを持っていくべきだろう。もし汗が酷かったらシーツも新しいものに取り替えなくてはならない。

「あ」

なんだ。

考えてみれば、志貴のためにやれる事は沢山ある。そのどれもが些細な気遣いの範囲を抜け出す事ではないが、使用人の仕事である。それならば、この中に入る事も翡翠には許されるような気がした。

しかし。

「でも、そんな片手間に……」

志貴の様子を確かめたいがために仕事を行うのは、少しばかり悪い事しているような気がする。しかしそんな心根は、志貴の使用人となる事から打算的に内心考えていた事を、その時になって翡翠は思い出した。

「何言ってるの。翡翠ちゃんは仕事のために志貴さんの部屋に入るんだから、誰も何も言いませんよ。それにもし秋葉様が何か言っても、仕事なんだから大きくは言えませんって！」

だから大丈夫！と琥珀はなぜか力瘤を作った。

そんな琥珀の後押しに翡翠は暫し黙考した後、力強く頷いてその場を後にした。頼りになる姉に感謝の言葉を残しながら。

「姉さんは駄目だと言ってたけど」

使用人なのだから、お粥ぐらいは作らなければならぬと、翡翠は使命感にひた走った。

「そつえば……」

気持ち足早に廊下を歩く翡翠であるが、その半ばでふと翡翠は思う。

何故、今しがた帰ってきた姉が、志貴が目覚めた事を知っていたのだろうか。

僅かに脳裏を過ぎた思考は、消えるでも無くそのまま奥底に沈んでいった。

「ふう」

梅の味がエッセンスでは無く、梅の味そのものという不慣れな味わいであるお粥を胃袋に流し込んで、志貴は再び部屋にいた。翡翠の手作りなのだと言われ、気合で食した。暫く梅はいらない。

そのまま長居しても問題は無かったのだが、秋葉たちに速く寝たほうが良いと奨められたので、多少残念であるが折角の気遣い無しにはすまいと甘んじて部屋に戻り、今はベッドである。そこに腰掛け、今は何をするでも無く亡羊としている。

どうやら志貴が部屋を離れているうちにシーツが変えられたらし

く、湿り気のあったシーツは手触り良く冷たいものとなっていた。恐らく琥珀か翡翠が行ったものだろう。秋葉がやるとは思えない。

「さて、どうするか」

しかし、部屋に戻ってもする事は多いわけではない。如何せん今は手持ち無沙汰である。やる事は自然と限られている。学校の宿題は既に一日休んでいるのだからやっても意味は無い。いや、復習と言う点で意味はあるはずなのだが、それは宿題ではない。そして復習を自ら進んで行うのは、勤勉者ではない志貴には縁の無い事であった。

では先ほどあったばかりであるが、秋葉のどこにでも行くのか。何をするわけでもないが、話し相手には申し分ない。

しかし、話し相手ならば他にも翡翠や琥珀もいる。二人は今どうしているだろうか。仕事なら仕方ないが、話すだけなら問題ないだろう。特に琥珀はそこらへん聞き上手そうだ。思えばあの二人とはちゃんと話していない。折角同じ家に住んでいるのだから、話す機会を作るべきだろう。

「……でもなあ」

先ほど寝てると言われたばかりなのだ。これ以上気を使わせる事は如何なものだろうか。ここで秋葉に会えば小言を言われるだろうし、他の二人に会いに行くのも気遣いに乗ったような感じとなるのがいただけない。

ならば、というかやはりというべきか。

「じゃあ、寝るか」

仕方ない。そう呟いて、そのまま横になる。

新しいシーツはなかなか肌触りがいい。そのまま包まっていれば忽ちに眠れてしまうだろう。眠り癖みたいなものが見ついたのだろうか。一日中寝たからか脳がきちんと起きていないようで、ずっと眠たい気がした。食事中もどこか起き切っていない感覚があった。夕飯だと言うのに朝食のような。

「まあ、今日始めて食べたんだけど」

それが梅味ではなく、梅のお粥なのだからなかなか刺激的だ。

しかし、それならば朝食と言う考えもありだろうか。内臓が起き始めたばかりなのだからお粥なのも胃に優しいだろう。この際、味は無いものとしておこう。

だが、このまま眠ってしまうのは、一日を無駄にしたようにも思える。だから具体的にどうしたという訳ではないが、何となく遣る瀬無い。

「仕方ない」

再び呟いて、自分を収める。そもそも落とし所なんてどこにもないのだ。

例え、あの藍色のせいであっても、もう会うことも無いのだから。

「……………」

そのまま横になっている内に、きつと眠っている。そうすれば、弓塚との約束も果たせるであろう。

約束というほど強制力もない、ただ志貴がそう想いたい約束だ。しかし、今は。

その約束を果たすために眠っておこう。

ハ　ハ　。

仄暗い道なりを、体を引き摺るように進んでいく。

足元が、安定しない。影と闇を貫いて、人も入らぬ街路地の裏を進んでいく。

舗装された道路に、僅かな赤色が垂れている。脇腹を裂く傷口が疼いて仕方が無い。ぐじゅぐじゅと奇怪な音をたてながら、傷口に蛆でも湧いたような感触そこにはある。

その痛みが、抜けない。

脇腹に感じる痛みが、どういわけか抜けない。

「ハ　ハ　」

獲物を見つめる獣の如き息遣いが、人気のない路地を侵食する。途切れる呼吸を無理矢理に稼働させる吐息。どこにも届かぬ、声にもならない悲鳴であった。

荒い吐息は暴力的に酸素を取り込んで、軋もうとする筋肉を動かしていく。

しかし、こんなにも苦しいのに、どこにもたどり着かない。

「グガ　！」

膝が崩れ、そのまま硬い道路に体が叩きつけられた。

無様に、転がる。

頭の中を半鐘が木霊する。何を考えているのか、自分ですら理解できない。まるで自分以外の誰かが脳内を侵して回っているかのようだ。誰だこいつは。お前になんて用はない。

そのまま消えて女の糞に塗れてる。

「そうだ、そうだ。消え去れ。全部消え去れ。」

「必要なもの以外全部消えて滅びろ。滅びて消えろ。」

「アア」

路地に跨る暗がりのなかを無理矢理動いていく。逃げるのではない。逃げてしまうのではない。

「そうだ、そうだ。そんな選択肢、どこにもない。」

「ただ、」

「アイツ」

「憎悪のままに動けばそれでいい。」

「そのために、今は動け。動いて、機会を待て。」

「今はまだ、雌伏の時。アイツに見つからず、今は機会を待て。」

「そして、いつか。そして、いつか。」

「アイツを殺して、粉微塵にしてくれる。」

「憎悪に牙を剥く。」

「そして、その瞳が、今追うべき標的を探った。」

以下NG。

もし、この場面で琥珀さんが登場したら。

「しかし、秋葉。あれだな」

「何ですか？兄さん」

「……近くね？」

二人の距離は最早唇にさえ届いてしまいそうな隙間しか残されぬほどに接近していた。吐息が顔にかかり、志貴の鼻腔には香りよい匂いがくすぐっている。それが石鹸の匂いなのか、服に滲む洗剤の匂いなのか。それとも、秋葉自身の体臭なのだろうか。ひたすらに

良い匂いである。

「……………っ!？」

一瞬志貴が何を言っているのか理解できなかった秋葉だったが、小首を傾げた瞬間には志貴が何を言いたいのか理解した。頬を赤く染め、慌てて身を引こうとして。

「あ—————っ!」

絹を裂くような、それでいてどこか楽しげな声音が室内に響いた。何故だろう。体中の毛穴が開いて嫌な汗が流れてきた。反応してはいけない。反応してはいけないと自分に言い聞かせて、仏の如くに内心経典を読みふけながらその人をいないものとして扱おうとした時には、既に爆弾を放ったのである。

「志貴さんと秋葉様がディーブキスしてます!」

琥珀は楽しげにニヨニヨと口元を緩ませながら二人を指差している。しかし、そんな事を言えば状況が混乱するのは分かっているのである。

「な!きっ、きききききききす!? 琥珀貴方を言ってるの!?!?」

「そうですねよ琥珀さん! 俺たちがそんな事する訳ないだろ!」

志貴と秋葉の言葉に耳を貸さず、いやむしろ更に悪化させて琥珀は場を掻き乱す。

「いいんですよ恥ずかしがらなくて。しかし近親相姦とはレベルが高いですね。秋葉様やっるー!」

「ちよっと待ちなさい! 何で私なのよ!」

「えー、だって秋葉様じゃなきゃこんな事しませんしー。志貴さんが寝込んでいるときに襲い掛かるのも余裕ではないかと」

「……………一度貴方ときっちり話し合う必要がありますね、琥珀」

「あ、それとも秋葉様じゃなくて志貴様でしたか? 病に心配している秋葉様の優しさにつけこんであーんなことやこーんなことまでやっちゃいましたか」

「いやいやいやいや! やってません琥珀さん!」

「それは秋葉様に女性としての魅力が圧倒的かつ完全無欠に無いっ

て事ですか？」

「……いや、それは」

それを真剣に答えるのは兄としてどうだろう。妹の女性的魅力を謳う兄なんて危険すぎる。少なくとも正常な兄妹とは言い難い志貴と秋葉であるが、常識ぐらいいはある。そして妹の魅力を声高々に語る兄がなかなか逸脱している存在だとも分かっていった。

しかし、言葉に詰まった志貴を秋葉は見逃さなかった。

「……兄さん？何故、詰まるのですか！！」

「ちょ、秋葉！？」

一気に騒然と化したその場で選択を間違えた志貴に、先ほどとは違う眉の形で秋葉が詰め寄る。

その光景をいつの間にもやら傍観者のようににやけて見つめる琥珀なのである。

それが琥珀たる所以でもあったが。

ただ志貴にはそれを確認する術も無く、秋葉を宥めすかしながら眼鏡をかけ自身の生じた違和感を奥底に仕舞いこんで、愛想笑いを浮かべる事が今先決すべき事であった。

「いや、秋葉あのな？別にお前に魅力があるとかそんな事はどうでもいい」

「どうでもいい！？兄さんは私のことがどうでも言いというのはですか！！」

顔を真っ赤にさせて、先ほど志貴の直前で見せた恥じらいの赤とは全く異なる顔色に表情を変えて、秋葉は髪の毛振り回さん勢いで怒っていた。

心なしか髪が赤いのは気のせいだろう。

「いやいや其処まで言っていないから！兎に角秋葉、少し落ち着いて……」

「私は落ち着いています！！大体兄さんは……っ！」

終われ。

第十話 人殺の鬼？（後書き）

ひとつの章が長すぎて仕方ない。ここまで書いたのに、これが一日分なんです。ありえねえと改めて実感しっぱなしの六です。

必要なものと、そうでないものを書き分けていけないとそのうちとんでもない事になりそう。と言うか既になっている。さて、収拾はつくのかこれは。最早半笑いの執筆が続くっばいです。

以下今日のおさらい。

さっちゃんはクッキーを美味しくいただきました。

翡翠は作れる料理リストにお粥を追加した。

これならばしばらく物は試しと、色々作り方を画策している。

朔は本当に主人公なのかと作者が疑いを持ち始めた。

断章 夢現（ゆめうつ）（前書き）

まどろむ午睡は緩やかに夢へと意識を誘う。

そして少女は、幼い女の子へと変わっていく。

断章 夢現（ゆめうつ）

遠野秋葉の目覚めはどこか飽きをもたらししている。

広い部屋の中、一人で起きる。ベッドは小さな秋葉の体には大きすぎるもので、大人が二人いても寝られそうなサイズだ。そんな大きいベッドを秋葉は自身の寢所としていた。

いつも同じ時間に起きて、過密なスケジュールを勝手に組まれては、それをこなしていく。文句を言ってもまるで秋葉の言い分は通った事がない。厳しく接する家庭教師の顔にも飽きが来ていた。何であの人はあんなにも冷めているのだろう。あの人物を選別したのが何となくであるが父によって決められた事だと察していた。それを察するほど秋葉は聡明であつたし、そして幼いが故に父の意図までは理解できなかった。

しかし遠野は家柄が良く、それゆえに確かな教養を取得しなければならぬらしく、遠野に相応しい人間にならなくてはいけないと押し付ける人間に満ちていた。そして彼らは時折言うのだ。もっと頑張りなさいと。そんな言葉が酷く悲しかった。

結局いつも自分は何かを押し付けられるばかりで、自ら選択なんてした事が無かったのだ。それを悔しいと感じ、しかしそれを変革する事が小さな秋葉には出来なかった。

「はあ……」

そして今日も、退屈な日々が始まる。

「今日はこの本を読んで理解してください。後で幾つか質問をします」

そう言つてその大人は分厚い本を一方的に手渡してくる。重苦しく、内容も易しくない難解な本である。秋葉にとつてこの本は面白くもないし、ただ退屈である。ひとつの机に向かつてこれを読み解く時間は徒に苦痛であつた。

しかし、それは内容を把握できないからではない。何となくであるが、秋葉には読めなくも無いギリギリのレベルをこの大人はいつも渡してくるのだ。

今よりももつと幼い頃から大人たちに囲まれて習い事を教えられ続けた秋葉である。その教養は同年代の一定基準以上を疾うに上回っている。元からの素養も良かったのか。ただ黙々と勉学を教えられ文化人としての教養を教えられ続けた秋葉であるが、大人たちの期待には応えてきた。

ただ、今出来るのであれば、更なる成果を期待されることは道理であると、秋葉は気付かなかつた。

「はい……」

秋葉はただ頷く事しか出来ない。頷く以外の選択肢は秋葉には提示されない。もし此処で嫌だと言つても、他の習い事を行わせるのだ。かつて一度だけ僅かな反抗心から勉学を嫌だと断つたところ、引き続き楽器の練習を行わされたのだ。

自由など許されない。大人の管理下で秋葉は育てられてきた。

反抗は無意味だった。秋葉のみの時間など、睡眠と入浴時のみである。食事時はテーブルマナーを意識しなければ大人たちの冷めた目に晒される。あの視線はあまりに辛かった。幼い秋葉には他人からの悪感情を受け流す術も心意気も持っていなかった。

「それでは時間になるまで私はここを出払います」

そう言つて、その大人は出て行った。

残されたのは小さな秋葉と、そんな秋葉には大きさの合わない執務机である。備え付けられたイスもそれに揃つて大きい。大人用の大きさである。この机が秋葉の勉強机である。背丈もサイズもまるで合っていないのだから、秋葉には座り心地が悪い。秋葉は据わりながら自分に合うような位置をもぞもぞと探すのであるが、そのような場所は毎度の事に存在しなかった。

渡された本を開いてみる。小難しい内容の本である事は開く前から分かつていた。しかし、課題として出される本はいつも頑張れば理解できなくも無い内容なのだ。そのようなレベルの本をあの大人は狙つて選んでくる。そんな嫌らしさと、大人だからという理由で秋葉は部屋から出て行つたまま、そのまま戻つてこなければいと思つが、その度大人が戻つた時のあの顔を見るのは更に落胆が大きくなる。

遠野には大人ばかりいる。その殆どが秋葉にとっては親戚の関係にある者ばかりであるが、その様な事秋葉にはあまりに関係が無い。彼らは大人であり、大人という存在でしかない。秋葉には優しく厳しい態度という仮面を被り接してきてはいるが、幼くして聡明の片鱗を見せる秋葉には、彼らが秋葉を次期当主候補としてしか見ていないことは明らかであった。

「……」

遠野秋葉は現当主、遠野槇久の娘だった。

母はいない。秋葉の母は秋葉を生んだ時に死んだのだと、秋葉は父から聞かされた。それを寂しいと感じたことはある。しかし、そんな秋葉を憐れんだのかどうか分からないが、父は秋葉に優しくかった。

だからだろう。母を求める気持ちはそれほど無かった。親戚に再婚を奨められ、それを父が断った事を知っているからかもしれない。

父は死んでも母を愛しているのだと、それが嬉しかった。

普段、父と接する機会は多くない。忙しいからなのか、最近父は部屋に引きこもっている事が多くなった。たまに会っても秋葉には優しく接してくれるが、すぐさまどこかへと消えてしまうのだ。それを残念だと、心底思う。この遠野に於いて、父の優しさは格別であった。例えそれが、自らへの嘆きから生まれる事であったとしても。

『秋葉』

その言葉だけはやけに秋葉の記憶に残っていた。

『私達はね、一人で生きて、一人で死んでいくんだよ』

父は寂しい人だ。何となく、そう思う。

悲嘆に暮れ、それでも生きていく孤独な人だった。

母を亡くし、側には利権を争う親戚しかおらず、全くもって心休まる事もない。

それはまた、秋葉も同じであった。

「……」

窓の向こうを見やる。そこには広い空があった。どこまでも果てしなく、遠い。秋葉にはまるで届かぬ外である。自由ではない秋葉には外で遊ぶ経験がまるで無かった。

秋葉という子供はまるで鳥籠の鳥であった。鳥は空を羽ばたく。子供である秋葉も、外に出て遊びたかった。しかし、そのような自由は秋葉には許されない。

これからも変わらぬ空漠の日々が続く。

そう、思っていた。

そんなある日である。

いつものように勉強を強制されてそれを受け入れるしかない秋葉は、重厚な勉強机に向かいながらこれまた厚い本を読んでいた。その内容をひたすらに理解し、一所懸命に把握する。

何も変わらない。何も変わらない。

そんな事実が当たり前のように転がっていた。

だからだろう。

「？」

一瞬、それが何なのか上手く理解できなかった。いつもの時間に変化が起こった。

始めは風が強いのだと思った。風が強いから、窓が揺れているのだと、思った。

だが、それは

「！」

窓の向こうから手を振るあの人の姿で覆された。

それから、秋葉の視界は一変した。

秋葉を外へと連れ出し、よく習い事をサボる兄とこの前連れてこられたと言う巫浄の子供と共に一緒に遊んでくれた。外で誰かと遊ぶなんて秋葉には始めての体験であった。兄達は気弱な秋葉に優しくそれでいて素直に接してくれた。このように同年代の子供と共に外を走り、家を探索し、森を駆けるなど、今まで紡いだ秋葉の人生ではありえないことだった。

楽しい。誰かと遊ぶ事がこんなにも楽しいことだなんて、想像以上だった。

だから秋葉は笑ったのだ。その人たちと笑いあった。こんなにも明るく笑った事は、今までない。

大人たちの期待に応えるだけの人生であった秋葉には、こんなに

も笑顔を振り撒く機会なかった。

だから嬉しくて、楽しくて、目が醒めるその時を心待ちした。自由な時間である就寝の時刻が、以前よりずっと待ち遠しい。

なぜなら、目覚めればもう明日なのだ。

明日になれば、また遊べる。

また、あの人達と一緒にいられる。

そう思うと、秋葉はわくわくとして少し眠れないこともあった。

それからだろう。秋葉の表情に明るさが宿ったのは。

しかし、習い事をしなければならぬのに、その時間を狙って遊んでいるからだろう。

その時間を担当していた大人が父に報告したのだ。

「……」

何度言っても抜け出す秋葉に業を煮やしたのだろう。子供に出し抜かれることも癪に感じたのだろう。兄らは抜け道を考える事が上手く、嚴重な管理にあっても秋葉はその盲点を抜け出して、外へと向かっていった。兄らの助けもあり、秋葉はいつも外で遊んでいた。

そこは父の部屋ではなかった。恐らく廊下ですれ違ふ瞬間を狙っていたのだろう。長い廊下に父は物静かに佇み、叱るでも無く秋葉を見下ろし、家庭教師からの報告があったことを告げた。

そして秋葉は父へと告げ口を行った大人を酷く嫌な存在と再認識

を行った。自分では止められないから、わざわざ父を煩わせるその魂胆は毛嫌いする分には十全である。しかし、こつやって父を煩わせている元の原因が秋葉であることを思えば、父への多大な申し訳なさが胸の奥に溢れていった。

「秋葉」

短く、酷く簡素な声音。

秋葉は怒られるのだと、身を竦めた。

遠野に溢れる大人たちはひたすらに嫌いである。しかし、父だけは違う。父は秋葉には優しいのだ。何かを無理矢理に強制させるわけでもない。頭ごなしに強要させるわけでもない。秋葉の身を案じる、普通の父親だった。

だからその父に怒られるのは、涙が出るほどに応える。

「……………はい」

知らず、声が震えた。

「……………勉強をせず遊んでいる、と私は聞いた」

「……………はい」

そこで、父は秋葉に手を伸ばしてきた。はたかれる、と思った。

「楽しいか？」

それを、秋葉は良く理解できなかった。

父は、震える秋葉の頬に触れ、足を畳んで秋葉へと視線を合わせた。

思い描く最悪の未来図と今の状況が異なり、秋葉は父を見た。

「え……？」

「遊ぶ事は、楽しいか？」

父は要領を得ない秋葉に伝わるように、声を荒げるでも無く、静かに呟いている。

怒っている顔ではない。

むしろ、それは

「楽しいです……」

「勉強よりも、か？」

「はい。勉強よりもずっと……ずっと楽しいです」

「……そんなに、大事なのか」

「はい……」

稚拙な声音を並べて秋葉は父へと真っ直ぐに応えた。不安に揺れる声で、全く芯の無い言葉であったが、その思いだけは伝えたかった。

秋葉は、今を良しとしたい。

あの瞬間を、ずっと楽しみたい。

秋葉にとって、あの時間だけは心の底から自由なのだ。あの人に

連れられた時、秋葉は自由の断片を掴んだのだ。子供たちと始めて見た大空は気持ちのいいほどの青色を描き、遠野という家系の重圧もしがらみも全て家の中へと置き去りにした。

楽しい。嬉しい。そんな感情だけが、あの時にはある。

それだけで充分だ。

それを失いたくは無い。それだけは、守りたい。

だから、父の目を真っ直ぐに見つめた。

「……そうか」

父は秋葉の答えをどう受け取ったのだろうか。頬に添えられた手は乾燥してカサカサであったが、仄かに暖かく。その感触は久しぶりに会った父の懐かしき掌であった。

「なら、いい」

「……お父様？」

そして気付いた。

父は、眩しげに、どこか寂しげに微笑んでいた。

「秋葉。大切なら、それを大切にしなさい」

視線を柔らかく、父は告げて秋葉が理解をする間にその場から遠ざかっていく。

何故、父が怒らなかったのか秋葉にはまるで分からない。勉強よ

りも遊ぶ事を優先させる事は、遠野の人間として決して受け入れられるべきものではないはず。

秋葉の応えに何か感じる所があったのだろうか。後姿を目で追っても、父は振り返る事も無く歩いていく。

しかし、幼い秋葉でもこれだけはわかった。

父は、秋葉があの人たちと遊ぶ事を許してくれたのだと。

「うんっ！」

遠くなっていく背中に、満面の笑みを零しながら秋葉は大きな返事をした。

「……」

夢は小さな秋葉の記憶を辿っていく。

そして、場面はその時へと近づいていた。

その日秋葉はいつものように屋敷を抜け出して、遠野の敷地内にある森の広場で花飾りの円環を編んでいた。遠野に自生する植物を幾程か頂戴して、懸命ながらに編みこんでいく。決して上手ではない。始めて作っているのだ。けどそれを作ってあの人に渡したかった。出来上がった花飾りの円環をあの人は受け取ってくれるだろうか。受け取ってくれたら、喜んでくれるだろうか。

期待と不安を緋い交ぜにしながら、秋葉は楽しみに花飾りを紡いでいく。

最近では大人たちは直接的には秋葉に何かを言う事は無くなった。

むしろ改善されたと言っているだろう。
何と遊ぶ時間が設けられたのである。

抜け出す算段を考えるぐらいならその時間を遊ぶために使ったほうがいいと、限られた時間ではあるが外へと遊ぶにいける機会が作られたのだ。

そして、この計らいは驚くべきことに父が図ったのだと聞かされた。

父がどのような想いで秋葉の時間を考慮したのか、全ては理解できない。ただ廊下で話したとき、秋葉の返答に現状の改善を感じたのか、習い事も僅かに減らされた。本当に僅かな時間と量であるが、その時間調整を父自身が行っているのだ。そのお陰で今こうやって太陽の下遊べるのだから、文句のあるはずが無い。

森は穏やかな風に葉の擦れる音が運ばれてくる。天上に樹木が重ならないその場所は柔らかな陽光が差し込み秋葉を温めていた。

側にあの人はいない。何か用事があるとかで、遅れてやってくるのだそうだ。

用事とは何だろうか。一緒に遊べない事は些か残念ではある。

しかし、その文句を言える相手がそもそも側にいないのだ。ならば待つしかないだろう。

今、この場には秋葉と少し離れた場所にいる子供らしくない。秋葉が二人と共に遊ぶには、二人は活発に過ぎる。気を使ってくれるのは分かるが、もう少し調子を落として欲しいと思う。ただ、それが叶えられる事は暫く無いだろうが。

そう思っていると、草を踏みしめる足音が近づいてきた。

「秋葉っ」

そして。

その声音に笑みを浮かべ、今しがた出来上がった円環を片手に顔を上げてみれば。

「え？」

あの人の後ろに、七夜朔はいた。

その人は、あの人に手を握られながら連れられてやってきたのだ。

人形みたいな子供だったと秋葉は思った。

子供という感覚ではあまりに掴めない、茫洋が姿を成したような子供だった。どこか擦り切れたような藍色の着流しと、どうやら左腕がないらしくいやにアンバランスな見た目だった。更にビスケドールのような蒼い瞳には感情も宿っていない事が、それを増長させていて、一瞬秋葉は人形か幽霊を連れてきたのだと思った。

引っ込み思案な秋葉であるが、それでもこの状況は如何ともしがたく、大きな戸惑いを覚えた。

そこに一陣の風が吹きすさぶ。

秋葉の手に握られた花飾りが、微かに揺れた。

「あ」

七夜朔に秋葉は、何か声をかけようとした。
その姿を見て、秋葉は、何か声をかけようとしたが。

そこで、意識は次第に薄まっっていく。七夜朔の蒼い瞳を覗きながら、秋葉の視界は曇り消えていく。そうして潜り込んでいた夢の蒙昧から、名残に連れられていく。秋葉の意識は夢と現の狭間を泳いで、幼い女の子は少女へと変わっていく。

しかし、何故だろう。

秋葉は七夜朔の姿を、追いつめるように見つめていた。
唇を噛み締めて、ふとすれば、涙さえ零れてしまいそんな表情をしながら。

「」

遠く、どこからか声が聞こえる。

嗚呼、戻らないといけない。

そして、声音に意識を浮上させながら、思うのだ。

自分は、思い出す事も許されないのだと。思い出に浸る事も、行っってはならないのだと。

ただ、それでも秋葉の口元は、溢れる名残にあわせ、その名前を
呟くのだ。

「 さく 」

声音にして聞く七夜朔の名を、秋葉は押しつぶれんばかりの重圧に苦しみながら流していく。涙は流さない。理由も無い涙なのだ。理由なんて、あるわけがないのだ。

だから秋葉は目覚めと共にその面影を記憶の中から追いやる。

二度と、あの時に戻れないと知りながら、名残を惜しむ己を恥じながら。

「 兄さん? 」

秋葉は、目覚めた。

断章 夢現（ゆめうつこ）（後書き）

今回は短めです。六です。

少し本編を離れる形ではありますが、物語に色を添えられたらいいなあという感じでこのお話です。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、送ってきてくれたら嬉しいです。反応がないのは辛いです。心よりお待ちしております。

第十一話 悪い夢（前書き）

西日の翳る刻に白いリボンの少女は部屋を出て行った。

約束です。朔ちゃん、私……待ってる。

淡い笑みと共に、そんな言葉を残して。

第十一話 悪い夢

意識が揺らぐ。意識は途切れる。断絶と再生を繰り返して意識は起動し続ける。

モノクロの砂嵐が過ぎていく。

何かを見ている。何かが見ている。

これはどこに行く。これはどこに向かう。

ここは、どこだ。

人気がない暗がり、足をもがれた蟲のように這いずり体を地面に擦りつけながら引き摺る。倒れ掛かるうとする上半身と止まりかける下半身のズレを無理矢理に動かし続ける。

熱に浮かれる身体の奥と、喪失する末端の冷たさを持て余していた。

喘ぐ様に酸素を暴食し、整えきらぬ呼吸が肺を痛める。しかしその様な事は関係ないと、痛む内臓を慮ることもせず空気を取り込んで吐いていく。息をしなければ、そのまま沈黙してしまふ。肉体も、精神も。

物寂しい乾いた路地。遠くから聞こえる電子音と暗がりには侵食する目障りなネオンの輝き。喧騒は遙か、雑踏が遠く、人目も当たらぬ荒涼の路地をひた歩いている。コンクリートが？き出しにされた壁伝いには誇らしげな無意味が落書きされ、それを馬鹿にすることも不快に思う気力すらなく、ひたすらに歩む。ささくれ立つ内心と

無視できない衰弱が余裕を奪っていた。

ここは、知っている。

茫洋なままに、そう思う。

閑散とした灰色の路地。上を見てみれば、そり立つ壁の隙間から細い夜が見えた。

見たことが、ある。

確かどこかで、確かあそこで。

遠い人の気配。近い退廃の匂い。

ここは、ここは　。

「嗚呼ア　　っ」

っ。

何かを思い出そうとして、内側から迸る声音に意識が弾き飛ばされる。振り絞るような激情の吐息。零れる息が灼熱のようだった。肉体の奥底から燃えさかる己の感情が堪える事もできずに吐き出されていく。咆哮が内側から体を突き抜け、夜を切り裂いた。

その声音を構成するおぞましき狂気と憎しみが、それをより際立たせる。

そこで、視界が停止する。

そのまま立ち返るように、意識は意識を発見した。

意識を覗かれている。

いや、自分が見つつけられたのだ。

自分が自分を発見し、その事実肉体に氷柱を突き刺した戦慄が意識を歪ませた。自己を見る自己とは何だ。それは精神が今此処に二つある事を意味しているのか。

いや、何だその意識とは。

自分は自分だ。自分は自分だと、言い聞かせるまでもない事実が揺らいでいる。

混濁する。混合する。自分が自分であるはずなのに、そこには既に分裂を始めた自己が蠢いている。ぶれる。ぶれる。意識はぶれる。

やがて自分ではない自分が、自分を突き放していく。

精神を押しつづす激情が意識を捉えて崩落し崩壊し倒壊し、回転し転換し輪転し、追放し解放し放蕩し、分解し分裂し分離し、隔離し解離し解散し、拡散し散開し開始をする。

遍く轟く静謐は合切の反抗を認知せず錐揉み　アしながら
天地を断罪し怨嗟と悲嘆の混合を拒絶しアアて停止する悪意と邪気が害悪へと変貌して生贄を欲求　また死と血アア、アを望む獣の群数は　残骸を残さず食い散らかし胃袋のアア、　アアア底に　を隠しこむが空が割れてアアア。アアアアアア響く罅の音を耳にしたとき相貌は崩壊し　の渦へと流動する事も無く　滅して虚数にもなアア、アアアアアアアア　　！らぬ肉片を撒きし死ぬことも許されぬ大罪アアアアアアアア　　アアアアア

「 八 八 八」

呼吸が嫌に荒く、耳障りだった。

実感が何処か浮ついている。皮膚がもう一枚重なっているような、妙な感覚があった。まだ脳が目覚めていないらしい。目蓋を閉じて、呼吸を整える。そうしている内に妙な感覚も忽ち失せていくだろう。

そして、目を開く。

期待した効果は多少得られ、気分も少し落ち着いた。

「……」

改めて、辺りを探ると暗かった。それはそうだ、今は夜なのだ。

首を傾けると窓は閉じられ、塞がれたカーテンには鈍い夜の沈んだ静謐さがあった。明かりも灯っていない室内は窓の向こうにある夜が染み込んでいるように薄暗く、どこか寂しげだった。きっとそれは、夕暮れの起き抜けに秋葉がいたことに起因するだろう。起きた時に誰かが側にいるといたいのとは大違いだった。

眼鏡をかけて、視界を凝らす。

「また、か……」

思い、自嘲するように呟く。

最近、夢見が悪い。眠るたびに、何か見る。どうにも自分は悪夢に好かれている。

二日連続で悪い夢を見るなんて、思ってもいなかった。

そしてそのままにちらりと備え付けられた時計を見やった。時刻は既に頂点を通り過ぎ、新たな一日を志貴は迎えている。

室内は停滞していた。物音せず空気も微動だにしない部屋の中は心臓の鼓動さえ聞こえてきそうな静けさだった。固定する夜の室内にどこか寒気を感じて、水差しに手を伸ばす。容器をそのまま口元へと運び、少しだけぬるい水で咽喉を潤した。

「はあ」

咽喉元を伝う水気を拭いながら、思うのは今しがた見た夢の事。

自分がもう一人いるような感覚が、夢にはあった。そして、確かに昨日見た夢もあんな感じだった気がする。夢なのだから何でもありなのだろうけど、それでも二日連続で見るとはどうにも気持ち悪い。

自分があやふや。自己が蒙昧。自我が曖昧。

決して楽しい夢ではなかった。それだけは言える事だ。ただこの苦しみを何と言えればいいのだろう。拭いがたい嫌悪感、度し難い拒絶感。どれも違う気がする。自分以外の感覚なんて知らないのだから、表する言葉を持ち合わせていない。

自分が自分でない。それだけは何となく理解した。さすが夢だ。何でもありだ。

「あそこは」

今となつては消えかけて、気持ち悪さだけを残す夢を辿る。夢見の残滓を掻き集めて、思考は巡り辿る。

「確か、繁華街の方」

実は、あの場所には覚えがあつた。

薄暗く、乾いた空気が降り注ぎどこからか簡素な騒々しさが耳に伝わってくる。煩雑な光の束と、人の喧騒。ここらかしこであるような場所は繁華街以外には覚えが無い。巷で騒がれる吸血鬼事件に惑わされる事無く賑わいを未だ見せているのは、きつとあそこくらいだろう。眠らない場所とでも言うべき、あそこしか。

だが、それは果たして本当かと詰問を受ければ首を縦に振ることは難しい。何せ夢で垣間見た刹那の意識。正確さなんてまるで無くうる覚えの範囲を抜けない。憶測なんてものではなく、これではただの妄想の類だ。

「でも、だ」

それを放っておくには、この拭い難い感情はあまりに邪魔だった。解消されない不燃物を内側に溜め込んだ歯痒さとも言うべき気持ちの悪さが、夢を夢のまままで終わらせない何かを訴えてくる。

それに、眠くない。

一日中眠っていた影響か、睡魔はその気配を遠ざけて、気だるい意識の覚醒を促していた。目蓋は重くは無く、目が冴えている。このまま眠ってしまうには眠気が足りない。ただ自分の場合だとあっけなく眠ってしまえそうだが、眠る気にもあまりなれない。まどろ

む事も、この調子ならばはくは無いだろう。

悪夢を解決する。眠気を誘うために夜の散歩。夜風に当たりたい。一日動いていないから、運動不足の解消。

理由を拵えようと思えば幾らでも見つかる。

馬鹿らしい。

今自分が何をしようとしているのか、志貴は己を笑った。己の馬鹿さ加減を思い知った。

でも、それでも志貴は。

「あれは……」

あれは、夢なのだろうか。

何とも馬鹿らしい事ではあるが、志貴は夢を疑り始めている。

いや、疑っているとは少し違うのかもしれない。己が見た夢を疑うなんてそもそもありえない。見たものは認識を経て己の真実となるのだ。例えばそれが錯覚や幻であろうとも、それを見たという事実には変わらない。

暇つぶしか、あるいは予感。

普通の己なら一蹴する行為である。だが、今の志貴はあまりに余裕が無かった。悪夢がもたらす影響は微かなストレスを本人に残す。それはやがて消える事も無く、忘れたままに沈んでいき、埋火のように燻りを始める。

だからだろう。

二日続きに見た夢に志貴は確かな変化を自覚も無く溜め込んでいた。その溜め込まれた変化は質量を持つて重さを生む。安眠の妨げや快適な目覚めを損なわれて、志貴の判断は自身でも分からぬほどの差異を生み出して。

内側の奥深くで、見えない虚ろの重心が傾いた。

「ま、何もないだろうけど」

自分でもよく分からぬ意志で志貴は苦笑をしながら手繰り寄せられるように外出の準備を始めた。

部屋を出ていく。

家の中は湿っているように沈んだ雰囲気が漂っていた。

夜が訪れ、どれ程の時間が過ぎても人は外にいるものである。街に無人の時などあるはずもない。人気は少なくなるものだが、それでも人が全く存在しない事などありはしない。

それでも夜になるほど騒がしくなる場所はあるものだった。

人の雑踏。派手な服装をした若い男女。忙しげに歩む中年の男性集団。酒気を帯びて高揚したサラリーマンや若者の甲高い笑い声。時には怒鳴り声が木霊して、そのまま人の喧騒へと飲まれていく。ぶつかりあって喧嘩にもならず、酩酊にかまけて莫迦騒ぎをする人々。流石に人は多いとは言いがたいが、辺りはネオンの輝きに満た

され、繁華街は独特の熱気を含んでいた。

未だ入り口の辺りでしかないと言つのに、どこか違う世界に入り込んだような感覚がある。夜から隔絶された明るさを放つこの場所は、絶海に浮かぶ孤島のようにですらある。それを飲み込んで、志貴は息をひとつ吐いて足を踏み出す。

しばらく人ごみを避けて歩いていくと、何人かの人間がすれ違いざまに志貴を見やった。こんな時間に未成年がいることが珍しい事もあるだろう。だが、それ以上に。

「この服だしなあ」

苦笑を浮かべて己の服装を鑑みる。

濃紺に頑丈そうな材質。学校指定の制服姿である。

「そりゃ目立つか」

ただ外出をするためなのだから服装には拘る必要もなかった。そんな訳でそこらにあつた制服を手っ取り早く着たのである。今思えば安易にも程がある格好であつた。

十二時を過ぎて深夜。制服姿の未成年が歩くには受け付けない時刻である。更に場所が場所だつた。事が事なら非行少年に見えなくも無く、視線を集めていた。じろじろとした視線が志貴に突き刺さる事も致し方が無い事ではあつた。

あまりに目立ちすぎれば通報も免れない。

考えが足りずにこうなつたのだから、どうにか避けたい。気持ち足早に、こそこそと端を歩いていった。

実は、自分がどこに向かうのか志貴は考えていない。目的地は明快でなく、ただ漠然と繁華街へと赴いたのであり、本人としても理由が見当たらない。悪夢を見て、その場所に覚えがあっただけの事。衝動的な行動の結果志貴はここにおいて、今人々とすれ違っている。

それは、何かに手繰り寄せられるような感覚だった。

志貴は目的地もなく歩いていっていると言うのに、どこかへと辿りつこうとしている。

そのどこかとは、きつとあの場所、なのだろうか。見覚えの無い路地裏。不思議な確信が、根拠も無き確定が身体を動かしていた。

始まりは悪夢だった。

では、終わりは一体何なのだ。

端の道なりが一瞬途切れ、曲がり角。

明かりが直接照らされない、細い路地がその先には伸びていた。

そこは路地裏の入り口。明暗の境界線。

「

何気なく踏み出そうとして、躊躇う。

何かがある。

予感。あるいは悪寒。この路地裏は何か嫌な気配を放っている。

視線の先には薄暗い路地の乾いた風が吹いて前髪を揺らす。その先は見えない。灰色と黒色の中間にある路地の色彩が不安を駆り立てる。明かりらしきものは点々と見えるが、その深遠までは覗けない。

暗がりの向こうは、この繁華街とも違う霧困気であった。
だからだろう。夢の事もあり、足が踏み出せない。
いざその時になって、志貴はありもしないものに怖気を抱いた。

「どっしりよっ……やめようかな」

思わず、口ずさむ。

そつだ。夢なんだから何だというのだろう。

莫迦らしい。夢は夢でしかない。現実にはそんなものもなく、ただの空虚が広がっているのみだろう。悪夢を見たから、家を出た。

あまりに莫迦らしい。自分が悪夢を見たからって、何も変わらない。
い。

夜は過ぎて当たり前のように朝が来て、いつものように太陽は昇る。自分ひとりに起こった事に何を必死になっているのだろう。ならば、このまま帰ってもいいのではないか。

己を正当化させる言い訳を拵えて、足はそのまま前へと進もうとしない。異世界から更に違う場所へと赴くため、志貴には勇気が足らず不安ばかりが増していく。

「考えなし、うん。確かに考えが足りなかったな、俺は」

そつだ。ならば、帰ろう。

滲む仄暗き霧困気が漂う路地裏から、あの遠野の家へと。

そしてそのまま部屋に入り込んで、朝を迎えればいい。今となれば眠れるだろう。無理矢理にでも眠ってしまえばいい。自分は約束を守らなければならないのだ。

弓塚さんとの、約束を。

虚ろが震える。自らを律しようとする虚ろを感じる。それを無視して、自分は家へと。

だが。

「おっと、すまねえ坊主」

どん、と背中に衝撃があった。

思わず前のめりになって、足は倒れまいとたたらを踏む。ぐらつく体を押さえ込んで顔を振り向かせれば、顔を赤らませた中年の男性が酒臭い息を吐きながら通り過ぎていった。どうやら千鳥足にぶつかってきたらしい。思わぬ出来事に啞然としながら、気付く。

自分は今、どこにいる。

「……あ」

ぶつかった拍子に、身体は前へと否応無く進んでいった。明るい場所から、僅かに暗い路地裏へと。境界線を、踏み越えていた。

一步。たったそれだけなのに、まるで違う場所に入り込んだ。どこか背中にある繁華街の明かりが頼りない。冷たい暗さが勝ってい

る。そんな場所に、入り込んだ。

もう、視界は暗かった。

目の前には不気味が続いていて、後方の明かりでは太刀打ちできない得体の知れなさが広がっていく。延々と薄暗さは伸びて、先は見えない。

帰ろうと思う。帰ろうと、思う。

こんな場所に長居は無用だ。早く踵を返し、あの光へと帰らなくてはならない。戻らなくてはならない。でなければ。

このまま、戻れないような気がする。

何かに囚われるような、何かに飲み込まれるような気がする。

不安が己を駆り立てんとする。身体は怯えていた。

でも、その心はどうだろう。

今自分はここにいて、ここから帰ることは何故か出来ないような気がした。この場所に入り込んだならば帰ってはいけないような、この先に進まなければならないような気がする。引き込まれるような、無言の圧力が内側から脳を揺らす。帰るな、帰るなと強迫概念ではない、衝動が虚ろから発せられる。気持ち遣る瀬無い。でも胸の奥の虚ろは最早無視できない。

生唾を飲み込んで、己を奮わす。自然と拳を握りしめた。掌は汗をかいていた。

「 行こう、か」

諳んじるような声音で呟かれた言葉は自分が思う以上に頼りなく、あまりに無力だった。

恐る恐るという具合に、足は進む。背中 of 明るさは遠ざかり、静まる物音に足音まで聞こえて来る。乾いた風が繁華街の喧騒をどこかへ吹き飛ばしていく。埃っぽい臭いが肺を侵してきた。

路地裏はざらついていた。

細い通りに反り立つ両の建造物の表面は妙な圧迫感を放ち、空を狭めている。明かりもあまり届かない路地では足元が覚束ないで、空を見上げれば細い夜が見えた。星が頼りなく光っている。人の姿は見えない。それこそ無人のよう、生物らしき気配は時折見える虫か鼠ぐらいで、人間はいない。

似ている。

あの夢の場所に。

拒絶に呻く。

信じたくて、信じたくない。

あれは夢だろう。あれは、夢だろ？

言い聞かせる。事実は事実だ。ならば夢は夢でしかない。夢は現実にはありえない。ならば夢は事実ではない。事実は事実以外にありえない。

最早自分でも良く分からない思考が頭の中を錯綜する。
視界の端を鼠が走っていく。路地には紙くずが散らばり、いかにも不衛生だ。

どくん、と心臓が高鳴り始める。

何か、良くない予感が喚起の警鐘をあげている。
転がっていた缶を踏み潰して、なおも足は誘われるように進んでいく。

「は は は は」

呼吸が荒い。

意識しなくては呼吸を止めてしまいそうな、圧迫感。
自らの進む道なりに、一体何があるのだろう。

「は は は は」

全身に寒気があつた。身体の芯まで寒い。
寒気が恐れか身体が震える。
どくん、どくん、どくん、どくん。
脈打つ鼓動が耳障りだ。

「は は は は」

過剰な色合いを見せる壁の落書き。
それは、先ほど見たような、無意味な意思表示であつた。
どくん、どくん、どくん、どくん。

気付けば、臭いが変わっている。

「

あ
」

そこは、広い袋小路であった。

少し開けた天上から濃い夜の空が見える。周囲を反り立つ建築物によって覆われた行き止まり。広さは四方十メートル無い。志貴が辿った道があるのみで、これ以上先には行けない。行き詰まって、どこにも辿りつけない。つまりここが終着点。終焉。

「う、あ

」

荒れた息が苦しく呻る。

灰色の路地に、それはあった。

人が、女性が倒れている。

影が差し込んでその全容は確認できない。年齢も、服装も、相貌も視認できない。それが女性だと分かったのは、その髪が長いという特徴から判断したに過ぎない。

倒れている。人が倒れている。路地の中央に、倒れ伏している。何故だと疑問に思う前に、その事実が現出している。

夢は、夢だ。

事実は、事実だ。

ならば、今自分は何を見ている。

目を反らすな。眼を背けるな。目蓋を閉じるな。

目の前には、否定もすることが出来ない事実のみが横たわり、それは決して動くこと無く停止していた。逃げる事は許されない。逃れるならばそうしたいが、もう志貴は辿りついてしまった。この終焉へと。もう、どこにも行けない。

「
」

その人は、あの夢に垣間見えた姿と、良く似ていた。消え去ろうとする意識の果てに見えた後姿と一致した姿だった。

呆然と、志貴は立ち竦んでいた。

この事実。この覆す事のできない真実に志貴の肉体と意識は煩雑なものとなっていた。

遠くから、繁華街の喧騒が聞こえる。それはまるで別の世界から聞こえる物音だった。

何故なら向こうは境界の向こう。一步踏み出した先の果てにある別次元。

この場所は、もう終わっている。

否定できない。否定できない。

偶然にしては出来すぎている現状構成。

似ている、なんてものではない。夢は夢なのだ、割り切る事は既に不可能だ。

「ああ、いや、今は……」

呆然とろたえるままに、駆け足で路面へ倒れ伏す人影へと向かう。
何を自分はしていた。倒れている人がいるのに、それを放っておくなんて。

「大丈夫ですか！俺の声が聞こえますか！！」

耳元で語りかけても反応はない。呼吸は聞こえない。意識がないという事なのかどうか、判断はつかない。自分は何をすべきなのか。助けを呼ぶべきか、救助をこのまま行すべきか。でも助けを呼ぶにはこの場所は遠く、電話は持っていない。助けを呼んでいるうちに手遅れになるのは不味い。ならば、無作法な手当てでも行ったほうがまだマシだろう。

そう思い、闇に見えない顔を、覗く。

「？」

一瞬、それが何なのか把握できなかつた。

目蓋は裂かれたように見開かれ、頬は引き攣り、口元が大きく開いてそこから舌が硬く垂れ下がっている。寄った皺までも固まって、それは停止しているよう。

それは恐怖の表情だった。

恐怖に固まった、死相であつた。

死相、死相、死相。

青白い肌。生気のない瞳。潤いの無い口元。
臭いがする。人間以外の臭気。血の臭い。腐敗の臭い。
死体の、臭い。

それらが合わさり合う事無く、個々として分離しながら臭いを放
っている。

これは、これは。

「ああ、ああああ……」

全身が心臓になったかのように脈打っている。でも体は熱くなく、
凍えるほどに震えていた。路面が突如として消滅して、足元から落
ちてしまいうような感覚。崩れ落ちて、そのまま倒れてしまいうそう。

だって、だって。

「死んで」

拒絶を含んだ声音は、そこで止まった。

それ以上は言うてはいけない。これ以上言葉を紡げば、きっと何
かが終わる。崩壊する。だから自分は黙って、黙って。

「なんだ、先客かア？」

背筋をなぞる、嘎れた金属音。

金属を擦り合わせた軋み音。

不快な音に鳥肌が毛羽立つのが服越しにもわかった。甲高く嘎れ
たそれが生物の発した声と呼ぶにはあまりに人工物めいていて、柔

らかな肉体を突き刺す悪意の声だった。

体を突き動かす本能のままに慌てて振り返る。

「あ、ああああ」

はためく藍の色合いは夜に紛れることなく、その片方のみの腕に握られた鞘には数枚の札が貼られ、数珠まで巻かれている。そして、長すぎる黒髪の間から、虚空を思わす蒼の瞳が見えた。見えてしまった。その絶対零度を、その無機質な感情を思わす蒼色を。まるで人形のような瞳を。

いつの間に、その男は当然の如くにそこにいた。風を巻き起こすことなく、物音を発する事も無く、存在を感じさせることも無く。

闇夜に映す影のように、あるいは茫洋たる霊のように。

藍の殺人鬼が、夢の中で志貴を殺した男が、再びその姿を現出させた。

「」

そして。

むくり、と。

志貴の後方で、影が揺らめいた。

「え？」

藍色と対峙している故に、志貴は反応が遅れてしまった。始めに出会った衝撃、そして夢にさえ現われて志貴を苦しめた原因は他な

らぬ藍色にこそあった。だからこそ、志貴は突然現出した藍色に竦みながらも、その意識は否応無く目前の存在へと向けられた。

故に、それに対応する事が出来なかった。

体ごと藍色に向けていた志貴の腰に、何かがぶつかってきた。

咄嗟の事に志貴は反応できず、そのまま無様に転がった。

「あ、え？」

衝撃にもたつき、何かと無理矢理に体を捻らせれば。

「あ」

目の前に、死体がいた。

死体が、志貴に覆いかぶさり、その口元から真っ赤な唾液を垂らして、生気のない濁りきった瞳に志貴が映っている。

腰元にぶつかってきたのは、志貴が死んでいると理解した女性であつた。

死体は動かない。

それは、外的な力が加わらなければ覆される事のない事実である。何故なら死体には意志がないから。意志のない身体は活動を止めて動くことは二度とない。再び動く事など、ありえない。ありえないのだ。

では、目前の死体は実は死んでいなかった？
でも、眼前の人体は全く生きていないのだ。

表情は見えない。あまりに虚ろな顔つき。生気を感じられないそれが動く事は、明らかにおかしい。

『ほう、知らんが偶々紛れ込んだだけかア？』

必死に逃れようとしながらも、そのあまりに特徴的な金属音は志貴の耳に入り込んでくる。どうにか両手で迫る顔を抑えつけ、視線を瞬間と逸らし男を見やる。男は微動だにせずそこにいて、志貴の事もその視界に入っているはずなのに、まるで見ていない。

「お、おい、アンタ！頼む……！助けてくれっ」

言葉を紡ぐ前に、それは遮るような声音を發した。

『まあいいさ。俺達には関係ねえが、無能が脳を凝らして嵌めやがったなア、ヒヒヒ』

狭く閉じ込められた空間に、邪な笑い声が反響する。空気を錆びつかせて、生者を侵す悪意の声だった。

しかし、志貴には看過できない言葉があった。

関係ない。関係ない。

関係ない。関係ない。

自分は関係ないのだと、金属は言った。

それは、つまり。

「なんでだよ……、なんでだよ……！」

志貴は、助けてもらえない。

直ぐ側に襲われている人間が、助けを求めていると言うのに助けないと金属は告げた。男は無表情に志貴を映し出し、決してその姿を見てはいない。

『オイ、お出迎えだ』

響く金属音に何処か罅を入られた志貴は必死ながらも、それを視界の端に捉えた。

迫る死体の向こう、天上に開かれた夜空が見える。夜の黒色に歪な形をした月があり、その光に照らされて、それは見えた。

暗い夜の空を囲い反り立つ建造物の上に人がいた。ゆらゆらと体を不安定に揺らしながら、その姿は月光に照らされながらも、顔までははっきりとは見えない。でも、それが異常だと分かる。

「　　なんだよ、あれ」

屋上に佇む人影、数十人は下らない。服装までははっきりと見えないが、ただそれだけでもその集団が尋常の集まりでは無い事が知れる。ただの集団であると言うのに、それが放つ気配は最早人が発せられるものを越えている。

それはまるで幾程も餓えた野犬のような、茫洋と飢餓感に侵された獣の群であった。

『いくぞ、朔。いつもの様に』

どこか笑うような声音と共に、その男は志貴の側から掻き消えていく。志貴が制止する間もなく、その姿は見えなくなった。あまりに不可解な現象であった。直ぐ側にいたのに、それはまるで始めからいなかったかのように消えてしまふ。影も残さず、音も消して。

しかし、そこで志貴は自然と一人にならざるを得ない。

そう、一人だ。目前にいるモノは、もう人としてカウント出来ない。

「……………」

目の前に迫る存在は、志貴の腕だけでは抑え切る事も出来ない。では、何をすべきか。

ナニヲスルベキダ。

助けは、呼べない。助けは、来ない。

誰かがいても、きつと意味は無い。誰も志貴を助けてはくれない。がちがち、と奥歯が噛み合う。食い縛って、力を込めていく。

アア、ソウダ。

何に期待しても無駄だ。今この時志貴はただの一人で、自分以外に頼れるものはいなくて、護ってくれる人も、もういない。なら、どうする。

、ヤルベキコトハ、ワカッテイルダロウ。

ああ、分かってる。

ナラ、ドウスルベキカシツテルカ。

ああ、知っている。

ちようどよく、得物もある。

それは仕舞ったままで、既にそこにあることも今の今まで忘れ去られていた。始めから、これがあることを志貴は意識していない。でも、左腕が死体を抑えつけたまま、その右手はするりと導かれる。

硬い、感触。

嗚呼、安心する。

この感触が、何とも心地よい。

片腕では抑え切れず押し迫る顔面に、眼鏡がずれる。
そうして広がるは、今にも崩れそうな亀裂の世界

。

一閃。

第十一話 悪い夢（後書き）

お久しぶりで御座います。六です。

更新が遅れた事、真に申し訳ありません。

ここ最近多忙につき執筆する気力もなく、ようやくと区切りがついてパソコンに触れば調子が悪く、またどうやら風邪をひきはじめてしまったようで、良くないことが重なってきています。年初めにお祓いはしたんだけどなあ。

調子の悪いパソコンと調子の悪い頭で打ち込んでいますので、文脈等におかしな部分があるかと思えます。加筆修正を後にするつもりです。ただ一つの区切りとして今回の更新をしました。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、送ってきてくれたら嬉しいです。またおかしな部分を発見しましたらお伝えください。

とりあえず、今は寝ます。六でした。

次回、多分戦闘に入ります。

第十二話 悪い夢（前書き）

ずるり、と。

形容すべきは、そんな間抜けな音。

それが人間の首を落とした音だというのは、あまりに滑稽であった。

第十二話 悪い夢

「え」

右手に握られた鉄の棒、そこから飛び出す刃の無慈悲な煌きは夜の闇に於いても瞬いて、迫る女の首を凧いだ。

「あ、あ？」

いや、それは凧いだというよりも、なぞつたと呼ぶに相応しい軌跡であった。

志貴が振り切った刃は首の筋を突き刺すでも無く、切り裂くでも無い。そのままの勢いで首を通った。その皮膚を、筋を、筋を、骨を通過したのである。支えを失った首は苦痛に歪む事も無く、全く不変の表情でずれて落ちるが、反しに払われた腕の一振りに跳ね飛ばされて、壁に中身をぶちまかれていた。頭部を失い、崩れ落ちる身体。それすらも何時の間にかに潜り込んだ両足が突き飛ばし、身体は路面へ投げ出され、止まった。

今、己は何をした。

右手に納められた鉄の感触。それが夜を舐めるように振り切られていた。

だが、理解が追いついていない。その瞬間を志貴は捕らえることが出来なかつたのである。あの刹那に志貴の意識は数瞬飛んで、気付けば女の首を断っていた。あまつさえ、反しの一撃を放ち、その頭部を壁の彩りと化したのだ。

ずれた眼鏡を慌てて戻す。度数も入っていない眼鏡であるが、これが正常の位置にいなければ、志貴は安心が出来ない。だが、荒れ狂う胸の鼓動に全身が震えて指先が落ち着かない。眼鏡を抑えようとして、掌は痙攣のように震えて仕方が無かった。

その指先には女の首を落とした感触が確かに残っていた。人体を斬ったとは思えぬ柔らかな感触。それが更なる戸惑いを覚えさせえる。

己の行動が把握できない。己の動きに理解が追いつかない。

しかし、その震えも戸惑いも志貴は何から生まれた結果かは志貴は考えてもいなかった。

それが生まれて始めて人体を解体したことによる、興奮である事を。

精神ではなく肉体が。心ではなく魂が。

その結果に歓喜し、武者震いを起こしているのであった。

そんな感慨を志貴は知らず、ただ呆けるばかり。

しかし。そんな志貴を嘲うように、その上空を影が過ぎる。四方を囲われた狭き空である。天上には雲がちらほら。その隙間には歪な月が吊るされて、繁華街であるのに繁華街ではない境界に位置するこの場所では、歪んだ月こそ唯一の光源。

月明かりに照らされて、亡霊が空を舞う。

夜に群がる獣の数二十以上。正確には二十四の蠢く死体。

世の理から逸脱し、死してなお、朽ちてなお活動を果たす畜生の狗共である。彼らに理性はない。何故なら思考する脳が死滅しているのだ。故に死体を動かすのは死してなお絶滅する事のない本能であった。

本能はそれぞれに告げる。

喰らえ。喰らえと。

天上を囲う建築物、四方を巡る屋上に佇む死者は茫洋なままに、しかし迫る餌をねめつけている。

今まさに、反り立つ壁を地面の如くに駆け上がるという莫迦げた芸当をいとも容易く行う怪物を喰らい尽くせと、本能が叫び、頭脳に命が下る。

死んでいるのだから頭脳は機能を十全に果たしてはいない。脳細胞は既に死滅しているのである。思考を働かす術はない。それでもどこからか下ってくる命を、それが明確な言葉ではない苛烈な感情であつても本能が順応しているのは、その命が彼らよりも上位に座する親から伝えられている事を彼らが知っていたからだつた。

理性ではなく、本能で理解している。ソレこそ自分達の上位者であるという事を。

故に彼らは迫る餌を誘き寄せた。

人外が発する澱みとも呼ぶべき死臭は、この行き止まりにはよく溜まる。匂いたつ臭気は風に漂い、やがて狩人を誘う。匂いに敏感な狩人であるならば、それは極上の撒き餌だ。

思考も計算もすることが叶わぬ彼らが策を弄し、狩りを行う。それは寧ろ獣同然である死者達だからこそ行える集団行動。生存の術であった。

だが、彼らは何も理解していない。迫る存在がどのような存在であるのかをまるで理解していない。ソレを捕食対象として認識しながら、稚拙な対策を行いはしたが、それでも狩人たる由縁を一厘とも理解していなかった。

ただ彼らは己の欲求を満たすために行動を果たすのだ。

『来るぞ』

死者は躊躇いも無く足を踏み出す。無論、そこに地面はない。地面は遥か真下にあり、それゆえ死者達は自由落下を始め、狩人へと向かっていく。正確には把握できぬ疾さで遡る藍色に衝突していつと、その数四つの死者が墜落していった。

恐怖は無い。地面へと激突し肉が潰れる事など、考慮する脳は死んでいる。

死者達は腐臭を撒き散らし、涎さえも口内から吐き出して朔へと群がり。

真上から襲い掛かる藍色の暴力に、その首と中身を空に零して墮落した。

その軌道を理解できるものは、いない。

遡る藍色が姿を暗まして、上空からの急降下を仕掛けたのである。

落ちるだけの死者は藍色の存在に気付く事も叶わず、四つの死者は十七の欠片と成り果て地面へと零れていった。

いきなり現われ直ぐ消える。それは亡霊の所業である。理から外れた亡霊の業をどう理解できようか。

しかし、それを見たものは、確かにいた。

「な……………」

なんだ、今のは。

ただ、下にいた朔が上へと乱反射の如き軌跡を見せて出現し、真下で落ちていく死者たちへ襲撃を仕掛けたのである。どういう理屈で行われている所業であるのかを理解できはしない。ただ、それを証明するような音を、志貴は聞き逃さなかった。硬いものが破碎する音を。

岩石に亀裂を走らせるような、例えばつるはしの一振りに似た音を。

灰が舞い散り、粒子となって地面へと降り注ぐ。

見やれば、無残を形成した残骸が灰へと変貌していく。いずれそれも風と飛ばされ消えていくような、まるで埃のような軽さで消えていく。

はたと、その光景に急いで首を捻れば、今しがた己が殺した死体が、壁にぶちまけられた血痕さえも灰と化し、消えていた。

「……………」

それは、何に息を呑んだのか。自らが理解できぬ所業に出くわしたが故か、それとも理解できぬ所業を果たした者への驚愕か。状況に追いつく事が出来ず、志責は声を忘れた。ただ漠然とだが、それを人間業と見る事は最早不可能であった。獣の動きではない。それは寧ろもっと、それ以上の何かであった。

だが、そのように矮小な存在を置き去りにして、屠殺は加速していく。

『そら、どうする化け物共。無様に中身を撒き散らせて滅んじまうぞオ?』

四方を壁に囲われた空間に金属の嘲る声が反響する。だが、その言葉を聞いても人型の獣は退く気配を見せず、間欠泉の如くに突き上げる藍色の勢いを迎え撃つために姿勢を低く。飛び上がろうと迫る風の呻る音が、近づくその到来を告げる。

ぎゃりりっ、と何かを強く噛む音。

それは、藍色の足、鞘を握る音であった。

通常、日本刀を抜刀するには捻る動作が必要とされる。柄を握る腕と共に鞘を抑える腕が無ければならない。片腕の剣士は鞘を腰元に巻いた帯などで固定させる事により抜刀を可能とするが、それは高度な戦闘時において通用するかと言えば答えは否である。出会い頭の超高速戦で瞬時の判断と俊敏さが求められる最中、隻腕の剣士が固定化された鞘から刀を抜くには些かの不安が生じる。それは鞘を抑える腕が失われているから故の弊害であった。

鞘から刀を抜く手筈は確かに出来る。だが、刀から鞘を抜く行為が出来ないのである。

違いは微々たる物、ではない。これは殺し合いに於いては致命的な欠陥であった。瞬時の抜刀が身を救う事は多々とある。それが辻斬りとなればなおさらに。

だが、藍色はそれを超える。

屋上までの距離を踏破し、そして一足。突っ張る壁の隆起に爪先をかけ、跳躍する。

宙に、藍が姿を曝け出した。

捻りこんだ下半身。

右腕に対し、左足。

足の指が、鞘を挟んで握る。手には指が五つ。足の指もまた五つ。構造も役割も違えども、それだけは変わらない。

ならば、足が物を握れぬ道理無し。

驚異的な足の握力は鞘を抑える役目を果たし、握りしめられた指は刀から鞘を抜く行為を完了し。

鞘走りに、闇が火花を散らす。

『塵殺の時間だ塵芥。奈落へ鷲地に撃墜しろ』

耳障りな哄笑に抜刀された刀身は腐った闇を噴出させて、夜の黒色を更に濃く、月明かりを遮らんと燻りたつて藍色へと羽衣の如くに纏わりつく。現出された刃は刀とは呼べぬほどに刃毀れしており、何とも無残な姿である。切れ味すらも失っているような朽ち果てた

刀身である。その刀身から闇は溢れかえり、藍色を飲み込んでいく。

そして、闇を纏う歪な刃は下を覗く一体の獣の頭部を情け容赦なく叩き割り、その姿を獣たちの目前に晒しだす。それは闇を纏う幽玄の亡霊。この世とは思えぬ儚さをその身に湛える藍の霊。長身瘦躯、歪な姿の藍色に、脳漿を零して倒れ伏す一体へ残り二十以下となった獣は見向きもせず、空を掻き切る闇と化した藍に踊りかかった。

死体は歓喜していた。遂に現われた餌の登場。屋上を支配する彼らにとつてその場に現われた藍色は極上の匂いを振り撒く餌である。匂いは咽喉を刺激し、空腹を訴える。四方を囲う獣は宙すら飛んで、藍色の姿へと殺到した。

右手に握る刀を藍色は構えない。迫る死肉に迎撃の構えを見せるでもない。刀は垂れ下がり、佇む姿を不安定に揺れている。自然体というよりも、それは死者を脅威とも見ていない証左。何故なら藍の筋肉に一切の硬さは無く、ただ揺れて、ゆらゆらと揺れている。

空気を突破した事に髪は流れ視界は良好。藍色の視界には薄気味悪い靄。黒髪に隠されていた蒼の瞳はただ無情に靄を映す。それを刀身の闇が遮蔽して、やがて靄は藍色の周囲を回っていくが、その靄を掻い潜らんと藍色が動けばその姿は宙ではなく、屋上獣の背後へと出現していた。

突如消えた藍色の姿を探そうと振り向いても時既に遅く、その獣は口内から刀身が突き出された。粘る血を刀身に濡らして、後頭部から刺さる刀身。その血を鋼は飲み込んで、真下に振り下ろせば人体は忽ち左右に泣き別れた。

『嗚呼、相も変わらず舌に悪いものだナア。腐肉は不味くて仕方ない』

不快な声は侮蔑の如く夜に軋む。

そこで最早藍色は遂に屋上へと辿りつき、獣は喜び勇んで飛び掛る。統制も儘ならぬ、単純明快な突撃に血花が散り、阿鼻の悲鳴が劈く。一足に駆けつけた獣は勢いのままに藍色へと襲い掛かり。

一閃煌く闇の妖光に、死者は袈裟に両断された。

面妖な事に刃毀れし、切れ味など殆ど残されていないような見た目である刀身が、決して柔らかくない人の肉を開いたのである。技量もあるだろう。達人は鈍器であろうとも切れ味を生み出す理術を会得しているものだ。だが、これはあまりに切れ味が良過ぎる。

ならば、他の要因がある事は不可思議ではない。

気付けば鞘は藍の齒に啞えられ、足は自由。ならば翔ける事に支障はない。目では視認できぬ急加速と急停止。言葉にすればそれだけの事が瞬く間に繰り広げられていくのである。事実藍色の姿は最早誰にも捉えることが出来ない。

生物の移動には予測が伴われる。相手の動作を見て、次にどのような結果となるか脳は無意識に思考し、視線を合わせている。それ故にフェイントとはかくも有効であり、それは殺し合いでは特に重宝される技術である。

だが、藍色が見せる動きは、そのようなモノですらない。

消失。出現。

多を相手に立ち回るのではない。現われ消える。残像を置き去りに出現し、時には刃を、時には三つの手足を、更には噛まれた鞘すらも振るい、藍色は一匹ずつに獣を排していく。

右手に納められた柄は殊更に握り締められ、迫る一体へと叩き込む。疾い。糸の如き太刀筋は死者の体を透き通り、無残な残骸を積み重ねた。

首を落とし、頭部を零して左右に裂き、上下に分けて中身を晒す。迫る死体を一遍にはない。迫る死者の背後から、上空から、真下から襲撃を仕掛けて一匹へ。

その繰り返しを行えば、死体は忽ち灰へと帰り、気付けばその数残り僅か。

「……………っ！」

真実獣の如き憤怒の叫びが夜に轟く。

彼らは群である。本能の群である。身に巣くう飢餓感に頭を垂れた獣である。

そんな獣が儘ならぬ状況に歯噛みし、己が空腹を満たす事が出来ぬ事は、何よりも苦痛な事であった。何故だ何故だとは、思う脳も壊死しているが、しかしこの理不尽を許容する事は有り得ぬ事。

ならば、その口元から吠え立てる鳴き声が、ただの怒号であるはずはない。

それは獣の会話である。獣同士が目的を達するために、己の腹を

満たすために言葉にもならぬ共通言語を用いて狩猟を果たそうと本能に蠢いたのであった。

『ほう？畜生共が、無能な事を』

統制もとられていなかった動きが変化を見せる。

一方的に襲い掛かり呼吸も合わせぬ獣の動きが一変し、ひとつの屋上へと密集する。ここに来て始めて見せる群としての動きである。徒に襲い掛かるのではなく、より効率的に餌を貪るため獣の本能は咆哮の遣り取りを促した。

獣の数、残り八つ。二十四いた死者は気付けば十を下回り、襲撃を受けた者は今となっては塵も残さず風に消えた。

許せぬ。許せぬ !

死者たちは血生臭い憤怒に体を振らせた。塵と化した死者たちへの仲間意識から、ではない。そのような、まるで人間のような感情は既に持ち合わせていない。彼らは最早死体である。ならば彼らが憤るのは真実餓えであった。

死者は目的意識の塊である。己の欲を、下る命を果たす為だけの存在である。

しかし餓えを満たせず、命も果たせぬこの状況。ただの餌如きが抵抗し、あまつさえ彼らの数を減らしているのである。

獣は憤り、本能を巡らし怒りに従事する。狡猾に、周到に。それゆえの密集。

人外の速さで駆けながら、彼らは一つに密集していく。藍色の各個撃破を受けて導いた彼らの答えである。攻めにして、守りの陣形

とも言つべきか。密集とはそれだけで厄介である。個々が集つとはつまり、その分の質量を一つの意志として固め厚みを持たせることである。質量が増す事はそれだけで硬さと重さを生み出す事に他ならない。発生された重量によって対象を轢殺し、蹂躪するのである。

故にそれは最良の陣形であつた。一概に最高とは言えぬが、しかし各個撃破を受ける今ならば悪くは無い。個々に襲われる現状、知能も働かぬ死者としては最上の選択である。群の利が図らずも機能し、どこから現われるかも知れぬ藍色に対応せしめんと、飢餓と憤怒に色めきたつた。

だが、目視も出来ぬ餌に集まる死者の群。

それは、狼に怯える憐れな子羊のような有様であつた。許しを乞ふことも叶わず、ただ吠え立てることしか出来ぬ羊の群は、無情の狩人に食い殺される運命にある。

一群集まり夜に鳴けば、闇より出でし亡霊の、虚ろな所業に声も消え、月も背いて目を閉ざす。あたかもこの世は諸行無常、腹も空かぬ狼は、戯れ遊んで羊を殺す。

夜に吊るされた歪な月が、流れる雲にその姿を隠す。

風が、群の隙間を通り抜けた。

『莫迦め。莫迦は莫迦らしく無様に滅べ』

その声音は、群の中から聞こえた。

空から舞い降りるかのように亡霊は姿を現し、勇む死者の中へと潜り込んでいた。

それに気付いた時既に遅く。

音は消えて、闇だけが残される。

『ひひ、これにて終局だ死人(Dead Man)』

虐殺が、始まった。

茫、と。

見入っていた。

天上で巻き起こされた悲劇の限り。化け物たちが化け物に蹂躪される、その滑稽たる一部始終を志貴は魅入っていた。

何か、記憶にも無い映像が被り幻視する。

赤黒き沼に浮かぶ、幾つもの欠片と。

何か、何か、何かを志貴は見ていた。

眼鏡ごしに映る光景は殺陣の如き立ち回りではない。殺陣とは魅せる動きである。武を打ち合わせて流麗に魅せる不殺の舞踊。舞つて踊り、見得を切る。それは人が極めた優雅の妖美である。

しかし、藍色の動きはそのようなモノではなかった。理性に支配された本能のような動きではない。人に、人間に、人類にあのよう

な動きは不可能だ。だからと言って餓えに酔った獣の動きですらなかった。少なくとも獲物を仕留めるため狡猾に追い詰めるような獣ではない。獣であってもその姿を失わせる事は至極困難。擬態か、あるいは。

あれは寧ろ亡霊。姿は見えども捉えることが出来ない、宵闇に紛れて黄泉へと誘う幽鬼である。ならば、亡霊に殺されたものはどうなるのだろう。

志貴はただ呆然とその光景を、その姿を見ていた。死者を灰へと変える藍の姿を。地上にいて、離れた場所にいる志貴だからこそ藍色の姿を完全には言い難いが捕捉していた。乱反射の如くに壁を立ち上り、空を駆けて落下する獣を打ち倒すその姿。屋上に降り立った時その姿は確認する事が出来なかったか、時折影とそれを追いかける死者の姿が地上から見上げる志貴からでも見ることが出来た。

不思議と胸は高鳴っている。

あの軌道。あの攻撃。どれもが志貴の知っている人間業から逸脱している。そのいきなり現れすぐ消える移動手段も、ちらりと見えた闇の正体も、金属の不快な唸れ声も志貴には全くもって理解できる代物ではなかった。

今すぐにも志貴は立ち去らねばならぬはずなのに、志貴は今も空を見上げていた。あの藍色を危険と認識しておきながら、その場所から離れぬ事は真に不可解である。危険から遠ざかる事は決して恥ではない。動物は己が危機に晒された時、危機から逃げるか危険から避ける事を選択する。それこそ己の生命が保たれる手段である

からだ。

だが、志貴はその場から動かない。何故なら志貴は今この時、この場から離れる事など思考に無く、ただ藍の姿を追っていたからである。

高速に動くその所業。空にて襲い掛かるその理術。どれもが志貴の脳から離れない。

それはさながら魅了された心地であった。

胸が虚ろを無くして熱い。

まるで何かに引き寄せられるような感覚。

故に、志貴は動けなかった。

夜の天上から撃たれた、刀剣の一撃に晒されても。

「　　っ!?!?」

空を突き破りて飛来した妖刀の投擲は遠雷にも似ていた。その破壊力に対し轟く音は極僅かで、しかしその鋭さは明らか。轟音と共に硬いコンクリートを穿ったソレは深々と突き立てられて地上に潜りこんでいた。

その刀身は異常であった。

僅かに反身の刀身。その刃毀れた姿は刀としての切れ味を失っているようにさえ見える。更にその日本刀がコンクリートを深々と刺して突き立てられていた。

だが、問題はそこではない。

-　　すえた臭いがする。腐り、終わりを迎えた絶望の臭いだ。闇。刀身から噴き出す闇は、この世に跋扈する悪いもの全てを詰

めた地獄の釜の底から煮え滾る蒸気のようにであった。それが臭いを放ち、鼻をおかしくさせて嫌悪感を抱かせる。何か良くないものであると、理解する前にわかった。

『よオ、生き残り』

そして、上空から壁を伝って迫る藍の姿。全て、全てが終わったのだろうか。あの獣との対峙も、その掃討も。

その姿からでは確認できない。しかし荒れた悲鳴が消え失せた事が事態の終結を意味していた。

闇は抜われ、化け物も消えた。

『手前、何もんだア？』

「え？」

始め、それは何処から聞こえたのかと耳を疑った。

その声音は、目の前に突き立てられた闇から聞こえたのである。

『何だ気付かれてねエとでも思ってたか阿呆が？俺は見てたぞ、俺は見ていたぞオ？手前が畜生を殺した刹那を』

「……………っ」

金属の不愉快な嘎れ声が志貴を揺さぶる。

『ただの餓鬼かと思ったが、そうじゃねえ。食い殺されるはずが逆に縊り殺しやがった。アレは明らかに堅気の動きじゃねえ。寧ろアレはこっち側の動きだ。だと言っのに、今は何だ？まるでド素人じやねえか』

「な、何を言つて」

『イヤ、それも擬態か？偽り欺くのは手品の類だろう。しかしその畏れは本物か。訳が知れねえなァ、手前。今の業、どこで覚えた？』

問い詰めている金属音。

その軋んだ声音に意識が揺れている。

『アア、言わなくても良いぞオ？尋問は得意じゃネエが、拷問とくれば話は別だ。朔にもそれらしい事は覚えさせてんだ。切開しねえで腸を握られる体験をさせてやるう。良いぞオ？気分が一気にハイだ。ひひ、ぞくぞくしてきたぞ』

ひたひたと迫る藍に息を呑む。本気だ。この藍色は本気で拷問が出来る人間だと、先ほどの惨劇でそれは証明されている。しかも抵抗しようものなら、瞬く間に縊り殺すだろう。

それは恐れではなく、事実として志貴に突き出される。

『さて、どうする餓鬼？』

浸透する金属の悲鳴がぐらぐらと脳を揺らす。このままはぐらかせば、結果は目に見えている。

藍ではなく、刀から放たれる威圧に飲み込まれて、志貴は力もなく頷く事しかできない。

しかし、これだけは聞いておきたかった。

「なあ、……あんだ一体、何なんだ？」

目前に藍色が佇み、志貴は思わず言葉を漏らした。その声音は自らが思う以上に硬化し、それ以上に角が無かった。

警戒を遮る胸の鼓動は寧ろどこかこの状況に喜んでいるよう。

「、」

志貴の言葉に藍は反応しない。ざんばらに伸ばされた髪の間隙から覗く、虚空を思わす蒼の瞳は不思議と変わり、志貴を見つめている。何故だろう、茫洋に深い瞳が何となくそう思えた。しかし、その口元は動かさず話す気配は見えない。それに食いつこうとした矢先、金属音が響いてそれも失せた。

『話すなら場所を移せ。ここは不愉快で仕方ねえ。ハイエナの気配がする』

金属音に従うのは癪であった、ここは大人しくするべきだろうか。納得は出来ないが、ここでの抵抗は恐るべき未来を予感させた。

そして志貴と藍色は刀の言葉に従い、その場所から離れようと一つしかない路地の道を歩き始め。

『……おい、俺を忘れんじゃねえ』

「あれ？」

後ろを振り向けば先ほどから突き刺さっていた刀がぽつんと物悲しく置いていかれていた。志貴からすればこの藍色に今は従っておけばいいのだと思ったのでスルーしていたのだが。

そしてその藍色は藍色で刀の訴えを聞いて暫く無感動にぱちぱち

と瞬きをした後、てくてこと戻って深々と突き刺さった刀の柄を無造作に握りぐりぐりとほじくるように引き抜いた。

『痛えっ、この阿呆！ もっと丁重に扱え！ - 強い強いっ、そんな反らすな！ 折れる折れる、折れんけど折れる！？ 力加減もせんで投げるからこんな事になんだよもつと考えてだなあ
いやいやイヤヤ、引っ掛かってる、引っ掛かってる！？ 引っ掛かってんのに力で抜こうとすんな！ 余計に刃毀れすんだろうが
！…！』

ぎゃーすかぎゃーすかぎゃーすか。

「……………」

ギョウギョウギョウ。

『アアアアっ！！ やめてやめて面倒くさがって梃子の原理で抜こうとすんな莫迦！！ 折れるぞ？ 折れるぞ！？ あっけなく折れるぞっ！？ いいのか！？ いい っ ギャアアアアアアアアアアアアアアア！！？』

「……………えっ」

四苦八苦する藍色の後姿と悲鳴をあげる刀の姿になんとも言えない気分になる志貴であった。

どこか遠く、眠らない繁華街から少し離れた屋上。

「……………」

そこで一人佇み、冷めた目で袋小路を見つめる影があった。
「なんで……、あの二人が」
呟く言葉を飲み込んで、影はやがて夜に溶けて消えた。

第十二話 悪い夢（後書き）

六です。

今回は少なめに書きましたが、ある程度まとまりがあるのではないのでしょうか。

さて、そろそろ番外編というものを書いてみようかと思いつたのですが、ネタがないです。過去話や前日談なんてものはあるのですが、それは機を見計らってという事で。

なんで、皆様から何か要望があったら番外編というか特別編を書きます。

どうしてこんな事を思い立ったかと言えば、そろそろPVアクセス百万、そしてユニークが十万の大台が見え始めたので、その記念に皆様への感謝とご要望に出来る限り応えて特別編を書いてみようかと。

なので皆様、こんな話を読んでみたいはたまた絡みが見たいという方、拳ってお申し付け下さい。シリアスっぽくないシリアスを書き連ね、ギャグも恋愛も苦手な私ですが、種類は問わず出来るだけ書いていこうと思います。また、破棄した没案も晒そうかと思いません。お目汚しになるかと思いますが、これも記念にと罵倒を覚悟に初期設定で書いた話をば。どうかご勘弁願いたく。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、送ってきてくれたら嬉しいです。またおかしな部分を発見しましたらお伝えください。

では、六でした。

第十三話 悪い夢(前書き)

うそつき。

彼女はそう言った。

(あどがきに頼みごとがあるため、どうかご覧ください。)

第十三話 悪い夢

「志貴さま？」

声をかけられ、意識を凝らせばベッドで横たわる俺の側には翡翠が少々困った表情で佇んでいた。すでに闇は消え、窓から差し込む光は眩しい。開かれたカーテンの向こうは気持ちの良い青色で、吊るされた歪な月はもう見えない。

朝となっていた。夜はもう、終わった。

「……おはようございます、志貴さま」

「ああ、おはよう翡翠」

一礼した後、翡翠は何か物言いたげに口元をまごつかせたが、意を決したように声をかけてきた。

「あの、……志貴さま。今朝は起きるのが早かったのですか？」

翡翠の視線の先に見える俺の姿は既に制服姿。

いや、この場合は既ではなく、未だ制服のままにいるというべきか。しかし、そんな戯言が翡翠に通用するわけが無く、俺は苦笑と共に「そうだよ」とだけ言っておいた。ただ、何故俺が苦笑ったのかわからず翡翠は困っている様子。

「ごめんな、翡翠。ただ昨日は十二分に寝てただろ？そのおかげで早く起きたんだ」

「……ですが」

「実際そうなんだ。……理由はそれでいいだろう？」

どこか説明口調であるが、咄嗟の言い訳としてはなかなかではないだろうか。理由も翡翠には思い込みがあるだろう、その証拠に翡翠はまだ何か言いたげであったが一応の納得を見せた。それとも、言葉で重ねた境界の線引きを超えることを躊躇ったのだろうか。もしそうだとしたら申し訳ないと思う。でも、だ。

「先に下りて秋葉に言っておいてくれないか？今日は俺が早く起きたから一緒に朝を食べれますってさ」

まずこの時間なら間違いなく秋葉は起きているはず。一緒に暮らして短いがあいつは律儀で、しかも決めた事は頑なに守る、言ってしまうは堅物ではないかと思われる。でなければ俺が起きる事であるに苛立つ事ないだろう。その秋葉だ、毎日決まって俺よりも早い時間に起きているに違いない。この時間帯ならきつと下にいるはずである。

「……かしこまりました」

「ごめんな、翡翠」

「いえ。……私は、従者ですので」

そう言った翡翠の表情はどこか寂しげに揺れていた。それでも今の俺には翡翠を慮る気分さえ捻出させる事出来ない心持なのだ。多少の強引さに目を瞑り、俺は天井を見上げた。

夜ではない。夜ではない。もう、歪んだ夜も、藍色の闇も見えない。

手前は、戻れない。俺達と同じだ。

同じ地獄の底をのた打ち回る腐った亡者よ

なのに、俺の耳の奥は今でも、金属の悲鳴にも似たあの嘎れ声が鼓膜を震わせていた。

「んでだ、手前。……アレは、なんだ？」

獣の臭気が不快だと日本刀、骨喰は愉快に笑った。風に流れても澱む死臭は溜まるものである。まして世の理から外れた蠢く死体ならば言うに及ばず、振り撒く臭気はただの猛毒だと、刀はケタケタと喧しく囁いた。

それは朔にとっても無視できることではない、ならばお前さんは尚更であろう、と。

どうにかこうにか無事に引き抜かれた骨喰は引き攣った余裕のない声で言った。

「……………」

夜の路地裏から離れるべく、志貴は骨喰の指示に無言で従った。背中へと突き刺さる視線に息を呑んで、歪な月の不気味な光に照らされた仄暗い道を進んだ。何か物言いたげな意識を後方に連れたつ朔へと向けているが、その威圧するでもない不気味な無機質を放つ瞳に何も言えずに渋々と歩いていく。

軽く。それこそ慣れた者同士の挨拶のように、あの耳障りな声音は志貴に告げたのだ。

俺は刀だ、と。

それを聞いて、志貴はどうしたものかと返す言葉を探り、そして失った。

一体どうすればいいのだろう。刀が喋ると言う摩訶不思議を志貴の脳は処理する事も出来ず、この夜に起こった出来事に追い詰められていたが故に何の冗談だと怒りさえ煮えて、その声をかなぐり捨てようとした。しかし、有無を言わさぬ骨喰の迫力に志貴はあっけなく屈した。

ある意味当然だろう。長身瘦躯な薄気味悪い雰囲気を湛えた男

骨喰の言葉によれば『朔』という名前らしい 　　が突如

として志貴の首筋に骨喰の刃先を向けたのである。幾ら鞘に収められているとは言え、刃物は刃物。しかも、襲い掛かる化け物を豆腐のように切り裂いていた凶器なのだ。刃を突きつけられる経験も無い志貴にとってはそれだけで充分であった。反骨精神は身を滅ぼす。故に無言の了解が志貴の心を折った。

だが。

「……………」

先を歩く志貴はちらりと朔の姿を盗み見た。

この何も言わぬ男は一体、なんだ。

藍の和装にざんばらと長い黒髪。そして左腕がないのか、着流しはハタハタと揺れており、この街中で裸足である。並々ならない出で立ちであり、貧困街の住人のような装いであった。しかし、それ

を払拭するようにその雰囲気は明らかに常道のそれではない。

雰囲気を感じれないのだ。生物は存在する限り、如何な者であってもその気を滲ませている。それは修練された達人であっても、きつと同じだ。だと言うのに、男は何の気配も感じさせない。そしてその振る舞いだ。先ほども魅せた立ち振る舞いといい、明らかに人間ではない。何か直感めいたものが志貴に訴えかけるのだ。こいつはまともじゃない、と。

だが、それよりも志貴が恐ろしいと感じたのはその瞳だった。空を思わず蒼と言えば聞こえが良い。しかし、それはただの空ではない。

有象無象を呆気なく飲み込んだ虚空の蒼色だ。

『聞いてんのかア、手前？』

「え？」

はたと、意識は戻った。

『ほうほう、この期に及んで呆けるとはナ。なかなか胆の太え野郎じゃねえか、なあ朔』

「、、」

『ひひひひひひ、全くだ』下品な笑い声を響かせて、骨喰は快活に言う。『死ぬか手前』

酷く淡白な警告であった。

しかし、志貴はその簡素な響きに、今は知らず体が震えた。

「い、いやっ。考え事してて、それで」

『……まあ、いいさ。』

『まだ殺しはしねえ』

志貴の言葉を遮り、どこか含みを滲ませて骨喰は言うが、まだという事はやがてと言うことであるつか。そこらへんが気にかかるが、それを聞くには後ろを振り返る勇氣も度胸も志貴にはなかった。

そして両者は細い路地の隙間を歩き、厭らしく骨喰は言葉を吐き出す。

『もっかい聞くぞ烏、脳味噌指突っ込まれて掻き回されない事を泣いて喜べ。手前のアレは何なんだ』

「……知らない」

『ああつ?』

「本当に知らないんだ。……自分がどうしてあんな事出来たのか」

志貴は知らぬ事であるが、人体を断つのは存外に労力を要する。人間は壊れやすい存在であるが構成は丈夫であり、少なくともナイフ一本で首を落とすにはそれなりの技術と修練を積まなければならぬ。だが。

「俺は、殺すつもりなんて……なかった、なかったんだ。だけど、あの時俺はあんなに簡単に」

生命を殺めた。

それが志貴の心を捕縛し苦しめる。人の形を成した存在に対し、刃を突き立てる時がこようとは想像だにしなかった。

あの時、ふと志貴の意識は遠くにあった。何か、ぼんやりと転寝に眺めているような感覚で、志貴はアレの首を落とした。そして、後に思っただ。

人の肉とは、こんなにも柔らかい感触なのかと。

『ほう、アレを知らねえのか。……………やはり、表の人間か？』

眩くように骨喰は言う。

『しかし、解せねえ。それだったら、何で手前は化け物の首を落とせた？』

「……………化け物？」

息を呑む音は志貴の咽喉から聞こえた。

それを自覚しながら、思わず志貴の足は止まる。

何か聞き逃してはならない事を不可思議な刀が、藍の男が告げようとしていた。このまま振り向ければよかったのだらう。勢いのままに、後ろの存在を直視すればよかったのだ。だが、振り返るには既に遅く、志貴が処理しきれないままに骨喰の不愉快な金属音は言葉を紡ぐのだ。

『人間は死ねばしやれこうべだ。死んで腐って骨となる。骨は何も言えねえし、動けねえ。それが常道だ。……………んだが、あいつら死にながら動いていた。それはな、あいつらが死者だからだ。死者は死んでも生きる化け物だ。生ける屍リビングデッドとも言えは分かつか？』

「ちょ、ちよつと待ってくれ！そんな莫迦な事ありえるか！アレは死体だって言うのか！？」

溜まらず志貴は悲鳴をあげるように叫んだ。あまりに常識から離れた真実に意識は拒絶を促したのである。しかし、その反応を寧ろ笑って骨喰は甘受した。あまりに醜悪な声音である。

『そうさな。殺された死体が屍に成り切れず、腐臭撒き散らす化け物と果てた。それがあいつ等だ。生きたままに殺されて成り果てたのがあの生きる屍だ。喜べ、手前は死んだ奴を殺したんだ。なかないないぜ、表の人間なら特に、な』

「そ、そんな。そんな事があつて

「何せこの世は地獄だ。世は漫然と蠢き、生者と死者が悲鳴を挙げて這いずる。助けを求める為に声を挙げてんのか、お仲間を増やすために叫んでんのかはそれぞれだが、少なくとも仏様は優雅に蓮池のほとりで無様な俺らを眺めて憐れみやがる。憐れんで、嘲つてる。手を差し伸べる事無く、救う事無く。世の理が極楽の世なら、糸の垂れた下にいる俺らは地獄の獣じゃねえか？常道では無く、外道の理が蔓延る地獄の住民だ。なら、死体が動いたって不思議じゃねえだろ』

「っ！」

反論する言葉が思いつかず、志貴は立ち止まる。

一体何を言っている。一体何を言っている。

まるで理解できない。

まるで理解したくない。

感情は骨喰の世迷いごとを切つて捨てようとする。

しかし、志貴の理性は骨喰の言葉を受け入れようと聞き入っていた。

それは、もしかしたら答えを与えられた子羊のようで、あるいは中毒性の麻薬を求める廃人の心地だったのかもしれない。理由を渴望する者の心理は如何様にあつても、その本質は変わらない。選択肢は二つ。満たすか、餓えるかだった。

『んでだ。あの死者は不可思議な事に死んで元気だ。元の人間よりも頑丈に、元気になる。蚤の様に飛び跳ねる事だって出来る。そんなあいつ等を相手取るのは、裏の人間の仕事。表の人間なら瞬きの間に肉塊、お陀仏だ。……だが、だ』

気付けば、そこは志貴が辿った道の入り口の側であった。視線の先には明るい煩雑な繁華街で疎らながら人が歩いている。生きている、人間が。そこから溢れる光が志貴の足元まで伸びて、後少しでも踏み出せばそこに辿りつく。どうにかして金属音と藍の男を振り払えば、あそこに戻れる。

でも、何故だろう。足が動かない。鉛のようにではない。足に力が入らないのだ。

これではまるで、自分の体がここから離れたくないと訴えているようではないか。

『手前は違った。死者に襲われ、縊り殺した。普通の人間ならこうはいかねえ。そのまま潰されて終いだ。……だから俺は聞いてんだ。なア、俺に聞かせてくれ。朔に教えてくれ。……手前は、何だ？』

最終警告。志貴の背中に何やら感触があった。恐らく、朔の指先だろうか。このまま黙っていれば先ほどの戯言通りに志貴は生きてまま内臓を握り潰される。言葉にはし難い妙な確信があった。

だけど、何を言えばいい。

あの視界の事を言うには。ちぐはぐな志貴の視界を言うのはあまりに憚られた。今志貴が遭遇する事態にそのような事を考慮するのはおかしい話なのかもしれぬが、アレはそんな容易には言えない事

なのだ。信じてもらえるはずがないという事もあるが、志貴はこの目の真実を墓場まで持っていく所存なのである。だから言わない。

それに、話してしまえば何をされるかわからない。見えぬ事態に志貴は予見も出来ない。

故に、違う事を話さなければいけない。

だから、実に関係のない事であるが、志貴は己を誤魔化すために声を挙げた。

「俺は、遠野志貴だ。……ここらへんじゃ結構有名な遠野の長男だぜ。だから体鍛えて、武術だって使えるんだよ。知らないのか？最近の長男は妹を守るために護身が必須スキルなんだって」

誤魔化すにはあまりに出鱈目と尽きる嘘八百であった。

志貴自身、ああ言ってしまったと果てしない後悔と脂汗。口から出た言葉は荒唐無稽すぎて逆に笑えない。幾ら目の事を言わない為とは言え、あまりに酷い。これで俺の命運尽きたと内心涙を零して覚悟を。

「、、」

「っな？　かはっ！！？」

衝撃が肺を叩く。

背中に添えられた指が志貴の肩をむんずと掴み、翻りその身を壁にたたき付けた。いきなりの事に踏ん張る事も出来なかつた志貴は、背中から叩き付けられた事で息が詰まる。しかし、これで自分は終わったと思ひ、それでも眼前に現われた朔の姿を見た。

遠野の名前に、骨喰は明らかに尋常ではない反応を返し、志貴を嘲う。

それはまるで、悪鬼のようですらあった。

「あ、あんた何を言ってるん　　っ」

『手前は、もう戻れねえ』

不意に、その言葉は澄んだ余韻を響かせていた。

金属の悲鳴とは違う、神託の様な声。

「え？」

『化け物を殺したものは化け物に殺される。それが遠野なら尚更だ。遠野の人間なら全くもって同然だ』

「　　」

眼前。茫、と無機質な蒼の瞳。鋭利な刃先を思わす眦が志貴を見つめている。蒙昧な視線であるのに、今は志貴を見つめているとわかった。それは、あるいは獲物を見つめる捕食者の瞳であったのかもしれない。

「　　あ」

まるで、化け物ようだ。

『その魔眼殺しといい、騙されたな。手前はどうしようもない畜生だったか。地獄の亡者と思いきや、獄卒の一匹。世も末とはこの事だ。真逆、遠野の直系と朔がご対面とはおもわなんだ。あいも変わらず世界は狂気に満ちている』

耳障りな声音。蒼の瞳。掴れた肩。
藍の男。喋る刀。

不思議と志貴は自身の死を見た。
目の前の男に無残と殺される姿が、妙にはつきりと見えた。

化け物を殺した人間は、化け物に殺される。

それが正しければ、今志貴は殺される運命にあるという事か。
逃れられない。底なし沼のような亡者の巣窟立ち竦む志貴を捕まえて。

『嗚呼、手前は同類だ。こちら側の人間だ。残念無く同等の畜生だ。では、同じ地獄の獄卒たる遠野と退魔だ、今回の件には無論関わらなければならねえ』

何を言っている。何を言っている。

藍は殺すのか。何を、誰を殺す。

それは化け物か。

あるいは化け物を殺した自分か。

「だから……」震えを堪える事もできずに志貴は問うた。問わざるを得なかった。「あの時、俺を殺そうとしたのだったのかっ！」

恐れ、あるいは怒りを緋い交ぜに志貴は藍色を睨みつけた。

『あん？ なんの事だ？』

「っ！ しらばっくれるな！ あんた等は俺と弓塚さんに襲い掛かったじゃないか！ 首を抱えながら！？」

責め立てるように志貴は言う。以前以前一度会っていると。そこで俺は殺されかけたのだと。

それは、どこか悲鳴にも似た声だった。しかしどこか懇願するような響きでさえあった。心の何処かで否定を望んでいる童の叫びであった。

だが、藍色に変化はない。相変わらずの不変さで志貴を眺めている。それが気に触ってたまらない。そして骨喰はささくれ立つ神経を逆撫でる事に長けているのであった。

「覚えがねえなあ。 朔の中にもそんな記憶はねえ。多分アしだろ、運がなかったんだろ？」

「 なっ！！ 」
「確かに手前とは何処かで偶々運悪く会っていたかもしれないな。だが、それは本当に何処かで偶々運悪く会っただけの話だ。不運だったな」

「お前は つ！そんな つ」

人は災いを憎む。そして遭遇しない事を幸福に思う。

なぜならば災いには意思がないからだ。どんなに忌諱しても防ぐ事も出来ぬ事象に人は震えながら祈る事しか出来ない。

「殺す相手を一々覚える事も煩わしい。何故なら朔が化け物だからだ、人殺の鬼だからだ。鬼は殺す事に躊躇いない。何故なら鬼と人間とでは明らかに思考も信念も倫理も違うからだ。手前は蟲の法理に従うか？手前は自らが悪戯に踏み殺した蟻の理念に従うのか？答えはそつだ。 答えはそれこそだ」

化け物は化け物の理念に則って生きている。

それ即ち自らのルールを相手に適応する事以上に愚かな事はないという事。

人間が人間を殺す事に嫌悪を覚えるのは全くもって同然。

しかし、化け物が人間を殺す事に、何故嫌悪を覚える必要が在るのだろう。

人間と化け物は全く違う。考え方も、方法も、倫理も、生き方も生きている世界すらも、全く違う。

『いちいち覚えることなど出来るものか。塵殺の限りを尽くす悪鬼の輩だ。自ら以外の全生命は殺人対象に過ぎねえのだよ、朔にとつてはな』

『そして手前が踏み込んだのはそんな場所だ。そんな糞つたれな世界だ』

不思議と、こんな時に志責はふと。

明日、学校で会おう。

弓塚さつきとの約束を思い出した。

こちらが勝手に思い込んでいる約束を、志責は思い出した。

『日和は閉ざされ、これから先は問答無用に無明荒野だ。楽しくなってきたじゃねえか。もう手前は戻れない。血生臭い獣の共食いから、もう離れられない』

『遠野志貴。お前は踏み外した』

「 つ！！！」

そして、志貴は駆けた。全てをかなぐり捨てるように、肩にかかる藍の腕を振り払いあの光の先へ。

意味がわからない。意味がわからない。

頭は情報の処理を放棄した。現状を千切って放りだし、刀が語る理解不能な言葉に体は拒絶した。

だから逃げた。逃げて、逃げて。名残を惜しむような虚脱を無理矢理殺し、少しでも遠く。流れる暗い灰色の視界。その先には明るい世界。そこへ、逃げた。

それでも、嗚呼。それでもなお。

あの神経を逆撫でる刀の声音は、遠ざかるはずの志貴の耳を捉えて話さない。

『手前は、戻れない。俺達と同じだ。』

同じ地獄の底をのた打ち回る腐った亡者よ』

「 兄さん？」

意識は回帰する。はっとして視界を凝らせば眉間に皺を寄せた秋

葉の不機嫌な表情が見えて、そして理性は現状に追いついた。

「私の話を無視するなんて、兄さんは私といて詰まらないのですか？」

「いや、あの。……あ、あははははは」

硬い表情のままに笑む秋葉の顔は空恐ろしいものがあつた。

時分は既に朝食を取り終えていた。そこで時間に余裕があつた俺は秋葉との時間を優先させようとしたのだが、どうやら意識はここになかつたようで秋葉の言葉を殆ど聞き流していた。これは不味い。

「駄目ですよ志貴さん？秋葉様は志貴さんが体調の加減を崩されたことが心配で夜も眠れなかつたんですから。ちゃんとお相手しなくちゃいけませんよ？」

「な、琥珀！いい加減な事を言わないで！」

秋葉の隣に控えていた琥珀さんがどこか茶目つ気ある口調で言った。秋葉は否定のためか顔を赤くさせているが、それが本当なら申し訳ないと思う。

「そうか……ごめんな秋葉」

「全くです。幾ら体調が回復傾向にあるとは言え、本当は学校も休んで欲しいぐらいなんですよ。それなのに兄さんときたら」

秋葉は厳しく言うが、それは確かにそうだと思う。

原因不明によって体調を崩して意識すら失つたのが昨日の事。それなのに昨日今日の事で学校に行くのは、少々おかしな事なのやも知れない。事実秋葉には心配をかけた。琥珀さんや翡翠にも迷惑を

掛けただろう。

でも、だ。

「約束があるから。今日は学校に行きたいんだ」

弓塚さんとの約束がある。

昨日翡翠から伝わった、弓塚さんの言葉だ。

取るに足らないような約束かも知れない。でも、俺にとってその約束は弓塚さんと繋がる唯一のもののように思えた。

自分が何故こんなにも弓塚さんとの約束を、繋がりをも求めているのかまるでわからない。弓塚さんがそのような事を期待しているとも思えない。

でも、これはとても大切な約束のように思えた。

「それでもです。病み上がりの人間に無理をさせるだなんて遠野としての品位に欠けます。兄さん、自覚はおありですか？貴方が倒れるだけで大勢の方に影響を与えるのです」

「はは、そんな真逆」

「それが遠野の長男というものです。上に立つべき人間に何か在れば事態は混乱の極みにもなってしまふんですよ」

「……肝に銘じておくよ」

「本当ですか？」

そう疑われると、こちらとしても遣る瀬無いものである。しかし、それを正面切って直接言葉にするには度胸がなかった。軟弱者である。

しかし、改めてこの場を見渡す。

正面には小言を列ねる秋葉、その横には何やらにこやかに笑っている琥珀さん。そして。

「なんでしょう志貴様？」

「いや、なんでもないよ」

俺の隣には慎ましく翡翠が控えている。控えめに佇むその姿は本当に従者の鏡で、ぴっちりと着こなしたメイド姿から彼女の几帳面な性格が垣間見えた。先ほど邪険に扱った事を申し訳なく思いながら、しかしこうやって全員が揃っている事に心は確かな安堵を覚えていた。きつと夜にあんな事があったからだろう。寝付けなかった事に妙に落ち着きは訪れなかった。

でも、今この場に皆いる。それだけでいいと思える。だから。

手前は戻れない。

反響する金属の囁きに、顔を顰める事は無理からぬ事であった。

「兄さん？どうしました」

「……いや、なんでもない」

黙っている。俺には関係ない。あんな事、忘れてしまえ。

しかしそう思い込もうとするたびに、あの二人の姿が脳裏を刺激して止まないのだった。

「志貴様。そろそろお時間です」

「ああ、わかった翡翠。秋葉、それじゃあ行ってくるよ」
「……わかりました。無理はしないでくださいね」
「大丈夫だよ」

だから心配なんです。

遠ざかる俺の耳にそんな声が聞こえたような気がした。

玄関へと続く廊下を歩いている時、後ろからパタパタと軽やかな歩き音が近づいてきた。

「志貴さん。忘れ物ですよー」

何事かと思つて後ろを振り返ると、琥珀さんが俺の学生鞆を抱えていた。そういえば、俺は今手ぶらだった。どうやらわざわざ持ってきたらしいが、本当に琥珀さんには申し訳ない気持ちで一杯である。

「ああ、ごめん琥珀さん。助かったよ」

「いえいえ、翡翠ちゃんが忙しそうでしたので代わりに持ってきただけですよ。あ、それとも志貴さんは翡翠ちゃんが持ってきたほうがよかったですかー？」

どこか含みを持たせた琥珀さんの笑みに顔が引き攣る。ここで慌ててしまえば彼女の手管に乗ってしまうのは前回の件で証明済みだ。引っ掛からないぞ俺は。

「そのままあの手この手で翡翠ちゃんを誑かして門の見送りで翡翠

ちゃんの唇を無理矢理奪うんですね？さすが志貴さん実にあくどい
です！」

「何を言ってるんですか琥珀さん！？」

あ。

「おや、反応するという事は実際にそうするということですねっ。

むむむむ、これは翡翠ちゃんのお姉さんとしては翡翠ちゃんの唇を
死守しなくてはなりません！」

「いやいや俺はそんな事しませんから！」

「むむっ、翡翠ちゃんには魅力が無いとでも言っんですか？これは
見過ごせないですね！」

「何この理不尽っ！？」

反応してしまったツケは実にカオスである。

それはさて置き。そのまま見送りをするという琥珀さんを連れ歩
き、俺たちは玄関を出た。外は澄んだ空気で体の汚れも浄化させて
しまいそうなほど。実に気持ちの良い天気である。

ちらりと見ると琥珀さんはそんな天気には眩しいのか目を細めて遠
くを見つめていた。はて、なにがあるのだろうと思ったが、そこま
での詮索は実に瑣末な事であった。

「お帰りは何時ごろになります？翡翠ちゃんに伝えておかないと？」

「え？なんで？」

「だって志貴さんが帰る時間を把握しておかないとお出迎えができ
ないじゃないですか」

「……別に迎えとかいららないんだとなあ」

慣れていないことなので、そんな扱いを受けるのはこそばゆいと言うか、何と言うか。

「翡翠ちゃんがやりたいからやってるんですよ。だから志貴さんは別に気にしなくてもよろしいんです」

「んー、……納得はいかないけど。そこまで遅い時間にはならないから大丈夫だよ。門限は守るさ」

「なるほどー、それじゃあ翡翠ちゃんにも伝えておきます。あとなんです」

そこで琥珀さんは間を置いて、言った。

「志貴さん、深夜に何処へ行かれたのですか？」

心臓が大きく跳ねた。

「え？」

何故琥珀さんが夜の事を知っているんだ。琥珀さんを見れば、何時の間にかその笑みはどこか張りついた仮面のような凄みと簡素さを持ち合わせ、ともすれば誤魔化しは許さないと言わんばかりに俺を見つめている。その目は笑っている。しかし。

「実はですね、昨晚の事なんです。私たちは夜中に見回りを行っているんです。こんなに大きいお屋敷ですから見回りにも一苦労なんですけど、そこで私は不思議な事に夜中にお屋敷から抜け出す人影を見つけたんです。不思議ですねー、真つ暗な深夜に何処かへと向かう人影は、私にはどうにも志貴さんの姿に見えて仕方なかったんですよ」

その瞳の奥底にあるその色は笑っていない。俺を射抜いて放さない。

「そこで私、あんまりに気になっちゃって志貴さんの部屋にお邪魔しちゃったんですが、これまたびっくり、志貴さんの姿が何処にも見えないんです。これは一体どういうことでしょうか？」

どこか訴えるように、琥珀さんは楽しげに言葉を紡いだ。

しかしその内情は如何なるものだろう。どこか震えを堪えるように、俺の咽喉が鳴った。

「……それで、志貴さんはどちらに行かれたんですか？」

何故ばれたのかはわからない。本当に琥珀さんが俺の姿を見たのだろうか、判別する手段も材料も俺には無い。琥珀さんは俺を見たと言うが、それは真実なのだろう。事実、俺は家を出ているのだ。それに部屋まで確認したと言うのだ。言い逃れは出来そうにない。

「えつと昨日は、つというか今日になるのか。一日中寝てたから妙に眠れなくて、ちょっと洒落込んで夜の散歩にでも思って外にいったんだよ」

「……」

「だから琥珀さんが見たのは俺で間違いないはずだ。偶々出かける俺を見かけたんじゃないか？一時間ぐらいで帰ってきたし、琥珀さんが思うような事は何も無いよ」

俺の言葉に琥珀さんはどこか胡乱げな雰囲気を含ませたが別段何も言わず、「なるほど」と取り敢えずの納得を収めたようだ。

「あんまり夜は出歩かない方がよろしいですよ？最近物騒な事件も

多々とおこっていますし、秋葉様も心配しちゃいますし。寝るために多少の疲労は欠かせないことですが、志貴さんの体調を見た私としましてはあんまりお勧めしません」

「……ごめん」

流石に呆れられたか。仕方ないと言わんばかりに琥珀さんはオーバーな溜め息を吐いた。その仕草が実にアメリカンであると思う俺は実に場違いである。

「さて、それじゃ心配事も無くなりましたし志貴さんお氣をつけて」「ああ、言ってくるよ」

俺は琥珀さんの対応にどこか柔らかな雰囲気を感じながら、そのまま振り返って足を進めた。

「そ き」

「え？」

すると琥珀さんに何やら声をかけられた気がして後ろを振り向くが、琥珀さんはそんな俺に小首を傾げながらにこやかな笑みのままきつと気のせいだったのだろう、と思い俺は下る道を歩いていった。

その日、少年は一つの約束を胸に坂を下っていた。恐らく約束と呼ぶにはあまりに弱い少女の言葉に少年は陽だまりの臭いを見出したのかもしれない。ひたすらに平常を愛し続けた彼だから、太陽の暖かさや人の温もりというのはかけがえの無い事だと、理解ではなぐずつと前から知っていたのだろう。それはきつと大切な物なのだ

と信じて疑わなかった。

故に、少年の約束は果たされる。

少年が取るに足らない言葉に陽だまりを見出したのと同じように。少女もまた己が発した言葉に少年への想いをありったけ積み込んでいたのだ。

「あ」

その姿を少年は思わず立ち止まり見つめた。栗色の髪を両サイドで縛った、丸顔の少女。

「あ」

予感があったわけではない。ただ、もしかしたらここにいたら彼が来るかもしれないと淡い期待を秘めて彼女はその場所に佇み、少年の姿を待っていた。帰りでは分かれ道。でも、行く時は交わり道。其々に異なる道なりを歩んできた二人は、細い繋がりに約束を包み込んで、出会った。

「「その……」」

そして二人は言葉を失う。何て声をかけようかと考えていた。沢山考えてはそれを打ち捨てた。でも、それは学校での話で、通学路で対面した頃合を想定していなかったのである。多少の恥じらいと躊躇いを込めて、二人は言葉を重ねた。

「あの、昨日は大丈夫だった？」

「あの、体の調子はどうだった？」

重なる言葉に二人は瞳を見開いて、そして沈黙の後に耐え切れず笑った。

嗚呼、この人も同じ事を考えていた。

どうしようもなく心配でたまらない心持が気遣いの言葉を紡がせた。

このシンクロがおかしてたまらなかった。

そして相手の事が自分を心配してくれている事が、ただただ嬉しかった。

そうして二人はいつしか並んで歩く。

雰囲気は安らいで、二人の表情もまた柔らかい。高校への道なりを二人は歩いて、話し、笑いあった。上々な陽気の気配に二人は今日の良き日を予感した。

「おはよう、弓塚さん」

「おはよう、遠野くんっ」

だから。

二人が並んで歩く日々が今日で最後であると。

今は誰も、気付かなかった。

第十三話 悪い夢（後書き）

約一ヶ月ぶりの更新となりますが、六です。皆様お久しぶりでございます。

最近は短編なんかも書いたりして、朔の更新しろと言われるやもしれませんが六は全力全壊。やるだけやっています。

さて、そんな私。そろそろ番外編を書いてみようかと思いつたのですが、ネタがありません。過去話や前日談なんてものはあるのですが、それは機を見計らって載せようと考えているので、是非ともそれとは別のものを載せたいです。

なので、皆様から何か要望があったら番外編というか特別編を書きます。

どうしてこんな事を思い立ったかと言えば、そろそろPVアクセス100万、そしてユニークが10万の大台が見え始め、皆様への多大な感謝を込めてリクエストに応え、出来る限り特別編を書いてみようと考えました。

なので皆様、こんな話を読んでみたいはたまた絡みが見たいという方、挙ってお申し付け下さい。シリアスっぽくないシリアスを書き連ね、ギャグも恋愛も苦手な私ですが、種類は問わず出来るだけ書いていこうと思います。

また、過去に破棄した没案も晒そうかと思えます。お目汚しになるかと思いますが、これも記念にと罵倒を覚悟に初期設定で書いた話をば。どうかご勘弁願いたく。

感想、意見、質問、アドバイス、または批判など、送ってきてく

れたら嬉しいです。またおかしい部分を見見しましたらお伝えください。

では、六でした。

断章 浅き夢見し(前書き)

有為の奥山は越えている。

もう、戻れない。

断章 浅き夢見し

血が、止まらない。

「ぎがつ、ああ」

ぐわんぐわんと意識が揺れている。酒に酩酊しているような気分だった。精神に何か混ぜてぐちゃぐちゃにされたようなそれに気分が害され、酷く腹が立つ。彼の思考の殆どは憤怒に支配され、頭が破裂しそうだった。だから煮詰められた憎悪はひたすらに彼の意識を苛んで仕方が無かった。

ここ、は何処だ。

見覚えのない暗がりはどうやら自分の寢床ではないらしい。どこにでもあるような薄汚い路地裏で、上部に塗炭屋根があるような実に粗末な場所だった。乱雑に転がる瓶の破片やすえた臭いは家無しの溜まり場であるらしい。不衛生極まりないその場所は彼を苛立たせるには充分なほどで、怒りに任せて出鱈目に身動きすれば、黴の臭いが彼の体に纏わりつくようであった。

しかしながら、問題はそこではない。

彼は何故自分がこの場所にいるのか全く覚えが無かったのである。

「つつああ……………、つたま痛え……………！」

脳が脈動するように痛む。ずくん、ずくん、と。鼓動のように頭

部に痛みが走り、思考が瓦解しそうであった。寝起きにこの痛みは馴れたものではない。片手で頭を押さえつけても、まるで痛みは引かない。長年付き合った頭痛なのだから、これぐらいで治まるとは思っていない。それでも押さえつけなければまともに思考も出来ない痛みであった。

そして悪い事に痛むのは頭脳だけではなかった。

「っあああああ……っ！」

突き刺すような痛みが彼の脇腹を襲った。少数の蛆がその部分を食んでいるような感覚。

呻き声を挙げて恐る恐る左腕を伸ばしてみれば、湿りを帯びた感触。それを眼前に晒せば触れた指先は赤色に塗れていた。それが塗炭屋根の隙間から差し込む太陽の忌々しい光に照らされて不気味にてらてらとしていた。

「あ？」

どこか力なく声が漏れた。それは許容範囲を超えたことに対して理性が目まぐるしく原因を探っていたからだ。寝起きで激怒に脳内を焼き尽くされながらも彼の思考回路は実に明晰だった。彼の身に何があつたのかを、彼の思考は瞬時に再生を果たしたのである。

あれは生温い夜。滑る風が体を撫でて、粘る空気に肺が苦しめられた。

見えるは藍の着流し。片腕を喪失した人形のような出で立ち。

さんばらに伸びた髪の間隙から覗く、蒼の瞳。

「あ、あああああああああああ」

そこで彼は、彼は。彼は。

そして、炸裂するように思い出す。

「七夜あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああつつつつ！！！！」

細い路地に怨嗟の咆哮が響き渡る。それは反響して木霊さえ呼びこんで、彼の内側に渦巻く怒りをぶちまけた。右手を握りしめ、寝転がりながら地面を思い切り叩きつけた。その指は既に生え揃っている。朦朧な意識で記憶を辿れば容易に思い立つ。彼は能力で指を奪ったのだ。しかし。

一瞬寒気を感じて、慌てて胸元に手を当ててみた。

そうだった。記憶が確かならば、彼はあの時。

押し当てた掌に反応は無い。

内側から押し上げるような感覚はなく、鼓動は皆無であった。

「つくそがああああ……………つつつつ！！！！！！」

背筋を震わせて、彼は全てを思い出した。あのおぞましき夜の事を。

彼はあの藍色に完膚なきまでに遣り込められ、それでいて無様に

殺されたのだ。何も出来ないまま軽くあしらわれて殺されたのだ。右指を噛み千切られ、脇腹を裂かれ、心臓を抉り取られた。いや、あの所業は決るなんてものではない。何故なら今こうして彼の胸元には僅かな亀裂のような傷跡しかなかった。

瞬時に掠め取られた心臓。

あれは最早人間の所業ではなかった。

それでも、彼は立ち向かわなければならぬのだ。

「あ、ああああああああっ」

化け物の如き藍色の壮絶な惨さを目にして、彼はあの時確かに恐れられた。怒りに思考は白熱してはいたが、その総身は鳥肌が立ち、戦慄に体が震えた。想像を超え、対処も出来ぬままに迫る藍色に恐怖したのである。

それでも彼は立ち向かった。恐怖を苛烈な憎悪で押し殺し、立ち向かって、殺された。

通常であるならば、その時点で彼は既に死人だ。心臓を奪われたのである。血脈の管理者である心臓を失ったものが生きている道理は無い。

それでも、彼はこうして生きていた。

「……………っ」

意識がぐらりと傾いた。貧血と頭痛、そして今しがた叫

んだことによるものだ。

脇腹の出血は止まることを知らず、傷口は布で押さえつけてはいるが一向に滲み出ていた。刃で鋭く切り開かれた傷は浅く斬られれば意外にも早く塞がるものであるが、その気配はまるで見えない。だが、こうしている内にも血は失せていく。

しかし、心臓は既に失われているのだ。造血細胞は骨髄の中にあるからよいが、運搬に欠かせぬ心臓を奪われてはどうしようもない。それでも生きてるのは、偏に彼の不死身さによるものであった。だが、失った血流は無視できるものではない。血は生命には無くてはならないもの。そのために心臓もまた必要不可欠である。

ならば、奪わなければならない。何処からか調達しなければならぬ。

そのために、彼は逃げた。

無様に逃げて、逃げて、逃げた。そして彼は今もこうして呼吸を続けている。生き永らえている。未だ死んでいない。いや、死ぬわけにはいかないのだ。

何故ならば、彼はあの藍色を殺さなければならないのだ。

『七夜朔が遠野への復讐を企てている』

最早顔も忘れた女が、記憶の奥底で彼に囁く。

あれは過去の事だ。彼はかつて牢獄の住人であった。湿った臭いが支配する陰気な牢を住まいとする囚人であった。それを彼は望ん

でない。彼は望まらずして人気のいない座敷牢へと押し込まれ、長い間日の目を見ない牢獄を住処としたのであった。

そして、いつだったか。

獄に繋がれた彼の世話を行っている女が唐突に彼へと告げたのだ。

七夜朔が、あの忌まわしき男が遠野を滅ぼそうとしていると。

それを聞いて、牢の中で彼は嘲った。

『構うものか』

ある例外を除いて身内に対し冷やかな感情すら抱いていない彼である。彼は無様に殺されるかもしれない親族の姿を想像して、せせら笑った。どうせなら惨たらしく殺されればいいと、鼻で笑ったのである。

何故ならそいつらが原因で、彼は牢屋に入れられたのだ。

切っ掛けはあった。特筆する事もない出来事だった。暴走状態に陥った彼に父親は一撃を放って息子を殺したのである。しかし、そこで驚くべきことに彼は生きていた。と言っても瀕死に意地汚く縊っただけであつたが、それでも彼は生きていた。あれは何年前の事だった。それから彼は仄暗い牢の中に閉じ込められていた。何年も、何年も。

故に彼は親族に対し負の感情しか抱いていなかった。殺意と邪気を腹の底に溜めながら、彼は獄の中で息を潜めていた。

そんな彼に女は告げたのだ。

『七夜朔が遠野の全滅を狙っている』

不気味な事であるが、女はいつも笑みであった。まるで笑み以外の表情を知らないかのようにだった。人形と言うのはきつとあんな女に違いない。

そんな女を壊してみたくて、彼はかつて身に巣くう激情を女にぶつけてみたりもした。だが、恐るべき事に無理矢理に辱められても女はおぞましき笑みのままで、男は身震いすらしたのである。決して笑み以外の表情を見せず、そして禍々しい笑みを湛え、女は男を翳るように言うのだ。

『七夜朔は遠野秋葉を殺しに迫っている』

それを聞いて、彼は思い知った。事実叩きのめされたと言ってもいいたろう。

その時の彼は言うに及ばず、暴れるだけ暴れた。地下に存在する座敷牢から響く彼の発奮は地上を僅かに揺らす程で、そのときだった。彼の怒りは頂点に達したのだ。

朧な記憶ながらに、彼は七夜朔という存在を覚えていた。

そしてそいつがいつも遠野秋葉の側にいたことも覚えていた。何故アイツに秋葉が心を開いていたのかを彼は知らない。知りたくも無かった。彼にとって七夜朔とは限りなく目障りなだけの存在であり、他人以上に気に喰わない存在だったのだ。

そして腹立たしい事であるが、七夜朔と遠野家は緊迫状態にあり幼少ながらに聡かった彼はそれを見抜いていた。故に七夜朔を排斥する事も出来ない事を理解していた。だから彼は齒嚙みしてその状況を邪魔するぐらいしか出来なかったのである。何故なら、彼は七夜朔が遠野秋葉の側にいるのか、その理由に思い切りがあったのだった。

そんな七夜朔が、遠野秋葉を殺しに迫っている。

彼にとっては到底許されるべき事ではなかった。

そして、どうすればいいかと悩みに悩んで彼は感情のままに行動する事を望んだ。

牢屋から脱出し、七夜朔を殺そうと思ったのである。特徴は既に知っていた。女が教えてくれたのだ。空を思わず蒼の瞳を持った男であると、男に口添えしたのである。不自然な事ではあるが、それを好機と男は受け入れて、手筈どおりに脱出を果たした。

そして、彼はとうとう見つけたのだ。七夜朔。あの忌まわしき男を。憎い怨敵、忌々しい感情の仇敵を。

彼は全力を尽くしていた。思い立つままに肉体を行使し、痛む傷口を無視して立ち向かった。血飛沫に塗れ、肉を潰そうと指を食われようととも彼は構わず絶叫をあげながら立ち向かい。

彼は敗れた。心臓を潰されて、無様に敗走した。

そう、彼ではアレに立ち向かえないと、彼は知らされたのである。全力では届かない。粉骨碎身の決意では辿りつかない。その命を喰

らうためには海千山千の溝が横たわっていると、赤子をあやされるように彼は思い知った。

それでも、それでも。

「認めねえ

っ」

それを認めるわけにはいかない。

「認めねえぞっ……認めねえぞ……！！」

それを認めたらきつとなにもかも駄目になる。

これまでの人生、牢に閉じ込められた惨めな己、そしてそれ以前の過去が。あの時に決意が、覚悟が全て不意に終わる。麗らかな思い出と、憎悪に明け暮れた現在を自ら踏み躪ることになる。

そのような事を認められるほど、彼は大人しくはなかった。

何より、それを認めてしまえば死ぬのは彼だけではない。

「秋葉

」

そう、何よりも大切なモノが殺されてしまうのだ。文字通り目に入れても痛くない大切な、それこそ自分よりも大切なモノが、あの藍色に惨殺されてしまうのだ。それは阻止しなければならぬ。死守しなくてはならない。

長き牢での生活において己の理不尽に対する罵詈雑言と、かつての生活を思い描く妄想だけが彼を支えていたが、それにおいて遠野

秋葉何よりもの存在だった。かつていた友人と共に笑いあつた過去に涙と、それを破壊された激憤をもって彼の精神は健在だった。そして彼の中において遠野秋葉とは必ず守らなくてはならない無二の存在であると言えた。

だから、彼は立ち向かわなくてはならない。

「秋葉あ……………っ、秋葉　　っ！」

嗚咽のように彼は名前を呼んだ。搾り出すような懇願にも似た、なんて弱い声だろう。まるで親鳥から捨てられた雛の悲痛な鳴き声のようだった。

しかし、その声に戻ってくる言葉は無い。

理由はわかっている。

なぜなら彼はどうしようもなく一人だったのだ。

恋焦がれた愛おしいモノは、もう側にいない。あの高い壁の向こうにいるはずだ。そして自分はこんなに薄汚れた路地裏で血を流し、苦痛にのた打ち回っている。それが惨めでたまらない。何故自分はこんな目にあわなければならぬ。

それでも、彼は悲壮な決意を固めていた。

「秋葉……………、俺……………守るから」

全身全霊を賭けて、遠野秋葉を守る。

そのためならば、死んでも構わない。

「ああ……………」

睨み付けるように目蓋を顰めさせながら、彼はもう一度遠野秋葉の姿を思い出した。牢から脱出し、遠くから眺めた遠野秋葉は可憐な少女から成長し、美しき女性になろうとしていた。高い壁の中にいる彼女は本当に綺麗だった。それが嬉しくて、また悲しかった。

そんな彼女の側にいない己を彼は呪い、そして蔑んだ。

嘆いても何も変わらない事を知りながら、それでも想わずにはいられない己の弱さに。

嗚呼、なんて嘆かわしい。そんな己を蔑んで、彼はそれ以上の激怒で持って悲嘆を覆い隠した。嘆きでは殺せない。悲しみでは守れない。感情の緋い交ぜと、不自然なまでに痛む頭に苦惱しながら、彼はかつての思い出を胸に、今はただ憤怒に身を任せていた。

ならば、やる事は決まっている。

「殺す……………」

必ず殺してやる。噛み締めた奥歯が軋んでたまらない。しかし今となってはそんな事もどうでもよく、彼は敵わぬと知りながらその情動を狂気で染め上げたのである。内側から破裂してしまいそうな激情と、折れてしまいそうな脆弱の恐怖に自己を磨耗させながらも、牙を研ぎ、殺意を澄ましていった。もう戻れない過去に縋りながら、唯一を守るために彼は修羅となり悲壮の覚悟を身に刻んだ。

そっぴ、少し泣いた。

断章 浅き夢見し（後書き）

名前は出さないから、春夫のターン。

五時間ぐらいで作ってみたら、まあ荒い事。

そして私は台詞が苦手だと思っ今日この頃。

第十四話 悪い夢（前書き）

世界に希望がある限り、人の絶望は決して無くならない。

第十四話 悪い夢

恋というものは、些か厄介なものである。

単なる思慕の感情であると言うのに、その人命、あるいは人生を大いに狂わせる事もあれば、はたまた一途な想いが時たま運命を変えらるゝことすらもあるのだから一笑だには出来ぬ摩訶不思議である。

感情とは力の初動だ。力なき行動は失速するに及ばず、その道理を失墜させて墮落させてしまう。感情なき行動は茨の道を踏みしめるところではなく、棘の茨に抱きしめられる末路が落ちた。

だが、恋はそれと一線を引く。恋はするべきだ、恋は何よりも素晴らしい。恋は甘く苦いもの。その生を潤沢に富ませ、更には幸福までも訪れるかもしれない、と声高々に恋は良いものと謳う者は歴史にも多くいた。それほどまでに恋は人を捉えて惑わす。故に人は誰かに恋をする。

しかし、本当に恋は良いものかと言えば、その答えは千差万別であらう。

恋は一種の麻薬である。それも依存性の高いものだ。思考は淡い色に染まり、その行動もまた然り。歴史を紐解けば、恋によって生まれた悲劇があった。恋によって育まれた惨劇があった。狂おしいまでの愛に呑まれ、そして裏切りの道を走る者。恋のために戦争を起こし、天下万民悉く滅ぼした王。叶わぬ恋慕に涙を流し自ら毒薬を飲んだ憐れな女。彼らの理由はただ一つ。恋とは何よりも尊いものであるからだ。

故に恋は悲しみの源泉である。事実、恋に芽生えた者の不幸な最後は涙に濡れた別れを経験するだろう。そして枕を濡らして叶わぬ恋に理不尽を抱き眠りにつくのだ。それを悪いという者はきつとない。何故なら恋とはそういうもの。幸と不幸が背中合わせに在る、真に不可解な感情である。

だから恋の結果を知る者は誰一人としていない。筋道が通っていても、その結末には大どんでん返しはよくある事。例えその果てが例え悲劇で救いようのない末路だったとしても、恋とは良いものである。

その日、三咲町のとある高等学校では朝っぱらからちよつとした騒ぎが起こっていた。

二年生であるあの朴念仁と呼ばれる遠野志貴と、奥ゆかしき事この上ない弓塚さつきが共に登校してきたのである。公然の秘密としてさつきのアプローチがいつ大成するのか、はたまた志貴がいつさつきのアプローチに気付くのかとかねがね話のネタにされていたのは言うに及ばないが、この現場を目撃した生徒達は颯爽と高校へと向かい、この事実を言いふらしたのである。

以前から弓塚さつきを応援している者は黄色い歓声を挙げ、遠野志貴の鈍感さに賭けていた男共は草葉の陰で男泣き。上を下をの大騒ぎに干切られた賭けの食券枚数知れず。今正に校内は大狂乱の乱痴気騒ぎが勃発し、終いには乾有彦を筆頭に男連合が莫迦騒ぎを始め、それにシエル率いる花の乙女愚連隊が待ったをかけて男女を分ける抗争が始まってしまった。

果たしてこの騒動に終わりは来るのか……！！

とはいかず、本日は少々騒がしいながらに実に平和な朝を迎えたのであった。

弓塚さつきにとって遠野志貴との距離は埋める事が難しい。いつそ困難と言ってもいいだろう。遠野志貴自身がどう思っているかわからないが（さつきとしても気になるところではある）さつきは成る丈志貴と仲良くなりたいと思っている。それは遠野志貴が気になる存在であり、そしてそれ以上にさつきが遠野志貴を一人の異性として意識しているからだ。しかし幾ら 遠野志貴との距離を縮めようと自ら奮い立っても、いざその時になると物怖じしやすい性格故にその切っ掛けを自ら潰してしまう事などもざらで、さつき本人としても実に歯痒いのが今までの現状であった。

彼女は比較的強引に事を起こす人間ではない。活発的というよりも引っ込み思案という言葉がしっくり来る性質である。それは交友関係においても通じ、しかしその性格の良さから面倒見の良い人間だと周りからは思われている。頼まれたら断る事が出来ないし、困っている人を見かけると放ってはおけなくなる。本当はそんなことないとさつき自身否定しているが、性格が性格だけに流されてしまっているのである。

ただ彼女はそこで終わるのではなく、諦めの悪い質でもあった。

我慢強いと言えば些か誇張に過ぎ。

頑固と言えば本人としても非常に困る。

頑固と言つ言葉は少々印象が悪いように思えるのだ。響きも濁音ばかりでちょっと厳つい。でも諦めないという言葉は実にしっくり

来る。健気な感じもするし、誠実な気もする。ニュアンスの柔らかさが際立っているのではないだろうか。別に本人がそう思わなくても事實はそうなのであるが、それは本人もわからぬ事ではある。

だから彼女は諦めないと言う意志を胸に遠野志貴への距離をつめようと日々努力をしてきたのである。

それがいつ実るとも知れぬ最後の無花果の花だとしても、彼女は止まらなかった。

それを苦しいと思うこともあった。好意を募らせれば募らせるほど遠野志貴との間に見出される距離は遠ざかっていく気がして、隔たりは一向に取り除かれてはくれないのだ。それを思うと苦しくてたまらなくなり、夜中には胸を締め付けられるような切なさに襲われて眠れなくなる事もあった。

しかし、なんで好きになったのだろうかとは一切思わなかった。さつきは遠野志貴を好きになったことに全く後悔しなかったのである。

後悔とはつまり否定だ。それまでの気持ち、それまでの時間、それまでに積み重ねてきた彼の残像を全てかなぐり捨てる行為である。だから彼女は後悔しなかった。そもそも後悔を覚えることなんてないのだ。だって遠野志貴が好きなのは誰に強制されたわけでもない、彼女自身から生まれた彼女の感情なのだ。だから彼女は誰よりも幸せものであった。それを大切にして何が悪い。文句あんのかこら。

それに遠野志貴を好きになってから人生がちよつと変わったような気もする。あの冬の奇跡から、彼女はいつだってその甘い痛みを噛み締めてきたのであった。

そして切実の日々を越え、今さつきの気持ちがひとつの結実を迎えていた。

「弓塚さん？」

「え？」

すぐ側から声が聞こえた。変声期を越えた男性特有の少し低い声は彼のものだと思うだけで特別なように聞こえる。それが具体的にどのような事かは上手く説明できないが、彼の言葉は他の人よりも良く聞こえるのだ。妙に心地よく響く適度な低音はさつきの好きな彼の声で、耳元で聞こえるから少しくすぐつたい。

しかし、今はそんな彼の声に浸っては不味い。彼はちょっと困った顔つきでさつきの顔を覗いてきている。気付けば、近い。こんなに志貴が側にいるなんて今までであっただろうか。その距離にさつきは自分の顔が熱を帯びるのを感じた。

「あ、あああの、えっと……どうしたの、遠野くん？」

「いや、弓塚さんが何か黙ってたからさ、話しかけてもぼつとしてるし、ちよっと気になって」

「そうなの？ ごめんね、遠野くん」

折角声をかけてくれたのにそれを聞き逃すなんて、さつき無念。申し訳ない気持ちと、惜しい事をしたという気持ちでさつきの胸中は一杯になってくる。しゅん、としてみづのも致し方ないことだろう。しかしそんなさつきでさえ志貴は苦笑して許してくれるのだ。

「謝るほどのことでもないからいいよ」

「……でも」

「いって、いって。……あー、それよりもどうしたんだ？ぼつととして」

気をきかせてくれたのだろう、話を元に戻してくれた。そんな気を使ってくれてありがたいと思うが、気を使わせた事に申し訳のなさを感じた。ただ、それもきつと志貴は気にする事はないと笑ってやり過ごしてくれるだろう。そんな彼の人柄の良さは心地よいものがあった。

「うっん、なんでもない」

そう、なんでもないのだ。なんでもないのである。さつきが今しがた考えていた事を遠野志貴本人に堂々とと言えるはずがないのだ。状況的ではなく、さつきの精神的な理由で。でも、ちらりと志貴を見る。そこには子犬を思わすような、それでいて何処か同年代の青年とは違う雰囲気を持つ人が側にいる。だからさつきは実感する。今日はなんて素晴らしい朝なのだろうかと。

学校への道なりはなだらかに続いていく。公園を通り過ぎ、街路の通りを志貴とさつきは連れだって歩き、すれ違う車の排気ガスを嗅ぎながらどうでもいような話を交わしていた。

昨日はどうしていたかを初め、今朝のニュースや占いの結果、はたまた学校での共通の話題。宿題の確認や有彦の悪口。ちょっとした気になることとか有彦の悪口とか、有彦の悪口とか。あんまりに志貴が悪口を言うので、ちょっと窘めたりもしたが。そして。

「え？弓塚さん中学の時同じクラスにいたのっ？」

「……そうだよ、やっぱり気付いてなかった」

実はさつきと志貴は出身中学が同じで、しかも同じクラスになったこともある。それをさつきは内心嬉しく思っていたが、肝心の相手が気付いていなかったらどうしようもない。ちよつと落ち込む。

「ぐ……ごめん」

「……いいよ、あの頃は遠野くんとあんまり話すこと出来なかったし。……でも、これからは」

頑張るから。口元を転がるその言葉はきつと小さすぎて志貴には伝わらない。でも、こんな決意を想い人に聞かせるのは恥ずかしいから、聞いて欲しくもない。でも、聞いて欲しいなんて気持ちもある。それがたまらなく切ない。

歩道橋を越え、もう少し歩けば学校が見えてくる。いつもの見慣れている道だ。そしてそこらには登校途中の生徒の姿もちらほらと見えた。出勤途中のサラリーマンがいれば、本当に綺麗な金髪の女性もちらりと見えた。

何気ない、いつもの登校である。

「……」

ちよつと気になつて後ろを振り向けば、あの金髪の女性の後ろ姿が遠くなつていく。あんなに綺麗な人がいるんだなあ、とさつきはしみり思った。後姿まで美人なんて、外国人女性はずるい。

「ま、いいか」

「？」

予感があつたわけではない。あの場所で待っていれば確かに遠野

志貴は現れる事は分かりきった事実。遠野志貴が引越して帰り道が重なったのならば、少なくともあの道で会う確立は高かった。でも、以前までのさつきならばあそこで遠野志貴が来ることを待つなんてありえなかっただろう。約束にもならぬ約束を突きつけてさつきが舞い上がっていたとするならば、それは否定の仕様がな。しかし、二人はこうして今一緒に歩いている。

それは否応無く、さつきの心理状態に影を指した事態にあるのかも知れない。

さつきの記憶に刻まれた恐ろしい光景。片手に生首を持った男が、志貴とさつきに襲い掛かってくるのだ。まるで悪夢のような現実で、現実味のない瞬間であった。

しかし、あれは紛れもなく起こった現実。恐ろしくてたまらない刹那がさつきを締め上げた。恐怖に囚われさつきは体が動かなくなり、呼吸すらも出来ない緊張状態に陥った。

あの時、さつきは確かにナニカの終わりを見た。それが果たして自身の生命活動なのか、それとも友人や家族、あるいは学校の人と会うことなのか。もしかしたら、遠野志貴と一緒に歩くことが二度とない未来なのかもしれない。

でも、さつきは今もこうして学校への道のりを歩き、隣には信じられないことに遠野志貴がいる。そしてお喋りをしながら登校している。

こんな未来、夢にまで見た奇跡の一瞬をさつきは味わっている。その原因はわかっている。

遠野志貴が、さつきを守ってくれたのだ。襲い掛かる藍色に対し、遠野志貴はさつきを背に立ちふさがり守ってくれたのだ。あの時は互いに一杯一杯でどうすればいいのかもわからなかったけれど、でも、あの時二人は一緒にいた。

「……あ、そういえば」

「ん？どうしたの弓塚さん」

さつきは思い出した。すっかり忘れていた。

自分は守られたきりで、碌に感謝の言葉ひとつ返していないことを。

「あのね、遠野くん、私あの時」

「……何、弓塚さん？」

だからお礼を言おうとした。守ってくれたのだから、御礼をする事は当然だと思う。でも？あの時？というフレーズに、遠野志貴はどこか影をさしたようにその顔を強ばらせた。

「あの、ね。その、私、あの時の事を遠野くんに」

「いいんだ、弓塚さん」

お礼がしたい。後もう少しで言えそうな言葉を遮り遠野志貴はかぶりを振って言う。

「あの時の事は、忘れよう。……忘れたほうが良い」
「でも」

「あんな事、思い出しちゃいけない。思い出せばきつと、弓塚さんの傷になるから、駄目だよ。……だから、忘れたほうがいいんだ」
「……でもっ」

真摯に、どこか訴えるように志貴は言う。でも、それではさつき
のこの気持ちはどうなるのだ。感謝の言葉も、謝罪の言葉も受け入
れてくれない。こんな寂しい気持ちをさつきは知らなかった。

それに、アレを忘れてしまえば、今はどうなる。

こうやって二人で歩くのはさつきの心理状態が未だ不安定な事も
ある。不安だから誰かと一緒にいたい。それは悪い事だろうか。そ
して、それが切っ掛けで今こうして歩いているのだ。アレを忘れる
とは、今をなかったことに等しいのではないかとさつきは思う。だ
から、寂しくて堪らなくなる。

「遠野くん、私」

「やっと着いたね」

気付けば、もう学校に二人はたどり着いていた。校門を抜ければ
他の生徒の話し声と、早朝練習を行っている生徒達の勇みよい掛け
声が聞こえる。つまり二人で歩く時間はもう終わり。

「……遠野くん」

「ほら、そろそろ予鈴が鳴るよ。俺は何より、有彦よりも遅いのが
我慢ならないんだ」

最近あいつ早いからなあ、と何処か白々しく言いながら志貴は歩
いていく。もうあの話題に触れたくないのだろう。確かに、あれは
嫌な事だ。気分も優れないし、どうにも落ち着かない。そのお陰で
学校も昨日は休みを取った。

でも、忘れてはいけない。遠野志貴は心配してくれている。それ
はとても嬉しい。でも、アレを忘れる事はさつきにとって良くない
ことなのだ。今を否定しないために。錯覚でないならば、遠野志貴

との距離が近づいた事に。

絶対にお礼を言おう。そんな事をさつきは思った。さっちゃんは諦めないのである。

そして。

「遠野くん！」先行していく志貴に声をかける。「今日放課後空いてるっ?」

さつきは勇気を出す事を決心した。

「えっと、多分空いてるけど……」

訝しげに志貴は振り返りさつきと対面する。正面に見える志貴の顔つきは幼さを残しながらも安らかな印象で、さつきはそれも好きだった。

「じゃあ、絶対空けててね！約束だよ！」

それが何を意味しているのかを充分理解し、さつきは約束を紡ぐ。

きっとその顔はいつもよりずっと赤い。

喧騒と静寂が入り混じる。でも、決して無音ではない。それを心地よいと感じながら改めて志貴は自分が学校にいるのだと自身のイスに腰掛け、ぼんやりと授業を聞いていた。

一定のリズムで黒板を叩くチヨークの音や、内容に対する説明を口にする教師の澀刺とした立ち姿。そして視界にはそれをそれぞれに受ける生徒の姿もある。その中にいる中の一人は早々に寝入ってしまったっている。授業開始と同時に机に突っ伏したその魂胆に呆れながらも、それが有彦らしいと内心苦笑した。

そしてもう一箇所の机ではさつきが真剣な表情で授業を聞きながら、しきりにノートへとシャーペンを走らせている。恐らく授業内容を書き写しているのだろうが、さつき一人ではなく殆どの生徒が行っている事なのだから珍しい事ではない。しかし、さつきほどの熱心さでノートを取っている生徒も珍しい。そして視線に気付いたのか、ふとさつきは志貴の方に顔を向け、始め驚いた表情を見せながらも微笑みを浮かべて小さく手を振った。それにこちらも手を振り替えて、再びぼんやりと授業を聞き流していく。

何も変わらない。

実に平凡でありふれた光景の中に自分はいる。皆それぞれに時間を過ごしながらも授業をこなしていく。そんな時間がもう昼休みに差し掛かるうとしていた。

今朝は大変だった。昨日学校を休み、一日ぶりに登校してみると教室は随分と懐かしいような気がした。そしてそれはあの密度の濃い夜のせいに違いないと、志貴は嫌な記憶を思い出したことを後悔しながら自分の机に座ると同時に、有彦がニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべながら近づき、さつきと登校してきたことに茶々を入れ、更には昨日二人とも学校を休んでいた事からどこまで進んだのだと実に訳のわからないことをほざくものだから、意趣返しにとチヨークスリパーをお見舞いしてやった。そしてふと気付けばさつきも友達にからかわれていて顔を真っ赤にしていた。そこでふとさつきと

目が合えば、彼女は慌ててしまいそれすらも友人にからかわれたのであった。

そして志貴はそんなアワアワとしているさつきの姿を不思議に思いつながら、どこか可愛いと自然に思っていた。

何も変わらない。

追求と悪ふざけの応酬をやり過ぎて、今日の授業は始まった。昨日休んだ事で授業の内容は少々取っ付き難いような気もするが、大体は理解できるしこのような事態にも慣れていく。元から体調は芳しくないのだから、倒れて授業を受けることが出来なかったことなどざらで、特に珍しくもない事ではあった。そもそも熱心に授業を受けるほど勉強を好んでいるわけでも無し、そこらにいる生徒達と同じように興味も無く授業を消化していく。まるでいつも通りだ。だから、何も変わらない。

感慨も深く、志貴は今教室にいる。実に変容もなき時間である。これが良いと、以前ならば考えもしなかった事を思う。いや、きつと内心そう思っていたのだ。でも、それを意識して思うことは今までに無かったのではないだろうか。あつたとしても、ほんの僅かな時間で、気付けば何処かへと消えてしまうような感慨だ。それは軽く、質量すらないような埃の塊に過ぎなかった。散り逝く花びらのような儂さも無い、乾いた埃だ。

改めて思うのだ。こんな時間、こんな日々を決して悪くはないと寧ろ良いと。

手前は、戻れない。

折角教室にいるのに、あの声が聞こえる。

騒がしい。喧しい。

軋む金属音が脳裏を侵して止まない。

歪な月に照らされ、闇を纏う藍色の亡霊と、朽ち果てた刃を研ぎ澄ます悪意の刀剣。

どれだけ時間が経とうとも、あの夜の出来事は志貴の中から消え去らないのである。腐敗の臭いが立ち込める夜を越え、清廉たる朝を迎えて日向の匂いがする昼に差し掛かるうとも。ギリギリ、ギリギリと捻りこむようにあの金属音は鼓膜を震わせる。

俺達と同じだ。

五月蠅い、黙れ。お前の声なんて聞きたくないんだ。

自分はここにいる。自分はここにいる。こんな何気ない場所で、いつものように過ごしている。それで良い。それが良い。これ以上や、これ以外なんて、きつと望むべくも無い。

それでも聞こえる。聞こえる。あの苛立たしいまでに嘔れた不快な声が。

同じ地獄の底をのた打ち回る腐った亡者よ。

ベキっ!!!

「……遠野？どうした」

教師の声に意識が戻る。

気付けば、掌が硬直していた。そして、力の限りに握りしめられた掌の中にあるシャーペンが無残にも拉げていた。幾つかの小さな欠片を零して、最早真っ二つな姿であった。

皆の視線を感じて少々気まずいが、そうも言っていられない。中には胡乱な有彦の視線や、さつきの心配そうな表情が視界の端にあった。

「いえ、……大丈夫です」

そう言いながら残骸を掻き集めた。もうこれは使い物にならないだろう。いつか補充をしなければならぬ。無理をして使うつもりも無い。

「そうか、気分が良くなかったら言えよな。どうもしないけど」

それは教師としてどうなんだろうかと、と口にする事も無く志貴は苦笑気味に誤魔化すのであった。

そして時刻は四時限目を終えて、昼休みになろうとしていた。

昼食はあまり食欲が沸かなかつた。元から食が太い訳でもないが、最近特に胃袋が縮小しているように思える。それでも何か食べてしまおうと食堂で合流したシエルにカレーうどんをお勧めされた。病

み上がりの志貴を考慮して消化の良い麺類を選択したのだろう、うどん用に辛味を抑え、まるみを増したカレーの仄かなエスニックな香りが何とも言えない。どろりとしたカレーは実に胃への負担が大きい。少々辛い昼食となったが勧めた人物が側にいる手前、そんな事はおくびにも言えぬ志貴であった。

「んーっ、今日もなかなか美味しいです。このスパイスがまたたまりません！遠野くんはどうです？」

「そうですね、まあ、美味しいと思いますよ」

目前でシエルは志貴が食しているのと同じカレーうどんを美味しく口に食べている。しかしなんだろうか、至福の表情とはきつとこんな表情に違いない。感情は瞳から始まるが、シエルのそれは顔を構成する細胞の一つ一つから幸せオーラを放射しているようだった。しかし、以前もカレーを食べていた気もするが、カレーが好きなのだろうか。もしかして毎日食べているのかもしれない。そう思い、苦笑してまさかと今しがた去来した考えを否定した。毎日カレーなんてインド人じゃあるまいに。

「ですよー！やっぱりカレーはうどんにしても美味しいものです」

「ハハ、確かに、そうですね」

しかし、本当に美味そうに食べるものだ、と志貴はぼんやりとした頭で思った。

「そんなにすか？俺もカレーうどんにすりゃよかったかなー」

「お前は取り合えずその口の周りについてる米をなんとかしろ」

有彦はシエルの隣に座り、牛丼をかき込んでいる。その食べっぷりは実に豪快で潔いが食い意地の張っているようにすら見える。丼

はこれぐらいがちょうど良いのだろうか。

でも。

「あれ、そう言えば弓塚さんは」

このテーブル席には志貴と有彦、更にはシエルしかない。最近共にいることが多かったさつきの姿は見えない。しかし有彦は大きな身振りで肩を竦めた。

「ああ、あいつは何か作戦会議だそうだ。他のやつらと喰ってんじやね?」

「作戦会議って?」

「……さあな、ま、後の楽しみってことだろ。もしかしたら今日かもしれんが」

「?」

「……弓塚さんも、これでは浮かばれませんね」

二人してやれやれとでも言いそうである。しかし志貴にはサツパリ分らないことであるので邪険に扱われたかと睨むつける事しか出来ない。そんな志貴を見て有彦は何を思ったかその顔を厭らしくニタニタと歪ませて、舐めるような視線を寄越すのであった。

「しっかし、遠野。お前、アレだろ?」

「……何がだよ」

「家で寝ゲロぶちまけたんだろ?」

「つぶー!!」

いきなり事実を言われ、志貴は先ほどまで飲み込んでいる途中だったうどんを思わず吐きそうになった。もし吐いていたら仇名は食

堂のゲロリッティになっただろう。

「お、お前なんで知ってるんだよっ!」

「おお、そりやお前。お前んちに電話したからに決まってんだろっ
が」

「……は？」

何でそんな事を有彦が。そんな疑問を解決したのは有彦の横で苦笑いをしていたシエルだった。

「昨日遠野くんがお休みと聞いたので、私たちも心配したんです。だから失礼ながら遠野くんのお電話をかけたのですよ」

「そしたら良い感じの女の人が出て、遠野が寝ゲロしたって言うてたんだよ。しかし、遠野あの人誰だ？何かすげえ美人な予感がするぜ」

「……琥珀さん。あの人ってば」

その時を思い出したのだろう、有彦は何やら不気味な笑みを浮かべて志貴に迫ってくる。しかし志貴にはわざわざ寝ゲロをばらす人間はただひとりしか思いつかなかった。そしてそれは正解なのだ。ある意味琥珀に対する信頼なのだろうか。

「でも、遠野くん。本当に大丈夫なんですか？無理は体によくありませんよ？」

カレーうどんを食べ終わり、シエルは心配そうな表情を湛えて志貴を覗く。

「ええ、もう平気です。実は昨日一日中寝てたんで、もうすっかり
「なんだ、俺らが真面目に授業受けてる間にお前は情眼を貪ってた

のか」

「……少なくとも、お前は授業受けてないだろ」

今しがたまで殆ど寝ていた有彦が言えることではない。

「それにしても一体どうしたんでしょうね、前々から調子は良くなかったんですか？」

「……」

脳裏を去来する、化け物。蒼い瞳、片腕の和装。

吐き気を催す金属の悲鳴に、腐った風。歪んだ月。

「……元から、あんまり体が強い方じゃなくて、多分家にもまだ慣れてないから、貧血とかも祟って。……思い当たる事は多いですけど、正確な理由までは……」

記憶を払拭する。思い出しても意味が無い。忘れてしまえばいい。

「ま、その全部が合わさって、て事かもしれないねえしな」

そこまで気にするようでもなく、有彦は軽く言う。志貴としてもそれぐらいのニュアンスで充分で、これ以上あの出来事を引き摺りたくもない。だからこの話題はもうお終いだ。

『 巷を騒がす吸血鬼事件の続報です。また新たな犠牲者が出たようです。今日未明、 から人が倒れていると通報があり、警察が駆けつけたところ女性が首もとから血を流しており、病院に搬送されましたが既に死亡しております。調査によると 』

そして耳に入るのは点けっ放しのテレビのアナウンス。その内容に顔を顰めながら、そして連鎖するように思い出される気持ちの悪い夜の終わりを拭うように、残ったうどんを啜る。すると勢い良く啜られたうどんの音にテレビの音は聞こえなくなって、気にもしなくなるだろう。

しかし、そんな志貴をシエルは含んだような表情で見続けていたのである。

時間を無為に消化する。時は金なりと時間は実に貴重な財産であり、時間はどんな生命であろうとも平等に与えられている。それを無駄に生きるのだから何とも贅沢な事ではないだろうか。無論やらなければいけないことは多々とある。しかし、そこに必死な感情は入り込まない。それはそこまで力を入れるような事ではないという楽観もあるだろうが、それ以上に必死になる必要が無いのである。

決してルーチンワークでこなしている訳ではないが、必死とは今後の展開に関わる事である。人生や運命、大げさに言えば生死が関わるような事である。ならば学校で必死になるといえば、期末テストや進路関係だろうか。実は進学校であるこの高校では大学受験に向けて動いている生徒中にもいる。ならば期末テストなんかも死活問題、なるほど必死になる事も頷ける。まだ十台の半ばを越えたばかりの子供が自分の将来に向けて動いているという事実には頭も上がらぬ思いだ。そう思うが、そんな早くから自分の人生を決めていいのだろうかと思わなくも無いのである。それは人それぞれだろうが、志貴はなんとなしにそう思うのだ。別に将来を憂う事も、はたまた何も考えていないわけでもないが、今を大切に安穩と生きていく志貴にとっては、未来を選択するとはどうにも考えにくい事だ。

あつた。

「夕方、か」

時は放課後である。授業を終えてクラスメートは各々に消えていった。気付けば有彦やさつきもいない。誰もいない教室はどこか物悲しく広がっている。誰も座っていないイスや、整然と並立された机。少々白っぽくある黒板。人が今までいたからなのか、温もりを失った教室はさながら秋に見つかる蝉の抜け殻のようだった。

今朝さつきは放課後の時間を空けたいと欲しいと言っていた。約束だと、志貴もまたそれを了承していた。その用件が果たして何なのか、それは志貴にはまるで分からない。クラスでも人気の高いさつきに放課後を空けたいしてほしいと言われ、それは邪推しても仕方無いことなのかも知れないが、志貴はそれはないだろうと打ち消す。

でも。

「弓塚さん……」

何かを思い描こうとする己に志貴は戸惑いを覚えていた。そんなありえない事を考えて一体どうしたというのだろう。しかし約束を交わした本人が何時の間にか消えているのである。それすらもすかさされた様な気がして、残念だと思っている。不思議だ、不思議だ。きつとそう思っているのは志貴の心理状態が落ち込んでいるからに違いなかった。

教室には斜陽が雪崩れていた。眩しいくらいに赤い夕暮れはいつそ血のようですらある。鮮烈に赤い太陽の光はそうとしか例えよう

がないくらいに輝いていて、これから夜が訪れるとは到底思えない程だった。

「……でも」

夜は必ず訪れる。志貴が夜を越え朝を迎えたように、昼を過ぎれば夜が静かに舞い降りる。夜は苦手だ。以前までそうは思っていなかったが、最近夜には良くないことが起こる。

「馬鹿馬鹿しいな」

気にしすぎだ。気にしすぎるから嫌な事が起こるのだ。きっと、そうに決まっている。

「さつさと帰るか」

嫌なことからは避けるに限る。さつきとの約束は結局どうなったのかは分からないが、もう帰ったほうが良いのではないだろうか。夜なんてどこにいたって迎えるものであるが、しかし家で迎える夜と、その他で迎える夜には明確な差がある。確かな光源があり、家族がいるのはありがたい事なのである。

しかし、教室を出た志貴に声をかけるものが現われた。

「遠野くん」

「……シエル先輩？どうしたんです、なんか用事でもありましたか？」

青みがかった黒髪に眼鏡をかけた三年生。シエルだった。しかし志貴としては少々不思議であった。シエルは三年である。その教室は階層が異なり、二年生を締めるこの階層にいるのは少々不自然で

あるとすら言えた。

「いえ、特に用事はなかったんですけど、まだ学生さんがいないか見回りをしてたんです」

「へー、シエル先輩って何か役員なんですか？」

「そうではないんですけど、遅い時間まで学校に残っていると褒められたことはありません。最近は物騒ですから。だから遠野くんもそろそろ帰ったほうが良いですよ」

随分と殊勝な事であると素直に感心した。でも、それを改めていわれるのは少々気後れするのだが。

「とは言え」

シエルは少々茶目っ気を滲ませていた。

「実は私は部活があるのでまだ学校にいますけどね」

それは、本末転倒ではないだろうか。しかし。

「ん？先輩って部活に入ってたんですか？」

「ええ、そうです。なんなら見学に来ますか？」

何とはなしにシエルは尋ねてくるが、その瞳には邪気も感じられない。ならば本当に善意で誘ってくれているということだろうか。

正直に言ってしまうえば帰ることも出来るだろう。誘ってもらった手前断ることは確かに気が引ける。更にシエルは先輩なのだ。先輩の誘いを断るのはどうかとすら思える。と、脳内は目まぐるしく展開し、そしてちらりと時計を見た。まだ、時間としては早い。

「じゃあ、ちょっとだけ」

「はい、しっかりもてなしますから」

「茶道部なんて、この学校にあったんですね」

「ええ、……とは言っても部員は私一人だけなんですけど」

まず職員室から鍵を借り受けて茶道室へとたどり着いた。しかし離れが建てられて本格的の行う茶道の部屋という感じではなく、小さな部屋の置くに畳が敷かれた如何にも高校らしい茶道室であった。

靴を脱ぎ、とりあえず正座をしてみるが足を崩しても構わないとシエルは楽しそうに言うので、志貴は言葉に甘えて胡坐をかく事にした。志貴がそうしている合間にシエルは準備を始めており、シャコシャコと抹茶をたてている。しかし礼節や作法など細かい部分までは把握していない志貴は、色々とシエルに教えてもらい抹茶を飲む。

「どうです？感想は」

「感想ですか……」

とりあえず湯飲みを傾けながら辺りを見渡す。抹茶の苦味と香り高い風味が良い塩梅で、シエルの腕が窺い知れる。それに合わせ本格的ではないとは言え茶道の設備がある程度揃え様としている。更にここは校舎の隅にひっそりと作られているからなのか喧騒も遠く、生徒達も次第に帰宅しているからか静寂な雰囲気醸し出している。

「うん、いいところだと、思います。お茶もおいしいですし」

「そうですかっ！？よかったあ、他に部員の方がいないからそういう事を聞ける人もいなくて」

「顧問はいないんですか？」

「んーいるような、いないようになってところですよ」

「……どういことですか、それ」

明瞭な返答の無いシエルの応えに志貴としては首を傾げざるを得ない。元からこの部活に所属もしていなかった志貴の言える事ではないのかも知れないが、顧問がいない部活と言うのも珍しい。

「ま、それはさて置きです。今はお茶を楽しんで下さい、おかわりもありますので」

「はあ」志貴は曖昧に頷いた。「分かりました」

確かに茶は美味だった。抹茶は確か有間の家で呑んだ事があるが、それも数えるほど。確かおばさんがたててくれて、一緒に飲んでいたら都古は苦いと言いながらチビチビと飲んでいた気がする。味はそこまで覚えていないが、それでもこの抹茶はその中で一番美味しいのではないだろうか。茶に精通もしていない志貴が言ったところでそんな事は意味もないのかもしれないだろうが。

「そんなこと無いですよ。こうやって誰かに飲んでもらって、感想を聞かせてもらう事が重要なんです。それに、そんなに肩筋張らなくても平気ですよ。お茶は楽しむものなんですから」

茶道に限らず、昇華された文化とは一般的には堅苦しいものと認識されがちだが、その本質とは瞬間を楽しむためのものとして民衆に親しまれてきたものである。つまり大元を鑑みれば、文化とは娯楽なのだ。それは茶も同じ。ならばそこまで気にする事もなく気軽に楽しんだほうが良い、とシエルは言う。

「……そう言ってくれるとありがたいです」

志貴の言葉を聞き入れ、シエルは朗らかに笑った。

その上品とも言えるような顔つきでちょっと幼く笑う表情は、年上の女性でありながら親しみを感じられた。特に部活や委員会にも参加していない志貴にとっては縦の関係と言うものは構築する機会もない事であり、中高と考えれば実に稀有な事である。故に志貴としては慣れない年上の先輩を相手にするというのは肩肘が張ると言うか身構えざるを得ない事であった。

そして、こうしてシエルと二人っきりの状況になるといのは珍しいことでないだろうかと志貴は気付く。いつもならばここに有彦やさつきがいたはずだが、志貴の記憶を漁ってもシエルとしかいえないというのは始めてな事であった。

「そうそう、そう言えばなんです。遠野くんに聞きたいことがあります。」

抹茶は飲み干したのか、ことりと傍らに空となった器をおもむるに置いて、シエルは志貴を見つめた。其処に気負いは無く、実に何気ないような雰囲気です。シエルは言う。

「遠野くん、昨日は学校をお休みしたんですね？」

「ええ、まあ。」

それは昼に話した。だったら、とシエルは前置きし。

「原因は何だったんです？」

それは。

「詳しくは……俺にも良くわかりません。」

言える筈が無い。正確には言っても意味が無いのだ。何故なら到底信じられる話ではないのである。夢に始まり、歪な月の吊るされた夜の虐殺を。だから誤魔化すしかない。

「本当に？」

「……」

しかし、そこでシエルはずいっと身を寄せて志貴の瞳を覗き見た。窓から灯される茜色の光がシエルを包み、その表情を打ち消していく。深遠から覗くその瞳は静寂な夜に広がる湖面を思わず。魚も鳥も眠りにつき、水面も動かぬ湖は生命の気配を感じさせない。深く底を見せないその色は怪しく揺らめいて、志貴を捕らえ吸い込んでいく。

「……実は、思い当たる事はあるんです」

気付けばその口は、舌は動いていた。舌先は滑らかに言葉を紡いでいく。

まるで、導かれているかのように。

「俺、変な奴に会ったんです。……凄く不気味で、薄気味悪い奴なんですけど、そいつが現われてから変な夢を良く見るようになって……俺はそいつに殺されるんです。反撃はするんですけど、でも殺されるんです。……そのお陰で、あんまり体も良くないっていうか」

一度口を開いてしまえば、もう止まらなかつた。不安、憤り、不快感が理不尽を抱いて噴出していく。何故夢で殺されたのか。そして気味の悪い夢を見なければならぬのか。夢とはストレスを発散させるために脳が睡眠時に構築する幻の類である。しかし、一連の夢を見始めて志貴の精神は確実に衰弱していた。

シエルは真摯な表情で志貴の話を聞いている。そこに疑念はなく、また不信を抱いているようにも見えない。こんな莫迦らしい話を聞いてもらいながらも、志貴はどこか誰かに聞いてもらいたかったのだろう、と自身に当たりをつけた。

「それで、俺そいつとまた会ってしまったって」

「……学校を休んだのに、ですか？」

「はい。……我ながら莫迦な事をしたって思ってます。でも、あの時どうしても夢をなんとかしたくて……夢に出た場所に行つて。そしたら、そいつと……。……ねえ、先輩。なんで俺は、あんな夢を見なければいけないんでしょうか」

それは何処か懇願の響きに似ていた。せめて理由が欲しかった。

理由がわかっていたならば、その理由を見つけて叩き潰す事もできただろう。志貴はもうあの夢に囚われたくないだけだった。夢見悪く、負担になるだけの夢など誰が好んで見るだろう。

それとも、夢の起源たるあの藍色を憎めばよかつたのだろうか。

不気味に佇み、閃光の如くに闇を散らす？朔？を。金属が切れるを走らせるような声音で嘲るあの骨喰を。

確かに理不尽や恐怖を感じる。少なくとも志貴がこのように憔悴する要因の一端はあの存在にあつたに違いない。でも、それを憎むのはどうにも実感が遠い。直接的に危害を加えられていないからだろうか。しかし、志貴は一度襲われ、一度見捨てられた。それを考えれば怒りを感じても良い筈なのに。

「夢とは」

シエルは宥めるように言った。

「ひとつの暗示です」

「暗示？」

不可解な言葉に疑問を抱く。

「人の夢にはその日の出来事を一度頭の中で整理する機能があります。赤ちゃんも夢を見ることで記憶を整頓するんですけど、その他にも夢には機能があります。遠野くん、予知夢はご存知ですか？」

「……夢で先の事を知る、ってやつですか」

夢は記憶の整理以外に、未来を予想する事も出来る。それが予知夢と呼ばれる夢だ。

「はい、遠野くんは物知りですね。人の体は眠っていても活動をしているものですが、脳もそれは同じです。確かにお休みはしてませんが、止まってはいません。それはそうですね、脳が止まったら？普通？は死んでしまう。でも脳は眠りながら動いているんです。それは記憶整合のためだったり、体の調子を整えるためだったり。その能力の中の一つに未来への予想もあります。だから予知夢は脳の働きによるもの、なんですけど時たまに予想という言葉では説明のつかない未来への展開を見せることがあります。それが暗示です」

「……」
「暗示は未来だけではなく、もっと具体的なモノを見通します。一番に上げられるのは危険回避肉体が危機を予見して、それを夢として見せるんです」

人は科学的に言われるのは先祖は猿だったらしく、暗示とはその名残である。本能は夢という機能を働かせて直感的に危険を予測さ

せるのだ。この説明のつかない予測を人は本能と呼び、また第六感と呼んだ。

「だから気になるとは言え、それに近づく事はあまり良い事ではありません。そういうのは無視するのが一番です」

「……」

「近づいては、いけないんです」

強く、シエルは言った。確かに気になったとは言え、その原因を探ろうと外出したのは間違いであった。虎穴にいらさずんば虎子を得ずとは、得るものがあると確定している時点での話しである。志貴は何も得なかった。何かを得ることも出来ず、あやふやな勘を頼りに危険予測もせず、誘われるままにあの場所へとたどり着いた。痛感の極みである。

故にシエルの言葉は最もな事だった。折角夢で危険を知らせたというのに自らそれに接近するなど命知らずを通り越した愚者である。

「どうですか？少しは、楽になりましたか？」

「……はい。話を聞いてくれてありがとう、先輩。ちょっと

と楽になった気がします」

「それはよかったです。後輩の悩みを聞くのも先輩としての勤めですしね」

だからよかった、とシエルは笑んだ。

しかし、志貴は話を聞いてくれるだけ嬉しかった。受け入れたいと願っていたわけではないが、それでも誰かに話してみるとそれだけで心が軽くなるような気がしたのである。そして思うのである。きつと幽霊を見たと言っても誰にも信じてくれなかったさつきも同

じ気持ちだったのだろう、と。

そして志貴の脳裏にはさつきの姿が映し出されて、そこで思い切り良く約束と言う言葉を発するのだった。

「でも、遠野くん。なんでこんな時間まで学校に？」

そういえば、とシエルは聞く。

「……実は弓塚さんと放課後に会う約束をしていたんですけど、どうやらすっぱかされたみたいで」

頬をかきながら志貴は苦笑した。

振り返ればわかるが、期待するだけ阿呆を見た結果という事なのだろう。そして何を期待していたのかすら未だ志貴は分かっていなかったのだから、ただの笑い話である。

しかし、シエルは笑うでも無く溜め息を漏らすのだった。

「はあ……。遠野くん、弓塚さんは別に約束を破るつもりはありません」

「……なんでシエル先輩がそんな事分かるんです？」

「さあ、なんででしょうね。ただ女の子には色々と準備が必要なんですよ、遠野くんも其処の所わかっていなきゃ駄目ですよ」

「……そうですか」

なんで行き成り説教を受けなければならないのだろう。

しかし、シエルの言ではさつきは未だ約束を守るつもりらしい。何故シエルが知っているのかは不明だが、もしかしたら有彦とさつ

きが早々にいなくなつた事と何か関係が在るのかもしれない。
それが分かつただけでも。

「遠野くん、嬉しそうですね」
「え？」

指摘され頬に触れる。指先には、僅かに緩んだ口元の感触があつた。確かに、志貴は滲むように嬉しさを噛み締めている。ただ、それを自覚していなかった。

でも何に対する嬉しみのだろうか、内心首を傾げた。

「本当に、弓塚さんが苦勞するのわかりますね。……彼女にも問題はあるのでしようけど、鈍いと言つか初心と言いますか、二人共本当に分かつてるんですか遠野くん？こういうのは切っ掛けが大事なんですから、それに気付いてあげなければあまりに哀想過ぎます。男の子だから何て言い訳は許されせんっ」

「は、はあ……」

「少々説教じみちゃいましたね……そろそろ時間も頃合でしょう。有彦くんも何とかしたと思いますし」

「……有彦？」

「あ、遠野くんは知らなくてもいいことですよ」

シエルの視線が窓へと移り、つられる様に志貴は顔を窓へと向ける。

光は未だ明るいが、その空は落ち着きを取り戻したように眩しさは無くなっていた。その茜色は遠くから夜の気配を見せているが、それでも充分に明るい夕暮れであった。

「ああ、そつだ。遠野くん、悩める男の子に私から一つプレゼントです」

シエルは唐突に、今しがた思いついたように掌を反対の拳でポンと叩き、その懐から一つ、小さな何かを手渡してきた。それは。

「指輪、ですか」

それは古ぼけた指輪だった。金属で作られた指輪で、使い込まれていたのかその表面は削れており、色合いもくすんでいる。良く言えば年代ものに見える装飾品である。

「はい。元は私のなんですけど、何とこれを身につけているだけで邪かつ悪いものを追い払う効果が!!」

「……はあ、ありがとうございます」

実に胡散臭かった。一体どういってもりなのかわからない。しかし、恐らく好意であろうシエルの贈り物を先ほど相談を受けた手前、突っ撥ねる事など志貴に出来ない事だった。

「そろそろ弓塚さんが待ってます。彼女の気持ちにしっかり受け止めて下さいね」

「弓塚さんの気持ちって?」

「それは自分で考えましょう。幾らお節介でも、それは私の言う事ではないので」

シエルはニパニパと笑いながら、退出させようと志貴を促す。志貴はシエルが何を言いたいのがよく分からずに、そのまま疑問を抱きながら廊下へと出て行った。

廊下の窓から見える柔らかな茜色の空には次第に夜の色が染み渡っていく。

それは温かさを飲み込んでいくような藍色の空で、まるで十二力の始まりと終わりを告げているかのようだった。

「ハ　、ハ　、ハ　」

彼は夜が好きだった。真っ黒な夜が好きだった。だから夕方が嫌いだった。

狭間の時間とも言うべきその半端な時間はじわじわとまどろむ様な遅さで変化していく。しかも茜色が消えても完全な黒になるのは更に時間が掛かるのである。早く消えてしまえばいい、と幾度願っただろう。そしてその度に願いは叶わず彼は歯噛みした。何故夕暮れはあんなにも目障りなのだ、その消滅を願った。

だが、それと同時に彼は知っていた。

夜の来訪を心待ちにする故に睨み続けた赤き夕暮れ。

地平の彼方へと沈んでいく瞬間に、まるで迸る炎のように輝くその斜陽。

嗚呼、なんて夕陽とは綺麗なのだろう、と。

「ハ　、ハ　、ハ、ハ　」

あれはいつの頃だったか、もう覚えていない。彼の記憶は瓦解しており、幽閉される以前の記憶だけが幾つも浮かんでは消えていく。

記憶は彼の最後の財産だった。何もかもを失い、奪われた彼にとつて脳の中にある美しき思い出だけが彼を癒し、慰め、そして苛立たせる。

だからしがみついていた。時を経る事で次第に薄れていく思い出を無くしたくなくて、彼は必死に記憶を日々思い出していた。変化無く、暗い地面の底にあつたその座敷牢では彼を世話する人間が一人しか訪れず、それ以外に人はいない。

そんな牢に永い間閉じ込められたモノに何が起こるか。

それは精神の死滅であつた。

まるで変わりの無い薄暗がりの牢獄。湿気によってこびり付いた黴の臭い。光の差さない密室。そして彼以外に誰もいない、その孤独。

彼の精神は死に掛けていた。

いや、もしかしたら彼は既に死んでいるのかもしれない。

だから、彼が外にいて、夕闇を越える夜のために待っているこの時間は、彼が死んで見ている末期の夢なのかもしれない。

そう思えるほど彼が牢獄に閉じ込められていた時間は、あまりに長かった。

永く、彼を腐らせ、苦しめた。

「ハ、ハハ　　、ハ　　。……くひっ、かあ」

頭上を覆う葉の天蓋から差し込む夕陽の光が忌々しく、舌打ちをした。だが、それは光だけではなく、彼の腹をさらしのように巻いた包帯の脇腹から滲む血のせいもあった。

幾程経つても出血が止まらない。裂かれたとは言え、彼の特性を考えるのならば、あまりにおかしな事。既に治って瘡蓋が出来ていても良いだろう。

だが、現に脇腹は完治するどころか、今もなお出血している。

だから、血が足りない。

運搬する心臓を失い、それは更に顕著だった。

「はは、は……俺はこの様、か。俺は、こんな様だったか」

低く、自嘲しながらその傷跡を抑えた。僅かに伝わるその湿り気は彼の命を消費している事を明らかにさせている。熱を持っているわけでもないのに熱いと感じるのは、果たして傷が回復しようとしているからなのか、それとも。

そして。

「っく　　！」

ぐらりと意識が揺れて、頭痛が始まる。内側から張裂けそうな頭

の痛みはまるで衰えを知らず、彼を苛んで止まなかった。

「畜生……耐える、そう耐えるんだ」

己へと言い聞かせながら、彼は夕暮れが治まるその時を待ち侘びていた。しかし、それでも無くならない痛みは、彼の精神を衰えさせ、それを彼は耐えていた。

「あと、少し。……あと、少しなんだよ。だから……まだ」

七夜の首を取るその瞬間。その命を潰すその瞬間までは耐えなければならぬ。

必ずや、七夜朔を殺す。

そのためには心臓が必要だった。心臓がなければ出血により彼の肉体が持たない。

それが彼の敗北条件だった。そして勝利条件は七夜朔を殺し、秋葉を守ること。その為ならば、如何様な手段でも進んで使おう。彼にとってそれ以外は瑣末でしか無く、価値も無い。ならば躊躇う必要などどこにある。

そのために心臓を調達する。それこそが、彼の。

「鳴　　呼」

僅かに、人の気配を感じた。それこそ彼の待ち侘びた犠牲者であった。痛む肉体を押さえ込んで、耳を澄まし気配を研げば人数は二人だと分かった。もう力も朽ち果てようとしていた筋肉を無理に動

かして、彼は死角である草葉の陰から、その二人を見た。

「
「

何かを話している。それが何なのかは分からないが、そもそもそんなものに興味は無い。

何故なら彼らは人が言うところの憐れな犠牲者で、そして憐れな犠牲者以上の価値など存在しなかった。

そして彼は臆気ながらにどちらが良いかを吟味した。

一人は男。眼鏡をかけている以外に特徴は見えない。

一人は女。ツーサイドに栗色の髪を纏めている。

考える事、数瞬。次の瞬きの内には既に決めていた。

「
つくか ツー!!」

震え始めた体を引き絞り、息を潜める事も無く彼は襲い掛かる。筋肉は嬉しいことに彼の命令を受け入れてくれた。軋む関節と圧縮された筋肉。脇腹の鋭い痛みを顔を引き攣らせ、その表情は悪鬼の如くに歪んでいた。

狙いは一人。

古来から、狩りの得物は弱いものを選ぶことが常道なのである。

「弓塚さん

っ！！！！！？」

最中、男の悲鳴が夕闇の公園を劈いた。

そして、彼の視界一杯に見える女。

その向こうにある目障りな夕陽は、憎らしいほどに綺麗だった。

第十四話 悪い夢（後書き）

ジジ

ッ！俺は自重をやめたぞ

ッ！！！！

もう構成やら文字数を気にする余裕もない六でございます。

本当は今回の話でこの章を終わらせるつもりだったのですが、流石に長過ぎると何とかストップをかけました。あれ、自重はやめたのでは？

以前から進行が遅いと指摘を幾度と受けていましたが、書かなければならない事や書きたい事がテenko盛り。もう無理矢理つめるしかねえ、と作者は暴走しております。それでも進まぬこの内容にプロット。誰か助けて下さい。キャラ同士の遣り取りも苦手ですし、もうどうしようもねえですぜ。

もう全く朔が登場しないのは展開的に諦めました。もうオリ主を含んだダブル主人公と化しております。志貴すげえ主人公してます。物語的に朔がメインとなるのは後半かな。

今回のテーマは『日常に侵食する非日常』という所でしょうか。ゲストにはちらりとアーパーな吸血姫も登場。彼女遠野ルートの場合こんな出番しかありませんね。

さて、志貴とさっちゃんはどうなってしまうのか。本編は何処に向かってしまうのか。

乞うご期待。

あとアンケートはまだ募集しております。

どじどじどじど募集下さい。お待ちしております。

第十五話 悪い夢（前書き）

夕陽に佇む彼女の姿は、何よりも尊く見えた。

第十五話 悪い夢

今どきラブレターなんて流行らない。そんなからかいとも取れる有彦の苦笑と共に告げられた制止を受けても、さつきはラブレターを書いた。

言葉にする事は恥ずかしく、そして直接返事を聞くことも怖かった彼女だから、己の気持ちを可愛らしい封筒にしたため、もし勇気が無くて本心を伝えることが出来なかつたら、それを渡すつもりだった。

彼女は己を知っていた。弁えていた、と言ってもいいだろう。

ここぞと言う時に限ってタイミングが悪く、それになけなしの勇気をへし折られる事を。

状況に甘んじる事を良しとし、己が本心を伏せ流れに身を任されるのが実に多い事を。

押しが弱い、とは良く言われたものだった。クラスでも、あるいは今までの人間関係でも控えめであり、寛容だった彼女は自ら率先して自らの意見を通すことは稀だった。それならば大人しいと言う意味で彼女は認識されていたかも知れないが、彼女は何時の間にか所謂お姉ちゃんポジションを獲得していたのである。我儘を言う事は少なく、更に何処か甘えさせてくれる雰囲気を持ち、大抵の事は甘んじて許す。そんな人柄だからさつきはクラスでも人気が高かった。

しかし、だからこそ押しの弱さはある意味で致命的だった。

何故なら彼女は何か一つのことに対し、一生懸命になる事が出来なかったのである。

何が何でも譲れぬ己の矜持というものが、それまでの彼女には無かったのである。

それが問題として浮上したことはない。何故ならそれは意識しての問題では無かった。問題にもならぬ問題になど考慮を払う必要も無かったのである。

しかし、それはあの日、寒い冬の出来事で全てが変わった。

遠野志貴。

彼との出会いが、彼女を変えた。

だから彼女は自ら退路を塞いだ。邪魔が無いように、学校の用事も全て終わらした。他の予定も全て断った。何故ならこの時は彼女の全てが込められている。いつだって恋する女の子は後の事を考えない。妥協で恋をするなんて、女としての本懐ではないだろう。

何故なら遠野志貴への想いは彼女が唯一誰にも譲ることの出来な理想いで、たったひとつの矜持なのである。

しかし心を決めて、いざその時になっても。

彼女はその言葉を、紡ぐことが出来なかった。

下駄箱に向かうとさつきがいた。校舎を飲み込む茜色に映し出され、彼女は佇むように壁へ寄りかかり、下に俯いている。その表情

は影になって志貴には見えなかった。しかし、その雰囲気は決して暗いわけではない。寧ろそれは覚悟を決めた。

「弓塚さん……」 知らず、志貴は声をかけていた。成る丈気軽に。

「やあ」

「……あ、遠野くんっ?」

声をかけられてようやく気付いたようで、さつきは反射的に顔を上げた。驚いた表情がやがて後悔か、あるいは罪悪感に塗りつぶされていく。

「あ、あのね遠野くん。私、遠野くんとの約束破るなんて、そんな事全く だから、その。……ごめんなさい」

「弓塚さん。俺は別に……」

「ううん。あやまりたいから、あやまりたいんだ」

そしてその唇からは謝罪の言葉が紡がれた。志貴の事を直視も出来ない彼女は、ひたすらに顔を伏せて謝り続ける。それをどうにかしたくて、でもどうすればいいのか志貴には分からなかった。しかし、それでも言いたいことがあった。

「いいんだよ弓塚さん。俺も気にしてないから……むしろっ」

だから、少々語気を強めて志貴は言う。

「弓塚さんが約束を守ってくれたことが、うれしい」

一度はふいにされたと思った。しかし、彼女は約束を守り、自分はこのようにさつきはここにいる。志貴はそれだけで充分だった。それ以上なんて、求めていなかった。だから嬉しかった。

「え、え？あ、えと、その」

瞳を真つ直ぐ見つめる志貴の視線に包まれて、さつきは目を白黒とさせながらも恥ずかしそうに「私も、遠野くんが来てくれて、嬉しい」と小さく呟いた。

すると沈黙が舞い降りて、二人は何も言えなくなる。

きつと何かを告げたかったのだろう。でも、その何かが分からずお互いが何かを言いかけているのが見えて、己の言葉をもっていなかった。

妙な雰囲気だった。

校舎に反響する騒々しさはまるで遠く、二人しかいないような感覚。

志貴はさつきを、さつきは志貴を見ている。それ以外は全て雑多なものとなり果てて、それ故に登場する事もない。張り詰めた空気が速さを増した鼓動のせいだろう。熱病のように熱い体はきつと夕陽のせいではない。そして、それが嫌ではなく、むしろ良い。

「……それで」包み込む気まずさを振り払うように、志貴は言った。「何の用なのかな」

「……うん。とりあえず、行かない？」暗に学校から離れよう、とさつきは言った。

校舎から一步足を踏み出すと、赤い光が二人を照らし出した。遠くに沈もうとする夕陽はますますその橙色を強めようとしていて、

その様は弾け尽きる寸前の線香花火を思わす。真つ赤な閃光と緋の明かりはこれから先、夜になろうともその輝きを脳裏へと焼き付けるようだった。

コンクリートの道を歩く二人の影は朝よりも長く伸びていく。志貴とさつきは並んで歩いて、それは時折二つに重なりそうになりながら、つかず離れずの距離を保つ。今朝よりも車の数は減っているようで、排気の臭いは気にならなかった。帰宅時間と重なり、いつもならばもう少し多く自動車は走り去っていくはずのだが、道なりに歩いて歩道橋を越えても道路の車は少なめだった。

それゆえ街の雑踏は耳にも入らず、二人の言葉少なめな会話は実際に際立って仕方が無かった。

「……弓塚さんは、さ」志貴は言った。「どこに行ってたの？」

「あの、友達に用事があった、それで……」志貴へと申し訳なさそうにさつきは言う。

「いや……だったら良いや」

自身と交わした約束を忘れていてくれたと、分かったただけでもそれで良い。そうして志貴は自身を抑えようとしたが、再び訪れるであろう沈黙の緞帳を嫌がった。

「その友達って？」

「乾くん」心臓に鉛を当てつけられた感覚を志貴は味わった。

「っ　　そう、か」

普段の志貴ならばきつと聞かなかっただろう。そしてそんな志貴に驚いたのは他でもない志貴自身だった。

何故自分はそんな事を聞こうとしたのか。それが分からず、しか

し志貴はそれを一端流した。そして何故自分が有彦の名を聞いて、重苦しい気持ちを一瞬だけでも感じなければならぬのか、と志貴は理不尽を通り越した何かを抱いた。

「あ、でも乾くんなんかどうでも良いし、何とも思っていないから！
本当だよ！？」

自分は何故、自分は何故。頭を振って、思考停止。

しかしさつきの必死な表情を見て、なんだかそんな自分すらも馬鹿らしく思う。

「む、遠野くんどうして笑ってるの？」

彼女の仕草に合わせてツインテールが揺れていく。

「んー、弓塚さんが必死だから、つい」

すると余裕が出来たのか、志貴はウィンク交じりに言う。そんな志貴の姿にからかわれたと思ったのだろう、さつきは「うー……」と呻ることしか出来なかった。ちよつと顔を赤くし頬を膨らませる姿は小動物を思わせ、愛らしくもあった。

そんな仕草に志貴は更に笑みを深めて。

愛らしい？

今自分は愛らしいと思ったか？

一瞬の思考に、志貴は愕然とした。

何故自分はさつきを愛らしいと思った？

美少女だと思う。美人と言うよりも、その姿は愛嬌があつて可愛い女性と称するのが正しいだろう。しかし、今まで愛らしいなどと考えた事はなかつたはずだ。そう思うのならば今日よりもずっと前から、そう考えていてもおかしくは無いはずなのである。それなのに今、志貴はさつきに対し始めて愛らしいと感じた。それは、何故だ。

志貴はちらりと隣をあるく弓塚の姿を見た。

丸顔で栗色の髪を二つサイドに纏めた少女。その性格や姿からクラスメイトからも人気だと聞く。更に教師からの覚えも良く、それゆえ良く気にかけてもらつているらしい。そしてそれらの全ては彼女の魅力のひとつに過ぎないのだろう。

何故なら彼女から志貴は日向の臭いを感じるからだ。柔らかな風を生み出して、陽だまりの光で包み込む日向の雰囲気、とても表現するべきだろうか。それは有彦や他のクラスメイトからは明らかに一線を越えた、さつきだけに感じる感覚だった。

だが、ならばその分だけ志貴はさつきを特別に見ていただろうか。

いや、そんな事はなかつたはずだ。志貴はさつきをそこまで特別視することは今までなかつたはずだ。さつきは良く話すクラスメイトの一人で、それ以上の事は考えなかつたはずなのだ。

それが、何時の間にか変わつている。思考の幾分かはさつきのために働いている。いつからさつきを志貴は特別に見るようになった。

胸騒ぎのような感覚が志貴を襲つた。それはもやもやとした言葉にしがたい気持ち悪さを志貴の中に生み出して、志貴を支配しようとその勢力を増していく。

「ちよつと、ここ寄っていかない、かな」さつきは指さししながら言った。

入り込んだのは良く側を通る、開けた公園だった。

この公園は滑り台やブランコなど、ある程度の遊具が備えられた公園であり、しかし公園の広さからは少々遊具の数が物足りず、認識としては自然公園と考えたほうがしっくりくる。だからなのかもしれないが、この公園はデートスポットとして少し名が知られていた。

時は随分と遅くなりつつあるゆえ、人気は疎らどころか殆ど見えず、学校帰りの小学生の姿も見えない。夕陽はいよいよ沈み往くのか、その姿は不思議な形に歪み、丸い形が押しつぶされた蜜柑のような姿へと変わり、この空から消えていく瞬間を惜しんでいた。

それでも夜はいずれ訪れる。どうしようもないほどに。

公園に入り二人は無言だった。遊具が疎らに配置された園内を連れ立つように歩いていくが、話題は上がらず、互いを探るような気配が漂っている。尤も、それは疑いからではない。それは寧ろ互いの距離を探り合う少年少女そのままであった。

志貴は二人を包む雰囲気にやきもきする。自身の内側にある言いよりの無い感覚を持て余しながらも、さつきに何か言いたかったような気がする。何か、言葉をかけてもらいたい気がする。さつきは

何を考えているかも分からない。ただその口元はもごもごと動いていて

「遠野、くん」

その声は、ある意味慄然としていたかもしれない。

さつきは立ち止まり、志貴を見つめた。

その瞳の色は不安そうに揺れているが、それでもその意志の強さは光を放つかのようで、まるで燃えているかのようだった。

きつと夕日が綺麗だったからだろう。彼女はこの時ひとつの光となったのだ。地平線の彼方へとゆっくりとその身を横たえようとする太陽の柔らかな斜陽は、さつきを優しく抱きしめて温かな陽だまりの匂いがする眩い光へと変えていったのだと、さつきの姿を見ながら志貴はそんな風に思った。

「何？弓塚さん」

なるべく心臓の鼓動を抑えようと、志貴は何故かはやる胸のうちを憎く思った。しかし、そうせざるを得ないほどに心臓が熱い。何故なら夕陽に包まれたさつきの姿は眩く、本当に綺麗だったからだ。そして、まただと思った。自分はさつきを綺麗だと思っている。まるでその姿に視線や思考を心奪われている。

何故だろう。いつからこんな、自分は

「あのね……………お礼を、言おうと思って」

「お礼？」

「うん……………あの時の事」さつきは言う。「男の人に襲われた

時のこと
「

そこで志貴はさつきが何を言いたいのか判別した。
まだ、この人は。

「弓塚さん……あの事はもう」

忘れたほうが良い。辛い記憶は思い出さない方が良い。
今朝と変わらぬその言葉。そう、告げようとして。

「良くない」さつきは遮るように言う。「私は、良くない」

「……どうして？」

「どうしてなんだろうね。……私は、あのことを全部忘れちゃうなんてきつと出来ないし、忘れたくないって。だから、私は良くないって思うんだ」

「……」志貴はもう何も言えなくなった。

「おかしい、よね。あんな事を忘れたくないなんて。……でも、あれが」

「……」

「あれがなかったら、私はこうして遠野くんの前にいなかったかもしれない。もしあの時あの事がなかったら、もし遠野くんがいなかったら、もし、誰も守ってくれなかったら。……きっと私、死んじゃってたかもしれない」

「……でも、もう終わった事なんだから」

全ては『もしも』の話し。今となっては訪れる事の無い仮定の話だ。そうして切り捨てようとする志貴の言は否と打ち破られた。

「うつん」しかし、さつきは首を振る。「それじゃ、駄目」

「駄目？」

「うん。……その『もし』がなかったから、私はここにいるの。『あの時』あそこ』で『遠野くん』が『私』を『守ってくれた』から、ここについて、ごうやって遠野くんとお喋りもできる」

「……買い被りだよ。あの時、俺は」

さつきを守った、というのは結果論に過ぎない。何故なら志貴はあの時さつきを守るためにいた訳ではないのだ。それどころか朔に呑まれないため、彼は己の意思を繋ぎとめることに必死で、あの瞬間さつきは思考を過ぎる刹那の残像に過ぎなかった。

「弓塚さんを守るうだなんて、思ってもいなかった」

「……違うよ、遠野くん。だって、私は」

「違う。本当に、違うじゃないんだ」さつきの言を遮り、志貴は力なく言う。

「……俺は、弓塚さんが言うような高尚な人間じゃない。だって俺はあの時、自分の事にいっぱいいで、弓塚さんを守るところか怖くて逃げ出そうとしてたんだ」

人が恐怖と対峙するとき、皆一様に取りえる手段とは逃走である。

恐怖の感情を拭い去ることは実に困難で、それが生命の危機と直結するならば尚更だ。生命の危機を感じ取れぬ者ほど早くその命を潰す。

ならばそれは生命にとっては正しい選択。一個の生きる存在ならば、どれだけ臆病と罵られ、例えそのために生き恥を晒しても、逃走とは真真正正しき行動なのである。

しかし、それは群集として生きる者であるならば、侮蔑される行為に等しい。なぜならば、己の保全を唯一とし大手を振って逃げる

事は、他の命を見捨てるということだった。

「だから、俺は駄目な奴なんだ。……弓塚さんの思うような奴じゃない。まるで下らない、度し難い人間なんだ……だから弓塚さん、俺は」

「違うっ！……！」

その声音は鋭く夕暮れの公園を切り裂いた。茜を纏いながら突き抜ける声音は志貴の自虐を踏み潰して、さつきは志貴を睨む。目じりに感情の高ぶりによる雫さえ乗せながら。

「遠野くんは駄目な人なんかじゃない！」

強く、強く、まるで太陽のような強さでさつきは叫ぶ。

「だって遠野くんはいつも私を助けてくれた！死ぬかもしれないけど私を救ってくれた！あの時も、あの時も！だから違う、全然違うよ！！遠野くんが駄目だったら、私はここにいない、きつと何処にもいない！！」

全てはIF。起こりうる可能性を秘めた幾重もの枝の末端である。

しかしその全ては起こらず、時は漫然と流れて志貴は生きている。さつきは生きている。それでよし。それで良いんだと、さつきは言った。

「遠野くん、覚えてる？中学二年の冬の日、私あの時も遠野くんに助けてもらってたんだよ」

「え？」

さつきは意を決した顔つきで胸に両手を翳し、恥ずかしげに横を向く。その視線の先には燃え上がるような夕陽の輝きが見えていた。

それは、三年前のとある冬の事だった。

外でなくても息が白くなるような気温の中で、当時バトミントン部の部員だった彼女は一度自身の死を予感したことがある。

放課後の事だった。

部活動が終了し後輩や先輩の少女らと共にラケット等を体育倉庫に戻しに行った時、運悪く倉庫の扉が開かなくなり、さつき達は倉庫内に閉じ込められた。扉の立て付けが悪いとは前々から聞いていたけれど、まさか閉じ込められる破目になるとは誰も予想だにできなかった。

しかし、まだその時彼女達は事態を楽観視していたのである。

きつと時間が経てば扉は元に戻る。

異変を感じた誰かが、あるいは教師が様子を見に来る。

そう考えて、彼女達はその時が来るのを待っていた。あまつさえ初めての体験に少々の興奮を抱き、その状況に楽しささえその時はまだ感じていた。

さつきもまたその一人だった。状況を楽しんではいないが、甘く見ていたのは事実であり、彼女は取り合えず後輩の面倒を見、先輩の動向を伺っていた。

そうして、刻々と時は経った。

誰も助けに来てくれない。状況が一変しない。待てど暮らせど、閉ざされた扉は沈黙していた。

そして、少女達に燻っていた不安が爆発した。

まず、動き始めたのは後輩たちだった。彼女らは一年前まで小学生だった身でもあり、このように閉じ込められる経験など皆無であり、また長い時間不安に晒される事など無かった彼女達は始め我慢していた。しかし、限界が来たのだらう。瞳から大粒の涙を流してすすり泣き始めた。さつきもそれに釣られ泣きそうになったけれど、彼女達を少しでも宥めようと、言葉を言い聞かせた。きつと助けが来る、それまで我慢だ。

だが、それを見ていた先輩が叫び声を上げながら、金属バットを一心不乱に扉へと叩きつけ始めたのを切っ掛けにその場は落ち着きを失った。先輩は自分よりも年下がいる手前、自らが何とかしようとしたのであるが、それと共に泣き始めた後輩に苛立ちを感じたのも事実。それゆえ先輩はバットを振り翳した。

ガン、ガン、ガン、ガン。

甲高い金属の悲鳴が無秩序に狭い倉庫の中へ響いた。

後輩たちはその騒音に不安を増幅させ、さらに涙を流す。そして自らが何をやっても何も変わらないと思いつた先輩も泣き始めた。

そんな中でさつきもその瞳に涙を滲ませながら、後輩達の側を離れなかった。彼女がそこまで取り乱さなかったのは、恐らく他に取

り乱した人間がいるからだろうが、しかし現状に対し絶望を感じ始めていたのも事実である。

何でこんな目に合わなくてはならないのか。何で誰も助けに来てくれないのか。

理不尽を感じながら、彼女は次第に冷たくなっていく自身の体を擦り、このまま自分は凍死するのではないかと恐怖を抱いた、まさにその時だった。

『誰がいるの？』

その声が、倉庫の外から聞こえたのである。

そして、重苦しく沈黙を守り続けた扉が、いくら動かそうとも動かなかつた目の前の扉が、動いた。

そこにいたのは、子犬を思わす眼鏡をかけた少年。

「それが遠野くん……、覚えてる遠野くん？あの時のこと」

「ああ」

記憶の一部、特に思い出にはならないが、しかしあの時のことを志貴は深く覚えていた。

中学生だった志貴が、倉庫に閉じ込められた少女達を解放したあの出来事を。

その後倉庫は問題が発覚し改装を行ったが、志貴にとってそれはどうでもいい事だった。

ただ、あの時志貴は少女たちを助けただけで、それ以上の事はしなかった。学校側から表彰を受けたわけでもないし、少女達からは感謝の言葉を幾つか貰ったが、それも気付けば忘れ去られた。志貴自身、自らが彼女達を救ったのだという自覚も持っていなかった。それゆえに誰かに言うような事もしなかった。

それでも、あの出来事を覚えている。思い出としては無く、記憶に深く。

何故ならあの時、志貴は視界に見える線をなぞって、扉の引っ掛かっている部分を裂いたのである。

志貴の目に見える線をなぞれば何でも切れてしまう。それがどのような物質で構成されようと関係なく、志貴の目は切れる部分を映し出す。それを志貴は酷く悩んでいる。それは確かに便利と受け取る事のできるものなのかもしれない。切れないものが切れるとは、悪用すればきつとあらゆる事が可能だ。

しかし志貴はそうではなかった。己が見える世界の亀裂を直視することが出来なかった。

その線を見るたびに志貴は酷い吐き気と嫌悪感を覚え、今は？先生？から貰った眼鏡をかけて線を見失っている。そうでなければ、志貴は生きていく事さえ出来なかった。

だから、あの出来事は覚えている。

何でも切れる物や生命悉く、線をなぞれば切断出来てしまう。

それを志貴は悪い事だと、使用することさえ憚る物だと思っている。

だからだろう。

そんな目を使って、志貴は誰かを救ったという事実を、彼はずっと覚えていた。

しかし、さつきがその内の一人だと、志貴は知らなかった。

「覚えてる」

それが意味する事を志貴は思い知る。

何ということだろう。

遠野志貴は、弓塚さつきを二回も救っていたなんて。

「だから、だから……そんな悲しいこと、言わないで。私は、あの時遠野くんがいなかったら、私、私……だから、遠野くんは駄目なんかじゃないんだ。……寧ろ、私の方が全然駄目だよ……いつも遠野くんに迷惑かけて」

「それは違うっ！」

反射的に、志貴は叫んだ。

「そんなこと、ないんだ。俺は弓塚さんが生きていてくれて嬉しい。あの時、弓塚さんが怪我をしたって考えるだけでもゾツとする。そ

れに俺は弓塚さんがいてくれて、本当に嬉しかったんだ……迷惑だなんて、一度も思ったこと無い！」

辛いはずなのに、憔悴しながらも心配してくれた。

電話までくれた。学校に行こう、と。あの約束を胸に、志貴はあの夜を乗り越えた。血生臭い闇の虐殺を乗り越え、歪な月が照らす化け物の殺し合いから。

だから、本当に感謝している。

どれほどその存在が彼を支えたのか、志貴は切に知っていた。

「でも」それでも、と志貴は唇を噛み締める。「俺は……」

決して穏やかではない風が一陣吹き荒ぶ。

何処かへと流れていく風は一体何を運んでいるのか。きっと風は風のまま、それ以外のものなど運んではない。それは風の意志ではない。運ばれるモノの意志。一瞬を過ぎる風にその身を、運命を任せて何処かへと飛び立っていく。

夕陽の中で二人は立ち竦んでいた。公園には二人の他に誰もおらず、影は混ざらない。そしてそれ以上の距離を詰める事は出来なかった。その距離、大また五歩ぐらいの距離を縮めるためには、二人はあまりに若かった。

しかし、その彼岸に佇む二人だからこそ、その視線はひたすらに互いを見つめていた。互いを見つめ、その瞳に映し出している。

そして沈黙を突き破るように、軽やかな笑い声が聞こえた。

「ふふ」それはさつきの口元から聞こえる。嘲りも、蔑みもない、笑い声だった。

「遠野くんって、意外に頑固なんだね」

「……それを言うなら、弓塚さんだって」

互いに譲らず、話は平行線を辿っていくのみ。妥協を知らないのではない。相手を砕こうだなんて考慮すらしていない。

ただ、言いたいことがあった。

「うん、わかった。今は、それでいいよ」さつきは言った。「遠野くんが駄目な人で、いい」

その声音に気負いは無く、志貴を揶揄する響きも聞こえない。今は別にそれでもいい。でもこれから先は、わからない。

「だから、そんな駄目な遠野くんに言うね」

例えようも無いほどに澄んだその瞳を微笑みに湛えて、彼女は言った。

今にも沈もうとしている夕陽の一瞬迸る緋色の光に包まれながら、彼女は笑った。

「私を守ってくれて、ありがとう」

私を助けてくれて、ありがとう。

私を救ってくれて、ありがとう。

万感の想いを願いのように込めながら、さつきは言った。

そして。

その姿に、志貴は分かった。

やっと、どうしようもなく巡りが悪く、鈍感だと言われ続けた遠野志貴ではあるが、ようやく己を理解した。己の内側に騒がしく居座る感情の正体を。

「 ああ、そうか」

そうだった。全ては、あの時に始まった。

あの場面から、これは始まったのだ。

この胸の高鳴りは、体の火照り。視線や、思考も全部彼女一人に向けられている。何とはなしに、彼女の仕草が気になったのも、授業中に思わず彼女を見つめたのも。約束を果たそうとしたのも、全部、全部。

嗚呼、何で気付かなかったのだろう。

自分はその時から、弓塚さつきから目が離せなかった。

「……遠野くん」

さつきの瞳は真っ直ぐに志貴を見つめている。その視線に志貴は囚われた。

その黒色の奥に輝く情熱に済まされたその瞳の色は、いよいよ最上の高まりを見せた。

そして。

「私は遠野くんが

瞬間。

朱色が、志貴の頬を濡らした。

「あ

その声は、悲しいほどに良く聞こえた。

何故なら、その声は志貴とさつきから零れた吐息にも似た声音が重なったからだだった。

それは、仕方の無い事だったのかも知れない。

きつと、誰もこんな事、望んだりはしなかった。

唐突に巻き起こる事象は人の予想を超える。

だから人は神を崇め、運命を呪い、己を憐れんだ。人の力では変えることの出来ない未来と、現在、そして起こった過去を生み出した元凶のために祈りを捧げ、憎んで尊んだ。

しかし、それは今確かに二人に起こった。

「

赤かった。吐き気がもよおすほど紅かった。そして紅いものは緋色の夕暮れに映えて更に艶かしく寒気すら覚える。茜の光に包まれ

て、それはその張りのある柔らかな表面をてらてらと光らせて、まるで生きているかのようですらあった。

「あ、ああ」

いや、それは生きている。

どくんどくん、と脈動を繰り返して動くそれはまさに生きていた。生きて、生きて、まだ生きていた。

「あ、……れ？」

不思議そうに、それを見つめたさつきの咽喉を遡り、赤い液体がその口内から吹き零れる。僅かな量でしかないそれは、しかしそれでも鮮烈に紅くその存在を示しだし。

彼女の胸元から突き出る心臓に、ぽたりと、かかった。

「弓塚さん」

つつつつ！！！！？」

絶叫が迸る。咽喉を破らんばかりに罅割れるその大音声は、きつと感情なんて宿っていなかった。あるのは測る事も出来ない衝撃と、衝動のみ。それが志貴の声を借りて鳴り、その体を動かした。

「あ、あ……」

恐ろしいまでに早く動いた志貴の体は瞬きの内に彼女の元へとたどり着いた。だがそれよりも早く彼女を貫いていた腕が引き抜かれ、彼女の心臓を抜き取っていく。突き刺されていた腕を失い。彼女の体は力無く倒れ伏せようとし、その身を志貴が抱きしめた。

遠吠えとした方が、よっぽどらしい。

だが、志貴は知らない。

この世にはこびる邪悪の限りを未だ知らずに生きてきた志貴には、度を過ぎた悪意は何よりも純粹なモノである事を、志貴は知らなかった。

「　　っ、手に入れた手に入れたぞ俺は！嗚呼、なんだなんだこんなにもあっさりと手に入るのか、これが、これが！嗚呼、嗚呼！俺は今この時に遂に手に入れたっ！！」

振り翳された心臓に残された多量の血が男を真紅に染め上げた。その男は興奮状態に鼻息も荒く、まくし立てるような叫び声と共に、恐らくはそんな言葉を吐き捨てた。それはあまりに罅割れており、声門を正常に働かせていないのは明確であった。

だが、志貴にとってはそんな事はどうでもいい。

何か良く分からないものが、そこにいる。それだけで、今は充分だった。

それ以上に、もっと大切なことがあった。

「……………ゆ、ゆみづか、さん」

志貴の腕の中にいるさつきは、何処か呆けるように志貴を見上げていた。

「　　とおの、くん？」

「い、あ、待ってて、今……………医者、を」

感情を制御できずに、意味も無いことを志貴は口走る。意味とは結果を成した後に生まれるものである。過程においても意味は生まれるかもしれないが、見え透いた事に対し意味など生まれはしない。

何故なら、志貴は既に理解してしまっていたのである。医学に対する知識が人並みでしかない志貴であろうとも、それは明確だった。

さつきの傷は、致命傷だった。

胸の中心に赤い華があつた。そこから吹き零れる鮮血の泉から、突き抜けた拍子に折られた骨の断片と、びくびくと痙攣する肺が見える。

「ゆ、ゆみづかさんっ。ああ、ああ……血、血を止めない、と……っ」

それでも認めなくて、志貴はさつきの胸の中心に空けられた風穴を塞ごうと手を翳す。しかしそれでは止血など不可能であろうと恐慌状態に陥りながらも理解し、自身が身につける制服の上を破るように脱ぎ捨てて、それを押し当てた。

硬い化学繊維で編まれた詰襟の学生服は治療用具には向いていない。柔らかな布で止血は可能だろうが、硬い材質の布は人体には不向きであると言える。それを証明するように、さつきの胸へと押し当てた群青色の制服からは夥しい量の出血が滲むように噴出してくる。志貴は自身を染め上げるさつきの血に愕然としながらもそれを止めなかった。

時間が足りない。

間に合わない。

狙って昂ぶる猛禽のように志貴の目の前へと現われた。

翻るプリーツスカート。柔らかな色合いのサマーセーター。

青っぽい黒髪は夕陽に合わさってその色合いを更に濃く、斜陽を反射する眼鏡の奥へと隠された瞳に、剣呑と鬱屈を混ぜ合わせた仄暗き闇の底を顕現させながら。

「せ、……せん、ばい」

シエルは獰猛にその両手を広げた。

その指先に挟まれた、今しがた男を刺し殺した西洋剣は両手に計六本。

さつきを抱きしめながら呆然と呟く志貴の目からは、剣を構えるシエルの後姿は翼を広げる鳥のように見えた。

何故、シエルがここにいる。

志貴の思考はもう役には立たない。目まぐるしく変化を遂げる現状に志貴の考察機能は焼ききれる寸前であった。ただそれで何かが起こり、何かが変わろうとしていく。

しかし、その背中に志貴は何故だろう。

いつかの記憶にある、遠い背中を重ね合わせた。

刃先に光が冷たく宿る。温かな夕陽を浴びて鋼の羽毛は無慈悲に輝いた。

シエルの腕がしなり、羽ばたきの如くに腕を振り下ろせば、獲物を捕らえんと鉤爪は尚も倒れ付したままの男へと撃たれた。

轟音を掻き鳴らしながら向かっていく刃は男の首を頭部を心臓を寸分違わず狙い澄まし。

肉体へと食い込もうとした刹那、男の姿は掻き消えた。

「つくー!!」

奥歯を噛み砕かんばかりにシエルは顔を歪ませ、煮え滾る苛立ちをそのままにそれを見やれば、男は先ほどまでとは違う場所に佇み

かわされた剣の弾丸が硬いアスファルトを粉碎し着弾する。

衝撃に木々が揺れて、その葉を撒き散らした。不自然な風によって揺られた木々は何処か不気味で、影が増すその夕暮れに剣が直立するその光景は死者を弔う墓場のようですらあり、それはこの先の未来を暗示させていた。

「いてえ、いてえなあ」

そして驚くべきことに、その咽喉を突き刺して前頭葉どころか大脳まで切り裂かれたはずの男は明確な意思を持って言葉を発した。だが、俯き加減に聞こえるその声は痛みに苦しむ人間のか弱き悲鳴ではない。

「はははっ！全くもって痛えじゃねか、ええ？おい!？」

笑い声。咽喉仏を砕いた刃など関係ないと言わんばかりに男は愉悅に満たされた嘲笑を浮かべた。
ごり、ごり、と鈍い音が公園の閑散とする空間に染み渡る。

男の手が、先ほどまでさつきの心臓を握りしめた掌が、殺意を持って突きたてられた鋼鉄の弾丸を握りしめ、穿る様に抜き取っていく。

「見つけましたよ、吸血鬼」

低く、地鳴りのようにシエルは言葉を呟いた。

その無理矢理戦慄と激情を押さえ込もうとして失敗した声音は、おぞましく歪んで聞こえる。しかしそんな怨嗟の如き言葉を受けても男は愉快に笑んでいた。

「おいおい、おいおいおい。俺が吸血鬼？何を言ってやがる、俺はそんな度し難い獣じゃない！血を血として食料にする低俗な俗物なんぞと同じにすんな！」

「……所詮、言葉は通じませんか。ならば吸血鬼、塵のように滅びなさいっ！！」

始めから何も期待していなかったと、シエルは蔑みの視線を隠す事もせずに殺意にねめつけた。

吠え立てられた獣の意志は閃光と共に戦闘を開始させようと、肉体を限界にまで引き絞らせる。極度に圧縮された筋肉は爆発にも似た運動エネルギーを生み出し、男の存在を抹殺せんと解放を訴えた。

だが、それは叶わない。

「　　っは！お前なんぞに興味ねえよ！」

罵倒の言葉を置き去りに、男はその身を屈めて走り出す。

その選択は対峙ではなく、逃走。

男は跳ね上がってシエルが追いかけるよりも尚早く、夕闇の紅蓮へと飛び込んだ。その先には闇より濃い藍の空。仄暗い影の底に、その背中は消え去ろうとしていた。

追跡すれば、きっとまだ間にあつ。粉塵を巻き上げながら逃走しているのである、既に公園からは遙か遠ざかっているだろう。だが過信ではなく確信をもってシエルは己の力量から相手の追跡を可能としていた。しかしその行動の選択は、シエルは自身の裏切りを肯定する事であった。

「遠野くん！！弓塚さんは!?!」

敵対生命がいなくなりシエルが慌てながら近づいてくるのを、志貴は感じた。

見たのではないし、その足音を聞いたわけでもない。彼はその感覚でもってシエルの接近と、その焦燥を感じたのである。

だが、気を払う事など到底不可能であった。何故なら志貴は体験したのだ。

その手を握りしめるさつきの指先が、次第に冷たくなっていくそ

の瞬間を。

「 ああ、とおの、くん」

「 ゆ、ゆみづかささんっ。喋っちゃ駄目だ、まだ大丈夫、大丈夫だから今は 」

そこから先の言葉が出なくて、それでも何かを言おうと志貴は震える自身を抑えることも出来ずに口を開こうとするが、さつきはゆるゆると首を振った。それは眠りにつく小鳥の身震いによく似ていた。

「 なんだか、よく見えないよ……かすんで、くらくて。……とおの、くん。どこにいるの……さむい……さむいよ 」

さつきの指先をいくら握りしめようとも、さつきには届かない。

志貴はひたすらに強く、離さないままその掌を自身の頬へと当てた。

さつきの体は次第に冷たくなっていく。生命の源である血はもうその勢いが修まりつつあった。それが流す血も無くなりつつある事だと、志貴は気付かなかった。

「 おれは、ここにいてる 　ここにいてるよ、弓塚さん 」

吐く息の音すらも煩わしかった。さつき以外の全ては遂に雑多なものとなり果てて、自身すらも志貴は切り捨てた。この瞬間に志貴自分よりも大切なモノがあると、心から理解した。

「 　とおの、……くん? 」

「弓塚さん……」

「こんなに、近くにいたんだね……始めてだ」

さつきに瞳はどこまでも澄み切っていた。

夕陽の明かりを照らし、混濁の映らぬ儂き瞳は真っ直ぐに志貴だけを見つめて、その形を微かに笑みへと変えていった。雫が流れ、彼女の頬を伝っていく。

「とおのくん……あつたかいね」

「あ」

それに気付いた時には、もう遅かった。

志貴の精神はさつきのみに集約されて、際限なく彼女を見つめ続けた。穏やかな表情を見せながら、眠るようには呼吸を静かに沈ませていくさつきの姿。綺麗な瞳のままでありながら、そこに輝きは見えない。それに志貴はどうしようもなく囚われて仕方が無かった。

「、、、！？」

だから、その肩を強引に引っ張られてさつきから離されようとも志貴はその瞬間まで、ずっとさつきの姿を見続けた。

そして視界はやがて暗闇に覆われて、やがて消えていく。

眠るようには意識は見失い。明かりはその灯火を消した。

けれども先の見えぬ闇の中であろうとも、志貴の眼差しの向こうに、さつきはいた。

『わたしは遠野くんが好きです』

短いけれど、精一杯の気持ち传达了かった。

本当は大好きと書きたかったし、付き合ってくださいと続きに加えたかった。しかし今はこれが精一杯。更に書き加えるのは恥ずかしいし、あこぎな感じがする。だから、さつきはこれ以上を望むべくも無かった。

実はこんな短い文章を書くために何枚もの手紙を駄目にした。

幾度と無く文章を書こうとしては、それを瞬時の内にこうではないと消して、終いには手紙のほう草臥れてみすばらしい姿となった。それに困って友人に幾つか譲ってもらい、再び書き直した。その工程を繰り返して、書きあがった文章はこんなに短いものだった。

昼休みの内に書いて、本当はもっと時間をかけたかったと思い、その手紙を失くさない様にと大事に仕舞っておきながらも、自分で自分は手紙を書いているのだらうとさつきはふと我に返った。

自分はお礼を言いたかったはずなのに、なんで告白をしようとしているのか。

さつきは思わず赤面しながらも、自分の正しさを何となく信じることにした。

さつきは臆病だ。思い立ってもなかなか実行に移せない。それは

臆病と言うよりも優柔不断と評するべきなのかもしれないが、幾度と無く志貴と近づく機会を得ながらも結局話しかけることすら出来ない自身をさつきは臆病と揶揄する。

だから、ここ数日は凄い事だと驚いている。

突如として巻き起こった出来事を切っ掛けに何だか志貴との距離が狭まっているように感じているのだ。これは凄い事である。何故ならさつきが志貴と仲良くなるかと頑張っても彼との距離が近くなる事は無く、寧ろ遠ざかっているのではないかと思っていた。

それなのに、今はそれが無くなっている、気がする。かなり二人の距離は近いのではないだろうか、と思う。誰かに否定されようなら、やっぱりそうだよな、と流されてしまいたいような思考ではあるが、しかし否定はされない。友人にもそれとなくこんな気持ちを伝えれば『構わない。存分にやれ』と背中を押された。

遠野志貴との距離は縮まった。精神的な変化によってそう思えるようになった。だが、それでも告白する理由にはならない。

ならば、何故だろう。

「うーん……」

「さっちゃん、どったの？」

別の場所で手紙を書き終えて昼休み中に教室へと戻ってきたさつきは机に座りながら悩んでいたとき、クラスメイトに気付かれそれとなく聞かれた。

「ううん、なんでもないよ」

しかし、こんな気持ちをおいそれと言えるほどさつきは明け透けな人間ではなかった。恋愛話は女の子の嗜みであるが、少なくともおいそれと言えるような事ではないである。

「そう？なんかさっちゃん元氣無えよーに見えたんだけどさあ、まだ調子悪い系？」

「心配してくれたんだ。もう平氣だよ、」

「むむ、ここはツンデレぽく、心配なんかしてないんだからねっ』とでも言っておくべきか……っ！」

「えーっと……」

返す言葉もないさつきだった。しかしこのクラスメイト、なんだからキャラが濃い。

「ま、あたしは安心しましたよ。ええ、心配しましたがけどそれが何か？」

「何で逆切れ状態？」

「だって、理由なんてないもの」

「……え？」

すどん、とさつきの中へその言葉は落ち着いた。

「え、て。何かあたし変な事言いました？クラスメイトを心配するのに理由なんていらないでしょーが。そもそも理由なんて求めちゃメーよ。理由なんてイラネ。それともさっちゃんは理由が無いと生きられない人？」

「そ、そんなことないけど……」

「うん、だつたらよろしネ」

そう一方的に告げてクラスメイトはさつきの側から離れていった。と言つか一体何だったのだろうか。そもそもあんな人クラスにいただろうか。あんなキャラ忘れるはずがないのだが。さつきが突っ込む事も出来ず、その人は台風のように消えた。

しかし。

「そつか」

妙な納得がさつきの中にあつた。クラスメイトは意識もせずと言つたかもしれないが、それはさつきを落ち着かせて、じっくりくるものがあつた。

「理由なんて、なくてもいいんだ」

全てのものに理由があればきつと楽でいい。因果なんて小難しいものには興味も無いが、全ての事象に繋がりがあればそれは明確で分かりやすい。しかし、それでは詰まらないという部分がある事もまた事実だ。

特に、恋愛がそれに当てはまるのではないだろうか。

何故その人を好きなのか。その人を愛しているのか。

理由は人それぞれ思いつくことはあるのかも知れない。

ルックスが良い。好きなタイプだった。話していて面白い。構ってくれるから。経済力があるから。

列挙すればこれほど上がるだろう。

しかし、これは切っ掛けであり、理由ではない。

自ら思いつく理由なんてものは、実は理由足りえない。

切っ掛けは確かに重要かもしれないが、それは初動。衝動のみでは継続されない。

では、理由は何だと問えば、それはきつと誰にも分からない。恋の感情を言語化することは本当に難しいもの。何か思いつくことは在るかもしれないが、そもそも理由を求める事そのものが無粋に過ぎる。

好きになった切っ掛けはある。

しかし、好きな理由なんて誰にも分からない。

ならば理由を求めるという事は、本来意味は無いのかもしれない。全てに理由があれば楽だろう。

しかし、理由がある事が全てではない。

「うん。理由なんていらない、よね？」

誰に言つでもなく、自身へと問いかけて、さつきは安心した。

それで良い。それが良い。

告白する理由なんて、必要ない。
ただ好き、それで良い。

そうしてさつきは誰も座っていない机へと目を向けた。教室内は生徒達がそれぞれに時間を過ごし、それをさつきは視界の端に眺めながら窓際にあるそれを見やった。

そこは遠野志貴の席で、今は食堂で昼ごはんを食べているのだろう。主のいない机に気持ちを軽くさせながら、さつきはそのまま窓の向こうへと目を向けた。

窓の向こうは明るい青色で、所謂秋晴れな空。やろつと思えばどこまでも見渡せそうなほどに澄んだ空だった。太陽は暖かに空気を温めて、これから冬に向かおうとしているとは到底に思えず、まして夕陽に変わるとはその姿を見て想像できない。

そして、さつきは　　。

第十五話 悪い夢（後書き）

朔ではなく、シエルが登場するのがミソ。六です。

……いえ、焦らしているのではなく展開的にです。

ただ、六が寄り添って描写する登場人物は亡くなる可能性がある、
と思ったほうがいいです。別にデッドエンド、もしくはバッドエン
ドまたは鬱エンドが最上だと思っではいませんが、亡くなる可能性
があるからこそ丹念にその人物を描写できるといふ訳がわからない
思考の元です。だから輝けば輝くほど、死ぬかもしれないという緊
張感も持てますしね。

しかし、私はさっちゃんが大好きです。志貴への想いに頑張る彼女
の一途な姿勢は、もうたまらない。なので彼女は不幸でなければな
らないと思いついてる訳ではありません。ですが、日常の象徴で
ある彼女は月姫においては非日常に巻き込まれる運命にあるのでは
ないか、と漫画や原作をそれとなく拝見しながら思い、こうなりま
した。ある意味御都合主義です。批判を覚悟で書きましたが、皆様
の反応に戦々恐々です。

次回更新は4月25日の朝8時です。まさかの更新予告に私自身
驚いております。

では、六でした。感想、アドバイス、評価、ご意見、批評、また
誤字脱字のご報告ドシドシ気軽に送って下さい。皆様の言葉が執筆
の励みとなり刺激になります。

第一章最終話　そして彼は闇に堕ちる

弓塚さつきが、吸血鬼事件の犠牲者となった。

三咲町を騒がしている吸血鬼事件に生徒が巻き込まれた事に対し、学校側は即時休校を決定した。これが唐突な事故であるならば休校という手段はとらなかつただろう。朝礼に全校集会を開き、生徒が事故にあつてしまつたと報告をし、取り合えず学校は一時騒然と化すが、それでも休校にはならなかつたはずだつた。

しかし、今この町を襲う連続殺人事件にとうとう生徒の一人が巻き込まれたということで、学校側はその活動を取りやめた。事態の終息が見えるまで生徒は自宅待機であり、それまでは学校にも立ち寄り禁止である。校舎へ赴く事が危険のではなく、外出を控えるための促しとしての知らせだつた。

そして生徒達は自分たちの学校の生徒が事件に巻き込まれたことを知り、各々に動揺を示した。

ある生徒は恐怖に慄き。

ある生徒は理不尽に怒りを抱き。

ある生徒は不安に震え。

そしてある生徒はその悲報に涙を禁じえなかつた。

人は事件に対し鈍感である。事件で巻き起こつた概要、流れ、犠牲者、加害者、その終息は情報媒体を通し獲得は出来るが、実感を

得る事は出来ない。何故ならそれは彼岸の火事で、どうしようもなく他人事だからである。

自己と他人の関係を哲学する事が何故これまでに議題として絶えず上がり続けているのは、自己に対し他人とはあくまで事象を展開する情報に過ぎないからである。そしてそれは直接的に意識するまで、ただの情報以上の価値は与えられないのだ。

間接的に起こった事柄は情報、他人事である。他人事は自分に関係しない。ならば、それに対し実感が沸かないのは同然の事である。それが同じ町で起こったことだったとしても、そこに例外はない。

自分が住んでいる町で何人も犠牲となっている事件が起こった。それに危機意識は持ちよう。暗い道进行を避ける事も、何となく心がけるだろう。友人と遅くまで外にいることはしないだろう。しかし、それはあくまで自らが犠牲者となり得ないという妙な錯覚が行動に移させている事に過ぎないのである。

人は気をつける、という思考に対し意識を働かせるが、本当に自分が犠牲となるとは思わない。何故なら今度は自分ではないか、と思おうとしてもそこに実感が沸かないのである。今回の事件もそれに当てはまるだろう。未だ憶測として飛び交う犯人像や、たびたび起こる殺人事件に対し、直接的な関係を思い描かなかつた故に、そのような事が許された。

しかし、此度は違つた。

弓塚さつきは学校でもそれなりに名の知れた人物だつた。部活に所属しているわけでも委員会に属しているわけでもない彼女が何故そこまで学校で名が知られているかと言えば、偏に彼女の人望にあ

った。

彼女は誰にでも好印象をもたれていた。学校という集団に所属しているならば、良い印象を持たれることもあれば悪い印象を持たれることもある。しかし、さつきに悪印象を持つ生徒は誰一人としていなかった。

クラスでも人気だった彼女は教師にも面倒を良く見られており、それゆえ何かと話題に上がる人物の一人だった。そんな彼女が犠牲となった事で、生徒は衝撃を受けたのである。

なぜならば、学校と言う身近な集団に属している生徒からすれば、同じく生徒の弓塚さつきとはある意味同属である。そして彼女は人気も高かった。

それ故、生徒は今改めてこの町で猟奇事件が起こっているのだと思いついた。

一人としての例外は無く、この事件へ危機意識を持ち、己がいつ死ぬかもしれないという恐怖を抱くようになったのである。人はこの件に対し多種多様の意識を持ち、感情を抱いた。

そして、それは遠野志貴も同じだった。

『それで、お前はどうしたい？』

まるで金属が叫ぶ悲鳴のように、その音はギシギシと軋んでいた。咽喉が枯渇しても出ないであろうその嘔れ声は、人間が共通して使

用する言語だと気付くのに暫しの時間を労した。それは全ての嘲りと侮蔑を綯い交ぜにしたような音で、この世の全てを見下し愉悦の対象としか捉えていない悪魔の声だった。

興味本意だという事は、探らなくても明確であった。邪険とそれを上回った関心が金属の問いへと変貌したに過ぎない。何を言ってもこの声音の持ち主を愉しませる結果にしかならないのは真に腹立たしい事であるが、それを飲み込んで彼は言葉を紡がなくてはならなかった。

「俺を手伝って欲しい」

そう言った瞬間、数珠と札に巻かれた鞘に収められた刀剣は歪んだ嘲笑をあげた。

『ひひ　　っ！餓鬼、それが一体どんな意味を持つてるのか、手前はわかって言ってるのかい？　　狂言は御魂を啄ばむ羽虫だと、わかって言ってるのかい？』

「ああ、覚悟はもう出来ている。」

もう逃げない」

思えば、あの時立ち向かっていれば、逃避を選択しなければ今の時は訪れなかったのかもしれない。宵闇の会合は開かれること無く、彼もまたこのような場所に足を運ばずとも良かったのかもしれない。しかし、全ては過ぎた事。過去は変わらない。後悔に、意味は無い。

踏み外した夢を見るなんて、許されるはずもなかった。

深遠を覗き込んだ者が、化け物にならぬ道理はない。

『っは！覚悟なんぞ風の前の塵に過ぎねえ。言葉なんぞ余計にそう
だ、見掛けを繕うのは女共だけで充分よ。しかし真逆、手前があ
尼とつながり、そしてあの尼がここを知らせたとは思わなかったが
……、其れだけでは在るまい』

言葉を切り捨てて、壁に立てかけられた骨喰は愉快に言う。鞘か
ら漏れる邪悪は吹き零れんほどで、この室内を暗黒で満たそうとし
ていた。

『ならば、手前が示すのはなんだ？己が怪物と化す道筋か、畜生と
なる手段か、魔物と化ける末路か。それとも、修羅と成り果てる意
志か。聞かせる　　手前の答えを』

「　　俺は」

暗黒を振り払い、己が拳を握りしめ、その瞳は那由多の限りを貫
く鋭利さを秘めた。

「仇のためならば、何にでもなつてやる」

その視線の先に、一人の男がいた。

男は亡霊のような男だった。ベッドに腰掛けながらもその気配は
あやふやで、目前にいるはずなのに何故だかその姿が掠れ、あるい
はぶれる。

その左腕は失われたのか根元から無い様で、藍色の着流しは左側
が垂れ下がっている。しかし、それが不自然ではなく違和感抱か
ない。それが当然のように、彼は人とは違って腕が一本のみ生える

生物と思ったほうがしつくり来る。

そして、ざんばらに伸ばされた黒髪の間隙から覗く、蒼い蒼い虚空を思わず蒼の瞳。目尻は鋭いが、その瞳に感情の色は見えない。以前西洋人形のようなだと思っただが、三度対面してその印象は払拭された。西洋人形ではない。西洋人形のほうがまだ人間味があるだろう。その様は亡霊。この浮世に漂う不気味な存在である。

「 、 「

目の前の男、朔は言葉を聞いてもまるで動かない。その視界の中に自身は収まっているはずなのに、まるで硝子に映る人影のように注目されていないのではないかと思わざるを得ないその瞳。

ただそこにいるだけなのに、身動きひとつしていないのに、その瞳に視線が捕捉される。蒼の瞳は万象を遍く飲み込む。蜘蛛が垂らす糸の網の如くに絡め取られた蟲は、果たしてどうなるのか。そう思うと、体が強ばった。

しかし、もう立ち止まれない。

「だから朔、協力してくれ。

断る事は、許さない」

そのためにここまでやってきた。シエルの制止に聞く耳持たず、確固たる意思を持って、朔と対面するためにやってきた。あれほど危惧していた存在に自ら会いに行くなど、気が狂っている。愚考と断言されも止むを得ない。

しかし自分ひとりで仇が取れるとは、復讐が果たせるとは、報復が可能だとは思っていない。ならば、その先駆者の手を借りたほう

がより効率的に立ち向かえるとシエルに説得された。己で果たさなければならぬと、言って聞かない子供の我儘を窘められ、脅されても尚止まらなかつた。

何故なら、あの時さつきは　　。

思考が暗鬱と化した。氾濫する激情に仄暗い気持ちちが脳髓を侵す。

弓塚さつき。

その名を思えば、彼は己が腸に獄の蟲を飼っていると自覚する。

『わたしは遠野くんが好きです』

シエルから受け取つたさつきの手紙を、志貴は何度も読み返した。

たった一文で、とても短い内容だつた。しかも何度も書き直したのか、手紙は少々草臥れて消された文字の跡もそれとなく伺えた。しかし可愛らしい筆記で書かれたその文字を志貴は懇切丁寧に読んだ。何度も、何度も、何度も。

好きだと、真正面にさつきは教えてくれた。

そして悲しいほどに、その想いは彼の中に巣くう虚ろを揺さぶつて仕方が無かつた。

手紙は端に血が付着していた。既に乾いた血は少量であり、文字を読み取りは阻害しないが、その赤茶色に志貴は唇を噛み締めた。

この血は志貴の罪だつた。

あの瞬間に何も出来なかった志貴の愚かさだった。

何故あの時、自分は何も出来なかった。動かなかった、と志貴は自身を罵った。

そして、それ以上に自分の中に巣くうドロドロとした感情を肯定した。

ただそこにいるだけで、襲われた弓塚さつき。

彼女を思えば思うほどに己は大火と化し、一木一草に到るまで焦がし尽くす紅蓮の輩と成り果てようとする。胸の内の虚ろは痛いほどに震えてたまらず、体を突き動かそうと苦しめた。

しかし志貴は炎ではない。腹立たしい事ではあるが無様に喚き散らすほど、彼は現状に対し不理解ではなかった。故に、彼は動く。

シエルが動けない今、動けるのは己と、あと一人しかいない。

「、」

そして、夜の最中に時はどれほど経っただろう。

真っ直ぐに見つめて視線は逸らさず、藍色の化身と妖刀の姿を視界に収め続けた。

それは彼の意志であり、また意地であった。

必ず。必ずや、この怒りを突き立ててやろうと、彼はその心に誓ったのだ。その刃でもってその咽喉元を噛み千切ってやろうと、さ

つきの変わり果てた姿に決めたのである。

故に、こんな所では立ち止まれない。朔と骨喰に飲み込まれはしない。

朔という化け物と対峙しても怯まないその姿に、亀裂が走るような引き攣った笑いを堪えながら、骨喰は叫んだ。

『ようこそ、修羅の巷へ。』

歓迎しよう、遠野志貴！！』

喝采を挙げんばかりに邪悪な哄笑が室内に響いた。

しかし朔と志貴はそれを耳しながらも、その声を遠く感じた。今この時、その意識の全ては目前に佇む男に向けられていたのである。

歪な月に照らし出された屠殺場で、闇と対峙した少年はこの瞬間、闇に立ち向かった。

行くは地獄か、闇の底。

行く道来た道戻れぬ道。

戻れぬと、わかって尚も少年は。

その身を鬼に、修羅を進む。

第一章最終話　そして彼は闇に堕ちる（後書き）

退魔ルート、またの名を七夜ルートに突入しました。原作との差異を感じていただければ幸いです。あ、六でございます。

これにて第一章が終わりました。

実は三部構成という事をここで暴露いたします。

第一章はこれだけ長いのに序章に過ぎなかったという事実と無秩序にばら撒いた伏線のため矢鱈と長くなりました。

……ごめんなさい嘘です、伏線だけではなく私の描写のねちっこさが主です。場合によっては今後も長くなるかも知れませぬね。

しかし、最近は一話一万字越え所か二万時が見えてまいりましたが、これはやべえ。話を進めようと必死になったらトンでもない事に。

構成、知識が不十分な故に文章表現で誤魔化しておりますが、しかし二次創作とは言え、原型を留めないとは之如何に。これ本当に月姫か？

第一章のコンセプトは『ハロー、暗闇』です。日常から非日常へのシフトを狙った章であり、これから先は混沌とした闇に自ら進んでいく、といった具合。

それを書くために年を跨いで来んなに時間が掛かるとは……、技術と執筆体力が足りません。精進精進。

今回で物語は一つの区切りと相成りました。

正直読者さまのお言葉が無ければ途中で心挫けていたかも知れませんが。

今更月姫SS、文章が矢鱈と長く、そのくせ進行速度が鈍行である、と好感を得られずにそのまま読まれぬ要素は幾らでもあり、それを思えば自堕落さを嘆かずにはいられない日もありました。

ここまで来れたのも偏にこの拙作から離れず懸命な応援をしてくれた方々のお陰です。本当にありがとうございます。

これから数話は本編ではなく、朔の過去話という形でちらほらと概要を書いていた仇川の話を含みます。本編数日前に起こったこの事件、完全にオリジナル話ですが朔という人物が歩んだ物語の展開するためには必要不可欠な話だと思います。登場人物にはそれぞれ過去があり、それは朔も例外ではないと思うのです。

さて、それまでは暫しの別れ。

次回もお会いしましょう。六でした。

短編めるといぶらつと！ 七夜朔は未確認ネコの夢を見るか？（前書き）

これは本編には全く関係のない作者の出来心です。

本編と繋げて考えたらしまっちゃんおじさんに仕舞われます。

軽く人物紹介。（月姫のみ）

七夜朔：遠野邸に住み着いている暗殺者。最近ニートらしい。ニートマーダー。

骨喰：朔の扱いが酷くて悩んでいる。もっと丁寧に使って欲しい。

遠野志貴：昼行灯。朔との距離は縮まっている。兄ちゃんと呼ぶのは恥ずかしい。皆の認識により朔とは事実上の兄弟となる。

アルクエイド・ブリュンスタッド：アーパー吸血姫。本編では割を食った。彼女が志貴の嫁になる場合、朔は魔に反応するためストレスで死ぬる。

シエル：カレー。暴力教会の尼。男漁りはしない。死者の掃討に朔と協力している。現在朔を埋葬機関にスカウト中。

遠野秋葉：めっちゃお嬢様。巨大化はしない。朔を客人扱いにした。朔がいると交渉が優位になるので役得。また兄弟丼を狙ったり狙わなかったり。

翡翠：洗脳探偵翡翠。朔は志貴の肉親と秋葉の客人という事で朔は仕える側と認識。朔と琥珀が結婚した場合志貴とは義兄弟になるので一人勝ち。

琥珀：皆大好き割烹着。彼女の活躍によって朔もネタの餌食になり
そんな予感。

短編めるといぶらつと！ 七夜朔は未確認ネコの夢を見るか？

「我輩は猫である。名前はまだ無い。……、んー名もなきネコが文壇で大喝采とは、世の中まだまだ捨てたものではありません！。その末路が紙幣最低価格なもの、なんだかおつです」

夜の街中を彼女（？）はひよこひよここと軽やかに歩いていった。

全長六十センチと成人の腰以下の大きさにセーターっぽいのとスカート、その腰元から尻尾がふりふり、その頭部にはまるで猫な耳が生えていた。

名も無き猫は多々とあるが、しかしとところがどっこいその未確認生物は真に遺憾ながらに名前を持っていた。

その名もネコアルク。残念ながら二頭身な雌っぽいネコである。珍妙奇天烈極まりないこの生物、こつ見えても不思議で不気味な猫のグレートキャッツビレッジ王国G C Vの住猫？である。

胡蝶の夢を生きているのは人間であるが、この世は偉大なる猫が見ている夢と信じて止まない彼らは時折俗世を愉快にするため現れるネコ精霊と呼ばれるギリギリ生物な猫である。そんな彼らが住処とするG C Vはこの世のどこにでもあり、どこにもない。シュレディンガーのチシャ猫の如き確立でひょっこり出てきたり出てこなかったりする奇妙な仮初の楽園である。

とは言え幾度となく滅んだりロリチャイナ一人に壊滅させられたりメカなメイドが攻め込んできたりと、王国の落日はしょっちゅう迎えているので何とも言えない。

そんな世も末な世界とは言わず宇宙まで飛び出してしまいそうなネコアルクであるが、本日は琥珀と絡むつもりでGCVを出歩いている。無論そのまま入れるとは思っていない。そりゃ何度もメカなメイドや遠野の妹に迎撃されれば猫も考えた。このままではいかんぜよと。

「にやにやにや、今頃は我が眷属たちによってあの屋敷もネコ大パニック。寧ろパンデミックなイケナイ予感が心を揺さぶるにやー。具体的に言えばラスト一匹で混乱を食らわされた新米ポケトレって感じで」

にやーにやー笑っているが、つまり言っしまえばお米の国の作戦よろしく圧倒的物量による面制圧である。前線に投入したネコ戦力およそ千匹。とある独逸の少佐が戦争無視して秋葉原に突入しそうな最後の大隊(katzen dreck)である。

至高のネコ缶(単価百円、人間マジさんきゅー)を餌に全速力で突貫した眷属たちを相手にメカなメイドは冗談のような大量生産で今も遠野を警備しているらしいが、そんなの関係ねえと言わんばかりに向こう見ずな全面戦争を仕掛けたネコアルクたち。

そんな眷属を尻目にネコアルクは今も余裕で闊歩していた。自らは戦線に登場せず、現場は現場任せで指示だけ出す何処かの社長のような感じで憧れの社長出勤である。ネコきたない、実に来たない。

未だ遅くはない夜の街中を堂々と練り歩き時たま犬に吠え立てられ、縄張り争いは連敗記録を再び更新するネコを数少ないとは言え道行く人は奇特な視線で眺めていた。気のせいと思っただけを擦り、二度見してみれば余裕でいるのだ。しかし眺めるだけである。キモ

キャラ萌えな人しか関わりたくない。

事実最近は見目そうに見えて実はそうではない変人から熱の籠った目で見られ、危うく恋に落ちそうだった。

しかし、口笛を吹きつつそろそろ足とか疲れてきた矢先、ネコアルクに戦慄が走った。

「むむつ、S・O・Sキヤート！……っ！こいつアトンデモネエ、実に千匹のネコからヘルプコールがきております。ならば、間違えたニヤらば！ネコを助けにネコが行くー！」

脳裏に正体不明の怪電波を受信したネコアルクは、その足を仕舞いこみあえてジェットを噴出。意外と高い出力に体が弾け飛びそうになるのをえんやこらと我慢して、猫は大空へと飛び立っていった。ちなみに夜である。

「でも千匹って、なーんか最近聞いた事のある数字なようなー、それにこの方角はあちし知ってます。落ちが実に見えてますなあ」

鳥頭な猫だった。

ジェット音を響かせて浪漫飛行。近所迷惑である。遊楽飛行に陥っても構わないのだが、そこはネコ、柔な根性で乗り越えた。肉球の柔らかさとどっこいどっこいな根性である。そんじょそこの柔さではない。実際空気の壁に負けそうである。

そのまま限界突破を幾度となく踏み外しそうになって、眼下に相変わらず微妙な空気の路地裏同盟を涙を流して見送りながら、ネコは夜の星空に眩暈を感じた。

そしてその方角は彼女（？）の嫌な、あるいは愉快的な予感通り今まさに激戦地区であるはずの遠野邸だった。

「分かる……っ、分かる！上空にいても数々の戦場を越えた歴戦のネコにはこの匂いが分かります。懐かしき地獄の臭い、燻られたにぼしと混ぜ合わされたマタバビの匂いがひしひしと感じれるぜ……っ！これは、戦の臭い！」

そこはネコの地獄だった。

美しい景観を広げる遠野邸前門の庭には今死屍累々とネコが倒れ伏していた。

ネコの眷属である尖兵ネコは既に横たわっていたネコに倒れ掛かり、その横では驚愕の表情でマタバビを嗅いだネコに群がるネコたち。恐らく持参だったのだろう、あちらでは今まさに呻きながら最後のにぼしを啜え、そのまま力尽きたネコなんかもいた。

ネコが沢山倒れてそれはまるで一つのネコのようにネコの塊が出来る上がつて、それは寧ろネコと言う生命体を借りたネコのような、つまりネコだった。ネコの山である。

「ふっ、さすがあちしの認めた永遠のライバル。容赦の欠片もございません。恐らくメカメイド全部隊を投下したラグナロクが繰り広げられたんでしょうな」

見事、天晴れだとネコは賞賛した。ジェットのままです。

「しっかーし！これでお涙頂戴ものの健闘を讃えあうシーンが繰り

広げられるたあ、思い込みもいい所！現実はいつもネコに冷たく厳しい！つーかー、もうちょっとネコに対して優しくしても損は無いと思うのよねー」

ネコの脳裏には今までの苦勞が甦った。化け猫と擲擄されて石を投げられる日々もあった。お魚啜えたドラネコよろしく焼けた秋刀魚を奪ったら琥珀に仕込み簞で襲われ、牛乳を奪えばロリチャイナにGCVは壊滅。マッドドクターの陰謀から逃れほうほうの呈でGCVに帰還すれば、やっぱりロリチャイナに壊滅された。そういえばこの前なんかは何か巨大なロボットがバイカル湖に向かって飛び立っていった。

「っく、汁が目に染みるぜっ！こうなればメカメイドのゴム動力も一度巻かなければならない事は必須、つまり今こそあちしの時代到来という事だニヤ。ちみたちの犠牲は忘れないぜ……！」

眼下にメタリックメイドの姿は見えない。むしろそのキャパシテイーからさりげなくセンチメンタリズムに決めて、ネコアルクはジェットバーニヤを噴出。千載一遇のチャンスに今日も燃料が漏れている。本来の目的（眷属の救助）なんか全く持って無視してネコは遠野邸へと突っ込んでいった。

その細い肉体からどうしてそんな速度がでるのか予測不能であるが、ネコの体は滾ったテンションに音速は突破出来ない。真に残念と思いつつも、このまま行ったら爆散すんじゃないかねえか？というぐらゐの速度でもって夜の空を急転直下。

一気にそのまま地面へと突き立って奇妙なオブジェとなる姿を夢に見ながらネコは遂に遠野邸侵略の快拳を成し遂げようとして。

「。」「
「にゃぐは　　！！！」

横合いから思い切り殴りつけられた。

真っ直ぐに向かう力と言うのは案外横からの力に弱い。しかし加
速と重力がプラスされた前へ向かう力は存外にパワーを秘めており、
例え搭載重量8キログラムとバスの停留所看板よりも軽いネコであ
ろうともその力は侮れなくもない。それでも其処にある力はそんじ
よそこらのさっちゃんではどうしようもないものだった。

「ぬ、ぬぐぐぐ……！このあちしを突き飛ばすとは、一体何もの
っ！？」

それを止められて荒野を転がる埃の塊のように転がったネコは途
中から楽しくなりながらも、どうにかこうにか停止した。その間に
眷属の体を幾つか笑えるほど弾いたが今はそれどころではなかった。

「お、お前は！！なんで、お前が！！！」

ネコアルクは行つちまいそんなマイブラザーと出会った時以上の
驚愕で持つてその人物に歯噛みした。

いきなり現われてネコの邪魔した空気読めない人物は、なんだろ
うか寡黙というよりも無口と言う言葉のほうが断然似合いそうな男
であった。藍色の着流しに白色の七部丈をはき、その左の袖は中身
が無いのかひらひらとはためいている。その半端に伸ばされたざん
ばらの黒髪の間から蒼色の瞳が見えて実に厨二チックである。

「お前、お前は……お前は、誰だにや？」

もしここにこの両者以外がいれば余裕でこけるなり突込みをするのかもしれないが、今いるのは倒れ伏せたネコ千匹のみで観客はもしかしたらいなかった。

「、」

しかし、この状況に対し何も言えないのは朔であった。元から何も言う事はないけれど。

そも今夜襲撃があると息巻いていた琥珀と共に今夜迎撃するはずだったのだが、要請が無ければ殆ど自分から動く事もない彼である。琥珀の愉快的メカヒスイの動力が切れたから、その動力が回復しきるまで用心にと敵を待つ役割を受けたのだが、そこにはかつて七夜の森で見たきのこの山と同等に変な生物なまものの屍である。死んでいないけど。

倒れているのならばどうでもいいのだが、寝返り一つで傷の治る様を見てまさしくあのきのこと同じだと思いつつ朔は取り合えずその視力を生かして敵が来るのを待った。暗殺者である朔の視力は夜であるうとも紫外線を見れてしまうのである。暗闇とか関係ない。

そんな最中であつた。何やら不可思議なネコが上空から近づき、そのまま急降下を始めたのである。彗星アタックを繰り出すそれに正直なんで飛べるのかとかは気にならなかった。ただそこらに横たわるモノと同じものが突っ込んできたという認識でもって朔は迎撃を行い、地上から飛び立って横合いからその肉体を寸断せんばかりの力でもって振りぬいたのであるが。

「ちょっと聞いてますそのお兄さん？ネコは無視されると死にたくなるってご存知ですかね、これだから最近の若者のコミュニケーション能力の低下は著しくて仕方ないと嘆かれるのじゃ。あれニヤ、そのまま便所飯決定になってもいいんですかな」

何かめっちゃ普通に喋ってる。この耐久力は異常である。朔の膂力は人間の形をした存在を開封もしていないのに折れてしまうポツキーのような形状に変える事も出来るのだ。それなのに今そのネコは体をふにゃふにゃとさせながら、朔に何か突っ掛かっている。また今回は持つてきていないが、骨喰と同等の喋りっぷりである。変だ。

「
」

「んふー、これは重傷ですよー。ここまで話さない相手は白レンも苦労しそうだぜ。正直無口キャラは黒レン以外いらねー。それならばあちしと喋って会話の練習でもいかが？どう、最近儲かってる？それよりお名前なんてーの」

何故か談笑モードに突入した。とは言え朔は話をしなくても別に困らない。話さなくても生きてはいけるのである。交渉事なども骨喰が担当した。コミュニケーション障害といわれても致し方の無いことであるが、別にネコアルクの話を抑える必要性もなかった。勝手に話すならばそれでいい。雰囲気も殺し合うものではないし。空気の読めない朔であるが、別に殺す必要も感じ取れなかった。

「ほんとにお兄さんあちしの話聞いてます？むしろ聞いてくれよ、最近のあちしの扱いについてさあ。なんか他の作品でマスコットっぽいものが登場してますけど、このポジションは渡すつもりもありません。むしろ譲ってくれて感じ。この前なんかさー、イービル

ネコと共にドクターの地下帝国に入り込んだんですけどにや

……」

珍しく話を中断されないネコアルクは冗談なんだか愚痴なんだか分からぬ内容を朔に聞かせるが、朔にはてんで理解できない事であった。

それよりも朔は目前にいる不可思議極まりない生物の存在そのものが気になった。

何せこいつを倒してほしい、寧ろ殺して欲しいと蟲を潰すくらいの軽さで琥珀に頼まれた朔としては如何せんどうにもしがたい。不思議な雰囲気は感じるっちゃ感じるの、もしかしたら魔の存在なのかもしれないが、いつか七夜の里で戦ったキノコたちのような突然変異種なのかもしれない。

どうにも確証はもてないが、あの時志貴は殺しては駄目だと言っていた。それを不思議と守った朔であるが、果たしてそれは今回も適応されるのだろうか。

そして、はたと気付けば。

「お兄さんはアレですな、いわゆる構ってちゃん系な男ってやつですにや？ここまであちしをフリーダムにさせたやつは存在しなかったんで、逆に不安なんですけど。その左肩は相棒機と合体するのですか？マタタビいるー？」

いつの間にやら朔の頭部にネコアルクが当然の如くに乗っかって
いた。

どうやら気に入られたのか、はたまたからかい甲斐のない相手を物珍しく思ったのやら随分と遠慮がない。朔の頭に床を扇子で叩く落語家の如く、そのご自慢の肉球でネコパンチ。あと朔に合体機能はついていない、はずである。

しかしそうやっている間もネコアルクは止まらない。

それをどうしたものかと朔が考えていると。

「きゃーーーーー！！？化け猫！朔ちゃんの頭になんでいやがりますか！！」

琥珀が鬼の形相で戻ってきた。その背後に現在稼働中のメカヒスイを従えて。

「おー割烹着よ、よくぞ我が眷属の襲来を退けた。褒美取らそうか？ネコ缶おひとつどうぞ」

「いいませんっ、！このぶさいくネコ、いいから早く朔ちゃんから離れなさい　！」

珍しく慌てている琥珀をぼけつと見ながら朔は頭上で胡坐をかいているネコを如何するべきかと考えていた。

「残念だったな、割烹着！今あちしはこのお兄さんをGCVの用心棒プラス必殺仕事人としてスカウトしてるんで、パス。夜中に無双を展開しながら姑にいびられる生活を送ってもらいます。ちなみに姑役は白レンね」

「な、　　なっ！！？ぶざけるのも大概にして下さいブサイクネ

コさん。朔ちゃんをそんなはぐれ刑事にはさせませんよ、朔ちゃんにはこのまま遠野邸で肩身の狭いニート生活を送ってもらうんです！

いつのまにやら勧誘されていた朔だった。しかしネコに対する怒りなのか、それともこのままマジで朔がGCVに連れてかれんじやねえかと慌てているのか、琥珀はその目じりに興奮の涙を溜めていた。

だがネコアルクも然る者。人をムカつかせる表情で笑う笑う。

「にやにやにや！それならば、お兄さんをグレートキャッツカンパニーのSPとして雇ってしんぜよう。自給にぼし十本という高待遇でニートからも脱却。つーか、このお兄さんとあちしって気が合うって言うか、スピリットフレンドにやのよーこれが。何かこう、気だるい雰囲気でもまんじりともせずにいる感じ。実は猫耳生えてんじゃね？」

「フフフフ……話し合いの余地はないようですね。もう良いです。愉快的な色物キヤラは少ないほうが好都合！この機会に一匹ぐらいいなくなってもらいましょう……メカヒスイちゃん、GO」

「ピピ、ゴ命令ヲ、ドクター」

「この化け猫さんを愉快にもみじおろしな感じにしちゃってくださいー！」

「腹黒いにやー！この割烹着腹黒いです！にやらばグレートキャッツビレッジの用心棒がお相手するぜー！」

この後琥珀・メカヒスイVSネコアルク・朔という異色の対戦力
ードが生まれ、怒り狂った琥珀とのらりくらりと生きているネコア
ルクの死力を尽くした戦いが幕を開けたり開けなかつたり。

ネコも目からビームを繰り出せば、琥珀はそれを仕込み簞で切り
裂くとなかなかとんでもな状況を朔はしばし眺めた後に、寝返りを
うてば元通りな眷属をしばし興味本位につんつんと指先でつつき
やがて溢れんばかりに復活したネコに飲まれかけそうになったのを
メカヒスイのご奉仕パワーによる機転によって残党ネコに対する殲
滅作戦が行われる事となるが、だるいので割愛。

そして後日であるが、時折街中のいたるところで不気味なネコに
絡まれる瘦身の男が目撃され、更にそのネコを鬼の形相で追っ払う
割烹着とメカなメイドが度々見かけられるようになり、何故か現わ
れたロリチャイナがゴジラの如くGCVに登場するなど、この話も
またちよつとした騒動に発展する事になるが、これまた割りとう
でもいい話である。

短編めるといぶらつと！ 七夜朔は未確認ネコの夢を見るか？（後書き）

やるやる詐欺が発動しました。

いや、過去話よりも先にネタが舞い降りたという罫。

書けるうちに書いたんですけど、ネコアルクのキャラ面倒。てかキャラや口調が掴めねえ。書いてて楽しいけどさ。ギャグ何だかほのぼの何だかマジ不明。表現などを変えたのは仕様です。ゆるゆる執筆でございます。

感想とか欲しいです。誤字脱字報告してください。

短編めるといぶらつと！ とある給仕の呼称変化（前書き）

題名が思いつかんから適当に。

ネタ話で総文字数40万字を超えとかがありえない。

本編とは関係ないんだってヴぁ。

登場人物紹介

七夜朔：とある屋敷に住み着くごく普通の殺人鬼。

骨喰：とある殺人鬼にとり憑くごく普通な気もする日本刀。

遠野志貴：とある屋敷で暮らすごく普通だったらしいのにとと思う青年。

アルクエイド・ブリュンスタッド：とある町に何故かいるごく普通ではない吸血姫。

シエル：とある学校に居座るごく普通とか笑っちゃう先輩。

遠野秋葉：とある財閥を束ねるごく普通なわけではない妹。

翡翠：とある屋敷で働くごく普通っぽいメイド。

琥珀：とある屋敷を影から動かすごく普通が裸足で逃げ出すドクタ
ーアンバー！。

短編めるといぶらつと！ とある給仕の呼称変化

今日も今日とて遠野邸の家事（料理以外）を担当し、今も使用されることが無い部屋の整理。またこの屋敷の住人達の部屋を清掃するなど普段通りの仕事に精を出し、途中に見つけたネコアルクを洗脳した後、自身の主である遠野志貴の世話で彼と手が触れ合い顔が真っ赤になるなどのハプニングもあったが、実に充実した一日だったと翡翠は思った。

琥珀がその場面を発見しちよつとした騒動まで発展しかけたのはただけでないが、その後共にパーティーのセッティングもしたので引き摺ることはなかった。それに姉に対していつまでも引き摺っているのは意味が無い。

さて、そんな翡翠だがちよつと最近気になることがあった。

翡翠の今後を考えるならばちよつとどころな話ではないのかも知れないが、それを面前かつ直球に関わりあうほど翡翠は器用ではなかった。翡翠は誠心誠意かつ真面目な性格であるが同時に恥ずかしがり屋なのである。

しかし、未解決のままにしておけば後々何らかの支障が出る事は確実。だから翡翠は気になりはするけども、それをどうすればいいのか迷っていた。

翡翠の気がかりを解決するためには、とある人物たちに着目しなくてはならない。

「はい、どうぞ朔ちゃん。いっぱい食べて下さいねー」

琥珀がチヨイスした食べ物が載せられた皿を渡されて、朔はそれを味わうでもなく無言で食べていく。

「これ、わたしがつくったんです。朔ちゃんの好きなものたくさん作りましたので、どんどん食べて下さいね」

「頷きながら朔は食べ物を一つ食べる。ちなみに今食べたのは魚の煮付けである。

「朔ちゃん、おいしい?」

「ん」

「本当ですか!?!よかったあ、頑張った甲斐がありました!」

こくりと朔は頷く。それを見て琥珀は幸せそうに笑った。その笑みに影は無く、心の底から今を楽しんでいるような笑みである。

現在客人として迎えられたシオン・エルトナム・アトラシアの歓迎会と称し、ちょっとした立食会が行われていた。

無駄に広い食堂を使い今日の主役であるシオンを始め遠野の人間、何故かいるアルクエイドやシエルが笑顔で毒舌の応酬を行っている。その手には何だろうか、二人の手にはんにくソテーにカレースパゲティと仄かな悪意が見えなくも無い。

志貴に構ってほしい二人だから足を引っ張り合っていていがみ合っているのだろうが、騒ぐ二人を秋葉は頬を引き攣らせながら無視している。恐らくものの一分で爆発するだろうが。

ちなみにその騒動の原因である志貴はシオンと共に談笑を愉しんでいた。ざるである秋葉がいる事によりお酒が振舞われているので、

志貴やシオンも既に飲んでいいのかほんのりと頬が赤い。なかなか良い雰囲気であるが、それはそろそろ終わりを迎えそうである。具体的に言えば肩を震わせるアルクエイドやシエル、果ては秋葉の手により、どうやら気付かれたらしい。

しかしそんな会場の中、やはり翡翠が気になるのは琥珀と朔である。琥珀が一方的に構っているというか、客人らの相手をしながらも朔の側を全く離れない琥珀と、それを当たり前のように受け入れている朔。そして本当にわかりにくい事であるが、その朔もそれとなく琥珀に気を使っているようで、琥珀の手に持たれた皿の食品を手渡して琥珀の口元に運んでいる。その雰囲気はオシドリ夫婦という奴だろうか。寡黙な朔とそれに付き添う琥珀の姿はなんとなくそう見える。羨ましい。

「……はあ」

そしてそう思い、翡翠は人知れず溜め息をついた。それは本当に微かなもので、翡翠すらも自覚しなければわからないような溜め息である。

翡翠が気になるといふのは琥珀と朔である。

琥珀は言うに及ばず翡翠の姉である。翡翠とは違って快活かつ朗らかな性格である彼女は翡翠と瓜二つな顔をしているのにその雰囲気からかちよつと似ていない。着物姿と給仕服という違いもあるだろうが、表情が良く変わり、また気さくで人を笑顔に出来る彼女を翡翠は純粹に羨ましく思っていた。

とは言え、翡翠と琥珀の仲はいたって良好。そこに暗い感情は芽生えないし、これからも彼女にそのような感情を抱く事はないだろ

う。しかしたまに悪戯が過ぎるのは考え物であり、はっちゃけているぶつとんだ姉である。

さて、そんな琥珀の隣にいるのは彼女の主である遠野志貴の兄、七夜朔である。

とある事件を経て遠野邸に住み着くようになった人物で、実は以前にも遠野にはいた。その頃から翡翠は朔と出会っているのだが、これはまあ本編を続けてからにしよう。

久しぶりに再会した朔であるが、彼はどうしてか以前の彼よりもだんまりが多く、寡黙というよりも殆ど無口。とは言え昔も朔の声なんて聞いたことは無いが。遠野邸にいる無口姫レンと肩を並べるレベルである。せめてもの救いは仕草もまた彼女レベルという所だろうが、つまり矢鱈とコミュニケーションが取り辛い。

志貴の肉親であり、また琥珀の大切な人物である彼とコミュニケーションが取れぬとは使用人失格であると一念発起し、彼との接触を必死に行っている翡翠であるが、気になるところとはそういうものではない。

「朔ちゃん、お酒はいかが？この前侵入してきたブサイクネコさんの所からちよっぱつてきたお酒があるんですよ。その名も猫殺し、化け猫も地獄へ弾丸ツアー泊7日のお陀仏コースな幻の気もしいくもないお酒です！」

「」

今も見ようによっては仲睦まじい琥珀と朔の二人であるが、その関係は一体どういう風になっているのか、翡翠は全てまで把握でき

ていないので何とも言えない事であるのだが、翡翠の身近であんなに仲が良い二人である。琥珀が翡翠と結ぶ関係とも異なり、また志貴が朔と結んでいる絆とも違う、あの二人だけの仲。

果たして、あの二人は結婚するのだろうか？

会場の中心では今まさに客人二人と遠野当主が取っ組み合いの喧嘩に発展し、否応なくその視線はそこに向けられるが、それでも翡翠は琥珀と朔の二人を見る。

琥珀は微笑んでその光景を楽しげに眺めており、また朔は時折その体がぴくりと反応する以外に変化も見えない。どうやらアルクエイドやらシエルやら秋葉の気配に血が滾っているらしく、指先にまで血管が浮かんで少々怖いが今のところどうやら人外の自制心で押さえ込んでいる様子である。

顔を驚愕に変える志貴やシオンとも違う反応で、二人は泰然とそこにいる。その雰囲気はもう熟年の老夫婦である。

そう言えばこの前も琥珀と暇してた朔が買出しに行っていたが、琥珀が自然と朔の腕に自身の腕を絡めて寄り添いながら歩いていた。ぶっちゃんけ志貴とそんな事も出来ない翡翠からしたら羨ましい限りだ。

しかし、翡翠の感情を差し置いてもあの二人の関係は気になるところ。もし結婚するのならばそれで良いだろうし、翡翠自身も実に良い事だと思うが。

「どうしたの？翡翠ちゃん」

そんな翡翠の前に琥珀が近づいてきた。気のせいか晴れ晴れとした笑顔である。

「あ、姉さん。……朔さまはもう良いの？」

「ええ、朔ちゃん成分もしっかり補充できました。ほら！」

そう言って笑顔を見せ付ける琥珀である。確かに本人二割増なツヤツヤ笑顔である。五割増ぐらいなら顔から光線でも撃てそうである。

どうやら朔は側にいないようで、今は黙々と食材を消化している様子である。

「」

「……………」

その側にはいつの間にもやらいたのかレンがもきゅもきゅケーキを食べていた。なごんで仕方がない。

「姉さん、あの」

「何、翡翠ちゃん？」

気軽に話を聞いてくれる琥珀にありがたく思いながら、翡翠は思い切って聞いてみることにした。

「朔さまと姉さんは仲良いですね」

「そうですねー、朔ちゃんと私は一緒にいるのが当然なんです」

臆面もなくキラキラと言ったのけるその自信をほんの少しでも分けてもらいたいと思いつつながら、翡翠は「それじゃあ」と続けた。

「姉さんと朔さまは、結婚するのですか？」
「へ？」

翡翠の言葉に目が点となる琥珀。まるで全米が感動したと言う宣伝文句に期待し見に行つた映画がスプラッタものだったような表情である。てかどんな顔だ、それ。

「……違つのですか？」

「そ、そうですね！私と朔ちゃんはずっと一緒にいるんだから、それぐらいちょちょいのちょいです！！？」

ジェスチャー混じりに琥珀はアワアワと言っているが、何を片付けるのか不明である。

「それじゃ、つまり結婚するという事なのね？」

顔をずい、と近づかせて翡翠は確認する。しかし暫く顔を真っ赤にさせた琥珀は、ぼそぼそと小さい声で「……出来たら、いいなあ」と呟いた。

「出来たら、ですか」

「……私が思つてるだけなんですけどねー、こればかりは朔ちゃんと決めないといけない事ですし」

琥珀の言葉を聞いて翡翠は「なるほど」と納得した。つまり琥珀は結婚をしたいらしいが、現実的にするかどうかはまだ分からないという事らしい。この反応を見れば明らかである。しかし秒読みはスタートしているように見えなくはない。

「おめでとございます、はまだという事ね、姉さん」
「うー！うー！」

権謀術数を張り巡らし、遠野邸影の支配者と呼ばれ、遠野地下帝国の主である琥珀がこんな恋する少女の如くに顔を真つ赤にさせれば、同じ女である翡翠にも分かる。ただそれにつられて翡翠の顔もほんのり赤くなるのは「愛嬌」だろう。

「では、もし姉さんと朔さまが結婚した場合ですが」

「はい」

「私は朔さまをなんとお呼びすればよろしいのでしょうか」

「はい？」

今度は違った意味で琥珀の瞳が点になった。

「だってそうでしょう、姉さん。姉さんと朔さまが結婚するという事は家族になるという事。それはつまり私や志貴さまも家族になるという事だわ」

「まあ、そういうことになりますかね」

翡翠や志貴は直接的な関係にはならないけれど、姻族として義兄弟の関係にもなる。つまり志貴と翡翠は主と使用人という関係であるが、そこに兄と妹の関係が生まれるのだ。実は密かに志貴と義兄弟になって兄と妹のイケナイ関係を夢見る翡翠であった。近親相姦おいしい。

「でも、そうしたら私も朔さまと兄妹になるの。私、どうすればいいの……」

朔の立場は現在妙な事になっている。

志貴の肉親であり、秋葉の客人であり、琥珀の想い人であり、またシエルの仕事仲間である。アルクエイドとの仲は良く分らないが、そこまで険悪な仲には見えないし特に気にする必要はないだろう。そんな訳でごちゃつた立場の朔は現在志貴が三人の喧嘩を止めるようお願いされているところだった。そして朔はこの三人の抑え役としての役割もなんか持っていたり。果たして騒動の原因である志貴がそのような事許されるはずもなく、次の瞬間には三人に詰め寄られていた。

「特に気に病む事もないと思うけど、ここは朔ちゃんに向かってお兄ちゃん（はーと）！と呼んじゃいますか？」

「遠慮します」

流石にそれは恥ずかしい。難易度が高すぎである。

「えー、残念。こう、胸の前で手を組んで瞳をキラキラとさせながら「お兄ちゃん大好き！」とか言ってる翡翠ちゃん見てみたかったのに！」

「姉さん、それ私じゃないわ」

もしそんな翡翠がいたら萌えて仕方ない。

さて、どうしよう、と思った矢先にどうやら再び喧嘩が巻き起こったようで、八つ当たり気味に吹き飛ばされた志貴を見ながら翡翠は如何するべきかと再び考えるのであるが、ちっとも名案が浮かば

ない翡翠であった。

別に朔に対して印象が悪いわけではない。だから身近な存在となるのも問題は無い。しかしその場合だと妹としては距離が分らないのである。妹は大変だ。

しかし、そんな翡翠に琥珀は目元を緩ませるのだった。

「翡翠ちゃん」

「何、姉さん？」

「ありがとうね」

「え？」

突然感謝され翡翠は戸惑った。

「何で姉さんがお礼を言うの？」

「だって、翡翠ちゃんは朔ちゃんの事も結婚の事も受け入れてくれて、しかもそんなに悩んでるって事は真剣に考えてくれていてってことじゃないですか」

「……それは、家族の事だから」

家族の事なのだから考えざるを得ない、と翡翠は思う。

たった一人しかいない姉の事なのだから、尚更そうじゃないか。

「姉さんが幸せになってくれたら、私も嬉しいから。だから、私も頑張りたいの」

「……翡翠ちゃんは優しいのね」

慈愛の視線を向けられて翡翠は恥ずかしくなった。やはりこういうところは姉妹の姉である。こういう柔らかい雰囲気は翡翠には真似できない。

「ごほん。その前に姉さんが結婚できるかをどうにかしないとけないのでは？」

「はっっ」

琥珀の胸に見えない何かが物理的に突き刺さったようである。

「つく、翡翠ちゃん言うようになりましたねっ！」

「姉さんの妹ですから」

しれつと言い放つ翡翠だったが、その向こうで怪獣大戦争もかくな三つ巴戦が勃発しているのはガン無視である。

「でも、少し楽になった気がします」

「そつなの？」

「はい……」

「よかったー、翡翠ちゃんの困った顔も可愛いけど、やっぱり堅苦しい事は考えないほうが楽しいですね」

そう言ってニパーと笑う琥珀だった。

「けど、やっぱり気にする事ないよ翡翠ちゃん。だって、ほら」

琥珀は何気ない仕草で指を向けた。

そこは吸血姫とカレーそして妹の最終戦争を離れた場所で、一撃KOされた志貴（朔によって回収されたらしい）が倒れ伏しており、その側には自分が膝枕をすべきかとアワアワしているシオンの姿があった。それを見て膝枕は自分の役目だ、と翡翠は思った。

「違う違う、そこじゃなくて」

と、その側に目を向けられた。

「……………」

するとそこには、騒動なんて関係ねえと言わんばかりに退避している朔とレンが壁際に並んで、もきゅもきゅとしていた。

「……………あ」

そして翡翠は気付いた。

ケーキを頬張っているレンはさて置き、今しがた朔が食しているサンドイッチは翡翠が作ったものだった。

実は料理に忙しそうだった琥珀に混じって翡翠もと特製のサンドイッチを作ったのである。あまり料理の出来ない翡翠は精一杯頑張った。不慣れな手つきでパンをカットし、震える掌でサンドした。

そうして出来上がったのは翡翠の好きな梅を挟んだ梅味サンドイツチである。ちょっと翡翠は頑張った。「これで志貴さんも昇天だね」と琥珀も言ってくれた。何故かその目は死んでいたが。

しかし、それはパーティー会場の一角から魔王が放つ雰囲気も真っ青な何かを噴出して誰も手につけなかった一品である。だってオーラが悲鳴を上げる骸骨である。ヤバイったらありゃしない。

それゆえ誰も手をつけようとしなかったのであるが、何で誰も食べてくれないのかと翡翠は志貴に進めた。翡翠、酷である。

しかし志貴は劇画な顔をして食べてくれた。その際「我が生涯に一片の悔いなし……！」と呟いていたが、そんなにおいしかったのだろうか。また作ろう。

しかし、それから誰にも手を作られず内心ちょっと落ち込んでいた翡翠なのだが。

「……………」
「……………」

若干であるが、レンの視線から瀕死の傷を負いながらも頑張っている小動物を見ているような温さを感じながら、朔は黙々と梅サンドイツチを食べていた。

その味は口に含めばエキセントリック、一口噛めばワンダーランド、飲み込めば前衛的というよりも寧ろ衛生兵である。しかも隠し味に何を使っているのか、随分とフルーティーに生臭い。どんな臭いだ。

しかし、朔はそんな事に興味ないかのように淡々と食べている。顔は歪まないし、その口も止まらない。しかも一枚食べきったらもう一枚と運んでいく様はライン生産方式のようである。

もし志貴がその光景を見たら驚愕に目を見開くだろう、それくらい普通に食べている。

その隣にいるレンは表情に出さないが、こいつはヤベエと少し戦慄していた。

だが翡翠は気付かない。翡翠は純真なのである。

翡翠の目には朔が美味しそうに自分の作ったサンドイッチを食べているようにしか見えなかったのだ。一心不乱に食べているその様は食いつぶりが気持ちよく、翡翠をそこはかとなく擦った。

そして、翡翠なんだか呼び方で肩肘張る必要はないんじゃないか、と思った。

朔はどんな形であれ、受け入れてくれるのではないかと考えた。

それはまるで姉のようでそうではない。積極的に動く事はないが静かにいつもいる。受動的に泰然と佇ずみ安心できて寄りかけられる、頼れるその姿は。

「……………兄さん」

知らず、翡翠の口元からそんな言葉が零れた。そしてそれは翡翠が思う以上にすんなりと彼女の内側に入り込んで、次の瞬間にはそれが自然な響きを持っている気がしたのである。

しかし、こんな恥ずかしくて言えるはずが無い。琥珀は姉さんと気にもせず呼べるが、それにまだ朔は正式に兄ではないのだ。だから翡翠はそれを胸の奥にそっと仕舞って、その時が来るまでそれは大切に取っておく事にした。

そして、その時がきたら言おうと思った。きっと死ぬほど緊張して、顔から火が出るくらい恥ずかしいのだろうけど、精一杯の気持ちを含めて、そう言おう。

ダブルKOならぬトリプルKOで倒れ伏すアルクエイドやシエル、秋葉を見ながら翡翠はそう思った。

「うう、朔ちゃん味覚の許容範囲広すぎです。私が作った料理と同じ反応とか、少し落ち込んだじゃいます……」

ちょっと感動した翡翠の耳に落ち込んだ琥珀の言葉は聞こえなかった。

ちなみに朔が梅サンドイッチを食べていたのは、争いを遠巻きに見ていて他に食べるものが手元になかったためであるが、知らない

ほじが監幸せ。

短編めるといぶらうと！ とある給仕の呼称変化（後書き）

五月になる前に更新できて一安心。

ネタ募集中。ネタ話はギャグとかほのぼのを書きたい。シリアスは今のところ間に合ってます。ネタはあるけど、テンション的に。

感想くださいえ。

短編めるといぶらっど！ 俺の兄がこんなにずれてるわけがない（前書き）

短編でありながら一万字を超えてしまった。妄想に拍車が掛かっている。

あと、短編のタイトルは何かにかけて考えたい。

今回は読みやすさをどうするべきかと考えて、行間は二列空ける。良ければそれに関してもコメントが欲しいかも。

本編とは関係ないんじゃないよ。

登場人物紹介。（遠野のみ）

遠野志貴：そこはかとなないブラコン・シスコン

七夜朔：?????

遠野秋葉：あからさまなブラコン

翡翠：想定内なシスコン。いつのまにかブラコンの予定。

琥珀：隠すまでも無いシスコン。

地味：オーシャン・パシフィック・シスコ。

登場しないけど遠野楨久：ファミコン。

短編めるといぶらつと！ 俺の兄がこんなにずれてるわけがない

七夜朔は兄である。

本人の自覚はさておき、遠野志貴及び周囲の認識上朔は志貴の兄として問答無用に扱われている。

血縁で考えれば彼らは兄弟ではなく従兄弟の関係になるのだが、七夜の里が壊滅しているのでそれを証言できる者がいない。叔母残念。

更に言ってしまうえば遠野の長男として戸籍のある志貴とは異なつて、そもそも戸籍がない。社会生活を送る上では個人を証明する諸々の書類等が必要不可欠である。

しかし朔は社会不適合者どころではない暗殺者兼殺人鬼。社会に正面切つて喧嘩を売っているとしか思えない。

そんな訳でつまり何が言いたいのかと言うと、二人が兄弟だという証明は周囲と志貴の認識のみという事なのである。別に書類ぐらゐならば秋葉かシエルが違法作製すれば問題ないし、二人としても朔のためならばやらない事もない。しかし、そもそも朔自身がそのような事考えてもいないので問題外である。

とは言え、志貴としては折角再会し一緒に暮らしているのである。幼少の頃の記憶はそれとなく思い出してはいるが、それは記憶なのだからどうしても実感足り得ない。

「つまり、志貴さんは朔ちゃんとかんずほぐれにもっと爛れた感じで触れ合いたい、という事ですね？」

「……ニュアンスはかなり違ってる気がするけど、概ねその通り」

そう言う志貴は引き攣った頬を隠せないでいた。

時は昼前、そろそろ小腹好き始めた頃合である。志貴は少々紆余曲折を経て現在琥珀の下を訪れた。

「でも、志貴さん大丈夫ですか？なんかお疲れなご様子ですけど」「え、そ、そう？うーん、最近ちょつと疲れがたまってるのかな」

白々しく言うが、それは引き攣った顔を隠す意味もあった。

ちなみに何で顔が引き攣っているのかと言うと、二人のいる場所が遠野邸の裏庭に当たる琥珀庭園だからである。

琥珀庭園は一言で表せば魔境である。

時機とかまったく興味ないらしいひまわり畑の向こうではチヨウセンアサガオがこれでもかと言わんばかりに自己主張しており、その側では一輪の彼岸花がひっそりと咲いていた。絶景とはいかないまでも感嘆とする光景である。面白いほど統一されていない。

だが、これ位ならばまだまだ軽い。琥珀が遠野邸の裏ボスと呼び恐れられる片鱗は寧ろ此処からである。

ひまわり畑やチヨウセンアサガオが爽やかに咲き誇っている場所と比べ、明らかに腐海の臭いを放つ地区が広がっていた。

天を貫いちまいそうなドリルの如きもみの木が螺旋回転をしながら空に向かって一斉掃射され、それが飛び立った地面には直ぐに天元突破なもみの木が生え始めている。凄まじい成長速度である。

その隣には妙に毒々しい胞子を飛散させながら悲鳴を上げている草花が群生し、胞子の向こうは良く見えないが、サボテンがやたらと張り切つて蜂のように刺す鋭いパンチを繰り出している。

どうやら何かをサンドバック代わりに拳を打ち込んでいるようで、煙立つ胞子の向こうから「ぐはぁ！ひでぶー！やめるにゃー割烹着ー

！！」とか声が聞こえるがきつと気のせいである。そうに違いないと志貴は見つめふりした。

ついでに「うち！まだ死んでませんか……」とか呟いている琥珀なんて知らない。

しかし、ガーデニングと呼ぶにはあまりに世紀末である。拳王も裸足で突貫する無秩序っぷりだった。

どんな育て方をすればこんな愉快な事になるのか。これで裏ボスの片鱗なのだから恐ろしい。志貴はそのカオスっぷりに故郷の森を思い出した。

「別にいままでの感じでもいいんだけど、さ。前よりももっと何か一緒にしたいって言うかさ、何と云えばいいのか……」

もごもごと恥ずかしいのか、口にしがたい気持ちを志貴は言った。

「もっと構ってほしいし、構われたいと？子犬みたいですねー」
「……そう、かな。でも、そういうスキンシップとか、良くわかんないし」

まるで彼氏に放って置かれている女の子のようである。しかし相

談の内容は恋話ではないのであしからず。そもそも志貴は女ではない。ちなみに朔も女ではない、はず。

志貴の望みというか願いは至って普通である。
兄弟らしく接しあいたい、ただそれだけ。

離れた時間が愛を育てるとは男女の説であるが、今まで共にいれなかつた時間を埋め合わせようと色々したいのは兄と呼び慕っていた弟分にとっては当然なのである。

「んー、この積極性を皆様に見せてあげれば餌に群がる鯉のように襲われること請け合いなんですけどねー」

「え?」

「……ついでにこのどうしようもないぼんくらっぶりも何とかしないと駄目みたいです」

やれやれ、と何気にひどい事を言いながら琥珀はオーバーな仕事で肩を竦めた。しかしその片手間に幾何学模様な葉をむしっている。何の材料にするつもりなのか分からないが、聞かないほうが身のためだろう。

「まー志貴さんがお困りのようですし、相談に乗ってあげないこともないですよ?」

「っあ、ありがとう琥珀さん!実は琥珀さんしかそういうの相談できる人いなくて断られたらどうしようかと思ってたんだよ」

「いえいえ、私が志貴さんの頼みを断るなんてそんな事あるはずないじゃないですかー」

アルクエイドは論外。シエルはお姉さんな人物であるが一人っ子だったようで秋葉と翡翠に至っては志貴自身が兄であるのであんまり意味がない。

そんな訳で志貴には兄とどう接すればいいのか分からない弟のそれとない冷静と情熱の間を共感できる人物がいないのである。有彦は弟なので話は出来るかもしれないが、やはり兄と姉では話が変わるだろう。

草葉の陰で泣いているキャラ立ちに失敗したピアニストなど知らない。

だから志貴は近しい人物で翡翠の姉である琥珀に意見を聞きに来たのである。

ここに来る前、この旨を伝えると翡翠から「やめといたほうが良い」と切実に訴えられ終いには涙目で止められたが、それを乗り越えて琥珀の下にやってきたのだから気合の程が伺えるというもの。その上目遣いプラス涙目にキュンキュンした志貴も大概である。

その様はさながら味方の制止を振り切って戦いに赴く勇者のよう

だ。つまり琥珀はラスボスなのである。

「さーて、迷える子羊を導くのはシエルさんのお仕事ですが、将来義弟になる予定な志貴さんのために琥珀も一肌脱ぎましよう！」

桃色吐息を噴出させる花を伐採するために装着されたガスマスクの上からその表情は見えないが、まず間違いない碌な表情ではないのは確かである。しかし、志貴は琥珀の力強い言葉に頼りになる姿を見て、頑張ろうと一人気合を入れていた。

取り合えず作戦会議にこの場所は相応しくない、と二人は場所を移動する事にした。どこからか「ま、待て割烹着……！ふ、ふふ！例えアタシが倒されようと、第二、第三のネコがお前のまえにゲハ……！？」と妙にコミカルな叫びが聞こえた気がしたが志貴は全力で無視した。

らっんど わん！

「やっぱり二人とも男の子ですから、外で一緒に遊ぶのは外せません」

「ふむふむ」

「朝早くから友人を誘いまくるナカ マ君のように、お外で遊んで汗やら涙やら血を流してその仲は深まる一方です！」

「ほっほっ」

いつの間にやらガスマスクを外してやけに魔女っぽいフードを被

ったアンバーが妙な意気込みでもって己が持論を力説する。そこは屋敷の一階に設置されたテラスである。琥珀は怪しげな雰囲気を感じ出しながら志貴に作戦内容を伝えていた。

「つまり！朔ちゃんと仲良くなるためにはキャッチボールが一番です！」

「……そうなのか？」

「そうなのです！ボールと共に投げ出される会話は正しく言葉のキャッチボール！投げて受け取りの青春まっしぐらな触れ合いで朔ちゃんと距離も縮まる事間違いなし？」

「うーん、確かに言われてみればそんな気も……」

「そうですね、志貴さん！」

どこに納得する要素があったのかは不明だが、力説されるとそんな気もしなくもない志貴。すると琥珀はそんな志貴にニヤリと口元をゆがめた。

そんな訳でまずはキャッチボールをすることと相成った。

とりあえずそのために朔を誘おうとまずは居場所を把握し（琥珀はどこにいようと必ず朔を見つけ出す。なんだか怖い）琥珀が呼びにいったが、どうやら受け入れてもらえたようで、すぐさま朔は現われた

ただ。

「なんで秋葉がいるんだ？」

広い庭を見渡せる遠野邸一階、先ほどまで志貴と琥珀が作戦会議を行っていた外部テラスには優雅にティーカップを傾けている秋葉の姿があった。その側には翡翠までいて、琥珀が楽しそうにそこから眺めている。

「先ほど朔ちゃんを呼びにいったら秋葉様もいらっしやったのでお誘いしたのですよー」

「私がいたら駄目ですか？ 兄さん」

「……いや、そんなことな、けど」

なるほど、と志貴は納得したが、ちらりと前方で佇んでいる朔の姿を見た。

相変わらず寡黙というよりも無口と言う言葉がそのまま体现した姿である。藍色の着流しは左袖がはためき、その黒髪の間髪から蒼い瞳が見えた。

一体何を話していたのだろう、と志貴は何となく気になった。

「秋葉もやるか？」

「……誘ってくれたのはありがたいですけど、今回は遠慮しておきます」

「そうか」

「兄さん達の遊びを無粋な事はしません。安心してください」

秋葉は秋葉なりにこの場を愉しむようで、取り敢えずは観客となるらしい。その気遣いに感謝しつつ志貴は朔に向かった。

「取り合えず確認しよう。俺がこれを投げるから、そっちは投げられたボールをキャッチして俺に投げ返してくれ。それで、俺も投げ返す。」

「こっやって、さー！」

「」

突っ立っている朔の胸に向かって柔らかくボールを投げつけた。

しかし少し狙いはそれで左方向に逸れてしまいが、それを朔はその場から動く事なく右手で難なくキャッチ。ちなみにボールは琥珀が持ってきた。軟球のため突指する心配も無い。さすが琥珀、朔に対する考慮に抜かりは無い。

「これの繰り返しだ。簡単だろ？」

コントロールミスとかで見当違いのところには飛ぶ事もあるが、文句を口走りながらボールを追いかける事も、ぼくて良い。

「朔ちゃん、頑張ってくださいーい」

「いいわね、こういうの。翡翠もそう思うでしょ？」

「はい……そうですな秋葉様」

日差しは柔らかく、良い心地である。向こうでは間延びした応援と微笑ましい会話が聞こえるが、頑張るほどのものだろうか。

とは言え、志貴はこのシチュエーションに心くすぐられた。

夢にまで見たとまでは言わないが、やはり兄弟で遊ぶと言う事に一種の憧れを持っていた志貴としてはなかなかおいしいことである。相変わらずどこかで泣いているピアニストはどうでもいい。

記憶の中、あの故郷の森で過ごしていた頃もこうやって遊ぶと言うのは極端に少なく、もしかしたら無かったかもしれない。一緒に過ごしていたはずなのだが、そんな事をしていないと言うのは今思えばちょっと不思議である。

だから志貴は過去を懐かしむためにも、こうやって遊ぶ事はとても良い案だと思った。

しかし、時間とは残酷である。

思い出は時に美化されて結末すらも塗り替えられるのだ。

「
」

朔は暫くその手に持たれたボールをにぎにぎと弄び、志貴を見た。そしてその手に握られていた軟球が押し潰され、指先から徐々に力が込められていく。

「いやいや、そこまで力込めなくてもいいんだよ」

志貴はそれを見て半笑いである。せめて不器用なんだなーぐらいに思ってた。

そんな志貴をよそに、朔の筋肉は熱を生み出して髪が不自然にざわざわと揺れる。その背中からは何だろうか変なオーラが揺らめき始めていた。具体的には海皇相手に背中を広げてみせたオーラのようである。

「あ、あれ？」

流石に半笑いどころでは無くなって来た志貴。その頬に汗が垂れる垂れる。

「、」
「っ」

込められた力に朔の体が限界を迎えようとふるふる震えていた。明らかに生まれたばかりの小鹿レベルの震えではない。

元から暴力的に引き締められていた肉体が鋼鉄の如くに絞られて、腕の血管がとんでもない事になっていた。隆起した血管は今にも破裂しそうで、ここまできたら寧ろグロい。

そして朔の眼孔に一瞬光が宿った。まるで巨人の星を目指した野球少年のようである。

「」
「」

ゆっくりと振り被られた右腕が志貴には断頭台へと設置されるギロチンのように見えた。

そして。

ぞわり、と志貴は背筋に寒気が走った。

あれ、これシリアスじゃねえぞとか関係無しに志貴は命の危機をリアルに感じたのである。そしてこの寒気はいつも志貴を救ったことを志貴は熟知していた。

「ちよ、ちよつと朔？」

しかし流石にここでデッドエンドとかありえねえありえねえと志貴は内心笑った。冷や汗がとんでもない。

とは言え、冗談で済まされては朔たる由縁ではないのである。

「　　　　　」

志貴が見た事の無い出鱈目な振り振り方だった。そして朔は目視できぬ速さで腕を振り下ろしたのである。その掌に収められていたボールは笑っちゃうぐらい真っ直ぐに飛んだ。志貴の胸に向かって。

光線の如きに突破する空気が悲鳴を上げて、巻き上げられた衝撃波に遅れて地面を抉る。

「ちよ、ま　　!？」

転がるように逃げた志貴を誰が責めようか。穿たんばかりに射出されたボールは円形に変わり、志貴の体を型抜きのように貫こうとしていたのである。キャッチボールどころの騒ぎではないその速さに志貴は命の危険を感じた。

キヤガ　　つつ!!!!!!

瞬きのなんだか戦闘機が側を過ぎ去ったような感覚が志貴を襲った。

どうにかやり過ごした志貴は瞬時にボールが向かった先を見た。

「つつわー……」

志貴呆然。

幸か不幸か、そこは人通りも無い遠野の森であった。

嘘みたいな速さですつ飛んでいったボールは群生していた木々を抉って軒並みぶち倒し、ひたすら奥へ奥へと突っ込んだ。メキメキ、とかベキベキとかすげえ聞こえる。

砲弾が森に向かって撃たれたらこんな感じになるのだろう。

ボールが通った後は地面が抉れて周囲には円形状に何も残されていない。それが奥へと続いてメツチャ環境破壊である。ちなみに撃たれたのは子供や環境に優しい軟球だ。

ちらりと見れば秋葉、翡翠は固まっていた。そりゃそうだ。

そして肝心の朔は投げきった姿のまま制止し。

「力みなくして解放のカタルシスはありえねえ……」

「琥珀さん、アテレコは結構です」

らっんど　とうー！

「という訳で、キャッチボールは秋葉様に怒られたので禁止になりましたが」

「という訳で、って何さ。むしろ琥珀さんアレなんなの!？」

軟球がアレぐらいの速度ならば容易く破裂しそうなものである。

「ふふ、よくぞ聞いてくれました！あれは割れにくく傷つきにくい、かつ柔らかく熱にも冷たさにも強いボールをコンセプトに私が開発した特別製のボールです！私のマジカルパワーと朔ちゃんの力があればアレくらいの環境破壊ちよちよいのちよい、ゴリラが握っても壊れません！」

ORTな軟球ボールである。それとゴリラの握力は平均約500kgf。

それでも割れないボールはまずもって軟球とカテゴライズされるものではない。

だからだろう。ボールは既に余裕で秋葉に没収されている。秋葉の説教付きで。

取り合えず鬼の如くに怒られた二人と朔である（朔は全くの無反応）。志貴と琥珀は、秋葉や翡翠がいなくなった先ほどのテラスで再び作戦会議と相成った。

「結局秋葉様には叱られ、朔ちゃんはキャッチボールのほのぼのムードを全然理解できず。前途多難です」

「その一役に琥珀さんも買ってるんだからね!？」

怒られたぐらいで済んだのだから上等であるが、思わずジト目で見ると志貴。

冗談ではなく死に掛けたのだからこれぐらい許して欲しい。あと数瞬避けるのが遅れていれば、今ごろ志貴は愉快的な挽き肉と化していた。あまりに憐れなデッドエンドである。

「しかし、後悔先に立たず。後悔したって意味がありません、次を頑張りましょう！」

「……大丈夫かなー」

そこはかとなく不安になり始めた志貴。今更である。

「まあこれは兄弟のみに通じる事ではないのですが、兄弟姉妹問わず上の人から何かを教えてもらうことは良くあることです。立場を考えれば教師と生徒、老人と孫、親と子と言えばわかります？」

「まあ、何となく」

何かを教わるとはそれだけで会話の材料となる。

「つまり、先人の知恵を借りるという形で接すれば、それがそのままコミュニケーションに繋がるのです！年齢差の近い兄弟といえどもその経験や視点は異なりますから、きつといい刺激になります。私も翡翠ちゃんにお勉強を色々教えました、今考えれば良い思い出ですねー」

そう言って遠くを見やる琥珀に志貴は内心「何を教えたのだろう」とちよつと不安に思つたり。

「とまー、そんな感じで、兄弟でお勉強会というのは如何です？」

「……でも、朔って勉強見れるのか？」

ちなみに朔は義務教育どころか初等教育すら受けていない猛者である。

「別に学業のお勉強だけじゃなくてもいいんですよ。物の見方や、経験を語るのも立派な勉強です」

「……なるほど。納得はしたけど……大丈夫かな」

そんな感じで勉強会が発足される事となつたが、志貴の不安はど真ん中、大当たりである。志貴はあまりの事にオーバーヒート。勉強会は即刻廃止となつた。

とは言えそれっぽい会話はしていたので、以下その内容をダイジェストでどうぞ。

「　　んなわけで、朔には色々と教わりたいと思つんだけど、実際何話す？　　いや、人体の効率的な解体方法じゃなくてさ。

そんな人の油は面倒だとか話いらないし。だつたらって、最も早い

絞殺の仕方でも遠慮するって。後ろから上に向かって、とか絶対使わないから、てかやらないから。……と言うか、もつとためになる話をしようぜ。

え？ためになる話って何か？えーっと、具体的には何か役に立つ話、とかか？……だからと言って人体の弱点とかはいらないから、大丈夫だから！内蔵を直接触ったら粘膜と痙攣で滑るとか別に聞きたくなし。え？何だかんだでシヨック死が拷問を除いて一番苦しく殺害できるって？そんなのどうでもいいよ！

だったらあれは？今までで苦労した話、それはどう？

、アルクエイドがいるから退魔衝動を抑えられない？……えっと、それは、すまん。俺にも原因の一端はありますか、何と言うか。……ごめんなさい』

今まで生きてた世界が全く違うことを痛感する志貴。そして思った。

兄は立派な殺人鬼だったようです。

ふぁいなる らうんど！

「志貴さん、なんで諦めるんですか！折角いい雰囲気だったのに、これじゃ朔ちゃんに失礼ですよ？」

「いや、俺のせい！？」

「え、違うのですか？」

「……えっと、どうなんだろう」

琥珀に批難された志貴であるが、勉強会とかは共通の認識やら話題がなければ成り立たないのである。殺人講義を開かれても困る一方、解体作業の効率化なら尚更だ。志貴の我慢が足りないと言えなくもないが、しかし正面から批難されたら否定も仕切れない志貴だった。

「まあ、主に志貴さんが悪いと言う点で朔ちゃんに積極的会話を求めるというのも微妙っぽい話なんですし、あんまり気にする事もないと思いますよ」

「……やっぱり俺が悪いんだ」

「私が朔ちゃんの悪口を言うはずがないじゃないですか」
「ですよー」

これだけ信頼されているのだから、理不尽な理由で毎回ほごられたり巻き込まれたりする志貴としては羨ましい限りである。

「そういえば、ちょっと気になってたんですけど」

「何を？」

「どうして志貴さんは朔ちゃんを名前で呼んでるのですか？朔ちゃんがお兄さんなら、そう呼べば良いことなのに」

「……」

指摘を受けて志貴はうぐ、と呻く。

確かに志貴は朔を兄とは呼んでいない。それは「兄ちゃん」と呼

び慕っていた幼少の頃を思えばちよつと不可思議である。志貴は琥珀の問いに誤魔化そうと口元をモゴモゴと動かすが、しかし琥珀の瞳は追及の手を緩めない。志貴が視線を反らしても首だけ動かし見つめてくるのである。

そんな訳で志貴は暫くした後、はあ、と溜め息を一つ。

「……………いんだよ」

「え？」

「恥ずかしいんだよ、正面からそう呼ぶの成れないし。……………本当は昔みたいに呼びたいし、そう思ってるけどいまいち踏ん切りがつかないと言うか、今更どうやって呼べばいいのかわからないんだ……………」

顔を羞恥から赤くして志貴は言うが、琥珀は「何この人、ちよつと可愛い」とか内心想った。しかし、以前の翡翠の相談を受けた琥珀からすれば微笑ましい事この上ない。

とは言え、今のところは自分で頑張れそうなので、琥珀は何もしないと決めた。

「でもどうするんです志貴さん、他に案はないんですか？時間も時間ですし私もお夕食の準備をしなくてはなりませんので、そろそろお暇しなければならぬのですが」

「あ、ああ。そうだね、ありがとう琥珀さん。ここからは一人で考えてみるよ」

それでは、と琥珀は断りを入れて屋敷のなかに消えた。

今現在空は赤く染まり夕暮れが立ち込めている。遠野邸の調理係を一身に任されている琥珀だから、そろそろ動かなくてはならないだろう、と志貴は了承した。しかし考えようによっては志貴ひとりの方が上手くいきそうな気がするのは、決して琥珀のせいではないと願いたい。

「しかし、どうしようか……」

口ではそういうものの、志貴の中に案が無い訳ではない。無いわけではないのだが。

「添い寝は流石に無いだろ……」

七夜の里で暮らしていた頃は幾度となく一緒に寝たことがあった。アレは確か志貴の特権だった気がする。まちまちな思い出であるが、そんな事は思い出せる志貴である。

その際叔母の鼻息が矢鱈と荒かったのは気のせいだろう。

「とは言え、もう思いつくのはこれぐらいしかないな」

もうこれしか思いつかない。何とも狭い選択肢である。

とは言え、思い立ったら直ぐ行動は出来ない。羞恥やら躊躇が志貴の中をランデブーして詮方ないのだ。踏ん切りがつかぬのも無理からぬ事だろう。志貴にだって人並みの一般常識は備わっているのである。たまにふつとぶが。

「でも、なあ……」

だが、本当にこれをやるのか？ と、志貴は自分を疑った。

志貴は当年十七、朔は十九歳。幼少の頃を思えば、まずもってそんな事をする年齢ではない。二人とも立派な男性なのだ。同じ布団で寝るとか、正直冗談だろう。

秋葉の後輩にあたる瀬尾晶なら涎がとんでもないことに違いない。

彼女には里の離れで朔と共に寝た時、眠る朔の頬に舌を這わしていた叔母とは違った危うさを感じる。

「……はあ」

結局志貴は溜め息をついて、テラスから離れていった。内心もやもやが拭えないものであるが、取り敢えずは様子見と安直な考えでもって疲れた肩を回しながら今後への対策を練るのだった。

しかし。

「ふふふ、この私を差し置いて添い寝なんて。志貴さんはイケナイ人ですねー」

どこからかそんな声があったが、姿は見えず、影すら見えない。

うふうふう、と寒気の走る声は夕暮れに溶けて消えた。

「本当、困った人ですね！。

そう思いませんか、朔ちや

ん？」

その夜の事である。結局今日は添い寝は諦めた志貴はいつものように自室で一人就寝していた。微妙な疲労感があった志貴は食事を終えて早い時間ではあるが、あつという間に夢の世界へダイブした。

夜は深みを増して月さえも空から落ちてしまいそうである。湿気は控えめで心地の良い。志貴が直ぐ眠ってしまうのも頷ける事だった。そしてそんな志貴の部屋に今猛スピードで迫る影があった。

「ふう、待ってなさい、志貴

！」

なんかニタニタと涎まで垂らしそうな絶世の美女はアルクェイド・ブリュンスタッド。本編では朔によって出番を奪われ、全く登場できない悲しきメインヒロインである。

そして現在彼女は夜の街中を言葉通り飛翔していた。民家の屋根を足場に空を飛んだり、道路に煙草を吸いながら横たわっていた灰

色にネコっぽい何かを憐れなくらい跳ね飛ばしたり、兎に角そんな
瑣末に彼女の考慮はどこ吹く風。彼女の脳内は今夜起こるであろう
志貴との濃密な一時に集約されていたのである。

なんで彼女がこんなに息巻いているのか謎である。しかしたまに
しかないチャンスをもにしようとするのはとっても正しい事だと
彼女は思っている。アーパー吸血鬼と日々呼ばれているアルクエイ
ドであるが、彼女は彼女なりに考えているのだ。

「今いくからね

！」

月光が照らす宵闇の中、彼女は無邪気に微笑みを浮かべた。
とは言え彼女を邪魔しようとする目論む存在が全速力で向かっている
事も忘れてはならない。

「　　っ、この気配、あのアーパー吸血鬼！また遠野くんのと
ころにっ」

暴力教会のシスターは苛立ちに歯噛みし、その装備を確かめた。
何せ相手は吸血鬼の祖である。ならば通常の装備では太刀打ち出来
ぬことは疾うに知れており、ドラクルアンカーとして名を列ねる彼
女ならば、それは尚更であった。

今日も元氣に見敵必殺。隠れ潜んでいる死者の掃討を行っていた

シエルであるが、戦闘者である彼女に突如として現われた強大な気配を敏感に察知した。嬉しくはないが、最早慣れ親しんだ気配である。

「っく、こうしてはられませんね、今すぐ向かわなくては！」

後輩であり、好意を寄せている志貴が彼女の毒牙にかかる前にと、シエルは危機感を持って遠野邸へと向かっていった。志貴を守る為である、別にもしかしたらそのまま良い感じになるんじゃないか、とか思っていない。

とまあ、そんな感じだ。

「　　なんで貴方がいるのよ、シエル」

「それはもう、どこかの吸血鬼を退治するため、ですよ」

遠野邸内、上に志貴の部屋へと通じる窓が見える庭でアルクエイドとシエルは共に瞳の笑っていない笑顔で相對していた。今夜は月が綺麗だ。殺しあうにはちょうど良い。

しかし、途中に見えた森が抉れていたのはなんでだろう。

「それで、貴方は何故ここにいるのですか」

「そんなの決まっているじゃない、これから志貴と夜を過ごすのよ」

「っ、そんなの不可能です」

「はあ？なんでシエルに否定されなきゃいけないの？貴方には関係ないじゃない」

馬鹿にするようなアルクエイドの物言いにシエルの頬が引き攣った。

「度し難いほどに頭のお莫迦な貴方にもわかりやすく言いますよ。何故なら私が貴方の行く手を阻むからです」

「嘘ね。シエルの事だから、あわよくば志貴と寝ようとしてるんじゃないよ？」

「いらぬ疑いなんて貴方らしくない。さすが出番の少ない女ですね、随分と無様ですよ」

今度はアルクエイドの頬が引き攣った。それでも笑顔の表情は二人とも崩さない。正直怖い。まさに一触即発な空気に周囲の空気が

ぐにやりと歪む。いきなりクライマックスだ。

このまま二人が戦闘を始めてしまえば幾ら遠野邸と言えども多少の損壊は免れない。既にその庭が一人の天然と愉快犯によって破壊されているのである。だから、こんな空気が罷り通るのはこの屋敷の主がいる限りありえないのである。

「こんばんは、不審者がた。お招きした覚えはないのですが、こんな夜遅くに襲撃をかけるなんて甚だ迷惑です。即刻お帰りください」

堂々たる物言いで彼女は現われた。闇であろうとも良く映える美しき黒髪をたなびかせ、白のブラウスに赤いスカートを着こなす遠野邸の女帝、遠野秋葉は眉を顰めて登場した。

「あ、妹。こんばんわー」

「……夜分遅くにお邪魔しています秋葉さん。ええ、このアーパー吸血鬼を退け次第私も帰りましょう」

それまでの雰囲気とか払拭して、気軽にアルクエイドは邪気なく笑んだが、シエルの言葉に顔を顰めさせる。

「ぶー、シエルだってあわよくば志貴と会おうとしてるのに私だけが悪いなんて良く言えたものね」

「ええ、私には遠野くんを守らなくてはならないと言つ正当な理由がありますから」

「そんなの言い訳にすぎないわ。貴方は朔と一緒に死体退治でもしてればいいじゃない」

「……今夜七夜さんは来ませんでした。それと、今この時に七夜さんは関係ありません」

朔は遠野邸に厄介となつている一般社会的なニートであるが、その正体は対化物に特化した暗殺者である。戦闘者としてはシエルには劣るが、殺人者としてシエルに勝る生粋の殺人鬼なのだ。

そんな朔の腕を忙しいシエルが放っておくはずもなく、個人的契約により三咲町の化物殺しを朔は行っているのであるが、今日は何が現われなかった。

その腕は確かなのであるが、気紛れと言つか掴みどころのない殺人鬼はシエルとしても困っていたりする。せめて悪意や邪悪が無いのはせめてもの救いだらうか。

「……私は、お二人に今すぐ帰られるように、と言つたんですけど？」

明らか無視されて苛立ちを見せた秋葉は腕組みする。隆起のない胸が実に憐れだ。目前にいる二人の胸を睨みつけ、すげえ舌打ちをした。

「えー、お客はもてなすもんじゃないの妹ー」

「閉じられた門どころか壁を飛んで越えた貴方が言えることではないです、アルクエイド」

「シエル先輩も、でしょう?」

いつのまにか構図は三つ巴となっていた。あれ、秋葉は争いを止めに来たんだが。

そんな訳でこのままアルマゲドン、もとい最終戦争な三つ巴戦を始めるのかと思われたその時、不意を打って一步抜きん出た者がいた。

「まあ、今は私と志貴の問題なんだから、貴方達に構う事も面倒なのよね」

やれやれ、とアルクエイドは殺気が充満するこの場に於いても彼女らしく振舞っていた。

「奇遇ですね、私も同感です。お一方さえいなくなれば私も早々に寝てしまうのですが。執務や土木業者への連絡も済みましたし」

「……確かに、夜更かしは肌にもよくありませんしね」

一瞬秋葉が見せて気疲れの表情を二人はあえて無視した。悲壮感が半端無いのである。

しかし、秋葉に対しシエルも何となく察したのか、多少の同情を見せたその時を彼女が、吸血姫が見逃すはずがなかったのである。

「そんな訳で、一抜けた!!」

「あ!?!」

ゴールは目と鼻の先である。アルクエイドは一瞬の間をついて志貴の窓へと通じる木を駆け上った。いつも窓は開いているのだ。ウエルカムに開け放たれた窓に許可なんていらぬ。

下でシエルや秋葉の驚愕が聞こえるが、無視である。それよりも今は志貴と触れ合う事が何よりも重要だった。

瞬きの内に彼女は駆け上がった。そして最早あと一足でたどり着くと、最後の枝に足をかけようと飛翔したその時。

「あれれ？」

アルクエイドが普段腰掛ける特等席にあたる枝に、なんかいた。

「、」

彼は間抜け面を晒すアルクエイドがとんでもない速度で突っ込んできても静かだった。

騒ぐとか慌てるとか無縁そうに静謐な様である。そこで彼はいつも通り、藍色の着流しをはためかせながら佇み、この世のものとは思えぬ夢の湖面を思わず蒼色の瞳で夜を映していた。

そして、ダンプカー並みの質量で突撃をかましたアルクエイドに対し、彼はその右手でもって彼女を受け止め。

「うにゃあああああああー！ー！ー！ー！？」

るなんて莫迦なことはず、その手を掴んで一度力を受

け流し、基点となった彼により彼女は推進力を狂わされて志貴の部屋には一歩及ばず、ぐるんっと暴力的に振り回されて地面へと投げ出された。

「　　つく！」

とんでもない速度で地面へと叩きつけられたが、彼女もさる者、刹那のうちに空中で体勢を立て直し、その両足で地面へと着地した。だが、衝撃までは殺せず、彼女の足元が陥没する。

幾らアルクエイドが弱体化しているとは言え、彼女は吸血鬼。その膂力や質量は人間では支えきれないはずが無いのである。しかしそんな芸当をこなした相手はその場を動かさず、みしみしと衝撃に揺れた枝に突っ立っており。

「ちょっと、なんで朔がここにいるのよ!！」

まあ、そんな感じで朔がなんかそこにいた。

「　　。」

「ねえってば、朔聞いてんの!私怒ってるんだからね!？」

アルクエイドがぷりぷりと怒っているが、朔はそんなこと知らんと言わんばかりに反応を示さない。

「七夜さん、……なんでそんな所に」

「朔……よくやったわ」

シエルは今夜現われなかった仕事仲間がいる事に目を見開き、その隣で秋葉は不遜に鼻を鳴らした。森をぶっ壊した件については見逃せないが。

「朔、今なら見逃してあげるわ。……そこをどいて頂戴」

「」

あと一歩のところまで邪魔されたアルクエイドはフーっ！と威嚇する猫の如くに毛を逆立てているが、その相手である朔は地上にいる三人を睥睨するように眺めている。この無反応はアルクエイドにとっても歯痒いもので、到底許容できるものではない。彼女は自由なのである。

しかし、ゴール目前に遠野志貴の兄である七夜朔がいる。この時点で事態はこう着状態を迎える破目になった。三人は分かっていたのである。常識知らずなアルクエイドでさえもその意味が分かっていたのだ。

つまりあの窓を守護する朔を超えない限り遠野志貴の下には辿り着けない事を。これは七夜朔が自分達に与えている試練だと。だが、実力行使は賢明ではない事も分かっていた。何せ相手は一筋縄どころかでは型破りの殺人鬼、そして志貴の兄である。

志貴は自覚していないが、かなりのブラコンである。一緒に寝ようかと考える時点でO.U.T。そんな志貴が慕っている朔を潰すのは志貴に嫌われる事と直結するのだ。

「つく」

「っ」

「はあ」

それに志貴に嫌われたくはないアルクエイドは齒噛みし、あわよくばと考えていたシエルは戦慄し、先ほどまで仕事をやっていた秋葉はさっさと寝たかった。

秋葉としては朔に任せてもいいが、やはり目前にいる二人を放置して自分だけ眠るのは良くない。それに朔にあまり苦勞はかけたくない。森の件は許せないが。

そんな訳で三つ巴から一人加わって三咲町の四天王揃い踏みな光

景が展開される事となった。誰も彼もが互いを牽制しあつて様子を見合う、見ようによっては不毛な光景である。

「 。
」

そして、そんな最中に、ふと朔は一瞬開けた窓の中に視線を投げかけた。

そこには。

「
」

黒い衣服を着用している小さな少女、レンが何食わぬ表情で志貴の眠るベッドに近づこうとしていた。それから二人の視線が絡む。

「
」

そしてレンは朔に向かい、びしっと親指を立てた。無言でグッド。

それを朔は無感動に受け取りながら、とつとつ動き始めたアルク
エイドやシエル、また秋葉に向かって上空から襲撃をかけに行った。

「……………」

朔を見送ったレンはいそいそと志貴の眠るベッドの中に潜っていた。
った。

外では乱痴気騒ぎな騒音が聞こえてくるが、志貴は穏やかに眠り
っぱなしである。それに満足したレンは志貴の胸の中で、彼の夢の
中に入り込んだ。

しかし、今も尚なんかコミカルな悲鳴やら、砲撃のような音が聞
こえるのに志貴が寝ているのにはそれなりのわけがある。

「あらあら、幸せそうに眠ってますねお二人とも」

いつの間にか二人が眠るベッドの側に琥珀が佇んでいた。寝顔を
微笑ましく見つめてはいるが、この部屋には先ほどまで誰もいなか
ったのである。彼女はいつの間にか人間をやめたのだろう。

「まあ、そうではなくては朔ちゃんやレンさんが考えた意味がありませんよね」

そう言っつて琥珀は外でなんか二段ジャンプとかしちやつてる朔を見やる。人間離れという意味では彼も大概である。

「志貴さんが疲れてそうだからちゃんと眠らせてあげたいだなんて、朔ちゃんが話を上げなければ全く気にもしませんでしたけど」

切っ掛けはふとした事であるが、レンが志貴がちょっと疲れている事に気付き、朔も疾うに気付いていたので、レンは朔に相談してそれが琥珀に知られたのである。

琥珀としては朔が気にしているというだけで動くには充分である。

そんな訳で志貴のために今回の運びとなり、志貴ぶつちぎり睡眠作戦が始動されたのだ。作戦立案琥珀、実行レン・朔といった感じで。メンバーに不安が残るラインナップである。

「とは言え、私もそれに参加した一人なんですけど」

その懐から幾何学模様な葉っぱを取り出す。

「人体に毒にならないくらいの睡眠薬なんて作っても面白くないんですけどね」

「はあ、と琥珀は溜め息。そして再びベッドの中にいる二人を見た。今頃レンによつていい感じの夢を見ているのであろう。志貴の口元はだらしない。どんな夢見てんだこいつ。」

「志貴さんは朔さんと仲良くしたくて、朔ちゃんは志貴さんを心配するなんて、羨ましいご兄弟だなー。ちよつと妬げちゃいますよ、二人とも？」

外で今頃安眠妨害を企てていた三人を抑えている朔を琥珀は想つた。

互いを互いに考えあっているのだから、これ以上ないぐらいに家族な二人だ。長い間離れ離れになった家族の仲が順調に行かぬのは良くあること。しかも、志貴は記憶を、朔は過去を失っているのだ。上手いかぬ事のほうが普通である。

それなのに、多少の支障であろうとも乗り越えようとする志貴と絶えず志貴のために動く朔はそんな事すら感じさせない。きつと互いの血が互いを求めたのだろう。あるいは魂と呼ばれるものだろうか。

そして琥珀は、ふと思った。

今眠りについていてる志貴の首を絞められたらどれほど良いのだろうかと。

「うーん、それは確かに魅力的ですねー」

そんな、当たり前のように互いを想える二人を琥珀は羨ましいと思ひ、また嫉妬しないとさえ言えれば嘘になる。

琥珀も人並みに女だ。想い人である朔を独り占めしたい。

その思考の一片足りも自分以外を考えて欲しくない、と琥珀は一心に思う。

拳動の全てや人格を余す事無く琥珀に向けて欲しい、と琥珀は切実に願う。

ならば、その原因に当たる志貴を排除できれば、それは凄く素晴らしい事ではないか。

無用心に首を晒す志貴を　　てしまえば、朔の全ては自分だけのものになるのに。

でも。

「まあ、そんな事やっても意味がないですけどね。第一朔ちゃんに嫌われちゃいますし」

それをやっても朔を縛る事はかなわない。

そんな事をやったって琥珀の八つ当たり、自己満足にしか過ぎないのである。

そして琥珀は朔のために成らない事はしたくない。

そうでなければ、今この時はきつと嘘になるから。

それだけは、嫌だから。

「……では、おやすみなさい志貴さん」

琥珀はふつと力を抜いて布団をかけ直す。

窓際から見える景色は本当に綺麗な夜空で、月光に澄んでいた。

『 『 『 『 ぞ、残像ですって!?!? 『 『 『

暴れまわる三人の驚愕が琥珀の耳に届いた。

それぐらい朔に出来ないはずがない、と琥珀は楽しそうに笑った。

短編めるといぶらうと！ 俺の兄がこんなはずれてるわけがない（後書き）

朔が地味に超人化中。なおこんな事できませんから。

でも十傑集走りは出来る。やらないけど。

あと琥珀さんが書きやすくて困る困る。

過去編 Rhapsody in Crimson 上(前書き)

活動報告に上げるかも、と言っていましたでしたがやはり普通に上げるべきだろうと結論しました……。紛らわしくさせてしまい、申し訳ありません。

ついでに気付けば100万アクセス、ユニークが10万を疾うに突破している事が発覚しました。記念に書くと言ってたのに、過去話も終わっていないとかどうしょ。

これはいよいよ没案を書くときが来たか……。記念なのに。

過去編 Rhapsody in Crimson 上

聳える高級マンション。

N県の地方都市、その一角に佇む仇川^{あだかわ}マンションは所謂高級マンションと呼ばれるに相応しい呈を成している。

駅を近くに覗くその地域では密集するような形で多くの建築物が聳え立っており、仇川マンションはその中心部にある。マンションは仇川という響きの悪い名とは裏腹に清潔感と機能美溢れた趣となっており、外観は曲線にだが僅かに捻れ、外部をなぞるように上に辿ると次第にそれは細くなっていく。

それは上に行くほど階層の部屋数が少ないからであり、その分だけ一部屋ごとの広さが増していくからだ。最上階に到っては一室しか設置されておらず、その地上から始まり捻れ、次第に細くなっている外観は冷たい氷柱を思わす。

階層数は全四十。エントランスとなる一階には居住スペースは作られておらず、広い其処には趣向を凝らされた調度品が数多く設置されている。海外から高い評価を得た新気鋭の絵画や、あるいはどこぞから発掘された古めかしき壺など種類も豊富に置かれており、エントランス中心には観賞用のプラタナスが植えられていた。そこから最上階に到るまで吹き抜け状になっており、白を基調としたマンション内に一色だけある緑は清涼感すらあり、エントランスは美

術館の如き様相を成していた。

エントランスの奥には昇降の階段があり数は東側と西側の二つ。またその階段に挟まれるような形でエレベーターが二つ隣接されていた。電動式エレベーターのボックス型で、奥行き及び高さは約2メートル。狭さとは無縁の程よい造りではあるが、空間には妙な圧迫感があった。

時分は真昼。天上の太陽が傾きかけた頃である。

『ええ、私としても心苦しい事ですかこれも致し方の無い事です。残念でしたね、たっなし辰無さん。ただ安心はして下さい、隠蔽工作はこちらが受け持ちます。存分に死んでも大丈夫ですよ』

「……………わかつております」

その仇川マンションの最上階、街を眼下に覗く一人の男がいた。

最上階の部屋、玄関を抜け一本の通路を真っ直ぐに進むとリビングに辿り着く。質素な造りのリビングであった。高級マンションの最上階でありながらその内観は外観と比較して見落ちするやも知れぬが、よく見てみれば室内の調度品は趣向を凝らされた逸品ばかりであり、華美な装飾を施されぬ造りと丁重なる配置には侘び寂にも似た感慨を与える。

白髪が混じる、静謐な顔つきをした壮年の男である。

上質のスーツに身を包んだ男、仇川辰無は毛並みの良い絨毯を踏みしめながら、ベランダにでる窓際から外を見つめていた。瞳は何も見えていない。

『理由は聞かないのですかな？』

「理由を知っても結末は変わらない。……それに聞いたところで久我峰さまがお答え下さくくださるなどと思っておりません」

男の表情は重く暗い。しかし歪ませてはいなかった。絶望しかないと理解しながらも直向に歩む殉教者のような面持ちで男は携帯電話を使用していた。

『最期の時であろうと言うのに、その不変。流石は仇川辰無、という所ですか？私としては貴方の慌てふためいている姿を期待しましたのに』

「……期待に沿えず、申し訳ありません」

『そんな事少しも思っていないでしょう？』

ふふふ、と惨たらしく電話越しの相手、久我峰斗波は笑った。

電話の向こうにいる相手、久我峰斗波は男の上位者だった。

近年電話越しの相手、遠野分家久我峰家の傘下に入った事もあるが、その経営における手腕や悪辣さ、冷徹さに於いて何一つとして敵わないと男は熟知している。大よそ権力や金銭の機敏さに於いて男の感覚は非常に有能であったが、それでも久我峰の影を踏めるとはまるで思えなかった。

仇川辰無は久我峰が所属する遠野グループのように、親類が運営する財閥の出身ではない。仇川は辰無が一人で立ち上げた名であり、今ではそれなりの辣腕家として名が知られるに至った企業だった。しかし、企業としての噂を先んじて広まったのはその中心人物である仇川辰無の奇妙な噂だった。

曰く、仇川辰無は人間ではない。

遺伝子的に考察すればかれは間違いなく正真正銘の人間だったが、噂は彼の存在そのものではなく辰無の行いそのものにあつた。

『しかし、今でも思い出しますよ。貴方と初めてお会いした当時の事を』

「……若造の向こう見ずを掘り返すのはお止め下さい。それに、今はそんな話をする時ではないかと」

『まあ、良いではないですか。私は覚えていますよ、初対面の人間に行き成り「貴方は信用のならない人間だ」と言われたあの時を』

「……」

仇川は福祉関連の企業である。国内を始め、海外の発展途上国に対し食料の提供を行い、穀物の育て方や苗の発見方法、更には調理方法の提供などを行い、今ではそれ以外の慈善活動も手がけているが、その抜本には徹底した餓えの根絶が謳われている。

その理由は仇川辰無本人が幼少時から極貧の生活を送り、飢餓を体験した事に始まる。

現在日本国内において飢餓を経験する者は少ない。しかし、一握りの人間は今も尚明日も見えぬ貧しさのなか、今日を生き抜く米の一粒すらも手に入らぬ者がいる事も事実である。そして仇川辰無はその一握りの人間だった。

仇川辰無はその日を生き抜くために木の根を齧り、降り注ぐ雨で咽喉を潤した。人肉は食さなかつたが、痩せこけた犬猫を捕らえて食し、熱に魘された事もある。ゴミ箱の中に残された腐った弁当に貪りつき、幾度となく盗みを働いた。栄養不足な体では大抵逃げ切る事ができず、暴力の的にあつた。だが、彼は何度も盗みを行った。

全ては生きるためだつた。親もいながつた辰無は親戚が誰なのかも知らず、たつた一人で生きてきた。未だ子供の身であるからまともに働く事も出来ず、収入を得る事もなかつた彼は、だからこそ餓えた者は人間ではいられない恐怖をこの上なく思い知つていた。

社会から転げ落ちた者のたまり場で日々繰り返される獰猛な争い、一欠けらのパンのために殴り合いが開かれ、遂には人殺しまで行われるのである。そして転がる死体に金目の物はないかと浮浪児が群がり、それを大人が蹴飛ばすのだ。

だから彼は飢えを真底理解していた。食欲こそ人を人足らしめる理性の境界線であり、飢餓に囚われた者は人ではなく畜生に成り下がるのであると。

それだからこそ大人と成つた彼は飢餓を憎んで飢えを根絶しようとした。その人が優しく出来ない理由は満たされていないからだと考え、慈善活動を行い福祉団体はては企業として活動した。幾つもの国に食料を提供し、難民への慈善活動を行った。いつしか彼は企業家として名が知られるにまで至り、今ではこうして地上を見下ろ

す立場にいる。かつて仄暗い地上で空を見上げていた頃とは大違いだ。

しかし、だからこそ彼は人間ではなかった。

彼は人の善意を信じているが、己に善意があるとは到底思えなかったのである。己がこのようにするのは飢えを憎むからで、それは人に対する善意が含まれなかった。全ては人の善意を信じ、己の愚かさを知っているが故だった。

ひとたび畜生として地べたを這いずった彼は他人こそが素晴らしく、己はそれを際立たせる泥土でしかないと彼は知っていたのである。

だからだろう。利益のみを追求する久我峰のやり方を彼は久我峰傘下へ参入した当時一向に認めはしなかった。

「……それに『利用しやすそうな人間だ』と返したのは貴方だと思っておりますが」

『さて、そんな事記憶にはありませんが』しれ、と久我峰は言う。

『ただ、顔合わせをさせた方の慌てようはおかしかったですね。出

会っていきなり険悪なムードとなるのですから』

「……私が貴方に噛み付いていただけです。事実、久我峰さまだけはあの時を愉しんでいた」

『ええ、実際愉しんでいました。懐かしいものです』

そして久我峰は当時を思い出したのか、くつくつと笑っていた。

久我峰傘下への参入は仇川辰無本人が望んだ事ではなかった。別に彼は財力の保持や権力増強のために動く人間ではなかったからだ。それなのに今こうして上と下との関係と成り、過去を懐かしむに至ったのは久我峰からの要望があったからである。

成り上がりで台頭し碌な後ろ盾もないが活発な動きを見せる仇川には当時から敵が多かった。あからさまな示威行為は無論、酷い時には犬の死体（当時から仇川辰無の過去の話は有名だった）が送られてきた。

故に久我峰の話は本人の感情を除けば有益な誘いだった。例え上の人間のやり方が気に喰わなかつとも、辰無としては後ろ盾があればよかった。ただ、それが遠野グループで最も財力を保持する久我峰だと知ったときには辰無は珍しくその表情を崩したものだ。

『本当に懐かしい……』

「……」

久我峰傘下への参入から少なくとも七年以上は経過している。

あらから辰無は久我峰の下で働き続けた。遠野グループへと久我峰の擁護で参入する者は珍しく、当時は未だ健在だった遠野槇久の顔色の悪いながらに慚然とした表情や、小さな黒髪の少女、今では遠野当主である遠野秋葉の可憐な姿を含め、多種多様の感情を辰無は向けられた。

明らかかな蔑みや、僅かにちらつく懐疑、利用しようとする者の肥えた物欲などを一身に受けて、辰無は動き続けた。

その利益のためならば容赦なく人を切り捨て、骨までしゃぶり尽くす久我峰の人間性とはことん受け入れられないものだったが、少なくとも経営者としての手腕は驚愕に値するものだ。辰無本人認めるところで、だからこそ今まで彼の目的や方針に従ってきた。

しかし、それも今日で終わりだ。

『ですが、これで末期の会話が終わってしまうのは如何にも寂しいところですよ。どうでしょう、最期の話題として如何にこのような事になったのか話し合いませんか？私も人並みの罪悪感を抱くぐらいは未だ人間ですからね、貴方とは少しでも長く話をしたい』

「……………わかりました」

志を共に歩んだ故に、如何に久我峰であろうとも名残は覚える、と言う事だろうか。しかし少なくともその声音には男に対する憐憫は無い。そう読み取れた。

『実際貴方は良くやりましたよ。対応を考え、対策を練り、大よそ考えうる障害の排除。情報操作を始め、その殆どを貴方は自ら行つた。実直と呼べる貴方ですから、それを私は好ましく思っています』
実直とは即ち裏を返せば冷淡ですから、と久我峰は言った。だから。

『そう言えば、唯葉さんはまだお元気ですか？』

「……………」

相変わらず人の心を見通す事に長けている。
聞かれたくは無い事であろうとも、遠慮なく久我峰は言葉にする。

「……アレは、健やかに過してきます」

『監禁して、ですか？』

「……っ！、はい」

怒鳴りそうになる心持を辰無は耐えた。

変わり果てた妻を外部から遮断しようと閉じ込めている事実はそのうなのだから何も変わらない。

しかし、何故久我峰は知っているのか。妻を守るためには万策を尽くし偽装工作も完璧だったと辰無は自負している。秘密裏に計画を遂行し、誰にも事実が触れないようそれなりに上手くやってきたはずだった。それなのに、電話越しの相手である久我峰が既に知っているのは何故だ。

あるいは、久我峰が情報をリークしたのか。

あの七夜の体現へと。

『いえ、それは違います』

しかし、言葉にもしていないのに久我峰は否定する。

『いやはや、流石に私と言えども貴重な協力者を「嵐」に投げ出すような真似は致しませんよ』

「……………それは、真ですか？」

『追求をするとは、なかなか追い詰められているようですね。ですがそれほどまでに私への信頼が無かるうとも、私はやっていませんよ。今しがたその事実を知ったのですから、そのように手を回す事など到底無理です』

「……………そう、ですか」

久我峰がこういふのならば、そういうことなのだろう。

腹の底では何を考えているか分からぬ男である。その趣味も人格

もまるで理解できない最悪な男だ。久我峰は男の中の男だった。例え真顔で嘘を吐き、笑顔で騙しもするが己が抱いた志は決して裏切らないと、辰無は久我峰を評価していた。

その心情を推し量る事は出来ないが、『今この時』でこういうのだから、きつとそうなのだろう。

しかし、ではどこから情報は漏れた？

『実直な事は誇るべき事だと思いますが、しかし完全ではなかった。』
「この世、遍く悉くには理解も出来ぬ奇怪がごまんと蔓延してるが完全には存在しない、だからこそ人は完全を目指し続ける」とは今亡き刀崎梟の言葉ですが、どれだけ頑張ろうとも穴は必ず開いていく……その穴が一体何なのか気になりますか？』

「……はい」

久我峰は厭らしくもわざとらしい口調だった。これが作られたものではなく、素の声音であるのだから侮れない。

しかし、今更理由を知って何になるというのか。

書類工作はもちろん、情報操作、目撃者の排除、あらゆる手は下

したはずだ。

だが結果はこれだ。どこからか情報が漏れて、今まさに『鬼』が迫ってきている。

どこで間違えた。どこで下手を打った。思考は潜り込んで真実を探り当てるが辰無の中身にそれらしき影はちつとも見えない。心当たりが全く無いのだから、きっと辰無自身に原因は無いのだろう。ならばどこから情報は逃げたのだ。

いや、待て。

今久我峰は聞き逃してはならない名前を出さなかったか？

「……………刀崎」

『ええ、そうです。刀崎のところの白鷺嬢がどこからか嗅ぎつけたようです。覚えていますかな、白鷺嬢を？刀崎家のご令嬢で家系で言えば三女になりますね』

「……………ええ、それとなくは」

『だったら話は早いです。白鷺嬢、どうやら刀崎梟がお亡くなりになってから色々やっっているようですが、今頃は貴方の話を聞き及

び有頂天で吹聴して周っているのでは？「仇川唯葉は気が狂い反転したのです」と、締め上げられた小鳥の鳴き声にも似た声でね』

「……………あの、雌狐が……………っ！」

ぎりぎり、と携帯電話が握りしめられ悲鳴を上げる。

しかし、それだけでは彼の憤りは治まることを許さなかった。

刀崎白鷺とは未だ刀崎梟が存命中に産まれた息女であり、立場で言えば梟の三女に当たる。当時七十を越えた梟が跡継ぎのために拵えた子供だったが、かつてその刀崎としての才能の欠如から彼女は無能と罵られ放逐された身の上だった。

その刀崎白鷺が動いている。

彼女に知られたことは厄介だ。白鷺自身は取るに足らない存在であるが、彼女に知られたという事はつまり。

『刀崎に知られたのは厄介ですが、しかしそれよりも問題なのはそれが退魔の耳に入った事です。七夜朔はもう間もなくやってくるでしょう。あとどれほどかはご存知で？』

「……………恐らく、もう二時間は掛からないでしょう」

内心忸怩たる想いで辰無は言った。

三時間あまりでやってくると知れただけで上等であるが、しかしその三時間でやれる事など少ない。取り合えず娘は親戚の所へと行くように言ってはあるが、耳を澄ませば近づいてくるだろう鬼の吐息が聞こえてきそうだった。

『誤差としては一分単位で考えておきなさい。彼には豪胆よりも臆病者の思考で対策を練ることが望ましいです……しかし、なるほど。確か南の方にいたらしいですが、相変わらずなようです』

「……七夜朔と、お会いした事が？」

ふと訝しく問うと、久我峰はこの男には珍しく暫しの逡巡を経て『ええ』と応えた。

『私も以前までは遠野の館に住んでいましたが、七夜朔は一度だけ拝見しております』

数瞬、久我峰が何を言っているのか辰無は理解できなかった。しかし瞬きの内にその恐るべき事実を辰無は嘔み締める。

「……それは、つまり」

『はい、七夜朔は一時遠野邸にいたのです。約十年前の事です。先代当主榎久様によって七夜朔は囲われていたのですよ、遠野の館に』

「なぜ、七夜朔が……、それは真ですか？」

それから先は久我峰本人の言葉によって遮られた。

先ほどの懐疑とは異なる衝撃が辰無の口から問いを放った。それほどまでに、その情報は信じがたいものだった。遠野グループの本拠地に当たる遠野邸にあの『鬼』が住んでいたなど、あまりに信じられるものではなかった。

しかし、久我峰は『本当です』と言った。

『ええ、疑うのも無理からぬ事ですが事実です』

「……」

『七夜朔は当時七夜の里が壊滅したのち、刀崎梟が確保し彼によっ

て誑かされた親族から強要された槇久様によつて軟禁状態にされて
おりました。期間は恐らく一年にも満たないでしょうが、少なくとも
も十年前に七夜朔が遠野邸にいたのは間違いありません』

「……それを、知っているものはどれ程？」

『さて、あまり多くは無いと思いますが。何せ七夜朔を困っていた
のは当時身内に甘いとは言え遠野当主だった槇久さまと、妖怪とま
で言わしめられた刀崎梟です。彼らは相手取り、そんな事を自ら知
るうなどと考える事が出来る方も当時少なかった』

確かに遠野当主と刀崎当主を相手に攻勢を仕掛けるなどという愚
行を犯すものはいないだろう。目的のためならば手段を選ばぬ苛烈
極まりない遠野槇久、そして手段のためならば目的を選ばぬ壯絶極
まりない刀崎梟。その力は決して侮つて良いものではなかった。

しかし、事が事だ。恐らくその事実が知れ渡れば忽ちに盤上がひ
っくり返る。

遠野と七夜は何年も前から敵対関係にある。遠野槇久が七夜攻め
を行い、遠野の私兵が？七夜朔？と？軋間紅摩？によつて壊滅状態
に陥つた真実を知る者は揃つて口を紡ぐが、あの戦争に赴かなかつ
た者へと語つても信じられはしないだろう。当時子供だった朔にそ
の様な事が出来るはずがないのだと。

それほど前から遠野と七夜、正確には遠野と七夜朔は殺し合いを繰り返してきた。いや、七夜朔によって遠野は殺されてきた。朔の復讐によって殺められた総数は数知れず、その中には欠かす事のできない人材もいた。

そしてその凶手は留まる事を知らない。辰無は以前から遠野槇久の重体には七夜朔が原因だと思っっているが、これは間違いないだろう。そして十年前に七夜朔が遠野邸にいたのが事実であるならば真実が増すに違いない。しかし、それが真実であるならば恐るべき事だった。

それは即ち、十年前から七夜朔の復讐によって惨劇が始まっているという事だ。

『そして私が七夜朔を見かけたのもそんな折の事ですが………聞きたいですか？』

珍しく久我峰が問う。

それは相手をいたぶる手段か、あるいは考えにくい気遣いか。

「是非に」

『……あれは本当に偶然です。私が望んだ結果でもなく、また誰か

が用意した場面でもありませんでした。しかし如何なる数奇か、私は見てしまったのですよ。七夜朔の姿を』

「……………」

『遠野邸で当時ご健全だった槇久さまに呼び出された私はその時、ふといつもならば気にもしない外を見たのですが……………』

「はい……………」

躊躇いがちに久我峰は一呼吸を置いた。

『そこにはこちらを見ながら己の体に刃を突き立てる七夜朔の姿があったのです。私を見ながら、なんどもなんども腕に足に腹に胸に、なんども、なんども刃物を突き刺して。……………血飛沫に塗れながら、真っ直ぐに私を見て』

「……………それは、なんという」

そこから先は言葉に出来なかった。

当時話を聞く限りでは小さな子供だったらしい七夜朔がそのよう

な自傷行為に走るなど狂気の沙汰としか思えない。いや、あるいはだからこそ七夜たる由縁なのだろうか。

『アレは人の身を纏った悪鬼です。いえ、悪鬼ならばどれほど良かったのでしょうか。あれはそこらの殺人狂とは異なる正真正銘の殺人鬼です。狂気がそのまま正常と化した人殺の鬼です』

殺人を決行する存在には少なくとも三種類いる。

殺人によって己が目的を達成する人間。

殺しそのものに快楽を見出す人間。

理由無く殺す人間。

だが、七夜朔はそのどちらとも違つと久我峰は忠告する。

『お恥ずかしい話、私はあの時始めて七夜というものを見たのですか、身震いしましたよ。当時七夜朔はまだ小さな子供でしたが、その茫洋な佇まいとどこを向いているかも分からないその視線は今でも時たま夢に見ます。……ですが、私が真底肝を冷やしたのはその瞳でした』

「……貴方が肝を冷やしたのですか？」

『私を何だと思ってるんですか。少なくとも半分ぐらいは貴方と同じ人間ですよ』

無然とは違う感情で久我峰は苦笑したが、すぐさまそれも潰えた。

『あの瞳は危険です。蒼の魔眼を顕現した感情も読めぬ瞳ですが、溢れんばかりに詰め込まれた殺意が一切彼から滲まずに内側にとぐるを巻いているのですよ。分かりますか？当時幼いと言っても良い子供がそんなものを抱えている異常を。……彼は殺意の塊、ありつたけの殺意しかない本物の殺人鬼です。殺人そのものを目的とし、快楽を抱かず殺人そのものを理由とする殺人鬼。常識など通用しない心がけなさい。……でなければ、あつという間に死者の仲間入りですよ』

知らず息を呑んだ。そして戦慄した。

果たして、それは人間なのだろうか。

「……かしこまりました」

辰無はそう言葉を紡ぐ事しか出来なかった。電話越しであるというのに久我峰の気迫が伝わってくる。危機感と少しばかりの悲壮を認めた声音である。飄々とした態度ですらない相手を飲み込まんとする久我峰の意志は、それほどまでに七夜朔を警戒しているという

ことだった。

ならば何故、久我峰の目的は。

『そろそろ時間でしょうね』

「……はい」

今生の別れは刻々と近づいてきていた。迫る七夜朔に対し逃れる術は少ないながらも無くはないだろう。しかしそれは仇川辰無のみが逃れる場合だ。

何故なら彼は人間であるからだ。

噂によれば七夜朔は人間を殺さず、魔に対してのみその猛威を揮うと聞く。あくまで噂の域を出ぬ流言飛語であるがもしその噂が真ならば、彼は逃げおおせる可能性はある。

だが、彼は逃げられない。

正確に言えば、逃げない。

妻を置いて逃げるなど出来ない、妻を連れて逃げる事も難しい。

それを分かっているのだろう、久我峰は声をかけてくる。

『……このような事、本来ならば聞くべきではないのかもしれないかもしれませんが。貴方は後悔をしていないのですか？』

「……どうなされたのですか、久我峰様。貴方らしくもない」

珍しく垣間見える久我峰の気遣いを辰無はこれまた冗談めいた口調で流すが、久我峰はそれを許さなかった。

『そうですね。私らしくはない事です。明日には雨でも降るのではないのですか。何ならばご自分で確かめて御覧なさい』

「……それは」

無理な事だった。

仇川辰無が明日を迎えられないと、既に二人は理解している。朔に狙われた者が逃げおおせるはずが無い。何故なら迫ってくる存在は七夜なのだ。彼によって殺された混血は数知れず、また純然たる魔ですらも塵殺せしめた絶滅主義者。その傍若無人さは嵐にも例え

られる殺人鬼。一度彼の眼に入れば、忽ちに亡骸と化すだろう。

しかし、伴侶を置き去りに逃げ延びるなど、辰無は出来ない。

逃げるとは、全てを捨てるという事だ。

人間関係、財産、思い出や感情に至るまで、すべてと言うすべてを置き去りにして逃げる事は悲しいほどに辛い選択だ。今までの生活はもう送れず、誰とも接触できないそれを人は孤独と呼ぶ。そして辰無は孤独に耐え切れるほど人でなしではなかった。

久我峰はそもそのような事態になる前に対処できる自信と自負がある。何故なら彼は陰謀渦巻く遠野に於いて尚腹黒さでは追隨を許さぬ久我峰斗波である。久我峰斗波は腹で考えるとまで言われた陰謀の手だれなのだ。微笑んだ表情から甘い言葉で罠を張り巡らし、毒の沼地へと引き釣り込む虻。陰謀を逆に利用して相手を地獄に叩き込む久我峰の長男なのだ。まずもって逃走などという選択肢を行うなどありえない。

『私は志し、それを叶える為この手を汚しています。別に私はそれで構わない。何故ならそれが私にとって最も価値ある事だからです。秋葉様が婚約を破棄しても尚、私はあのお方のため、秋葉様の本心を叶えるために動き続けてきました』

「……」

『そんな時に私はあなたと出会った。そして貴方も私に賛同してくれました。賛同して、私の個人的パートナーとして秋葉様を引き釣り落とそうとする者を秘密裏に処理した事もありましたね』

「……」

『けれど、全ては貴方が行わなくてもよかった事だ。貴方が行わずとも、私が行えばよかっただけの話。手間が省けた程度の事です。そしてその手間を省いた結果、貴方の末路は決まった。……だからあの日、私と共に泥沼を歩む事を選んだ貴方は本当に後悔はしていないので?』

「…… 確かに」

静かに、辰無は言葉を紡ぐ。

楨久が亡くなり遠野当主は未だ若者である遠野秋葉が執り行っている。しかし、それが原因で今遠野は妖しげな空気が漂っていた。秋葉は能力的には問題がなかった。ただ彼女が若いことが問題だったのだ。

経験のない者は判断などを失敗する事が多々とある。財閥の当主、あるいはグループのトップとはその双肩に数え切れぬ命運を背負っているのだ。しかし、それでも彼女が遠野当主であるのは実績はなぐとも溢れん才気でカバーを果たし、久我峰が秋葉の補助に尽力しているからである。

久我峰も含み二人は若い。老人共も傀儡として二人を御す事が出来るかと踏んだのだろう。しかし結果はこの二人によって遠野は持ちこたえ、更なる飛躍を見せんとしている。

だからだろう。今遠野グループは二分化を見せようとしていた。元から一枚岩の財閥グループではなつたが秋葉を擁護する秋葉派と、保守派とも取れる行動を起こす者が寄り集まる刀崎派。それが明確化を果たそうとしている。

久我峰はそれを見越し、元は婚約者である秋葉のために奔走し彼女の立場を守ろうと今も尚懸命な裏工作を行い、対陣の人間を処理している。

そして辰無は久我峰の手伝いを買って出、今まで共に協力者として動いてきた。

「……私がいなくても問題はなかったでしょう。寧ろお力添えがどれほど微々たる物だったか、痛感も致しております。幾度自らの至らなさを思い知り、人の汚さに吐き気を覚えた事か」

久我峰の傘下に入り、まず始めに任されたのは裏切り者の処理だった。それを彼は奥歯を噛み締め遂行した。助けてくれと懇願する裏切り者を彼は目を背けて処理した。

「私は間違っていたのかもしれませんが。己の領分を見誤り、存外の魍魎が跋扈する人の世を流す事も出来ない私は、久我峰様と共に歩む道を選ぶ事がそもそもの間違いだったのかもしれませんが」

『……………』

しかし、と辰無は言った。

「後悔は、一度たりともありませんでした」

『……………』

「今でも貴方のことは気に喰わない。言葉が許されるのならば、貴方とは合わない」

人の善を信じた仇川辰無と、人の悪を受け入れた久我峰斗波。

彼らは生きた世界が異なった。

貧困に喘ぎ、飢餓の苦しみを知りながら早々に人道を踏み外し人を殺めることも辞さなかった辰無は己が薄汚さをせせら笑いながら、狭い路地裏で困われた空を見上げていた。

富と権力を約束され、何不自由ない人は邪悪が腹の底に潜む事を潜在的に見出していた久我峰は人を嘲いながら、誰よりも高い場所で地上を見下ろしていた。

同じ日本に生まれ育ちながら、なんとという格差だろう。

人にはそれぞれの世界がある。

辰無には辰無の世界があり、久我峰には久我峰の世界がある。

そしてその世界が奇縁によって触れ合った。

「ですが、久我峰様」

どれだけ薄汚いものであろうとも、そこには必ず光がある。

絶望の中に希望を見出す事と同じように。
地獄の中に天国を見出す事と同じように。

あの地上から見上げた小さな空のように。

「貴方の志はきつと尊いものだ、私は思っています。あの日貴方のお心を聞かされた私は、婚約を破棄された今でも遠野秋葉様の望みをかなえようとするそれを、きつと善いものだと思えました。それは今でも変わりません」

暫し、久我峰は無言だった。無言で辰無の言葉を噛み締めていた。

『……いやはや、煽てられることは慣れていますが、……そんな所を気に入られたと直接言われるのは正直、戸惑うものですね』

「……………久我峰様」

久我峰は孤高だった。財に恵まれ権力を握り、見た目が醜かろうともその周りには大勢の人ばかりがいた。しかしそれはおこぼれを預かろうと屯うハイエナで、張り付いた愛想を振り撒く事しかできない不快な存在だった。久我峰はそれさえも利用したが、結局彼の周りには利権を付けねらう俗物しかいなかったのだ。

それを彼は悲しいと、あるいは虚しいとは思わなかった。人に期待するべきはその人がどれほどの機能を持ち、それを発揮し利益を得る事ができるかということだけで、それ以上のものはなかった。

だと言うのに、久我峰は。

『そうですか、……貴方はもう、いなくなるのですか』

「……」

『ふむ、なんででしょうねこれは。ふむ、この感じは……私にはよくわかりませんが、まあ、いいでしょう』

「久我峰様」

自身の内面に生じる心持を久我峰は把握しかねた。心を司る久我峰でありながら、彼は今この時己の中に波立つ感傷の細波をどうする事も出来ないのだった。辰無を失う事は真に惜しい事ではあるが、それも何かで埋め合わせれば良いだけの話なのだ。

しかし、それを整理するには時間があまりに足りない。

そして、それをどこか嫌がっている己さえいる。

『名残惜しさはありますが、そろそろ時間も差し迫った事です。これで充分ですかね、貴方のほうには何かありますか？』

これで終わり。そう思えないほどに間際は淡白だった。元々辰無は闊達な人間ではないが、それでもこれが今生の別れだと思つと物悲しく思えてしまう。

しかし、だからと言ってこれ以上長引かせても意味は無い。時間も無い事だ。

それに、二人にはこれくらいあっさりしていたほうがちょうどよかったのだろう。

「いえ、ありません」

『……わかりました』

僅かに沈黙が舞い降りる。もう語るべきことは語った。これ以上に何かを告げることは無粋。しかし、そう思えば思うほどにこの沈黙は重たさを増していく。ただ久我峰の内心はどうなのか、それだけが気になった。

そんな時だった。静けさが漂う室内に羽のような声音が浸透した。

「ばば、準備できたよーっ」

室内から遠くパタパタと軽やかな足音が聞こえてくる。子供の足音である。

「ふふ。しほ子ちゃん、ですか。彼女はどつするのぞ？」

「……西に親戚がおります。そこに預けようかと」

「私が面倒を見ても構いませんよ？」

「……娘を手籠めにはされたくないのぞ、遠慮いたします」

「失礼ですね。これでも私は真摯なのですよ、変態という名の」

「……」

と久我峰が笑う。気付けばこんなにも短い遣り取りに先ほどまでの湿っぽい空気はどこかへと消え去ったようぞ、名残もない。きつ

とこんな軽やかさが上等なのだろう。

『では、辰無くん』

そしてふと、電話越しの向こうで何故だかわからぬが辰無にははつきりど。

『いずれ地獄でお会いしましょう』

久我峰が笑っているように思えた。

「……久我峰、さま」

電話が切れて、味気ない電子音が耳を打つ。

プー、プーと単調な物音には久我峰の声音は見出せない。しかし、それでも辰無は暫く携帯に耳を傾けていた。

プー、プー。

プー、プー、。

「ばば、もうわたし行けるよー？ ばばよー？」

荷物は玄関へと置いてきてあるのか、手ぶらのままでしほ子はリビングに顔を出した。愛らしい顔が不思議そうに父を見ている。それに辰無はどこか躊躇うように携帯を眺め、そして閉じた。

「……しほ子、もういいのか？」

「うん、おばさんの家にママもいるんだよね？わたしすぐに行けるんだっ」

しほ子は？にへら？と笑った。彼女は当年七歳になったばかりの少女なのだから、母が側にいない事に寂しさを覚えているのだろう。

「ママは？りょうりょうする為に？おばさんの家にいるんだよね。わたしおとなしくしてるよ、ママが早くなおるまで我慢するよ、しほ子えらいでしょー！」

「……、ああ、そっだな」

そう言っただけで彼女は小さな体を包みこんだ白いワンピースを軽やかに揺らした。

彼女には心苦しく思うが嘘を告げている。未だ小さな我が子に自

分達の平穩が潰える運命を知らせるにはあまりに酷だった。

既に唯葉の生家には連絡を入れてある。ここまで来るのに幾分も世話になった彼らを最期に頼るのは悪いとは思ったが、頼れるのは彼らしかいない。彼らはしほ子の件を謹んで受け入れてくれた。既に唯葉とは会えぬ事を理解しながら、彼女の娘を引き取ってくれるのだから、心強いと思う。

後塵は残さぬと決めている。

久我峰にも、彼らにもたどり着かせはしない。全てを引き受けて、この命を捧げて止めてみせる。だからこれが最期なのである。

「ぱばもあとから来るんでしょ？わたし待ってるからね、それでママとわたしと一緒に寝るって約束だよ」

無邪気に笑う彼女の顔を見るのが辛くて、思わず顔を強ばらせる。

向こうにたどり着き、いつか真実を知るときしほ子は恨むだろうか。悲しんでくれると父としては嬉しい。それぐらいには自分達を慕ってくれていたと言う事になるのだから。

そして思う。自分は家族として、一人の父親として彼女を幸せに

出来たのだろうか。

全力で愛情を注いだ。彼女と共に過ごす時間を多く取った。だがしほ子にそれを聞くのは出来ない。聞けば楽になるのだろうか。今の瞬間のみは。

「……そろそろ時間だ、行きなさい」

だからしほ子の問い掛けには答えられなかった。それぐらいの自信すら持てない彼は、これ以上の嘘をしほ子に聞かせたくは無かったのだ。

「？ うん、わかったよー。それじゃあいつてきますー」

少しばかり怪訝な顔をしたが、しほ子はそれを引っ込ませてくれた。笑顔で彼女は玄関へと振り向いて、辰無に細い背中を見せた。

「……………っ」

その背中を見て、これが最期だと辰無は思い知った。暗い衝撃が彼の心を飲み込んだ。

「……ばば？どつしたの？」

しほ子の背中から包み込むように、辰無は彼女を抱きしめた。

腕の中にすっぽりと収まったしほ子が苦しそうに息を詰まらせて、困った顔で笑っていた。父の温もりが嬉しいのだろう。辰無はそれに構う余力すら残さずに、一心不乱の力で彼女を抱きしめた。

強く、強く。

強く。

走る電車の天井に彼は座り込んでいた。

流れる景色は繁栄した街並みを見せ、それが瞬く間に過ぎ去っていく。轟々と風が彼の体を吹き飛ばそうと荒ぶった。それは空気の塊で、その中を突き進んでいく物体が切り開く衝撃だった。だから、本来ならば緩やかな風であるのに、彼が感じる風量はまるで青嵐のようである。

その風に流されて彼の黒髪が後ろへと流れていた。切っ先のような蹴に、削げた頬は鋭利な印象を抱かせる面持である。そしてその作りはなかなか整っているようではあるが、それを構成する寂寞が台無しにしており、何よりもその眼光が危うい。

虚空を思わす蒼の瞳。それがただ茫洋に前面を見映していた。

「。」「

時折跨ぐ鉄塔を身を擦ってかわし、七夜朔はただ静かに足を崩して座り込んでいた。

己が足場として座り込み、勝手に動いている面妖極まりない物体は一体なんなのだろう。鋼鉄の塊がこれ程までの速度で走る事ができるのは、骨喰の大雑把な話しによれば？でんき？と呼ばれる摩訶不思議な力が関わっているらしいが、そんな事はどうでも良かった。

彼には理解できない事であったし、理解する必要性も感じられない。

『まア、そんな訳で、ダ。あの癩癩持ちなの情報を信ずるならば、今から向かう先に化物がいるらしいなア』

ひひ、と帯剣された日本刀、数珠や札が巻かれたおどろおどろしい容貌である骨喰ほねほみが彼の腰元で不愉快な声音を軋ませた。

「、」

『んでエ、どうするよ朔。どのようにして惨たらしく殺す？ 縊るか、抉るか、千切るか、はたまた散らすか。どれでも良いさ、お前の好きなように殺せ』

雪崩れる空の風であつても金属音は朔の耳、あるいは脳に刻みこまれる。空気を震わす発声ではない、契約を交わした者だからゆえの言葉である。

現在太陽は昇り始めて暫く経ち、そろそろ昼を越えようとしていた。恐らくもう間もなく目的地へとたどり着くだろう。正確な距離までは未だ分からないが、情報が正しければ大よそあと少し、と骨喰は言う。

『あるいは屠殺場、と言ったところか。ひひ』

無論、相手が常道から外れた化物であるならばただでは済まされぬ。

何時もこの世は諸行無常。木乃伊とりが木乃伊になる事も珍しくは無い。

相手がどれ程のものかは分からぬが、死ぬ可能性はつき物である。

幾度となく化物を殺した。これまでも、そしてこれからも。

だからやがて何者かに殺される時がくるだろう。惨たらしい死体を晒す、その時が。

それまでは今しばらくはこの血の香りが立ち込める戦場で寝静まろう。亡骸と共に。

『しかし、あの無能め。本当に情報はあってんのか？』

「。」「

情報にではなく疑りではなく、本人に対する嘲りでもって骨喰は言う。

しかし、朔に情報を探る術はなく、また探る価値も見出してはい

ない。

情報に関し意味はあるだろうが、価値など存在しないのだ。

ただ朔は殺すべき相手がいるのだからそれで良い。他はいつでも良い。

『仇川の女が反転した、か。あの無能は面倒な事を遣ってくれる。利権争い結構結構、狂気に巡って全員皆殺しだ』

果たしてそのようにはとても思っていない声音で骨喰は呟く。

昨日の事、日本の南にて住宅一棟を巣くう塵芥を処理した後に退魔から伝えられたによれば刀崎白鷺が仇川の情報を吹聴していたとの事。それによれば仇川辰無の妻、仇川唯葉が反転したとの情報があり、朔がF県へと討伐に相成ったのだ。

仇川唯葉の生家は久我峰傘下の家元であり、無論久我峰に通じるからこそ混血の家柄である。その血筋は存外に古いものであり、もし反転した事が事実ならば退魔としても苦戦はするに違いなく、それゆえに？七夜？である朔へと討伐依頼が回された、と言うのが表向きの理由だった。

事実は違う。これは歴然とした利権争いだつた。遠野グループは決して一枚岩ではない。その間隙を付狙う強硬派の手引きにより七夜朔が力を削ぐ、という名目がこの討伐には科せられている。

強硬派は日本に根付く魔の根絶を訴える退魔組織の派閥であり、協力的かつ和平を望む混血、あるいは人間社会に溶け込んだ魔であろうと一切の容赦なく絶滅させる事を目的としている。人間社会の理想を貫き通す実力主義の人間らだが、現段階に於いては如何せん少数派であるためその影響力は少ない。

恐らくは彼らによってこの討伐依頼が発声したのだろう。朔が？七夜？であり、成功率が極めて高いという分かりやすい構想によって。

『くせえ、くせえ。ひひ、人間つてのは如何せん臭って詮方無い。胎の底はドブの臭いがすんぜ』
だが、そのようなものは関係ない。

『ああ、全くもって関係無工。目に見えるもの全ては手前の得物だ。残念なくこの世にはこびる魔を踏破しろ。轢殺した後に出来た屍の道なりこそが手前の血肉と化すだろうよナ』

その裏に蠢く悪意、遠野グループの利権争いを叩き潰して朔は己が儘に行けば良い。

そして朔の瞳が輝きを増していく。

煌々と鈍い光を映し出して、蒼の瞳は痛いほどに蒼くなっていく。

ちりちりと脳裏がこそばゆくなっていき、薄霧のような霧が如実に視界へと顕現した。

次第に白色の霧が流れる風景に紛れていく。とある場所には濃い霧がかかり、その他の場所に霧は薄っすらとあった。濃淡の違いはあれど霧は朔の視界に映る。

魔眼は未だ標的を捕捉しない。恐らく外部にはおらず、そして距離も遠い。ならば情報は正しいということなのだろうか。

ならば早く赴くに限ると言うもの。

標的が離れる前に近づき殺すこそ、狩人の嗜みであった。

次第に足元の？鋼鉄？が速度を落としていく。何処かへとたどり着いた様子で、目的地の近場である。視界の中には人ごみが出来上がっており、皆この物体に興味がないようで下を向いている。

朔はゆるりと腰を上げた。緩やかに速度は落ちていくとは言え、未だ早い物体が生み出す風に藍色の着流し、特に中身の無い左の袖が乱暴にはためいた。

気を払う事もなく裸足の爪先が鉄板を蹴り上げて、その体が虚空に踊った。

目的地は近い。

その情動なき瞳の向こう、天を穿つ尖塔。

過去編 Rhapsody in Crimson 上(後書き)

感想、意見、コメントや批判などお気軽にお送り下さい。

過去編 Rhapsody in Crimson 中(前書き)

長すぎたから三部作となりました。

過去編 Rhapsody in Crimson 中

ちん、と鈴を指で弾いたような機械音を響かせてエントランスのエレベーター、その扉がゆっくりと開かれた。

誰もいない扉の中には噓せかえらんばかりの血が溜まっていて、扉が開かれた事によりそれが外へと流れていく。

そしてその血の中に、一際目立つ金属の色合いが見えた。

良く見るとそれは星型のブローチであり、内部に納められた家族写真には壮年の男と、美貌を湛える女性、そしてその間には太陽のような笑みを溢す少女の姿があった。

しかし、エレベーターの床を満たす血により写真は殆ど赤く染まって良く見えないし、ブローチもまたその輝きを赤く歪ませており、本来の美しさからは程遠かった。

ぴちよん。

沈黙が横たわるエレベーター内にひとつ、水の滴る音がして緩やかに波紋を生み出した。

ぼたぼたと血の滴りは等間隔に繰り返されて、壁際に赤色の水分が伝う。

まるで天井に何か在るようだった。誰か、いるようだった。

そして、そこには　　。

政略結婚ではあったが、妻の事は大切にしてきたつもりだった。

結婚し子供を授かる事の素晴らしさを知りつつも、なにぶん恋愛には向いていない性格だと辰無自身が熟知し、それに向いていないと知っていたから辰無は結婚願望を持ってはいなかった。だからだろう、辰無は流れに身を任せる形で久我峰からの縁談を引き受けた。

打算が無かったとは言い切れない。久我峰の系譜に期待する価値は大きく、より久我峰との繋がりを強固に出来ると考えれば拒否する理由も無かった。

そして出会った唯葉は穏やかな女性だった。

決して傾国の美女とは呼べぬ容貌であるが、柔らかな目元と柔和に相手を包み込む女性らしさを始め、当時四十間際とは思えぬ美貌は二十台を思わせ、少しずれた性格や明るい所など大変魅力的な女性だった。

辰無よりも年上であると言うのに婚期を逃して初婚という点だけは意外だったが、いつしかそれも気にはならなくなった。

ただ、それだけでは辰無は妻を受け止めはしなかっただろう。彼の屈折した人格からして言えば、彼女の人格や態度と言うのはひとつの要因に過ぎなかった。

しかし、それでも彼女を妻として向かい入れ、更に受け止めたのは彼女が辰無を理解したからだだった。良い様の無い窮乏から這い上がった精神構造を始め、他人への異常な憧憬、己への卑下。彼を成す黒き素養の全ては他人を周りから遠ざけるには十分すぎるものであったが、唯葉はそれを理解したのだった。

唯葉は名家に生まれ育った女性だった。彼のような最下層の暮らしを味わった人間など知りもしなかっただろう。腹を空かせて野良犬を喰い、飢えを忍んで腕を噛んだ。死体を漁って服を奪い、泥を嚼つて咽喉を潤した。大よそ全うな生活ではない。しかし、仇川辰無はそういう人間だった。そして上流階級に生きる存在ならば、汚い存在ほど遠ざけておくことが何よりも賢しいだろう。

しかし、彼女は努めて辰無を理解しようとした。

政略結婚は本人の意志が介入する余地のない呪縛だ。だから合う合わないの選定基準は論外であり、重要なのは肩書き。あるいはその背景であり、個人というものは蔑ろにされる。それを唯葉は理解しながらも、辰無との結婚を喜んで受け入れた。

辰無は不思議だった。何故彼女は自分を受け入れようと努力したのか。どれだけ尋ねても彼女の少々変わった答えに鼻白み、格式ばった結婚を経て、いつしか時が流れた。

性格が合っていたのだろう。冷たい虚無を抱く辰無には彼女の包容力は物珍しく思えた。

恋愛結婚ではなかったのが良かったのだろう。恋愛結婚によって成立した男女は互いを知り尽くしている故に亀裂が生じやすく、いらぬ部分にまで視線が行きがちで容易く離縁となるらしい。

子供が早くに出来たのが良かったのだろう。子はかすがい。古い言い回しではあるが、唯葉の胎が大きくなってから彼女を懇切大事にしてきた。出産適齢期を越えていたから、母体に何かがあつてはいけないと辰無は精一杯彼女を守り補助してきた。

しほ子が可愛らしい子供だったのが良かったのだろう。唯葉に似て愛らしい彼女はすくすくと育ち、これからの未来をそれとなく楽しみにしている己がいた。

理由を探せば幾らでも探せる。それこそ取るに足りない些細な事柄であろうとも、理由としては充分だった。それほどまでには辰無は唯葉を妻として、しほ子を娘として認識していた。家族として認識していた。

目的地である仇川マンションは容易に見えた。

「。」「

昼の風が硬く朔を包みこんだ。入り組んだ街の構造に地上二十五メートルを越える高さではビル風が巻き起こり、隣接するマンションの壁へと張り付く朔の体を突き飛ばそうとしている。少々埃っぽい匂いが風に紛れて何処かへと消えていく。

眼前に見える仇川マンションは発展を遂げているこの街に於いてもまず見ない特徴的な姿で、それはまるで天を貫く鉄塔のようだった。近代的な外観を呈する建築群の中にあるその佇まいには異様な物悲しさが秘められていた。

仇川マンシヨンの隣に建てられたビルの側壁に朔は、壁の僅かな凹凸を頼りとして直角に佇みその様を見やっている。地上三十メートル以上の付近にある壁に直立するその姿は、まるで人の後をついてまわる不気味な影法師のようだった。

『ひひ、漸く見つけた、なア』

物理法則に従い今にも地上へと落下しそうな骨喰が朔の腰元からぶら下がっている。ゆらゆらと揺られた金属の悲鳴にも似た声音が地上へと降り注ぎ、道歩く人々の神経を無意識的に苛立たせていた。

『しかし、こいつア面白え。ひひひ、仇川って野郎にや冗句の才能があるじゃねえか』

ケタケタと骨喰はマンシヨン内で何が？起こっているのか？を容易に見透かして笑った。不気味に歪んだ^{ひす}哄笑には毒々しい愉快が含まれている。

朔はマンシヨンの構造を見やる。

地表から生える氷柱のような外観。空へと近づいていくと階層が狭くなっていき、先端に至っては一部屋しか存在しない。

そして、目標は恐らくそこにいる。

情報は聞き流していたから骨喰に任せる事にはなるが、判断は全て朔が下す。

だからだろう。真正面から入り込もうとする朔を骨喰は止める事が出来ない。

ふわり、と朔の体が側面を離れて落下する。

「、っ」

刹那に墮ちる。急速に増していく浮遊感が朔の内臓を押し、体を潰す。眼下には幾人かの人間が見えるが、気付かれる事はないと確信している。

ふわりと風に漂う白色の靄が渦を巻いていく。その空白に朔は舞い降りた。

目前に反り立つ尖塔、仇川マンション。

『ひひ、手前よ少しは忍べ。暗殺者が紛れずどうすんだイ』

自動扉が開いた瞬間に朔の鼻腔へとたどり着いた乾燥の匂いへと入り混じる、異様な臭気。大よそ一般生活を送る場所においては嗅ぐ事もない臭いだった。

エントランスから朔が堂々と侵入した時、仇川マンション内部は死んでいた。

一階に居住スペースが存在しない。その広々としたエントランスには絵画や骨董など趣向を凝らした調度品や芸術品が数多く展示されている。数量で考えれば十五点以上、その壁に沿って配置されたそれはここを美術館のように錯覚させる。

否、寧ろ錯覚を目的としてこのエントランスは作られていた。

『ハっ、こいつは良イ。なかなか上等な地獄だ』

厭らしく骨喰は言う。

目に見える調度品の数々は確かに芸術品として価値のあるものだ。

朔にはそれに類する眼はないが、骨喰からすればそれなりには骨董品として価値がある程度のもらしい。

『こいつらを視ろよ朔。薄汚えなア、少しばかりだが埃が被ってやがるぜ。ひひ、人間がイたらこんなモン直ぐにでも拭うだろうよなア』

壁際に飾られた壺の表面をなぞれば、微かにざらついた感触があった。埃が僅かに積もっている。

しかし、埃を被っているのは壺だけではない。壁に高く飾られた絵画の縁、それ以外にも置かれた芸術品は元より、エントランスには意識しなければ気付かないほどに薄っすらとした埃が被っていた。

歩を進めていくと観賞用のプラタナスが生えた中央部分を通り過ぎた。その芝は伸びたままで、人の手が入っているようには見えない。良く確認すれば、プラタナスの葉も幾つか萎れている。

それはつまり、そういう事だった。

「 、 「

朔はエントランスホールをひたりひたりとその床を裸足の脚でな

ぞる様に進んでいく。まるで物音一つしない空間内は朔の静かな呼吸音が僅かに聞こえるのみであり、湿った黙然が重く沈んでいた。

エントランス奥に並んだエレベーターの扉に朔は差し掛かった。左右どちらも稼動はしているようだが、今現在は動いていない。二つともどうやら最上階に止まっていた。

『ボタンを押せば来るんだろうがア……手前に操作を期待するだけ無駄だな』

珍しく骨喰の呆れた声音が木霊するが、朔の意識は既に骨喰には向けられていなかった。小言を紡ぐ骨喰には分からぬであろうが、七夜たる朔には感じとれるその気配。

眼下、足元。滑らかな素材で作られた扉の隙間から、臭いが滲んでいた。

「 、 つ 」

藍色が閃く。

腰元にぶら下がっていた骨喰が忽ちの内に抜かれ、鞘からその刀身を露にした。刃毀れした刀身は今にも折れてしまいそうな姿だっ

た。朽ち果てた刃は寒気すら感じ、その闇が朔を黒く抱きしめた。滲み込む重圧に朔の内臓が呻き、それを咽喉元で飲み込んでいく。

そして朔は亡霊と化して刃を揮った。

亡霊はその刀身を扉の隙間に差し込んで、力任せに動かした。機械によって制御された扉を開く事は容易なことではないが、梃子の原理などを用いれば扉は直ぐにでもその狭間を僅かに開く。

本来ならば、今にも折れてしまいそうな刀でこのような事は行えるはずが無い。刀剣は鋼を鍛えられてはいるが存外に脆く作られており、耐久力に難がある。刀工の粋を凝らした刀は武具と言う領域を越えた芸術品だ。

ひたすらに切れ味を求めた鋼の刃は、それゆえに頑丈さは度外視される。だから遙か昔の武士などは戦に於いては刀を複数所持し、一本が駄目になれば他の刀を使用した。

しかし骨喰は妖怪刀崎梟最期の一作。

刀崎最高峰と謳われた刀工職人が人道を踏み躪り狂気以外の何物でもない経緯によって生み落とした刀剣が、並みの刀であるはずがない。

故にその見かけに騙されてはならない。その朽ち果てた刃に内包

された禍々しさは例え機構によって統制された機械であろうと、一切軋む事無く扉を切り開いたのである。

『ひひ、お誂え向きじゃね工か。行き先は底の其処。聞いた話はそんなもんなかったんだが、なア』

骨喰は楽しげだった。

恐らく人としての面影があるならば、あからさま過ぎるそれに舌なめずりでもしそうだった。

全てをこの時点で把握し、理解しながらもそれを見下し惨劇を喜劇と受け取り愉悦に腹を抱える邪悪の刀剣。流星は妖怪が鍛えた刀と言つべきか。まともではない。

扉の中は空洞だった。エレベーターボックスは上のほうにあるように、朔の視線には剥き出しのコンクリートが見える以外には一本に伸びる鉄のロープが繋げる上と下との奈落が見えた。しかし、視えるのはもっと濃いものだ。

「。」「

昇りたつ臭気が空洞を仄かに染めていた。恐らくは地下、むわっ

とする禍々しき気配は凝固するような濃度でもって霧散しており、肌に触れると僅かに刺激が生じた。

『嗚呼、視つけた』

故に朔は気軽に脚を踏み出し、再びその身を宙に委ねた。

側面を囲われた空間は一切の光源を失った暗闇だった。冷たいコンクリートから放たれる圧迫感により窒息しそうな質量が立ち上っていく。

落ちる。

朔が墮ちるのは先ほどと異なり落下は奈落の底、そこが地獄の道行きである。

亡者の怨念が朔を飲み込んで、その身を隠した。

そして朔は握りしめていた骨喰を無造作に壁へと突きたてた。

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ

!!

勢いを殺すために突き立てられた骨喰は衝撃を切り裂く事叶わず、暗闇に火花を散らした。すぐさま消えてしまう火花が絶え間ない悲鳴のように降り注いだ。

呼吸が難しい。臭いたつ血潮の香りが鼻を攪り、肺を侵す。

堕ちる。

ふと見やれば朔の魔眼にはコンクリートの壁に赤い手形がぼつぼつと視えた。それは下に落下するほど数を増やしていくようで、終着の訪れを予感させる。風斬り音と共に呻き声と罵声が入り混じる阿鼻の絶叫が反響しながら聞こえてくる。そこに骨喰が刃を削る金切り声を叫ぶ事で虫唾が走った。

堕ちた。

闇も見えぬ暗がりの暗黒が口を開く。

間際に迫る地面へと殺された勢いによりゆるりと着地した。ぬめり気のある空気がどろりと朔を捉えた。それが骨喰の闇衣と相まって朔の周囲を覆う。しかし光源なき底の暗闇であるうとも朔の瞳は青々と蒼く、寒気がするほどの輝きでもってその道筋を映し出し、再び歩む。

地下は不思議と澄んでいた。埃が宙を舞い、足元にも塵が積もっているが空っぽの気配が地下を支配している。そして瞬間に見えた、あの赤き手形はどこにも見えず、壁は不気味な側面を露にしていた。

前方へと続く乾いた道が空間を広げていた。設計上エレベーター内にあるには些か不自然な横の空間であり、その先にぽつんと一枚の扉が見えた。

『ひひ、終着か』

朔の視界には扉から溢れんばかりの嘆きが視えた。理不尽と悲嘆に絶望し、怨嗟の呪詛を呟く亡者の影が朔を捉えんと姿を見せる。しかし朔はそれを一顧だにせず、仲間を増やさんとする幽かな存在を無視した。

「。」

そして、扉の前で歩みは止まった。

扉の向こうには確かに感じられる化物の気配。

『ひひ。莫迦は天上に昇りたがるものだが、地下に潜るのは魔性と相場が決まってるツテもんだ。さて、鬼が出るか蛇が出るかナ』

骨喰の耳障りな声音と共に、扉はやけにゆっくりと開かれた。

しかし、そこに家族に向けられる大切だという感情に自分が含まれているか、と思えば辰無は素直に首肯することが出来なかった。

そも辰無は家族というものを知らなかった。

気付けば彼は一人であの極貧を生きていた。夏は腐敗したゴミの匂いを嗅ぎ、冬は霜焼けに腫れ上がる指先を懐に潜り込ませたが、彼には保護者と呼べる人はおらず、その匂いを防ぐ人も指先を温めてくれる人も辰無にはいなかった。親の名前も、顔も、そして親と言う存在も彼は知らず理解もしていなかった。

彼の周りにも薄汚い顔ぶれの個人というものがあっただけで家族という集団には出くわした事がない。だからだろう、彼は家族というものが何なのかまるで分からなかった。

それでも辰無は家庭を持ち、夫となり、父となった。

会社を営み利益を求めながらも、帰りを待つ妻を想いながら仕事をこなし、帰宅する事が少なく、一緒にいる時間が少ない娘のためにプレゼントをなるべく買った。なかでもしほ子は写真を収められるブローチを大層気に入っているようで、欠かさず身につけている様子が幾度となく見られた。

しかし、それらは算段を伴った行動に過ぎない事も辰無は理解していた。男性で家庭を持った人物がそのような行動を取っているため、自分もそれを真似ただけに過ぎない。本当は何の意味があるのかと疑いながらも、辰無はそれらを真似て実践してきた。

唯葉はそれを『あなたらしい』と微笑んでいた。

しほ子はそれを『ぱぱは優しいね』と抱きついてきた。

辰無はそのように二人が自分を受け入れてくれる事に歯痒さばかりを感じていた。

自分はそんな立派な人間ではなく、もっとどうしよう無い畜生である事実を二人に認めさせたかった。そしていつそ自らを否定して欲しかったのかもしれない。

魅力的な唯葉のこと、こんな男よりも魅了される男に出会った時
もあつただろう。辰無よりも年上で初婚という、名家の生まれにし
ては少々特殊な彼女である。何かしら事情があつたに違いない。

しかしそれを聞くと彼女は『好きなのはいたけど、結婚したい
と思えるひとがいなかった』とあつげらかに言った。

それに何故、と問いかけると彼女は『さあ？』と言い、好きと結
婚は違うのかと問うと彼女は吟味するように悩んだあと、感覚的に
違つと言つた。

そして、自分と結婚したのは何故か、と問うと唯葉は笑顔で。

『なんか、こつこつと！と来たの』

と言つた。あの時の朗らかな笑顔は彼女が変わってしまった今も
忘れられなかった。

つまり唯葉の合格基準を辰無はクリアしていた、という事なのだ
ろうか。それが一体どの様なものなのか詳細は依然として不明であ
るが、ただ納得した。

だが、そう思うほどに辰無は己の無力さを痛感し、彼女を幸せに

する事も、こんな結末を迎える事も無かったはずだと悔やんでいた。

もし、彼女がいたならばあの明るい表情で励ましてくれるのだろう。『大丈夫！』と可愛らしく力瘤を作ってくれたのかも知れない。そしてそれに気付いたしほ子が近づいて抱きついてきて、結局苦惱などにも有耶無耶になったのかもしれない。

しかし彼女は変わってしまった。彼女は彼女のままでその人格が変化してしまった。人が生きている以上、価値観やその精神においても何らかの変容は見せるものであるが、彼女の変容はそれを超えていた。

健忘症やアルツハイマーとは異なる認識の変化。脳の機能が低下し認識能力が落ちたのではなく、肉体的には何の問題はなかった。少なくとも全うな医者診断ではそうだった。

精神あるいは人格と呼ばれるものが彼女を変えたのだった。彼女は彼女のままであるのに、価値観などの認識がそのままにひっくり返った。怒りではなく、虚しさでもってそれが反転なのだ、彼は自然に理解した。

人外の血が混じる混血という存在がいると知ったのは、久我峰に聞かされた時だった。

彼は酷く楽しそうに辰無へと告げたのである。それまで彼が生きていた世界とは異なり、しかし偏に重なっている裏の世界を。日本に存在する退魔組織と混血。さらには荒唐無稽な話ではあったが魔術師の話をもそれとなく聞かされた事もある。

自分が今まで過ごしてきた日本にそのような御伽噺が今も尚行われている事に辰無は目を見張った。そしてこの世には理不尽と不可思議が横たわり、それを知らずに生きていく事も出来た、と久我峰はこちらを逆撫でるような声で囁くのだった。

だからこそ、彼は彼女が？そういうこと？に成ってしまったのだと理解した。

そうして思考はぐるぐると螺旋を描いて深みに堕ちていき、先も見えぬ暗闇を終着として光を失った。最果てを照らす星の道標さえ失った彼は、もうどこにも行けない。

何も出来ない。彼女を救うことも、殺す事も出来ない。

だから彼は全てを受け入れた。

やがて訪れるであろう終末の時、永遠の別れが二人の前に現われるその時まで、彼は彼女を受け入れようと決めたのである。

埃と時間が混合した空気は金属を容易に侵食し、錆びついた扉は不快な亀裂音を響かせながら重々しく開かれた。

部屋は個室であり、出入り口は扉一つのみ。不思議と空気は澄んでいて黴の臭いはしないが潤沢な香りは濃く、あまりの濃度に香りが固体と化してしまいそうだった。

部屋の中心、そこには一人の女性が椅子に腰掛けていた。

光源なき室内、仄暗い部屋にいる女の姿は明瞭に視認できない。朔の瞳からは形が視えるが、それだけだった。

女性は眠りについていのか木製の椅子にもたれかかり、崩れた体勢によって柔らかな茶色をした髪が垂れて顔を隠している。居眠りなのか、昼寝なのか判断はしかねるが夢見が良いようで朔の耳には女の穏やかなる寝息が伝わった。

『ほづ……、これは、なかなか』

明かりの见えない室内に骨喰の声音が反響する。金属の悲鳴にも

似た声音は常と変わらないが、音の悪意に混じり確かな感嘆があった。

一步、朔は踏みしめた。

ぐちゅり、と何かを潰した。

一步、朔は踏みしめた。

ずぶり、と何かが砕け散った。

裸足の指先に柔らかな粘着質の弾力が纏わりつき、一步一步踏みしめるたびにそれらが朔の脚を絡め取る。

そして朔は己が手、骨喰の柄をぎりりと握りしめ女の首を狙いつけたその時。

女の傍らに置かれている小さな机の上、古びたランプシェードが明かりを突如として灯し、ぼんやりとした光が辺りを淡く照らし出した。

『ひひ、良い地獄だ』

見えたのは、赤色だった。

赤く赤く、明かりは赤い床を照らして一面に広がる血と塊を映す。広い室内一杯に溜まっている血の湖面に混じり、壁には積み重ねた生者の名残が一つの塊となって置かれていた。

腕や脚は森に積み上げられた小枝のように、内臓や脳は海岸に打ち上げられた漂着物のように。

それが幾つも点在されており、その様子は三途のほとりで懺悔に積み上げられた石塔のようだった。

なかには腸が巻き付けられた子供の顔まで見えている。

そして床を良く見れば解かされた筋肉繊維がペースト状と化し、それが血と混じりぶよぶよとした感触となっていた。

赤い惨状は床だけに留まらない。天井まで汚した血は首を奪われた者の血だろつ。体内を循環している血は首を切断すると圧力によって高く噴出する。隙間なく血によって彩られた天井はその量だけ首を奪われた者がいると言う事実だった。

詰まれている死体は数も計れず、男、女、老人、子供分け隔てなく死体として殺され詰まれている。

そして不思議な事に壁際に詰まれた肉の塊の天辺には先ほど見れた子供の顔と同じような趣旨の奇怪なオブジェが飾られていた。

抉られた眼球が口内に飾られており、それが一様に前を見つめる男の首。首に足を突っ込まれた死体。果ては裂かれた腹の中から取り出された胎児たちが無言で陳列されていた。

だがそれらに共通する点は死体の大よそが欠損しており、元の形状を留めていない事にある。引き千切られた胴体を始め、破られた内臓に零された脳漿、奇怪なオブジェと人間の残骸が多々とあるが原型を保った死体とは一つとして残されていない。

明かりが灯す範囲は狭い。しかしその狭い明かりに於いて屍の見えぬ場所はなく、高く詰まれた死体やペースト状と化した肉、ばら撒かれた内臓は数え切れない。室内の大半は未だ闇の底で、その先にあるだろう惨状は一体どれほどのものか。骨喰は愉悦をもって待ち望んだ。

「
、
」

朔は無言だった。いや、無反応だった。そこらに広がる死者の惨劇をその蒼き瞳に収めても尚朔は無反応のままであり、その表情に変化もなし。

尋常の剣ではない骨喰でさえ愉悦と歓喜を感じていると言つのに、朔の内心には細波立つ感情は宿らなかつた。

恐怖は無い、嫌悪も無い。快楽も無ければ悲嘆も無い。血液を掻き分け、肉の山を横切りながらも屍山血河の有様を朔の視線はそれらを一顧だにせず、価値も見出さない。

まるで見慣れた光景のように、あるいは馴染み深い景色のように朔は腐臭を撒き散らす肉の壁に囲われた肉の床を踏みしめた。

そしてランプシェードの光が淡く照らす女の元へとたどり着いた。

朔が近づいてなお女は健やかな寝息を立てて眠っていた。俯き加減に傾けられた頭部、垂れる髪が女の顔を隠している。

亡霊は躊躇いもなく晒された首筋に骨喰の朽ち果てた刃を振り降ろし。

不可視の衝撃音が朔を襲った。

過去編 Rhapsody in Crimson 中(後書き)

続きます。

ぎぶみー感想

過去編 Rhapsody in Crimson 下(前書き)

過去編とりあえずの最後。

過去編 Rhapsody in Crimson 下

「……これは」

それを見つめ、久我峰斗波は呻くように呟き、そして言葉を暫し失った。

丑三つ時の事である。彼のオフィスに突如として届いた箱の中を久我峰の手勢が確認すると、そこには一枚のビデオレコーダーが納められていた。

そして、そのラベルシールには達筆な文字でひとつ、名前が書かれていた。

果たしてその中に映し出している映像が如何様なものか、久我峰は安易に予想できた。

仇川辰無。彼が最期に残した物品。

それが持ちうる価値、意味。

二つを考慮しても、あまりに大きい情報がこの中に眠っている。

極めて慎重に扱わなければ猛毒にもなる劇薬と言つべきか。久我峰は自然と混みあがる苦笑を抑える事が出来なかった。

「ふ……ふふ、私への仕返しという奴です、か。……恨みますよ、辰無さん」

置き土産、と久我峰は決して言わなかった。

言う事が、まだ出来なかった。

『同志、久我峰斗波へ』

シールには、そう書かれていた。

淡い光に照らされて、朔がいた箇所の背後に位置する闇の中から男が現われた。白髪の混じる壮年の男はその両手に構えられた拳銃の銃口から火薬の匂いを滲ませ、注意深く前方を見やった。

しかしその静謐な表情とは裏腹に男は驚愕に精神を震わせていた。

男は拳銃を扱えはするが、その腕前では動く標的に当てる事が出来ない。幾ら修練を重ねても男の腕はそこにたどり着かなかった。

ただ動かない標的であれば確実に当てる事が出来る自信だけには男にあった。停止するのなら確実に男は当てる、と。

だから策を練った。

暗闇にランプシールドを灯し、そちらに意識を逸らす事で無防備になった背後を確実に動きが止まった瞬間撃ち抜く。

作戦は上手くいった。注意は光の方角に向けられ、その五感の殆どは誤魔化されたはずだった。薄暗い暗がりの部屋、血の臭いに鼻は潰され耳は女の寝息を拾っていた。

なのに。

「……」

男は確かに見た。

襲撃者、七夜の体現が背後から放たれた弾丸を？撃たれた後？に

その姿を消し、かわした瞬間を。

『ひひ、危ねえなア』

仇川辰無』

暗闇の深遠より金属の悲鳴が降り注いだ。辰無は注意深く辺りを見回しながら拳銃を構え、しかしそのあまりに聞き覚えのある声音に戦慄を禁じえなかった。

「…なぜ、なぜだ」

そして堪えられず、辰無は呻いた。

「なぜ貴様が生きて七夜の体現と行動している、刀崎梟……！！」

刀剣が発する耳障りな声音は妖怪刀崎梟のものに違いなかった。

七年前、仇川辰無は久我峰傘下への参入を経たが、その頃に存命中の刀崎梟へと辰無は会ったことがある。

そのあまりに特徴的な容貌と声音更に人格は辰無に深く刻まれており、刀崎派と秘密裏に敵対する事となった後にそれはより際立っていた。だから辰無が梟の声音を間違えるはずがない。

『ひひひ……俺は梟じゃ無エゼ。正真正銘、刀崎梟はおっちんでる。んで骨喰はただの刀、その事實は覆らねえヨ。手前も覚えてんだろ。うがア、刀崎の顛末を？』

しかし声音は闇において厭らしく否定する。

確かに辰無は梟の死を知っていた。

刀崎が狂乱の内にあり、齡百を数える頃に混血の宿命である反転を化した梟が遠野によって肅清されたのは五年前の事だ。

ただそれは情報として知りうるのみの話であり真実は分からない。更に伝え聞くとところによると体力の衰退が否めなかった当時の当主遠野槇久はそれを自ら行わず、他の誰かに任せたらしい。

詳細は定かではない。情報は貴重であるが全てが真である筈がない。隠されている事もあるだろうし、変えられている事もある。ぐるぐる、ぐるぐると辰無の冷酷な思考が巡る。

そして、爆発的に辰無は理解した。

「……なるほど、この一連の事、全て貴様が組んだ事か」

闇の中に辰無の声が染みる。

「刀崎白鷺が事実を嗅ぎつけた理由、七夜朔が辿りつけた訳。そして刀崎の顛末。全てお前が仕組んだのか……」

「ひひひ」

骨喰は辰無の詰問に厭らしい笑いで応えた。

肯定も否定も、行わなかった。

「まア、いいさ。幾ら俺がアレじゃねえと言ったところで手前じゃ理解できネエだろうよ。しかし、だ。そんな堅物極まりネエ手前でもやる時はやれンだなア」

少なくとも混乱に神経を苛まれながらも辰無は響く骨喰の声音に意識を凝らす。一瞬の空白に於いて、切り裂くように骨喰は言った。確信を秘めた愉悦の声音で。

「ここにいる死体、ここんどこにいた住人だろ？」

ひひひ、と辰無の脳に不快な骨喰の声音が反響する。

『反転した手前の女の餌として住人を調達して、こんなところに閉じ込めた女が腹を空かせりゃくれてやる。そんでまた腹が減りゃとっ捕まえてくる。それを繰り返して繰り返して、今となってはここは無人の城だ。ひひひ！ そりゃそうだ、住人全部がいなくなっちゃまったら阿呆でも気付くつてもんだ！化物が腹を空かせて来るぞつ、てなア！』

全ては半年前だった。

その日、珍しく昼頃に帰宅した辰無は玄関の扉を空けた瞬間に妙な静寂と懐かしい匂いに出迎えられた。あの人間ではなかった生活で嗅いだ血の香り。生物が吹き零す命の流水。それが辰無の鼻を擽ったのだ。

不可思議に思い辰無は心なし慎重な足運びでリビングへと向かった。やけに五月蠅い心臓の鼓動が静寂の室内を打ち破りそうなほどだったと記憶している。

そして辰無は見てしまったのだ。

リビングに隣接するキッチン、唯葉が狂ったように叫びながら、どこからか見つけたかも分からない猫の死体に向かって何度もカッターナイフを振り落としていた光景を。

その行為を見られて唯葉は一時恐慌状態に陥ったが、暫くしてぽつぽつと己の内に起こる衝動、あるいは状態を打ち明けてくれた。むしゃくしゃとしてではない、悪戯心ですらない破壊衝動が己の中に宿り、それが何度も唯葉を突き破ってはこのような事を起こすのだと。そして唯葉はそれが混血という種族に訪れる反転だと。

辰無は唯葉の現状を知り、賢明な行動でもってそれらを押さえ込もうとした。時には自らの首筋を差し出し、そして時には暴力により辰無自身死を覚悟した。

だが、そのように自らを差し出すほど沈静した後の唯葉は悲しみに明け暮れて、自らの咽喉を裂こうと包丁を握りしめた。

『誰よりもあなたを傷つけることだけはイヤっつっつ！！！！！！！』

悲鳴にも似た嘆きの絶叫が今でも耳に残っている。

辰無が良しとした行為が何よりも彼女を傷つけていた、と辰無はその時になって始めて気付いた。

そして己を差し出す事も出来なくなつて、唯葉の反転状態は次第に悪化の一途を辿り、最後には彼女の望みでこの地下へと運んだ。

さよならと涙を流して口ずさむ彼女の唇を己が唇で黙らせながら。

「……正確には、七十八名全て私が息の根を止めた後にここへと運んだ。……彼女は殺めてなどいない」

朝、すれ違う時必ず声をかけてくれる女性がいた。

父親と仲良く歩く子供がいた。

展示されている芸術品を欠かさず磨いていた老人がいた。

その悉くを辰無は殺した。

涙を流すものがいた。

恐怖に言語化不可能な言葉を並べたものがいた。

理不尽に腹を破らんほどに怒り狂ったものがいた。

慈悲を乞うて自らを差し出し子供の命だけはと懇願するものがあった。

分け隔てなく殺して、この場所へと運んで唯葉の食物とした。彼女の玩具とした。

彼女が大切だから、彼女が大事だから。

理由はそれで充分だった。それ以外に理由なんてなかった。

他人の善性を信じるが故に、己が悪徳を肯定した男は遂に止まらなかった。繰り返される諸行は正しく悪で、それこそ己に相応しいと自虐を零しながらも男の手は命を断ち続けた。全ては妻のために、妻を受け入れる己のために。

だからそのような物言いは許せない。

妻が化物だなんて、認めはしない。

『ひひ、そんなこたア関係無え。第一こんな愉快なモン作り上げと

いて普通なんざありえね工。手前、自分の目の前にいるのが人間だ
と思うか？人間を喰らう存在が人間だと思うか？それを手工业化した
手前が人間だと思えるか？人間が食われる事を承認した手前が人間
だと思うか？」

「……私が人ではない事等百も承知している。……だが、唯葉がそ
んなものであると言うその言葉を発する口を今すぐに閉ざせ」

「ハッ！手前、刀に口でもついているはずが無工だろうが！いよいよ
もって傑作だ！真正の気狂いたア、ひひひ！まるで話になんね工
ぜ！」

「……私が気狂いならば、お前達は何だ。徒に人を殺して何が楽し
い、暗殺者とかこつけてるがやっていることは殺して金を貰う……
それともやはり復讐か？ 無闇矢鱈に遠野へと襲い掛かる犬畜生で
はないか」

「金？ひひ、金か！ひひひ、それこそお笑い種だ。朔が金のために
殺すなんて、手前の程度が知れるぞ！七夜朔は奈落の底で亡者をい
たぶる鬼だ。獄卒が報酬のために地獄の魂を磨り潰していると思
うか？」

「……では、復讐か」

『それこそ冗談。目的なんてありやしね工。この世は経過と結果だけがアるだけだ。だが、手前はなんだ？手前の女のためと言いながら何も出来ネ工人間、女を殺す事も止める事も出来ネ工男。ひひひ！笑わせるなア、仇川辰無！無力を装って厭世家ベシミスでも気取ってる、手前の諦観が女を殺すんだぜ！』

自身の中に亀裂が走る音を、辰無は確かに聞いた。

「……私が、唯葉を殺す、だと」

知らず震えて、辰無は搾り出した。

『ひひひひ！そりやそうだろ！今まで手前がなんもしてこなかった結果がこのザマだ！今の今まで手前が諦めっぱなしだったどん詰まりがこのザマなんだよ！』

あからさまな挑発は激昂を誘うためのものか。あるいは之こそ骨喰の手筈なのか。辰無は白熱しそうな脳を無理矢理押さえ込んで、呪詛を呟くように言葉を紡いだ。

「……妖怪、私は貴様が真底嫌いだった。久我峰様は気に喰わなかったが、貴様はそれ以上だった。それ以上に真性悪である貴様を、わたしはどうしても嫌いでたまらなかつたが、どうやらそれすらも誤りだったらしい」

『ほっ?』

真底人を嘲り、この世を睥睨し続けた刀崎梟。

彼は刀崎らしい刀崎であり、だからこそ現代にそぐう事のない古代の化石だった。

今を認めず、先を認めず、過去すら否定して。ひたすらに希求し続けたその有様。何者にも影響されず、また何者も受け取らなかつた彼はある意味もつとも人間らしい存在だったのかもしれない。

辰無は今もなお眠りから覚めぬ妻のそばに寄り添った。ランプシエードが光るそこは明るい彼女の隣で、真底辰無には似合わない。辰無は己こそが最悪だと自嘲し、遠い光を眺めるだけでよい。

だからだろう、辰無は刀崎梟が。

「……わたしは、どうやらあなたが憎いようだ」

俄かに殺気だった辰無の視線が、血肉の沼地をねめつけた。

室内は唯葉が眠る中心を光点とし、明かりの範囲外に於いてぼんやりと地獄を移す白色を境界に仇川辰無はきつとどこかで息を潜めているであろう七夜朔を見つげるために神経を尖らす。

光源に立つ辰無からは広がる闇の深遠に滲む赤色はまるで霧のようだった。それに紛れる七夜朔はやはり尋常のものではないのだろう。

何故ならこの部屋に於いて音は辰無の息と唯葉の寝息しかなかったのだ。

だから七夜朔がどこにいるのか、あるいはどこに移動しているのか辰無には直接的に探すのは難しい。

しかし、ここはひき潰された肉の埋まる血液の泉。

血は水として室内に水面を張り、均一な平を生み出す。それは変化がなければ波打ち立たない表面であり、それが揺れ動くならばそれは即ち。それが訪れた闇の向こうに、標的がいるという事に他ならない。

乾いた音が破裂する。

刹那の閃光に部屋が一瞬光るが、そこに七夜の体現の姿は見えなかった。

「……外した、か」

どれだけ気配を隠し、音を消し重量を減らしたとしても、そこにいると言う事実は覆しようがない。存在する事実を否定するならば、そもそもそれはそこには存在しない存在となってしまう。

辰無は闇を見つめなかった。鼻は噎せかえる血の臭いに機能を麻痺させている。足元の血水を注視して、意識だけは鬼が蠢く暗闇の向こうへと分散させていく。

そしてまた細波。

暗がりの奥底に目掛けて出鱈目に引き金を引く。掌に衝撃が走るが、またも外れた。

本来辰無の腕では銃弾が当たることなどありえない。だが、それでも辰無は引き金を引いた。辰無も分かりきっている。自分ではア

レを殺す事も出来ない、と。

人外の身のこなしを繰り返す七夜朔は亡霊だった。

どこにいるかまるで分からない。

しかし表面に細波がしたならば其処に向かつて銃を撃たざるを得ない辰無は、己の精神が熱を持っている事を自覚していた。細波が伝わってくるということは、着水からのタイムラグが生じているという事実を飲み込まなければならぬ。

辰無はそれを理解し、当たる筈がないと導きながらも銃撃を止めない。止めたくない。

何故なら琴線の寸断は理性の抑止を投げ打ってしまうからだ。

許せなかった。骨喰の指摘を。骨喰の嘲笑を。全て止めて握り潰してしまいたかった。

だが、辰無だつてわかっていた。妻の変貌、辰無の諦め。刀崎への憎しみ。全てが混ざり混ざって生まれたのは、八つ当たりではないという事を。

それを理解しながらも。

撃って、撃って。

撃って、撃って。

『外れだなア、下手糞が』

全て外れた。

「……つく」

当たる筈もない弾丸に辰無は思わず歯噛みした。

この空間は広く作られた密室で、外へと通じる道は扉一枚のみ。そして扉は開けられた気配がなく、朔がいなくなったとはありえない。それでも弾丸が的中する以前に姿形が捕捉出来ないとは。これが？七夜？たる由縁か。

しかしこれだけは諦める訳にはいかない。

唯葉を止められなかった。彼女のためと偽りながら、流れに身を任せた。全ての原因は辰無にある。自責の念が彼を動かし、己への怒りを骨喰に指摘されて銃口は敵を狙う。

「……だが、おかしい」

葉莢が血の泉へと埋もれる音を聞きながら辰無は加熱する自身とは別の脳で考える。

何故七夜朔は弾丸を回避できるのか。

七夜朔は退魔組織に身を置く暗殺者であり、殺人鬼だ。暗がりですべてを殺す者であり、人を殺す鬼。その身体機能は尋常のものでない事は、今しがたの動きで明白だ。伝え聞く容貌と重なり、明らかに光も当たらない闇の世界を跋扈する化物だ。

それでも音速を超える弾丸を回避できるとは一体どういう事か。

それは乱発する以前、正確に狙い澄ました最初の弾丸が圧倒的に物語っている。

背後とは人類の死角だ。幾ら視界の広い人間であろうとその視界

は左右百八十度を超えはしない。そこから先は全く見えない事と道理で、暗闇の中しかも不意打ちによって撃たれた弾丸をかわす事は如何に達人であろうとも回避する事は困難だ。呼吸音や僅かな筋肉の軋みによって察知する達人が存在しないわけでない。ただ、その域に達する人間が果たしてどれ程いるか。

だが事実、背後から撃たれた後に入った回避行動でもって辰無の殺意はかわされた。

ここに来て辰無は寒気に粟立つ肌を自覚せざるを得なかった。

経営者である辰無に暴力で塗れた世界は過去の薄汚い溝の底だったが、今辰無が明確に踏み込んだ世界はまるでそれとは異なる。生きるための手段として他人を殺す世界と、明らかな殺意でもって殺しに迫る世界はまるで違う。生まれてからそのような世界に入り込んだわけではない辰無にとって、そのような存在がいるという事実は知識として理解していた。しかし経験として分かることはなかった。

辰無が入り込んだ世界とはこれこそが常識なのか。

こんな理不尽が一樣に跋扈する魍魎の住処なのか。

『ひひ、何をヤっても無駄だア。朔の魔眼にやなにもかもがお見通

しだせ、銃口も弾道も着弾点も』

闇の向こうからざりざりと削るような声音がどこからともなく響く。

『 嗚呼、朔。俺にも良く視エる。アいつの奥底に眠る怯え然り、己への憤怒然り、手前を殺そうとする視線や意識もまた然り、だ』

囁くような嘲弄が空間を軋ませる。見透かすような発言は、果たして真実があるいは揺さぶりなのか、辰無には判断できない。

「 。 」

辰無の前方に二つの光源が灯火を放った。

闇と血、その中に蒼の光点が等間隔に煌々と光った。それは夕暮れに彷徨う螢のような儂さではなく、幽玄に寒々と灯火を放ち、死の沼底へと誘う鬼火のような冷たい蒼の光だった。温もりを感じさせぬそれは七夜朔の瞳である、と辰無は気付いてしまった。

何故なら、その奥底を見てしまったからだ。

瞳の深遠、溢れんばかりに充満する殺意の滾りを。

「……この、化物め」

罵倒ではなく、ある意味隔絶した脅威、あるいは畏怖の感情が辰無から漏れた。

奇しくも、それは彼が共に歩んだ久我峰が抱いた感情だった。

辰無は、ここに来て己が勘違いしていた事を思い知った。

魑魅魍魎が悠々自適と存在する場所であろうとも、人は人である。そして、彼が出会った中で真人間を越えた存在とは混血だった。彼らを間近に見てきた辰無は、彼らこそ上位者であり、人間では叶わぬ存在であると思いついていた。

だが今、辰無はそれを否と切り捨てた。

今、目の前にいるのはそれらと対峙し続けた存在。混血に対し復讐の牙を突き立てる鬼の輩である。

ならばそのような鬼が人間であるはずがない。

辰無は七夜を人間だと思っていた。人間であろうと予測し、そう思い込んでいた。それは直接相對した事がない者の稚拙な楽天、経験の無いものが語る無為な虚勢。

事實は違う。七夜朔は人間ではない。辰無のように地べたを這いずり回る犬畜生でもない。もっとそれを超えた何かであり、あるいは混血を越えんとする何かだった。

では、その牙はどこまで向かう。

「……やらせはしない。ここで止める」

やがて訪れるであろう終わりは今そこにいる。今日の前で殺意を研ぎ澄ませて刃先を命に突き立てようと渦を巻いている。

銃口は決意を宿らせ茫洋の蒼へと向けられた。静寂を伴ってではなく、いつ弾けるかも分からぬ火薬が終焉であろうとも、辰無がやることには変わらない。

その銃弾が尽きるその時まで、命が潰えるその瞬間まで。

そして、辰無は。

「……………つなあ!？」

柔らかく背後から抱きしめられ、その体が後方へと引つ張られていった。

敵がいるのに辰無はそれすらもその瞬間全てを忘れて思わず背後を見やった。

そこには。

「……………ゆい、は」

さきほどまで眠りについていたはずの唯葉が腕を伸ばし、辰無を抱きしめていた。驚愕に顔を歪ませる辰無の内心はきつと何もなかったに違いない。混沌と化した感情はすでに状態と化して彼をぐちぐちやにしていた。だから残されたのは衝撃と、衝動。

「あ……………ああ」

知らず零れた声は辰無のものだった。

辰無を抱きしめる唯葉の腕の温もり、接するその体の安らぎ。刹那に与えられる？彼女？の奔流が今の状況と合わさり、彼自身自分が何をしたいのか理解も出来ていなかった。

眼前の敵。訪れる終末。永遠の別れ。

それらは今この時、その価値を辰無の中から失わせた。

そんな者よりも、そのようなモノよりも、辰無はただ彼女の声を聞きたかった。

「……唯葉、もういいのか」

何が良いとかは頭になかった。

少しでも考えれば、何かがおかしい事など簡単に知れたことだというのに、体を感じる唯葉の体温、麻痺していても覚えている彼女の匂い、柔らかな質感。全てが全て、辰無を純化させていく。

唯葉は自分が抱きしめる男を暫し見つめていた。その瞳にはこの

場にそぐわない不思議さと、どこか浮世離れた霧困気が放たれていた。

彼女は、やがて柔らかく笑んだ。

そして。

「
っ」

仇川辰無の首筋に噛み付いた。

ぶちぶち、と仇川辰無の皮膚が食い破られて筋肉繊維が露になったとき、仇川唯葉の顔は既に傷ついた血管から零れ出る血液で真っ赤に彩られていた。

唯葉は四十を超えたと思えぬような美貌を湛えた妖艶の女性だった。決して傾国の美女とは言えぬが、しかしそれに順ずる美しさを秘めたその相貌。その目じりにある皺や、髪が流れる艶めいた色香を振り撒くその様は麗しく、鮮血色の装飾が真に映えた。

彼女は肌を潤すそれを気にした風でもなく、寧ろどこか楽しげに指先で青々とした血管をなぞる。血の吹き出る血管を時にはつまんだり、突っついたり弾いたりと弾力を確かめた後、唯葉は再びその顔を辰無の首元に沈めた。

ぶちり、ぶちり。

今度は筋肉を噛み千切るようで、しかし顎の筋肉だけでは男性の筋繊維の束や筋を引き裂く事が出来ず、首を動かしたり体を試しに揺すったりしながら、少しずつその歯を肉に埋めていく。

時折大量の血飛沫が噴出して、彼女の身を赤く彩った。既に本日の食事、あるいは戯れは済んでいたのか、彼女が着ていたカーディガンやスカートは赤銅色の血痕が張り付くドレスに仕上がっていて、其処に今再び夫の血によるグラデーションが加わって彼女を更なる鮮やかさで染めた。

そして彼女はとうとう肉を食い千切り、ぶちりと不気味な音が室内に響いた。

「…… あ、ああ」

どこか呆けるように辰無は声を漏らした。

首元へと現れる喪失感、激痛に苛まれる肉体とは裏腹に彼の意識は少しも痛まず、ゆるりとした動きで彼の側に座る妻の姿を視界に収めた。

唯葉は口元を真つ赤にしながら、今しがた食い千切った辰無の肉を丹念に咀嚼していた。あまりに大きく収めすぎて、その唇から時折辰無の肉がでると零れそうになるのを彼女はやりわりとした手つきで抑えながら、味わうように顎を動かす。

その姿は無邪気だった。

今しがた自身の夫の頸動脈を食べたとは思えぬほど、彼女は純白に食事を楽しんでいた。微笑を浮かべながら口をもぐもぐとさせるその様は、いつそ幼い。年齢を重ねた肉体と相まってそれは余計にそう思える。

唯葉の腕によって抱きしめられながら、辰無は妻の姿を見やっていた。そして辰無の見ている最中に唯葉は嚥下を終えて、再びしゃぶりつく様に辰無の首元、今しがた自身で食い千切った箇所を歯を向ける。

それを見ながら、辰無は彼女の行動を止めようなどとは思いつかなかった。どこか陶醉気味に辰無の目前で自身の肉に噛み付く妻の姿を視界いっぱい収め、ともすれば満面の笑顔を零しそうな彼女

を見つめて何も言えなくなった。

何故、何故妻の食事を止める必要があるのだろうか。

辰無にはその理由も意味も今この時には見当たらなかった。

制止の言葉や拒絶の罵倒はまるで論外で、そのようなもの辰無の脳内には片隅にすら置かれていない。重要なのは彼女が辰無を美味しく口に食べている事であり、そこに辰無の感情は介入の余地がない。だから辰無は何も言わず、唯葉の姿を見続けた。

しかし、それでも辰無には聞いておかなければならない事がある。

「……ゆいは、わたしは美味いか」

血の喪失により力無い辰無の言葉は、存外にはつきりとした力を残していた。

辰無の言葉を聞いているのか分からぬが、彼女は一心不乱に辰無を貪っていく。

遂には骨までに達する彼女の食欲は留まる事を知らず、やがて抑

えの効かなくなつた咀嚼の侵食に彼女の胃が限界を向かえ、その食道から今しがた飲み込んだはずの肉が解された形状で吐き出された。

しかし彼女はペースト状と化した辰無の肉を零しながらも尚辰無を食い続ける。舌を這わし、歯を叩いて、唾液に混じつた血を飲み込んだ。

それは正しく生き延びようとする生命の本能をありのままに映し出したような姿だった。

そして辰無には、自身の肉を啄ばむその姿が愛を告げる妻の姿に見えてならなかった。

「……そうか、美味しいのか。……よかった、な、ゆいは。……それは、よかった」

その様にぼんやりと辰無は、かつての己を思い出した。

必死に生き抜こうとして人を殺して衣服を盗み、飢餓に苦しみ同じ境遇にある犬や猫を捌いて食した窮乏の幼年時代。

明日も知れず、また未来を考える暇すらなく、その日をその時を少しでも生きるために罪を犯し続け、遂には畜生へと身を落としな

がらも自分が不遇にあるわけを辰無は求めなかったし、また理由も同じであったが死ぬことだけはたまらなく嫌で、そこらに腐敗する死体を横目に見ながら、あのようにはなるまいと己に誓った小さな空。

死ぬことは停滞だ。立ち止まってしまった奴に生きる資格は無い。

ぎらついた目つきでもって生者を追い落とし続けた辰無が導いた結論は、諦めや厭世を抱いたものほど死んでいく現実を見定めた反抗の意志であった。

誰にも価値を見出されないままに腐っていく死体の無様な姿は笑止と鼻を鳴らし、己が生きるためにしか死者は役に立たないと、転売目的に訪れた商売人に新鮮な死者の内臓を売り渡しながら思ったものだ。

手元に訪れた僅かな金は浮浪者においては強奪の的であったため、あえて誰かに譲る事でそいつが元となり、再び憐れな犠牲者が生まれる。その内臓を売り渡し、またも誰かに金を譲り、それを繰り返し、繰り返した。

そうして辰無は生きてきた。その日を生きるために、幾つもの悪徳を己の是としながら。それを罪と辰無は今でも思わない。窮乏は人間社会の天敵であるが、天敵であるが故に全ての価値は狂い、それが許容される。

つまり仇川辰無という畜生は生まれるべくして生まれた狂いの孤児であった。

だからだろう。

今や意識が霞んでいこうとしているのに、辰無は妙な満足感を覚えていた。

「……ああ、だが」

はたと辰無はふと思いついたように闇を見た。意識は曖昧と化してはいるが、しかし未だ死ぬには早い。ぼやけた視界にあるうとも、見るべきものの姿は未だ見えるつもりだ。

ちゃぶり、ちゃぶりと静かな音が血の池に波紋を生み出していく。

円環の血水が細波立つ。

蒼の妖光が闇の中に二つ。次第に黒の濃霧の中、噴き出る腐った闇においても灯された蒼の不気味な光点は紛れず、その輪郭を曖昧にさせて人の形をした影、影法師のような姿となっていたが、そ

れは寧ろ？亡霊？と呼ぶに相応しい姿であった。

瀕死の状態に成り果てようとする辰無の眼前に、茫洋な姿のままに佇む七夜朔の姿は最早隠れる必要も無いと、闇と化してその姿を顕現させた。

「、」

辰無は銃を構えようと腕に意識を回してみたが、気付くと掌から拳銃は零れて赤色の沼に沈んでいた。それではと最期の力を振り絞ってその腕を妻の顔に触れさせた。

指先に彼女の頬の感触は無い。どうやら神経が死んだらしい。

「……ざんねんだった、な。……お前は、私たちのおわりでは、ない」

出来るだけ皮肉げに、辰無は言った。

それは一つの終わりだった。七夜朔の目前、血飛沫によって穢れたランプシェードの明かりが照らす光の中で、二人、あるいは二匹の終焉が訪れていた。

『ひひ、なにがだ？』

辰無の末期を蔑むように骨喰は口ずさんだ。

「……、つく、あ、あ。……おわりじゃない、そう、おわりではないんだ……」

辰無は出血が著しく、すでにその意識は混濁と化して彼の瞳は輝きを失っていた。故に彼の言葉は統制をも無くしてしまい、支離滅裂なうわ言にしかならない。

ぶつぶつと、妻への言葉と終焉の否定に埋もれた声を呟く辰無の首は殆ど貪られており、筋肉繊維はべろんと剥げ、無事なのは咽喉と骨ぐらいだろつが、それも時間の問題だった。

「……ゆきつくさき、が。地獄だろつが、どこだろつが……かまわない。今までも、これ、からも。わたしは、かのじよが……いなくてはおわり、では」

意識が眩んだ辰無は今再び妻の姿を見やろうとしたが、その視界があまりにぼやけていたので、伸ばした指先を噛み砕いていた妻の姿はまるで見えはしない。いよいよもってまどろむ様な午睡の心地にある辰無には、無邪気に笑う妻の姿が悪魔の如き薄ら寒さを湛え

ている事など、まるで気付きはしなかった。

「
が、あ
」

今再び血飛沫が舞った。食欲を堪える事もできない唯葉は遂に咽喉へとその舌を這わし、彼の息の根は潰える。虫の息であった辰無にそれを防ぐ術はなく、寧ろ喜びでもって彼は？愛しい？妻の愛を受け入れた。

そして終わりが訪れる。

仇川辰無。

彼が最期に見た光景は。

笑顔で彼を食む妻の姿だった。

『ひひ』

しかしながら、どこにあるうとも邪なる魔とはいるもの。

凄絶な結末を台無しにする本当の悪魔とは、人の形すらしてはいない刀剣の魔物である。

『ひ、ひひひ。こいつハ、ひひ、面白いなア。全くもって悲劇極まりない。なあ、そう思うだ口、朔？』

びちゃびちゃと血を嚼む音が支配する地獄の底で、金属の軋む音がそれを蹂躪した。

骨喰から見ればこのような結末など茶番劇に過ぎない。一笑に値するだけまだマシの光景であり、涙はなく愉悦だけが刀身を揺する腹を抱える腕が無い事だけが真に残念だ。

「。。。」

朔は無反応に能面の如き眼光を湛えて、辰無の死体を貪る悪鬼の浅ましき姿を見やっていた。化物にしては脆弱な力だと判断し、呆気も無くその刃を表出する首筋に押し付けた。

滲む腐った暗闇が染み渡るように仇川唯葉を包み込んだ。

死ね。

闇に凝縮された憎悪の絶叫が輪唱しながら魔と化した唯葉に殺意を滾らせた。

しかし彼女は死に絶えようとする最中にあるうとも、辰無の死体を食べ続けた。

夢中に夫の死体を食べては満杯になった胃から今しがた収めた肉を吐き出す。それを繰り返す彼女の姿は獣以外の何物ですらなく、知性あるものの末路とはとても見えない。

次第に込められていく朔の膂力に骨喰の朽ち果てた刃がぶつり、と音を立てて彼女の首を裂いた。一度裂け目が入れば寸断は容易く、慣れた手つきで朔の手腕は一つの首を落とす。唯葉は気付いていないのか分からないが、嬉しそうに辰無の咽喉を飲み込んだ。

「。。」

「。。」

頸部に当たる骨の硬さに呻る物音が異物のようであった。肉を斬

り、骨へと届いた刃にかけられた力に女の首がぶれていくが、それでも唯葉は辰無を食った。

まるで、縋るように。

圧せられた力は骨を切断するのではなく、潰すように侵入を果たした。

そして勢いのままに骨喰の刀身は空を斬った。

彼女の首が物言わぬ物体へと成り果てるその時。

「　　さん」

彼女の頬に垂れる一筋の雫は、きっと七夜朔の見間違いにちがいはなかった。

闇が呼吸する。

「ごとり、と音がして二人を包み込んでいた骨喰の闇が霧散する。

唯葉と呼ばれた化物の首は縊られた。その腕の中に食べ残しされた辰無の残骸を抱きながら、二人の亡骸は離れる事無く椅子に腰掛けている。宛らそれは愛を確かめ合う男女のようであった。

「。」「

沈黙が重苦しく空間を押し潰していた。

終焉を迎えた地獄において、沈黙するもの七夜朔以外に他ならない。ここは既に停止しているのだ。余韻も無く、人は死んでいく。殺される。

其処に悲しみを見出すものがあるのなら良かったのだろう。其処に憤怒を抱くものがあるのなら救いだっただろう。

しかし、ここにいるのは物言わぬ死体と物言わぬ七夜朔。鬼に何を期待するのか。

ならば、それを打ち破るものは人、あるいは神、そして悪魔以外の何物でもない。

『……ひひ。んまあこんなモンか、ね』

不躑な骨喰の声音が固定化された空間に亀裂を走らせた。

『この程度の容量ならば、致し方無工。そもこの程度の化物に期待するのが酷ってモンか。悲哀が混じってイるのはいただけないが、憎しみは確かに在んな。ならば、これで良シとするのが上等かア？』

ひひ、と亡骸の残滓を吸いだして骨喰は嘲笑した。

七夜朔はしかし何も言う事は無く、その瞳の奥に二人の姿を映し出した。

『ひひ、シカトかい。んなら、アンタはどう思うんだイ。ええ？
お嬢ちゃん』

「ひっ!？」

扉が不自然な軋み音を響かせる。

隙間から覗く闇の向こう、ぱたぱたと軽やかな駆け足の音が木霊

していった。

ブローチを取りに戻っただけだった。次いで父の驚いた表情を見たい。

ただそれだけのために、仇川しほ子はマンションに戻ってきた。親戚から迎えに来た者の眼を盗み、車から急ぎ足でもって戻ってきた。

「ひっ、……ひっく、……んっ」

星型のブローチは父がお土産として買ってきた一品で、しほ子はそれが大のお気に入りだった。中には写真が収められるように作られており、彼女は当然家族全員が揃っている写真を入れていた。

しほ子は家族が好きだった。言葉を知っていれば愛していると声高々に叫ぶ程に。だから二番目に大切な物として家族写真が収められたブローチは至極大切にしてきた。無論、一番は家族そのものだ。

「う。ああ、あああ、あああああ……っ」

零れる滂沱の涙に嗚咽が混じり、引き攣った表情は恐怖と絶望に彩られる。息を切らしながらしほ子はただ走り続けた。逃げ続けた。

切っ掛けは、ほんの好奇心だった。

マンションに戻ってきたしほ子はエントランスでエレベーターの扉が片方開かれていた事に気が付いた。中を覗いてみるとエレベーターのボックスは無く、そしてそろそろと内側に首を差し出すと眼下には奥深くまで続く空洞が落下していたのが確認できた。

この時点まではよかった。エレベーターにはこんな空洞があるのだと思い、早くブローチを取りにいかねければと、反対側のエレベーターを使用し自宅まで戻った。

ブローチは自室に置かれており、彼女は安心してそれを首から下げた。次いで中を開いてみると、そこには仏頂面な父親の表情と柔らかな笑みを湛えた母親、それに挟まれるように手を繋いだしほ子の姿があった。

彼女はそれを見ているとなんだか嬉しくなつて、無性に父の顔を見たくなった。母はこれから向かうであろう親戚の家で療養しているのもう直ぐ逢えるが、果たして次に父と逢うのはいつになるだろうか。しほ子は幼げながらに寂しくなった。

写真も良いのだが、やはり本物には勝てはしない。

そう思って父の姿を探したのだが、父親の姿はどこにも見えなかった。きっと仕事に向かったのだと半分の諦めで彼女はエレベーターに乗ったのだ。

始めに乗ったとき、しほ子の頭の中にはブローチの事しかなかったので気付かなかったのだが、先ほど乗ったエレベーターの階層を表示するボタンの列の下に位置するケースが開かれており、そこに見慣れぬボタンがあった。

マークの描かれていないボタンである。非常用に設置された呼び出しボタンで無いことは明確であった。しほ子は生まれた頃からこのマンションに住んでいたので、それぐらいは分かる。つまり導かれるのは、このボタンをしほ子は知らないという事であった。

そこで悪い事にしほ子の好奇心がむくむくと浮き上がったのである。元々彼女は活発な質の少女であったし、物怖じする性格でもなかった。だからだろう用事も済んだ彼女は早く親戚の下に行かなくてはならないと理解しながらも、未知のボタンが秘める誘惑に負けてそのボタンを押したのである。

そして、彼女は見てしまったのだ。

療養と言われていた母が、いた空間を。

愛する父が笑顔を浮かべる母に食われ。

愛する母が悪鬼に殺されるその瞬間を。

『ひひ、どこに行くんだイ、お嬢ちゃん？逃げるなら早く逃げねエといけないぜ、嬢ちゃんが遅ければ憐れな小娘はあつというまに鬼の餌食さねエ』

背後から金属のような恐ろしき声がする。

恐慌状態のままに彼女はその声音が悪魔の声だと信じて疑わなかった。

だから彼女は逃げた。あらゆるものから逃げた。

一目散に駆けて、途中転びそうになって支えた掌を擦り剥きながらも彼女は走ってエレベーターの開閉ボタンを叩いた。おそい。刹那が伸びた時間に扉が開く速度があまりに遅く感じて、彼女は思わず背後を見やる。

「ひう!？」

咽喉が引き攣り悲鳴が上手く出来なかったのは、無理からぬ事であつた。

彼女の後方、その重い扉の前に、ソレはいた。

「
、
」

仄暗い通路の中で全身に闇を纏い、不気味な日本刀を隻腕に握りしめて、それはゆらゆらと揺れるようにゆったりとした歩調で歩いてくる。時折紛れる闇の中に長身瘦躯の男がいて、髪の間隙から冷たい鬼火のような瞳が蒼々と灯されていた。

瞳が、しほ子を見ている。そして追ってきている。

未だ幼い彼女にその恐怖を耐える術はなく、彼女の足元には湿った水が滴つたがそれを恥じる余力すら彼女には残されていなかった。

「は、はやくきて、はやくきてよ　　っ!」

涙ながらに叫び声を上げながら、しほ子はボタンを押した。

叩きつけるようにボタンを絶えず押している間にも、鬼はゆっくりと近づいてくる。

『嗚呼、憐れだなアお嬢ちゃん。お嬢ちゃんも血は少ないが、混血だろウ？ならば存分に殺さなきゃなんねエ。あの女じゃあ足りねえんだ、まるで精神の意欲が足りはシねえ』

鬼の歩調はいやに無く遅くて、まるでしほ子を追い詰める事を楽しんでるかのような。果たして鬼に捕まった人間はどうなるのか。遊びではない事実には彼女は震える。

早く。早く。

早く。早く。　　っ。

彼女の祈りが届いたのか、ちんと軽い音と共にようやく扉は開かれ、しほ子は割り込むようにエレベーターの中に入り込んだ。もんどりうちそうになるのを堪え、今度は『閉』のボタンを連打する。

扉の側に設置されたボタンを押す。だから彼女からはソレの接近が良く見えた。良く見えてしまった。ソレの身から、握る刀身の刃

あと少しで扉が閉まるうとしたその時、彼女の精神が限界を迎えた。既にアレが殆ど見えなくなった事もあるだろう。彼女は壁に力なく背中を預け、ずるずると座り込んでしまった。

「ばば……ばばあ、ママあ……ひつく、うあ、ああああああ
ああああ　　っ
」

涙を抑える事も出来ずに、彼女は泣いた。父、母。二人の姿が脳裏に浮かんでは消える。共に過ごした日々。プレゼントをくれた父の表情。いつでも笑顔を絶やさなかった母の姿。走馬灯のように次々と一緒にいた光景が彼女を見つめていた。

エレベーター内部に彼女の悲哀が溜まっていく。何かが終わった。きつと全てが、彼女を構成する何かが全部終わってしまった。

さらさらとしほ子は崩れていく。彼女は砂の一粒に過ぎず、それが崩れて、砂になる。砂のように、消える。

それでも、瞳から溢れる悲嘆の涙は絶望の粘り気がした。

っぎゃん！

あと少し。ほんの少しで完全に閉じられた扉の間隙、その隙間からは殆ど外の光景は見えない。それぐらいにあと少しだというのに。金属のけたたましい罅割れ音がエレベーター内部を切り裂いた。

「あ」

扉の間から一本の刃がおどろおどろしくその姿を顕現させていた。

それは腐った闇を纏う朽ちた日本刀であり、その外観には薄ら寒さへ感じてしまう。切っ先は真っ直ぐにしほ子へと向けられていて、今にも刀身がしほ子の眼を突き刺してしまいそうだった。

『よう、お嬢ちゃん。ひひ、どこに行こうってのか。ココが手前の終焉つつウのよ』

腰砕け、最早立ち上がる力さえも失った少女を金属音が嘲う。

そして骨喰の刀身が左右に動かされていく。機械仕掛けの扉を抉じ開けられんとする人外の力に今にも折れてしまいそうな刀身は少しも罅割れず。

少しずつ、少しずつ扉は開かれていく。

ぎしぎしと鈍い音を立てる扉。しほ子にはそれが存外にゆっくりと開かれているように見えた。引き伸ばされた時間は恐れによるものだろうか。それすら幼いしほ子には分からない。

ただ、その僅かな時間の合間にしほ子の理性はここではない何処かへ軽やかに飛翔した。

断続された映像がしほ子の目の前で繰り広げられる

しほ子は何処かの草原を歩いていく。両隣には父と母がいて、しほ子の両手を握っていた。相変わらず仏頂面な父はどこか微笑ましげに、そして美しい母は柔らかな笑みを浮かべてしほ子と父を見つめていた。

「ばば、……ママ」

ここから先には何があるのか。広がる若草の香り、緑色の海の最果てに暖かな光が当てられていて、言葉を交わさなくとも、あそこに向かうのだとしほ子は確信を抱いた。確信が彼女の首を動かす。しほ子は両親に目を合わせた。二人は緩やかな風に包まれながら髪を靡かせて、しほ子を見守っていた。なんだか彼女は嬉しくなった。

心配や不安、あるいは怠惰や飽きなど一切のここから先には見えない。それは確かな幸福をしほ子に予感させた。

だからしほ子は空から降り注ぐ光にも負けない太陽の笑みを浮かべて

『可哀想な子羊は腹を空かせた化物に喰われるノが常道ってな、ひひ。まア、その化物はもう一匹の化物を殺した化物なんだがナ』

鬼が、エレベーター内に現われた。

座り込んだしほ子は呆然とした心地でソレと対面した。

ソレは人間の男のようにも見えた。しかし、それが人間であるはずが無い。

何故ならその瞳は、その虚空を思わす瞳の蒼の中には人らしい光も温かさもなく。

おん。と音がして。

エレベーターの扉は次第に閉じられていく。ゆっくりと閉じられる扉、その隙間から消えていく仄暗い光景を、しほ子はきっと忘れな
いだろう。

人工的な光が支配する個室には鬼と混血。

七夜と混血。

ならば、これから起こるであろう光景はただ一つ、たった一つだ
った。

そして　　。

過去編 Rhapsody in Crimson 下(後書き)

殺人鬼。

朔の魔眼。朔の目的。

刀崎白鷺。刀崎の狂乱。

骨喰の目的と正体。

仇川

人と魔。七夜と遠野。

親と子。

家族。

あと、もしかしたら星型のブローチ。

子供だから殺さないとか、殺しに理由付けるのは殺人鬼ではない
と私は思っています。

感想おくれやす。

PV100万アクセス、ユニーク10万人突破記念

フェイト/セブンスナイ

記念なのに没案という。

白む朝の光に瞼が刺激された。翻る道着に玉の汗が弾かれ、跳ね上がった爪先が空を穿った。閃光のような鋭さを放つ一撃。しかし仮想の敵はそれを容易くいなす。顔の無い標的は頬を歪ませて瞬き一つの速度で持って、その人差し指を咽喉に突き刺した。

「
っが」

咽喉が凹んで苦痛を生む。

例えそこにいない敵であろうとも、敵は敵だった。ならばこちらを害さない理由はなく、また危機の無い鍛錬に充足は生まれないのである。

酸素を求める脳髄が眩む意識を無理矢理保たせて、反撃の一手を放とうと？左腕？を動かした。しなる腕は鞭のように空気を叩き、硬く握られた拳が顎を狙うがそれすらも相手の腕によって阻まれ、あまつさえ握られてしまった。

「
っく」

食い縛る奥歯からがりりと音がした。

それは苦痛にではなく、己の至らなさから発する苛立ちであった。動きの遅い拳動はどれだけ追い詰めても微々たる速度しか生み出せない。膂力もまた同じで、彼の体はかつての飛翔を過去へと置き忘れ遙かに劣る性能と化していた。

そして来る。

呻りを上げて迫る手刀。先ほど放った鞭の一撃が兎戯に覚えるほどに加速された腕はあっけなく脳天を唐竹にかち割ろうとして。

「おはよう、兄貴」

道場内に訪れた義弟の声音によって、掻き消された。

全てが不意となつて、彼の内心は己への至らなさが渦巻くがそれを表に出さず、彼は今しがた現われた家族に顔を向けた。

「おはよう、しろつ」

そして、衛宮朔の一日が今日もまた始まる。

兄貴はちょっと変わっている、と衛宮士郎は思っている。

それが嫌だとか思わない。しかし少々、いやいやかなり変わっているという認識は覆しようがない。

ざんばらに伸びた髪は致し方ない。背後に刃物を持った人物がいたらついつい拳が出るという癖の持ち主である衛宮朔の髪を切るこゝとが許された人物は数えるほどしかないのだ。

兄貴は見かけだけはかなり良い。長身痩躯な背丈は士郎よりも頭一つぶん以上あるし、髪をもっと短くすれば、なかなか端正な顔つきをしていると思うのだが、と義兄弟の姉代わりである虎はいつもぶつくさ言っているし、士郎としてもそれは賛同する。

ただ本人が現代の忍者ばりな動きでもって散髪を嫌がるので、強行は無駄だ。

と言うか、時たま兄貴は本当に人間なのかと士郎は疑りたくなる。先ほど暫し見てしまった鍛錬で壁や天井を足場に使用し、三次元移動を披露している姿などついつい苦笑いが零れてしまいそうだった。

あんな事が出来るのであるから、？穂群原のリアルグリップラー？なんて呼ばれるのである。弟としては恥ずかしいたらありゃしない。

「しろっ、どうした？」

妙に舌足らずな声がして、はたと思えば朔が手ぬぐいでもって体の汗を拭いていた。はためかれた道着の中にある肉体は猫科動物を思わせる、しなやかな筋肉によって引き絞られており、ひそかに士郎は朔の体格を鍛錬の目標にしていたりする。

「いや、なんでもない。けど、兄貴は相変わらず起きるのが早いな。今日は何時に起きたんだ？」

「よじ、くらい」

「……早いな、兄貴」

「そうっ」

あどけない仕草で、こくん、と小首を傾げた朔の顔は真底不思議そうだった。

衛宮朔は毎日の日課として早朝、そして深夜に鍛錬を行っているが、その内容は士郎ですら呆れざるを得ないような濃さであり、今の士郎が行えば忽ちの内にノックアウトは免れない。だって、全速力で走るスクーターに併走して一時間以上とか、ありえないと思うんだ。しかし、それでもしないとあの肉体にはならないのだろうか。

「しろつ、は。いまから？」

「ああ、今日は少し寝坊してな。……そうだ、兄貴鍛錬が終わったんだったら桜の手伝いをしてくれないか？」

「わかった。でもしろつ？」

「うん？」

「よぶかしは、よくない」

朔はどこか表情を曇めさせて言った。どうやら兄貴に心配させたようだった。

「ごめんな、今度から気をつけるよ兄貴」

「ん」

士郎の返事に朔は一つ頷き、そして道場を後にした。

「」

その際に士郎の頭をくしゃりと一撫でしながら。

「……たく、子ども扱いはやめろよな」

既に後姿と化した朔に向かってぶつくさと士郎は文句を溢したが、その顔は存外に嬉しそうだと気づくものはそこにはいなかった。とは言えいつまでも余韻に引きづられるわけにもいかず、今朝は遅れ気味なため気持ち程度の省略をもって体を動かす事にした。

正義の味方は、どこまでも遠いのである。

鍛錬を終えた士郎が着替えを済まして居間に訪れると、何時もあしげく衛宮邸に通ってくる間桐桜により朝餉は完全に整っていた。

今朝彼女によって土郎は土蔵で眠っていたところを起こされたので、
本日は既に会うのは二度目だ。

「あ、先輩。お疲れ様でした。こっちも朝食の準備、終わりましたよ」

「ん、さんきゅ桜。ごめんな桜、準備まかせつきりになっちまって

「いえ、良いんです。それに衛宮先輩も手伝ってくれましたから」

そうやって桜は困ったように微笑んだ。そんな微笑でさえ、彼女のものと思えばおしとやかに咲く花のようなのだから、彼女の女性らしさには土郎としても落ち着きを保つのに必死だった。

「ところで、……その兄貴は」

「えっと、今は藤村先生を玄関で出迎えに行っただんですけど……」

しかし、この時間になっても藤村大河が訪れる気配は訪れない。
そろそろ朝食を取っておかなければ余裕もなくなりそうですらある。

「多分そろそろだと思っただけど……しかたない、この時間に来な

いほづが悪いんだし。桜、兄貴を呼んでくるから先に食べてよう」

「はい、わかりました」

玄関に向かうと兄貴はこちらに背中を向けて佇んでいた。

しかし改めて見ると、その恵まれた体格に息を呑みたくなった。長い手足に、腰の位置もまた高い。爺さんが使っていた着流しを着ているが、それがいやに良く映える。兄貴は和服以外あまりつけたがらなかったで、過去高校に通っていた頃は毎日制服を居心地悪そうに着ていたのを今でも覚えている。

「兄貴、そろそろ朝食にするぞ」

「……………ん」

少々後ろ髪を引かれながらも、朔は素直に土郎のいう事を聞いてくれた。藤村大河が遅れる事は良くある事なので、二人とも馴れていたのだが。

大よそそれから少したち、問題の人物は珍しく物静かに我が家の門を潜ってきた。

居間の中では、食器にぶつかる箸の音が断続的にしていた。それ以外に音はあまり無く、普段ならば之にひとりの騒音が加わるものであるが、今日はやけに静か。

桜は食事時にはあまり喋るほうではないし、朔もまたそれは同じで、寧ろ話しかけない限り兄貴は喋る事自体が少ない。そして士郎もまた食事をしながら会話を積極的に行えるほど器用ではない。それならばと、主に食卓を騒がしくさせる張本人であるが。

「……………」

昨夜にでもスパイ映画を見たのだろうか、広げた新聞紙に顔を隠しながら士郎たちの様子を怪しげに伺っていた。いや、言葉にしなくても怪しい姿である。

「藤村先生、ご飯時に新聞は見ないほうが良いと思いますよ？」

「……………」

遠慮がちに声をかける桜を無視して藤村大河は新聞紙をかざりと開いた。しかし朝食で藤村大河が拳動不審なのはいつもの事で、桜も別段気にしている風でもなく、食事を続けた。

衛宮邸では和食を好む人材が殆どを占めている。士郎や大河はどちらかと言えば、というニュアンスで好んでいるし、朔に到っては和食こそ至上と信じているっぽい。実際に言葉にしたわけではないのだが、和食の時には朔の目が何となく輝いて見えるのだ。

そんな訳で桜にはせめて朝はと、軽い和食料理を覚えてもらったのである。

当初料理の師匠であった士郎であるが、最近では桜の腕もめきめきと上がり、士郎を上回っている。

味噌汁の味もなかなかだし、食卓にのっかっているとろろ汁など擦る余裕すらあるようで、士郎は今日始めて見たとろろ汁に興味を覚えていた。

「わるい、桜。醤油を取ってくれないか」

「はい　　って、大変です先輩。先輩のお醤油は昨日で切れます」

「んじゃ、藤ねえのでいいや。とって」

「はい。藤村先生、いいですか？」

「……」

新聞紙から半分だけ顔を覗かせて、藤村大河はこくんと頷いた。

「はいどうぞ、先輩。とろろ汁に使ってますか？」

「ああ、とろろには醤油だろ」

とろろ汁に醤油をかけながら土郎は言った。

ところで土郎が普段使用している醤油は朔との兄弟兼用である。味覚が同じというわけではないのだが、少なくとも全く遠ざかってもない。しかし朔の方は積極的な味の好みがあるのでなく、だから必然的に朔のぶんにも醤油はない事になるのだ。つまり。

「しろう、こっちにも、かして」

朔が土郎に向かって手を伸ばす事も全く持って必然であった。

「ああ、……ほら兄貴」

「ん」

士郎と対面するように座る朔へと醤油を渡す。その際に大河の新聞紙がちよつと揺れたのは気になったが、たいしたことではないだろう。

「っ、と白いところに茶色の醤油を垂らす。」

そして徐にぐるぐるとかき混ぜ、士郎とそれに少し遅れて朔はご飯に乗せたとろろを口の中に運んだ。

うむ。この擦られたとろろの粘り気と、ご飯の仄かな甘み。そして辛味を帯びた自己主張を行って止まない醤油の味わいが台無しにした残念極まりないハーモニーが何とも言えな。

「ぶふうわ……っ！ まず、これソースだぞソース。しかもオイスター！」

脅威の味わいに士郎が戦慄していると、「ぶ、ぶふ」無駄にしてやったりな笑いが漏れてきた。

「　　なんか、うまい」

「衛宮先輩……大丈夫なんですか？」

主に味覚的な意味で、と突っ込まなかった桜は良い子である。

いつまでも続けると、朔は何となくではあるが思い込んでいた。自身の焦燥や苛立ちとは裏腹に、日々はこんなにも緩やかに過ぎ去っていくと、朔は思い込もうとしていた。

しかし、変わらない事などありはしないように。断続の日々が終わりを迎えるなど、特に珍しくも無い事である。朔はそれを知っていた。知っていて、何もしなかった。

何故なら朔は逃げたからだ。何もかもを切って捨て、里での日々や憧憬を抱いた人の願い、育ててくれた人の温もりや、人々の優しさ。そして自分を兄と呼んでくれていた子供。それら全てから逃げ出して、朔はこんな所にいる。

だからきつと、全ては因果なのか。

「どれだけ逃げ続けようとも、人には選択しなければならない時が来る。」

「……坊や、どうして私を助けたのかしら？」

「しるうだったら、きつとそうする、から」

全ては、運命だったのかもしれない。

そして、戦争が始まる。万物の願いを叶える聖杯を賭け、七名の魔術師と七名の英雄がこの世に顕現して殺し合いを演じる戦争が。

かつて敗走し、全てを失った青年はせめてもと家族を助ける為に、その身を再び血沼の底へと投じる。

「いったい、どういう身体の構造をしているのかしらね。魔力も持たない人間がサーヴァントの補正があるとは言え、英雄の一撃を回避するなんてね、マスター」

「まだ、おそい。」

「まだずっと、とおい」

しかし非日常の匂いは日常へと染み渡り、何かが崩壊を始める。

「つまり私は朔の婚約者なの、おわかりになった？ お嬢さん？」

「そそそんなこと、ぜええええったい認めないんだから！！
朔は私の旦那様になってもらっただからね！！」

「……え、マジ？ 藤ねえ」

一度バランスを崩せば、後は容易い。

均衡の破られた日々はあっけなく歪と化して、狂っていく。

「私のほうが年上って、これでわかった。
え、サク21歳
？ あれ、私のほうが年下？」

「わたし、リーゼリッテ。あなた、サク？」

「ん」

「……あれ？何このちょっと甘い空気は」

白き少女は、父が残していった家族と出会う。

後悔は遠く、遙か後方に残された。

それが痛いと思いなながらも、どうすればいいかわからない。何故なら彼は人でなし。

「ふ、ふふふふふ……」

「あは、あははは……」

「うふ、ふふふふ……」

「笑っているのに、空気が重いぞ遠坂!？」

「っし！ 目を合わせちゃ駄目よ、士郎。合ったが最後、どうなっても知らないわよ!？」

「　　なんでみんな、さっきだってるんだ？」

「……（信じられないものを見たような桜の視線）」

そして、戦争は加速する。

「サク、貴方は本当に人間か？」

「きつとまだ、にんげんだ」

月光を浴びて凜とした美しさを湛える誇り高き騎士王は不可視の切っ先を朔に突きつけた。

「アンタは本当に変わらないな、……兄貴」

「あーちゃー？」

赤き弓兵は断片化された記憶に過去の思い出を見た。

「はっ！いいぜ、お前人間にしては極上じゃねえか！！」

「そう、かつ！」

蒼き槍兵は稲妻の一撃をすんで交わり、あまつさえ反撃の一手を繰り出す朔に歡喜の咆哮をあげた。

「……貴方は、何だか不思議な人ですね。まあ、いいでしょう。全ては夢です、今はただ眠りにつきなさい」

「う、あ」

枯渴したはずの退魔衝動に駆られた朔は紫の騎兵へと襲い掛かるが、已む無く敗北しその首筋に牙を突き立てられた。

「ハ、ハハハハハ！これはたまげた！よもや我が必殺の太刀筋が盗まれようとは……！」

「もう、にげることはできないから」

無聊に佇む群青の剣士は、この世に再び訪れた奇跡を月に感謝した。

「……！！！！！！」

「うらみはない。でも、たおされる。えいゆう」

勝ち目無き戦いを勝つために、敗走の殺人鬼は無様にも立ち向かう。

「ねえ、マスター。貴方の願いは、一体何なのでしょうね……」

「それを見つげるために、たたかうだけ」

「……」

「ん？」

「なら、今は私を見てください。……マスター」

裏切りの魔女は磨耗し尽くした殺人鬼の心根を憐れみ、そして確かな慕情を抱き始めた。

そして勃発する、ブラコン戦争。

「お前みたいに正体もわからない奴なんかは兄貴を渡してたまるかっ!!」

「もう一度、もう一度一緒に暮らすんだ。こんな所で立ち止まっつられない。悪いけど、兄ちゃんは連れて行く!」

全ては流転していく。始まりは終わりを告げ、朔月の如き終わりの始まりが告げられる。

「ふむ。己も許せぬお前が誰かを殺せぬなど、それは全くもって自然の事。朔、君は何も分かっていない。殺害とは相手の全てを許す事。ならば己さえも許せぬお前に、一体誰が殺せるといふのかね?」

「もう、ななやじゃ、ないんだ、……な」

殺せない。かつて殺しの輩として生を受けた青年は、今や誰も殺せぬ不殺の殺人鬼。度し難き腑抜けと化していた。全てから逃げ出して、置き去りにした青年は、もう七夜ですらない。

それでも、過去は朔を捉えて離さない。

「……その絶技、見たことがある。……貴様、七夜か。殺人鬼の生き残りと出会うとは、これもまた因果か」

「おまえ、なんだ」

「……葛木宗一郎。ただの、朽ち果てた殺人鬼だ」

全ては過去。

「兄貴行くな！……行かないでくれっ！」

「せいぎのみかたのそばに、いることはできない。しろう
は、じぶんのやることを、やる」

消え去らない夢幻。

「なんで！なんで朔が行方不明なのよ！」

「衛宮先輩……そんな」

「さよなら、とは。言わないからね、お兄ちゃん……」

失った本来の自分と対峙するために、朔は対峙を果たす。

「いくぞ、へび。おまえはここで、ころされる」

幾多の夜を越えて、いま再び人殺の鬼が鼓動をあげる。

フェイトセブンスナイト。

絶対に始まらない。

PV100万アクセス、ユニーク10万人突破記念。

フェイト/セブンスナイ

没案ver 主人公設定（前書き）

前話にて、執筆を始めたばかりの頃、Fateと無理に絡ませるためにこんな展開をそれとなく書いてみました。一言。

これは、ひどい。

本来ならば記念としてアップさせるものではないのですが、こんな機会だしという緩さでもって過去に書いたプロットらしきものをそのままに晒してみましたが、これはかなり恥ずかしいです。

以下、没案の続編を書くつもりも無いので、没案berの軽い設定集でも。本編との違いを楽しんでください。また書いていない部分は本編と同じと思ってください。

没案ver 主人公設定

衛宮朔 21歳 男

衛宮家の長男にして主。どうにかこうにか私立穂群原学園を卒業後、冬木市にある道場で師範めいた事を行い稼ぎを得ている。

長身痩躯。ざんばらな髪を整えたらなかなか端正な顔つきをしていると見える男。和装を好み、普段着付けている着流しは衛宮切嗣の形見。

正確は寡黙にして冷静、プラス天然となかなか残念なエアクラッシュャー。本人の自覚は無いがブラコンですらある。女性とお付き合いた経験は無く、本人はそれをどうでもいいと思っているが、大河の画策によりそのうちいつの間にもやら藤村家に戸籍をいれられる可能性がある。

小中高校と問題を生んだ冬木の起爆剤。穂群原高校時代には藤村大河、柳洞零観、蛍塚音子らの再来と教師陣からは呼び恐れられていた。トラブルが勝手によってきて、それでいて本人が自覚しないで増長させてしまう生徒だった。

物怖じしない性格というか、極一部を除いて他人の事など気にしない人格であるため、扱いには困る。そして思い込みが激しく、ず

ば抜けた運動神経も相まって不良101人狩りを無自覚に行い、また道場破りを敢行した際には壁や天井を足場として使用する三次元移動を披露し、気付けば穂群原のリアルグラップレーと呼ばれるに至った。これが士郎からすれば実に恥ずかしい。

またその思い込みの激しさから、藤村大河のいたずらをいたずらとして気付かないボケ殺し。とろろ汁にオイスターソースかけても「なんか美味い」と称していたほど味覚が広く、致死性の毒が混在していない限りは何でも食べられてしまうので、士郎がやたらと燃える。

矢鱈と舌足らずなのは、火災による後遺症。

得意な事は裁縫。好きな事は鍛錬と家族。

弟である士郎と似ていないのは二人とも養子であるため。

その正体はかつて退魔として存在していた七夜の生き残り。

遠野の七夜討伐後、ほうほうのていで逃げ出した朔は誰からの援助もなく長い間逃亡し、冬木の大火災に巻き込まれた。その際にかつて見捨てた従兄弟である志貴と姿が重なったという理由で士郎を助け、またそこで出会った衛宮切嗣の提案により衛宮の養子として生きる事となった。

冬木での生活は一般教育すら受けておらず、また一般常識のかけらも無かった朔には全てが未知のものであり、その時になって藤村大河と出会う。ただひとり藤村大河をあだ名で呼び続ける人物であり、何回も訂正を求められているが全く変えない。ただ呼ばれている本人が満更でもないという。ちなみに朔以外が呼べば問答無用で暴れる。理不尽。

八年前に切嗣が亡くなってから士郎の保護者になる事を決意し、中学入学直後に自分の強さを分かりやすく証明するために道場破りを敢行し、見事にこれを果たす。またこの頃から不良との戦闘が行われ、不良101人狩りが行われたのもこの時機である。更にこの時に自身の肉体が格段に劣り始めている事に始めて気付く。

そしてこの辺りから朔の周りには不良系の取り巻きが増え始め、いつの間にもやら冬木の不良グループを統括するに至る。何かと慕われているので、本人も「ま、いっか」と思っているので、何も問題はない。

人と感性がずれているが、善悪の判断が出来ないわけではない。しかし善悪に価値を見出していないだけ。それでもいままで何とか普通(?)に生活できていたのは、士郎に迷惑がかからないように、何事にもやり過ぎないように注意を払っているため。

七夜としての己は既に死んだと思っており、それを本人は自覚し

ていないが凄く悲しい事だと思っているが、敗走し何もかもを捨ててきた自分にはどうしようもない。

またそれが原因により人を殺す事が出来なくなり、正真正銘の欠陥品となる。それ故に七夜としての肉体が格段な劣化を起こしており、本編とは比べるまでも無い。魔眼の発動もまちまちであり、自身でコントロールする事ができない。

本編とは異なり骨喰を所持しておらず、刀崎梟はとつくに死んでいる。

ただその本質が殺人鬼である事に変わりはないため、正義の味方を目指している士郎とは将来的に対立する可能性がある。

人からの悪感情にはかなり敏感だが、好意には壊滅的に疎い典型的な鈍感野郎。

士郎のことは義弟と大切にしているが、本人は志貴の代替としか見ていないのではないかと悩んでいる。

周りが和やかでも本人だけ気落ちしている天然かつ隠れダウンナー系な主人公。

ヒロインは藤村大河、キャスター、リーゼリツテ。次点ヒロイン候補ライダー、ダメットさん。

またラスボスが葛木宗一郎。

……改めて見ると、無茶してるなー。

プロローグ 光（前書き）

それは、大切な約束。

忘れてはいけない、先生との約束。

プロローグ 光

赤毛と白いシャツにジーンズ。そしてどこか古ぼけたトランクケース。

その人は優しい人だった。自らを魔法使いと名乗りながらも、全然そのような振る舞いを見せず、ただ僕は良い人なんだと思った。

僕はすぐその先生の事を好きになった。

全てから逃げてしまおうとしたあの草原で、その人は当たり前のように僕の横に座った。誰にも相談できず、誰にも理解されなかった悩みをその人は真摯に聞いてくれて、同じように考えてくれた。

「それで、誰を探しているっていうの？」

「わからない」

「うん？」

「全然わからないんだ。その人が誰で、僕の知ってる人かもわからないんだ」

胸に貼り付けられた惨い傷跡の奥底にある、空洞に思いを馳せながら僕は言う。

なだらかな草原だった。空気が澄み渡り、草が仄かに香って、緩やかに風は凪いだ。隣に座っている先生の赤毛が心地よさげに揺れている。快晴の空は遠くまで見え、まるで自分も空に吸い込まれて

その一部になってしまいそうな気がした。

僕は先生の隣にいらながらも、ここにはいない、きつと側にいた誰かの事を思わずにはいられず、きゆう、とおなかの中が痛くなった。

「でも、先生。僕はその人のことをたぶん知ってて、きつと大切な人だったんじゃないかって思っただ」

「どうして?」

「……どうしてだろう。でも、……僕は」

言葉に詰まった。一体自分が何を思いその人を求めているのかすらわからないのに、それを言葉にするのはとても難しかった。

難しくって、息が苦しくなって、何だか悲しくて仕方が無かった。

でも、先生は朗らかに笑って、応える事の出来ない僕の頭を優しく撫でてくれた。

「だったらその人の事を忘れちゃ駄目よ。人は忘れた事さえ忘れてしまった時、もう二度と会えなくなる。だから今はその人の事を忘れたという事だけを覚えておきなさい。縁が合えば、まったきつと出会えるわ」

それだけで、僕はその人の事を好きになり、先生と呼ぶようになった。

だから、先生と呼んだその人をびっくりさせたくなくなった。

大木に走る落書き。落書きをなぞれば何でも切れる。事故を経てから見える黒い落書き。僕はそれが怖くてたまらなかつたけれど、この時ばかりはそんな事も頭から離れていた。ただ先生に自分が出来ることを知って欲しかった。

落書きを果物ナイフでなぞる。するとアレだけ太く育っていた木は訳もなく切れ、みしみしと音をたてながら、ゆっくりと切断面が悲鳴をあげながら倒れ伏していった。

「先生、すごいでしょ！」

僕は先生へ振り返りながら言う。

「落書きが見えているところならどこだって簡単に切れるんだ」

自分がそれだけすごいのか、特別なのか、あるいは異様なのか先生に教えたかった。

きっと先生はびっくりして僕の事を見てくれる。僕と知り合えたことを誇らしく思ってくれる。そんな事を思いながら。

「こんなの誰にもできないでしょ？」

でも、それは振りぬかれた先生の掌が与える頬の衝撃に、断ち切られた。

「え……？」

呆然と先生を見ると、先生は僕の事を睨みつけていた。

その目元に憂いさえ浮かべながら。

「志貴……君は今、とても軽率な事をしたわ」

倒れ伏した大木。生きている大樹が僕の手によって切断され、物言わぬ死に飲み込まれている。

そしてその時、初めてそれがいけない事だと知った。

「あ……」

震えて、握っていた果物ナイフが滑り落ちた。でも、それにさえ僕は気づかずにいる。先生が怒っている。その事実には足元さえ覚束ないでいた。

僕の視線に合わせるように眉間に皺を寄せた先生は腰を屈め、じつと僕のことを見つめている。それが責められているようで、ただ怖かった。

「……」

思わず涙さえ瞳から零れた。

「じめん……なさい」

柔らかい感触が僕の体を包み込んだ。気づけば、先生が僕を抱きしめてくれていた。

「謝る必要はないわ」

先生は優しく囁いてくれた。耳元で聞こえる先生の声はどこかすぐたくさえあった。

思えば、誰かに抱きしめられるなんて目が覚めて初めてのような気がする。病院では知り合いは誰も尋ねてこなかったし、医者は診断しかしてくれない。誰かが僕の事を思ってくれて抱きしめてくれるなんて、はじめての事だった。

「志貴は確かに怒られることをしたけれど、それは決して志貴が悪いつて訳じゃないんだから」

側にいる先生は温かく、柔らかい匂いがした。

「でもね、志貴。今誰かが君を叱っておかないと、きつと取り返しのつかない事になる。その代わりに志貴は私のことを嫌ってもいい」

「ううん……先生の事、嫌いじゃないよ」

涙が止まらなかった。鼻のつんとして痛い。胸の奥にある虚ろが温かくなっただけれど、だからこそ際立っているようで余計に悲しく思えた。

「そう、……よかった」

少しだけ強く、先生は僕を抱きしめてくれた。

「すごいよ先生！ 落書きがちつとも見えない！」

果てしないような草原での出会いは、僕にかけ値のないものを与えてくれた。眼鏡もその内の一つだった。それをかけると視界に走る落書きが消え、空を見上げれば眩しい青色が阻害されずに見えた。あれだけ僕を苦しめていた気持ちの悪さが、まるで嘘のように見えなくなる。

まるで、魔法のようだった。

そういつと先生は「当然よ」と笑いながら言った。

「だって私、魔法使いだもの」

眼鏡を外してしまえば落書きは再び見える。一時的な誤魔化しにしか過ぎず、根本から消え去る事は決してない。それでも、僕にとっては例え嘘でも落書きが見えなくなることが嬉しかった。安心して歩ける。触れただけで簡単に壊れない。それだけで嬉しかった。

「いい？ 志貴、その線をいたずらに切ってはだめよ。君の眼は「モノ」の命を軽くしすぎてしまう」

別れ際に、先生は言った。

出会いが偶然のようなあっさりさであったように、別れもまた偶然のようにあっさりとしたものであった。

「でもそれは君個人の力よ。君の未来にはその力が必要になるからこそ、その直死の眼があるともいえる」

二度と出会えなくなるかもしれないのに、僕たちの間に悲しみはなかった。心のどこかで、これで終わりではないという確信が何となく心のうちにあった。馬鹿げた考えだとは思えない。もし、運命という言葉を知っていたならば、その文字ほど相応しいものはない。それでも別れは切なく、僕はずっと先生を見つめ続けた。

「どうしても自分の手に負えないと判断した時だけ眼鏡を外して、自分でよく考えて力を行使しなさい」

不意に近づく先生の顔。そして僕たちは額を合わせあう。先生の額から、僕の頭のなかに何か暖かいものが伝わってくるような気がした。

「志貴」

いよいよ、別れが近づいてくる。

離れていく先生の体温がどこか名残惜しい。

「聖人になれなんて言わない。君は君が正しいと思う大人になればいい。そうすれば、きっと君の会いたい人にもめぐり合える」

先生は僕の胸に手を当てる。そうすると、確かにそこには消え去らない虚ろがある。

でも、これを忘れなければきっと出会える。例えそれがどんな出会いであれ、信じ続ければ、きっと再び会える。先生、そして。

どこかに見える、あの後姿へ。

「いけないという事を素直に受け止められて、「ごめんなさい」と言える君なら」

先生は最後まで笑顔だった。風の中で揺れる柔らかかな赤毛。トラノクケースを片手に笑うその姿は、いかにも先生らしく、魔法使いには見えない。

でも、先生は僕に奇跡をくれた、誰よりもすごい魔法使い。

「10年後には、きっと素敵な男の子になっているわ」

彼女が紡ぐ言葉。

それはきっと、再会の約束。

プロローグ 光（後書き）

六の文章がこんな優しい話でもってプロローグを終わらせる、なんて本当に思う？

プロローグ 闇（前書き）

嘆きの川を泳いで渡り、向かうは果ての無明荒野。

一瞬の灯火は複かさねの讐かたき體われこへが道を成す。

光りの明日はもう来ない。暗いまどろみへと迷い惑う。

プロローグ 闇

獣の臭気がこびり付き、死臭と化した澱みが充満している。

冷たい暗闇である。肌に触れてしまえば切れてしまいそうな沈黙と寂寞が重い鉄製の扉の中に漂い、呼吸さえ難しい。

そしてそれは、暗い暗い地下の闇の底にいた。

子供だった。壁から伸びる鎖によって手足を縛られ、更に口元には拘束具が装着されている子供である。全身を取り巻く金属によって関節の殆どを封殺されたその身は、壁と同じような固いコンクリートの地面に横たえられており、左腕を失っている事から異様に細く見える。その様は春を待つ蛇のようであった。

そしてよく見れば、襟褸切れを纏う体中のいたるところで傷が目立ち、出血も多々としている。しかし、その身を拘束された少年にそれを拭う事も痛みにあてがう事も出来なかった。

すると闇を切り裂くように、重々しい鉄製の扉が軋む音を上げながらゆっくり開かれた。

そこに現われたのは着物を羽織る女だった。艶やかな立ち姿と病的なほどに白い肌、そして口元を彩る血のような紅が相まって、浮世絵から飛び出たような女である。

このような場所に女の姿は限りなく浮ついているように見えたが、そのあり様は何よりもこの場所に相応しく思える。退廃的なまでに、女はどこか現実離れをした瞳のなかに拘束された子供の姿を捉え、

嗜虐が愉悦を誘い、七夜朔の無様に侮蔑が躍る。

振り上げられた脚が七夜朔の小さな体を何度も殴打する。

腹を背を、腕を足を、頭部や顔を硬い踵で幾度と無く。幾ら単純な蹴りとは言え、打たれるその度に朔の体には新たな傷跡が生まれ、塞ぎかかっていた瘡蓋が破裂し血が滲んだ。

だが、七夜朔はそれでも無反応だった。

女のことなどまるで興味の彼方から失せている。その伏せた眼が女を捉えることもない。まるで女になんの価値も見出していないかのようにだった。それが溜まらず女の腸に宿る憤怒が煮える。

「つく、この人形が！」

更に力を込められた蹴りが朔の顔面を捉える。

鼻腔から血が垂れた。どこかを切つたらしい。それでも鼻が折れないのは僅かな身じろぎだけで打点を焦らし、被害を最小限に抑えているからに他ならない。それが腹立たしく、女は口腔から唾を吐き散らす。

憤怒に囚われた女の顔は美しさとは程遠い狂乱を湛えており、ともすれば怨念のような表情である。この世の全てを憎み、恨んで死に絶えた靈魂はきつとこのような顔をするのだろうか。

それは、ただただ醜悪であった。

「なんでお前が、なんでお前なんかにあの方がご執心なのよ！お前

なんか、お前なんかに！」

堪えられず着物の懐から銀のきらめきが漏れる。女の掌ほどの大きさを持つ短刀が右手に納められ、何も反さぬ七夜朔へと振り落とされる。

空を裂く刃、あまりに無作法な手並みから女が如何ほどの修練を積んでいないことは明らか。それでも無慈悲に輝く刃の鋭利は、蹲る子供の肉を裂くには充分程で、それは技量さえ必要とされない。

しかし、それでも。

「軋間紅摩さまのお心を奪って　　！！？」

その言葉に、その名前に。

ただ痛めつけられるだけだった朔の顔が、起き上がる。

「　　っひ！？」

女の振り下ろした刃先が空で停止する。いや、止めざるを得なかった。

何故なら今、女は自身が死んだ瞬間を幻視したのである。

咽喉を食い破り、心臓を抉り出し、脳漿を粉微塵に磨り潰され、肉体という肉体が生命を保てずに絶命する。

炯炯と色濃く輝く蒼の瞳。

あまりに人から離れた輝きが眼球の中で放たれる。

暗闇の中にあってもそれは爛々と煌きながら、殺意を混ぜる。

「ぎ、あ
」

突如として呼吸が出来ない。

室内を満たした七夜朔の殺意が、女を包み込みその生命を捉えた。その瞬間に女の体は頑なに怯え、肺は活動を止めた。

このままでは死ぬ。ただ一人の少年に女は恐怖し、殺意に死に絶えようとしている。

力が入らず女の脚が崩れる。だけど女は呼吸をすることが出来ない。部屋の闇が一気に増し、酸素を奪っていく。床に伏し、咽喉元を押さえても肺が機能を果たさない。女の肺が酸素を求めて暴れ、心臓が恐怖に破裂しそうになる。口元から涎さえ垂らし、女は空気を求めて口をぱくぱくとさせた。

修羅場を越えた人間ならば、あるいは鉄火場を歩いた人外ならば、かのように筋肉が収縮を止めることはなかった。

しかし女はそのようなモノを知らずにいた箱入り。殺し合いを知らず、理解もせず、経験もしないただの女が殺意にあてられ、無事にいられる道理はない。

頭が働かない。

意識が絵の具をぶちまけたように朦朧とする。

視界は仄かに色を失い始め、舌が別の生き物のように蠢いて

「ひひ、ひ……何してやがる」

突如として、闇の中に異物が紛れ込んだ。

女の背後、扉の前。いつの間にかそこに妖怪がいた。

二メートルを越す長身瘦躯に、猛禽類の眼球を持つ老人である。血走った眼球、瞳は濁り、まるで飢えに獲物を舌なめずりする獣のよう。その身は擦れた襤褸を纏いながらも筋肉質な肉体は否応の不自然さを見せ、気味の悪さを際立たせる。

まるで怪物のような出で立ちで、刀崎梟はそこにいた。

「っかは！かひゅ　、かひゅ　」

しかし、そのようなものであるうとも、室内の空気が幾分かに和らぐ。霧散はしないが殺意が妖怪の気配に紛れる。無酸素状態に陥り、後わずかばかりで死に絶えようとしていた女は入り込んだ妖怪によって死を逃れた。

「嗚呼、相変わらず良い殺気だ。血が滾るなア、ひひ」

金属が裂かれた様な軋み音。女が瀕死の状態にまで追い込まれた殺意の中に佇みながらも、人が聞けば溜まらず耳を塞ぎたくなるような声音が妖怪の口元から溢れる。心地よさげに顔を歪ませるその口元から零れたのが、この世を全て嘲るような人外の声だった。

「そろそろ時だ。今日は人間と獣も混じっているぜ。精々気張れ」

自身を見つめる七夜朔の瞳を柳の如しに流しながら、妖怪は朔の体に巻き付く鎖を更に頑丈に締め上げ、壁に張り付く金属を外す。

最早雁字搦めと化した朔は関節ひとつ動かせず、妖怪の意のままだった。力点を完全に押さえられた朔は糞虫のような姿と化しながら、妖怪の腕の中に収まる。それでも暴れようと全身を力ませて暴れる朔を妖怪は「ひひ、元気元気」と自身を滅ぼさんとする朔へと寧ろ嬉しそう笑った。

その様を女はただ呆然と見つめていた。未だ荒い呼吸を繰り返しながらも、肌の白さを幾分も回復させず、噛みあわぬ歯をがちがちと振るわせた。

妖怪は一族の棟梁だった。この化石のような老人は、長の時を生きる人外共を力と技術によって纏める傑物である。そして七夜朔は妖怪が最近まで遠野に預けていたお気に入りだった。女は実情を知らぬ身であるが、遠野家の現当主が何者かによって意識不明の重体へと追い込まれた際のごたごたに乗じて妖怪が招き入れたのである。

それに手を出せば、女の命など枯葉の一枚に過ぎなかった。

「と、棟梁様つ、ももも申し訳ありません!!」

思考するまでもなく、女は土下座をした。口元の涎を拭う事もなく、自身の着物を汚す埃を払う事さえない。そのような事、気にする事さえ今は出来なかった。

あまりの恐怖と緊張に頭部が爆発してしまいそうだった。何故なら相手は一族の棟梁。その一声で、彼女は消されてしまうのだ。だ

から今彼女は思わず命を乞うた。ただ一身に頭を垂れ、許しを請うその姿は哀れみさえ誘う。

しかし、妖怪は朔の身を抱え女の横を素通りする。大柄な体格にこの牢獄は狭いと身を縮ませながら。

「あの、棟梁様……っ」

「ああ、手前」

そして、扉に差し掛かり、妖怪刀崎梟は後ろ土下座姿の女へと振り返る。

「いたのか」

思わず、女は頭を上げる。

猛禽類のように巨大な眼球が、路傍の石を眺めるように女を眺めている。

風景の一場面と遭遇したような瞳が、まるで女を見ていない。

「あ」

そして、女は気づく。

梟にとって、女のことなどまるでどうでもいい存在でしかないのだと。

今現在、刀崎梟は肩に担ぐ七夜朔にしか興味を覚えるものはないのだと。

「さあ、行くでしょうか。手前との約束さ。ひひ、ひ……、殺し合
いの始まりだ」

鼻を鳴らしながら、鼻は遠ざかる。重々しい扉が鈍い音を経て
閉まっていった。

そして暗闇の中に残されたのは、女ただひとり。

「う、う、う……っ」

呻き声にも似た嗚咽が漏れ、狭い牢獄の闇を濡らした。扉の向こ
うに消えた鼻の背に、彼女の涙は届かない。

悔しくてたまらなかった。

叱咤されるならまだしも、まるでいないかのように父から扱われ
る。

元から気かけられる事などありはしなかった。

女は刀工としての才能がこっそり欠けていた。

刀崎に生まれながら才気のない娘。

そのようなモノに、価値などありはしない。

それでも出会った想い人がいた。

その人の雄々しい姿に心奪われた。今まで刀崎としての価値を見
出されず、軋間の血を絶やさないたための苗床としての役割であつた
が、それでも構わないほどに心を奪われ、恋い慕った。

「……や」

けれど、彼女の望みは決して叶わない。

車間紅摩は彼女なぞに目もくれず、ひたすらに七夜朔を心に占めていた。

全ては彼女が想う前に、果たされていたのだ。

「　　ななやっ！！！！」

ぎしり、と齒軋りの音がして、思わず噛み締められた唇の端から血が垂れた。それは口紅と相まっていよいよ毒々しく女の白い肌を彩る。

誰も自分を認めてくれない。

誰も私を欲してくれない。

想い人の心さえ手に入れられない。

惨めだった。

「う、う、う、う、う、う、う、う、う……」

女、刀崎白鷺は怨嗟に声を押し殺して泣いた。

血飛沫が舞う。

首から鮮血を撒き散らす牛の巨体が崩れる。肉を抉り、骨をも掴む所業に猛る牛はたまらず野太い悲鳴をあげた。その首元、分厚い筋肉と脂肪がつまった皮膚の中に右腕を潜り込ませていた七夜朔が腕を引き抜く。

その指先を濡らす紅色のねばっこい血が糸を引き、地に垂れた。

それを見越したように、巨体を揺すりながら猛追する男が巨大な棍棒を振り上げ、骨格もろとも朔を圧死せんと叩き伏せた。子供の朔の体ほどある棍棒である。その破壊力は朔の頭蓋をひき潰し、新鮮なトマトスープと化すほどのものはある。

「ああああああああああっ！！！」

棍棒が打ち下ろされ、声にもならぬ衝動が男の咽喉から劈いた。

よく見ればその瞳に生氣はなく、また理性の色は見えない。丸太のように筋張った首筋を蹂躪するように青い血管が走り、それに相応しい肉体が異様な程に膨れ上がっている。荒れ狂うような動きでもって、操られているように男は全力の一撃を七夜朔に揮った。

しかし鉄製の塊が七夜朔を押し潰そうと加速した瞬間、男の腹に異様な異物感が生まれた。思考の間に、呻き声が零れれば思わず男の視線が腹部を見やった。

それは皮膚を突き破り、腹筋の隙間へと捻りこむ七夜朔の右腕だった。

のた打ち回るような痛みが男の脳を焼き尽くす。

例えば薬と催眠によって二度とはまともな機能を果たす事のない脳

だとして、脳は脳としての役目を果たし、肉体への危険信号を激的な痛みとして搔き鳴らす。

だが、それは虚しく終わる。

「
」

僅かに力んだ朔の右手が瞬きの内に閃く。

鮮血が吹き零れる。傷口から勢いのまま、内臓が引き釣り出された。

人体の内臓、消化器官は食道から繋がる一本の縄であり、大よそ繋がっている。そしてその長さは成人男性にして全長は約九メートル。

それが、一気に引き釣り出された。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！？？」

血を吐き出しながら男は絶叫した。悪鬼さえ震え上がるような悲鳴だった。

始めに見えたのは固い大腸であった。それにつられる様に細く弾力のある小腸が紐解きながら引き釣り出され、大腸の端から大きな胃が赤々と血管を輝かせながら姿を見せた。

連続するそれにより、腹からは異様な音が聞こえ、最後には食道が引き千切られ男の大絶叫は止まった。

その様は奇怪のように見えた。棍棒を振り上げる男の腹から艶やかな色を放つぶよぶよとした内臓が、産まれた芋虫のように生命を宿したままに軒並み引っ張り出されていく。男からはどう見えたのだろう。自身の腹部に詰まっていた内臓を生きたままに目視した男には。

ただ、死に逝く男の思考を知る術はない。元より意思を奪われた人形である。前のめりに倒れ伏し、自身の内臓に埋もれる男の考えなど誰も興味を覚えないだろう。

返り血を浴びながら内臓をその手に握り潰す朔はそれに目をかける事無く、次の標的に向かう。

踏み込もうとした膝に、激烈な痛みが穿った。

灼熱のような痛み。筋肉を千切るように、朔の左膝、そこに弾丸が撃たれていた。

「
」

血肉が爛れる。脳を焼き尽くさんばかりの痛み。思わず力が籠らず立ち止まる。朔の背後に硝煙を昇る銃口を抱える兵士がいた。

だけど、子供の目は決して痛みを恐怖を抱いていなかった。増して痛みさえ感じているようには見えなかった。まるで自分の体と精神が分離してしまったかのように、子供は自らの傷や痛みに関心であった。

そして、朔の眼が変質する。

黒から蒼へと。空虚から、清澄へと。

朔の肉体が翻った。足元に赤い血痕を残して消える。

瞬間、朔がいた地面に砂塵が昇る。乾いた破裂音が幾度も響いた。銃弾が朔を射殺せんと打ち込められる。

その兵士の足元に、いつの間にか朔の姿が出現した。

まるでそこは悪夢のようだった。ただ一人の少年を殺害しようとする様々な生命が息巻いて走り、それら全てが少年によって丹念に殺されていく。

土壁によって囲われた広い広い空間であった。周囲を木格子によって補強し、天井は完全にふさがれているため、空さえ見えない。元はコンクリートによって作られた居住マンションであったが、幾度とない破壊と損傷に補強が重ねられ、今となっては異様な異空間を生み出していた。

建築物は人里から遠く離れ、逃亡する手段はない。人工的に作り上げられた孤島。

その正体はマンション一棟を使用した屠殺場であった。

「ひひ、ひ……。まるで、地獄の羅刹のようじゃねえか」

その様を硝子越しに見る男がいた。

刀崎梟は厭らしく口元を歪めながら、壁の向こうで巻き起こる殺戮を眺めていた。

年若い子供によって有象無象の命が散らされる。見ようによっては腹を抱えて笑える光景であった。だが屠殺は現実として起こっている。

そして今刀崎梟が見つめる前で、武装化した兵士が首を錐揉みさせながら斬り飛ばされた。

「やっぱ、朔はいいなあ。こんなにも地獄が相応しい奴、今まで見た事がねえ」

瞬き一つさえ惜しいと言わんばかりに眼球を見開きながら、梟は笑う。嘲う。

何より梟が気に入っているのは、七夜朔が生身の肉体のみで殺害を果たしているという事に他ならない。

今しがた牛の分厚い筋肉へと潜り込んだのも、男の内臓を引き釣り出したのも、あるいは首をもがれた兵士が、刹那の前に伝達された意思に従い体のみとなっても襲ってくる際にその半身をぶちめけたのも、全ては武装によるものではなく、朔の手足によるものであった。

武人は鍛錬によって自らの五体を鈍器へと変え、やがては切れ味さえ帯びる。

しかし七夜朔はどうだろう。

彼は暗殺者の一族に生まれ、彼らが戦線を離れた後も暗殺者として鍛えられ続けた鬼子。七夜黄理の秘蔵っ子である。それが普通な

訳ではない。

そして七夜朔は未だ子供の身。成長段階の途中にある。

魔眼は未だ安定をしていないが、それも時間の問題。

「こいつあ、ひひ……。鍛えれば七夜黄理なんて目じゃねえなあ
っ!？」

どくん、と梟の胸が高鳴る。

それは熱を放ち、血を滾らせて梟の脳髓を侵し、痛みさえ伴うほどの衝動を体に宿す。思わず屈めた身から熱波が生まれ、蒸気のように梟の身を囲うとする。荒ぶる呼吸と、見開かれた瞳がちかちかと色を豹変させようとさえした。

だが、それを梟はふざけた事に気合でもって押さえ込んだ。苦痛に呻き声を溢しながらも、彼の咽喉から迸ったのは金属の悲鳴にも似た嘲笑だった。

「ひ、ひひ。……俺にも時間が迫ってんな。はっ、はは。これはいよいよ作刀を開始しなきゃなんねえなあ。ひひ、ひひひひひひひひ!」
発作のように筋肉を痙攣させながら、梟は笑った。

瞳の血走りは更に亀裂を深め、毛細血管の何処かが切れたのか、次第に白目が赤色に塗りたくられる。歯肉を剥きだし哄笑を張り上げながら、体を震わせるその様はまるで魔物のようであった。

思い描く刀はすでに決まっている。

朔と出会った瞬間から、経典のようにその姿は梟の脳裏に浮かんでいる。己の業と、朔の業。それらが合わさり、一つの形を生み出す。ならば、己はそれに向かって自らを捧げるのみ。

刀崎の秘奥。刀崎一族は自らの腕を代償に捧げ、最後の刀を生み出す骨師。それによって生み出された骨刀は生涯最後の一品にして、生涯最高の一刀となる。

しかし刀崎梟が、刀崎一族の棟梁たる妖怪が通常のもので満足できるはずがない。何故なら彼は刀崎でなお異端とされた刀崎。

そのような存在が生み出す刀が、まともなはずがない。

そうして、ひとしきり笑った後。

刀崎梟は何とはなしに言葉を紡ぎ、背後へと振り返る。

歯軋りのように奥歯を噛み締めながら。

「よう、手前はどう思う。ひひ、感想が聞きてえもんだなあ、

荒耶宗蓮」

刀崎梟の背後。

滑るような狂気、悪鬼の屠殺が広がる最中。

地獄のような男が、そこにいた。

プロローグ 闇（後書き）

これじゃ七夜朔のプロローグ、というよりも七夜朔を取り巻いた環境のプロローグみたいなものですね。

時間はかかるかもしれませんが次回から本編に入ります。

……前回久しぶりに更新した際、待っていたというコメントを多数いただきました。この場をお借りしますが皆様の寛大なお気持ち、真に感謝いたします。正直時間を空けての更新でめっちゃめっちゃ緊張してました。それゆえすぐさま読者様方々からの反応がすぐさまあり、すげえほつとしています。

至らぬ点多々とありますが、皆様の温かな感想や容赦ない批判を楽しみに、これからも励んで執筆に勤しんでいきます。

では、六でした。

第零話 What are you fighting for? (前書き)

私は愛する人のために。

自分自身だって破壊できる。

第零話 What are you fighting for?

「それで、兄さんは？」

報告に訪れた翡翠の姿に、遠野秋葉は書類を纏める腕を止めた。その口調の端に見えない苛立ちが燻っているのは明確であったため、翡翠は努めて冷静に報告を述べた。

「志貴さまからご連絡はありません。また志貴さまの学校に連絡をしたところ、昨日の段階では帰宅の途にいたそうです。ですから……」

彼女の視線の先、給仕服を身につける翡翠はどこか所在無さげにしていたが、しかし己の主に伝えるべき事のため、彼女の口調は自然と固くなる。

「今のところ、志貴さまの行方は依然として知れません」

感情を宿さぬ物言いは一種相手を不快にさせるものであったかもしれない。だけど、翡翠は給仕であり、秋葉は主だった。これ以外の言など、どこにあるのだろうか。

執務室は無意味に広々としていた。室内に人間が三人いても全く問題のない広さを誇り、寧ろどこか寒々としている様にも思える。そしてそれに反するように圧迫感を放つ本棚と重厚な高級机が置かれ、現在秋葉は室内に一つだけ設置された机を使用し書類に目を通していた。これらは秋葉の父が生前から取り寄せたものであり、機能美と見た目のバランスが部屋に置かれ、他の調度品とそぐう様にしてある。ここら辺は生前の父、先代当主遠野楨久の凝り性が発揮

されていると言えるだろう。オーダーメイドで取り寄せたそれら一級品は品格すら醸し出し、この部屋、あるいはこの屋敷の主たる人物の才気を遺憾なく発揮させている。

ただ秋葉にとって、この部屋は他人を寄せ付けぬ雰囲気を匂わせていると思われる。余計な飾りなど皆無と言っても良いこの部屋に視覚を楽しませるものは何もない。仕事を行う部屋なのだから、人を寄せ付ける魅了が存在する理由がある必要もないのだろうけれど。

「そう、ご友人方からのご連絡は？」

「ありません」

簡潔な翡翠の言に、秋葉は溜め息をついた。肺の奥底にたまった鬱憤を吐息にして露出させたような溜め息だった。

昨日から秋葉の兄、遠野志貴の行方が知れない。

前日の朝、遠野邸を出てから一度も志貴の姿が確認できない。

やはり健康的な問題から学校を休めさせればよかったのか、と秋葉は胸中で呟く。自ら望んで学校に行きたいと言っていた、とは言え病み上がりの身である兄を想えば無理矢理にでも家に閉じ込めておけばよかった。兄は嫌がるだろうが、それでも秋葉にとっては譲れぬ事だった。不安なのだ。ただでさえ体の弱い兄が自分の知れぬ場所で倒れているのではないのかと。

その不安を助長させるように、昨日の夜、兄の学校から連絡が届いた。

その内容が、秋葉の胸の奥を締め付ける。

「兄さんの学校が休校。……この件に兄さんは関係しているのかしら。翡翠はどう思う？」

「……わかりません。志貴さまの足取りも掴めない今の状況では、私に言えることなど何も……」

「そう。……琥珀は？」

振り返りながら秋葉は自身の後方で書類の選考を行っている琥珀に問うた。

目前で佇む翡翠の双子の姉に当たる彼女は今朝から秋葉の仕事を手伝ってもらっている。秋葉が当主の座に就く以前から遠野の仕事に触れている琥珀の手腕は、秋葉の補助として心強い味方であり、だからこその他の仕事の合間に行われる秋葉の手伝いは琥珀の仕事のうちに組み込まれている。

実に優秀な人間である。

その愉快犯な中身はさて置き。

「そうですねえ。私も志貴さんの行方はわかりません。もしかしたらご友人の家に泊まって連絡を忘れたとか、それとも連絡も取れず家にも帰れない状況に巻き込まれたとか。思い浮かぶ事はいろいろあります。……ただ」

「ただ？」

「もしかしたら、志貴さんが望んで連絡を取っていないという可能性もありますよ?」

秋葉の問い掛けに琥珀は真摯に答えた。

しかし、その内容は秋葉の中に巣くう不安の魔物を押し込める効能を期待できるものではなかった。故に秋葉は眉間に皺を寄せながら琥珀を見つめる。

「それは、何故?」

「さあ、私にはわかりません。もしかしたらお付き合いしているお方との逢瀬を楽しんでいるのかもしれないですね」

不安を拭わせるように、琥珀はどこかおどけて言った。

だけどそれは秋葉からすれば柳眉を吊り上げるには充分すぎるものなのは明確だった。

「……それに関しては兄さんから直接聞くわ。ええ、もしそれが本当にそうなら良い度胸をしているとしか思えないけれど。詰問といわず、拷問の手段まで問わないわ」

引き付く頬を抑えられず、秋葉の苛立ちに手元の書類に皺が寄った。

もしそれが正解ならばただではおかない。遠野の人間としての自覚が足りないばかりか、妹を心配させといて結果がそれとは笑えない。

「全く、私の気も知らないで」

「……秋葉さま？」

よく聞き取れず、翡翠が問いかけるが「なんでもないわ」と秋葉は切って捨てた。

小さな呟きが思わず吐露されたのは致し方のないことなのかもしれない。ただ家族の心配をすることは、妹の身としては当然の事であり、正当な義務があるのである。

そう。せめて妹としての心配ぐらい、させて欲しい。

それが小さな秋葉の……。

「もういいわ、翡翠。兄さんから連絡があれば取り次いで頂戴」

かぶり
頭を振る。

へたな感傷ほど思考能力を蝕むものはない。それが不安の苛立ちと混ざれば厄介この上ない障害と成り果てるだろう。だからこそ、もうこれ以上過去と現在を繋げる今を慮る事は止める。

掘り進めれば潜り込んだ証に、きっと秋葉を傷つけるアレが浮上するに違いないのだ。自ら望んでその姿を望む必要はない。

望む資格さえ、秋葉にないのだから。

「はい、かしこまりました。秋葉さま」

翡翠は静々と頭を下げ、「失礼しました」と部屋を出て行く。

その姿を見送った後、秋葉は何となく執務室の窓から外を見やっ
た。

早朝を少し過ぎて、遠野の庭は緩やかな光が差し込まれている。
日差しに照らされた緑と空は清澄な雰囲気を湛え、仕事さえなければそれを味わうのも良いかも知れない。ここのところ天気が良いのも関係しているだろう。湿り気さえ何処かへと消え去った空気は程よく乾燥していて、居心地が良い。

ただ、それに反して秋葉の胸中は厚い靄に覆われている。

兄が帰ってこず、一夜明けた。連絡もつかず、行方も定かではない。しかも昨日、兄の通う学校が休校届けが遠野の家にも届いた。その原因は学校の生徒が昨今三咲町を騒がす連続殺人事件、俗称吸血鬼事件の犠牲者になったからだと言う。

そういえば、と秋葉は琥珀に聞いた。

「琥珀」

「はい、なんでしょうか秋葉さま？」

「今回行方不明になった人の名前って確か……」

「はい。一昨日志貴さんに電話をして下さったお方です。名前は、
弓塚さつきさんでした」

「……………っ」

頭が痛んだ。脳の中に錆びた針が刺さったような鋭い痛みだった。

「そう……………そうだったわね」

手元に握られた書類の一枚を机に置く。意識しなければ書類の案件を読み込む暇すらなく、それをぐしゃぐしゃにしてしまっただった。

そして、肉体の底から生まれる不安の揺らぎが的中した事を、秋葉は確信した。

「……………兄さんは、無関係ではなさそうね」

「はい。……………たぶんですけど」

弓塚さつきは兄の友人だと聞いている。体調不良で学校を休んだ兄に一報をくれた人物で、遠野志貴とは遠からずな関係を持つクラスメイトらしい。直接会ったことも、また声を聞いた事もない秋葉だったが、それでも友人を失った兄の心持を想えば、かける言葉さえ見つからなかった。

友人知人が何かしらの事件に巻き込まれる。これほど不安を駆り立てることはないかもしれない。その恐怖ともつかない感情は正体のない化物で、心を落ち着かせる手段は自分自身にないのである。ならば、それを知った兄の胸中は酷いものだろう。

秋葉も、そうだった。

「琥珀」

「はい」

秋葉は静かに言った。その瞳に決意を宿して。

「今夜、出るわ。だから……」

「……はい」

秋葉の意志に、琥珀はどこか味気なく応えた。

「ごめんなさい、琥珀」

「いえ、仕方の無いことですよ」

苦笑するように秋葉の側に置いてある椅子へと琥珀は腰掛け、着物を崩して自らの首筋を晒した。

琥珀の肌はきめ細やかな白い色を湛えていた。

首にかかる赤毛を上げれば、美しいうなじに少しだけ生える髪の毛が、どこか艶かしささえ醸し出している。細く小さいなで肩からなだらかに続くこのほっそりとした細い首筋にどれほどの魅力があるのか、女性である秋葉には全てを把握しかねたが、それでも可愛らしいと秋葉は思った。そして何となく、その肌に人差し指を這わす。

「……んんう」

滑りの良い、けれど秋葉の指に吸い付くような肌だった。柔らかな皮膚の奥にある確かな筋肉と、そしてうなじを隆起させる頸椎の硬い感触へと指が触れる。指先から伝わる肌の温もりが妙な現実感を秋葉に与え、その奥底にある血潮の熱いせせらぎさえ掴めそうであった。崩された着物の首筋は秋葉を異様な心地にさせた。内側が滾り、そしてそれが滾れば滾るほどに秋葉の心が凍えて仕方がない。それでもやめられず、這わす指に中指が増えた。

髪の毛の生え際に指を届かせれば、か弱げな産毛が秋葉の指先に触れた。それらは柔らかながらに彩りのない白い毛で、琥珀の紅を垂らしたような毛髪には不相応に思えた。けれど、その食い違いが幼子の肌を思わせる。

自然と近くなつた琥珀の体から仄かに体臭が香った。微かに匂う女の匂い。鼻腔の奥へと燻るような匂いに石鹸の香りが混じり、それが琥珀の体から香っている。どこか子供のようなものでありながら、確かに大人の女性が持つ成熟さへと変わりつつあるその香りを秋葉は胸の奥に仕舞いこむ。そしてゆっくりと這う指が、崩された着物の奥に隠された鎖骨の辺りを見出し。

「や、秋葉さま、くすぐりたいですよ」

楽しみに琥珀は紡ぐ。

くすぐす、と我慢しなければ笑ってしまいそうな吐息が零れた。その響きの味気なさは、人間味ではなく、ただ物質が外部からの接触に反応したような無味があった。

そこで秋葉は、はっと夢から覚めたような感覚に晒された。

「あ、琥珀……。ごめんなさい」

「いえ、大丈夫ですよ。……さあ、秋葉さま、お時間も余りありません。早くすましちやいましょう」

寒気すら秋葉は感じながら謝ったが、琥珀はどこまでも気にしていないような仕草をしていた。

しかし、確かに琥珀の言うとおり、秋葉に時間は無い。これから秋葉は県を越えて学校に向かわなければならぬのだ。食事はすでに済ましているとは言え、あまり時間をかけてはられない。仕事はあまり進んでいないが、帰宅後に済ましてしまえばいいだろう。

だから一思いに終わらせよう。あまり気持ちの良いものではない。

「あ」

細い首筋に秋葉の唇が触れる。接吻のような異物感に琥珀から息が漏れる。意図したものではないだろう。現に琥珀の肌は固くならず、紅潮もしていない。そうしていつも通りに舌で肌を湿らす。唾液の艶やかな滑り（ぬめり）に秋葉の髓がぶるりと震えた。湿りによって琥珀の筋肉の筋が緩やかな弛緩を行う。その極僅かな時間、秋葉の歯が琥珀の肌を擦り。

「んっ」

そして、秋葉の犬歯が琥珀の肌を食い破った。

目蓋の裏に影が染み付いている。ありもしない残像。あるいは名残が形を整え、無理矢理に現実を押し付けてくる。

憎らしいほど紅い夕焼けの中で、彼女はおれの前で儂く笑っている。紡ぐ口調、何気ない仕草が最早懐古さえいだかせるのは、きつと眩しい夕陽のせいではない。

柔らかかそうな頬を緩ませながら、彼女はおれを見つめている。

その視線の優しさに、その瞳の愛おしさにおれは魅入られたままだった。胸の奥が温かい。人肌の温もりのような、熱くはないけれど確かにある温度が体一杯に注がれていくような気がした。

それこそ、胸の奥で漂う空洞を忘れそうになるほど。

しかし、否応がなく場面は変動する。望もつが望むまいが。

突如として彼女の胸を食い破る、誰かの腕。

鮮血を散らす彼女。

胸元から噴き出る赤色が彼岸花のように散っていく。

未だ脈動する生々しい心臓。

ゴムのような弾力ある生命が掌の中で圧せられた。

寧猛に引き抜かれる腕。

乱暴な所業にどす黒い血が混じる。

力なく倒れ伏す彼女。

根幹を失った肉体を支えるものは何もない。

世を蔑むなにかの哄笑。

それは空さえ罅割れるような声音だった。

血だらけな彼女。

制服まで血で染まった彼女は地面に溜まった自らの血に沈む。

血溜まりを生み出す彼女の胸元。

意志とは関係ない流血は留まらない。

口元から血を吐き出す彼女。

何か言葉紡ごうとして、舌が血に絡む。

微笑む彼女。

その場違いな笑みに、おれは何も言えなくなる。

そして、冷たくなる彼女。

全てがリフレイン。すでに起こった事実の繰り返し。それを上からなぞる様な作業行為。あの夕陽も、あの惨劇も、彼女の苦しみも。全ては終わった事。

「誰のせい？」

彼女はおれに言う。血だらけの姿のままと言う。唇の内側から血を垂らしながら、おれの腕の中で、おれを見つめている。赤色に塗れた制服が重く、それが彼女の命の重さだと思いきらされた。

嗚呼。

こんなにも、彼女は軽い。

まるでそこにいないような重みが命の重みだった。

おれはそれを知っていた。知っていた、はずなのに。

「私、どうしてこんな目に合わなくちゃいけなかったの？」

わからない。

「私、凄く苦しくて、痛くて、怖かった」

地面に鮮血が広がっていく。それは彼女の命の血潮。血は流れて、止め処なく溢れる。次第に流れる赤はおれの体を伝い、おれを染め上げていく。蝕むように、飲みこむように。

「ねえ、なんで私だったんだろう」

必然性。偶然性。宿命。

そして、運命。

何か強力な存在に導かれるように、彼女のそれはすでに決まっていた。本当にそうだろうか。本当に、そうだろうか。

わからない。

そこには二人しかいなかった。しかし、もう一人になろうとしている。

二人いるのに、それからさよなら。

それは、なんて寂しい。

「なんで、遠野くんじゃなかったの」

……わからない。

何も宿さない瞳がおれを映している。空洞を成した眼が硝子のように不自然な清澄を見せている。生命の消える瞳だった。それは酷く懐かしい色合いで、頭が痛くなる。

ずくん、ずくん。

突き刺さるような刺激が脳を抉る。いつそ頭部が破壊してしまえばよかったのに。脳髓を撒き散らして意識さえも消失させてしまえば、どれほど楽だったろう。

でも、目は閉ざせない。

彼女の瞳、そこには何もなかったおれがいた。傷一つ負っていないおれがいる。

「わたしがこうなったのは誰のせい？」

それは。

思わず呆然として、口元が動かなくなる。心臓が高鳴る。全身の毛穴が開き、鳥肌が立つ。体が底の底から震えて、気を抜けば体が瓦解してしまいそうだった。

でも、心はこんなにも虚しい。

気づいている。気づいているのだ。

責任なんて、そんなの分かっている事じゃないか。全てが原因だ。全てが結果だ。何もかもが集約されて、辻褄を合わせる。幾重の軌道を重ね、意味の無い未来への思いを馳せようとも。

それは。

「おれの、せい？」

腕の中で弓塚さつきが、禍く（まがく）笑う。

視界に映る彼女の姿は、落書きだらけ。

夢の残骸だった。いや、あるいは意識の逃避なのかもしれない。

目蓋の裏に感じる朝日。気づけば志貴は倒れ伏していた。人工物で作られた天井が遠く見える。ならば、背中に感じる柔らかさは布団のものだろうか。いつもとは異なる感触。自己主張するような反発の力は、どこか冷たい。

忘^{ぼつ}、と視界が淡い。曖昧な色合いをしている物質は輪郭が失われている。眼鏡をつけたまま寝ていたようだが、まるで物そのものが意識から逃れようとしているかのようだった。時計は見えない。しかし、それでも暫しの時を費やせば、今己が時南医院の診察室にいることを志貴は把握した。そうすると今自分が眠っているのはそこに備え付けられたベッドの上だろう。掛け布団もかけられずにいた体はどこか気だるく、疲労ともつかぬ億劫さがある。

『ひ、ひひ……』

「っあ」

幾分が見慣れた空間の中に響く、金属が悲鳴をあげるような軋んだ声音。嘲笑。それに連鎖するように米神が酷い痛みを発した。まるで鈍い衝撃が貫通し、前頭葉を爆散させたような激痛である。そろそろと緩慢にしか動かない腕を頭部に伸ばせば、そこは熱を持っているだけで、散り散りにならず無くなってはいない。

「おれは……」

『よう、お目覚めはいかがなア』

室内を切り裂く声音が目覚めを最悪にさせる。

そうして、寝起きの苛立ちのままに体を起こそうとすれば。

「。」「

その眼前に、札の貼られた鞘が現われた。

「……っ」

『ひひ。死んだ、死んだ。これで手前は何回死んだア？』

鼓膜を介さず、直接頭に響くような金属が裂けたような声音が脳髓を揺さぶる。

志貴の頭蓋、両目と鼻筋をなぞる様に視界を遮る鞘。

顔面に押し付けられる鞘の気配は異様なまでに意識をそれに持っていかれ、目を反らそうとしても動かない。眼前で不遜に存在する刀は鞘に張られた札と、柄に巻かれた数珠によって封じられた邪悪の輩だった。五感に訴えてくる生理的嫌悪感に吐き気すら覚える。

いや、それは目前にいる刀剣、骨喰ほねばみだけのせいではない。

「、」「

どこか虚ろを吐き出すような呼吸音が聞こえた。

固定される視界を剥がすように、自身の隣で壁に寄りかかり座る

存在を見やった。

診察室の壁際。

男は足を崩し、言葉を失ったように沈黙を貫いていた。

「
」

思わず、志貴は息を呑む。

それは藍色の着流しに身を包んだ亡霊のような男であった。身に纏う藍色の左袖は柳のように中身を消失させ、右腕が志貴を断ち切るように骨喰を構え、横たわる志貴の顔面に触れる寸前で固定している。

しかし、志貴が息を呑んだのはそこにいる男の出で立ちではなく、その瞳にあった。

ざんばらに伸ばされた黒髪の奥。

人ならざる輝きを宿す瞳は空を思わす蒼の色。

それが睥睨するように、あるいは路傍の石を眺めるような無感情で室内を見ている。鬱蒼とした森の奥で誰にも知られず深々と広がっている湖面のような瞳は、あるいは西洋人形の眼に押し込まれた硝子細工の眼球のようだった。

『そんな糞弱くてよオ、本当に仇が討れるとでも思ってたんじゃないだろウな』

藍色の男、七夜朔は嚙んだ口を開かず、その代わりのように嘲るような金属の声音、眼前の骨喰が言葉を降らす。脳髄を冒すような音が頭蓋を震わせ、虚ろだった意識を無理矢理浮上させてしまう。

「……………なにがだよ」

『はっ、覚えちゃいねえかい。そいつは随分と救いようがねエ。いや、どっちかツつと救われてんのか。ひひ、ひ……………朔はどう思う』

「」

嘲弄を響かせながら骨喰は自身の持ち主である朔に問いかけたが、朔は無言のままであった。しかし骨喰は気にせず、それどころか愉快な笑い声を発作のように劈かせながら志貴を蔑む。

「あんた、何言ってるんだよ」

胸を掻き毟るような骨喰の言に苛立ち、志貴は問うが骨喰はそれを無視して言う。

『それで、ど頭かち割られる寸前はどんな気分だア？』

その言葉に、志貴の米神が骨が脳髄が激烈に疼く。己の意思から離れて肉体が自らが受けた傷の過去をほじくり、爆発的に志貴は思い出した。

「……………最悪だ」

『ひひ、ひ……………』

咽喉から昇る怨嗟にも似た志貴の声を、骨喰は喜ばしそうに笑った。それはどこか屍骸をにたつき眺めるハイエナの鳴き声にも似ていた。

深夜の事だった。弓塚さつきの仇を討つため志貴は七夜朔の居場所を突き止め、協力を要請した。それを七夜朔は不明だが、骨喰は了承した。そこまではよかった。

しかし、突如としてそれまで無反応だった朔が動きを見せた。

今の姿と同じように壁に背を預け、足を崩している朔の体が瞬きの内に跳ね上がり、視認も出来ぬ迅さで志貴へと身を躍らせたのである。それに気づいた時は、もう遅かった。朔の振りぬかれた肉体が宙に線を引き、志貴の頭部を殴打した。どの箇所によって成されたのかさえ、志貴は分からず昏倒したのだった。

そも、志貴は知る由もないが七夜朔は肉体鍛錬によって殺戮を果たす宵闇の殺人鬼。肉を繋ぐ腱、そして肉が張り付く骨に至るまで鍛えられた人外の者である。その瞬発力は言うに及ばず。彼は後方からの銃撃を弾丸が射出された後に回避する業を持つ真正の鬼才だった。

その筋肉の反応、あるいは関節の軋みまで最短化された動きは初動を無くし、経過と結果の距離を限りなくゼロに貶める。その魔的な動きが、一般的高校生よりも低い体力の持ち主である遠野志貴如きが初見で読み切る事は、不可能と言って良い。

「意味が分からない。何であんな事

」

『解らない、か？』

凄むような骨喰の声音に息が止まる。

鞘に収められ、刃も露出していない刀身。

それだというのに、眼前を真横に塞ぐおどろおどろしい骨喰の姿が志貴の眼には、真下から見上げる厳格な断頭台の刃のように思えて仕方がなかった。それはきつと、その刀身が今まで滅ぼし尽くした生命の怨念によるものに違いなく、切り取った肉と血の臭いが眩暈のように志貴の鼻腔の中で香った気がする。

そしてそれを揮う七夜朔も、また志貴にとって化物だった。

「
、
」

あるいは一言も喋らない沈黙の住人である朔の方が不明さで言えば骨喰よりも際立っている。口うるさく声を吐き捨てる骨喰がどのようなからくりを持つのかも気になりはするが、それよりもその担い手である朔が問題だった。

骨喰は物だ。どれだけ壮大な理由があり、多大な意味があろうが骨喰は剣。誰かに握ってもらえなければ肉を裂くことも出来ぬ物体だ。武装としては脅威に違いないが、それは結局のところ誰かによって行われる所業である。

だからこそ、怖いのは朔だった。

物言わぬ佇まい。何をしてくるかわからない。まるで予測がつかない。

亡霊。殺人鬼。

『ひひ、ひ……手前が遠野じゃなけりや、こんな事する必要もねエ……が。契約は契約だ。殺されなかつただけでもありがたく思え』

「……どういう事だ」

『仇、取りてエんだろ？』

骨喰が何を意図しているのかわからず、志貴は口を結んだ。

『ひつ、だったらよオ。ある程度対応は必要だろ。手前が一体何を相手にぶち殺そうと決めてンのか、おれたちあ興味がねえんだ』

「……」

『そうさなア。時分は夜が良い。夜は警戒心が鋭敏で、その癡理性が磨耗してイる獣の時限だ。昼よりも殺りやすい。相手が化物だろうが、人間だろうがア、な』

冷水の中に落下したような感覚が足元を寒くさせる。

殺す。

その言葉を、志貴は初めて突きつけられた。

『しかし、だ。それをやろうつつウ手前が弱けりや、そんな事夢のまた夢だ。殺すつつうのはよ相手に勝つ事じゃネエ。相手を殺すことだ。ひひ、必要なのは一瞬の判断、決断。肉をぶつ壊し、内蔵器官をぶち壊す間際の手順。ただ、それだけだ。それだけで大抵の奴

は死又』

相手を、殺す。

敵を討ちたい。この激情を焦がす憤怒の一途をぶつけてやりたい。

それは、つまり。

『それなのに手前はなんだア？ 遠野の人間が全く反応もできネエでくたばりやがる』

「それは、あんた達がいきなり……」

『ひひっ！ 餓鬼の喧嘩じゃねえンだ。相手の事情なんて一切いらねエ。不意打ち上等。寧ろ殺し合いだったらこれ以上ない最良よナア』

殺すのだから、不意を打つ。

勝負ではなく、殺し合いの場。

正々堂々など噴飯もの。邪道こそ賞賛される手段。

あまりの正論に、何も言えなくなる。

志貴の脳裏にシエルの姿が浮かび上がる。

七夜朔の居場所を伝える際も拒んだシエルの歪んだ表情。

「。。」

ちらり、と横に視線を動かす。

そこに、藍色の殺人鬼が刃を持って佇んでいた。志貴の意志になど興味も無いように。

『それとも何かイ？ 手前は目の前に仇がいて、今からぶち殺してやんぞ、とでも言うつもりかア？ はっ、笑える話だな。まるで憎悪が足りナイ』

どこか侮蔑するように、骨喰は頭上で軋む。

『マジに手前、仇討つつもりあんのか？ あ？』

思考に罅が入ったような気が、する。

骨喰の耳障りな軋み音が志貴の中に亀裂を生み出し、鋭い刃をつきたてる。

そうだ。そうだった。自分は覚悟を決めたつもりだった。覚悟を決めて、悪魔と握手を交わし契約を結んだのだ。その取立ても度外視して、自らを投げ打ったのだ。

それなのに、なんだこの腑抜けは？ 魔物に臓腑を抉られ、文句を立てるこの様は。

遠野志貴にとって、異常とは忌むべき事柄で、あった。

嫌っているのかと聞かれれば素直に首肯はできかねるが、少なくとも遠ざけておきたい事ではあった。当然だ。志貴にとって平穏と

は掛買いのない事で、それはきつと何よりも貴いものであると彼は心の底から信じて、いた。

切っ掛けと呼ぶべき出来事は、やはり遠野の家を追い出された事であろうか。事故に合い、満足に生活する事も難しくなった身である志貴は親戚一同の総意によって有間の家へと追いやられた。それを憎い、と当時の志貴は思わなかった。

志貴の内の虚しい空洞がきゅつきゅつと締め付けられた。そのくらい。

ただ、度し難い侘しさが志貴を包み、その中身にあるばかりとした空洞を穿った。

それはやがて時を経る事に志貴自身を蝕み、いつしか志貴自身も気付かないうちに明確な虚ろを生み出した。長い時をかけて岩へ垂れる水滴は、遂には穴を空ける。志貴がその虚ろを自覚した時は、もう遅かった。

誰かというのに、孤独を感じる。

悲しさを、寂しさを感じているのに涙を流せない。

遠野志貴という存在は、どこか歪なあり方をしていた。

だからだろう。志貴は？異？というものを恐れた。

子供の精神は違いを見出す事に長けている。自分ではない誰か。ここではないどこか。通常ではありえない何か。それらを探し空想する。冒険心は異を求める探究心である。

けれど、その自らこそが他とは？異なったものである？とは思わない。

それは自らに異を感じたものはそれを切り捨てなければならぬからだ。何故なら異となる自らを自覚した時、人は自らに迷い込む。異なる常へと惑い、光さえも見失う。

ならば、どうすればいい。

おれは、どこにいけばいい。

弓塚さん。

「……嗚呼」

なんて、無様。

「何も考えてなかった。本当は駄目なのに。……本当に、こんなじゃ駄目なのになあ」

感慨ではなく、嘆きにも似た呟きが自然と漏れた。

今まで普通の高校生として過ごしてきた志貴には理解できない世界。理由はどうであれ、そこに片足を入れたのは志貴自らの意志によるものだ。今までの志貴のまままで太刀打ちできるような、優しい場所ではないはずと予想していた。けれど、志貴は呆然と理解していなかった。

殺し殺されが当たり前な人外魔境。

そこに優しい世界の摂理を求めても、意味などない。

ただ蟲を踏み潰されるような気軽さで殺される。

まるで、彼女のように。

『ひ、ひひ……』

そして、そんな志貴を骨喰は真底馬鹿にするように嘲るのだ。

『そういうこった。そんなぬりイ体たらくなまんま殺そうとするな
んぞ莫迦がやるこった。だからよウ、鍛えてやるよ。朔も乗り気の
ようだし、な……』

「……なんでだ？ あんたに得がないだろ」

朔を意識して、志貴は問うた。

しかし志貴の言葉にも、朔は反さない。

「、、」

『享樂よ。単なる、な。……だからよ、嫌とは言わせネエぜ。そんな
選択肢が手前にあるはずも無し。増して逃げようものなら、うっ
かりと殺しちまいそうだ』

視界の端で、空間がざわついた。

「っ！」

一呼吸も無い。ただ衝動のままに体が動いた。闇雲な動きで跳ね上がり、息を飲み込むよりも早く、ベッドから転げ落ちるように逃げた。床に落ちた志貴の腰に強かな痛みが走った。それは意識されたものではない、粗雑な行動だった。

しかし、結果それが志貴の命を引き伸ばした。

舞う埃。揺らいだ空気。風は生まれない。鋭さと緩やかさが両立された不可視の軌道。それは人間の動きではない。もっと別の何か。

ベッドから落下する志貴の視線の先。

白い布地を貫くように、骨喰がベッドを貫いていた。

片膝をつき、俯き加減に佇む朔の腕がまるで断罪のように骨喰を突き立てている。その刃先は先ほどまで志貴の心臓があった部分を寸分変わらず穿ち、ベッドの骨組みが悲鳴をあげている。

もし志貴が動いていなければ、朔の襲撃によって揮われた骨喰は胸骨を粉碎し、心臓を破裂させていただろう。朔の狙いが外れているとは到底思えない。それは今まで志貴が朔と会合した後に遭遇した所業による、ある意味恐れにも似た確信だった。

しかし、事実志貴は動き、未だ死んでいない。

『こんな風に、なア』

「……おまえ」

不快な嘔れ声が診察所の固いベッドに腰をついた志貴の耳に届く。けれど、志貴の意識はこの理不尽な行いを果たした朔に注がれた。

「 、 「

朔はベッドの上で、まるで許しを請う罪人のような姿で跪いている。

だが志貴にはその姿が罰を座して待ち受ける静粛な人間ではなく、瀕死の生者が息絶えるその時を待ち続ける禿鷲の偉容に見えて仕方がなかった。

第零話 What are you fighting for? (後書き)

本編が再び始まりました。

厳しい目で皆様見守って下さい。が、前書きのやつ著作権的にどうなんだろう？

あと指摘されて思い出したのですが、月姫って18禁だったんですよ……。

という訳でちょっと琥珀さんのお色気に萌えようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307m/>

七つ夜に朔は来る

2011年10月27日14時49分発行